
魔法少女リリカルなのは 切札の男

カワタロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 切札の男

【Nコード】

N5399T

【作者名】

カワタロス

【あらすじ】

仮面ライダーWの左側、左翔太郎は突如殺された。

しかし荘吉の力が気付いたときには彼はミッドチルダに転生されていた。彼はこの街と人々の笑顔のために仮面ライダージョーカーとして戦うことを誓う。

【第二章】突如ミッドに現れた招かれざる客。そして舞台は4年前へ。

【第三章】強すぎた二つの試作型メモリによりミッドに現れたオーメダル。そして翔太郎に未曾有の危機が迫る。

異世界の黒い切札（改正版2・0）（前書き）

今作の主人公です。

少々原作に改造・追加していますので書きました。

翔太郎ソロでやってみたかったので勢いに任せて始めます。

異世界の黒い切札（改正版2・0）

左 翔太郎

年齢：22

身長・体重はオリジナルの翔太郎と同様

能力：この世界に来た影響がランクBの魔力と状況に応じて変化する「切札」の魔力変換を持つ。魔力光は黒。

仮面ライダーWのボディサイド、または仮面ライダージョーカーに変身する青年。顔は二枚目だが、ハードボイルドになりきれないハーフボイルド。

風都でドーパントを倒した後、襲いかかった犯人からフィリップをかばい、心臓を刺され死亡。

だが天国に行く前に壮吉により、ミッドチルダに転生される。

一人であるためWにはなれないため、ジョーカーや他の仮面ライダーに変身して戦う。

少し大人になったのか軟派な性格は少々改善された。

ちなみに魔力供給により生身での能力が高められ、変身問わずとも戦える。変身後は基本スペックが上がる。

・仮面ライダージョーカー：

身長：195cm

体重：85kg

パンチ力：2.5t

キック力：6t

ジャンプ力：50 m

走力：100 mを6.2秒

左翔太郎がジョーカーメモリとロストドライバーで変身する仮面ライダー。打撃や投げ技、受け流しなどの多彩な技で戦う仮面ライダー。基本は最初この姿に変身して戦う。新能力として腕のアンクレットからフアングジョーカー時のアームセイバーのような武器生成能力が追加された。なおこの能力は「奮戦」から使用可能になる。

ガイアメモリ（原作通り）：

ジョーカーメモリ：

「切札の記憶」を内包したメモリ。人間の身体能力を極限まで高める機能を持つ。

スカルメモリ：

「骸骨の記憶」を内包したメモリ。何故か翔太郎の懐に入っていた。何をしても反応しない。

ツール：

ロストドライバー：

翔太郎が所有する変身ベルト。基本的な機能は原作通りだが翔太郎の魔力とメモリをシンクロさせることでパワーを高める機能が追加された。

ダブルドライバー：

以前の名残か所有していたWの変身ベルト。右側のソウルメモリやパートナーがいないため、Wには変身不可。ロスト同様の機能が追加？

スタックフォン：

翔太郎が所有するガジェット。新たに散策機能・ジャミング・ハックキング機能が追加。

スパイダーシヨック・バットシヨット・フロッグポット・デンデンセンサー：

翔太郎が所有するガジェット。原作と変わりなし。武器に合体させるとスパイダーは拘束機能、バットは高速振動追加・命中精度上昇効果が起動する。

ジョーカーマグナム：

生身・ジョーカーの状態で使用するために翔太郎が新たに手に入れた黒いトリガーマグナム。マグナムモードはマシンガンのような連射式、マキシマムモードはシヨットガンのような高威力の単発式になる。ただしガジェットとの合体によるマキシマムドライブは不可。

マキシマムドライブ（必殺技）：

・ライダーキック/ライダーパンチ（ジョーカー）

：
マキシマムスロットにジョーカーメモリをスロットして発動。足または拳に大量の紫色のエネルギーを纏って放つ蹴りまたは拳撃。

・ライダースラッシュ：

マキシマムスロットにジョーカーメモリをスロットして発動。手のアームセイバーをマキシマム時のエネルギーにより切れ味を高めての斬撃。「奮戦」にて使用可能になる。

・ライダーシユールディング：
ジョーカーマグナムにジョーカーメモリをスロットして発動。巨大な紫色の弾丸で敵を乱れ撃つ。

ビークル：

ハードボイルダー：

翔太郎と一緒にだった本来Wが使用するオンロードバイク。基本機能は原作と同じ。

ブラスターユニット：

翔太郎がジョーカーマグナムと共に新たに手に入れた黒い後部ユニット。翔太郎の判断によりロストドライバーが信号を送り現れる。ガンナーユニットを含めた今までのすべてのユニットの利点を合わせた新型ユニット。ユニット単体でもスタックフォンにより操作かつ戦闘が可能である上、AIにより自立行動も可能。単体でも陸・海・空に対応。

ハードブラスター：

ハードボイルダーとブラスターユニットが合体したビークル。ブラスターユニットの戦闘力・柔軟性をより高めた状態。

転生（前書き）

一話です。

特別回を除いて基本こんな題名でやっていきます。

何かクウガみたいだ（笑）

転生

ここは風都。

風とエコの街であり、街の象徴として街の真ん中には巨大な風車の
ような建物、風都タワーがそびえたつ。

一見平和な街だが、この街には以前ミュージアムという組織により
地球の記憶が内包されたUSB型アイテム、ガイアメモリがばら蒔
かれており、そのガイアメモリにより変貌した怪人・ドーパントに
より街は度々涙を流していた。

しかしその涙を拭う者もいる。

この街の人々が希望を託した存在。

”仮面ライダー”である。

この街に現れた仮面ライダーは5人。

左右非対称の色により多彩な力を発揮するW。

自らがバイクとなり、呪われた運命を振りきったアクセル。

帽子の底に優しさと悲しさを隠して散ったスカル。

街の新たな希望を自称する白き悪魔・エターナル。

そして、Wの空白を埋め、対NEVER戦においては名の通り切札となった漆黒の切札・ジョーカー。

ジョーカーはWの再来により眠りについた。

しかし彼の復活は必然的に決まっていた。

第二の故郷を守るために。

「ダブルエクストリーム！」

「がああああああ！」

仮面ライダーWサイクロンジョーカーエクストリームの必殺キック、ダブルエクストリームがドーパントに放たれ、ドーパントは爆発。

犯人の男が現れ倒れる。

それを確認すると、Wはエクストリームメモリを閉じ変身解除、私立探偵・左翔太郎と彼の相棒・フィリップが現れた。

「これで今回の事件は解決だね、翔太郎。」

「ああ。後は照井達に任せるか。」

二人が背中を向け、歩き始めた時。

「仮面……ライダー……！」

犯人が手にドスを持ってフィリップに襲いかかる。

「うわあああああ！」

しかし。

「フィリップう　　！」

フィリップを突き飛ばす翔太郎。

結果犯人のドスは……。

「！　　がつ！」

翔太郎は倒れる。

「翔太郎お　　！」

フィリップが犯人に蹴りをかまし翔太郎の元に向かう。

犯人は吹き飛ばされ気絶する。

「翔太郎！」

フィリップは翔太郎を抱き抱える。

翔太郎の左の胸からは血が溢れ出ていた。

「フィ……リップ……。すま……。ねえ。俺はもう……。駄目
みたい……。だ。」

「駄目だ！ 翔太郎！ 僕達は二人で一人の仮面ライダーだろ！
君が死んだら僕はどうしたらいいんだ！」

「大丈夫・・・夫だ。お前なら一人でも仮面ライダーになれる。これからは一人で変身する・・・んだ。」

「無理だ。君がいなければ・・・僕は・・・。」

「俺はもうすぐ・・・死ぬ。フィリップ。約束・・・してくれ。例え一人になっても・・・仮面ライダーとしてこの街を守っていつてくれ。・・・頼・・・む。相棒の・・・最後の頼みだ。」

「・・・・・・・・分かった。」

フィリップは泣き出す。

「ありがとな・・・フィリップ。・・・やっぱり風都は・・・いい風が・・・吹くぜえ・・・。」

翔太郎は右手でソフト帽を掴み、自分の顔を隠した後、右手は力なく床に落ちた。

「翔太郎？ 翔太郎！？ 翔太郎！」

フィリップは翔太郎の身体を揺らす。

しかし翔太郎は答えない。

すると空から大粒の雨が降り出した。

今日は降水確率100%であった。

まるでこの街を愛し、この街の為に戦い、この街に散った一人の青年の死を街そのものが悲しんでいるかのように。

「翔太郎お　　！」

フィリップは空に向かって吠えた。

今は亡き自分の相棒の名を。

そんなフィリップを、雨粒は無造作に打ち付け続けていた。

「……………きる。」

響く声も気にせず翔太郎は暗い空間に倒れていた。

「……………起きろ。」

声はさらにはつきりするが、翔太郎はまだ倒れている。

「起きろ……………翔太郎。」

この一言により翔太郎は完全に覚醒、起き上がる。

すると目の前には亡きはずであるはずの男……………。

「おやつさん……。」

彼の師であり鳴海探偵事務所の初代所長、鳴海荘吉が立っていた。

「でも……なんで……そうか。俺……死んだんだな。あゝあ、どうせなら恋愛の二つや二つしとくんだったな。」

「……それ……叶えてやる。」

「は？」

「弟子の最後の頼みなんだ。叶えられないでどうする。」

すると荘吉は後ろを向いて歩きだす。

「おい、待ってくれ。おやつさん！……おやつさん！」

「おやつさん！」

翔太郎は勢いよく目覚める。

部屋の真ん中のベッドに一人。

周りを見回すが無論、荘吉はいない。

「な〜んだ。夢かよ。」

翔太郎は再び横になる。

しかしその刹那。

「って何処だここはあ！」

再び勢いよく起きる。

それは当然の反応である。

なぜなら……。

「……事務所じゃねえ……。」

ここは翔太郎の本来の仕事場である鳴海探偵事務所とはかけ離れた部屋であるからだった。

すると。

コンコン。

ドアがノックされた。

（誰だ？）

「どうぞ。」

翔太郎は考えながらもドアの開けることを了承する。

「失礼します。」

現れたのは、50代ぐらいの男性、短髪と長髪の青髪の女性が二人だった。

その二人はかなりの美人と翔太郎は心の底で思っていた。

「おう。起きたか。」

男性が口を開く。

「何処の誰かは知りませんが、なんかお世話になったみたいで……ありがとうございます。」

翔太郎は男性に礼をする。

すると男性が。

「人様の家の前でバイクと行き倒れてた割には、マナーがあるじゃねえか。」

「行き倒れてた？　ここは一体？　風都じゃないのか……。」

翔太郎の反応を気にしたのか長髪の女性が語りかける。

「風都？　ここはミッドチルダです。」

「ミッドチルダ？　どこの外国だ？　だが日本語は通じる……どういふことだ……。」

すると。

「ギン姐、この人まさか……。」

青い短髪の女性が喋りだす。

「うん。次元漂流者。……えっとお名前は……。私はギンガ・ナカジマといいます。」

「スバル・ナカジマです。」

「ゲンヤ・ナカジマだ。」

「俺は左翔太郎。私立探偵だ。」

「私立探偵！？ 何か映画みたい！」

スバルが目を輝かせて翔太郎を眺める。

さすがの翔太郎もその迫力に若干たじろぐ。

「まあまあ……。」

そんなスバルを二人はなだめる。

するとゲンヤが。

「とりあえず話を聞かせてくれるか？ えっと……翔太郎でいいか？」

「あ、はい。」

翔太郎は語り出す。

私立探偵としての自分のことを、風都のことを。

そして……。

もう一人の自分、仮面ライダーのことを。

「……信じ難いが、嘘じゃなさそうだな。」

「何だか凄い話ですね。地球の記憶って……。」

ゲンヤとギンガが啞然とする中。

「すごい。翔太郎さん！ぜひ変身してみてください！」

「はあ!?!」

「ちょ、ちょっと!」

「スバル……。」

翔太郎、ギンガ、ゲンヤがそれぞれの反応を示す。

(しっかしどうすっかな。ドライバーがあっても一人じゃWには……あっ!)

「ま、まあWにはなれねえが、もう一人にならなれます。論より証
拠。外に案内してくれますか？」

翔太郎はソフト帽を被り直す。

「あ、ああ。」

四人は退室し、庭にでる道を歩き出す。

ナカジマ家の庭。

そのテーブルにはゲンヤ、スバル、ギンガ。

そして新たに赤髪のノーヴェ、眼帯のチンク、温厚なディエチ、イ
ケイケなウエンディが新たに集まる。

「仮面ライダーっだっけ？何か嘘くせえなあ。」

ノーヴェが頭をかく。

「まあまあ。」

ディエチがそんなノーヴェをなだめる。

「そうそう。それになんか面白そうっすよ。」

ウエンディがそんな二人にのしかかる。

「そうだな。異世界の文化に触れておくのも、大事なことだ。」

チンクが年長者らしく彼女らをまとめる。

そんな中。

翔太郎は一緒に行き倒れていた愛車、ハードボイルダーの側で妙な感覚に襲われていた。

(何だ、この身体そこから湧き出る力は……。風都にいたときはこんなことはなかったのに……。)

「じゃあお見せします。」

翔太郎は七人の視線を一気に浴びる。

翔太郎は左手にジョーカーメモリ、右手でロストドライバーを持ち、腰に当てるとベルトが巻かれ装着される

『ジョーカー!』

そしてジョーカーメモリのスタートアップスイッチを押す。

そしてジョーカーメモリをスロットすると紫色の波動が放たれる。

右拳を掲げ、左拳を左腰に当てる。

「変身!」

左手でスロットを展開する。

『ジョーカー!』

翔太郎の顔に回路状の模様が現れ、風が覆い、塵状のエネルギーが翔太郎を纏う。

翔太郎は仮面ライダージョーカーとしてミッドチルダの大地に立った。

その頃。

翔太郎の墓前でフィリップも妙な感覚を覚えていた。

手にしたサイクロンメモリが光を放ち始めたのだ。

放つことがない紫の光を。

「翔……太郎……。どこかで……。生きているのか？」
すると。

フィリップは空にダブルドライバーを掲げる。

腰には自作したロストドライバー。

「翔太郎。約束したよね。例え一人でも仮面ライダーとしてこの街

を守っていくつて。例えばバラバラでも君と僕は同じ空の下にいる。
だから……。」

『サイクロン！』

フィリップはサイクロンメモリをロストドライバーにスロットし展
開する。

『サイクロン！』

フィリップの肉体は緑の風に覆われ全身緑色・赤い複眼の仮面ライ
ダーに変身した。

「守りきるよ。一人でも。君が仮面ライダージョーカーとして戦う
のなら、……僕は仮面ライダーサイクロンとして。」

サイクロンは翔太郎の墓に誓った。

風がサイクロンのウィンディースタビライザーをなびかせる。

それはまるで仮面ライダーサイクロンとして戦うことを心に決めた
フィリップを後押しするようであった。

切札（前書き）

凄いスピード投稿になりました。

実はこの小説、一癖いれたいとおもいながらも、なかなかストーリーが浮かびません。

個人的には昭和やクウガのマイティキック強化エピソードみたいなのを入りたいです。

うまくいくかはわかりませんが（笑）

切札

「すっげえなあ……。」

「黒いつスねえ……。。」

「腕っ節が強そうだなあ……。。」

「ふむ。やはり私の眼帯といい、黒はいい色だな。」

「……はははは。」

ゲンヤ、ウエンディ、ノーヴェ、チンク、ディエチがそれぞれの反応を表す中。

「それが貴方のいった……。。」

「仮面ライダー……。ですか？」

ギンガ、スバルは翔太郎に聞く。

「ああ。これはWじゃねえがな。この姿は俺がWに変身出来なかったときに変身してた仮面ライダージョーカーだ。」

「……………ジョーカー？」「……………」

「切札……。という意味だ。」

「切札か。なかなかいいセンスだな。」

「ど、ども。」

ゲンヤが翔太郎のネーミングを褒め、翔太郎は照れくさそうにしながら変身を解く。

何故かナカジマ家の面々は拍手。

すると。

ドオン！

街から爆音が。

「な、何？」

スバルが驚く。

それもそのはずでかなりの出力の魔力砲でなければ出ない程の爆音であるからだった。

翔太郎はすぐさまハードボイルダーに跨る。

「お、おい！」

ゲンヤの制止を振りきり、翔太郎は現場にハードボイルダーを走らせた。

「スバル！ 私たちも！」

「うん！」

二人はそれぞれ自身のデバイスを掲げた。

「はっはあ〜。いいなあ、この力！ たまらないねえ〜！」

次々に街に発泡するのはアームズドーパント。

瓦礫の固まりを盾に傷ついた局員が集まっていた。

その中に。

「はあ、はあ、はあ・・・何あれ？ でたらめだわ。」

オレンジのロングヘアの執務官、ティアナ・ランスターが息を切らしながらクロスミラージユを構えていた。

隙をついて瓦礫から撃とうとするが完全に狙いを定めたアームズの弾丸が徐々にティアナ達が盾にしている瓦礫を削っていく。

「そろそろあきたな。あばよ！」

アームズが腕からグレネード弾を放とうとする。

その時。

黒と緑の二色のバイクがアームズを突き飛ばす。

吹き飛んだアームズはバイクの男に聞く。

「お前、何者だ！」

バイクの男は降りて、ヘルメットを脱ぐ。

その男とは左翔太郎であった。

「何でドーパントが？ まあいい。倒させてもらっぜー！」

驚くティアナ。

「貴方は？」

「俺は左翔太郎。またの名を……。」

翔太郎はドライバーを腰にセットし左手にジョーカーメモリをもつ。

『ジョーカー！』

ジョーカーメモリをドライバーにスロットする。

「変身！」

左手でドライバーを展開し、構えていた右拳を開く。

『ジョーカー！』

翔太郎の身体は風に覆われ仮面ライダージョーカーへと変身を遂げ

る。

「仮面ライダー・・・ジョーカー。」

「「仮面・・・ライダー？」」

ティアナとアームズはその名を言い返す。

ジョーカーはアームズに左の人差し指を向け、あの言葉を投げかける。

「さあ、・・・お前の罪を数えろ！」

「ふざけるなあ！」

アームズは走り、発泡しながら接近してくる。

当のジョーカーは。

「うおおおおおお！」

弾丸をひたすら回し蹴りで叩き落としていく。

「何！」

「こっちの番だぜ。・・・おらあ！」

ジョーカーはストレート、フック、アッパーでアームズを打ちのめしていく。

そして弱ったアームズに横蹴りを放ち、吹き飛ばす。

「これで決まりだ。」

ジョーカーはドライバーのジョーカーメモ리를右腰のマキシマムスロットにセットしボタンを叩く。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「ライダーキック!」

ジョーカーは高く跳躍。

そのまま右足に紫色のエネルギーを纏い飛び蹴りを放った。

腹部にライダーキックを受けたアームズは吹き飛ぶ。

そして身体にプラズマが走ったかと思えば身体が爆発。

「や、やったの?」

ティアナは啞然とする。

アームズが爆発した後には一人倒れている男と破壊されたアームズメモリだけだつ。

「え? どういうこと?」

ティアナや他の局員は驚く。

それもそのはず。

彼女らはドーパントを知らない。

襲われたから対抗したにすぎなかったからだ。

すると。

ティアナ達に歩み寄りながらジョーカーは変身を解き、翔太郎になる。

「どういことですか？ これは。えっと……左さん……でしたっけ？」

「あ、ああ。えっとだな……。」

すると。

「ティアナ　！」

スバルとギンガがバリアジャケットの姿で駆け付けた。

「スバル！　ギンガさん！」

「ティアナ。この人は敵じゃないわ。」

「えっ？　あの……その……どういことよ……！」

「あ、詳しくは俺から話す。改めて……左翔太郎だ。」

「ティ、ティアナ・ランスターです。」

翔太郎とティアナは握手を交した。

その後翔太郎はティアナにも一部始終を話した。

あの怪人、ドーパントについても。

「というとドーパントっていうのは地球の記憶が詰まったガイアメモリっていうアイテムで人が変貌した姿で、翔太郎さんはそのドーパントを倒す仮面ライダーっていう姿に変身して・・・戦ってた？」

「若いわりに理解が早いな。びっくりしたぜ。」

「貴方が倒れていたのはなんでですか？」

「・・・わからねえ。前の世界で意識が消えたら変な空間にいて、そこで俺の師匠の後をついていったら俺はスバル達の家で寝てた。」

「で、スバル達の前で左さんが行き倒れていた・・・と。」

「うん。」

「なかなか信じがたいけど、実際この目で見たし、助けられたからどうも言えないわね・・・。」

「そっぴや、君らの力はなんなんだ？ 外の世界から来た俺にはよ

く分からねえんだが……。」

翔太郎の素朴な疑問にスバルが答える。

「あゝ、あれは魔法ですよ。」

「は？」

「いや、だから魔法ですつてえ。」

「……はあああああ！？　じゃ、じゃあ俺は魔法使いの世
界に來ちまったのかあ！？」

翔太郎のあまりにも大きい反応にスバル達は驚いている。

「そ、そんなに凄いことですか？」

ギンガが若干ひきながら聞く。

「魔法つてーのは俺がいた世界だと仮想空想の産物なんだ。あ、あ
りえねえ……。あゝゝ、めまいがしてきた。」

そんな翔太郎を三人は笑う。

そんな三人に翔太郎も笑顔になる。

「でも……左さん。悪い人じゃなさそうですし……スバル、ギ
ンガさん。左さんの身柄の保護、お願い出来ますか？」

「分かった。」

「任せて！」

ギンガとスバルが了承する。

「じゃあ改めてよろしくね、左さん！」

スバルが翔太郎にウインクする。

「おう！ 後な・・・翔太郎でいいぞ。スバル。」

翔太郎は右拳を突き出す。

「・・・はい！」

スバルは右拳を出し翔太郎の拳に合わせる。

「私たちも・・・。」

「忘れないでよね！」

ギンガとティアナも拳を合わせる。

(フィリップ・・・ お前とはまた離ればなれになっちまったが・・・ お前なら大丈夫だよな・・・俺はなんとかこの世界でやってくよ。仮面ライダーとして。じゃなきや・・・お前とまた会ったとき情けねえツラ見せちまうからよ。俺達は例え離れていても相棒だぜ。なあ・・・フィリップ。)

翔太郎は心のそこで思った。

そして誓った。

この街で仮面ライダーとして……。

この街の切札として生きていくことを。

強化（改正版）（前書き）

これを投稿するまでにたくさんのご感想をいただきました。

こんなに皆さんに読んで頂けたことはとてもありがたいことです。

今回は前回、前々回と合わせて一つと考えていただけたら幸いです。

なんかWと感覚が変わってしまい申し訳ないです。

何故か今回は長いです。

後最初の紹介、ツールとビークルの部分が若干変わりました。

お手数ですが、そちらを読んでから読んで頂くことをお願いします。

ご感想待っています！

強化（改正版）

アームズを倒したその日の夜。

「ではあゝ、新しい家族に〜。」

仕切るのはウエンディ。

「~~~~~かんぱあゝい！」「~~~~~」

ナカジマ家の女性六人にゲンヤ、その勢いに押され気味な翔太郎の八つのグラスがぶつかる。

「しっかし、翔太郎がこなけりや死ぬまでこのハーレム味わえたんだがなあ〜。」

ゲンヤは腕を翔太郎に絡ませる。

ちなみにまだ酒は入っていない。

「す、すんません。」

ゲンヤの迫力に翔太郎は思わず平誤りする。

「まあまあまあ。ウエンディはいつでもパパの側にいるっすよ〜。」

そんなゲンヤにウエンディは笑顔だ。

「だが、ハーレムもいいがお前ら、俺が死ぬまでに全員ウエディン

グドレスを見せてくれよ。じゃなきゃ化けて出るぞ。」

「怖いこと言わないでよ……。」

デイエチが苦笑いをする。

「うむ。眼帯にウエディングは似合うだろうか。」

(そのときは外そうよ……。)

チンク以外のその場の全員が思った。

この時点ですでに家族としてのチームワークは抜群かもしれない。

「そっぴや翔太郎さんはなんか格闘技をやってんのか？ 素手だろ？」

「あ？ ああ。やってはいねえが、今までの仕事で覚えた実践的な体術をちよつとな。」

「ふう〜ん。」

ノーヴェは納得する。

すると、スバルが翔太郎に料理を異様に盛った皿を差し出す。

「翔太郎さん。どうぞ。」

「……もう食べねえって……。つか………食べ過ぎだろ

「！」

スバルがくれた皿に翔太郎は大きくつつこむ。

「「「「「そう？」「」「」「」

ナカジマ家の六人の女性は見事なシンク口を見せる。

「スバル……。翔太郎さんは普通の方なんだから、あまり無理言わないの。」

「はい。」

ギンガはスバルに注意する。

すると。

「そうだ、翔太郎。お前仕事はどうするんだ？　ウチは働かざる者食うべからずだぞ。」

ゲンヤが重い話を言い出す。

「ごちそう様だ。そうなんすよ。何で明日ちょっと仕事を探すのにちょっと早く出かけます。」

「そうか。じゃあ先に風呂入ってこいよ。スバル、案内してやってくれ。」

「はい。」

「すみません。じゃあおやすみな、皆。」

「『『『『『お休み。』』』』』」

翔太郎とスバルはリビングを出る。

廊下を歩く二人。

すると突然。

「あの・・・翔太郎さんって彼女いたんですか？」

スバルが急に桃色のような話題を持ち出す。

「な、なななな何で？」

翔太郎は思わず驚く。

「だって・・・顔も悪くないし、性格も優しいし、強いし・・・。彼女の一人くらいいてもおかしくないはずだけど・・・。」

「お、わかってるなあ。実際いなかっただし、いたこともなかったぜ。この歳でまだファーストキスも出来てないんだよなあ。なんせ青春時代を全部探偵に尽くしてきたからな。」

「そんなに探偵っていう仕事が好きだったんですね。」

「ああ。探偵っていうのは警察や人にいえないような涙を拭える唯一の方法と俺は思ってる。俺は前にいた街で誰一人泣いて欲しくな

かった。だから探偵っていう仕事は好きとかを通りこして俺の生き甲斐だった。この街にはまだ来たばっかだが、今ではこの街を守りてえ。誰一人この街で泣いてて欲しくねえ。もちろんスバルやギンガや皆もな。」

「そ、そうですか。こ、ここがお風呂です。」

スバルは照れ隠しにそっぽを向きながら、言う。

「あ、ありがとな。」

翔太郎は風呂場に入ってしまった。

「なんだか凄いひとだなあ。」

するとスバルは妙な感覚に襲われた。

胸の奥がうずくような感覚。

「・・・まさかね。」

妙な感覚を持ちながらスバルはリビングに戻っていった。

湯船につかる翔太郎。

翔太郎は頭の中で整理していた。

（風都で俺が死んで、おやっさんを追っかけて、気が着いたらこの

ミッドチルダ……。)

「ああああ！ わ……っかんねえ！」

翔太郎は湯船に潜る。

(そついや……。)

そして浮上。

(前はジョーカーだけでもなんとかあったからアレを試してなかったな。)

翔太郎はあることを思いついた。

実際考えてはいたが、ジョーカーだけで十分だった故に使用しなかった二つの力。

「試してみる価値はありそうだな。」

翔太郎は風呂を出て寝間着に着替え、部屋に戻った。

「今日は色んなことが有りすぎて疲れた。寝よう。」

翔太郎は疲労故かすぐに眠りにつく。

その夢には棒術を使う銀色の闘士、一撃必殺の青い銃撃手が現れていた。

まるで予知夢のように。

翌朝。

ボイルダーの側で手袋を付ける翔太郎。

「じゃあ出かけてくるな。夕方までには戻る。」

「行ってらっしゃい。」

「おみあげよろしくっす〜。」

ギンガとデイエチ、ウエンディが翔太郎を見送る。

あれから数時間。

「なんかねえかなあ〜。」

翔太郎はあちこちを見て回ってはいたが、なかなかいいところが見つからなかった。

「つーか、俺はまた探偵をしてえんだよなあ〜。なんか良いところは……。」

すると。

「きゃあああああ!」

悲鳴が聞こえた。

「！マジかよ！」

翔太郎はボイルダーに乗り現場に向かう。

「この力。心地いい。」

「いっっっぱい暴れられるわあああ！」

街を壊すのはカメレオンドーパントとティーレックスドーパント。

そのまま二体は逃げ遅れ震える二人の子供に接近する。

「怖いよおお、お兄ちゃん……。」

「大丈夫だよ。僕が守るから。」

二人は兄弟らしい。

兄らしき少年が弟を励ます。

しかしドーパント二体の気は変わらない。

「安心しな。」

「一瞬で終わらせてあげ・る。」

2体がかかる。

二人の子供は目をつむる。

その時。

「させるかああああ！」

横からハードボイルダーにのった翔太郎がぶつかり、二体のドーパントを吹き飛ばす。

「貴様あ！」

「邪魔するなら容赦しないわよ！」

二体は殺気立つ。

「悪いがてめえらには新しいのに付き合ってもらっぜ！ 覚悟しな
！」

翔太郎はドライバーを付ける。

そして左手に持つのはいつものジョーカーメモリではなく。

『メタル！』

スケルトンのメタルメモリだった。

翔太郎はメタルメモリをドライバーにスロットする。

「変身！」

そのままスロットを展開する。

『メタル！』

翔太郎の身体は銀色のジョーカー、いや銀色の新たな姿、仮面ライダーメタルへと変身を遂げた。

メタルは背中メタルシャフトを持ち、ドーパント達に構える。

「さあ・・・お前達の罪を数えろ！」

メタルはドーパントに飛び込む。

シャフトによる突きや払い、足払いなどでドーパント達は徐々に弱まっていく。

そして二体を双方ともに逆方向に吹き飛ばし、ティールックスに狙いを定める。

「決めるぜ。」

メタルはメタルメモリをシャフトにスロットする。

『メタル・マキシマムドライブ！』

「はああああああ！」

シャフトに銀色のエネルギーが纏われていく。

「え っと……。メタル……。メタルインパクトスマッシュ！」

そしてシャフトで強烈な突きを叩き込む。

ティールックスは爆発し女性が倒れて現れる。

「後はお前だな。」

「ひい！ なら！」

カメレオンは透明になる。

そしてメタルの身体からは透明になったカメレオンの攻撃により火花が散る。

「ぐっ！ やるじゃねえか。だがコイツを試すにはちょうどいいぜ！」

『トリガー！』

メタルは何処からかトリガーメモリを出す。

そしてトリガーメモリをドライバーにスロットし展開する。

『トリガー！』

メタルは新たに青い仮面ライダー、仮面ライダートリガーとなる。

それによりシャフトは消滅し、トリガーは左胸に新たに現れたトリガーマグナムを右手に持つ。

そしてその場に立つと、動かなくなる。

そして。

首を真横に動かし、目の前にマグナムを発砲する。

何もいないはずのところから火花が散り、カメレオンドーパントが現れた。

結果カメレオンはさっき、トリガーの顔面に拳を放ったが避けられ、銃撃を浴びるはめになり、吹き飛ばされる。

トリガーはトリガーマグナムにトリガーメモリをスロットし、マグナムをマキシマムモードにする。

『トリガー・マキシマムドライブ!』

「終わりだ!」

トリガーはカメレオンに向けてマグナムを構え……。

「えっと、トリガー……ストレートバースト!」

引金を弾かれたマグナムから放たれた巨大な青色の弾丸はカメレオンドーパントに命中し、爆発を起こす。

後には犯人の男が倒れていた。

「ふう。・・・後は管理局に任せるか。」

トリガーはハードボイルダーに寄る。

すると。

「あ。・・・。」

「ああ?」

トリガーは振り向くとそこには彼が助けた兄弟。

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

「怪我は無かったか?」

トリガーは二人に近寄る。

「「うん! (はい。)」」

「そっか。なら良かったぜ。」

トリガーは二人の頭を撫でる。

「お兄ちゃん、名前は?」

弟が尋ねる。

「俺か？俺はな・・・仮面ライダーって言うんだ。」

「「仮面ライダー？」」

「ああ。おっと、ごうしちやいらねえ。またな。」

トリガーは指鉄砲を向けた後、ハードボイルダーに乗って走り去っていった。

「僕達もいつかあんなふうになりたいなあ。」

「うん。」

二人は見えなくなるまでハードボイルダーに乗った仮面ライダーを見つめ続けた。

ナカジマ家。
夕方。

「どうだ？何か見つかったか？」

ゲンヤが聞くが。

「なんなんすかねえ。仕事はあるはずなんですけど、探偵の仕事を捨てきれねえっていうか・・・未練たらたらっていうか・・・。」

「そっか。ならよ、俺の部隊に入らねえか？」

「え？」

「探偵やったんなら、頭もキレんだろうし、仮面ライダーとしての実力もテイアナから聞いているぜ。わかんねえことがあったら俺だけじゃなくギンガも一緒だからいざって時に困んねえし、基本この街で動く。どうだ？」

「え〜と……。」

翔太郎は悩む。

すると。

「翔太郎さん！ 私の秘書っていつかサポートをしてくれませんか！？ 出来れば同居で。」

スバルが身体を乗り出す。

「……………はあああああああ！？」

無論声を荒げて驚くのは翔太郎。

当然と言えば当然。

翔太郎は少年時代に見た荘吉に憧れ探偵を目指し、学生時代のほとんどを荘吉のもとで探偵として勉強してきた。

なので女性との付き合いはほとんど皆無であり、依頼人ともその時だけであった。

事務所の自称所長・鳴海亜樹子は女性としてみていなかったし、学生関係の情報屋のクイーンとエリザベスもただの情報を買っ側売る側の関係。

にも関わらず突然の同居と来ては当然の反応だ。

「お、いいな。スバルも一応上に立つ側になっただけだから。翔太郎ぐらいに頭がキレれば十分だろ。」

（って止めるよ！ あんた親父だろ！ つーか、この歳で部下あ！？）

「スバル、そんなにすごいのか？」

「スバルは一応湾岸警備隊の防災士長だ。」

ノーヴェが入り込む。

「マジかよ……。」

「警備隊なら翔太郎さんも動きやすいですし、同じ近距離型なら相性もいいですし。ねっ！」

「あ、ああ。でもまあ、同居する必要はないような気が……。」

「よし、決定！ ささ、明日から早速お願いしまっす！」

（……駄目だ。コイツの強引さは亜樹子を越えてる。いくら言ったってどうせ無駄な気がすんな。）

翔太郎は諦めた。

「あ　　！　もう、わ　ったよ！　こうなりや郷に従ってやらあ！　じゃあ明日からよろしくな！　スバル！」

完全にやけな翔太郎に対し……。

「よろしい」

対してスバルはほんのり顔を赤らめながらの笑顔である。

翔太郎の即席の部屋。

（この部屋ともおさらばか。　ずいぶんあっという間だったな。　しっかし……ある意味スバルはドーパントよりキツイな。　まあ、可愛いつちゃあ可愛いが。）

すると翔太郎はスタックフォンを取り出し、タイプライターがないためスタックフォンの中で報告書を打ち始める。

「犯人二人は共同で暴れていた奴らだった。　管理局に任せだが、奴らも被害者。　必ずこの手で黒幕を掴んでみせるぜ。　それと考えていたメタルとトリガーによる単独変身はジョーカー同様に可能だった。　これからの事件で力になってくれれば幸いだ。　だがそんな反面、この力を得たために何かを失うことがあるかもしれない。　だとしてもそんなことはさせない。　この俺が仮面ライダーを捨てない限りはな。」

このデータを保存したのち翔太郎は眠りにつく。

暗闇の中、荘吉が一人立つ。

「翔太郎……。いずれお前にも必要なときがくる。俺からのプレゼントだ。」

荘吉がはごころから白い箱を出す。

さらに荘吉の後ろから装甲車のような小型のマシンが現れた。

前面は斜めになっており、そこには今までのユニットやガンナーAのように数字「5」が刻まれていた。

強化（改正版）（後書き）

何故か今日授業中に「歌舞鬼か西鬼か羽撃鬼のどれかで書いてみたい」と浮かびました。

我ながら何故？

ちなみに三人というところ。。。

「劇場版仮面ライダー響鬼と七人の戦鬼」で登場するご当地ライダーです。

我ながら凄くマニアックですね（笑）

眩き闘士と青き銃撃手（前書き）

新ライダー、というより新フォーム紹介です。

やってみたかったアイデアの一つです。

Wを好きな方々はタイトルから簡単に察されそうですね（笑）

ちなみにポジション的には前者はクウガでいうタイタン、後者はペガサスの位置です。

眩き闘士と青き銃撃手

翔太郎が新たに変身可能となった二人の仮面ライダー

・仮面ライダーメタル：

身長：195cm

体重：100kg

パンチ力：4t

キック力：7t

ジャンプ力：40m

走力：100mを9.2秒

左翔太郎がメタルメモリとロストドライバーを使って変身した銀色の仮面ライダー。硬くなった身体、高められたパワー、メタルシャフトによる棒術で戦う。反面俊敏性は下がる。

・仮面ライダートリガー：

身長：195cm

体重：85kg

パンチ力：2t

キック力：5t

ジャンプ力：45m

走力：100mを8.3秒

左翔太郎がトリガーメモリとロストドライバーを使って変身した青い仮面ライダー。トリガーマグナムを使つての銃撃により戦う。他の姿より運動能力は下がるものの視力・聴力等の五感が優れ、見えない敵も撃ち抜くことが可能。

ガイアメモリ・武器（原作通り）：

メタルメモリ：

「闘士の記憶」を内包したメモリ。人間の筋力を極限まで高める機能を持つ。

トリガーメモリ：

「銃撃者の記憶」を内包したメモリ。あらゆる重火器の記憶が搭載されている。

メタルシャフト：

仮面ライダーメタル時に背中に装備される棒型武器。メタルの主力武器。

トリガーマグナム：

仮面ライダートリガー時に左胸に装備される銃型武器。トリガーの主力武器。

マキシマムドライブ（必殺技）：

・メタルインパクトスマッシュ（メタル）：

メタルシャフトにメタルメモリをスロットして発動。最大硬化させたシャフトに銀色のエネルギーを纏わせ、棒撃を放つ。

・メタルスタッグブレイク（メタル）：

スタッグフォンを合体させたメタルシャフトにメタルメモリをスロットして発動。先端からクワガタのアゴ型のエネルギーを生成しそれにより敵を挟み潰す。

・メタルソニックプレッシュャー（メタル）：

バットショットを合体させたメタルシャフトにメタルメモリをスロ

ットして発動。高速振動させたシャフトで先端に真空の鎚を生成し敵を叩き潰す。

・トリガーストレートバースト：
トリガーマグナムにトリガーマモリをスロットして発動。青色の弾丸で敵を撃つ一撃必殺の銃撃。

・トリガースタッグバースト：
スタッグフオンを合体させたトリガーマグナムにトリガーマモリをスロットして発動。エネルギー弾を二方向から放つての銃撃。

・トリガーバットシューティング：
バットショットを合体させたトリガーマグナムにトリガーマモリをスロットして発動。バットショットにより狙撃性を特化させての狙撃。

聖王（前書き）

タイトルからわかるとおりあの子が初登場。

マンガで言えば一話冒頭です。

戦闘パートは次作です。

霸王っ子はまだ先です。

ハーレムとか言いながらスバル一筋に入りかねないです。
なんとか後二人！

毎回暖かい感想ありがとうございます。

聖王

朝。

誰もいない公園に空き缶を並べる翔太郎。

そして離れる。

すると翔太郎は白い箱を取り出す。

その箱、莊吉が持っていた箱には黒いトリガーマグナムと一枚のメモが入っていた。

トリガーマグナムのマガジンのWの文字は一部が赤くなっており、まるで「J」を描くようであった。

「ジョーカー・・・マグナムか。」

翔太郎はマグナムを左手に持ち換え、右手でメモを開く。

「きつとお前のことを守ってくれるだろう。」

メモにはそれだけ書かれていた。

翔太郎はメモを懐ポケットにしまい右手にマグナムを持ち換え空き缶に狙いを定め・・・。

ドギョーン！

撃つ。

空き缶のど真ん中には綺麗な円で貫通されていた。

変身せずとも翔太郎は仮面ライダー。

今昔問わず多彩な姿、戦闘スタイルで戦ってきた。

変身せずともジョーカーの体術やメタルの棒術、トリガーの銃技は身体に染み付いている。

そのまま翔太郎は空き缶を撃ち抜いていく。

たまに隠されたダイヤルで威力を調整して缶を弾いたり、凹ませたりしながら新たな力を試す。

そして弾かせて空き缶全てをゴミ箱に叩き込む。

「ふう〜。」

するど。

パチパチ。

突如拍手。

「すご〜い。」

翔太郎は声の元を見る。

そこには十代入りたてであるう片方の額が現れたトレーニングウェア姿の金髪の少女がいた。

「君、こちら辺の娘か？」

「あ、はい。いつものコースで……。そしたら音が聞こえたから……。」

「何だか恥ずかしいな。」

「でもカッコいいですね。帽子……。」

早朝ながらも翔太郎の服装は抜かりない。

「お、わかるか？ 小さい割にはしっかりしてるな。」

翔太郎は少女を撫でる。

「えへへへ」

少女は照れながらも満面の笑みだ。

すると少女は公園の時計を見た。

「あ、戻らないと遅刻しちゃう。さようなら……。えっと……。」

「左翔太郎だ。今は探偵……。じゃねえが……。まあわかりやすく言えば正義の味方だな。」

「へ、へえ〜。」

少女は苦笑い。

（今俺、外したか？）

「私、高町ヴィヴィオって言います。」

「そうか。じゃあな、ヴィヴィオ！」

翔太郎は指鉄砲をヴィヴィオに向ける。

「はい。左さん！」

ヴィヴィオもウインクして返す。

二人は公園を出る。

翔太郎こと仮面ライダーが聖王ヴィヴィオと初めて出会った朝であった。

「……………大変お世話になりました。」

翔太郎はゲンヤ達にお辞儀をする。

「まあ、これからもだろうがな。」

ゲンヤは嫌味を言い、翔太郎も苦笑いする。

「じゃあ行こつ！ 翔太郎さん。」

スバルが翔太郎の手を引つ張る。

「あ、ああ。じゃあまたな、皆あ！」

無愛想なノーヴェを含め他の四人も二人を見送る。

ゲンヤのお下がりの服装や生活良品をスバルの車に任せ、翔太郎はハードボイルダーに乗る。

スバルの家についた二人。

と言ってもあまり実家からは離れていないが。

「……………あり得ねえ。19でこんな家買えるなんざ……………」

「実際管理局つてあまり年齢関係ないんですよ。知り合いには10歳で入った子だっていますし……………」

「マジかよ……………。つーかマジで俺、お前と二人きりで住むのか？」

「いけませんか？」

スバルが上目使いで聞く。

(ぐはっ！ 駄目だ！ 断れねえ！)

「ふ、ふつつか者だがよろしく頼む・・・ぜ。」

「はい！ 頼まりました。」

少々下がり気味の翔太郎に対しスバルは満面の笑みだ。

二人はスバルの家に入った。

その頃。

翔太郎が会っていた少女、高町ヴィヴィオは初等部5年生の始業式が終わり教室で記念撮影をして図書館に向かっていた。

ヴィヴィオは友人のコロナとリオに朝のことについて話し始める。

「左？ 何だか変わった名字だね？」

「朝から洋服で公園って・・・変わった人だね。」

「でも優しい雰囲気だったよ。頭撫でてくれたし。」

「へえ〜〜。そういえば知ってる？ 二人ともあのこと。」

「「あのこと？」」

リオの急な話題にヴィヴィオとコロナはシンクロして聞く。

「やだなあ。あのことって言ったなら”仮面ライダー”のことだよ。」

「かめんらいだあ？」

「そう。バイクに乗って怪人を倒すヒーロー。しかも三つ色があるんだってー。」

リオの声のトーンが上がる。

「へえ〜〜。」

「仮面ライダーか。会ってみたいね。」

コロナとヴィヴィオは興味を持つ。

「でも怪人には会いたくないけどね。」

「だね。」

三人は笑いながら図書館に向かう。

特別救助隊オフィス。

スバルは簡潔に翔太郎のことを、頬に傷のある上司や同僚達に説明していた。

ちなみに速攻な就職だったので翔太郎は普段の格好である。

「そうか。まあナカジマも側近がいた方が楽だろうからな。じゃ、

今日からよろしくな。えつと……。」

「あゝ、左翔太郎です。よろしく願いします。」

一応上司になる人の前であるため翔太郎は帽子を取って挨拶する。
すると。

「そついや左さんの格好は何ですか？」

男性の同僚が聞く。

「あゝ、これは前の職業だった探偵の格好で……、長かったからこの格好が一番落ち着くつつか、他の格好が慣れないつつーか……。」

翔太郎は曖昧に答える。

「じゃあ左さんって彼女いたんですか。っていつかいるんですか？」

つぎには色恋事が好きそうな女性の同僚が聞く。

これには若干スバルも耳を傾ける。

「いやゝ、いたこともないすねえゝ。それにこの街には来たばっかだから今もいねえつすよ。」

「じゃあ今は何処に住んでるんだ？」

上司が聞く。

「ああ。今は……。」

実際はスバルの家に同棲しているが、こんなことを答えられる訳がなく……。

（よし、スバルの近所に越したって言えば……。）
しかし。

スバルのライダーキック並の破壊力の一言により翔太郎のプランは粉々にぶち壊される。

「翔太郎さんなら私と一緒に住んでます。」

「そうそう。スバルと同棲……、ああああ！」

翔太郎は弾丸並のスピードでスバルを見る。

（スバルうううう……！）

心の中で翔太郎は元の世界で所長様を呼ぶようなトーンで叫ぶ。

「はっはっはっは。マジかあ……。」

こんな事実上司は笑う。

「……ええ……。」

その場の同僚達は戦隊ヒーローを軽くしのぐチームワークで叫ぶ。

涙目になるスバル。

これには激情している翔太郎もさすがにブレーキをかける。

「わった、わった、分かった。俺が悪かった。だから泣くなっ
て。な？」

翔太郎がスバルを励まそうとする。

さすがの仮面ライダーも女性には適わないようだ。

「ぐすつ。わかりました。じゃあ……。」

「な、何だ？」

「今日は隣で寝てくださいね。」

「……はああ!？」

翔太郎は思わず叫ぶように聞く。

「怒る翔太郎さん、怖かったです。思い出したら夜怖くて眠れませ
ん。なので隣で寝てください。」

「思い出さなきゃいいだろうが!」

「わ、私は寝るときに一日のことを頭で整理しなければ寝られない
んです!」

嘘である。

基本スバルは熟睡だ。

「……………俺に拒否権は？」

「そんなのありません」

スバルの笑顔は翔太郎にはダークに見えて仕方がなかった。

（あゝ、ドーパントが出てくれれば疲れですぐ熟睡できんのに！
頼む！ 何でもいいから出てきてくれえ〜〜。）

すると神様は翔太郎を見捨てなかった。

スバルのマツハキャリバーが鳴り出し上司が映る。

《スバル！ 今夜到着する豪華客船内で怪人が暴れてる。至急来てくれるか？》

「そうそう、ドーパントが現れて……、ああ！」

「え？ わかりました。現場に向かいます。翔太郎さんは……あれっ？」

スバルが振り向いたときにはそこに翔太郎はいず、既にハードボイルダーにまたがっていた。

翔太郎は夜のミッドをハードボイルダーに乗って走る。

腰には既に巻かれたロストドライバー。

左手をジョーカーメモリを持つ。

『ジョーカー!』

ジョーカーメモリをスロットし右手を目の前で握る。

「変身!」

右拳を開き、左手でドライバーを開く。

『ジョーカー!』

翔太郎の身体を風が覆い、仮面ライダージョーカーとなる。

ジョーカーはハードボイルダーを走らせる。

走り去る道端の市民は啞然としてジョーカーを眺める。

「おい、あれって……。」

「仮面ライダー?」

「マジかよ。」

外野が視線を向けていることも知らず、ジョーカーは現場に向かっていった。

そんなジョーカーを上空から追いかける影。

それは人型ではなくまるで戦車のようなシルエットであった。

聖王（後書き）

ジョーカーといいアクセル何故か主役ライダーで書きたがらない自分。

何故ですかねえ。

早くもエターナル編を考案中です。

同時に始めた日にはアクセルにジョーカーにエターナルとてんやわんやになりそうです。

真価（前書き）

正直今回は賛否両論ありそうで怖いです。

特に最後！

どうかお手やらかにお願いします。

次回をお楽しみに！

真価

野次馬が集まる現場から一番近い海湾沖。

「落ち着いて！ みなさん落ち着いてください！」

管理局が精一杯に野次馬達を押さえている。

すると野次馬達を飛び越してハードボイルダーに乗ったジョーカーが現れる。

「仮面ライダー……。」

「仮面ライダーだ……。」

「本物？」

野次馬達の話題は一気にジョーカーに集まる。

マスコミに限ってはジョーカーにカメラを向け、シャッターを切り続ける。

局員はジョーカーに近寄る。

「仮面ライダー……さん……ですか？」

「さんはいらねえ。状況はどうなんだ？」

「……。ああ。はい。状況は屋上に怪人が一体、屋内にはまだ一人女の子が閉じ込められています。」

「くっそおー、俺が飛べれば……。せめてタービュラーユニットがありゃあな〜〜。」

ジョーカーがうなだれた。

その瞬間。

空から黒い装甲車のようなビークルが飛んできた。

前面の斜めった部分には今までのようなユニットと同じような数字、しかも「5」と刻まれていた。

「ああん!? 何だおめえ?」

ジョーカーが聞くと、黒いユニットは返事のように電子音を鳴らす。

それによりジョーカーは敵ではないことを悟った。

そしてユニットに一枚の紙が張り付けてあることに気付き、剥がす。

「使え。」

ただそれだけが書かれていた。

「おやつさんらしいな……。まあ、助かったぜ! 名前は……。え〜と……。ブラスターユニットだ!」

ジョーカーが名を付けると黒いユニット、ブラスターユニットは喜ぶように高い電子音を出す。

「っしゃあ！ 行くぜ！ ブラスターユニット！」

ジョーカーは左手をスナップしてハードボイルダーに乗る。

するとブラスターユニットが後部に合体、ハードブラスターになる。

「さあ、行くぜ！」

ジョーカーはハードブラスターで燃え上がる客船に向かった。

「足りない。まだ暴れ足りないいいいい！」

客船ではトライセラトップスドーパントが手に棍棒型武器を手に吠えていた。

「誰かあ、俺と遊んでくれないのかあ！」
すると。

「っおりゃあああああ！」

上空からジョーカーが飛び交ってきた。

「てめえは！」

「どりゃああ！」

「ぐお！」

ジョーカーはトライセラトップスに横蹴りを叩き込み吹き飛ばす。

「俺か？ 俺は仮面ライダー・・・ジョーカー。」

「仮面ライダーあ？」

「さあ・・・お前の罪を・・・数えろ。」

ジョーカーは左の人差し指をトライセラトップスに向ける。

「誰があああ！」

「行くぜ！」

トライセラトップスとジョーカーは互いに走って取っ組み合った。

相変わらず人がうごめく海湾。

するとそこにバリアジャケットのスバルが駆け付けた。

「湾岸警備隊、防災士長のスバル・ナカジマです。どんな状況ですか？」

スバルは場の局員に聞く。

「はい。今夜入港予定だった豪華客船アルセル号内で怪人が現れて火災を起こし、現在怪人は屋上。内部に要救助者が一名。今さつき仮面ライダーという方が変な乗り物で飛んで行ってしまいました
が……………」

「翔太郎さ……、仮面ライダーが!？」

「? はい!」

「……私も合流します。後から来た方にも説明お願いします。」

「えっ? ちょっ……ナカジマ士長?」

「ウイングロード!」

局員の制止を聞かすバルはウイングロードを客船に伸ばし、走っていった。

「はっ!」

「ぐおっ!」

トライセラトップスの棍棒がジョーカーの腹部に放たれ火花を散らす。

トライセラトップスは引き続き棍棒を叩き込み続ける。

「ぐああああああ！」

ジョーカーは吹き飛ばされる。

「つつ〜。んなろお！」

『メタル！』

ジョーカーはメタルメモリを鳴らしながら立ち上がりメタルメモリをロストドライバーにスロットし開く。

『メタル！』

ジョーカーは風を纏い仮面ライダーメタルになり、背中メタルシヤフトを持つ。

「行くぜ！」

メタルとトライセプトスは互いの武器をぶつけ始める。

メタルはシヤフトを縦、横、後ろ払いで振り回す。

すると。

「翔太郎さあ〜ん！」

聞いたことのある声にメタルは声のもとに首を向ける。

スバルがウイングロードで走ってきた。

「うおっ！？　なんだそりゃあ！　魔法ってやつか？」

「私のはこういので……。」

「……まあ良いぜ！　こいつは俺がなんとかすつから、スバルは中の人を頼む！」

「はい！」

スバルはウイングロードで船内に入る。

「させるかあ！」

トライセラトppsはスバルの後を追おうとするが……。

「こっちの台詞だ！」

メタルが拒み二人は再び武器を交える。

正面、横、後ろからメタルはシャフトを振り回しトライセラトppsに放つ。

トライセラトppsも棍棒で受け止めるがその素早さや技により徐々に追い詰められ……。

「どりゃあー！」

メタルの下からの振り上げによりトライセラトppsの手から棍棒が弾かれる。

やはりパワーとパワーでは経験状メタルが有利らしく・・・。

「うおりゃあああぁ！」

メタルは下からの突き上げによりトライセラトックスを宙に浮かせ突きで吹き飛ばす。

「ぐおおおおお！」

「っしゅあー！」

メタルは左手をスナップさせる。

だが。

「まだまだ！ まだだあああ！」

トライセラトックスは手から巨大化し、巨大トライセラトックスになる。

「マジかよっ！」

メタルはハードブラスターに跳躍して乗り込む。

巨大トライセラトックスは足を踏み込み船上で暴れる。

その度に炎は燃え上がる。

「！ あんにゃろ〜！ させっか！」

メタルはハードブラスターで接近。

巨大トライセラトppsの尻尾が迫るが、避けブラスターの二つの砲身からは光弾、ハードの前輪の二つのバルカンからは実弾を放ち巨大トライセラトppsを攻撃する。

「ぎゃおおおおおー！」

巨大トライセラトppsは叫びながらのけぞる。

「決めるぜー！」

『バットー！』

メタルはシャフトにバットショットを合体させる。

そしてドライバーからメタルメモリを抜き、シャフトにスロットする。

『メタル・マキシマムドライブ！』

「はあああああー！」

シャフトの先端に真空の鎚が生成されてゆく。

メタルはそのままブラスターから飛びシャフトを振りかざしながら巨大トライセラトppsにとびかかる。

「メタルソニックプレッシュャー！」

鎚を纏ったシャフトが巨大トライセラトップスの後頭部に炸裂し・
・。

「うおおおお。おりゃああああ！」

そのまま押し潰し潰し巨大トライセラトップスは爆発を起こし、犯人らしき男が横たわっていた。

「後は局に任せるか。」

メタルは跳躍し犯人をブラスターに乗せる。

そして自らは再び船上に。

「頼んだぜ！」

ブラスターは犯人を乗せ局員達が野次馬達を押さえている海湾に向かい飛んでいった。

「さてと・・・行くか！」

メタルは火の中に飛び込んでいった。

燃え盛る炎の中。

「はあ・・・はあ・・・。」

「・・・お姉ちゃん・・・。」

「・・・大丈夫・・・。絶対助けるから！」

スバルは要救助者らしき少女を抱え、息を切らしてした。

実際トライセラトップスの放った光弾が火種に燃え上がった炎の勢いはバリアジャケットを焼き、スバルの皮膚を一部焦がす。

（どうしよう・・・。障壁でも受け切れないし、バリアジャケットも耐えられない。このままじゃ・・・。翔太郎さん・・・。）

スバルが心の中で強く願った瞬間。

炎を浴び天井の一部が落ちてきた。

「！」

少女、そしてスバルが目をつむる。

すると。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「ライダーパンチ！」

スバルに向かってジョーカーが走って来て・・・。

「っおりぁああぁぁ！」

ライダーパンチで落ちてきた天井を粉々に砕く。

「助けに来たぜ！ スバル！」

「翔……太郎……さん？」

「ああ、遅れ……うおっ！」

ジョーカーが喋っている最中にスバルは右手で軽くジョーカーの腹部に一撃。

「ホントだよ！ 全く、女性を待たせるなんて！ 探偵さん失格だよ！」

スバルは立ち上がりジョーカーに説教。

（翔太郎さん……。）

しかしその顔は炎のせいかわからないが、ほんのり赤くなっていた。

「とりあえずはこっから出ねえとな。だが……。」

ジョーカーはやけどを負っているスバルを見る。

「正面からはきつつそうだな。」

すると。

「いざとなったら翔太郎さん、この子を連れて……。」

スバルが言い出すが……。

「ざけんな！ この街で誰一人死なせやしねえ。……今の俺は……この街を……笑顔を守る仮面ライダーなんだ。それが……俺が俺に決めた誓いだ！ だから……。んな弱きなこと言うんじやねえよ。」

ジョーカーはスバルを励ます。

「翔太郎さん……。」

「安心しな！ 男は一度決めたことは必ずやり遂げる。それがハード……ボイルドだからな。」

ジョーカーはスバルの頭をなでる。

スバルは耳まで赤くなる。

これは炎の影響で見えるのではなかった。

しかし現実は厳しい。

実際にはジョーカーだけであれば正面からの脱出はたやすい。

しかし今はスバルと少女がいる。

少女は生身、スバルのジャケットも耐えきれないのは明らかだった。

(どうすりゃいい。考える、考える……。俺に水かなんかを使えたら……。俺は……。肝心な時に……。無力だ……。)

「ちっ……きしょおがあ！」

ジョーカーは壁を殴る。

すると。

「翔太郎さん？ それは？」

「ああん？ ! これは……。」

ジョーカーは足元を見る。

そこにはジョーカーの足元から魔法陣が現れていた。

「すごい。これは魔力変換？ こんなの見たことない……。」

スバルはジョーカーを呆然と眺める。

「……これは切札……。俺の力が……。……へっ！ 有り
がたく使わせてもらっぜ！」

ジョーカーは手首をスナップし……。

「はああああああ！」

力を込める。

すると魔法陣はを右手に集まり、留まる。

ジョーカーは炎が立ち込める廊下に身体を向け……。

「はああああああ……。」

力を込め……。

「はあ！」

正拳突きを放つ。

するとジョーカーの右拳から水色の波動が放たれ、廊下に燃え盛っていた炎を一瞬で消し去る。

「マジかよ……。」

ジョーカーは自分の力に驚く。

しかしそんなことをしている暇はなく……。

「行くぞ！ スバル！」

ジョーカーはスバルに手を伸ばす。

「はい！」

スバルは手を掴み、少女を抱き立ち上がる。

三人はジョーカーを先頭に船上を目指す。

三人は船上に出ると・・・。

「来たか。」

犯人を海湾の局員に預け戻ってきたハードブラスターが浮遊していた。

ジョーカーは少女を抱き抱えるスバルを抱き、跳躍してハードブラスターに乗り込むとまたがる。

「目え開けな。」

ジョーカーは少女に言い、少女は泣きながら目を開ける。

「もう心配いらねえぜ！ お母さんに合わせてやっからな。」

ジョーカーは少女の頭を撫でる。

「・・・うん！」

少女は涙を拭き笑う。

「へっ！ さあ、戻るか！」

そんなジョーカーをスバルは、微笑ましく眺めていた。

そんなことも知らずジョーカーはハードブラスターのアクセルを捻る。

「お母さん！」

少女は母親らしき女性と抱き合う。

二人ともボロボロではあるが、顔は嬉しさに溢れていた。

「……………良かったですね。」

「ああ。」

そんな二人を見てスバルとジョーカーは互いの顔を見る。

（ぐはっ！ や、やべえ！ 何だこの可愛さは！）

ほんのり頬を染めるスバルにジョーカーは心の中でそう思った。

すると。

「仮面ライダーさん！ 貴方は一体何者なんですか？」

「管理局の関係者なんですか？」

「何故そんな姿なんですか？」

マスコミがジョーカーにたかる。

その迫力にはさすがのジョーカーもたじろぎ…………。

「わりいな。ちょっと用事を思い出した。」

すぐさまハードボイルダーにまたがり走っていった。

「ま、待ってください！」

マスコミは追いかけるも相手はバイク。

あっという間に見えなくなっていました。

その後マスコミはスバルにも迫ったが、当のスバルはウイングロードで離脱し、その場を他の局員に任せ、去っていった。

ベッドの上で寝間着姿の翔太郎はスタッグフォン内で報告書を打つ。

「二日続きで起こったドーパントの事件。この街に何が起きているのかは今の俺にもわからない。とりあえず明日ドーパントになっていた連中を拘束しているらしい108部隊に行って何かの情報を得たい。今後の、新たな戦いに向けて。」

保存。

「ふう。」

息を吐く翔太郎。

するど。

「翔太郎さん」

スバルが走ってベッド、というより翔太郎にダイブ。

「うお！ おい、スバル！」

「翔太郎さ〜ん。」

「おい、スバ……んむ。」

「んむううう。」

翔太郎の唇をスバルは強引に奪う。

「すすすスバル。おまつ、どうしてくれんだ！ 初めてだったんだぞ！」

「良かったあ〜。翔太郎のファーストキッスう〜う〜。」

半ギレの翔太郎に対しスバルは嬉しそうだ。

「それに翔太郎さん、さっき一生懸命に助けてくれた。だからお礼！ それに……。」

「それに？」

「私……翔太郎さんがだ〜〜あい好き！」

「んな！」

再び翔太郎に抱きつく。

しかし翔太郎は戸惑いながらも嬉しそうである。

「じゃあねえな。今日だけだかな！」

翔太郎は笑顔で返す。

するとスバルはそれを違うOKサインと勘違いしたのか……。

「うおっ！ おい、スバル！ てめっ、なんでこんな力つえんだ
！」

スバルが翔太郎を押し倒し……。

「翔太郎さん。私……初めてだけど……ふつつかものですが……
よろしくお願いします。」

そのままスバルは自分のパジャマのボタンを一つずつ外していき……。

「お？……お……、おおお~~~~~！！！」

この日の夜。

翔太郎はまた一つ大人の階段を上った。

めでたしめでたし？

真価（後書き）

話が変わりオーズの話なのですが、いつの間にプトティラの暴走を抑えられるよになったんですかねえ。

まあかつこ良かったし、実質2対4をひっくり返す力がすごかったです。

激動（前書き）

やっと漫画に介入します。今回はちょっと新しいことに挑戦してみました。

慣れないため変かもしれませんが、ご了解下さい。

ちなみに自分はフィギュアを動かしているとやたらとその仮面ライダーで作りたくなります。

とりあえず新たにNEW電王とイクサでやってみたいですね。

激動

パチッ。

目が覚める翔太郎。

「ああああ。」

起き上がるためにベッドに手を置く。

ムニユ。

「ん・・・んふ。」

置いたはずであった。

変な擬音が鳴る。

やたらと柔らかい。

相当高級なベッドでもここまでの触感はない。

(？ 何だ？・・・はっ！)

翔太郎は昨日の夜を思い出す。

真夏よりも暑かった夜。

やたらと汗をかいた夜。

何かを失い、何かを卒業した夜。

ゲンヤや他の姉妹が知ったら色々やばい夜。

主に自分の命が。

「……………」

サ。

一気に血の気がひく翔太郎。

チラッ。

翔太郎は手元を見るとそこには……。

「んむ……、駄目だよ翔太郎さん。そんなに激しいと私壊れちゃうよ……。」

翔太郎の気も知らないスバルが寝言を言いながら寝ぼけていた。

ただし格好に問題あり。

「……………風邪ひくぞ。」

それだけしか言えない翔太郎。

なにせ今のスバルは……。

毛布がかかってはいるが全裸である。

何故分かるか……。

ベッドの下にスバルのパジャマや下着が落ちていているからであった。

すると。

「ふあ〜。翔太郎さん？」

「お、起きたか。スバル。」

スバルが起きるがそれにより毛布がはだけ、胸が見えかける。

「なあ！？ ちゃんとかくせ、スバル！ 見えんだろうが！」

「え〜、今更恥ずかしがらないで下さいよ〜。昨日あんなに吸つてたのに〜。」

「あああああああああああ！」

赤くなるスバルに対して頭を抑え自己嫌悪するのは翔太郎。

はたから見たら中々カオスな現状である。

（全然ハードボイルドじゃねええええええ！ 何か、何か！ …… あっ！）

翔太郎の頭にこの現状を切り開く切札が浮かぶ。

「おう、そうだ！ 犯人の連中はどうなったんだ？ メモリをどうやって手に入れたのか気になるんだが……。」

「あ、そうだったね。犯人の人達の事情聴取は108部隊に任せて。あそこにはお父さんやギン姐がいるよ。」

「わ、分かった。じゃあ俺はその、108部隊ってところに行つてっからな。」

「え？ 今日休むんですか？ 報告書は？」

ちなみにスバルは未だにデスクワークが苦手であるため、正直翔太郎の補佐は二重の意味で嬉しかった。

「あゝ、じゃあ今夜手伝つてやるから、部隊長には言つといてくれ！ な！ 頼むぜ！」

「んゝゝゝ、……じゃあ……、今後はデートしましょう。ね？ 約束してくれたら、仕方ありませんが今日は一人で頑張つてあげます。」

（このおおおお。人が下手にでてりゃあ……。つーかプロセス逆だろが！ 何でデートを通り越してベッドインだあ！？ ……だが……。）

「まあ、いいか。いづれな。」

「やった」

スバルは抱きつく。

ちなみにまだスバルは裸。

(ぐおおおお。なんつー破壊力だ！)

「うおっ！ それよりもスバル！ 服着ろ！ それに早くしねえと遅刻すつぞ！」

スバルは時計を見て・・・。

「・・・あっ！」

途端に翔太郎とスバルは服を着て、せわしなく動き始める。

「翔太郎さん！ 私のパンツ足で隠してこっそり取ろうとしないでください！」

「んなわけねえだろがあ！ 偶然踏んだんだ！ そもそもこんなとこにつ・・・つてえ！」

翔太郎は昨晚スバルの脱いだ服で豪快に転ぶ。

こんなドタバタがあつたものの、互いに家を出て翔太郎は108部隊の本部に到着し、スバルはギリギリ遅刻せずに通勤できた。

「お待たせしました、翔太郎さん。」

「おお、ギンガ。ゲンヤさんは？」

108部隊舎の入り口付近の椅子に腰掛けていた翔太郎にギンガが走ってきた。

「お父さんはちょっと手が離せないらしくて。代わりに私が。私も一応今回の事件の担当者なので……。」

「そっかあ。頼んだぜ。」

「はい。」

二人は廊下を歩き始める。

「知らねえよ！ 怪物なんざ！」

「冗談を言うな！ お前が怪物になって人々を襲っていたのは明らかなんだぞ！」

「知らねえってんだろが！」

取り調べ室で取り調べが行われており、それを翔太郎とギンガはまじまじと眺める。

取り調べが行われているのは、昨日翔太郎が捕えたトライセラトツプスドーパントだった男である。

「こんな調子なんです。しかもこの方だけじゃなくて、他の方々も・

「・・・」

「・・・嘘はいつてなさそうだな。」

「？ そうなんです。まあ専門の方が言うには脈数や動悸から嘘は言っていないみたいなんですけど、どうしてそう思ったんです？」

「ズバリ言えば・・・探偵の勘だな。」

「・・・また反応の困る答えを・・・。」

翔太郎の答えにギンガは苦笑いである。

「なあ、ギンガ。壊れたガイアメモリ、もとい凶器はあるか？」

「は、はい。こちらに。」

ギンガはしまつてあつた袋を差し出す。

中には破壊れたトライセラトップスのメモリの残骸が入っている。

ミュージアム製のまがまがしいものと同じである。

ディスプレイは砕け、本体はまっぴたつに折れている。

するど。

「！」

翔太郎は何かに気づき、その残骸を手取る。

「こいつは……。そうか。これなら納得がいく。」

「ど、どうしたんです?」

「こいつと比べれば、わかる。」

翔太郎はジョーカーメモリを出し、メモリの残骸と共にギンガに見せる。

「翔太郎さんののは随分しっかりしてますね。こっちは何だか怖い感じなのに。」

「問題はそこじゃねえ。先端だ。」

「先端? ……あれ?」

ギンガはあることに気づく。

「そうだ。そのメモリの接続部分は青いんだ。メモリブレイクされた上、見た目が違うから気づかなかったがな。」

先端が青い。

「それとあいつらの身体の何処かになんか変な模様が無かったか?」

「? いいえ。これについては何も……。」

これにより翔太郎の頭の中で一つの結論が現れた。

青い先端のメモリ。

アダプタの存在しない被告。

つまりは……。

「おそらく、こいつはT2ガイアメモリだ。」

翔太郎はジョーカーメモリをしまい、メモリの残骸を見ながら言う。

「T2ガイアメモリ？」

T2ガイアメモリとは。

かつて財団Xが作り出した次世代型のガイアメモリ。見た目は先端が青く、仮面ライダーのメモリに似た純正のメモリ。ブレイクできない強度を誇り、アダプタを介せず人体に直接入り、場合によるとメモリ自体が自立し本人の意思無しに暴れる。

実際に翔太郎の知り合い、ウォッチャマンとサンタちゃんはそれにより自我を忘れ暴れてしまった。

しかし現在はない。

いや、ある訳が無かった。

何故なら以前翔太郎が仮面ライダーWとして仮面ライダーエターナルと戦い、W2サイクロンジョーカーゴールドエクストリームの一撃により全て破壊したからだ。

ただし今回は……。

「財団製じゃねえのか？ だとしたらミュージアムが……黒幕？」

「ミュージアムって翔太郎さんが戦ってたって言う組織ですか？」

「ああ。だがミュージアムは滅んだはずだ。だが実際奴らのメモリがある。……つまりは……。」

「その組織が復活？」

「もしくは模倣犯みたいな連中だな。どっちにしろ……。」

「？」

「自我無しに暴れさせられた以上、あいつらも被害者ってことだ。」

「……ひどい。」

すると。

「許せねえ……。この街を泣かせるなんて、俺が。」

翔太郎が壁を殴る。

「翔太郎さん……。」

「……ギンガ。」

「・・・はい。」

「実際俺は一人じゃミュージアムには勝てなかった。これからはスバルやギンガ、ゲンヤさんや皆に世話をかけるかもしれねえ。力を・・・。」

翔太郎が言いかけたとき、ギンガは自分の人差し指で翔太郎の口を閉じ・・・。

「行き倒れさんが今更何いつてるんですか。もちろんですよ。ねっ、お父さん」

すると。

「ああ。」

いつの間にかゲンヤがいた。

「ゲンヤさん・・・。」

「お前も頑張ってくれてる。なら俺達も出来る限りをしねえとな。」

「・・・ありがとうございます。」

翔太郎は深々と二人に頭を下げた。

二人もそんな翔太郎を見て誇らしげであった。

「翔太郎、この後どうだ？ 男二人で一杯行かねえか？」

廊下を歩きながらゲンヤが誘う。

「すみません。今夜はスバルとちよつと約束が……。」

「そうか。そついや昨晩は何かあったか？」

ドキッ。

この反応は無論翔太郎である。

「な、何かってなんすか？」

「若い男女が二人きりで一つ屋根の下だぜ？ 何かあったって不思議じゃねえだろ？」

にやけながらゲンヤが言う。

（楽しんでね か、この人？ とはいえあんなことがあったなんざ……口が裂けても言えねえ！）

「いやいやいや、何でも無かったツスよ。ホントに、マジで！」

「んだよ。何かあったら規制事実で一つ肩の荷が降りるんだがな……。」

「どついつこつすか？」

「正直俺はあいつらの相手が誰だろうが構わねえ。あいつらにはそ

いつと笑って生きていつて欲しいだけだ。きっとお前とならスバルも笑顔で生きていける。」

「……中々のプレッシャーッスね。」

「だからスバルを泣かした時にゃあ、わかってんだろっなあ?」

「もちろんッスよ。一度決めたことは曲げねえ。それがハード……ポイルドゥスから。」

「がっはっはっはっは! やっぱお前は最高だぜ!」

「っしゃあ! とーぜんッスよ!」

二人は肩を掛け合いながら廊下を歩く。

それはまるで親子のようであった。

その後すっかり日が落ちていたため二人は解散しゲンヤは再び仕事、翔太郎は家に戻ることにした。

ハードポイルダーを走らせ帰宅途中の翔太郎。

(今日は無理言っちゃったからな。夕飯は俺が作るか。)

その時。

ドオオン。

「！」

近くで爆音が鳴る。

(まさか・・・ドーパントか？ それとも・・・。)

翔太郎は数時間前を思い出した。

~~~~~数時間前~~~~~

廊下を歩いていた翔太郎とギンガ。

「後、翔太郎さん。怪人もそうなんですけど、こちらにも注意を。」

ギンガはモニターを翔太郎に見せる。

「なんだこりゃあ。」

そこには倒れた大男とその側に立つ仮面を付けた女性が写っていた。

「最近起きている連続障害事件・・・といっても被害届けが来ていないため事件ではないんですが。こちらにも気を付けてくださいね。」

「ああ。」

~~~~~

(. そのまさかかよ。)

翔太郎はその場に向けてハードボイルダーを走らせた。

霸王（前書き）

題名通りにあの子が登場します。

ちなみに確実にハーレムではなく、スバルがヒロインになりますが、ご了承ください。

今日特撮New typeを見ておもった事。

1．松平健とオーズのツーショットが！

すごいっすね、色々。

今年の映画も期待。

ちなみに現在自分の中ではW・A・t・o・zが一番です。

2．映画ゴージャイジャーと六人目、ゴージャイシルバーも楽しみです。特に強化プロテクターはすごいです。色んな意味で。

6月11日の映画公開日には変身アイテム、武器が販売するのでダブルで楽しみです！

3．東映チャンネルの海外版デカレンジャーのパワーレンジャーの声優を、なんとオリジナルのデカレンジャーのブレイク含めた六人が担当！

登録しようかなあ。

霸王

爆音が聞こえた現場に到着した翔太郎。

そこには……。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ……。」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……。」

「こいつは……。」

その場にいたのはやたらと飛び跳ねるホッパードーナツ。

そして。

「君は……障害事件の……。」

もう片方はギンガが見せた映像の仮面の女性であった。

肩を揺らして息を切らしている彼女にはあちこちに傷が。

(とりあえずはドーナツだ!)

『ジョーカー!』

「変身!」

翔太郎は考えるよりも目の前のドーパント退治を優先し、ホッパーに向け走りながらドライバーにメモリをスロットし展開する。

『ジョーカー!』

風を翔太郎が覆い、ジョーカーに変身する。

「さあ、お前の罪を数えろ! うおりゃあ!」

そのままジョーカーはホッパーに飛びかかり、地面に叩きつける。

「なんだあ、貴様!」

「貴方は一体……。」

起き上がるホッパーと仮面の女性はジョーカーに尋ねる。

「俺は……仮面ライダーだ。」

「仮面ライダー。貴方が……。」

「嬢ちゃん。君も自分の罪を数えな。君は何で事件を起こすんだ?」

「それは……。」
「……。」
「……。」

「俺を忘れてんじゃねえ!」

「……。」

「くっ！」

ホッパーの飛び蹴りを二人は避ける。

「そもそもなんでこんなことに……。」

「実は……。」

「言わねえでもわかる。ストライクアーツの有段者を襲ったらそいつがたまたまあれだったんだろ？」

「……はい。」

ジョーカーと仮面の女性は並び立つ。

「とりあえずはぶっ倒しとくか。」

「え？ でも……、あの方はとても強くて。私では……。」

「安心しな。俺の専門だあ！」

ジョーカーはホッパーにかかる。

「だっ！」

「おらあ！」

ホッパーとジョーカーの蹴りが交差し激しくぶつかる。

「ふん！ ふん！ ふん！ ふん……。」

「うおっ！ っとお！ おわっ！ つぶな……。」

ホッパーはそのまま連続して回し蹴りを叩きこんでいき、ジョーカーは身を捻らせひたすらよける。

「どうした、どうしたあ！ 仮面ライダーあ！ はっ！」

「うおっ！」

ホッパーの横蹴りがジョーカーの腹部に放たれ、ジョーカーは吹き飛ばす。

「いっつ……。」

ジョーカーはぶつけた腹部を擦りながら立ち上がる。

「とっ！」

さらにホッパーは飛び蹴り。

「てめえっ！」

ジョーカーは両手で受け止め……。

「こっちの番だぜ。」

そのままホッパーの足をもちながら振り回す。

「うおりゃあああああ……！」

そして……。

「どりゃあああ！」

ぶん投げ、ホッパーは地面に叩きつけられる。

「ぐおっ！」

「すごい……。あんな素早い蹴りを……。」

少女が感嘆の声を上げる中……。

「やるお！ 調子に……。はっ！」

ホッパーは怒り噴騰で立ち上がり、後ろ飛び回し蹴りを放つ。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「ライダー……パンチ！」

しかしジョーカーはしゃがんで避けた後、メモリをマキシマムスロットにスロットする。

そして……。

「うおりゃあああああ！」

ホッパーの顎にアップパータイプのライダーパンチを叩き込む。

「ぬおおおお！」

耐えきつたのか、ホッパー爆発せずに上に吹き飛ばされる。

するとジョーカーはメモリを抜き、再度スロットする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「決めるぜ！ ライダー・・・キック！」

ジョーカーはそのまま跳躍しホッパーの顎に・・・。

「うおりああああ！」

ライダーキックを放ち、ホッパーは爆発。

犯人が落ちてきたが・・・。

ブラスターユニットが激突寸前で砲身に服を引っ掛けて、助ける。

「よくやったぜ。」

変身をといた翔太郎は局に連絡する。

そして・・・。

「おい、君。」

「・・・はい。」

去ろうとした仮面の少女を呼び、少女は振り向く。

「君は一体……。どうしてこんなことを……。」

「私は……。霸王イングヴァルト。」

「霸王……。だと？」

「……。私は……。ただ自分の強さを知りたいんです。」

「強さを知りたいって……。それなら……。こんなところじゃなく、
どっかの道場やらジムでやりゃあ……。」

「あいにく……。」

少女は振り向き……。

「私の生きる意味は表部舞台にはないんです。」

少女は歩き出す。

「お、おい。」

翔太郎が呼ぶも、少女は跳躍してどこかにいってしまった。

後には翔太郎と倒れている犯人のみ。

「霸王……。イングヴァルト……。何だったんだ……。」

翔太郎はただたちすくむしか無かった。

その後局員により犯人は連行されたが、翔太郎の悩みは解決しなかった。

「……………」

「……………説明してください。」

リビングで正座をしている翔太郎にスバルが笑顔で聞く。

スバルの手にはさっきのイングヴァルトの髪の毛。

リビングでくつろいでいた翔太郎についていたことをスバルが気づき、今に至る。

しかし笑顔のスバルのバックには阿修羅が二体見える……………

気がした。

「……………いや、だから……………たまたまドーパントが現れて。そいつから女の子を助けたときに……………」

「……………ついた……………」

「イ、イエス……………」

「そ．．．。」

「そ?」

するとスバルはバリアジャケットとリボルバーナックルを装備し．．．

「そんな言い訳が通用するほど私はバカじゃな〜い!」

翔太郎に殴りかかる。

「うお〜い!」

かろうじて避ける翔太郎だが．．．

「待てえ〜!」

スバルは鬼の形相で翔太郎を追いかける。

「スバルううう〜! お前は〜!」

そんな翔太郎に無情にもリボルバーナックルが。

「どわあああああ!」

響き渡る翔太郎の悲鳴。

その後翔太郎は向こう側に綺麗なお花畑がある綺麗な川を渡りかけたか．．．。

かけなかったとか……。

ただ一つ確実なのは、ギンガの通信である映像をスバルが見て寸前の所で止まらなかったら、翔太郎は本当にその川を渡っていたことである。

その後。

「すみません！」

スバルが半べそで正座。

頭にはたんこぶがひとつ。

そして……。

「わかりやあいんだ。」

翔太郎が見下す。

ただし頭からは血がでて、身体はボロボロである。

1000中1000人が見ても明らかにわかる位に怒りを黒い、いや暗闇の笑顔に表す。

するとスバルが。

「だって……。」

「あ？」

「私……女っぽくないから……ふらつと誰かに翔太郎さんを捕られそうで……不安で……。」

スバルが涙目になる。

「スバル……。」

(……泣かせたくねえな。こいつだけは)

翔太郎はスバルの隣に座り、頭を撫でる。

「愛してくれる人は裏切らない。そして愛してくれた分その人をもっと愛してやる。……そうじゃなきゃハードボイルドとは言えねえな。」

「……え？」

「……だあくかあくらあ……。」

翔太郎はそっぽを向き、むず痒くしながら……。

「俺はお前を泣かせることは絶対にしないってことだ！ お前を絶対に裏切らないってことだ！ ……ああ！ もう！ わかつたか！」

「……翔太郎さん……。」

「異論は認めねえ！ いいな！」

翔太郎は完全に身体をそっぽに向ける。

「……………はい！ 翔太郎さん」

スバルは翔太郎に後ろから抱きつく。

それにより翔太郎は…………。

「お、おい！」

無論テンパる。

昨日あんなことがあったにも関わらず。

「翔太郎さん」

「んだよ？」

「だあ〜い好き」

スバルは顔をほんのり赤らめて翔太郎の頬に自分の頬を当てる。

「……………おう！」

翔太郎も悪くはないという表情である。

（フィリップ。俺はなんとかこの世界でやってける気がする。この

世界には俺を必要とし、俺を愛してくれてる大切な人がいる。今なら・・・おやつさんや照井の気もわかる気がする。お前も・・・大切な人を見つけて・・・戦っていつてくれ。互いに・・・大切な人と笑いあえる未来を信じて)

ちなみにこの日は互いに動き回ったり、心労で疲れたのか、死んだように熟睡した。

二人、特にスバルの顔は満面の笑みであった。

必然（前書き）

マンガ的には時系列的に一気に飛びます。

一応原作を知っておいた方がよいかと・・・。

我ながらつなぎのような気が・・・。

必然

「スバル……、これでどうだ？」

「……うん。大丈夫です。はあく、これででっつきた！」

二人は揃って出勤し、翔太郎はオフィスでスバルの書類を手伝っていた。

実はさっきの出勤時、翔太郎はスバルのことに關して根に持つ多くの男性局員に睨まれるも、逆に睨み返して黙らせた。

この一件は一気に広まり、それ以降翔太郎を敵対する局員が消えたことを翔太郎本人は知らなかったりする。

「っても、ほとんど俺がやったけどな。」

「あはははは。すみません。私デスクワークが苦手で……。」

（……まあ、人間だれも完璧じゃねえか。俺もそうだったからな。）

その後二人は書類仕事、主に七割近くを翔太郎がこなして昼休みになった。

昼休み。

「しっかし、制服つつのはな〜んか慣れねえな。」

食堂で翔太郎とスバルは二人で昼食をとりながら話す。

翔太郎は嫌々と自分の制服を見る。

「まあ、まあ。私も着てるんですし。我慢してください。後でご褒美あげますから。ねっ」

「じゃあ我慢しねえ。」

「ちよ、ちよつとお〜〜。」

スバルは半泣きで翔太郎を睨む。

ぷく〜〜、という可愛い効果音付きの。

「冗談だつーの。褒美は要らねえから、大丈夫だ。」

翔太郎はスバルの頭を撫でる。

「……………それならそうと言ってくれれば……………」

スバルは顔を赤らめる。

「ほんの意地悪だ。」

翔太郎は悪戯に笑う。

「……………もう。」

「……………へっ！ しっかし……。スバルといい、ギンガヤノ
ーヴェといい……………」

「？」

「一体どんな胃袋してんだ？」

実際スバルの Pasta の量は多少減ってはいるものの、まだ六人前近
く尋常な量ではなかった。

「そうですか？ いつもこんなもんですよ？」

「マジかよ……………。どんだけ食費がかんだ？」

「え〜と、ざっと言えば……………」

耳元で聞いた翔太郎は……………。

「……………はあ……………」

自分がちっぽけに見えたとか。

実際スバルの食費は翔太郎の月々の探偵の収入とほぼ同じであった。

「……………そうだ、スバル。確か今日は残業だよな？」

「え？ 残業というより夜勤ですね。翔太郎さんは先に帰ってて大

丈夫ですよ。」

「いいや。なるべくならお前に無理はさせたくねえな。俺も付き合
うぜ。」

「え？　で、でも……。」

「俺もお前が心配だからな。それにいざとなりゃあ、俺も一緒にい
たほうが何かといいだろうし、何より今の俺の仕事はお前のサポ
トなんだからな。嫌ならいいぜ？」

「いやいやいや、嫌じゃないです。……ありがとうございます」

二人は自覚がないものの桃色の雰囲気が漂い始める。

無論周囲からは浮いていた。

しかしその後二人は夜勤に入るも、結局アラームは鳴らず暇を持て
余す二人だったが、暇つぶしに翔太郎が過去のドーパント事件につ
いての話であつたという間に時間は過ぎていった。

後にノーヴェからの連絡までは。

救助隊の呼び出し帰りでご機嫌に街を歩くノーヴェ。

すると。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします。」

「！」

ノーヴェは声の元を見る。

そこには。

「貴方にいくつか伺いたい事と・・・、確かめさせて頂きたい事が・・・。」

翔太郎は以前の連続スリ殺人事件について語り終える。

パチパチ。

「すごおい。翔太郎さん、そんなに事件を解決してきたんですね。」

無論拍手するのはスバル。

二人きりしかいないため当然と言えば当然である。

翔太郎については過去であっても、他から見ればまるでドラマや小説の話である。

「でもなあ。これらは俺一人じゃ解決出来なかった。亜樹子や照井、風都の皆、・・・それに・・・相棒がいたからやれてきたことなんだ。」

「・・・翔太郎さん。」

「それにおやつさんは教えてくれた。Nobody's Perfect...、誰も完璧じゃないって。それでもそれを隠して戦う。それがハードボイルドだってな。」

「相棒・・・、フィリップって言う人と別れちゃって辛いですか？」

「・・・例え離れなれでも俺とあいつは永遠に相棒だ。少なくとも俺はそう思ってる。」

「・・・でも・・・。」

「あ？」

「・・・今でも一人じゃないですよ。私達がいまから・・・。」

「・・・そうだな。」

翔太郎はスバルの肩を持ち、抱き寄せる。

「俺は・・・一人じゃねえな。今は・・・少なくともお前がいるからな。」

「・・・はい。」

スバルも身体を完全に翔太郎に任せようとしたとき・・・。

プルルルル。

「「うおっ（きゃあ）！」「」

突如スバルのデバイス、待機状態のマツハキャリバーが鳴り出す。

「な、何だ？」

「ノーヴェからみたいですな。」

スバルは通信に出る。

モニターが現れ、そこにはノーヴェが映っていた。

「はい、スバルです。ノーヴェ、どうかした？」

「よう、ノーヴェ。」

翔太郎もモニターに顔を出す。

《よう、翔太郎。もしかしてスバルといいところだったか？》

「う、うっせえ！」

「え〜と、それで何、ノーヴェ？」

《ああ、悪い、スバル。ちょっと頼まれてくれ。喧嘩で負けて動けね》

「ええッ！？」

「はあ！？」

スバルと翔太郎は啞然とする。

《相手は例の襲撃犯。きつちりダメージブチ込んだし、蹴りついでにセンサーもくつつけた。今ならすぐに補足できる》

「襲撃犯って・・・、霸王って言う女の子か？」

《ああ。頼めるか？》

「おう。スバルはここにいてくれ。一応夜勤だからな。」

「う、うん。」

翔太郎は局を出るとスタッグフォンを頼りにハードボイルダーで走っていった。

その後翔太郎は疑うものの気絶しているイングウ・アルト、もとい彼女であった女の子を見つけた。

また変身魔法について知った翔太郎はかなりのリアクションを現したとか。

暴露（前書き）

タイトル通りにばれます。

誰かは・・・。

あの方です。

ちなみに今回も戦闘はありません。

楽しみにしている皆様、すいません。

家に帰ってきた翔太郎。

ノーヴェとは別々だったが翔太郎には玄関にスバルや自分のではない別の靴があるため、先に来ていることを確認した。

そして靴はもうひと組……。

気にしながら翔太郎は上がる。

「ただいまあ。」

すると歩いて来たのは……。

「お帰りなさい、翔太郎さん。」

「おお、ティアナ。久々だなあ。」

「翔太郎さんも元気そうで。それにドーパント事件も積極的に協力してくれて……。こっちも助かってます。」

スバルに呼ばれて来ていたティアナは笑顔で礼を言う。

「ああ、いや、大したことじゃねえぜ。元々は俺の専門だしな。それにこの街を泣かせるヤツは許せねえだけさ。」

イングヴァルトだった女の子を背負いながら翔太郎はティアナに宣

言する。

するとティアナが。

「ところで翔太郎さん？」

「何だ？」

「仕事でパートナーになったとは聞きましたけど何で翔太郎さんが当然のようにスバルの家に帰ってきてるんです？ しかもただいまって……。」

ギクツ。

「な〜んだ、そんなことか〜。簡単だよ。翔太郎さんは私といっ・
・、むぐっ!」

苦し紛れの翔太郎は”一緒に住んでいる”と言いかけるスバルの口を電光石化の勢いで塞いだ。

その動きの素早いこと……。

「いやいやいや、多分集まるんだったらスバルの家かな〜と思ってな……。ははははは、ドンピシャだったろ？ 伊達に探偵はしてなかったってことだ。ははははは。それに”ただいま”ってのはあれだ……。何だか家になると癖でな……。」

「？」

(……………やべえ〜)。

あくまで真顔の翔太郎だが、心の中では尋常でない発汗。

そんなことも知らず、うさんくさそうにティアナは翔太郎を見つめる。

そして。

「そ、そうですか。」

(つぶねえ〜〜。)

翔太郎は心の中で安堵の表情を浮かべる。

ティアナは半信半疑ながら翔太郎の背中の子に視線を移す。

「それよりも翔太郎さん……。」

「あ？ ああ。」

翔太郎は少女を背負ったまま寝室に向かう。

寝室に少女を寝かせる翔太郎。

すると。

「よう、翔太郎。」

「おう、ノーヴェ。やりあったんだって？ 大丈夫だったのか？」

「まあな。私もそれなりにストライクアーツやってるからな。受け身はとれる。大したことねえよ。」

「そっか。ならいいんだ。」

すると。

ノーヴェが寝ている少女の隣に入る。

「ノーヴェ？」

「気にしないでくれ。起きたときちょっと脅かしてやるっかと思っ
てな。」

「意地がわりいなあ。そこんとこ素直な姉貴達を見習ったらどうだ
？」

「う、うるせえ！」

「でっけえ声出すなよ。その子起きちまっぞ。」

「わ、やべっ。」

「ったく。じゃあまたな、ノーヴェ。」

「ああ。」

翔太郎は寢室を後にした。

「しっかし、変身魔法って……。やっぱり魔法ってのはなんでもありだよなあ。」

「ま、まあ……。」

リビングで翔太郎はティアナと会話をする。

スバルはキッチンで料理を作っている。

「そういえば翔太郎さん……。」

「ん？」

「スバルの秘書って大変じゃありません？」

「ちよ、ちよつとティア〜。」

スバルはキッチンから会話に参加しようとする。

「そうだった。ティアナに聞こうと思ってたんだが、何でこいつこんなに書類仕事が出来ねえんだ？ 何とか士長なんて偉そうな立場なのによあ。」

「そ、それはあ……。」

「お恥ずかしながら……。スバルは昔から机に向いてのことが苦手なんです。私も甘やかし過ぎました。以前仕事と一緒にたとき

もかなり私が代わりにやりましたから。まあ、人間だれしも得手不得手はありますからね。」

「まあな……。しかし甘やかしすぎはだめじゃねえのか？ お陰様で今俺がきついで。」

「す、すいません……。。」

ティアナは情けなさそうにする。

すると。

「そういえば翔太郎さんとスバルってどんな関係なんですか？ かなり親密な気がしますけど？」

ティアナは翔太郎がもっとも触れて欲しくない部分に話題を移す。

「そ、それはなあ……。。」

完全に形勢逆転である。

（やべえ。どうすっかなあ。多分こいつはスバルと違って頭がキレそうだからな。スバルを騙せることでも簡単にはれそうだ。）

「くしゅんー！」

スバルが突如くしゃみ。

するとスバルが爆弾発言を飛ばす。

「そういえばティアには言ってなかったっけ？ 私達、一つ屋根の下で暮らしてるんだよ」

現在季節は春である。

この家のリビングを除き。

このスバルの一言によりこの場のみが冬を通りこして氷河期になる。

そして約二名が硬直中。

「……………」

ティアナは単純にフリーズ中。

「……………」

翔太郎は右の顔面を押さえながら” やっちまった ” 感全開である。

「……………はい？」

「……………ああああああ……………」

聞き返すティアナと呆然とする翔太郎。

「だ・か・ら・翔太郎さんとは同居……………」

スバルは恥じらいながらこれでもかと顔を赤く……………」

「そ、それに、しょ、翔太郎さんとはす、す、すでに一夜を共に……………」

」。。

爆弾爆発。

「はあああああああ！？」

「スバルううううううう！」

ティアナと翔太郎の音が響く。

少女が起きなかったのは奇跡ではあるが。

「事実ですか？」

「あ、ああ。認めたくないが、ホントだ。事実俺の初めてが……俺の貞操が……。」

(なにかしら……。この色々と先を越された感は……。)

ティアナは妙な敗北感。

するとティアナは……。

「翔太郎さんは……。」

「あ？」

「スバルのことどう思っているんです？」

この話題になるとスバルもばれないように耳を傾ける。

「スバルについてはなあ……。」

ゴクッ。

無論これはスバルのつばを飲む音。

「短刀直入に言えば……。」

（バクバクバクバク！）

これもスバルの胸の音。

「……大……好きだ。ていうか……。」

翔太郎はむずがゆくしながら言う。

「？」

これは表情からわかるティアナのクエスチョン。

「愛……し……てる。少なくとも俺は……どわっ！」

翔太郎が言い終える前にスバルは弾丸のように飛びかかり押し倒し、自らの頬に翔太郎の頬をさすってくる。

「お、おい。スバル！」

「嬉し……い 翔太郎さ……ん！ 私もだああいい好きですよ

！ 愛してまああす」

ひたすら頬をさするスバルにたじろぐ翔太郎。

「スバル……、随分大胆ねえ……。」

それに顔を赤くしてまじまじと二人を眺めるティアナ。

ここまで大騒動を起こしながらもまだ少女は起きない。

~~~~~数分後~~~~~

「スバルっていつもあれなんですか？」

「ああ、いつもあれだ。しっかしさっきのは凄かったなあ。いつも急に襲いかかってくるから、お陰でこっちは心臓に悪いぜ。」

「そうみたいですな。」

（でもスバル、幸せそうね。）

何とかスバルをなだめ、キッチンに戻したたじたじな翔太郎と笑うティアナ。

ティアナは親友の幸せを感じ、さっきの妙な敗北感を振りきり自分も何だか幸福を感じていた。

するとティアナはスバルが料理に集中している間に翔太郎に寄り、耳元で小声で言う。

「翔太郎さん……。」

「あ？」

「スバルはあんななんですけど……、私の大切な友達です。スバルはきつと翔太郎さんという凄く幸せなんだと思います。だから……スバルのこと……、お願いします。必ず……幸せにしてあげてくださいね。」

「……おう。」

「じゃあ出来なかったら、覚悟してくださいね。」

ティアナは笑顔。

待機状態のクロスミラージユを構えながらだが。

「お、おう。」

（すげえ重圧だなあ。ゲンヤさんといいティアナといい、愛されるな。やってやるぜ。男に賭けてな！）

翔太郎は笑う。

その笑顔にはこの暖かな今を幸せに思いながらも、改めて必ずスバルを守り抜き、泣かせないという堅い誓いが込められていた。

## 対話（前書き）

今回は結構原作どおりでしたのでサクサクと書けました。

なので速攻な投稿になります。

後にアインハルトと翔太郎の回を書きたいと思います。

ヴィヴィオはともかくコロナやりオとの一対一の絡みは・・・難しいかも知れません。

## 対話

スバルの家の寝室。

そのベッドには小さな女の子が寝ていた。

そしてその女の子は起き……。

「！ ！？」

すると隣には。

「よう。やっと起きたか。」

隣にはノーヴェ。

「……………あの。……は……………？」

少女は状況を理解しようとする。

ちるじ。

コンコン。

「はい。」

「おはよう。ノーヴェ。」

「よう。ドッキリはうまくいったか？」

ドアからはティアナと翔太郎が現れる。

「まあまあだったな。」

ノーヴェはいたずらに笑う。

「それから……。」

「自称イングヴァルト。本名アインハルト・ストラトス。S t e ヒル  
デ魔法学院中等科1年生。」

「ごめんね。コインロッカーの荷物出させてもらったの。ちゃんと  
持ってきてあるから。」

「制服と学生証持ち歩いてっとはずいぶんとぼけた喧嘩屋だな。」

「またすつげえとぼけ方だな……。」

翔太郎が笑う。

「学校帰りだったんです。それにあんな所で倒れるなんて……。」

アインハルトが若干睨む。

すると。

「おはよ。おまたせ あさごはんです。」

エプロン姿のスバルが手に朝食を持って入ってきた。

翔太郎にウインクをして。

「おお ベーコンエッグ！」

ノーヴェが目を輝かせる。

「あと野菜スープね。」

( まあ、スバルの料理はうめえからわかるがな……。 )

翔太郎は心の中で納得する。

「あ……。はじめましてだね、アインハルト。スバル・ナカジマです。事情とか色々あると思うんだけど、まずは朝ごはんでも食べながら。お話聞かせてくれたら嬉しいな。」

五人はリビングで朝食を取り始める。

「んじゃ、一応説明しとくぞ。」

ノーヴェは説明を始める。

「ここはこいつ……。あたしの姉貴スバルの家。」

「うん。」

スバルは料理を盛り……。

「でその姉貴の親友で本局執務官。」

「ティアナ・ランスターです。」

ティアナは自分を自己紹介する。

「それと姉貴の秘書兼同居人をしてる……。」

「左翔太郎だ。つつても君と会うのは二度目だな、霸王さん。」

翔太郎はアインハルトに指鉄砲を向ける。

「貴方はまさか……仮面ライダー……さん？」

「おう。よろしくな。」

アインハルトは小さくお礼をする。

「お前を保護したのはこの三人。感謝しろよな。」

ノーヴェが付け足す。

「でもダメだよ、ノーヴェ。いくら同意の上だからってこんなちっちゃい子にひどい事しちゃ。」

「大人気ねえぞ、ノーヴェ。大人なら加減を覚えろよ。」

スバルと翔太郎が注意を促す。



「うつせえ！ こつちだつて思いつきりやられて、まだ全身痛てえんだぞ。」

ノーヴェは少し反発。

するとティアナがアインハルトに聞く。

「格闘家相手の連続襲撃犯があなたってというのは本当……？」

「……はい。」

アインハルトは小さく返事をする。

「……何か理由がありそうだな。」

翔太郎がつぶやく。

「大昔のベルカの戦争がこいつの中ではまだ終わってねえんだよ。」

「？」

ノーヴェの言葉に翔太郎は頭を傾げる。

それもそのはずである。

翔太郎はまだこの世界を理解しきっているわけではないからだ。

無論歴史も。

そして過去の事件や……。

スバル達が普通の人間でないことも。

（俺はまたこの世界についてなんも知らねえな。今後図書館にでも行くか……。）

翔太郎は自分の無知を悔いる。

引き続きノーヴェの話。

「んで自分の強さを知りたくて……。あとはなんだ、聖王と冥王をブツ飛ばしたいんだったか？」

スバルはフォークを進ませながら、ティアナと翔太郎は呆然と聞く。

するとアインハルトが閉じていた口を開く。

「最後のは……少し違います。」

アインハルトは拳を握る。

「古きベルカなどの王よりも霸王のこの身が強くなること……それを証明出来ればいいだけで。」

「聖王家や冥王家に恨みがあるわけではない？」

「はい。」

ティアナの質問にアインハルトは即答する。

すると。

「そう。ならよかった。」

スバルは微笑む。

アインハルトは啞然とするも翔太郎はそんなスバルを誇らしく思い笑顔になる。

（スバル……。やっぱお前はすげえな。）

そんなことを他のメンバーは知らず。

「スバルはね、そのふたりと仲良しだから。」

「そうなの。」

スバルはニコツと笑う。

「ああ、冷めちゃうから良かったら食べて。」

「……はい。」

翔太郎にはアインハルトの肩の荷が少し降りた気がした。

「あとで近くの署に一緒に行きましょ。被害届は出てないって話だし、もう路上で喧嘩とかはしないって約束してくれたらすぐに帰れるはずだから。」

「あの・・・ティアナ。今回の事については先に手エ出したのあたしなんだ。」

「あら。」

「だからあたしも一緒に行く。喧嘩両成敗ってやつにしてみらう。」

ノーヴェは堂々と言う。

その眼には迷いはなく、ひたすら一直線だった。

そんなノーヴェを三人は誇らしげに笑う。

「ノーヴェ。よくわからねえが・・・、意外と素直でいいやつだな。」

翔太郎はノーヴェに笑いかける。

ノーヴェはなんだか照れ臭そうである。

「う、うっせ。お前もそれでいいな。」

「はい。・・・ありがとうございます。」

アインハルトはフォークを進め始める。

その後は五人は近くの湾岸第六警防署に向かうこととなった。

署内。

ノーヴェとアインハルトは受付、他の三人はちょっと離れた椅子に座っていた。

すると翔太郎が立ち上がる。

「悪いが俺はこつから別行動させてもらつぜ。」

「えっ？」

スバルとティアナは驚く。

「なんで？ 翔太郎さん？」

スバルが尋ねる。

「俺はこの世界について全くと言って良いほどなんも知らねえ。知つとかねえと何だかかやの外になるからちよつと勉強にな。夕飯までには戻る。」

翔太郎が駐輪場に向かって歩きかけたとき。

「え〜〜〜、翔太郎さんもいようよ〜〜〜。」

スバルが翔太郎の手を掴んで拒む。

すると。

「こら、スバル。翔太郎さんだつて一人の時間は必要よ。行かせてあげなさいよ。」

「む〜〜。」

スバルはふくめっ面であつたが・・・。

「わかりました。じゃあ夕飯には帰ってきてくださいね。」

「おう。」

「後・・・。」

「?」

「・・・浮気しないでくださいよ。」

「・・・ったく。」

呆れ半分に翔太郎はスバルに歩み寄り頭を撫でる。

「・・・お前なあ、俺を信じてねえのか?」

「えっ? いや・・・信じて・・・ますけど・・・。」

「お前が信じてる俺を俺自信が裏切るわけねえだろ。」

「・・・はい。行ってらっしゃい。」

頬をほんのり赤らめながらスバルは翔太郎を見送る。  
そして翔太郎はポイルダーで走り去っていった。

爆音が去っていった後。

「・・・あなた達、いつそ結婚しちゃったら？」

ティアナがジト目で言う。

「け、けけけ結婚？ そんな、まだ早いよ。・・・うん。でも・・・翔太郎さんがその気なら・・・。」

桃色の妄想に入るスバル。

「はいはい。」

ティアナはそんなスバルを見てお腹一杯であった。

少しの待ち時間。

「そういえばあの方・・・。」

「あの方？」

アインハルトは喋りだす。

「あの左って方・・・・・・・・、何者なんですか？」

「ああ、翔太郎のことが。」

「はい。」

「あいつは自分自身が言う通り、仮面ライダー……っなんだと。ちよつとしたことでミッドに来てな。あいつは一つの街を愛して守り抜こうなんてでっかいことをしたやつなんだ。今じゃあ来たにも関わらず、この街のために頑張ってる。正直最初聞いたときは、何だこいつと思っただけだな。でもアイツは強いし、行動や言葉には一切の迷いが無い。そこら辺はちよつとは尊敬してっかな。近いうち、あたしの義兄になるだろうしな。」

「……守る……強さ。」

「ああ。街を守るために戦う。それが以前の街に街の人々から名付けられた仮面ライダーの名前の意味なんだっけ。」

「……。」

（……守りたいから戦う……。守るための強さ……。あの人となら……きつと……。）

アインハルトは翔太郎の心の強さ、仮面ライダーとしての強さに何かを感じた。

その後アインハルトとノーヴェの用は済み、アインハルトを学校に送った後、ノーヴェ達三人はヴィヴィオとの待ち時間まで暇を潰すこととなった。



こうしている間にも翔太郎は図書館においてミッドチルダの暗黒の歴史を知るのだった。

## 激突（前書き）

聖王教会のあの寡黙な二人が初登場します。

あとこれを読む前に「強化」を読み返したほうがいいかも知れませ  
ん。

何だか本格的にアインハルトにあるフラグが・・・。

早くvivid四巻出ないですかね〜。

今回も限定、通常どっちも買います。

しかしまずは明日のゴーカイセルラーです。

## 激突

図書館からの帰りでハードボイルダーを走らせながら翔太郎は考えにふけていた。

特に行き先は決めていないようである。

（古代ベルカの戦争……。三人の王か……。やっぱ世界が違えども人間考えることは皆同じか……。それに……。JS事件か……。4年前にあんなことがあったにも関わらずこの街には笑顔があふれてる……。二度と無くしちゃいけねえな）

そんなことを考えながらもハードボイルダーは路上を走り続ける。

Stヒルデ魔法学院中等部教室。

（左……。翔太郎さん……。あの人なら……。分かるかもしれない。……。私の求める……。強さが）

アインハルトは考えにふけていた。

その教室内、アインハルトの後部の席では……。

（仮面ライダーかあ。何とかまた会えないかなあ）

「……。はあ~~~~」。

そこにいたのは以前カメレオンとティーレックスに襲われた際ジョーカーに助けられた兄弟の兄が机のため息を吐いていた。  
すると。

「おい、サッカーやろうぜえ。早く来いよ〜。」

彼の友人らしき少年達はその少年を呼ぶ。

「あ、ちょっと待って。僕も行くよあ〜。」

「行こうぜえ。来人お！」

「待ってえ〜。」

その少年、右風来人は友人の後を追って廊下を走っていった。

「へえ〜、ストライクアーツしてる子かあ〜。」

「うん。ノーヴェが紹介してくれるらしいんだ。いつもの喫茶店で待ち合わせみたいんだけど・・・。」

「楽しみだね。」

リオ、ヴィヴィオ、コロナは下校中に会話をする。

「でも格闘技っていったら仮面ライダーもそうなのかなあ？」

リオがふと言い出す。

「うーん。どうなんだろー」。 「

でもなんで？」

ヴィヴィオとコロナが聞く。

「いやあー、一度手合わせしてみたいなーって。 「

「リオ……。 「

リオの言葉に二人は苦笑い。

「冗談だよー」。 「

こんな他愛もない会話をしながら、三人は喫茶店に向かった。

途中ヴィヴィオはハードボイルダーに乗る翔太郎とすれ違っても互いに気付かずに去っていった。

「二人ともせっかくの休暇だろ？ 別にこっちに付き合わなくてもいいのに。 「

「あはは。 「

「アインハルトの事も気になるしね。」

「そうそう。」

スバルは頼んでいたトロピカルジュースを吸う。

待ち合わせの喫茶店で相変わらずの仏張面のノーヴェとスバル、ティアナはお茶を楽しんでいた。

三人……。

否。

「まーそれはありがたくはあるけど。問題はさ……、なんでお前らまで揃ってんのかってことだ！」

事実その場にはギンガ以外のナカジマ家の姉妹達、更には聖王教会に在るはずのデイド、オットーまでいるためである。

「え、別にいいじゃないっすか。」

「時代を超えた聖王と霸王の出会いなんてロマンチックだよ。」

サンドイッチを食べるウィンディにコップを傾けるディエチ。

「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし……。」

「護衛としては当然。」

やはり寡黙ながらもヴィヴィオに過保護なデイドとオットー。

「すまんなノーヴェ。姉も一応止めたのだが……。」

「うっ。」

チンクの謝りにはノーヴェも思わず黙る。

「ま 見学自体はかまわね けど、余計なチャチャは入れんなよ？  
ヴィヴィオもインハルトもお前らと違って繊細なんだからよ。」

「は い！」

呆れるチンクを除いた姉妹らしいチームワーク。

あの寡黙な二人に限ってはサムズアップである。

「そういえば……スバル……。」

「何？ デイエチ？」

「翔太郎さんとはどこまでいったの？」

「え？」

ティアナ以外の視線が一気にスバルに集まり、ややたじろぐ。

事実翔太郎のことは以前イクスのお見舞いに行った際、ウエンディが二人やセインにも言いふらしていた。

そのためデイド、オットーの視線まで集まる。

ノーヴェも介入した六人からの視線はなかなかの迫力である。

「えっと、……実は……。」

再びスバルの爆弾が投下され……。

「……………おおおおお……！」

「気持ち良かったツスか？」

「う、うん。」

「どこら辺が？」

「か、身体を密着しながら動いたところかな……。」

「キ、キスってどんな感覚だ？」

「……何か身体が熱る感じ……かな？」

「む、男は胸が大きいめのほうが好きと言っていたか？」

「えっと……わからないけど、翔太郎さんはわ、私の胸好きだっ……。」

次々と聞いてくる妹達。

どんどんと顔が赤くなるスバル。



ティアナとデイド、オットーは興味津々に聞き続ける。

それぞれがそれぞれの反応を示し、さらに翔太郎にとって被害（？）が拡大した。

とりあえずその場に現れたちびっこ三人とアインハルトがやってきたところにはこの話題は一旦離れたが、その際ウィンディ以外やたら顔が赤いことを突っ込まれるも、大人の閃きによってその場を乗りきった。

しかしそんなことをちびっこ三人とアインハルトは知らない。

無論翔太郎も。

「ふあっ、くしょおおおん！」

ハードボイルダーに乗りながら翔太郎はくしゃみ。

理由など知るよしもなく……。

（風邪ひいたか？ 気いつけねえと）

すると。

「ん？」

翔太郎は空から何かが飛んでくることに気づく。

バットショットが飛んできたのだ。

基本スタッグフォンとスパイダーショック以外はミッドチルダに飛ばしドーパントの発見に使っている。

翔太郎にはこの意味が分かった。

つまりは……。

「ドーパント！」

バットショットは案内するかのようにはードボイルダーを先導し始める。

「よし、行くぜ！」

翔太郎はアクセルを捻り速度を高めて走り出した。

「……そういえばノーヴェさん……。」

「ん？」

トレーニングウェアに着替えながらアインハルトはノーヴェに聞いた。

「翔太郎さんは何処へ？」

「ああ。翔太郎ならちよつと野暮用でな。何かアイツに用なのか？」

「……………いえ……………ただ……………」

「ただ？」

「……………あの人には……………大切な物を……………大切な存在を守り抜ける力があります……………だからあの人からならわかるかもしれないんです……………私の求める強さが……………」

「お前の求める強さ……………か。でも実際アイツからなら知れるかもな。話だけでもアイツ程何かを背負って戦うヤツはそんなにいない。もしかしたらもしかするかもな……………」

そんな会話の中、アインハルトはただただトレーニングウェアを着続ける。

「おい、なんなんだよ……………」

路地裏でバードドーパントに襲われているのはあの少年、右風来人。

ちよつと下校帰りであった。

すると来人は……………。

「……………うおおおおおー！」

バードに生身で突っ込む。

しかし生身の人間、しかも子供がドーパントに叶うはずがなく。

「がああああ！」

バードはうめき声を上げ来人を突き飛ばし、来人は壁に叩き付けられる。

「っ痛っ！」

そして来人は脇腹を抑えながら横たわる。

バードは歩み寄る。

(弱い。僕は。……どうしようもなく……無力だ)

そしてバードは爪を立てて襲いかかる。

その時。

来人が倒れる壁を突き破り一台のバイクがバードを吹き飛ばす。

「ざあああああ！」

そのバイクの男は降りてヘルメットをはずし……。

「させねえぜ。ドーパント！」

その男、左翔太郎は左の人差し指をバードに向ける。

「だ……れ……。」

痛む身体を起こしながら来人は立とうとする。

翔太郎は腰にロストドライバーを付ける。

「大丈夫だ。じっとしてな。」

『ジョーカー!』

左手でドライバーにメモリを装填し展開と同時に右手を開く。

「変身!」

『ジョーカー!』

翔太郎は風に覆われる。

「変……身?」

来人は目を覆いながら、その言葉を疑う。

そして一瞬で翔太郎はジョーカーに変身。

来人は目を丸くさせる。

「仮面……ライダー……。貴方が……。」

「また会ったな。坊主。左翔太郎……。仮面ライダージョーカーだ。」

「右風……、来人です。」

（来人……。これもおやつさんの性か……。それとも偶然か）

翔太郎は何故か不思議に思えた。

来人とは事実彼の相棒であった少年、フィリップの本名であるからであった。

「来人……。か。いい名前だな。じゃあこちら辺にして……。」

ジョーカーは再び左の人差し指をバードに向ける。

「さあ、……お前の罪を数える！」

同時刻。

区民センター内スポーツコートにはトレーニングウェアのヴィヴィオとアインハルトが向き合う。

「じゃあアインハルトさん。よろしくおねがいします！」

「はい。」

二人は向き合う。

アインハルトの足元にはベルカ式を示すような三角の魔法陣が現れ、

ヴィヴィオは少々興奮。

「んじゃスパーリング4分1ラウンド。射撃砲と拘束はナシの格闘オンリーな。レディ・・・ゴー！」

ヴィヴィオとアインハルトの初めての激突が始まった。

「行くぜ！」

「ざああああああ！」

偶然にも別場所のノーヴェの掛け声と同時にジョーカーとバードも互いにぶつかり合うために走り出す。

二方面で鮮烈、そして始まりの二つの戦いが始まった。

**激突（後書き）**

今回登場した右風来人くん、名前からピンとくる方もいらっしゃるはず。

ちょっとしたサプライズに。

オリキャラは極力出しませんので。



## 師弟（前書き）

続きです。

原作で言えば六話の終盤です。

来人については直ぐ様投稿します。

今回はあとがきが少し長いです。

書くためにやっぱりコミックスを見ますが・・・。

藤真先生、絵が神！

## 師弟

「うおりゃあああ！」

ジョーカーの前蹴り。

しかしバードは避けて爪で切り裂く。

「ぐっ！」

そしてバードはそのまま爪で縦、横に切り裂き……。

「うおっ、つつう！」

突き。

「うおおおおお！」

ジョーカーは弾き飛ばされる。

「いってえな。んなろお！」

ジョーカーは立ち上がる。

するとバードは襲いかかる。

「そう何度も……。」

するとジョーカーはオーバーヘッドキックの要領で避け、爪先で蹴る。

「させつか!」

「ざああああああ!」

バードは蹴り飛ばされ、地面に叩き付けられる。

「よっしゃあ。次はこいつだ。」

ジョーカーは右手を握る。

右手に魔法陣が現れ、右手に炎が纏われる。

するとバードはそれに飛び、羽を放つ。

「つぶねえ・・・なつと!」

ジョーカーは飛び、炎を纏った右拳で殴り・・・。

「たああああああ!」

「しゃあああああ。」

バードは地面に叩き付けられる。

バードは立ち上がろうとするが・・・。

「・・・が。」

バードは倒れる。

ジヨーカーは来人による。

「大丈夫か？」

「はい。あの……あれは……。」

「地球の記憶の怪物、ドーパントだ。」

「ドーパント？」

「ああ。何故がこの街にこいつらの元みてえのがばら蒔かれてな。しかも自我無しに暴れさせるとんでもなくひでえのがな。」

「そんな……。あの左さんは……。」

すると。

「ぎあああああ！」

バードは起きると同時にジヨーカーに襲いかかり……。

「うおおおおお！」

ジヨーカーは捕まえられたままバードによって空に連れて行かれた。

「あっ！ ちょ、ちょっとおおお！」

来人はバードの後を追い走りだす。

一方ヴィヴィオとアインハルトはスポーツコート内でぶつかりあつ。

ヴィヴィオのアップパーをアインハルトは両手で受ける。

驚くティアナを除き他の面々は興奮。そのままヴィヴィオのラッシ  
ユ。

「ヴィ・・・、ヴィヴィオって変身前でもけっこう強い？」

「練習頑張ってるからねえ。」

ぶつかり合う両者を驚きながら見物するのはティアナ

そしてスバル。

そしてヴィヴィオの蹴りもアインハルトは軽々と避ける。

（まっすぐな技・・・。きつとまっすぐな心・・・。だけどこの子  
は・・・、だからこの子は・・・）

ヴィヴィオのアップパーをアインハルトは下に避け・・・。

（私の戦うべき王ではないし・・・。）

アインハルトの掌低がヴィヴィオの腹部に放たれ、弾き飛ばされる。

さいわいデイドとオットーが受け止める。

ヴィヴィオはアインハルトに視線を向け……

「す……」

(すごいっ！)

満面の笑みを表す。

すると

(私とは違う)

アインハルトは振り向く。

「お手合わせ……ありがとうございます。」

「あの……、あのっ！ すいません。私、何か失礼を……」  
「？」

ヴィヴィオは起き上がる。

「いいえ。」

「じゃ、じゃあ、あの、わたし……、弱すぎました？」

「いえ。……趣味と遊びの範囲内でしたら充分すぎるほどに。」

アインハルトの言葉にヴィヴィオは声を失う。

「申し訳ありません。私の身勝手です。」

「あのっ！ すみません……。いまのスパーが不真面目に感じたなら謝ります！ 今度は真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか？ 今日じゃなくてもいいです！ 明日でも！ 来週でも！」

アインハルトはちらつとノーヴェを見る。

「あー、そんじゃまあ……。来週またやつか？ 今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ。」

ノーヴェは提案をする。

「ああ、そりゃいいッスねえ。」

「ふたりの試合楽しみだ。」

ウエンディとディエチがフォロー。

「はい。」

リオが元気よく返事をする。  
すると。

「……わかりました。時間と場所はおまかせします。」

「ありがとうございます！」

アインハルトの背中にヴィヴィオは頭を下げた。

一方。

「うおおおおお！」

空を行く二つの人影。

ジョーカーとバードである。

「いい加減に・・・しやがれえ！」

ジョーカーがバードを殴る。

すると二人は別れて工場跡地に落ちる。

「どわあああああ！」

両者とも不時着。

「つてえな。・・・んなろお！」

「じゃあああああ！」

腰をさするジョーカーとバードであった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・。」



その直後に来人と到着。

「そんじゃ改めて。」

ジョーカーはバードに接近し拳を顔面に叩き込みそのまま腹部にラッシュをかける。

「どりゃああああ！ うおおおおお・・・」

「しゃあああああ！」

そして・・・。

「そりゃああああ！」

後ろ回し蹴りを叩き込み、バードを吹き飛ばす。

「そんじゃ決めるぜ。」

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「ライダーキック！」

そして跳躍しエネルギーを纏った右足で飛び蹴り。

「そりゃああああ！」

「じゃああああ！」

バードは身体にプラズマを走らせながら吹き飛び、爆発。

現れたのは……。

「何？」

「カラス？」

カラスであった。

そのカラスは何もなかったかのように飛び去っていった。

「あの……、あれって……。」

来人は変身を解いた翔太郎に近寄る。

「あれについては俺も前に一回見たことがある。」

それはかつてのケツアルコアトルズの件であった。

複製したメモリにより野鳥園の鳥の一匹が無理矢理ドーパントにされて人を襲った。

「あの左さんは何で戦うんですか？　そもそも仮面ライダーって……。」

「それについてはちと長くなるぜ。時間大丈夫か？」

「はい。」

翔太郎は大雑把に今までの出来事について話した。

~~~~~数分後~~~~~

「……それでこの街に……。」

「わりいな。色々で大雑把で……。だがな……。俺はこの街で仮面ライダーを名乗った。だから今はこの街のために戦う一人の仮面ライダーだ。理由なんざそれぐらいだ。」

「……そんな理由で……。」

「大切な物のためなら理由なしに孤独になろうが戦う。それがハード……ボイルドだ。」

「ハード……ボイルド？」

「ああ。」

翔太郎は人差し指を来人に向ける。

「……。」

(強いなあ、この人は。身体も……、心も。僕にないものを全部持つてる。僕もこんな人に……うん！)

来人は決心した。

「翔太郎さん！ 僕を弟子にしてください！」

「何？」

「僕は自分一人じゃ何もできません。でも翔太郎さんは一人でも何でもできるし、強い。」

「……俺は強くなんかねえ。ただ一人で踏ん張ってるだけだ。」

「……じゃあその踏ん張り方を僕に教えて下さい！」

(……あの頃と逆だな)

翔太郎は思い出した。

十数年前のあの日。

スパイダードーパントに勇猛果敢に立ち向かう莊吉に憧れを抱いた日。

そして

後に弟子入りした自分を。

だから今の来人の気持ちや深く理解できた。

「……とりあえずは親御さんが心配してんだろ。送るぜ。」

「……はい。」

いつの間にかやって来たハードボイルダーに二人は乗り込み、その場を走り去った。

所変わってヴィヴィオ達。

アインハルトはノーヴェ達が送ることになり……。

(悪い、ヴィヴィオ。気い悪くしないでやってくれ)

(全然！ わたしの方が「ごめんなさい」だから！)

ノーヴェとヴィヴィオは念話で話す。

立ち去るアインハルトをヴィヴィオは切なそうに見送っていた。

料亭に入ろうとしたアインハルト、ノーヴェ、スバル、ティアナ。

すると彼女らは後ろから聞こえた覚えのある爆音で振り向く。

「翔太郎さん」

やたらテンションが上がったのはスバル。

「ふじ。」

そこにはハードボイルダーに乗った翔太郎と……。

「翔太郎さん、その子は？」

ティアナが聞く。

「ああ、こいつは……。」

「右風来人です。えつと……。」

「俺の弟子だ。」

「……え？」

翔太郎とアインハルト以外が驚くが、もっとも反応が大きいのは来人である。

「え……あの……。」

「俺の弟子になりてえんだろ？ 理由を聞くなんざ野暮なことはいねえ。男の仕事の八割は決断。後はオマケみたいなもんだ。とりあえず俺がお前に最初に教えることだ。覚えとけよ。」

「は、はい！」

来人はメモ帳に記入する。

そんな来人を翔太郎は微笑ましく見る。

「そつだ翔太郎。お前も夕飯どうだ。来人……だっけ？ お前もどうだ？」

ノーヴェが店に親指を向ける。

「あゝゝゝ、でもよお……。」「
すると。」

「……。お願いします。翔太郎さん。私も貴方に聞きたいことが・・
」

今度はアインハルトが誘う。

「あれ？ ストラトスさん？」

来人は驚く。

「こんばんは。右風さん。」「

一応あまり会話はないが二人はクラスメイトである。

「こ、こんばんは。」「

あまり会話をしないアインハルトに挨拶され来人は若干困惑しながらも挨拶を返す。

「お、知り合いか。じゃあ邪魔すつかな……。なあ来人？」

「は、はい！」「

駐輪場から帰ってきた二人を含めた六人は料亭内に入っていった。

師弟（後書き）

そういえば今日のゴーカイ&amp;オーズ。

シルバー向上長い！

でも意外と頭がキレた。

なかなか好きですね。

オーズは後藤さんバース襲名。

久々のバース回&amp;無双回でした。

グリード三体追い払うとか・・・。

バース・デイやたら強いような気が・・・。

ライオン帰ってきたからラトラーター復活？

来週は休み。

寂しい・・・。

話が変わってなのは関係。

冬のゲーム良いですね。ヒロインの二人なかなか可愛いですよ。

自分はどっちも捨てがたいですが、どちらかというと眠た目の方が好きですかね。

限定版に二人の水着の抱き枕かなんかがついてるみたいなんですけど・・・。

何でリリカルのキャラは皆スタイルが異様に良いのか・・・。
謎ですね。

まあすんばらしいですが・・・。

弟子詳細（前書き）

連続投稿ですがキャラ説明です。

ライダー含め多分新しいキャラが出たさいにはこんなふうにやっ
ていきます。

ちなみに彼は今は変身させません。

今は……。

弟子詳細

右風みぎかぜ 来人らいと

年齢：13（変身後は十代後半）

身長：平均より若干高め（変身後は170cm）

体重：平均（変身後は50kg）

目の色：緑

髪の色：黒

性格：活発で勇敢

魔力ランク：A

能力：変身魔法と風の魔力変換

趣味：格闘技、スポーツ、ハーモニカ

プロフィール：セヒルデ・中等部の一年生。アインハルトとはクラスメイトだがあまり会話がなかった。蹴り主体の格闘技と特に足を使ったスポーツが得意で部活には入っていないが、しょっちゅう助っ人として借りだされている。成績は上の下。飯面ライダーとしてだけではなく「男」としての翔太郎に憧れを抱き弟子入り。探偵やハードボイルドについて学び始める。

食事（前書き）

漫画で言う六話終了です。

ほのぼの系ですかね。

ゲオでWの12巻とA t e o zを借りて見たら改めてW神と実感しました。

そしてジョーカーカッコいい！

エターナルもカッコいい！

二つともカッコいい！

食事

料亭で食事をする六人。

「え？ ストラトスさんって霸王イングヴァルトの子孫だったんですか？」

「はい。」

箸を止め驚く来人。

実際アインハルトはあまり人と喋らない。

そのためクラスメイトの来人が知らなくても当然のことである。

すると。

「アインハルト・・・同じ歳の子とは仲良くしねえと駄目だぞ。来人もだ。苦手だろうが立ち向かうのもハードボイルドには大切だぜ。」

翔太郎は二人を撫でて注意する。

「「はい。（師匠！）」」

「そうだ、アインハルト。ノーヴェに聞いたんだが俺になんか用事があったんだってな。何だ？」

翔太郎はさっきアインハルトが少し席を外している間に、さっきの
ヴィヴィオとの手合わせの前にノーヴェに質問していたことをノー
ヴェから聞いていた。

「……あの……、その……。」

翔太郎の予想外の言動にアインハルトは途端にパニックる。

「言つとくが師匠の弟子は俺だけだかな。」

来人がアインハルトに詰め寄る。

アインハルトは若干たじろぐ。

すると。

コッソ。

翔太郎が軽く来人の頭をぶつ。

「おい、駄目だろ、来人。レディーには優しくしねえと……。」

「師匠……。」

「アインハルト、言ってみろ。」

翔太郎と来人はアインハルトに視線を移す。

アインハルトは若干ひるむも……。」

「……翔太郎さん。……あなたは以前いた街でも仮面ライダーとして戦い街を守ったって聞きました。」

「あ、ああ。それがどうした？」

「……どうすればそこまで強くなれるんですか？ どうすればそこまで強い意思を持てるんですか。」

「……。。。」

翔太郎は一旦黙る。

しかしすぐに口を開ける。

「……俺は……強くなかねえ。」

「でも……。」

「……俺はカッコつけてるだけだ。ただ踏ん張ってるだけだ。だがなあ……そうしなけりゃ、俺は何も出来ねえ。なんの役にも立てねえ。」

「……。。。」

アインハルトは黙る。

他の面々も空気を読んだのか、ふと静まる。

「……だから……俺は俺自身を賭けて俺を……仮面ライダーを貫き通す。……守りてえものがあるからな。だから俺は戦

えるし、戦えた。今も・・・これからもな。」

「・・・・・・・・私にも・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・守りたいものを守れるでしょうか？」

「・・・・・・・・それは俺にはわからねえ。・・・でもな、・・・自分に嘘はついちゃいけねえ。大切なもののためならば、傷だらけになっても走り続ける。・・・もし転んだときは・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

翔太郎はアインハルトの頭を撫でる。

「・・・・・・・・俺が起こしてやるからよ。」

翔太郎はアインハルトに笑顔を返す。

「・・・・・・・・。」

(走り続けること・・・。見つかるかもしれない。私の求める強さを)

「・・・・・・・・ありがとうございます。・・・あの・・・・・・・・。」

アインハルトはまだ何かを言いたそうである。

「何だ？」

「……また相談に……のつてくれますか……。」

「はっ！ 愚問だぜ。いつでも来な。」

「……はい。」

アインハルトは少し顔が晴れる。

すると。

「翔太郎……。お前まさかそっちの趣味はないよな……。」

ノーヴェが膝をつつきながら聞いてきた。

「んな！ んなわけねえだろうが！」

「そそそそうだよ。翔太郎さんは……、私に夢中なんだから！」

スバルが立って大声を出す。

無論その場の五人だけでなく、他の客達もフリーズする。

そしてスバルは周囲の視線を一気に浴びる。

「す……すいません……。」

スバルは静かに座る。

「スバル……。」

「お前なあ……。」

「言つてて恥ずかしくねーのか？」

「うー！」

ティアナ、翔太郎、ノーヴェの視線がスバルに突き刺さる。

はたでは苦笑いする来人とあたふたするアインハルト。

「……ちよつ、ちよつと恥ずかしかつたかなあ……。」

徐々に声が小さくなっていくと同時に顔が赤くなっていくスバル。

すると。

「そ、そもそも翔太郎さんがいけないんですよ！」

まさかの翔太郎に逆ギレ。

「はあ！？　なんで俺が原因になんだよ！？」

翔太郎も思わず声を荒げる。

しかしはたから見れば痴話喧嘩であり、啞然とする二人の子どもを除き他ティアナ、ノーヴェは笑う。

そんなこんなで食事は進み、終わった。

かなりの量をスバルとノーヴェが食べつくしたが……。

その後ティアナはアインハルト、翔太郎は来人、スバルはノーヴェを送りそれぞれの家に帰った。

「今日は何だか懐かしい感覚を覚えた。多分十数年前、おやつさんもこんな気持ちであったのだろうか。一人は何かを掴むために目の前を一生懸命に走り、一人はまだ見えない目標にあがいている。俺にはどこまでできるかはわからないが、それぞれの道を歩む二人を支えていけるなら俺は一人でも踏ん張っていきたい」

リビングで打ったデータをスタックフォンに保存する寝間着の翔太郎。

「パソコン……、出来んならタイプライターが欲しいな。なんかじっくりこねえ。」

事実翔太郎は風都にいた頃は事件解決後はタイプライターで報告書を書いていた。

「翔太郎さん。何か図書館に分かりましたか？」

「あ、ああ。」

パジャマ姿のスバルが翔太郎の後ろから抱きつくが、もはや翔太郎は驚いていない。

属にいう慣れである。

「なあ、スバル。」S事件って分かるか？」

「・・・え？」

スバルの顔が暗くなる。

「4年前に街で起きた大規模テロらしいんだが、すごいよな、この街の人達は。あんな暗いことがあっても笑ってる。何かもつと仮面ライダーとして頑張ろうって思ったぜ。」

「・・・そう・・・ですね。」

「どうかしたか？」

翔太郎は暗くなるスバルの顔を覗き込む。

するとスバルは笑顔になり・・・。

「・・・いえ何でもありません！ そうだ翔太郎さん！ 今日は久々に一夜を過ごしましょ。」

「んな！？ こらスバル、明日仕事だぞ！」

「ふふふ、冗談ですよ もう翔太郎さんのエッチ。」

「な！？ こらスバルうううう！」

「えへへへ〜〜〜」

二人の鬼ごっこが始まる。

しかしスバルの笑顔は心からの純粹なものでなく、無理矢理なものであった。

食事（後書き）

次からはリベンジまでの一週間です。

来人とアインハルトのかいあって話にバリエーションが増える。

・・・かも。

早朝（前書き）

今回はヴィヴィオと来人君を絡ませてみました。

戦闘回ではありません。

次回はやってみたかった話パート1です。

早朝

ヴィヴィオとインハルトがぶつかりあった翌日早朝。

トレーニングウェアのヴィヴィオはいつものコースを走っていた。

（私のストライクアーツってお遊びなのかなあ〜。）

考えにふけるヴィヴィオ。

そのままヴィヴィオはいつものコースの公園に向けて走り出す。

初めて翔太郎とあったあの公園である。

公園に着くヴィヴィオ。

そこには。

「よっ！ ほっ！ せいっ！」

上下がジャージの来人が回し蹴り放っていた。

（師匠の蹴りはもっと鋭かった。僕もあれぐらいに……ん？）

すると来人はヴィヴィオに気づく。

「あ、おはようございます。」

ヴィヴィオが頭を下げて挨拶をする。

「お、おはようございます。」

来人も挨拶を返すが、こんな時間に女の子が一人でいることに少し信じがたいようだ。

「すごいですね、その蹴り！」

「あ・・・、いや、大したことないよ。僕の目指す人に比べたら。

君は？ こんな時間に君みたいな女の子が走ってるなんて珍しいね。」

「い、いえ。私一応ストライクアーツをやつてて・・・。このランニングも日課なんです。あ・・・あなたは？」

「へえ〜〜。そうだった。僕も今日からコースを変えたんだった。それでいい公園があったからつい・・・。」

「・・・そういえば目指す人って・・・。」

「俺の師匠。昨日なつたばっかだけどね。」

来人は顔をタオルで拭く。

「へえ〜〜。私にも師匠みたいな人がいるんです。」

「へえ〜。なんか似てるね、僕達。」

「はい」

ヴィヴィオは笑顔になる。

すると。

「……君、なんか悩みでもあるの？」

来人が聞く。

「え？」

「いやね、なんか顔が晴れないような気がして……。もしよければ相談に乗るよ。力になれるかはわからないけど、それなりにふっきれるかもしれないし。」

来人はふと働いた自分の第六感を不思議に思いながらも、ヴィヴィオに聞いた。

「……でも……。」

ヴィヴィオはうなだれる。

しかし。

「じゃあ……大丈夫ですか？」

ヴィヴィオは話すことを決めた。

「うん。」

来人は返事を返す。

ヴィヴィオは話し始める。

昨日のインハルトとのぶつかいあいを。

無論匿名であるため、来人はその相手がインハルトとは知らない。

ちなみに翔太郎が昨日ノーヴェから聞いていた話しも匿名であったため、翔太郎と来人はインハルトが組み手を行った相手がヴィヴィオであることはわかっていない。

~~~~~数分後~~~~~

「……そんなことがあったんだあ。」

「……はい。……私のせいでその人は失望しちゃったんです。」

二人は黙る。

しかし先に口を開いたのは来人であった。

「……なんか僕の知ってる子に似てるね。」

「……………え？」

「僕の知り合いは自分を見つげるために頑張ってる。君も答えを見つげるために踏ん張ってる。僕だってまだわからない。でもだからこそ僕達子供は人に頼って、人に教わっていけばいいんじゃないかな。」

「……………それって……………」

「う〜ん。とりあえずはあれだよ。師匠の受け売りなんだけど、人間は誰しも完璧じゃないんだから助け合ってナンボなんだよ。それに僕達はまだ子供なんだからわからなくて当然だよ。だから一人で抱えこまずに頼れる人と乗りきっていけばいいんじゃないかってことだよ。僕達子供の特権なんだから。」

「ははは。私よりも年上ですよねえ。」

ヴィヴィオは笑う。

その笑顔にはさっきのようなハリボテの笑顔ではなく、本物の笑顔であった。

「そっだよ。何か悪いか。」

来人は胸を張る。

「……………でも何だか楽になりました。ありがとうございます！」

ヴィヴィオはほんのり顔を赤らめる。

すると。

「……あつ、まずい！ 今日日直だったんだ！ じゃあね。見  
知らずの美人さん」

来人は走り出す。

「ええええ！？ ちょっとおおお、名前だけでも」。

そんなヴィヴィオを後ろに来人は走り去っていった。

(……また……会えるかな……)

ヴィヴィオは来人の後ろ姿を眺め続ける。

胸の内には来人の優しい言葉を想う。

ほのかな思いとともに。

朝。

翔太郎が寝てる間にスバルは起きる。

そして翔太郎の顔を眺め……。

「おはようございます。翔太郎さん」

頬にキスをする。

そしてパジャマを脱ぎ、制服とエプロンに着替えキッチンに立つ。

~~~~~数分後~~~~~

リビングにはハムエッグやスープ、サラダにパンが並んでいるが翔太郎もスバルの姿もない。

当のスバルは……。

こっそり寝室に入る。

そして。

~~~~~数分後~~~~~

「うおっ、スバルっ！ おめえは人が寝てる間に服を脱がせんじゃねえー！」

「だ、だってえ〜、翔太郎さん起きないんですもん。平和的かつ双方にいいような起こし方にはこれがいいかなあ〜って……。」

「明らかにおめえしか得がねえ！ 朝っぱらから何さすつもりだ！」

「そ、それは……（ポツ）」

「やっぱろくなことじゃねえだろうがあー！」

弟子は早速教えを活用したにも関わらず朝からこの二人は相変わらずである。

「ったくよお。朝っぱらから・・・。」

「えへへへへ」

警備隊の廊下を少々膨れっ面の翔太郎と笑うスバルが歩く。

「第一朝っぱらやるとかなんであり得ないことをしようとするんだお前は。」

「だってえ〜、栄養を付けて仕事を頑張ろうかなあ〜って。」

「デスクワーク出来ねえくせにか？」

「む〜〜。」

いたずらに笑う翔太郎と顔を膨らませるスバル。

ちなみにあの後翔太郎は何とか場を回避しており、朝から激しい運動をしないで済んでいた。

若干不機嫌なスバルというオマケつきで。

すると。

フロッグポットが現れた。

普段持ち歩いているスタッグフォンとスパイダーシヨック以外は基本ドーパントの出現に使用している。

つまりは……。

「あ？ ……まさか！ スバル、部長には少し遅れるって言うといってくれ。」

「翔太郎さん、まさか……。」

「ああ、ドーパントだ。」

翔太郎は駐輪場に向かう道を走り出す。

「あ、ちよつと翔太郎さぁん！」

スバルが呼ぶも翔太郎は止まらない。

そのまま翔太郎はスバルの止める声を聞かず駐輪場のハードボイルダーに乗り込み、アクセルを捻り走り出す。



早朝（後書き）

敗北（誤字修正版）（前書き）

今回は翔太郎のみをメインにしてみました。

今日はなんだかオーズもゴージャーもなくて寂しい朝でした。

そういえば昨日のスマステーションは戦隊特集でゴレンジャーに  
関根勤さんが出てることにびっくりしました。

敗北（誤字修正版）

「はっはっはっはあ〜」。

人が逃げゆく街で暴れるのは横に巨大なグラトニードーパント。  
するとそこに。

「おい、待てコラ！」

ハードボイルダーに乗った翔太郎が到着する。

「何だてめえ……」

グラトニーが聞く。

『ジョーカー！』

「俺か？ こついうもんだ。変身！」

翔太郎はドライバーにメモリをスロットし展開する。

『ジョーカー！』

翔太郎は風が覆い、仮面ライダージョーカーに変身する。

「仮面ライダー？」

「行くぜ。」

ジョーカーは左手首をスナップさせてグラトニーに接近し腹部にパンチを放つ。

だが。

ブヨン。

「何！」

グラトニーの腹部はまるでジョーカーの拳を食い込ませるように変形し衝撃を吸収していた。

「ふん。終わりか？」

「んなるお！」

ジョーカーはひたすら蹴りやパンチを放つ。

しかし結果は変わらず、衝撃は全て吸収される。

「こつちの番だな。」

グラトニーはパンチをジョーカーの胸部に放つ。

「がああああああ！」

ジョーカーの胸部からは火花が散り、吹き飛ばされる。

「はっ。終わりか？」

「んなおお。」

ジョーカーは胸を擦りながら立つ。

『トリガー！』

ドライバーにトリガーメモリをスロットし展開する。

トリガーは手のマグナムから弾丸を放つ。

だが弾丸はグラトニーの身体をただ変形させ衝撃を吸収させるだけであった。

「くっ。」

「はっはっはあ。これで終わりかあ！」

グラトニーは殴りかかる。

「つぶねえ！」

トリガーは避ける。

グラトニーはフック、アッパー、ストレートなどで徐々にトリガーを壁際に追い込む。

（ちきしょう。銃も無理かよ。打撃もダメ、銃撃もダメ。残るとしたら……。駄目だ！）

トリガーは残る攻撃特性、「斬撃」を思い浮かべるがすぐに振り払った。

本来斬撃が出来たのはWの中でもファンゲジョーカーとエクストリームしかなかったからだ。

(どつすりゃいい。考える……。)

「……っつ!」

しかし気がつくのとトリガーは壁際に追い込まれていた。

グラトニーの拳が迫る。

「やっべ!」

トリガーは避け、その壁は粉々に砕かれた。

「つぶねえ。……こうなりゃあ!」

『ジョーカー!』

トリガーはジョーカーメモリに差し替え、ジョーカーとなる。

「こうなりゃあ……。」

右手に魔法陣を発生させると、右手には冷気が纏われる。

凍らせることにより打撃などの物理攻撃を出来るようにするという

考えである。

しかし。

「甘いな。」

グラトニーの手首についたブレスレットが光る。

するとジョーカーの右手の冷気は徐々に弱々しくなり、結果消滅してしまった。

「何!？」

ジョーカーは驚きを隠せない。

「悪いが俺に抜かりはない。このブレスレットには4年前のJS事件のガジェットドローンの技術、AMFが搭載されているのだ。」

グラトニーはブレスレットをみせびらかす。

「AMF? それって……。」

AMF・・・アンチマジックフィールドの略称で、魔法の発動を邪魔するシステムである。

以前ガジェットドローンに内蔵されていたこのシステムはここ数年、登場しなかった。

「JS事件に使われていた技術か。」

「その通り。それなりに苦勞はしたがな。しかしそれなりに効果は

あつた。たつぷりなぶり殺させていただく。」

グラトニーは接近し再び殴りかかる。

「んなるおが！」

ジョーカーも立ち向かう。

「ふっ！」

グラトニーは右手で殴りかかる。

「おらあ！」

ジョーカーはその隙を突き右足で脇腹に蹴りを放つ。

が。。。。

「やっぱり無理かよ。」

衝撃は吸収される。

そして。

「捕まえたぞ。」

グラトニーはジョーカーの右足を掴む。

「てめっ！ 離せ、コラ！」



ジョーカーはパンチを放つも無視され……。

「安心しろ。今離して、やる！」

グラトニーはジョーカーの右足首を勢いよく逆方向にねじまげる。

「つつ！　がああああああ！」

ジョーカーの悲痛な叫びが響き渡る。

「痛いかな？　ならもつと味わえ！」

グラトニーは更にねじまげる。

「がああああああ！」

ジョーカーは痛みで叫ぶ。

その時。

「はあああああああ！」

スバルがりボルバーナックルでグラトニーに殴りかかる。

しかしやはり効かず……。

「くつ……。」

弾かれる。

「局員ふぜいが。ほらよ。」

グラトニーはジョーカーを投げ飛ばす。

「がっ！」

ジョーカーは地面に叩きつけられる。

「翔太郎さんっ！」

スバルはジョーカーのもとによる。

「二人仲良くあの世で後悔しろ。俺に歯向かったことをな。」

グラトニーは歩み寄る。

「さ……せるかよ。」

ジョーカーはジョーカーマグナムを取り出し自分の足元に地面に乱れ撃つ。

周囲には煙が立ち込め……。

「逃がさん！」

グラトニーは煙の中に入るが、そこには誰もいなかった。

「まあ、いい。デザートはとっておくに越したことはないからな。」

グラトニーはその場をゆっくり立ち去る。

局の医療室。

翔太郎は医者から右足に包帯を巻かれていた。

「大したことはありませんでしたが、少なくとも暫くは安静にしてください。」

医者が忠告する。

しかし足が使えないことは仮面ライダーとしては致命的であった。

そして治療が終わる。

「ありがとうございます。」

翔太郎は弱々しく部屋を後にする。

外にはスバルが心配そうに待っていた。

「翔太郎さん！」

「心配かけたな。」

翔太郎を先頭に二人は廊下を歩き出す。

「どうだったんですか？」

スバルが聞く。

「暫くは安静にだよ。」

翔太郎は背中であ答える。

「なあ、スバル。」

翔太郎が振り向く。

「はい？」

「少し休む。部長にはよろしくと言っといてくんねえか？」

「どうするつもりなんですか？」

「……………」

翔太郎は黙ったまま小走り。

ただし右足を引きずっている。

「待つて翔太郎さん！」

スバルが翔太郎を止めよう走り、振り向かせるが…………。

「……………悪い。」

翔太郎はスバルの腹部に掌低を叩き込む。

「翔……太郎……さん……。」

スバルは翔太郎に寄りかかるように気絶する。

「悪いな、スバル。俺は……折れるわけにはいかねんだ。」

翔太郎は廊下の椅子にスバルを寝かせる。

「この街を守るために戦う……仮面ライダーとしてな。」

翔太郎はゆっくり廊下を歩く。

その後スバルが起きたときには駐輪場にはハードボイルダーはなく、翔太郎も消えていた。

深夜の廃車場にハードボイルダーのエンジンが響き渡る。

足を引きずりながら翔太郎はその真ん中に立つ。

（こいつは切札。ならこんな時でも何かがあるはずだ）

『ジョーカー！』

翔太郎はドライバーにジョーカーメモ리를 スロットし傾ける。

『ジョーカー！』

深夜の廃車場にジョーカーが立つ。

「多分俺が力を使いこなせてねえんだ。俺に力がないからだ。なら  
・・・。」

ジョーカーは構える。

「その力、捻りだすだけだ。」

手首をスナップさせてジョーカーは走り出す。

## 奮戦（前書き）

スピード投稿となりました。

今回は男臭さを多めにしたつもりなのでラブコメは期待しないでください。

対グラトニー戦後半です。

果たして打撃も銃撃も効かないグラトニードーパントにいかにか立ち向かうか。

後書きにはグラトニードーパントの説明を。

最初の説明も変化しましたので。

ではどしどし。

## 奮戦

「おらあああああああ！」

夜の廃車場にジョーカーの声が響く。

ジョーカーは捨ててある車に向けて手刀を放っていた。

しかし右足を引きずり、グラトニードーパントとの戦闘のダメージはほとんど癒えてはいなかった。

これをジョーカーはさつきから数時間近く休みなしに行っている。

「はあ、はあ、はあ、はあ……。駄目だ。こんなんじゃない……。アイツは倒せねえ。もっと、もっと……。！」

するとジョーカーは思いつく。

（もしかすれば、メモリの力を刃のように圧縮すれば……。）

事実仮面ライダーのメモリの操作はメモリの力を増幅させるマキシマムだけではない。

以前翔太郎がフィリップと変身していたWではサイクロンの風やヒートの熱をマキシマム以外にも使用していた。

（しかし俺に出来るか……。俺に……。）



ジョーカーは考える。

しかし。

「だが……、考えてる暇はねえ。」

ジョーカーは右手に神経を集中する。

（考える……、考える……、考える……。刃だ……。刃……。）

すると右手のアンクレットにフアングジョーカー時のアームセイバーのように紫のエネルギーが型られていく。

「出来たか？」

しかし。

「何！」

エネルギーは徐々に消え……。

「っがあああああ！」

手から火花が散る。

そして後ろに吹き飛ばされ、廃車に叩き付けられ、変身が解ける。

「っぐあっ、があっ……。」「

翔太郎は地面に横たわる。

すると雨が降り始めた。

雨は容赦なく翔太郎を濡らす。

「・・・負けつかよ。こんなところで・・・。」

翔太郎はドライバーにジョーカーメモリをスロットさせながら立ち上がる。

『ジョーカー!』

そして傾け再びジョーカーに変身。

「はああああああ・・・。」

再度右手に神経を集中させる。

しかし・・・。

再び右手に火花が散る。

「っがあああああ!」

再び吹き飛ばされ、変身が解ける。

「・・・っつ。まだだああああ!」

翔太郎はまたメモリをドライバーにスロットする。

その日の夜、その廃車場からは鈍い激突音が何度となく響き渡った。

翌朝。

「翔太郎さん……。一体何処に……。」

腹部を擦りながら自身の車でスバルは翔太郎を探していた。  
すると。

「！ あれって……。」

道を歩いている少年を見つける。

その少年とは……。

「来人君！」

「スバルさん？ どうしたんですか？ こんな朝早く……。師匠は？」

翔太郎の弟子、右風来人である。

「実は、昨日から見掛けなくて。居場所知らないかなあ？」

「い、いえ。特には……。あ！」

来人は何かを思いつく。

「何？」

「師匠に連絡先を聞いたんですが、そこに掛けて電波を逆探知すれば……。」

「居場所がわかるの？」

「師匠がスタックフォンをもっていればですけどね。じゃあ……。」

来人はスバルの車の助手席に座る。

来人は携帯端末で翔太郎に電話を掛け、バックからパソコンを取り出し接続する。

そして手首を鳴らしながら……。

「ちよつくら後追わせてもらいます、師匠！」

来人はキーボードを異様なスピードで叩き始める。

廃車場。

「翔太郎さあ……ん！」

「師匠お~~~~~!」

スバルと来人の翔太郎を呼ぶ声が聞こえる。

二人は中心の広間につく。

そこには……。

「はあ、はあ、はあ、はあ……。」

全身が傷だらけであちこち服が破け、汚れ、激しく息を切らす翔太郎がいた。

右手からは服の隙間から血が流れ、周りの廃車は人型に凹んだものが幾つもあった。

翔太郎はスバル達が来たことも知らずメモリが入ったドライバーを傾ける。

『ジョーカー!』

翔太郎に変身したジョーカーは右手に神経を集中させる。

右手には徐々にアームセイバーのような形が現れていく。

そして形になる……。

かに見えた。

「くっ!」



すると。

スバルが翔太郎の手を掴む。

「翔太郎さあん。これ以上やったら死んじゃうよお。やめてよ・・・私を泣かせないって約束したじゃない・・・。」

スバルは泣き出す。

「・・・スバル・・・。」

翔太郎は啞然とする。

そして以前スバルとした約束を思い出す。

「お前を泣かせないってことだ！」

「・・・そうだったな・・・。悪い、・・・約束・・・破っちまったな。」

翔太郎はゆっくりと地面に座る。

「翔太郎さん・・・。」

スバルはゆっくりと翔太郎の顔を見る。

翔太郎の顔にはあちこちに切り傷や痣はあるものの、その顔には元の優しさと強さがあった。

「来人……。お前にも世話かけたな……。師匠失格だ。」

「……。いえ。そういうところも僕は師匠を尊敬します。だから気にしないでください。」

来人は指鉄砲を翔太郎に向ける。

「へっ！」

翔太郎も指鉄砲を返す。

すると。

「！」

再びバットショットが飛んできた。

「また出たか。」

翔太郎は立ち上がる。

「師匠。何か対策はあるんですか？ 今回の相手は打撃も銃も効かないって聞きましたか……。」

「……。対策はあるがまだ使えてない。」

翔太郎の顔が険しくなる。

「そんなぁ……。どうして勝てない相手に……。」



「……………」

沈黙。

しかしそれを破ったのは翔太郎であった。

「んなこと関係ねえ。例え勝つ術が無かるうが、齒がたたなかるうが守りたいもののために立ち向かう。守りたいもののためならいくらでも立ち上げれる。……それが……仮面ライダーだ。」

翔太郎はスタックフォンを操作する。

するとハードボイルダーが無人で走ってきた。

「それにな……………」

「？」

「…………対策なんぞ、……動いてからたてりゃあいんだ。」

翔太郎はヘルメットを被り、ハードボイルダーにまたがる。

「師匠！」

来人は翔太郎を止めるために走ろうとする。

すると。

「行ってらっしゃい。」

スバルが見送る。

「スバルさん！」

「私……、翔太郎さんを信じてる。だって翔太郎さんは……仮面ライダーだもん。」

来人は絶句する。

が、すこし考えた後……。

「……師匠。僕はまだ師匠からほとんど何も教えてもらってません！ だから……。」

翔太郎に向かって叫ぶ。

すると翔太郎は何も答えずにハードボイルダーで走り出す。

左手でサムズアップをしながら。

「はっはっはっはあ！ 俺に敵うやつなどいねえ！ 俺が最強だあ！」

グラトニードーパントが街で暴れる。

すると逃げ遅れた少女が。

「怖いよお。」

グラトニーはゆっくりと歩み寄る。

「ありがとう。俺の餌食になってくれてなあ！」

構えながらゆっくりと歩み寄る。

その時。

グラトニーの身体から火花が散る。

「ん？」

あまり効いていないグラトニーはある方向を向く。

そこには前輪の砲身から煙を上げるハードボイルダーと、またがるヘルメットの男……。

左翔太郎がいた。

「逃げる！」

翔太郎が言つと隙をついてか少女の親らしき女性が少女を抱きかかえて逃げる。

グラトニーは後ろの少女を気にしなかったかのように翔太郎に視線を移す。

「まあ、いい。お前が餌食になってくれるからな。攻撃が効かないにも関わらず現れるとは……。命ごいなら聞いてやるぞ？」

「はっ！ 言ってる！」

『ジョーカー！』

翔太郎はジョーカーメモリを左手でスロットし……。

「変身！」

右拳を開くと同時に左手でスロットを展開する。

『ジョーカー！』

翔太郎の身体を風が覆い、塵状の装甲が纏われ、仮面ライダージョーカーに変身する。

そして左手をスナップし、指鉄砲を向ける。

「さあ、お前の罪を数える！」

そしてジョーカーはグラトニーに接近する。

そのまま右拳でパンチを放つ。

しかしやはり跳ね返される。

「ふん！」

そしてグラトニーのフックが腹部に放たれ……。

「ぐっ！」

ジョーカーは吹き飛ばされる。

「つつ！ ちつくしょうが……。」

ジョーカーは立とうとするも今までの痛みが重なり、中々立てない。

（駄目なのか……。俺だけじゃ……。何にも出来ないのか）

ゆっくりグラトニーが歩み寄り、ジョーカーを踏みつけ、ジョーカーの腹部から火花が散る。

「終わりだ。仮面ライダー！ あの世で俺に逆らったことを後悔しろお！」

グラトニーはひたすらジョーカーを踏みつけ、その度に火花が散る。

「がっ！ ぐっ！ があっ！」

ジョーカーは先ほどからグラトニーの足を殴るが跳ね返され、徐々に殴る強さも落ちていく。

すると。

バリアジャケットのスバルが駆けつける。

「翔太郎さあん！ 頑張つてえ！」

スバルが叫ぶ。

「そうだ。俺は仮面ライダーだ。こんなところで寝てる暇はねえんだあああ！」

翔太郎は力を振り絞る。

「何！ 何処にこんな力が？」

ジョーカーは自分に言い放つ。

「おい、ジョーカー。……答える。俺には力がある。守るために……俺を貫き通すために……。力を貸してくれとは言わねえ。力を……。」

するとジョーカーの右手のアンクレットが輝き出す。

「よこせええええええ！」

するとアンクレットからは黒いアームセイバーが一瞬で生成される。

「何だと！」

ジョーカーはそのセイバーでグラトニーの足を切り裂く。

「ぎゃあああああ！」

すると初めてグラトニーから火花が散り、グラトニーは怯む。

「うおりゃああああ！」

ジョーカーはそのまま立ち上がりセイバーで下、横に切り裂き、下からの切り上げでグラトニーを吹き飛ばす。

「がああああああ！」

グラトニーは身体から煙を出しながらたちあがる。

「何故だ。どこにこんな力が。」

「てめえにはわからないだろうぜ。俺は大切なものを、人を、笑顔を守るために戦う。誰がなんと言おうが、見返りが無かるうが俺は迷わねえ。それが俺が俺に、・・・家族に、・・・おやっさんに、・・・相棒に、・・・そしてスバルに誓った仮面ライダーの流儀だ！」

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットにスロットする。

「ジョーカー・マキシマムドライブ！」

「ライダー・・・、スラッシュ！」

セイバーが紫のエネルギーに覆われていく。

そしてジョーカーはグラトニーに向けて走る。

「来るなあああああ！」

グラトニーは火球を放つ。

「うおおおおおおお！」

しかしジョーカーはそれを受け、火花を散らしながら止まらずに走る。

そして。

「たあああああああ！」

グラトニーをすれ違い様に切り裂く。

「があああああああ！」

グラトニーの身体にプラズマが走る。

そして。

「ぐあああああああ！」

爆発。

その場には中年の男が倒れ、地面には破壊されたグラトニーメモリ、破壊されたAMFのブレスレットがあった。

ジョーカーはスバルを見る。

「はあ、はあ、はあ、はあ、……終わった……ぜ……。」

そしてふっきれたかのようにジョーカーは、翔太郎は倒れる。

「翔太郎さん！」



スバルは電光石化の勢いで翔太郎の側に寄る。

翔太郎の表情を見ると……。

翔太郎は疲れきって寝ていた。

その表情は満足げである。

「……………」

スバルはあっけにとられるた後感無量になり、眼から涙を流し一言。

「……………馬鹿……………」

しかしその顔には頬を赤らめて嬉しさが溢れていた。

その後翔太郎は医療班に保護された。

その後翔太郎は病院のベッドで一日中、眠っていたという。

保護される翔太郎と見送るスバルをビルから眺める影。

「左……翔太郎か……。楽しませてくれそうですね。」

男は左手にアタッシュケース、右手に金色のメモリを持つ。

そのメモリのディスプレイにはUとTの二つのアルファベットが描

かかれていた。

その後犯人は逮捕されたが、ブレスレットに内蔵されていた忘却魔法が破壊寸前に発動したために犯人は記憶を失い、事件は迷宮入りとなった。

## 奮戦（後書き）

グラトニードーパント：

「暴食の記憶」を内包するメモリ、グラトニーメモリにより変身されるドーパント。

強力な腕力と火球を武器に戦うが、特に特徴的なのはぜい肉的な身体で、あらゆる打撃、銃撃を完全に打ち消す防御力であり、仮面ライダーに苦渋を舐めさせた。しかし斬撃には弱く、再戦時に仮面ライダーの新技、ライダースラッシュにより撃破された。

安堵（前書き）

今回は少々繋ぎのような気がします。

程々をお願いします。

前回の好評はとても嬉しかったです。

では。

## 安堵

「だあゝかあゝらあゝ。そんなに心配しなくても大丈夫だったの。」

病院の一室で白い患者衣姿の翔太郎が答える。

「だつてえゝ、だつてえゝ。あんなにボロボロになって車にドカーンってなつて、それでボカーンってなつて……。」

スバルは涙でボロボロになる。

そのせいか言動もあいまいに。

実質翔太郎はあの後一日死んだように爆睡していたからだ。

「落ち着きなさいよ、スバル。」

ティアナはスバルをなだめる。

「でもまあ、あんだだけボロボロになつてたんですから、心配するスバルの気持ちもわかつて下さい。」

ティアナは翔太郎に頼む。

「あ、ああ。ま、なにせよ俺は大丈夫だから、心配すんな。な？」

翔太郎はスバルの頭を撫でる。

「えへへへへ〜。」

スバルは嬉しそうに笑う。

犬で例えば尻尾を降っている状態である。

「はいはい。」

ティアナはそんな二人をごちそうさまと言わんばかりに呆れる。

しかし内面では親友の幸せそうな笑顔に嬉しくもあった。

すると。

コンコン。

ドアがノックされる。

「入ってくれ。」

翔太郎が答える。

「どうも。」

「・・・お邪魔します。」

入ってきたのは・・・。

「おう。来人、アインハルト。」

制服姿の来人とアインハルトである。

時間帯から学校帰りであることが伺える。

「大丈夫ですか？ 師匠……。」

「たいしたことねえよ。こんなの。」

翔太郎は余裕の表情を返す。

来人だけでなくアインハルトも安心の表情を浮かべる。

「そういえばあの後師匠、大丈夫だったんですか？ あの後。」

「あ？ ああ。新技、ライダーズラッシュで万事解決したぜ。」

「おお〜。すげえ。さっすがは師匠です。」

「へっ！」

翔太郎は得意気である。

「そりゃそうだよ。だって翔太郎さんだもん」

スバルも何故か誇らしげである。

「……勝てない相手にも挑むなんてやはり翔太郎さんはすごいです。」

アインハルトも翔太郎に尊敬の眼差しを向ける。  
すると。

「あつ、もうこんな時間。じゃあね翔太郎さん。」

ティアナが席を立つ。

「ああ。お見舞いありがとな。」

「それとスバル……。」

ティアナはスバルを見る。

「何？ ティアナ。」

「いくら翔太郎さんが動けないからって程々にね……。」

「え？」

スバルが焦る。

俗にいう凶星である。

「はあ!?!」

翔太郎も啞然とする。

「「?」」



よくわかっていない二人の子供。

そんな空気をつくったティアナは部屋を退出する。

場が沈黙。

「そ、そういえば来人。アインハルトと仲良くしてるか？」

翔太郎が話を変えるように切り出す。

「……………え〜っと……………。微妙なところで……………」

「駄目だなあ。同じクラスメイトなんだから仲良くしねと。」

「それはそうなんですけど……………」

「アインハルトもだ。多少人に頼ることも覚えねえと。何でも一人じゃ無理があるぜ？」

「……………それも翔太郎さんの強さには関係あるんですか？」

「ああ。人間は誰も完璧じゃない。一人じゃ限界がある。だから誰かと手を取り合って人は皆生きていくんだ。来人には言ったよな？」

「はい。早速見ず知らずの女の子に言ってみました。」

来人は指鉄砲を翔太郎に向ける。

「お！ 早いな。」

翔太郎もそれを返す。

「……………はい。わかりました。善処します。」

アインハルトは返事を返す。

きこちないながらも一生懸命さが伺える。

「そうだよ、アインハルト。人はみくんな助け合っていくもんなんだから。今も翔太郎さんには私がいますもん」

「ま、まあな。現に前の戦闘でもスバルに助けられたもんだからな。ようはあれだ。人は誰かと一緒だから、支えあっていけるから強くなれるもんなんだぜ。」

「……………そう……………ですか……………。頑張ってみます。」

「それでいい。」

翔太郎はアインハルトの頭を撫でる。

数分後、この二人も部屋を退出した。

「じゃあ翔太郎さん。明日も仕事終わったら来ますね。」

スバルは荷物を持つ。

「ああ。部長や皆には悪いといって言っといてくれ。」

「うん。」

スバルが立ち去るとする。

その時。

「スバル。」

翔太郎が呼ぶ。

「何？」

「……前の件は……色々と心配させたり、……今も……世話かけて……悪い。」

「……。」

スバルは黙る。

「……。」

「……。」

そして場が静まる。

するとスバルが翔太郎に寄り添い……。

「……。」

チユ。

頬にキスをする。

「……………は？」

翔太郎は放心状態である。

そしてスバルは翔太郎に抱きつく。

「……………心配はしたけど翔太郎なら大丈夫だって信じてた。だから……………そんなこと言わないで……………でも……………なるべくなら無理は……………しないで。」

「……………ああ。」

翔太郎はスバルを抱き寄せる。

(……………心配はさせたくねえ。だがなあ……………)

翔太郎は心に誓う。

(お前は……………俺が命にかえても守る！)

二人はしばらく抱き合った。

この時間は二人にはやたらと長く感じられた。

~~~~~数分後~~~~~

スバルが退出した後翔太郎は考えていた。

先日の犯人とグラトニー戦で引き出せたジョーカーの力について。

(記憶消去か……。敵さんも中々尻尾を出してはくんなえか。それにあれは……。結果的には勝てたが……。あれはあくまでジョーカーの力だ。俺自身の力じゃねえ。魔法だって完璧じゃねえ。……。いずれもつと強い力が必要になる。俺が……。俺自身もつと強くなんねえと)

翔太郎は右手の掌を天井に掲げる。

そんな翔太郎の気持ちも知らず時間は刻々と過ぎていった。

ほぼ同時刻。

男はとある男達と向き合っていた。

「これで……。私も人間を……。魔導師を超える力を得られるのか？」

「はい。このガイアメモリさえあれば。あなた達は超人……。いえ神にもなれます。」

「……。神か。素晴らしい！こんなものをこんな低価格で良いのか？」

売り込んでいる男の手にはお札が数枚。

「いいえ。お気になさらず。ではこれで。」

「ああ。」

互いに振り向き逆方向に歩く。

そしてメモリを売った男は小さく言い放つ。

「そう。私の崇高なる目的のため……存分に暴れて下さい。……最後のピースも既に……。」

男は手に写真を持つ。

その写真には青髪の女性……。

スバルが写っていた。

骸骨（前書き）

あの方が徐々に動き出します。

今回さらにあるキャラにフラグが？

骸骨

「師匠が無事で何よりでしたよね、ストラトスさん。」

「……………はい。」

翔太郎のお見舞い帰りの二人は歩く。

とはいえ来人の後方を少し遅れてアインハルトが歩いているような状況である。

「……………翔太郎さん、あんなに傷だらけなのに笑ってました。」

「それも師匠の強さなんですよ、きっと。やっぱり師匠はスツゴい人だ！……………そういえばストラトスさんはどうやって師匠と知り合っただんですか？」

「……………たまたま路上で試合を仕掛けた方が……………。」

「ドーパントだった？」

「……………はい……………危ないところでした。右風さんは？」

「ぼくも似たもんかな。学校帰りに襲われて、師匠に助けられた。」

「……………そう……………ですか……………。」

「なんか僕たちって似てるよね。」

「……はい。」

「……あの……。」

「？」

「僕といるとつまらない？ あまり喋らないけど。」

「……いえ。すいません。……暗くて……。」

「いやいやいや、謝ることじゃないですよ！ 僕もなんかすいません！ 騒がして……はあく。こんなんじゃ師匠には程遠いなあ。」

来人は後ろ向きになる。

「……でも右風さんは優しいです。今日だつてたまに話しかけてくれたり……、お見舞いに誘ってくれましたし。……嬉しかったです。」

「そ、そう。……なんか照れるなあ。」

来人は照れ臭そうに頬をかく。

そんなこんなで二人はアインハルトの家の前につく。

「……では私はこれで……。」

「うん。また学校で。」

「……………最後に一つ。」

「？」

「……………これからは……………互いに……………名前で呼びあいませんか？」

「え？」

「……………嫌……………ですか……………？」

「いやいやいや……………でもなんで!？」

「……………私……………、なんだか右風さんとは何となく……………仲良くなりたいたいというか……………嫌ですか？」

「いや、お安いごようだよ。師匠からハードボイルドだったらまずレディーには優しくしろって聞いたし。じゃあこれからもよろしくお願いします……………アインハルトさん。」

来人は頭を下げる。

「……………はい……………来人さん。」

アインハルトも返す。

若干顔が赤いのは辺りが暗いせいに見えることはない。

「じゃあね、また学校で……………。」

「……………はい。また明日……………」

二人は別れた。

(守りたいものかあ〜)。僕に見つかるかなあ〜)

来人はゆっくりと夜の帰り道を歩いていく。

夜の街を歩く女性。

すると。

「何かしら?」

脇道になにやら異形の影が。

女性は気になり脇道に足を踏み入れる。

すると。

影から触手が。

「きゃああああ。」

触手の元は徐々に影から現れ月の光に照らされる。

そこにはアンモナイトドーパント、マンモスドーパント、トリロバ
イトドーパントがいた。

「いいなあ、この力。ぞくつとする。」

女性に触手を伸ばすのはアンモナイトドーパント。

「あの男から買ったのは正解だったな。」

「全くだ。」

マンモスもトリロバイトも続く。

「ば、化物……。」

女性は涙目で言う。

「何を言う。人間皆化物みたいなものだ。」

ドーパント達は徐々に歩み寄る。

すると。

小さいクワガタ虫型のメカが触手を千切り、女性は後ろに倒れる。

「きゃあー！」

「な、誰だー！」

アンモナイトは周囲を見渡す。

すると。

脇道の奥から足音が。

「貴様か。邪魔したのは！」

アンモナイト達はそのあし音に身体を向ける。

その影は足元から姿を表し、全身を表す。

全身白いスーツに白いソフト帽。

腰にはロストドライバーが巻かれ、右手にはSと書かれた黒いガイアメモリが握られる。

『スカル！』

「変身。」

男はソフト帽を左手に持ち、ドライバーにメモリをスロットし傾ける。

『スカル！』

男の身体は風で覆われ黒い鎧で覆われ、帽子を被り直す。

月の光が傾き全身が映し出される。

黒い身体に胸には骨のような模様、Sの傷を帽子で隠した骸骨の仮面。

その男はドーパント達に言い放つ。

「さあ……。」

そして指を向ける。

「お前の罪を……数えろ。」

「ふざけるなあ！」

アンモナイト達はその骸骨の戦士、仮面ライダースカルに襲いかかった。

その隙に女性は逃げ出す。

アンモナイト達は構わずにスカルに殴りかかる。

しかしスカルは柳に風のごとく、流れるように避けていく。

そしてアンモナイト達の後ろを取るとスカルメモリをスカルマグナムにスロットし……。

『スカル・マキシマムドライブ！』

マキシマムモードに変形させる。

そしてスカルマグナムでマンモスとトリロバイトを撃つと二体は爆発。

気絶し中年の男二人が現れた。

「ひいひいひい！ なんなんだ、貴様は！」

一人残されたアンモナイトはスカルに恐怖を覚える。

スカルはゆつくりとアンモナイトに歩み寄りながらスカルメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『スカル・マキシマムドライブ！』

するとスカルの胸からSの字が刻まれた球体型のエネルギーが空に放たれ、停止する。

「俺か？ 俺は……お前達の罪を数える者だ。」

スカルは跳躍し……。

「とっつー！」

そのエネルギー球体をアンモナイトに蹴りとはして当てる。

「ぎゃあああああ！」

アンモナイトは爆発し中年の男が倒れて現れる。

スカルはその男を見下す。

その後女性が通報した管理局が着いたころには周りには昨日ガイアメモリを買った男達が縛られた状態で放置され、側には三つ分のガ

イアメモリの残骸が転がっていた。

高層ビルの屋上。

骸骨の男に変身していた男は夜の街を見下ろす。

手には銀色のアタッシュボックス。

その男はアタッシュボックスを開く。

底にはロストドライバーと緑、赤、黄色の純正のガイアメモリが並べてあった。

「用心にはあるが・・・作っておいて正解だったな。」

男はその中身をひたすら眺めた。

パチッ。

翌朝来人はベッドで起きる。

「変な夢だったなあ。」

骸骨の仮面ライダーが三体のドーパントを倒し、女性を助ける夢。

そしてその後にはただアタッシュボックスを眺めていた夢。

「あれがあれば僕も仮面ライダーに……。そう。こんなア
タツシュボックスがあれば……………」

来人は気軽にみじかな箱を叩く。

「……………」

すると叩いたものが夢に出てきたアタツシュボックスとしばし思考
が停止した後に理解した。

「えっ？ えっ？ えっ？ 何で？」

頭が混乱する来人。

徐々に頭が冷やされてきたらしく、ゆっくりとアタツシュボックス
に歩み寄る。

ドキドキドキドキドキ。

来人は自分でも心拍数が上がっていることを自覚しながら、アタツ
シュボックスを開ける。

するとそこには……………。

「……………ロストドライバーにガイアメモリ……………三つも……………」

内部には夢と同じロストドライバーと三本のガイアメモリが入って
いた。

そして一枚のメモ用紙が。

来人はメモ用紙を開く。

「いずれ君も戦うときがくる。もし大切なもののために戦う勇気が君にあるなら。これらはそのときの為に君に預けよう。あとこのことは使う時まで君の師には言わないことを希望する。君の師の師より」

「……………」

来人にはわかった。

このメモはあの夢に出てきた白スーツの男が書いたものだとということ。

仮面ライダーになれる……………」

しかし来人は心の底からこのことを喜べなかった。

(いざとなったら……………僕は師匠の様には……………戦えない……………僕には……………戦う勇気が……………ない)

来人はアタッシュボックスを閉じ、何も見なかったかのようにアタッシュボックスをベッドの下に入れた。

「……………一応……………師匠に聞いてみよう。」

来人はいつもどおりに制服に着替え朝食を取りにリビングに向かっ

た。

とりあえず来人は昼、翔太郎に連絡をすることにした。

師匠であり、信頼し尊敬する立場である翔太郎からの確な答えを求めがゆえの結論であった。

そしてそれが今、自分が考えうる一番の対応と自らに言い聞かせながら、ベッドの下にドライバーとメモリを隠したままいつも通り、学校に向かった。

ちなみにその朝、街の脇道がニュースで流れていた。

女性を襲った三人の男が倒れ、側には三つのガイアメモリの残骸が無造作に置かれていたという内容のニュースが。

今日……。

ヴィヴィオとアインハルトの最戦を明日に控えた朝の出来事であった。

骸骨（後書き）

もうすぐヴィヴィオ対アインハルトの二戦目に介入してきます。

アインハルトの声って能美さんなんですよね。

想像だとやばいぐらいに合います。

相談（前書き）

今回は一巻ラストのヴィヴィオ対アインハルトに介入します。

ちなみにこの二人のバトルについてはあまり描きません。

もうすぐDOG DAYSが最終回で悲しいです（；ー；）（；

でも明日は二週間ぶりのゴーカイジャー&mp;オーズだあ〜〜
〜！

相談

「すみませんでした。」

翔太郎は目の前の部長に謝る。

ここ数日の無断欠勤についての詫びである。

今日翔太郎は午前中に退院し、制服姿でそのまま警備隊のオフィスに直行した。

制服に隠れてはいるものの身体にはまだ包帯が巻かれている。

「気にすんな。それよりも病み上がりなんだから、もう少し休んだらどうだ？」

「いや大丈夫です。スバルと一緒に午後から出勤します。」

「そっか。まあお前がそのほうがいいってえんなら俺は止めねえ。」

「すみません。」

翔太郎は改めて謝る。

「おーし、そんじゃその分たっぷり働いてもらおうとすっかな。まあ明日はもう休みになってっけどな。」

スバルが公休をとっているためである。

実質翔太郎の仕事はスバルのサポートであるため、スバルが休みになると必然的に翔太郎も休みとなる。

「おつす。」

翔太郎は軽く敬礼をし、席に戻った。

「どうでしたか？」

スバルが心配そうに聞く。

翔太郎の席はスバルの隣である。

「部長、器がでつかくて助かったぜ。」

「良かったあ〜。」

スバルは一安心するが・・・。

「んじゃ明日また休みになんだからたあ〜つぷり仕事しねえとなあ・・・。」

「え？」

手をポキポキ鳴らしながらの翔太郎の一言にスバルは顔をひきつらせる。

その後、スバルは地獄を見ることとなり昼休みには一時期有体離脱する羽目となった。

昼休み。

屋上の椅子に腰掛けながら缶コーヒーを飲む翔太郎。

その膝には異様な量の仕事の影響か、グロッキーになっているスバルが寝ていた。

すると。

「ん？」

突如スタッグフォンが鳴り出す。

翔太郎はディスプレイを開くとそこには来人と出ていた。

「来人？ なんだ？」

翔太郎は通話ボタンを押し耳元に当てる。

「おう。どうした来人。」

『すみません、師匠。時間大丈夫ですか？』

「ああ。ちょうど昼休みだから大丈夫だぜ。どうかしたか？」

『……………』

「来人？」

『……………もし……………もしなのですが……………』

「何だよ。」

『……………もし僕が師匠と同じ力を手に入れたら……………もしそれでも勇気がなくて戦えなかつたら……………』

「はあ！？ 何だそりゃ？」

『……………えっと……………』

「……………。」

『……………師匠？』

「……………もしそんなことになってたとしても、俺は戦うことを強制しないぜ。」

『えっ？』

「……………俺はお前の師匠で、お前は俺の弟子だ。弟子に危険なことをさせたい師匠なんざいねえよ。」

『……………』

「でももしお前が心のそこから成し遂げたいことが……………、守りたいもんがあんなら俺は止めねえし止める権利もねえ。答えはお前の中にしかねえ。ようはお前次第だ。」

『……………僕次第……………』

「おう。」

『……………見つけられるでしょうか、僕にも答えを。』

「わからねえが、お前はまだ子供だ。いざとなったら俺やスバル達に頼ることも忘れんなよ。」

『……………わかりました。話せて良かったです。』

「……………おう。」

『ではまた。』

「ああ。またな。」

翔太郎は通話を切った。

中等部屋上。

来人は自らのデバイス、スピリッツの通話機能を切る。

「……………僕次第かあ。」

来人は思いにふける。

(答えは僕にしかわからないし見つけれない……………)
するど。

「……………来人さん。」

アインハルトが屋上に上がってきた。

「どうしたの、アインハルト。」

「……………お昼は取りましたか？」

「いや、まだだよ。ちょっとね。アインハルトは？」

「……………いいえ、まだです。」

「じゃあ……………一緒に取る？」

「……………はい。一緒にさせていただきます。」

アインハルトは若干顔が赤い。

「よし、行こう。」

「……………はい。」

(……………守りたいもの。今はよくわからないけど……………)

二人は屋内への階段に向かい歩き出す。

(とりあえず今は友達を守るために。・・・頑張ってみよう)

所変わって救助隊屋上。

「なんだったんだ、来人のやつ・・・。」

翔太郎は頭を傾げる。

すると。

「ふわあああああ。」

スバルが起きる。

「おう、起きたかスバル。」

「おはよあ~~~~、翔太郎さあ~~~~ん。」

スバルは聞くだけで眠くなりそうな眠たそうな声で返事を返す。

「・・・お前は平和だなあ。」

「へ？ 何が？」

「何でもねえよあ~~~~。」

「何なのあ~~~~!」

「べつつにい〜〜〜。」

翔太郎は逃げる。

スバルは追いかける。

このかけっこは昼休み終わりまで続いた。

しかし二人は口にはしないものの、この一時がたまらなく幸せに感じていた。

翌日。

「お待たせしました。アインハルト・ストラトス、参りました。」

アラル港湾埠頭にヴィヴィオ、アインハルトなど以前のメンバーが揃った。

「来ていただいてありがとうございます。アインハルトさん。」

ヴィヴィオは頭を下げる。

「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可もとってあるから安心して全力出していいぞ。」

ノーヴェが付け足す。

するとヴィヴィオはセイクリッド・ハートを構え……。

「うん。最初から全力で行きます。セイクリッド・ハート、セットアップ！」

ヴィヴィオの身体は急激に成長しバリアジャケットを身につける。

「武装形態。」

アインハルトも変身、霸王として夜な夜なストリートファイトをしていた頃と同じ凛々しい姿を現す。

「今回も魔法はナシの5分間一本勝負。」

ノーヴェが審判に立つ。

「アインハルトさんも大人モード!?!」

リオやコロナは興奮、他の面々も見守る。

「それじゃあ試合……、開始ッ!」

二人の王は再びぶつかりあう。

翔太郎はハードボイルダーを洗いながら考える。

(なんだったんだ、来人のやつ。急にあんな……。それに確か今日はアインハルトがまた組み手をするって聞いたし……。)

実際翔太郎は弟子の心情と妹のような子が気になっている。
すると。

「あ？」

バットショットが飛んできた。

「またかよっ！」

翔太郎はまたがる部分の水分を素早く拭き取りヘルメットを被りボイルダーを走らせた。

「・・・・・・・・・・はあああああ。」

来人はため息をしながらファミレスで宿題を済ましていた。

しかしペンは一向に進んでいない。

（何だか師匠に会いづらいなあ）

一応リュックにはアタッシュボックスをそのままもってきている。

「答えは僕の中にしかない・・・・・・・・・・か。」

来人は手のサイクロンメモリを眺める。

(でも僕がドーパントと戦うことなんてそうそうはないよね。・・・
基本師匠が一人で片付けちゃうし・・・)

その時。

目の前のガラスには翔太郎がまたがるハードボイルダーが高速で走り去っていった。

「師匠?・・・まさか・・・ドーパント?」

来人は急いでリュックを背負い、勘定を済ませファミレスを出る。

そしていつの間にか作ったのか逆探知の機械の画面を見ながら翔太郎の後を追った。

「なにも起きないで。頼むから!」

来人は街を走っていく。

「変身!」

仮面ライダージョーカーは目の前のコマンドードーパントが作り出したコマンドー部隊に突入していく。

「んなるお!」

ジョーカーはコマンドーを殴り吹き飛ばしていく。

「まったくぞろぞろと……。暇なこつた。」

そう言いながらもジョーカーは裏拳で兵士をのめす。
すると。

次はフロッグポットが現れる

「んなあ！ もう一匹ドーパントが！？」

コマンダー兵士を連打しながらジョーカーは驚く。

「つちい！ どうすりゃあ……………」

すると来人はその場に着く。

「師匠！」

「来人！ 危険だ！ 下がれ！」

来人はフロッグポットの動きから状況をなんとなく理解した。

「師匠……。まさか他にもドーパントが？」

「ああ。まったく空気が読めねえドーパントもいたもんだ……。つ
ぜ！」

ジョーカーはコマンダー兵士を背負い投げをし、向かってきた一体
にストリートパンチや横蹴りを叩き込む。

「・・・・・・・・・・。」

来人はうなだれる。

そんな間にもジョーカーは回し蹴りで兵士達を伏せていく。

すると。

「・・・・・・・・フロッグ！ 案内してくれるか!？」

来人はふっきったかのようにフロッグポットに聞く。

フロッグポットは答えるように飛びはねながら案内を始める。

来人は後につき、走り始める。

「待てっ！ 来人お！」

ジョーカーは後を追おうとする。

「にげるなよ。遊んでくれるのはお前しかいないんだよ。」

コマンドードーパントと兵士達が立ち塞がる。

「ああ！ もう！ 邪魔くせえ！ てめえら、邪魔すんじゃない！」

ジョーカーは目の前の敵達と更に激しくぶつかりあった。

その動きには弟子を助けるために焦る翔太郎の心情を表すようであった。

相談（後書き）

実は今度特別編を書きたいと思うのですが、どんなストーリーがいいでしょうか？

何か案を求めます。

総合点300突破特別版・日常（前書き）

題名通り総合評価が300を突破記念です。

これもまたこの作品を愛してくださった皆様のおかげです。

総合点300突破特別版・日常

とある日常。

しかし雨。

前日に仕事を済ましてしまった二人（主に翔太郎）は、今日は特にやることはない。

「どうしましょう、翔太郎さん？」

誰がどう見ても暇そうなスバルが翔太郎に聞く。

「あ〜、どうすつかなあ〜。テレビもやってねえし、雨だから外に出んのもかったるいし、せっかくだからのんびりするかあ〜。」

そんなスバルに対し翔太郎はソファアに座りながらハードボイルド小説を読む。

するとスバルは顔を赤らめて……。

「じゃ、じゃあ久々に……、ベッドで……。」

その先はこの小説を読んでくださっている皆様なら容易に予想出来るであろう。

「却下だ。」

スバルが言いそうなことを翔太郎は見事な推理で察し、瞬時に却下した。

「(む~~~~)」

スバルは頬を膨らませる。

「たまにはのんびりすんのもいいだろ。なっ。」

翔太郎はスバルの頭を撫でる。

「んむう~~~~。じゃ、じゃあ……………」

「あ？」

するとスバルは翔太郎の膝に寝そべった。

「えへへへへへ」

スバルは満面の笑みである。

「……………つたく、お前は……………」

そんなことを言いながらもまんざらでもなさそうな翔太郎。

「出来れば撫でて欲しいなあ。」

「調子にのんな。」

「いたっ。」

翔太郎はスバルにデコピン。

「（んむう〜）」

頬を膨らませるスバル。

「……………わ たよ。」

翔太郎はスバルを撫でる。

「はあ〜、幸せ〜。」

スバルは猫口で幸せを一杯に表す。

まるで飼い主に撫でてもらっている猫である。

「……………たくお前は子供かよ。」

翔太郎はスバルに辛口を吐くも手は止まっではない。

「違います！ ただ……………」

「？」

「甘えん坊なだけです！」

「（カクッ）」

翔太郎は小さくずっこける。

「あんまり変わんねえような……。」

「嫌……ですか？」

スバルが小さく聞く。

若干涙目で。

「いや、……嫌じゃねえが……、まあたまにはいいかもしんねえなあ……。」

「そうそう。少なくとも私は今すっごい幸せです　ずっとこうしてたいです」

スバルは翔太郎の膝ですりすりし始める。

「そんなに膝って居心地いいもんか？」

「あ？」

「誰でもいいってもんじゃありません！　翔太郎さんの膝だからいいんです！」

「そういうもんか？」

「そういうもんです！」

「……まあ、たまには……な。」

「やった」

しばらくこの状況は続いた。

~~~~数分(?)後~~~~

「……………あ！ もう夕飯だぞ！」

「えっ？ あっ、いけない！」

午前中だったはずが気が付くと夕食の時間になっていた。

「……………。」

「(す~~~~、す~~~~、す~~~~…………….)」

夕食後。

ソファーに座る翔太郎。

その翔太郎に寄りかかるのは寝ているスバル。

「……………たく、こいつは。子供かよ、ホントに。来人の方がまだ大人……………。あまり変わらねえか。」

「へっくしょん。」

既に雨がやみ、あちこちに水溜まりがある公園でジャージ姿の来人はくしゃみをする。

ちょうどランニング途中休んでいた時であった。

「……………風邪ですか？」

隣には同じくトレーニングウェアのアインハルト。

偶然を装って来人と鉢合わせしたことはアインハルトにしか知らないことである。

「いや、体調管理には気を付けてるし……………まさか……………」

「……………?」

「……………いや、まさかね。漫画や小説じゃあるまいし。」

「……………はあ……………」

その後二人は他愛もない世間話をした。

アインハルトの顔が赤いのは辺りが暗いからか、察されなかった。

再びスバル宅。

「・・・まあ。黙つてりゃあ美人なんだがなあ・・・。」

「(す〜、す〜、す〜・・・)」

翔太郎がスバルの顔を覗きこむもスバルは起きない。

「風邪ひかせるのも可哀想だし、運んでやるか。」

翔太郎はスバルをお姫様抱っこで抱き抱える。

そしてベッドに運ぶ。

スバル宅・寝室。

「よっど。」

翔太郎はスバルをベッドに寝かせる。

「しっかし軽いいな、女つてのは。まあよかったが・・・。」  
「するど。」

「んむ〜。翔太郎さあ〜ん。」

スバルは寝てるにも関わらず翔太郎の上着の裾を捕まえる。

「ちよつ、おい。」

しかしスバルは離さない。

「まったくこいつは。寝ててもマイペースだな。」

「いゝやゝだゝゝ。は・な・れ・た・く・ないゝゝ。」

スバルはただをこねる。

「ったく。しゃねやつだな。・・・まあ起きてても、嫌い・・・  
・てわけじゃねえがな・・・。」

翔太郎は抵抗を諦めベッドに腰かける。

そしてスバルの頭を撫でるとスバルは安心した表情を浮かべ、裾を  
掴む手を緩める。

「大丈夫だ。例え離れてても俺の心はいつでもお前を守る。だから  
静かに就寝なさいませ。お・ひ・め・さ・ま。」

翔太郎は軽くスバルの頭を二回叩く。

そして腰を上げるとリビングに戻る。

その後は普通通りに入浴、寝室に入る。

しかし。

~~~~~数時間後~~~~~

「.....」

むにむに。

「（んむ〜）。むにゃむにゃ……………」

「……………寝相悪くねえか……………」

むにむに。

状況は…………。

普通に寝ている翔太郎。

しかしその翔太郎をスバルは抱き枕にしていた。

そのため今翔太郎はスバルに、正確には腕がスバルの胸に挟まれている状態である。

「……………はあ〜。眠れねえ。」

この感触のせいで全く眠れない翔太郎。

「……………もしこいつと結婚したら、生命の危機を感じるな。」

しかし徐々に慣れてきたのか、一時は引いていた眠気が徐々に戻ってきた。

「……………でも……………」

翔太郎はスバルを抱きよせる。

「…………悪くはねえかもな…………。」

そういつて翔太郎は眠気に従いまぶたを閉じた。

一人の仮面ライダーとその仮面ライダーにぞつこんな一人の女性、
そんな二人のとある日の出来事であった。

総合点300突破特別版・日常（後書き）

たまにこつというのがあります。

今回はでっかく400を狙います！

スバル「次は翔太郎さんとベッドで……。」

ではでは次回！

スバル「ちよっ、ちよっとお〜〜」。 (涙目)

初戦（前書き）

さあ、一体このタイトルは何を表すのか！？

大半の方々には予想できそうですが・・・。

後新しい仮面ライダーの画像見たんですが。

なんていうか・・・。

言葉に出来なかったです。

初戦

フロッグポットを追いかけ街を走る来人。

しかし徐々に街から外れていった。

「街から離れてきてる……。なんでだろう？」

フロッグはそんな来人をお構いなしに進む。

（使わなきゃいけない……。かな……。）

来人は右手に握り締めるサイクロンメモリを見る。

しかし足は遅くなることはおろか、徐々に早くなっていった。

港ではヴィヴィオ、アインハルトがぶつかりあっていた。

そして戦いは終盤へ。

「ああああっ！」

（強くなるんだ！ どこまでだつて！）

ヴィヴィオの拳をアインハルトは手で受ける。

しかしそんな中でもアインハルトは踏み込む。

そしてヴィヴィオの腹部に霸王断空拳を放つ。

そしてヴィヴィオは後ろに吹き飛ばされる。

「一本！ そこまで！」

アインハルトが息切れをする中でノーヴェエが試合終了を宣言する。

「陛下！」

「ヴィヴィオ！」

リオとコロナ、オットー、デイドがヴィヴィオに駆け寄る。

~~~~~数分後~~~~~

「ヴィヴィオ大丈夫か？」

ノーヴェエが心配するヴィヴィオはデイドの膝で目を回している。

「怪我はないようです。・・・大丈夫。」

デイドは冷静に状況を把握する。

「アインハルトが気をつけてくれたんだよね。防護を抜かないように。」

「ありがとっス、アインハルト。」

「「ありがとうございます。」」

デイエチ、ウエンディ、リオとコロナはそれぞれアインハルトに礼を言う。

「ああ、いえ……。」

アインハルトは照れくさそうである。

すると。

「……!?!?」

突然力が抜けたアインハルトはティアナの胸に収まる。

「す、すみません……。あれ!?!?」

「ああ、いいのよ。大丈夫。」

「ラストに一発カウンターがカスったろ。時間差で効いてきたか。」

ノーヴェがよくわかっていないアインハルトに説明。

「だ、大丈夫……。大丈夫、です。」

アインハルトは力を踏みしめ一人で立ち上がるうとするも、やはり力が入らないのか次はスバルに収まる。

「よつと!?!?」

スバルはアインハルトを快く受け入れる。

「いいからじっとしてろよ。」

「そのまま、ね。」

「……はい。」

アインハルトはノーヴェ、ティアナからの意見に従いスバルの元で落ち着く。

一方ではのびたヴィヴィオを皆が看病している。

「断空拳はさっきのが本式か？」

ノーヴェがアインハルトに聞く。

「足先から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが断空です。私はまだ拳での直打と打ち下ろししか撃てませんが……。」

「なるほどな。……で、ヴィヴィオはどうだった？」

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼なことを言っていました。……訂正しますと。」

「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ。」

ノーヴェはウィンクして笑う。

（彼女は霸王が会いたかった聖王女じゃない。……だけどわたし

はこの子とまた戦えたらと思っている)

「はじめまして。……ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです。」

アインハルトは近寄り、気絶したままのヴィヴィオの手を取る。

「それ、起きてる時に行つてやれよ。」

ノーヴェが後ろから促す。

「……恥ずかしいので嫌です。どこかゆっくり休める場所に運んであげましょう。」

「はい!」

アインハルトはヴィヴィオを背負い歩き出す。

「……そういえば翔太郎さん、今頃なにしてるんだろう……。今日は久々に洗車するって言つてたけど……。」

スバルが呟くも一同は移動を始める。

一方……。

「つおりゃあああ!」

「ぐおおおお!」

ジョーカーはコマンダー兵士達を叩き伏せた後、コマンダードーパントに殴りかかる。

「貴様ぁ……。」

コマンダーは立ち上がる。

そして腕のブレスレットを操作しようとする。

「させつか!」

ジョーカーは素早くジョーカーメモリーをジョーカーマグナムにスロツトし、マキシマムモードに変形させる。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「ライダー……、シューティング!」

ジョーカーマグナムから紫の無数の光弾が放たれる。

光弾はコマンダーのブレスレットに命中しブレスレットは爆発する。

「何!」

「これ以上あんなのがぞろぞろ出されてたまつかよ。悪いがはこつちはせつかちでな。決めさせてもらっぜ!」

『トリガー!』

ジョーカーはトリガーメモリをドライバーにスロットしトリガーに変身する。

『バット!』

そしてバットショットをトリガーマグナムにセットし、更にトリガーメモリをマグナムにスロットしマキシマムモードに変形させる。

『トリガー・マキシマムドライブ!』

「させるかあ!」

コマンダーは背中からミサイルを一発放つ。

ミサイルは真正面にトリガーに迫るが……。

「トリガー……バットシューティング!」

トリガーはためらわずに引金を弾く。

マグナムから放たれた青い光弾はミサイルを貫通しコマンダーに命中中。

「がああああああ!」

ミサイル、後にコマンダーが爆発。

男性が現れる。

「まったく邪魔しやがって!」

ジョーカーはスパイダーシヨックのワイヤーで犯人の男を確保し後は管理局に任せ、自身はフロッグポットの後をスタッグフォンを手掛りにハードボイルダーで走りだした。

ヴィヴィオ達がいるアラル港湾埠頭に近寄る怪物。

白い身体に翼を持つバットドーパントである。

「ふふふ。確か青髪の女を捕まえていけば大金……。我ながらいい仕事を見つけたものだ。」

バットは徐々にヴィヴィオ達がいる場所に近寄っていく。  
すると。

「待て！」

「あゝっ!？」

バットの前に屋根から飛んできた来人が立つ。

来人はこの街で生まれ、この街で育った。

そのためこの街に関する知識は相当なものである。

そのため近道で屋根を駆け抜け、バットの前に立ちはだかった。



「何だ、ガキ。俺の仕事を邪魔するな。」

「何をするかは知らないけどさせない。……僕が止める！」

（僕はなんに対しても半人前で未熟かもしれない……）

来人は腰にドライバーをセットする。

『サイクロン！』

そしてサイクロンメモリのスタートアップスイッチを押す。

「瞬時の変身魔法サポート。……いけるか。スピリッツ。」

『問題ありません。』

自らが持つチェーンブレスレット型のデバイス、スピリッツが答える。

（でも半人前だからって何もなくていい言い訳にはならない）

「変身。」

来人はメモリをスロットすると同時に展開する。

『サイクロン！』

すると来人の身体は瞬時に十代後半くらいの少年に変身し、身体を風が覆い来人はウインディスタビライザーをなびかせる緑色の戦士に変身した。

(とりあえず今は・・・、目の前の友達を守る！)

「さあ、お前の罪を数えろ！」

来入、改め仮面ライダーサイクロンは右の人差し指をドーパントにむける。

「貴様・・・、仮面ライダー！？ 馬鹿な！ 仮面ライダーは今ヤツが足止めしているはずだ！ それに一人しかいないはず・・・。」

「当然っ！ 僕は・・・今日から・・・仮面ライダーだ！」

「素人が。なら容易い。お前を殺ってから仕事に移るとしよう！」

バットはサイクロンに飛びかかる。

しかし来入は武術の経験者・・・。

「せいっ！」

サイクロンは逆に飛び回し蹴りを叩き込む。

「ぐおっ！」

バットは壁に叩きつけられる。

「はあああああああ！」

サイクロンはバットの首にリアットをかけたまま走りだす。

サイクロンとバットはその場から消える。

その後。

「ん？」

チンクがその場を覗きこむも、その場には何も無い。

「どうしたっス？」

ウエンデイが聞く。

「いや、なんでもない。なんか物音が聞こえた気がしたんだが……  
。気のせいかな。」

「でりゃあああああ！ はああああ！」

サイクロンとバットは誰もいない河原に現れ、サイクロンはバットを投げ飛ばす。

「ぐっ！ このガキがああ！」

バットは飛びかかる。

しかしサイクロンは……。

「せいっ！ はっ！ だあ！」

「ぎい！」

強烈な回し蹴りを次々に叩き込みバットを怯ませる。  
そして瞬時に赤いメモリを手にする。

『ヒート！』

そのヒートメモリを素早くスロットし展開する。

『ヒート！』

「だああああああ！」

サイクロンは仮面ライダーヒートとなり、バットに向けてジャンピングパンチを放つ。

「はああああ、はあ！」

そして熱を纏った右手で勢いよくストレートを放つ。

「ぎいがあああああ！」

バットは吹き飛ばされる。

『ルナ！』

ヒートは更に黄色いメモリをスロットし展開する。

『ルナ！』

仮面ライダールナは右手を伸ばし、巻き付けるとバットを振り回す。

「うおおおおおおお・・・！」

そして・・・。

「てりゃあああああー！」

バットを投げ飛ばす。

「ぬあああああー！」

バットは地面に叩きつけられる。

「これで・・・。」

『サイクロン！』

ルナはサイクロンに変身しサイクロンメモリをマキシマムスロットに装填する。

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

サイクロンの身体を街が包む。

そしてスロットのスイッチを叩く。

サイクロンは風を纏い、激しく回転しながらバットに接近。

そして……。

「ライダー……、トルネードおお！」

サイクロンの強烈な飛び回し蹴りがバットに放たれる。

「ぎいやあああああ！」

サイクロンが着地したと同時にバットは爆発。

そこには倒れた男とメモリの残骸のみが残っていた。

「はあ……はあ……はあ……。出来た……。」

サイクロンは肩で息をしながら立つ。

するとその場にハードボイルダーに乗ったジョーカーが現れる。

「何!？」

ジョーカーはハードボイルダーから降り、サイクロンによる。

「お前……、来人……なのか……?」

「……師匠……。」

ジョーカーとサイクロンは互いを見つめる。

二人の仮面ライダーはよからる形で出会い、対峙した。

師匠と弟子という関係の二人で。

そんな二人を木陰から見つめる人間が一人。

「まさか……。二人目の仮面ライダーとは……。」

しかし男は嬉しそうに笑う。

「楽しませてくれますね。仮面ライダー。」

しかしその笑顔には隠れた狂気以外何物でもなかった。

その後、バットとコマンダーだった二人の男は逮捕されたが、コマンダーだった男はただ破壊欲に従っただけ、バットに関して時限式の忘却魔法により全てを忘れていた。

二人目の戦士（前書き）

説明回です。

三人分なので長いです。



## 二人目の戦士

身長、体重は全て同一

仮面ライダーサイクロン：

身長：190cm

体重：80kg

パンチ力：2t

キック：4t

ジャンプ力：ひと跳び55m

走力：100mを5.0秒

フリリップ及び右風来人がロストドライバーとサイクロンメモリで変身した仮面ライダー。

俊敏な動きで敵を翻弄しつつヒット&amp;アウェイの戦い方で敵と戦う。

自在に手足に風を纏い打撃強化やかまいたちを発動出来る。

来人的場合は主に蹴りで戦う。

また来人自身の風の魔力変換との相乗効果によりジョーカー並の能力を得るが、経験上ジョーカーの方が上手。

仮面ライダーヒート：

パンチ力：2.5t

キック：5t

ジャンプ力：ひと跳び45m

走力：100mを6.2秒

ロストドライバーとヒートメモリで変身する仮面ライダー。熱によ

り攻撃力を高めての近距離戦で戦う。この姿の際はパンチ主体になる。

仮面ライダールナ：

パンチ力：2 t

キック：4 . 5 t

ジャンプ力：ひと跳び50 m

走力：100 mを6 . 8秒

ロストドライバーとルナメモリで変身する仮面ライダー。両手足が自在に伸びるアメイジング属性が追加されることにより変幻自在な戦いが可能になる。

ガイアメモリ：

サイクロンメモリ：

「疾風の記憶」を内包するメモリ。使用者のスピードを上げると共に風の能力を持たせる能力を持つ。

ヒートメモリ：

「熱の記憶」を内包するメモリ。高熱と闘争本能をかきたてる攻撃性を高めるメモリ。

ルナメモリ：

「幻想の記憶」を内包するメモリ。超常的な能力が内蔵されている。

必殺技（発動方法はすべて同じ）：

ライダートルネード：

仮面ライダーサイクロンの必殺技。マキシマムスロットにサイクロンメモリをスロットして発動。

身体を中心に竜巻を起こして放つ飛び回し蹴り。

ヒートバーニングビート：仮面ライダーヒートの必殺技。

両手に超高熱を宿して放つ左手のアップパーと右手のストレート。

ルナフロントムウィップ：

仮面ライダールナの必殺技。

左手を天に伸ばして敵に巻き付けて寄せた敵に右手で手刀を叩き込む。

ツール：

ロストドライバー：

フィリップは自作、来人は何故か部屋にあつた変身ベルト。翔太郎同様にメモリの出力を上げる能力を持つ。

特に形状に差はない。

## 対決（前書き）

果たして翔太郎は来人にどんな対処をするのか・・・。

少し悩みましたが、こうしました。

実は来週のウルトラマン列伝が楽しみで仕方なかったりします。

ちなみに好きウルトラマンはゼロ、ジャンボット、ネクサスが好きです。

一人ウルトラマンではありませんが。

## 対決

真っ向から見つめるジョーカーとサイクロン。

「……………」

「……………」

「……………師匠？」

「……………お前が言っていたのはこのことだったのか。」

「……………はい。でも……………」

「お前は変身したとき、何を思った……………何を考えた。」

「……………それは……………」

「……………その場だけで一生懸命だったか？」

「……………はい。」

「……………まあ、あの場では正解だったかもしれないな。」

「……………師匠。」

「……………来人、来週の日曜空いてるか？」

ジョーカーは不意に聞く。

「……………え？ ……大丈夫です。」

「……………来週の日曜10時、あの廃工場で待ってる。」

「え？」

「……………お前にも少し頭を冷やす時間は必要だろ……………」

「……………はい。」

「……………だから一週間時間を開けよう。俺も多少考えたい。」

「……………わかりました。」

「……………じゃあな。」

ジョーカーはハードボイルダーを走らせた。

「……………師匠。」

サイクロンは変身を解く。

来人はただただ立ちすくむだけであった。

ハードボイルダーを走らせる翔太郎。

街の中を法定速度を越えて走らせる。

(来人が仮面ライダーに……。どうしてこうなった……。とりあえずは……。アイツの深意を聞く必要があるな)

翔太郎はアクセルを更に回す。

途中アインハルト達とすれ違った。

「……………あれ……………」

スバルが振り向く。

しかし早すぎるスピードゆえに翔太郎は既に見えなくなっている。

「どうかしたの、スバル？」

「……………いや。何だか翔太郎さんがいたような気が……………」

「……………何も見えねえぞ？」

ノーヴェは頭を傾げる。

「……………いや……………気のせいだよね……………」

一同は何事もなかったかのように歩き続ける。

数時間後。

ヴィヴィオ達と別れたアインハルトは一人で街を歩いていた。

(今日は何だか長い感じがしました。 . . . .でもなんだか楽しかったです。 . . . .そういえば今日来人さんは何をしていたんですよ)

すると。

その例の人物が前を歩いていた。

なんとなく背中が疲れた様子であるが。

「来人さん。」

「 . . . . .あれ？ アインハルト。ごきげんよう。」

その人物、来人は振り向き笑う。

しかし無理矢理な作り笑顔である。

「 . . . . .どうかした？ アインハルト。なんだか嬉しそうだね。」

「 . . . . .そうですか？ . . . . .来人さんはなんだか疲れた様子ですね。」

「まあ、色々あってね . . . . .」

「 . . . . .そうですか . . . . .」



「アインハルトは一人？」

「……………はい。」

「一緒に帰ろつか。」

「え？」

アインハルトは驚く。

「？」

来人はそんなアインハルトを不思議に思う。

すると。

「……………お、お願いします。」

「うん。」

二人は一緒に歩き出す。

「……………あの……………失礼かもしれませんが私で良ければお話聞かせてもらえませんか。」

「……………いや……………でも……………」

「……………私じゃ不足でしょうか……………」

アインハルトは上目づかいで聞く。

ちなみにアインハルトは無意識である。

一応来人はアインハルトよりも背は大きいため、アインハルトが前屈みになると必然的に上目づかいになる。

「……じゃあ、……聞いてくれるかな……。」

「……はい。」

来人はアインハルトに話し出す。

ただ仮面ライダーになったことは省いて。

~~~~~数分後~~~~~

「……そうだったんですか。……翔太郎さんと……。」

公園で座る来人とアインハルト。

「……もう少し師匠に話すべきだったのかなあ……。」

「……でも翔太郎さんからは来週に話をしたいって言われたんですよね。」

「……。」

「……だったらそのときに本当に自分が思うことを伝えたらどうでしょう……。」

「……かも知れないね……。ありがとう。アインハルトと話せて良かったよ。」

来人はアインハルトに笑顔を返す。

「……い、いえ……。」

アインハルトは頬を赤らめながらも笑顔になる。

「そういえばアインハルト……。今日は何かいいことがあったみたいだね。」

「……え？ どうしてそんな……。」

「何だか嬉しそうっていうか……。」

「……はい。いいことがありました……。」

「だったら笑顔にならないと。ねっ！」

「……はい。」

アインハルトは若干照れながらも微笑む。

「うん。可愛い！ やっぱりアインハルトは笑顔が可愛いね！」

「か、可愛い？」

その一言により一気にアインハルトの顔面が赤くなる。

「うん。」

「か、かかかかかか……。」

するとアインハルトの様子がおかしくなってきた。

「ど、どうかした？」

「か、かかかかかか……。」

そして。

「可愛い……。」

アインハルトはぶっ倒れる。

「ちょ、ちょっと!?! アインハルト？」

「可愛い……。」

アインハルトはひたすらせの言葉を繰り返しながら目を回し続けた。

「……ん？」

アインハルトは起きた。

しかし気絶していたにも関わらず身体は揺れ、景色はゆっくり流れ

ていた。

そして頭が徐々に覚醒したのか、今の自分の状況を把握した。

「あ、起きた？」

「……………え！？　これは……………」

「アインハルトあのまま気絶しちゃうんだもん。だからおんぶして送ってるんだ。」

現在来人はアインハルトをおんぶした状態でアインハルトの家に向かっていている状況である。

「う、ごめんなさい。ご迷惑をかけて……………」

「大したことじゃないよ。友達だから当然！」

若干アインハルトは残念そうである。

「……………重く……………」

「？」

「……………重くないですか？」

「全然！　むしろすごく軽くてびっくりした。」

「……………そう……………ですか……………」

アインハルトは顔を赤くする。

しかしその顔を見られたくないため来人の背中に顔をうすぐめる。

「あ、アインハルト？」

来人は若干驚いて振り向く。

「……………一つ、わがママを……………」

「な、何？」

「……………もう少し……………このままでいいですか？」

「う、うん。」

来人は照れながら正面を向く。

二人はそのまま夜の街を歩いた。

事実アインハルトの自宅に着いたとき、アインハルトは不機嫌な顔をしていたとか。

一週間後の日曜日

廃工場。

ここはかつて来人が翔太郎に弟子入りを志願した場所にした場所。

ここに翔太郎が一人で立つ。

そして……。

「お待たせしました。師匠。」

「おう。来たか。」

来人が翔太郎の正面に立つ。

「……師匠。」

「……来人……、お前がどうやってその力を手に入れたかはわからない。ただわかるのは……お前はわかっていないってことだ。……仮面ライダーの責任を、……重みを。……お前にはまだ……仮面ライダーの名は早い。」

翔太郎はただジョーカーメモリを眺める。

「仮面ライダーの責任？」

「……だから……。」

翔太郎はジョーカーメモリをドライバーにスロットし傾ける。

『ジョーカー!』

「師匠？」

「…………俺に…………。」

ジョーカーは来人に人差し指をむける。

「…………聞かせてもらつぜ。…………お前の…………答えを。」

「師匠!? どうして…………。」

「簡単なことだ。口だけじゃなく戦い方からお前の覚悟を見る。もし半端だったら…………。」

「…………半端だったら?」

「…………メモリを渡せ。」

「! そんなあ…………。」

(…………覚悟か。確か僕は力に浮かれてたのかも…………、薄かったかもしれない)

来人はたじろぐ。

「…………どうした。お前にその覚悟があればいい話だ。」

「…………。」

「…………どうする?」

すると来人は無言でサイクロンメモリを持つ。

(…………見せよう。…………僕の答えを)

『サイクロン!』

「…………変身。」

来人はメモリをドライバーにスロットし展開。

『サイクロン!』

仮面ライダーサイクロンが立つ。

「それでいい。」

ジョーカーは手首をスナップさせる。

「…………師匠。見せます。…………僕の…………。」

サイクロンの構える。

「…………覚悟をお!」

サイクロンは走り出す。

「…………はっ!」

ジョーカーも走り出す。

そして二人は拳を突き出し…………。

「おらあああああ！」

「でええええいいい！」

互いの思いを込めた拳をぶつけあった。

両雄（前書き）

今回はかなり長くなってしまいました。

今回はもうすぐ感想数100件ということで特別編2を予定しております。

次は来人君とヴィヴィオ、またはアインハルトのデートを考えていますが皆さんはどちらがいいでしょうか？

両雄

「ぐっ！」

来人は壁に吹き飛ばされる。

向かい側には拳を突き出したジョーカー。

「どうした？ これで終わりか？」

「くっそお……。」

サイクロンは立ち上がる。

そして……。

「おらあ！」

「せいっ！」

二人は互いに蹴りを放ちぶつかりあう。

互いに足を戻した後は腕をぶつけあう。

しかしジョーカーはサイクロンの腕を持ち空中に投げる。

「おわっ？」

そしてサイクロンに後ろ回し蹴りを放つ。

「あっつ！」

サイクロンは床を転がる。

「つつ！」

『ヒート！』

サイクロンはヒートメモリをスロットし展開する。

「だあっ！」

ヒートはジャンピングパンチを放つ。

「ぬおっ！ あっつ！」

ジョーカーは吹き飛ばされる。

「やっってくれんじゃねえか。」

『メタル！』

メタルはシャフトを振り回す。

そしてシャフトの両はじをヒートにぶつけ、ヒートを突き飛ばす。

「つつ！」

『ルナ！』

「ならこっちも……。」

『トリガー!』

メタルもトリガーに変身する。

そのままトリガーマグナムを放つ。

「せいっ!」

ルナはアメイジングアームを伸ばし、ひたすらマグナムの弾丸を弾く。

「てい!」

そのままアメイジングアームをトリガーに伸ばしトリガーを弾き飛ばす。

「なるお!」

トリガーも弾き飛ばされながらも、マグナムを乱射する。

「ぐわっ!」

ルナも後方に飛ばされる。

「……そうですか……来人は留守ですか……。」

来人の家の前でアインハルトは落ち込む。

「うん。何だか大事な用事があるとかで……。」

受け答えるのは来人の弟。

「……ありがとうございました。」

「でもお兄ちゃんに何か用事があつたんだですよ？ もし良ければお兄ちゃんに伝えましょうか？」

「……いいえ。大丈夫です。では。」

アインハルトはそう言い残して立ち去った。

すると。

「アインハルトさあ~~~~ん。」

後ろからの声にアインハルトは振り向く。

「ごきげんよう。ヴィヴィオさん。」

ヴィヴィオが走ってきたのだ。

「どづしたんですか？」

「……いいえ。人を訪ねにきたんですが、いなくて……。」

「駄目ですねえ。女の子に迎えに来てもらうなんて。」

ヴィヴィオはぶんぶんという効果音を出しながら、頬を膨らませる。

「……………いえ、……………あの……………」

(実は約束していないんですが……………。何だかすみません、来人さん)

アインハルトは心の中で謝る。

「ところでアインハルトさん、今日空いていますか？」

「……………はい。大丈夫です。」

「……………もし良ければこの後ランニングに付き合ってくださいませんか。」

「……………はい。お供させていただきます。」

「やったあ!!」

ヴィヴィオは飛び上がって喜ぶ。

二人は街を揃って歩き出す。

しかし。

街の路地裏に二つの異形の影がうごめいたのを二人は知らなかった。

「ぐわっ！」

サイクロンは弾き飛ばされ、地面を転がる。

「はぁ．．．はぁ、．．．はぁ、．．．はぁ、．．．はぁ．．．。なかなかやんなぁ。」

ジョーカーは肩で息をする。

「はぁ．．．、はぁ．．．、はぁ．．．。」

サイクロンはゆっくりと立つ。

「こうなったら．．．、これで．．．。」

サイクロンはサイクロンメモリをドライバーから引き抜く。

「上等だ。」

ジョーカーもメモリを引き抜く。

そして両者はそれぞれ自身のマキシマムスロットにメモリをスロットする。

『ジョーカー．．．．。』

『サイクロン．．．．。』

『『マキシマムドライブ!』』

「ライダーキック!」

「ライダートルネード!」

両者は構える。

「……………」

「……………」

沈黙が走る。

そして。

「はっ!」

「せいっ!」

ジョーカーとサイクロンは跳躍し……。

「おりゃあああああ!」

「でりゃあああああ!」

それぞれの必殺キックがぶつかりあい爆風が起こる。

その爆風により廃工場のガラスが砕ける。

そして爆発は徐々に消える。

そこには……。

「……はあ、……はあ、……はあ……。」

激しく肩で息をするも立っているのはジョーカーのみ。

そしてそのジョーカーの側には……。

「いつつう……。」

変身が解け寝転んでいる来人。

ジョーカーは変身を解く。

「……負けました。師匠。でもなんだかすがすがしいです。」

「……。」

師匠は黙る。

「……どうぞ……。」

来人はドライバーとメモリを翔太郎に差し出す。

「……。」

翔太郎はドライバーに手を伸ばす。

しかし掴んだのはドライバーではなく……。

「よっと。」

「へっ?」

来人の腕を掴み、来人を起こす。

「な、なんで?」

「……………俺が以前探偵をしたことは言ったな、来人。」

「……………はい。」

「……………そのせいか俺は言葉だけじゃ人を判断できなくなつた。でも今お前に拳を交えてわかつた。……………お前は半人前だ。でもお前はそれでも自分にしかできないことをやった。」

「……………はい。」

「……………お前の戦いにはそれがにじみ出していた。……………俺にはお前を止める権利はねえ。」

「……………僕はこれからも必要とあらば変身します。例えば師匠が止めても……………。破門になつても。」

「……………。」

翔太郎は黙る。

すると

スタックフォンが鳴りだす。

翔太郎はスタックフォンを開く。

その画面にはドーパントを現す矢印が映っていた。

「まったく空気の読めねえ……。」

翔太郎は外に出て、ハードボイルダーに跨る。

「師匠！」

来人も後を追う。

「……師匠……。」

すると。

「………来人お！」

来人は翔太郎から投げられた物を受け取る。

ヘルメットである。

「……師匠……。」

「守りてえんだろ。お前も。大切なものを。」

「……はい！」
来人は翔太郎の後ろに跨る。

「アインハルトさん……。」

「……くっ。」

港に逃げ込んだ二人は脅える。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……、はぁ……、どうすれば……。」

その二人に歩み寄るのはバイオレンスドーパントとアイスエイジドーパント。

「いいねえ……、その幼顔……。」

「氷なのに、下の部分が熱くなる。なかなかの上玉だなあ。」

そのまま二体は近寄る。

（……くっ。確かドーパントはかなりの力が……）

アインハルトは以前のホッパーを思い出す。

現にアインハルトは全く歯がたたなかった。

（……あの時翔太郎さんが現れ無ければ……）

二人は一ヶ所に集まり脅えるのみであった。

「アインハルトさん……、私達……。」

「……大丈夫です。私が守りますから。」

アインハルトはヴィヴィオの手を握るもその手は震えている。

(……弱い。私は……。誰も守れない)

アインハルトの頬に涙が流れる。

そしてドーパントが襲いかかる。

「！」

ヴィヴィオは目をつむる。

「……くっ！」

アインハルトは歯を噛み締める。

その時。

爆音が鳴り出す。

「何！」

ドーパントはその方向、自分達の後ろを見る。

するとハードボイルダーが高速で接近してきた。

ハードボイルダーは止まる事なくドーパントにぶつかり、二体は吹き飛ばされる。

そして跨っていた二人がヘルメットを外して降りる。

「こんの変態ロリコン共が。」

翔太郎はソフト帽を被る。

「アインハルト！ 大丈夫？」

来人は脅えていた二人に寄る。

「………来人さん？ 大丈夫です。」

「えっ？ あなたは前に会った……。」

ヴィヴィオは目を開く。

「うん。確か高町ヴィヴィオさんだっけ？」

「はい……。」

ヴィヴィオは徐々に泣きやむ。

「ごめんね。怖い思いさせちゃって。大丈夫。僕が守るから。」

来人はヴィヴィオの頭を撫でる。

(か、かつこいい。・・・白馬の王子様みたい)

ヴィヴィオは顔を赤くして来人を見つめる。

来人は二人にウインクをして翔太郎の右に立つ。

その二人の女の子が赤面したのも知らず。

「来人お、それを言うなら俺達が・・・だろ？」

「はい！」

「行くぜ！ 来人お！」

「はい！」

二人は腰にドライバーをつける。

そして翔太郎は右手、来人は左手にメモリを持つ。

『ジョーカー！』

『サイクロン！』

二人はメモリをスロットする。

翔太郎は左手を腰に、右拳を顔の前で構える。

来人は左手を腰にしたまま、スロットした開いた右手を左サイドに

向けたのち時計回りに右上に伸ばす。

「「変身！」」

翔太郎は左手でスロットを展開と同時に右手を開く。

来人は左手でスロットを展開したまま右上に構え、右手を腰に当てる。

その変身ポーズは仮面ライダー1号を彷彿とさせるポーズだった。

『ジョーカー！』

『サイクロン！』

二人の身体を風が覆い二人はそれぞれ仮面ライダージョーカー、仮面ライダーサイクロンに変身する。

「か、仮面ライダー？」

「来人まで仮面ライダーに？」

ヴィヴィオとアインハルトが呆然とするなかジョーカーは左手の指鉄砲を向け、サイクロンは右手の人差し指をドーパントに向ける。

「さあ……、」

ジョーカーがドーパントを見る。

「お前の罪を……、」

続いてサイクロン。

「「数えろ。」」

二人の仮面ライダーの声が重なる。

「ふん！」

挑発と考えたのかドーパントが接近する。

「行くぜ？」

「はい！」

ジョーカーとサイクロンも走り出す。

そしてジョーカーはバイオレンス、サイクロンはアイスエイジと取っ組み合う。

「しゃあ！」

バイオレンスの拳がジョーカーに放たれるも、ジョーカーは踏み台にして跳躍し……。

「おらあ！」

回し蹴りが叩き込まれる。

そのまま飛び蹴りし、そのまま連続で蹴りを叩き込む。

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらあ……！」

バイオレンスは吹き飛ばされる。

「へっ！」

ジョーカーは手をスナップさせる。

一方……。

「せいやっ！」

サイクロンの強烈な蹴りがアイスエイジに叩き込まれる。

「ぐおっ！ 貴様あ！」

アイスエイジは冷気の玉をサイクロンに放つもサイクロンの手にはヒートメモリが握られており、瞬時にスロットされる。

『ヒートー！』

冷気の弾丸をヒートの熱で溶かされ、ヒートには当たらない。

「だあああああー！」

そしてヒートはジャンピングパンチを放ち、吹き飛ばす。

「ぎゃああああー！」

アイスエイジも吹き飛ばされ、バイオレンスにぶつかる。

「決めるぜ。」

「はい。」

いつの間にかメモリチェンジしたメタルとヒートが並び、ヒートはマキシマムスロットに、メタルはシャフトにメモリをスロットする。

『メタル……………』

『ヒート……………』

『『マキシマムドライブ!』』

「はあああああ……………」

ヒートは両手に熱を、メタルはシャフトにエネルギーを纏う。

そして跳躍。

「メタルインパクトスマッシュ!」

「ヒート…………バーニングヒートお!」

それぞれの必殺技が放たれドーパントは爆発。

二人の気絶した男が現れる。

「…………やったじゃねえか。」

メタルは左手の甲を出す。

「……師匠……、はい！」

ヒートも右手の甲を当てる。

すると。

「……あの……。」

アインハルトとヴィヴィオが歩み寄るのを二人は気づき変身を解く。

「ごめんな。遅れて。」

「ホンツツットにごめん！」

翔太郎はアインハルトの頭を撫でる。

来人も謝る。

「……ホントです。」

アインハルトは頬を赤らめながらもそっぽを向く。

「ごめん。許して！」

来人はアインハルトに頼む。

「……仕方ないですねえ。助けられました……。許してあげます。」

「良かったあ〜ん。」

来人は一安心。

そして二人はヴィヴィオに視線を移す。

「君は確か……。」

「高町ヴィヴィオ……だったか。」

「は、はい。」

ヴィヴィオはよく状況を理解出来ていない。

「ヴィヴィオもごめんね。変なことに巻き込んだんじやって。」

「……いえ……、その……。」

ヴィヴィオは下を見る。

そして。

「うえ〜ん……。」

ヴィヴィオは涙を流し来人に抱きつく。

「おー！」

「えっ、ちよっ。高町さん？」

ヴィヴィオに抱きつかれ来人は慌てる。

ちなみに来人は初めて女の子にハグされた。

「怖かったよ〜〜〜。」

しかしヴィヴィオは来人の胸で泣く。

「……………どうしましょう、師匠……………」

来人は困りながら翔太郎の方を向く。

(……………いいなあ。ヴィヴィオさん……………)

翔太郎の隣には羨ましそうに来人を眺めるアインハルト。

「まあ、いいんじゃないかねえか？ お前もまんざらじゃなさそうだし……………」

「……………」

翔太郎は頭をかきながら笑う。

「えええええ〜〜〜〜〜。」

来人は困るもヴィヴィオを離させようとはしていない。

「……………えつと……………、高町……………」

「ヴィヴィオ……………」

「え？」

「ヴィヴィオって呼んでくれなきゃ離しません。」

ヴィヴィオは来人の胸にうずくめていた顔を上げ、来人と視線を合
わせる。

「……えつと……高ま……。」

「……ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオは頬を赤らめて強く促す。

「は、はい！ ヴィヴィオ。」

「……う、うん。」

自ら強制したにも関わらず、名前を呼ばれヴィヴィオは顔を赤くす
る。

「とりあえず二人とも無事で良かったぜ。そんじやな来人。」

翔太郎はハードボイルダーに跨り、エンジンをつける。

「それとなあ、来人お！」

「はい！」

「今度も俺の背中あ、頼むぜ。」

翔太郎は左手を来人に向ける。

「……………はい！」

来人は大きく返事を返す。

翔太郎は笑うとハードボイルダーを走らせその場を去っていった。

すると。

「……………来人さん。もし良ければこの後空いているでしょうか？」

アインハルトが来人に聞く。

あまり見えないが少々緊張気味に。

「う、うん。大丈夫だけど……………」

「じゃ、じゃあそれではこれから私達とお茶会でもいかがですか？」

ヴィヴィオが来人を押す。

ゼロ距離の強い力から来人は何とかふんばる。

「う、うん。」

来人は承認。

というよりここで断る勇気がなかったただけだが……………。

「じゃあ……。」

「………お願いします。」

二人は手を差し出す。

「………。」

来人は戸惑う。

しかし翔太郎の弟子故の推力が働いたのか状況を把握し、二人の手を掴む。

「えへへへへへ。」

「………(ポッ)」

来人と手を繋ぐ二人の乙女はそれぞれの反応を示す。

「それじゃあ……、行こっか。」

「はい！」

「………はい。」

三人は一つの方角に歩き出す。

その後三人は近くにあった喫茶店で会話をした。

特に他愛もない話ではあったものの二人は終始嬉しくてたまらない表情を浮かべていた。

両雄（後書き）

Vシネマ「仮面ライダーエターナル」レンタルまであと一週間！

感想数100突破記念・発汗（前書き）

長くなりました。

感想100件突破記念です。

次回は旅行偏かもしれませんが・・・。

旅行中にドーパントが出たら・・・、といふことは目をしむってくださいます。

感想数100突破記念・発汗

とある遊園地。

また日曜日だけあって子供づれやカップルが多く集まっている。

その入り口に・・・。

ドキドキドキドキドキ。。。

来人がいた。

Tシャツに上着、膝まで長いズボンという来人の活発さを表現したような服装である。

自覚できるぐらいに上がる心拍数。

そのうえ汗まで出てきた。

何せ彼は女の子と二人きりで遊園地、いわゆるデートは初めてであるからだ。

(なんでこんなことに・・・)

話は数日前にさかのぼり・・・。

「来人さん、日曜日暇ですか？」

「う、うん。まあ……。」

朝のランニングを来人と楽しむヴィヴィオが来人に聞く。

その後ヴィヴィオと来人は互いに番号を交換し、友達となっていた。

少なくとも来人は。

「……あの……テスト勉強の息抜きに……。」

ヴィヴィオは顔を赤くしながらチケットを差し出す。

「……どうですか？」

上目づかいでヴィヴィオが聞く。

しかし実際来人には断る理由もなく……。

「うん。構わないよ。」

来人は笑顔で答える。

「ほ……、ホントですか？」

ヴィヴィオは満面の笑みを現す。

「うん。えっと10時ぐらいがいいかな。」

「はい」

ちなみにヴィヴィオは土曜日1日かけて服をコーディネートしていたらしい。

「来人さあ~~~~ん」

向こうからヴィヴィオが走ってくる。

チェックのスカートにセーラー服のような上着は活発さをよく現す。

「ごめんなさい。遅くなっちゃって……。」

「ううん。全然。可愛い服だね。」

「あ、ああありがとうございます!」

ヴィヴィオは顔を赤くしながら頭を下げる。

「でもなんか混んでるね。」

やはり日曜日らしく人が多い。

するど。

「あ……。」

「ん?」

ヴィヴィオがゆっくり手を差し出す。

「それじゃあ……、あの……、手を……。」

「手を？」

「……繋ぎ……ませんか？」

バクバクバクバクバク……。

上目づかいのヴィヴィオのアプローチに来人の心拍数が上昇。

「……。。。」

思わずリリースする来人。

「……あつ……あのつ……嫌ならいいんです、はい。」

「……はい。」

「え？」

来人はヴィヴィオの手を握る。

「……や、やっぱり迷子になるとお互いに困るし、女の子はちゃんとエスコートしなきゃいけないって師匠も言ってたし……。」

「……はい」

ヴィヴィオは頬を赤らめ、来人は照れながら二人手を結び、遊園地に入った。

そのまま二人はコーヒーカップやジェットコースターを楽しみ、二人とも満開の笑顔で時間は過ぎていった。

一方そのころ……。

「ふ〜ふ〜ふ〜ん……」

高町邸。

ここに昼食の準備をしている二人の女性。

片方は茶髪のサイドポニー、もう片方は金髪のロング。

「そういえばヴィヴィオどこいったの？ 何だかすごいおめかししてっただけど……。」

金髪の女性、フェイト・テストロッサ・ハラオウンは茶髪の女性に聞く。

「う〜ん。実は私にも教えてもらってないんだよね〜〜。」

茶髪の女性、高町なのははサラダの盛り付けをしながら答える。

「でも女の子があんなにおめかしして出かけることって……、あれだよな？」

「あれ・・・かなあ・・・。」

フェイトの一言になのはある案を浮かべる。

「・・・まさかね。ヴィヴィオがデートなんて・・・。」

「で、で、でもヴィヴィオは可愛いし、性格も明るいから多分もてるはずだよ！ じゃなきゃおかしいよ！」

「・・・フェイトちゃん・・・。」

なのは我が娘を自我自賛するフェイトに若干の苦笑いを浮かべた。

「わあああああ・・・。」

「たっつかいなあ~~~~。」

二人とも一つの窓に顔を近づけて外を眺める。

するど。

「」「！」「」

二人は自分達の顔が異様に近づいていたのに気づく。

「・・・。。。」

「……………」

暫く互いの顔を眺める二人。

互いの瞳には向かい側の相手の顔が映る。

「……………」

「……………」

互いに何も言わずに見つめ続ける。

というよりは身体が動かない。

しかし気がつけば……………」

「……………」あれ？」

「……………」はい？」

観覧車はすでに一回転しており、二人は観覧車から出ていった。

やたら顔が赤いまま。

「……………」

「……………」

結局その後ぎこちないまま時間が過ぎ……。

「……………なんかあつという間でしたね。」

「……………だね…………。」

夜空はオレンジ色に染まり、もうじき太陽が今日という日を働き抜く。

「……………なんだか今日はありがとう。楽しかったよ。」

「……………い、いえ！ 私こそ付き合ってくれてありがとう……
います！」

ヴィヴィオは頭を下げる。

するど。

「……………あのお。」

「?」

ヴィヴィオの反応に来人は頭を傾げる。

「来人さんとアインハルトさんって……………その……………」

「何?」

「……………付き合ってるんですか?」

「うえ？」

「……………」

「……………いや、……特には……………」

「そ、そうですね〜。」

ヴィヴィオは胸をなで下ろす。

「……………何で？」

「……………いや、……あのぉ、……そのぉ……………来人さんが好きだから……………」

後半はほとんど声になっていなかったヴィヴィオ。

「え？」

良く聞き取れなかった来人は頭を傾げる。

するとヴィヴィオは深呼吸し、高々に宣言する。

「私は……………、来人さんが……………、来人さんがあ、大っ好きです！」

「……………え？」

「……………」

「……………うええええええええええ！？」

来人の驚いた声が夜空に響き渡る。

帰り道を歩く二人。

先を歩くは来人。

それにヴィヴィオが続く形である。

「……………」

「……………」

ただし二人とも顔が赤い。

「……………あの！」「

二人の言葉がシンクロする。

「……………先にどうぞ。」

「いやいや、レディファーストだし……………ヴィヴィオからどうぞ。

「

……………じゃあ……………おっきのじやんぶですけど……………」。

「うん。うん。」

「……すぐに答えはいりません。……でも……。」

「（ゴクッ）」

「私を友達としてじゃなくて……、一人の女の子として……見
てくれないですか？」

「……。」

「……来人さんは？」

「……僕の師匠、左翔太郎さんは僕に男の仕事の八割は決断、
残りの二割はオマケって言った。……でも僕は……、師匠と
は違う。……すぐには答えは出せない。」

「……。」

「……それでも……。」

「……それでも構いません！ 来人さんには！」

するとヴィヴィオは走り出し、来人の頬に唇を付ける。

「……。」

突如のことに来人は固まる。

「……。」

ヴィヴィオは黙って唇を離す。

「……答えはまだ要りません……。」

固まる来人にヴィヴィオは微笑む。

「でも私は来人が好きです。それだけは変わりません。」

「……えつと……。」

来人は声を出そうとするも……。

(言葉が浮かばない)

するとヴィヴィオはいつの間にか左手にあつた高町家に向かって走り出す。

そして振り向く。

「じゃあまた！ 来人さん！」

「……ヴィヴィオ！」

来人はヴィヴィオを呼ぶ。

「……またね。」

「……はい。」

ヴィヴィオは笑顔で答え、玄関に入ってしまった。

翌日。

「……………それですね……………あれ？」

「(ボ~~~~)」

アインハルトがさっきから話しているもの、来人は上の空である。

「……………来人さん？」

「うえ？」

「……………どうかしましたか？ 何だか上の空でしたけど……………」

「いやいやいや。なんでもない！ なんでもないよ！ それよりもその後は？」

「……………その後はヴィヴィオさんが……………」

「ヴィヴィオ!?!」

「……………来人さん……………」

来人の異様な反応にアインハルトは頭を傾げる。

そしてジト目で来人を睨む。

「ど、どうかした、アインハルト？ そんなに睨んじゃせつかくの可愛い顔が台無しだよ？」

来人は顔をひきつらせる。

「……来人さん……、怪しいです。何かヴィヴィオさんと何かあつたんですか？」

「(ダラダラダラダラ……)」

何かの病気ではないかと思える程の来人の発汗量に、アインハルトは何かを察知した。

ちなみに翔太郎はアインハルトには探偵のいろはをおしえていない。

言うなれば女の勘……。

第六勘である。

「(ジ~~~~~)」

「(ダラダラダラダラ……)」

再びジト目のアインハルトに来人は視線を剃らすもアインハルトの視線は容赦なく来人に突き刺さる。

「……来人さん。詳しく聞かせてく……だ……さ……い……ね？」

アインハルトは無理矢理に笑顔を作る。

口元をピクピクさせながら。

「……………はい。」

来人はしみじみ思う。

”女の嫉妬は怖い”

「……………」

「……………」

放課後アインハルトと来人は下校中。

その後、日曜日のことを半強制的に言わされた来人。

その後アインハルトはなんにも返事をしなかった。

現在もビクビクする来人に対しアインハルトは無表情である。

ただし髪に隠れてはいるものの血管が浮き出ている……………よう
な気がした。

ただ来人にはそれが気のせいではないとなんとなく察した。

「……あのお……アインハルトさん？」

「……なんでしょうか、右風さん？」

「……怒ってない？」

「……別に怒っていません。」

「……怒ってるよね？」

「……だったら誤ってくれるんですか？」

「……そ、そりゃあ……まあ……。」

「……でしたら！」

アインハルトは振り向き来人に寄る。

「……今度は私と……。」

「……私と？」

「(カア~~~~~)」

思わず赤面するアインハルト。

する。

……

「グフツ。」

来人が腹を抱えて座り込む。

アインハルトが勢いよく来人に正拳突きを放ったからである。

不意打ちであつたためモロに入った。

「おおおお……。」

痛みで立てない来人。

「……………許してあげます。ただし……。」

「まだなんかあんの？」

涙目で来人は自分を見下すアインハルトを眺める。

「……………今度は私と……。」

「私と？」

「……………で……………で……………」

「で……。」

「……………デートして下せぬ。」

「……………うん。うん。」

「……そうですね。」

アインハルトの顔が晴れる。

「……とりあえずさあ……。」

「……は、はい。なんでしょう？」

「手え、貸して。」

「あ。すすすいません。」

アインハルトは慌てて来人に肩を貸す。

自分がこうしたことはさておき。

「効いたなあ、アインハルトの。」

アインハルトに肩を借りる来人は腹部を擦りながら、立ち上がる。

「……すいませんでした。」

「でもまあ、ごめんね。何だか不機嫌な思いさせちゃって。」

「……い、いえ。そういうところ、私大好きです。」

アインハルトは顔を赤くして言う。

「何か言った？」

実際アインハルトの後半の言葉はかなり小さかったため、聞き取れなかったため聞き直すも……。

「……な、なんでもないです。」

アインハルトは顔を赤くして、そっぽを向くもちゃんと来人を支えて歩きだす。

未だに腹が痛むのか、まだ涙目の来人とほんのり顔が赤いアインハルトは下校の道を歩き続ける。

妄想（前書き）

まず言います。

今回も翔太郎は出ません。

翔太郎「なあ、俺が主役だよなあ。」

イエスオフコース。

しかし次こそは活躍しますんで。

マジで。

だからさっきから押し付けてくるそのマグナムをしまってくださいません？

翔太郎「しゃーねえ。だが次こそ出さなったらお前の罪を数えることになるぜ。」

わかりました。

ではでは。

翔太郎「さあ……、おま……。」

スバル「お前の罪を数えろ。」

翔太郎「スバルうううううううう！（怒）」

ではでは。

妄想

あれから数週間後。

何度かドーパントが現れては撃退していった翔太郎と来人。

特に来人にとってはテストと同時期であったためつらかった。

しかしテストという戦いも今日が本番。

ちなみに必死に勉強したヴィヴィオ達と違い、来人とアインハルトは余裕しゃくしゃくである。

ここはナカジマ邸。

「みんなで旅行あたしも行きかけたツス〜！」

「あー、うるせーな。」

ウエンディがだだをこねる隣でノーヴェエはモニターと睨みあう。

「あたしらだって別に遊びにいくわけじゃねー。スバルはオフトレだしあたしはチビ達の引率だ。」

ノーヴェエが無愛想に答える。

すると。

「とかいって通販で水着とか川遊びセットを買ってるのをおねーちゃん知らないとでも?」

「なんだ。そうなのか。」

ノーヴェのものであるう荷物を持つディエチとチンク。

「!!!! おまえ、ヒトのもの勝手にッ!」

ノーヴェは顔を赤くしながらディエチから荷物を奪いとる。

「いや、発送データに中身書いてあるし。まあいいじゃない。ノーヴェはバイトも救助隊の研修も頑張ってるんだし。」

「まったくだ。」

「だから遊びじゃねーって。」

照れるノーヴェ。

「そういえばあの子……、アインハルトも一緒か?」

「そのつもり。これからさそうんだけど。」

チンクの質問に群がるウエンディを止めながらノーヴェが答えた。

「合宿……ですか? すいません。私は練習がありますので。」

『だからその練習のために行くんだって。あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオもくる。練習相手には事欠かねー。しかも魔導師ランクAAからオーバースのトレーニングも見られる』

「はい……。」

『ついでに歴史に詳しくておまえの祖国のレアな伝記本とか持つてるお嬢もいる。まあたった四日だ。だまされたと思って来てみろって。つまんなかったら走り込むなり一人で練習するなりしていいんだし』

「あの……。」

『いいから来い！ 絶対いい経験になる！ ついでにちょっとしたサプライズもある。』

「？」

『とにかく後で詳しいことメールすつから、とりあえず今日の試験がんばれな』

「……はい……。」

試験が終わって高町邸。

花丸評価を受けたヴィヴィオ、リオ、コロナはなのは、フェイトとリビングで過ごしていた。

すると。

ピンポーン。

現れたのは……。

「こんにちは。」

「アインハルトさん！？ ……とノーヴェ！」

私服姿のアインハルトとノーヴェであった。

「異世界での訓練合宿とのものでノーヴェさんにお誘い頂きました。同行させていただいて宜しいでしょうか？」

すると。

「はいッ！ モー、全力で大歓迎ですッ！」

ヴィヴィオは興奮しながらアインハルトの手を握る。

「ほらヴィヴィオ。上がってもらって。」

「あ、うん！」

フェイトの声にヴィヴィオは赤面しながら、同様に赤面するアインハルトの手を離す。

「アインハルトさん、どーぞ！」

「お邪魔します。」

アインハルトは高町邸に上がる。

「あの子が同行するって教えなかったの正解だったねノーヴェ。」

「はい。予想以上に。でも……。」

「?」

「ヴィヴィオにはもう一つドッキリが用意してありますけどね……。」

「?????」

ノーヴェの意味深い言葉にフェイトは頭を傾げた。

すると。

ピンポーン。

再び客人。

「?????????」

「お、来たか。」

ノーヴェが玄関に向かい戻ってくると、やって来た客人にヴィヴィオとアインハルトは顔を赤くする。

「い、こんにちは。」

来人である。

「「来人さん!?!」」

予想外の客人にヴィヴィオとアインハルトはシンクロする。

「な、なななんぞ?」

「どうして来人さんが?」

そして頭を混乱させながら来人に聞く。

「いやあ、前に師匠経由でノーヴェさんに誘われちゃって。オーバー
ーSランクの魔導師さんの活躍が見れるし、もっとアインハルトや
ヴィヴィオさんと仲良くなれかなあ〜って思ってた。・・・、迷惑だ
つたかなあ?」

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・。」

「大ツツ歓迎です! 来人さんも来てくれるなんて! 嬉しいです
!」

啞然とするアインハルトに対し、ヴィヴィオは満面の笑みで来人の
手を握り・・・・。

「・・・・・・・・あ。」

しばらくして顔が赤いまま手を離す。

そして今更恥じらいを見せるように手をもじもじさせる。

「「こんにちは。」

リオとコロナが二人に挨拶する。

「はい。」

「はじめまして。」

アインハルトと来人も返す。

すると。

「はじめましてアインハルトちゃん。ヴィヴィオの母です。いつもお世話になっています。」

「いえ・・・こちらこそ」

「格闘技強いんだよね？ 凄いねえ。」

「は・・・、はい・・・。」

そしてなのはは目線を来人に移す。

「それと・・・。」

「あ、はじめまして。右風来人です。アインハルトとはクラスメイ

トで友達です。ヴィヴィオとは練習友達です。」

なのはに来人は自己紹介。

（なるほどね。かつこいいし優しそう。ヴィヴィオが好きになるわけね）

なのはは先日の日曜日の謎が解けた。

「へえ〜〜。君がヴィヴィオの好きな・・・。」

「えっ？」

「んもお〜〜。なのはママあ！」

「ごめんごめん。」

ぼかぼか殴るヴィヴィオになのはは舌を出して対応。

「さて・・・ここから出発するメンバーはみんなそろったし、途中でふたりの家によってそのまま出かけちゃおうか。」

すると話しを変えるかのようにフェイトが切り出す。

「「「はあ　　い！」「」」

仲良しらしく見事なシンクロの三人。

「あ、ヴィヴィオ着替え着替え！」

「あーそうだ！クリスマス手伝ってッ！」

敬礼するクリスとともにヴィヴィオは自室に戻っていった。

「賑やかになりそうですね〜。」

「ああ。」

「そういえばスバルさんたちは別行動なんですか？」

「スバルとは次元港で待ち合わせ。ちょうど仕事終えてるころじゃねーかな。」

「「そういえば……。」」

「？ なんだ？」

「ヴィヴィオとアインハルトさんって……。」

「あの来人っていう人のこと好きなんですか？」

「あ、ああ。なんだかそうみたいだな。」

「いいなあー、ヴィヴィオ。」

「私達も恋愛したいなあ〜〜。」

「……はあ……。」

リオとコロナが恋愛を夢見る中、ノーヴェは後ろで溜め息をついて

いた。

ちなみに一方ヴィヴィオは……。

「う〜〜ん……どの服が可愛いかな〜〜。来人さん、どんな服が可愛いって思ってくれるかな〜〜。」

自室の鏡で服をコーディネートする自分と睨みあっていた。

水着とも。

現在構えているのは歳相応ではないビキニの水着。

「……大胆かなあ……。」

ヴィヴィオは妄想の世界へ……。

さあ……。

振り切るぜ！

~~~~~

夕陽が見える丘。

ここには今ヴィヴィオと来人しかいない。

二人とも水着である。

ヴィヴィオはビキニ、来人は歳相応の海パン。

「綺麗ですね、夕陽。」

「うん。これだけでも来たかいはあつたかな。でも……。」

来人は突如ヴィヴィオの肩を握る。

「僕にはあんな夕陽よりもヴィヴィオが輝いて見える。」

多分リアルであれば確実に言わないであろう来人。

「え？」

「ヴィヴィオ……。僕は君が好きだ。……君が欲しい。……君と一つになりたい。」

来人がリアルで言わないであろう言葉パート2。

「そ、そんな……。困ります。」

「……どう言われようが僕は止まらない。君を手に入れるためなら何でもする。……だから……。」

来人がリアル（以下略）

「……でも来人さんになら……。……来人さん……。」

「……ヴィヴィオ……。」

夕陽に染まる中、二つの人影は混じり合い、激しく……。

「……………イオお。」

「……………えへ……………駄目だよ、来人さあん。私達まだ……………でも……………嫌じゃないかなあ。」

「……………ヴィヴィオお……………」

「……………んもお……………、来人さんったら、そんなにたくさん……………」

「ヴィヴィオ!?!」

「わひゃい!?!」

よだれをたらすヴィヴィオは扉から聞こえるリオの呼び声に現実を引き戻される。

「長いよお……………、ヴィヴィオお……………。まちくたびれたよお……………」

「あ、ごめんごめん。今行くから。」

ヴィヴィオは急いでコーディネートを続ける。

「……………後少し続きみたかったかなあ。」

湯気が出るまで赤面しながら、コーディネートは続け、数分後まだ若干顔が赤いまま部屋を出た。

ちなみにヴィヴィオはその後、次元港に向かう車の中で、ろくに来人と顔をあわせられなかった。



妄想（後書き）

新仮面ライダーフォーゼが今地味に楽しみです。

既になのはSTSとの原作介入の小説を書いたりしてます。

ただしオリ主で。

まあ、投稿は確実に超スローになるとは思いますが。

## 説得（前書き）

まさかの1日に二回目の投稿になります。

今回はほとんどオリジナルです。

旅行中はドーパントは出ないというご都合主義をおしつけてしまつて申し訳ありません。

やっぱり納得がいかなかったので自分で少し緩和しました。

後知っている情報があればなんですが、仮面ライダーフォーゼの情報が欲しいです。

## 説得

警備隊隊舎オフィス。

「それでは指令！ スバル・ナカジマ防災士長。本日只今より四日間の訓練休暇に入ります。」

スバルは翔太郎が部長と呼ぶ指令の前に敬礼して立つ。

翔太郎は既に帰宅用意を済まし、スバルを待っている。

「おう、頑張つてこいや。今回の訓練は例の執務官殿も一緒だったか？」

「はい。ティアナ執務官と一緒にいろいろ鍛え直してきます。」

「そついやあよ……。」

「はい？」

「翔太郎お！」

「？ おつす。」

指令は翔太郎を呼び、翔太郎が寄ってくる。

「翔太郎はどうすんだ？ ナカジマが休みつてことはお前も必然的に休みになるわけだが……。」

「ああ、俺はい・・・私達と一緒に異世界でオフトレです！」

「・・・・・・・・はい。」

翔太郎は小さい返事をする。

「おお、そうか。二人とも仲良くな。」

指令はいたずらに笑いながら立ち去る二人を見送った。

スバルの車内。

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

運転するスバルの隣には外を眺める翔太郎。

「・・・・・・・・翔太郎さん・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・お前の強引さも困ったもんだよなあ・・・・・・・・。」

呆れ顔で翔太郎はスバルの方を向く。

「・・・・・・・・すいません。」

「・・・・・・・・まあ、たまにはいいかもしんねえけどよお・・・・・・・・。」

事実翔太郎はこの四日間は自宅でゆっくり過ごすつもりだった。

しかしそれ以前にこの町を離れることは、仮面ライダーとしての機能が働くなるためあまり気がのらなかった。

話しは昨日にさかのぼる。

~~~~~

「翔太郎さん。私達明日から四日間休みですよ。」

「………は?」

いきなりのことに翔太郎はハードボイルド小説にやっていた視線をスバルに移す。

「いや、だから。翔太郎さんと私は明日から四日間、訓練休暇で休みなんです。」

しつこいようであるが、翔太郎はスバルが休みになると必然的に休みになるポジションである。

「……んだよ。管理局ってそんなのが許されてんのかよ。」

「はい。……翔太郎の世界にはなかったんですか?」

「まあな。」

翔太郎は再びハードボイルド小説に目をやる。

すると。

「ということで明日から旅行なんで支度しといてくださいね 来
人君は行くみたいですけど」

「……あ？」

再びスバルへ視線を向ける。

「いや、だから訓練休暇のために異世界へヴィヴィオ達と一緒に旅
行に行くんです。なのでその準備を……。」

「はあああああああ!？」

翔太郎の大きい声。

ちなみに今は夜。

「近所迷惑ですよ。」

「ああ、悪い……じゃなくてえ! なんで俺まで行く羽目にな
ってんだよ!」

「だってえ、翔太郎さんにも一緒に来てもらいたかったんですけどもん
」

「だからって……。悪いが俺は行かねえからな。」

「ふええええ? なんですかあ?」

「あのなあ……。俺はお前のパートナー以前に仮面ライダーなんだよ。そんな俺が町を離れられるわけねえだろが。」

「で、でも来人君は……。」

「来人は仮面ライダーの前にまだ子供だ。休暇ぐらい必要だ。だから俺は行かねえ。そんなことした間にドーパントが現れたらこの町はどうなんだよ……。」

「……………」

正論を言う翔太郎にスバルは言葉を失う。

「第一、俺がいなくても楽しめるだろ。んじゃあ俺は寝っからな。」

「あ、ちょ、ちょっと翔太郎さぁん！」

スバルの言葉に耳を貸さないまま翔太郎はリビング格を出る。

「……………翔太郎さん……………」

しかしスバルの目にはまだ炎(?)がともっていた。

「……………」

「翔太郎さんが旅行にいきたくなあ〜る、いきたくなあ〜る……………」

暗闇の中から聞こえるスバルの声。

ベッドで寝る翔太郎の耳に睡眠暗示しているスバルの声である。

お陰で翔太郎のSPが鰻登りに上がっていく。

ストレスポイント

「（ピクッ）」

「いきたくなあ〜る、いきたくなあ〜る……………」

「（ピクピク）」

このカオスなサイクルがさつきから数時間近く。日付が変わってもなお繰り返されている。

お陰で二人には明日、確実な寝不足が約束された。

そして…………。

ストレスは一定を過ぎると…………。

翔太郎はふと起き上がり、部屋の明かりをつけ…………。

「だあ　　！　さつきつからなんだよ、おい！　お前は何がしてえんだ！　俺を寝不足にしてえのか！？　俺を病気にしてえのか！？」

爆発した。

今の翔太郎の服装が服装ならヤクザでもマフィアにでもなりきれる

だろう。

「……………」

あまりの翔太郎の逆鱗にスバルは恐々とする。

「だいたい俺は行かねえっていつてんだろが！俺はなあ！この町を守る仮面ライダーなんだよ！だから俺が離れるわけにはいかねえんだよ！」

「……………すみませんでした（グズツ）」

「……………あつ。」

（やつちまった……………）

涙目になり落ち込みスバルに我を取り戻す翔太郎。

「……………えつと……………悪い。」

「（グズツ）……………私の方も……………（グズツ）……………すみませんでしたあ。」

翔太郎はおもむろにスバルの頭を撫でる。

「……………でもよお……………わかってくれよスバル……………俺は仮面ライダーとして……………一人の男としてこの町を……………お前の町を守りてえんだ。だから……………」

「……………わかりました。もう言いません。翔太郎さんがそんなこと

を思ってくれてるなんて……。」

スバルは顔を赤くして背中から翔太郎に抱きつく。

「……………わかったら寝るぞ！」

「……………はい」

再び明かりを消してベッドに入る二人。

さっきとは違いすがすがしい表情の翔太郎にほんのり頬が赤いスバルが抱きつく形で二人は眠りにつく。

「……………あ？」

翔太郎が気づくとそこは真っ白な空間。

それはまるでミッドに転生するときに荘吉と会った空間と似た……。

というよりそのときと同じ空間であった。

「またかよ……………！」

翔太郎は後ろに気配を感じ振り向くと……。

「……………久々だな、翔太郎。」

「…………おやつさん。」

そこには彼の師匠、仮面ライダースカルこと鳴海荘吉がいた。

「なんだよ、また…………。」

「…………行ってきたらどうなんだ…………。」

「あ？」

「…………彼女の誘いに乗って旅行行ってきたらどうなんだ？」

「…………おやつさんまでなんなんだよ。俺はなあ、この町で仮面ライダーを名乗ったあの日からこの町を守るって決めたんだ。だから俺が町を離れるわけにはいかねえんだよ。」

「…………お前の気持ちはわかる。」

「ならよあ…………。」

「…………だがなあ、愛する人との思い出も大切なんじゃないやねえのか？」

事実荘吉は以前スパイダードーパントにより一番愛するものに触れられない身体になっている。

「…………そうかもしれねえ。でもよあ…………、…………でもよあ…………！
どうすんだよ、俺がいねえ間にドーパントが現れたら！」

「…………人は愛が無ければ強くなれないし戦えない。今のお前には愛する人も愛してくれる人もいるはずだぞ。」

「……………」

「……………それに安心しろ。」

「あ？」

「……………しばらくドーパントは出ない。」

「何を根拠に……………」

「……………探偵の勘だ。」

「……………」

「……………もつと納得のいく理由が必要か？」

「……………いや。おやっさんの勘なら确实だな。」

「……………ふつ。それにもし現れたとしても俺が倒す。」

莊吉はスカルメモリをドライバーにスロットし、展開する。

『スカル！』

「……………おやっさん……………」

「……………あにく俺はここでしかお前とは会えない……………だ
がな……………お前は一人じゃない……………前も……………今も。」

「……………ありがとうよ、おやっさん。」

「……………ああ。ただし帰ってきたらそのぶんたっぷり働けよ?」

スカルは拳を突き出す。

「……………へっ。」

翔太郎も拳を突き出し、互いの拳が合わさる。

そして……………。

チュンチュン。

「……………。」

気がつくと朝。

「うっん……………」

隣には寝間着がはだけたスバル。

「……………まあ、おやっさんの勘なら違いねえかなあ。」

するじ。

「うっん……………おはようございます、翔太郎さん。」

はだけた寝間着を直しながらスバルが起床する。

「なあ……、スバル……。」

「はい？」

「……やっぱし、……俺も行っていいか？」

その後、即答したスバルに抱きつかれる翔太郎。

半分眠たそうな翔太郎に対し、スバルは翔太郎の一言で眠気が吹っ飛んだのか元気ハツラツだった。

~~~~~

時間が戻り再びスバルの車内。

そして降りるとそこは次元港があり、他の面々が待っていた。

「久々だね、スバル。」

「元気だった？」

「はい」

なのはとフェイトにスバルは笑顔で答える。

「師匠？」

「翔太郎さん？」

「よお！」

驚く来人とアインハルトに翔太郎は挨拶を返す。

「どうしたんですか？」

「いやあなあ……、少なくとも四日間はどうもドラパンは出ねえからちよっと付き合おうと思ってな。」

「どうしてですか？」

「……探偵の勘だ。」

「なら確実ですね。」

来人は笑顔で答える。

「おつよ。」

そして……。

「よう、ヴィヴィオ。」

翔太郎はちびっこ達に挨拶しに行く。

「こんにちは翔太郎さん」

「おつ。それと君らは……。あ〜、悪い。左翔太郎だ。」

「はじめまして リオ・ウエズリーです」

「コロナ・ティミルです」

「リオにコロナか。よろしくな。」

「「はい」

翔太郎は二人と握手をする。

すると突如なのは達が翔太郎に話しかける。

「……えつと……。」

「……あなたは？」

「あゝ、左翔太郎といいます。スバルの秘書をしています。」

そしてスバルが翔太郎に抱きつき言う。

「そんでもって私の彼氏です」

「え？」

「か……。」

「「彼氏いいいいいい！？」」

なのはとフェイト……。



素晴らしいシンクロであった。

その後一同は次元船に乗る。

翔太郎は来人の隣に座るも出発して数分で爆睡。

初の次元船の旅は眠たいものとなった。

歳相応じゃなく来人に寄りかかり、ヴィヴィオやインハルトにはその立場を羨まがられ、スバルは来人と席を代わって欲しいオーラ全開というなかなかカオスな状況の中、船はアルピーノ親子達が待つ無人世界カルナージへ進み続けた。

先ほどスバルからプレゼントされたデバイス、ネクササスが翔太郎の左の小指で煌めきを放ちながら。

## 説得（後書き）

仮面ライダーエターナルレンタルまで後5日！

来週は次元船内かいじるか、お嬢 and あの二人が初登場のどちらか。

次の特別版のアイデア求めます。

## 異界（前書き）

本格的に旅行突入です。

あの二人もやっと登場します。

## 異界

無人世界カルナージ。

ここは一年を通して温暖な大自然の恵みが豊かな世界。

現在この世界にはアルピーノ親子が住み、なのは達客人をもてなす。

「みんないらっしや〜い」

「こんにちは。」

「お世話になりますっ。」

なのはとフェイトがアルピーノ親子に挨拶を返す。

「みんなで来てくれて嬉しいわ。食事もいっぱい用意したからゆつくりしていつてね。」

「ありがとうございます!」

スバルがウインクしてメガーヌに礼を言う。

(大半はお前の胃袋に収まるだろうがなあ)

無論後ろでそう思っている翔太郎のことなど知る吉もない。

「ルーちゃん!」

「ルルー！ 久しぶり〜！」

一方ではコロナ、ヴィヴィオ が久々に会った友達に挨拶を交わす。

「うん。ヴィヴィオ。コロナ。リオとは直接会うのは初めてだね。」

いままでモニターだったもんね。」

「うん。モニターで見るより可愛い。」

「ほんと ？」

ルーテシアに撫でられリオはにんまりとする。

まるで手なずけられている小動物である。

「あ、ルルー！ こちらのみなさんがメールで話した……………」

「アインハルト・ストラトスです。」

「右風来人です。」

「左翔太郎だ。よろしくな。」

ヴィヴィオは三人を紹介する。

（へえ〜〜。この子がヴィヴィオの好きな……）

ちなみにヴィヴィオは来人との関係をとくに盛って話していない。

ルーテシアの第六感である。

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオの友達、14歳。」

「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ。」

「えっへん。」

コロナの説明にルーテシアは歳相応には成長した胸を張る。

「14歳で歴史通とはなあ……。なかなか博識ですぎえなあ。」

「ありがとうございます！」

初対面にも関わらず翔太郎に誉められるルーテシア。

ルーテシアの頭のなかでは早速翔太郎の高感度がドラ エのレベルアップ風に奏でられた。

一方……。

「あれ？ エリオとキャロはまだでしたか？」

スバルは辺りを見渡しその二人を探す。

「ああ。二人は今ねえ……。」

メガーヌが答えた途端……。

「おつかれさままでーすっ！」

桃色の少女キャラ・ル・ルシエ、赤毛の少年エリオ・モンディアルが積木をもってやって来た。

「エリオ　キャラ」

久々の家族のご対面にフェイトは笑顔になる。

「わーお！　エリオ、また背伸びてる！」

「そ、そうですか？」

「わたしもちよつと伸びましたよ！？　1・5cm！」

スバルに誉められ赤くなるエリオの隣のキャラの悲しき叫び。

「アインハルト、翔太郎さん、来人君紹介するね。」

「あ、はい。」

「ふたりとも私の家族で……。」

するとフェイトは初対面であるアインハルト、翔太郎、来人に紹介を始める。

「エリオ・モンディアルです。」

「キャラ・ル・ルシエと飛竜のフリードです。」

「凄い！ 本物のドラゴンかあゝゝゝ。」

「……もうなんでもありだな、この世界は。」

目を輝かせる来人と遠くを見る翔太郎。

しかしフリードにはやたらと好かれ満更でもない二人。

どうやら翔太郎は人はイマイチだが、動物から好かれる様子（某自称美人所長から拝借）

「はじめまして。アインハルト・ストラトスです。」

「右風来人です。」

「左翔太郎だ。」

「うん。よろしくお願いします。翔太郎さんに来人君。」

「よろしくね、アインハルト。」

挨拶を返した三人にエリオとキャロは暖かく迎える。

ガサツ。

すると物音が聞こえ、三人とクリスは振り返る。

そこには魚を取ってきたルーテシアの召喚獣、ガリユーが立っていた。



「!?!」

「な!?!」

「ドーパント!?!」

アインハルトは構え、翔太郎と来人に至ってはドライバーを構えていた。

「あー! アインハルトさん、翔太郎さん、来人さん! ごめんなさい! 大丈夫です!」

「あの子は……。」

三人をヴィヴィオ、コロナは止める。

ちなみに翔太郎と来人は瞬時に必殺技、”ドライバー早収め”を發動させ、ドライバーは見られずに済んだ。

「私の召喚獣で大事な家族、ガリユーって言うの。」

「(スツ)」

ルーテシアの紹介にガリユーは敬礼で返す。

「っし、失礼しました。」

「……悪い。」

アインハルトと来人は揃って、翔太郎はソフト帽を一時脱いで謝る。

「私も最初はビックリしましたー。」

コロナがフォロースする。

すると。

「さて。お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ。子供たちはどこに遊びに行く?」

メガーヌが話しを切り出す。

「やっぱりまずは川遊びかなと。お嬢も来るだろ?」

「うん!」

ノーヴェにルーテシアは返事を返す。

「アインハルトもこつち来いな。」

「はい。」

アインハルトも断れない雰囲気。

(やっぱり姉妹だな)

翔太郎で思った。

「じゃあ着替えてアスレチック前に集合にしよう! 翔太郎さんと来人君はどうする?」

なのはが二人に聞く。

「そっぴやそうだな。来人はどうする？ まだトレーニングはやんねえみたいだが……。」

「師匠はどうしますか？」

「俺はちよつとこいつを試してみたいから別行動を取る。」

翔太郎はネクサスを来人に見せる。

「たしかスバルさんに貰った……。」

「俺のデバイスらしい。とりあえずこいつを試してみる。お前はどっする？」

「僕は……。」

すると。

「来人さんも子供なんだし私達と一緒に川で遊びましょうよ〜。」

「そっぴや〜！」

コロナとリオは来人を捕まえる。

「え？ でも……。」

「ヴィヴィオとアインハルトさんもそう思うよね？」

「……………うん。」

「……………えっと……………はい……………」

ヴィヴィオとアインハルトも賛同する。

「うん……………じゃあ……………お言葉に甘えようかな……………」

「

「決まりい！」

「うん！」

「(グッ!)」

リオとコロナに隠れ、ヴィヴィオとアインハルトは小さくサムズアップ。

「じゃ、こっちも水着に着替えてロッジ裏に集合！」

「……………は　　いつ!」「」「」

「水着!?!」

ノーヴェの一言でテンションの上がる四人とは別にアインハルトは顔を赤くする。

(……………来人さんに……………見られてしまいます……………)

更に顔を赤くする。

こうして一同は更衣室へ向かった。

発動（前書き）

平日にも関わらず今日二度目の投稿！

翔太郎「ただ時間があり余ってただけだろうか！」

イエス！

さてさて旅行編ではこれからも変な所をいじりたいと思いますが、何か希望があれば感想に書いて頂きたいです。

翔太郎「ちょっと待て！ 下手すれば湯けむりもあるって……。」

……。

翔太郎「……。」

……（ダッ！）

翔太郎「待てコラア！ やらせるかあ！」

## 発動

「へえ〜」。じゃあエリオさんって10歳から管理局にいたんですかあ〜。」

「……なんかあれだな……。いや……。やっぱりな  
んでもねえ。」

男子更衣室で驚く来人と翔太郎。

「うん。やっぱり自分の力を誰のために役立てたくて。」

「凄いなあ。」

「偉いじゃねえか。若い割に随分としっかりてんなあ……。フエ  
イトさんの育て方がいいのかもな。」

「そ、そうですねえ……。」

翔太郎に誉められてエリオは照れる。

「そういえば翔太郎さんと来人はどうやってスバルさん達と知り合  
ったんですか？」

「ああ。俺らはまあ……。」

「色々ありまして……。」

遠くを見る翔太郎と来人。

「？」

そのとき。

「ええええええ！？」

隣、女子更衣室からなのはとフェイトがシンクロした声が聞こえる。

「な……。」

「フェイトさんまでなんだったんだらう？」

頭を傾げる来人とエリオ。

「……あれ？　なんだ？　……涙が出てきた。」

翔太郎は憂鬱になる。

翔太郎にはなにやら壁の向こうでデジャヴが起きているような気がした。

「「？」」

ちなみに翔太郎の気のせいではなかった。

「ほ、ホントなの？」



「同居どころかまさか初体験まで……。」

女子更衣室ではなのはとフェイトが自分達の耳、及びスバルの言葉を失う。

ちなみに耳打ちだったため他の女子はなのはとフェイトの変動ぶりに頭を傾げている。

「「なんだか先をこされた……。」」

そして揃って落ち込むのであった。

一方子供組は……。

( よっし！ これで来人を悩殺するぞ )

「「？」」

白いビキニ姿で鏡の前ではりきるヴィヴィオと不思議がるリオに「ロナ。」

「……我ながらなんでビキニにしてしまったんでしょう……。」

そして黒いビキニ姿のアインハルトは鏡に写る自分を羞恥心丸出しで呆然と眺める。

( ……で、ででも…… )

アインハルトは白いビキニ姿のヴィヴィオを見る。

(ヴィヴィオさんも大胆ですし……。負けられません)

アインハルトには自分の中に炎が燃える感覚を感じた。

そして頭の中で妄想、よく言えば邪なビジョンや希望する未来予想図を思い浮かべた。

それでは行きましょう……。

いざ妄想の世界アインハルトver!

~~~~~

森の真ん中。

周りには森林が生い茂り誰もこない空間。

そこに二人はいた。

木にアインハルトを押し付け逃げられないようにしている来人が。

アインハルトは自力でも逃げられるにも関わらず、頬を赤くし抵抗の欠片も感じられない。

言うなれば……。

”かかってこい”とか……。

”バッチコイ”的な。

「……アインハルト……。」

「……来人さん……。」

顔を近づける来人。

アインハルトも恥じらいながらも、顔はしっかりと来人の正面を向く。

「私……初めてなので……。」

「僕もだよ。」

「……だから……。」

「……わかってる……優しくだよね？」

「……はい。お願いします。」

そのまま二人は唇を重ね……。

~~~~~

「……はっ。」

自力でアインハルトは妄想から現実に戻った。

若干顔が赤く、少しもったいなさそうに。

その後更衣室を出た一同は子供組、大人組に別れた上、翔太郎は道案内として着くフリード、ガリユーと共に解散した。

ちなみに顔が赤いのを大人数に聞かれたアインハルトだったが大半に「なんでもない」で済まし、来人に限っては少し恥じらった後正拳突きで答えた。

「悪いな、お前ら。付き合わせて。」

「キユク〜」。

「（コクリ）」

翔太郎はフリードを撫でな、歩きながらガリユーに礼を言う。

そして……。

「ここかあ。」

平地にたどり着く。

「うっし。やってみるか。えっと……。」

翔太郎はネクサスを渡されたときに貰ったマニュアルを出す。

「えっと……。名前を呼ぶか。ネクサス！」

するとネクサスは光を放ち起動音を鳴らす。

『はじめましてマスター。ネクサスと申します』

「ああ。よろしくな。それと主従関係はやめろ。あいぼ……、じやねえ。兄弟としてな。」

『わかりました。よろしくお願ひします。翔太郎』

「おう。」

『ところで翔太郎……』

「なんだ？」

『バリアジャケットはどうしましょう……』

「そうだなあ……。こんなのはどうだ？」

翔太郎は耳打ちのようにネクサスに小声で言う。

「……どうだ？」

『なるほど。なかなかいいですね。ではそれで』

「ああ。頼む。どれぐらいかかるか分かるか？」

『現在起動したばかりですので色々な処理が必要なので時間はかかりますが、明日までには……』

「そっか。まあくれぐれも無理はすんなよ、兄弟。」

『ありがとうございます、翔太郎』

「ああ。そんじゃあ戻るか。」

「キユク〜」。

「（コクッ）」

翔太郎は待たせていた二体の友とトレーニング場に向けて歩き始める。

その頃……。

「あたし、いつちば　ん！」

「あ　リオ、ずる　いつ！　アインハルトさんも来てくださ  
いつ！」

川に向かって走るリオにヴィヴィオ、ルーテシアにコロナ。

後ろをノーヴェ、アインハルト、来人が続く。

「みんな、元気だなあ。」

「ホレ、呼んでるぞ。」

（ノーヴェさん。できれば私は練習を……）

アインハルトはノーヴェに訴える。

(まあ、準備運動だと思って遊んでやれよ)

「それにあのチビ達の水遊びは結構ハードだぜ。」

「……………」

「そうだよアインハルト。……それに……………」

「？」

「アインハルトの水着姿可愛いだろうしね」

「……………か、可愛い……………」

来人の思いがけない一言にアインハルトは顔が赤く……………

通り越して爆発する。

「お前もなかなか女泣かせだな。」

「なにがですか？」

「いや、なんでもねえ。」

「？」

ノーヴェの言葉に来人は頭を傾げる。

自覚がなかったためである。

そんなこともお構いなしにアインハルトは顔が赤いまま上着を脱ぐと黒いビキニ姿になる。

「お〜。うん。可愛い！」

来人は拍手をしながら笑顔でアインハルトを褒める。

やましい感情がひとつも感じられない純粹な笑顔である。

「……………あ、ああああありがとうございます！」

「どういたしまして。じゃあ行こっ」

顔が更に赤くなるアインハルトの手を握り来人は川に入る。

「……………はい。」

「あ、アインハルトさん、どーぞー！」

「気持ちいいよ〜」

(いいなあ、アインハルトさん)

リオとルーテシアが誘う中、ヴィヴィオは密かにへそまげる。

「来人さん、私はどうですか？」



ヴィヴィオは水の中でセクシーポーズ。

水が透明なため水上からもヴィヴィオのビキニ姿がわかる。

「ヴィヴィオも可愛いよ。モデルさんみたい」

「えへへへへ〜」。

ヴィヴィオは来人に誉められ顔が赤い。

そして内心あの妄想が正夢になることを期待したりしなかったり。  
する。

「じゃあ向こう岸までの往復みんなで競争ー！」

「っっお　っ！」「」

コロナの提案にヴィヴィオ、リオ、来人が賛同し五人で泳ぎ出す。

子供組の水遊びが始まった。

一方翔太郎はフリードやガリユーと別れ、大人組と合流していた。

「翔太郎さあ　ん」

「ぐはっ！」

スバルは翔太郎にダイブし、翔太郎は吹き飛ばされる。

「てんめえ……、スバル……ごふっ！。俺を殺す気かよ。」

「すみません。ちょっと勢い余って……。」

「強すぎだろがぁ！」

スバルを追いかける翔太郎。

（（いいなあ〜）。私もいつかあんな相手が……）（

（いつかエリオ君と……）

「ど、どうしよお（オロオロ）」

そんな二人をなのはや他の面々、女子は二人のラブコメを羨ましそうに眺め、ただ一人男子のエリオは止めようと考えながらもオロオロ口していた。

発動（後書き）

今回も妄想が入りました。

異論は認めません！

無論二度目があるなら三度目も！

仮面ライダーフォーゼ放送まで60日、オーズ劇場版まで31日！

水柱（前書き）

今回は子供組がメインです。

若干繋ぎです。

## 水柱

川遊びを続ける子供組。

(なんとというか・・・)

リオとコロナのシンクロナイズや皆の潜水や・・・。

(皆さん本当に・・・、元氣いっぱいというか・・・)

水球・・・。

(その・・・)

競泳・・・。

(元氣・・・・・・・・・・すぎるような・・・・・・・・・・?)

皆より早く息切れをするアインハルトは岩場に座り込む。

「大丈夫、アインハルト？」

「は、はい。」

隣には心配してくれている来人。

「やっぱり水の中はあんまり経験ないか。」

ノーヴェはココアが入ったコップをアインハルトに手渡し座り込み、

クリスはタオルを手渡す。

「体力には少しは自信があつたんですが……。」

「いや、たいしたもんだと思うぜ。あたしも救助隊の訓練で知つたんだけど、水中で瞬発力出すのはまた違った力の運用がいるんだよな。」

「じゃあヴィヴィオさん達は……。」

「なんだかんだで週2ぐらいか？ プールで遊びながらトレーニングしてつからな……。」

「柔らかくて持久力のある筋肉が自然に出来てる。……ですよね。」

「……！」

ノーヴェの言葉を来人は代わりに言う。

「すつげえなあ来人。あたしの言おうとしたことを……。」

「師匠の教えのタマモノですよ。」

来人はサムズアップで返す。

「どーだい二人。面白い体験だろ？ 何か役立つ事がありやさらにいい。」

「はい……。」

「はい！」

アインハルトと来人は返事を返す。

するとノーヴェは立ち上がり……。

「んじゃせっかくのだから面白いものを見せてやるぞ。ヴィヴィオ、リオ、コロナ！ ちょっと水斬りやってみせてくれよ！」

「はぁ　　いッ！」

ヴィヴィオ達は快く返事を返す。

「「水斬り……？」」

「ちょっとしたお遊びさ。おまけで打撃のチェックもできるんだけどな。」

「マジっすか！」

来人は目を輝かせる。

そして三人は構え……。

「「えいつ！」」

コロナとリオが拳を打つ。

すると川は切れ、まるで切り裂かれたような水しぶきを上げる。

「いきますっ！」

次はヴィヴィオが構える。

水中で踏み込み……。

拳を放つ。

それによりさつきよりも巨大な水しぶきが上がる。

「……………」

アインハルトと来人は啞然とする。

すると。

「アインハルトも格闘技強いんでしょ？ 試しにやってみる？ 来  
人君もどう？」

「はい。」

ルーテシアの言葉に二人は闘志を静かに表す。

まずはアインハルトがチャレンジ。

（水中じゃ大きな踏み込みは使えない。抵抗の少ない回転の力で……）

ヴィヴィオ達がワクワクして見る中……。



(できるだけ柔らかく)

アインハルトは拳を放った。

水柱が上がるが、さっきのようなものではなかった。

「あはは・・・！　すごい天然シャワー！」

「水柱5メートルくらい上がりましたよ！」

リオとヴィヴィオは感嘆の声をあげるも・・・。

「・・・・・・・・あれ？」

当のアインハルトは啞然とする。

するとノーヴェエが動き出す。

「おまえのはちよいと初速が速すぎるんだな。初めはゆっくりと脱力して途中はゆっくり・・・。」

ノーヴェエは左足を水から上げる。

「インパクトに向けて鋭く加速。これを素早くパワーを入れてやると・・・。」

ノーヴェエは右足を勢いよく上げる。

するとまるで川が切られたかのように水が二つ、高く舞い上がる。

「じつなる。」

再びアインハルトがチャレンジ。

(構えは脱力。途中はゆっくり、インパクトの瞬間にだけ・・・撃ち抜く)

アインハルトはさっきのノーヴェのアドバイスに従い拳を放つとまだぎこちないきものの、ヴィヴィオ達の水斬りに近い水柱を放つ。

「あ！ さっきよりちょっと前に進みました！」

「すごいっ！」

「凄っ！」

ヴィヴィオとリオ、来人は興奮を隠せない。

「も・・・、もう少しやってみていいですか？」

アインハルトは頼む。

すると。

「アインハルトお！ 次は僕にやらせてくれない？」

来人が川に入る。

「はい。頑張ってください。」

「うん」

アインハルトは静かにウィウィオ川達の傍に寄る。

「よっしー！」

来人は目を閉じる。

「……………」

「……………」

周囲も興奮を内に秘め静まる。

そして来人は右足を掲げ……………」

「そりゃあああああ！」

かかと落としを川に叩き込んだ。

それにより川の向こう側まで水が両断された。

「……………」（ポカーン）「……………」

ノーヴェを含めた六人が呆然とする中……………」

「……………」うっしー！……………」あれ？」

来人はガッツポーズをする。

しかし硬直した空気に戸惑う。

「ど、どうかした？」

「」「」「すっごおゝい！」「」

「……マジかよ……。」

拍手をするのはリオとコロナにルーテシア、自分よりも高く水柱を上げたことにより唾然とするノーヴェ。

そして。

「……来人さん……。凄いです。」

「うん やっぱ来人さんは何させてもカッコイイ。」

アインハルトとヴィヴィオは顔を赤くして来人を見つめる。

ゆうなれば”惚れ直す”といったものである。

「わたしも負けられません！」

「……わ、私も。」

そして二人はライバル心を燃やした。

その後三人はずっと水斬りを続けた。

最終的に二人は来人におよばなかったものの、来人には二人とずつと仲が深まった気がした。

そしてヴィヴィオとインハルトの心情では来人への高感度上昇が某RPGのレベルアップ風に奏でられた。

「大丈夫ですか？」

「……な、なんとか……。」

練習のし過ぎでばてているフェイト一家とティアナに水筒を渡す翔太郎。

「ちょっと度が過ぎましたね。」

「ホントに……。」

水筒を受け取るフェイトとティアナ。

「はははは……。」

「（ゴクゴクゴク）」

笑うエリオの隣でキャラ口は勢いよく水筒を飲む。

すると。

「さー、お昼ですよ！ みんな集合」

「は　　いつ！」

メガーヌが呼ぶといつの間にか着替えていた子供組が駆け付けた。

「な、情けない・・・。」

「・・・たく。」

ちなみに来人は水斬りのし過ぎで動けなくなっており、ノーヴェに連れてきてもらっていた。

「おかえり。」

「みんな遊んできた？」

昼の準備をする大人組。

「も　、バッチリ！」

ルーテシアが笑顔で返す。

「身体冷やさないようにあったかいものいっぱい用意したからね。」

「「「ありがとうございます！」」」

メガーヌにリオとコロナが振り向き返事をする中・・・。



そして一同が食事を始める。

しかし……。

来人がヴィヴィオとアインハルトの間に、翔太郎がスバルの隣に座ったこと……。

ヴィヴィオとアインハルトの二人の両手が若干麻痺していること……。

なのはとフェイトの悪いスイッチが入ることと二人の仮面ライダーが嬉し恥ずかしの羽目になるとは正直当の本人二人とスバル……。

なによりヴィヴィオとアインハルトは予想にもしていなかった。



水柱（後書き）

最後にイベントのまえぶれを出してみました。

今回はそのイベントになるでしょうね。

今日仮面ライダーエターナルをレンタルしてみたんですがヤバいです！

ネタバレは自分はともかく嫌いな方もいるので詳しくは言いませんがとりあえず言わせてください。

W・・・。

最高っ！！！！

カムバック！！！！

## 灰色（前書き）

速攻の投稿になりました。

今回は訓練にするか、子供側の談笑にするか悩みます。

実はW系のライダーは皆エターナル含め皆キックのマキシмумを持ってました。

やはりライダーはキックが命！

ちなみにスカルは f e a t スカル時とトリロジィ E P I E R O のデ  
イエンド召喚のあれ、エターナルは・・・。

## 灰色

食事を続ける一同。

するとフエイトはあることに気づく。

「あれ？ ヴィヴィオにアインハルト、あまりすすんでないね。」

「う、うん。」

「……はい……。」

二人は水斬りのやり過ぎで腕が麻痺しているせいか、あまり食が進んでいなかった。

「ちよつとてが震えちゃって……。」

「……同じく……。」

するとなのはが……。

「それじゃあ来人君……。」

「？ はい。」

「二人に食べさせてあげて。」

「「「「！」「」」」」

ちなみに他の面々はやたらとニヤニヤしている。

《し、師匠。助けてください！》

《来人……。レディーには優しくしろって教えたはずだが？》

《そ、そんなぁ……。》

いつの間にか念話を覚えた翔太郎と来人は話しあうも翔太郎も乗り気である。

来人はふと両脇にいる二人を見る。

まずはヴィヴィオ。

「(あ~~~~ん)」

「……………」

目を閉じ口を開け、完全にスタンバってる状態。

続けてアインハルト。

「……………(あ、あ〜ん)」

ヴィヴィオよりもためらいはあったもののこちらもスタンバイ完了。

そして周りを見ると。

ニヤニヤニヤニヤ×11

女性陣はみな悪戯にニヤケ続ける。

《し、師匠お〜、エリオさあ〜ん・・・》

来人は唯一笑っていない翔太郎に再度念話、更にはエリオにも助けを求めろ。

《来人・・・。》

《来人君・・・。》

《《諦める(よう)！》》

現在は男女平等社会であるはずが、その場にはそんな単語は存在しない。

むしろ女性の方が強い。

「(ガ　ン)」

そして来人は社会の厳しさを知り、一つ大人の階段を登った。

さすがに空気を読まないわけにもいかず・・・。

「・・・はい。」

ギャルゲー曰くルートというのが決まった瞬間であった。

そして来人は恐る恐るヴィヴィオの肉をフォークで刺す。

「ヴィヴィオ。あ〜ん。」

「あ〜ん。」

来人はゆっくりとヴィヴィオの口に肉を運び・・・。

「（パクッ）」

ヴィヴィオはほんのり頬を朱色に染めながらフォークの先端ごとく  
わえる。

ヴィヴィオはまるで堪能するようにゆっくりと噛み、後に飲み込む。

「うん　おいしいです」

（口にあ〜んなんだあ〜。きや〜）

ヴィヴィオは内心嬉し恥ずかしのまま、笑顔で余韻にひたる。

何故かこの一口は今までのどんな料理よりも美味しく感じた。

「そ、そう。よかったあ。」

にっこり笑うヴィヴィオに来人は若干肩の荷が降りる。

なんだかんだで来人は緊張していたためである。

（ほ〜。よかったあ）

すると。

ぐいぐい。

反対側から服の裾を引っ張る感覚が。

「？」

来人が振り向くと同じくスタンバってるアインハルトが。

「あ、アインハルトも？」

「……………(コクッ)」

来人の質問にアインハルトは無言でうなづく。

「……………わかった。」

来人は再びフォークでアインハルトの皿から野菜を刺しアインハルトの口に運ぼうとする。

「はい、アインハルト。あ~~~~ん。」

「……………あ~~~~ん。」

アインハルトはフォークを先端ごと口にくわえる。

「(もぐもぐ……………)」

アインハルトはそのまま超スローで野菜を噛む。

顔の赤みがヴィヴィオよりも濃い。

そして飲み込む。

「・・・お、美味しかったです。」

「よかったああ。」

来人も緊張からほぐれる。

「」（ニヤニヤ）「」

すると目の前に座っているリオとコロナがにやにやしている。

「な、何？」

来人は二人に聞くと。

「来人さん・・・。」

「それ来人さんのフォークだね。」

二人はにやつきながら猫撫で声で言う。

「あ・・・、そういえば・・・。」

来人は自分のフォークでやってしまったことを気がつく。

すると来人は両端がやたらと熱くなるのを感じた。



見ると・・・。

「（パクパクパクパク・・・）」

「（カアアアアア~~~~・・・）」

ヴィヴィオは金魚のように口をパクパクさせ、アインハルトは頭から湯気が上がる。

「えっと・・・二人とも？」

ヴィヴィオの方を向くとまだ口をパクパクさせ、アインハルトはと  
いうと・・・。

「・・・・・・・・。。。」

「・・・アインハルト？」

「・・・・・・・・ふん！」

「ぐほっ！」

アインハルトは来人に正拳突き。

そのまま来人は腹部を抑え、静まる。

「あつちや~~~~。」

「来人君大丈夫？」

翔太郎とエリオが来人を心配する。

他女性陣は逆に笑っている。

すると。

「翔太郎さん。貴方もスバルに食べさせてあげてみては？」

「なあ！？」

なのはが再度爆弾を放った。

しかも今度は翔太郎。

「な、なのはさん？ 冗談は……。」

「あれ、私ってあまり冗談は言わないんですよ？」

なのはの笑顔。

普通の男性ならノックアウトだろうに翔太郎には魔王の微笑みに見えた。

そして翔太郎はとある一つの方向から強烈な視線を感じた。

現実逃避したいだろうにも周囲からの無言の圧力に負けその方向、隣のスバルに向いた。

「(じ)~~~~~( )」

振り向いた瞬間、ビームすら出すのではないかという強烈なスバルの視線が翔太郎に突き刺さった。

逃げようにも周囲からはさらに高まった無言の圧力。

逃げようにも逃げられない状況。

翔太郎の脳裏には二つの言葉が浮かんだ。

よく言われる”人間諦めが肝心”、某バスケット漫画の監督の名台詞”諦めたら試合終了”の二つ。

無論最初は却下。

「あ~~~~、悪い。連絡が……。」

席を立とうとする翔太郎だったが……。

何かに両手が塞がれた。

「な！？ 何だ？」

翔太郎は自分の腹部を見る。

そこには……。

「バインド!？」

青い光の輪、バインドが翔太郎の両手をがっちりと塞いでいた。

「おいスバル！ お前、魔法を！」

「だって翔太郎さん、これでぐらいしないと聞いてくれないじゃないですか。」

「当たり前だろが！」

「食べさせてくれるなら、解いてあげますよ？」

「な！？」

完全な上下関係。

歯向かおうとするが更にオレンジ、薄紫、薄い桃色のバンドがかかる。

翔太郎は知らないだろうがティアナ、ルーテシア、キャロのバンドである。

「どうしますか翔太郎さん？ なんなら逆でもいいですけど……。」

「

「な！？」

逆……。

つまりは翔太郎が食べさせてもらっ形である。

「じ、冗談じゃねえ！」

「なら……。」

翔太郎が浮かんだ手段が一つ……。

バインドを解いてもらった後、やっぱりやらない方法。

しかし……。

(それだけはやりたくねえなあ)

そうしたとしてもまたバインドをかけられたら同じことな上、その場の空気に反するためやりたくない。

そしてなによりも翔太郎のポリシーの一つ……。

”一度いったことは曲げない”

これのせいが一番大きい。

結果……。

「承知いたしました。」

了承した。

「やった」

翔太郎は諦めたのかスバルのフォークに手を伸ばす。

するとスバルはその手を止める。

「なんだよ？」

「翔太郎さんのフォークで食べさせてください」

「んな！？」

「男に二言はない・・・じゃなかったでしたっけ？」

「・・・・・・・・。」

（こいつはこいついづときばっか・・・）

しかし周囲からは既に”やっちないな”感を放たれる。

「・・・・・・・・わったよ。」

「うっし」

（なのはさんナイス）

（ガンバ）

スバルとなのはは静かにサムズアップを互いに向ける。

もはやそんなことはどうでもいい翔太郎はフォークで野菜を刺し、スバルの口へ・・・。

「ほらよ。」

「駄目です翔太郎さん。あ〜んは？」

「……………あ……………あ〜ん。」

「あ〜ん」

スバルの口へフォークが吸い込まれていき、スバルは野菜を噛む。

「ん〜ん、美味し」

頬を赤くし、幸せそうに笑顔を浮かべるスバル。

「それじゃ引き続きお願いしま〜す」

「んな!？」

”聞いてない”感を表す翔太郎だが、逆らえる雰囲気ではなく、完全な翔太郎のまけであった。

一方……………。

「来人さん。私達にも……………」

「……………引き続きお願いします。」

「はえ? もう大丈夫なんじゃ……………ていうかアインハルトもう大丈夫じゃ……………」

「……………あいたたた……………腕が……………」

わざとらしく痛がるアインハルト。

しかしレディーには優しくしろという翔太郎の言葉を律義に守ろうとする来人は……。

「……口開けて……。」

「……はい」

周囲にとりあえずわかったこと……。

”この師弟は女性に弱い”

更に被害は拡大する。

「エリオもキャラに……、どづつ……」

三度目もやはりなのは。

「え？ ちょっとなのはさん！」

「エリオ君！」

キャラに呼ばれ振り向くエリオが見たものは……。

「……（あ〜ん）」

「……キャラ……。」



口を開け目を閉じたキャロであった。

数分後食事は終わり一部顔が赤い女性陣が片付けをする端では三人の男性陣がまるで明日のヨ一並に真っ白になっていた。

この三人はつくづく思った。

”女性は怖い”と。

## 灰色（後書き）

私がお気に入りにキック必殺技BEST5

- 5 . アクセルクリームゾンスマツシユ（ファイズアクセル）
- 4 . ライダーキック（ジョーカー）
- 3 . ドラゴンライダーキック（龍騎・リュウガ）
- 2 . マシンガンスパイク（アクセルトリアル）
- 1 . 名称不明<sup>エターナル</sup>

皆さんはどうでしょう？

ちなみにキック以外だとマグナブレイズとマシンガンスラッシャー、ドラゴンファイヤーストームが好きです。

## 模擬（前書き）

今回は久々の翔太郎の戦闘ですちよつと違います。

もうすぐ総合評価400突破なので特別編を考えています。

主な案は一応ありますがなやんでいます。

- 1．時代劇テイスト
- 2．来人とアインハルトのデート

他にも何かアイデアが欲しいです。

## 模擬

食事が終わり子供組は食事の片付け、大人組は模擬戦を行っていた。

トレーニング場。

元スターズのなのはとスバル、ティアナは模擬戦、元ライトニングのフェイト、エリオ、キャラは飛行訓練をしていた。

そして全メニューを終えると……。

翔太郎と来人は……。

「なあ、スバル。悪いがちょっとここ借りていいか？」

「え？　なんでですか？」

「いやな、ネクサスの準備ができたみたいだからちょっとバリアジヤケットってのを試してみたくてな？　大丈夫か？」

「あ、はい。構いませんよ。なのはさんいいですよね？」

「うん。」

なのはは笑顔で了承。

「ありがとうございます。んじゃ来人。」

「はい。じゃあお先に。スピリッツ！」

『スタンバイ!』

「セットアップ!」

すると来人の身体は急成長し十代後半の青年に。

さらには身体にバリアジャケットが纏われていき、上着はNEVE Rのジャケットのような黒地に赤のラインが入ったジャケットが纏われる。

そして両手には手袋型となったスピリッツが。

「おおおお〜〜。」

翔太郎は思わず感嘆の声を上げる。

「師匠もどうですか?」

「うっし、俺も。いけるかネクサス?」

『無論です』

「よし。ネクサス、セットアップ!」

すると翔太郎の身体を光が包み、徐々に固まっていく。

「おお〜〜〜!」

翔太郎は自ら希望したバリアジャケットに興奮する。

白いスーツに白いソフト帽というまるで鳴海荘吉のような服装である。

手にはジョーカーマガナムが握られ左手首には発動状態のネクサスが。

後方から見る子供組含めた一同。

「カッコイイ……。」「」

声が重なるのはスバル、ヴィヴィオ、アインハルト。

スバルは翔太郎を、ちびっこ二人は来人を見て言っている。

「やっぱり翔太郎さん、スーツを着るとカッコイイ……。」「

「あううう、やっぱり来人さん大人でもカッコイイですううう。」「

「……。」「(ドキドキ)」

それぞれ頬を赤らめてそれぞれの反応を示す。

「スバル……。あなた相変わらず翔太郎さんに凄いメロメロねえ。」「」

「ホントになあ……。」「」

ティアナとノーヴェが隣で呆れる。

「まあまあ。」

「恋愛は女の子を綺麗にするっていうし……。」

そんな二人をなのはとフェイトはなだめる。

一方ルーテシアやキャロはリオとコロナに聞いた。

「ねえやっぱり……。」

「ヴィヴィオとアインハルトって来人君に……。」

リオとコロナは……。

「はい。そうですよ。」

「なんだか二人ともメロメロで。来人君両手に華ですよね。」

リオが全開、コロナは苦笑して答える。

（一体なんの話してるんだろう？）

隣で盛り上がっている女子をエリオは疑問に思っていた。

翔太郎はいつの間にか持っていたジョーカーマグナムに頭を傾げた。

「どうなってんだ？」

『私はあなたの持つジョーカーマグナムとリンクしてそのマグナムを万能砲撃のデバイスにする機能があります。さらにはそのジャケツトの効果で身体能力も高まりますので・・・』

「俺が普段変身して戦ってるふうに戦えると？」

『「」名答です』

「なかなか心憎いじゃねえかスバルのやつ。後でなんかお礼しねえとなあ。よしやるぜ来人お！」

「はい！」

翔太郎が走り出す。

そして二人は蹴りをぶつけあう。

そのまま互いに回し蹴りを放つも空を切り続け、翔太郎は足払いを、来人は飛び回し蹴りをはなつも当たらない。

すると翔太郎は距離を取る。

そしてジョーカーマグナムを向ける。

「そら！」

「ヤバッ！」



翔太郎はジョーカーマグナムを放つ。

来人は壁を走り避けていく。

「僕も！」

来人は魔法弾を数発作り出し、翔太郎に放つ。

「んならお！」

翔太郎は横に飛びながらその魔法を全て撃ち落とす。

「やるじゃねえか来人。さすがに魔法はお前の方が上手だな。」

「師匠こそ。まさか魔法も上手いなんて。」

「ちょっと前に図書館で見たのをやってみただけだ。魔法の発動も切札を使うのに慣れちゃったからな。そんじゃでかいのいつてみるか。」

「望むところですよ！」

二人の足元にそれぞれ紫、緑の魔法陣を作り出す。

そして翔太郎はマグナムをマキシマムモードにして構える。

来人は手の平を合わせ巨大な球体を作り出す。

「……………」

「……………」

場が氷つく。

そして翔太郎は引き金を弾く。

「ジョーカー……パーミッション！」

ジョーカーマグナムの銃口から巨大な紫の砲撃が放たれる。

一方来人は二回転した後にその球体を蹴る。

「風牙爆砕砲！」

球体から巨大な竜巻が放たれる。

その二つは激しくぶつかりあう。

そして爆発、その空域を爆煙が覆う。

「……………ふっ！」

「せいっ！」

しかし二人は止まらずにその爆煙の中に突っ込む。

煙のなかからは何かがぶつかりあう音が激しく鳴り響く。

「……………」

スバルやヴィヴィオ、アインハルト、他の面子が呆然とするなか・  
。。

煙が消えていくとそこには。。。

「・・・相打ちか。」

「みたいですねえ。」

「

翔太郎と来人、それぞれ魔力を纏って破壊力が高められた足が互いの顔横の寸前で止められていた。

そして互いに足を収める。

「師匠凄いです！　こんなに戦えるなんて！」

「あのなあ、俺だって仮面ライダーとしてはお前よりも経験は上な  
んだぜ？　身体ならそれなりに動く。」

「いいなあ。・・・じゃあ師匠。。。」

「？」

「こっちのほうも手合わせお願い出来ますか？」

来人はサイクロンメモリを構える。

「おっ、なんだか久々だな。なんせあの日以来変身してやってなか

「つたからなあ。」

「それじゃあ……。」

「おう！」

翔太郎もジョーカーメモリを持つ。

「何？」

「あの二人なにを始めるの？」

「……？」「……」

なのはとフェイトはただならぬ雰囲気を出し始めた二人を不思議に思い、エリオにキャロ、ルーテシア、リオとコロナも頭を傾げる。

「あれ、もしかして来人君も？」

「そうっばいなあ。」

ティアナとノーヴェはそんなに大きな反応は示していない。

「また見れるんだあ。」

「……でも二人とも怪我はしてほしくないなあ。」

ヴィヴィオが目を輝かせるも、スバルは心配そうである。

「・・・大丈夫ですよ。」

「なんですか？」

「・・・だつて翔太郎さんと来人さんですから。」

アインハルトは冷静かつ信じるようにヴィヴィオに答えた。

「行くぜ？ 来人。」

「いつでも！」

二人は互いにメモリのスターティングスイッチを押す。

『ジョーカー！』

『サイクロン！』

そしてメモリをドライバーにスロットし傾ける。

「「変身！」」

すると二人の身体を風が覆い、それぞれ仮面ライダージョーカー、仮面ライダーサイクロンに変身した。

「さあ・・・。」

ジョーカーは左指を……。

「お前の罪を……。」

サイクロンは右指を……。

「「数える！」」

互いに向けた。

そしてぶつかりあった。

「ふえ〜〜〜！」

「あの二人が噂の……。」

なのはとフェイトは無論驚き……。

「仮面ライダーだったんだあ。」

「凄おい！」

「凄い。翔太郎さんも来人君も。」

子供三人も驚きを露にする。

エリオに関しては若干テンションが高い。

「方ちびっこは……。」

「ああああ……。」

「あの二人が……。」

「「仮面ライダーあああ!?!」」

やはりリオとコロナの親友同士……。

こんなときにもシンクロする。

「ま、まあ翔太郎の弟子だからなあ。」

「特に変じゃないわよね。」

ノーヴェとティアナは大して驚いた素振りはなかったが。

その後二人の仮面ライダーの戦闘を皆は黙って眺めていた。

勝敗は翔太郎のギリギリ勝ちであったが。

しかし翔太郎に來人、真実を知っている五人は尋問という話をされる羽目になる。

## デバイス紹介（前書き）

デバイス紹介なので本編ではありません。



## デバイス紹介

ネクサス：

翔太郎のデバイス。

スバルが秘密でシャーリーに作ってもらっていたデバイスで普段はウインドスケール社の指輪のような形で左手の小指に装備する。発動させることで左手のプレスレットとなりジョーカーマガナムと同調するシンクロシステムが起動し、ジョーカーマガナムをハンドガンから大出力砲まで任意で使用できるような高機能のデバイスとして使用できるようにする。主にマグナムによる銃撃と体術で戦う。バリアジャケットは白いスーツに白いソフト帽。

スピリッツ：

来人が持つデバイス。

普段は恐竜の頭のようなチェーンアクセサリーとして左手首についている。来人自身を変身させる変身魔法をサポートする。

発動状態はゴツイ手袋型。また仮面ライダー変身時は瞬時に変身魔法を発動させる機能が内蔵されている。蹴り技主体の体術で戦う。バリアジャケットは首にゴーグルを付け、映画版仮面ライダーW時のNEVER風ジャケットと黒いサイドポケット付きズボンと黒ブーツと黒手袋。

湯煙（前書き）

ゆうなれば今回は茶番です。

次回は多分特別偏になります。

## 湯煙

「あ~~~~~、染みるううう~~~~。」

「あ~~~~。」

「ほんとですね~~~~。」

「キユク~~~~。」

湯船につかる翔太郎と来人、エリオ、フリード。

女子達が入浴を済ませている中、三人と一匹はメガーンの手伝いをしていたため、三人は食後に入浴することとなった。

現在は皆男。

なのはとフェイト、メガーンも既に入浴を済ませている。

三人はのんびりと入浴を楽しむことにした。

しかし……。

夕飯は熱々のカレーでありそれなりに汗をかいたため再度入浴を好むのはやはり女性陣。

大半は男性陣の退出を待ってから入るであろう。

一部を除いては。

「！ なんだ？」

翔太郎は更衣室に誰かが入ってくるのに気づく。

「なあ、エリオ。」

「はい？」

「ガリユーって風呂入るか？」

「多分。というよりガリユーはさっき女子の皆と済ましたはずなんですけど……。」

「じゃあなんですかねえ……。」

来人が加わり三人は恐るべき速度で頭の情報処理を始めた。

「この世界には今俺らしかないよなあ。」

「しかも夕飯は汗をかくような熱々、辛めのカレーでしたよねえ。」

「そのうえ師匠、僕達以外男性はいません。」

「………ということとは。」

そして扉が開き現れたのは……。

「す、スバル！」

「キャロお？」

「ヴィヴィオにアインハルト。な、なんで？」

「「お邪魔しま〜〜す」「」

「・・・お、お邪魔します。」

現れたのはバスタオルを身体に巻いたスバル、キャロ、ヴィヴィオ、アインハルトであった。

「ぬおおおおおお〜〜〜！」

「「うわあああああ〜〜〜！」」「」

男性陣の叫びが響き渡った。

「「あ〜〜〜・・・」」「」

マッサージチェアでくつろぐティアナとノーヴェ。

「そついやあよ・・・」」「」

「なあに？」

「スバルはどこいったんだ？」

そのとき。

「ぬおおおおおおお〜〜〜!」

風呂場から翔太郎の声が響いた。

「……………」

「……………」

「「ま、いつかあああ。」」

二人は引き続きくつろぐ。

「ねえそういえばヴィヴィオは？」

「アインハルトさんもいないよね。」

「キャラも……………」

ルーテシアの部屋でリオ、コロナ、ルーテシアはふと気づく。

そして。

「「うわあああああ〜〜〜!」」

エリオと来人の声が響き渡る。

「ヴィヴィオつたら……………」

「アインハルトさんったら……。」

「キャロったら……。」

「……大胆」「」

三人はまるでペちゃんのような笑顔でトランプを配り始める。

他の面子にも男性陣の叫び声は聞こえたが、特に動く素振りも見せず……。

風呂場。

「……スバル……。」

「……キャロ……。」

「……ヴィヴィオ……、アインハルト……。」

「……頼むから出てって(くれ)……」「」

三人は揃って頼むが……。

「……嫌です」「」

「……すいません……。」

スバルとキャロ、ヴィヴィオは笑顔で、アインハルトは顔を赤くして答える。

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

「「「「「」」」」」」

男性陣三人は黙る。

そして念話に入る。



《どうしますか翔太郎さん？》

《何とかあの四人をどうにかしないと。正直僕ちょっと鼻血が出てきたんですけど・・・》

《確かにヤベエな。何とかしねえと・・・》  
すると。

「どわ！ おま、スバル！」

突如スバルが自分の身体を翔太郎の腕に密着する。

「ま ま、翔太郎さん座った座った」

黄色い目、いわゆる戦闘機人モードのスバルは翔太郎を無理矢理座らせる。

「ちょ、おま！ スバル！ お前なんでそこまで力がうおっ！」

スバルは翔太郎に身体を寄せる。

それによりスバルの胸の形状が歪む。

「なあスバル？ 頼むから身体を離してくれませんか？」

「なら背中を洗わせてください」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

翔太郎は大きくため息をはく。

一方エリオとキャラは・・・。

「わひゃい！ きゃ、キャラ？ 頼むから・・・。」

「エリオ君、いつの間にかこんなに身体おっきくなったの？ ずるいなあ〜」

「ひ、ひゃあ〜〜〜〜〜！」

そして来人とヴィヴィオとアインハルトは・・・。

「来人さん結構筋肉質ですね。カッコイイです。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・なんだか変な感じです。」

「・・・・・・・・。」

二人がしゃしゃかと来人の身体を洗うが来人にとっての問題は二人の格好で、二人が使っているタオルは自分達が巻いていたタオル・・・。

つまり今二人は全裸である。

「・・・・・・・・（チラッ）」

来人はふと目をそらすとヴィヴィオの胸元が目にはいる。

なにも隠すものがなく産まれたばかりのままのような光景。

「もう来人さんったら・・・、エッチ」

「・・・・・・・・（ダラダラダラダラ・・・、サッ）」

来人は顔を赤くしぼっとするヴィヴィオから素早く目をそらすも次はアインハルトが。

隠すものがないそのままのアインハルトの身体が来人の目につく。

「・・・エッチいです来人さん。」

アインハルトは頬を赤く染めて、顔をそらすも来人の方をチラチラと見る。

そして。

ブホッ！

来人は鼻血を出したことによる軽い多出血ショックにより後ろに倒れる。

「ら、来人さん！」

「大丈夫ですか？」

二人は来人に駆け寄る。

わざとではないだろうが  
まだ身体はすっ裸。

「う……。！」

そして二人の裸が一気に目に入り……。

ブボツ！

再度倒れる。

「やばい。来人！」

「はやく出ないと！」

翔太郎とエリオが立とうとするも……。

「駄目です翔太郎さん！」

「エリオ君も！」

スバルとキャロが止める。

というより……。

「な！？」

「キャロ？」

バインドで縛る。

そんななか二人は裸のまま来人を更衣室に運び扉が閉められ、扉には来人を扇ぐシルエットが浮かぶもまだ裸。

そしてシルエットから再び来人の鼻から赤い噴水が上ったのを翔太郎とエリオは確かめた。

「「来人（君）……。安らかに眠れ（って）」」

二人は手を合わせた。

しかし二人も二人で逆境。

スバルとキャロが背中を洗い終え、前を洗おうと動き出したのだ。

「よ、よせスバル！」

「た、頼むよキャロ！ そっちは……。」

二人はあがくも思った以上にバインドは強力らしく……。

「「駄~~~~目っ」」

「なっ……。」

「ひっ……。」

「「ぬあああああああ……！」」

「……………はっ！」

まだ深夜。

ここは男だけが寝ている部屋。

たつぷり汗をかきながら翔太郎が起きる。

「はあ……………、はあ……………、はあ……………、なんつー夢だ。」

翔太郎は隣の二人を見る。

左には……………。

「う……………ん……………。辞……………めで……………、キャロ…………………………。」

「頼むよ……………、二人とも……………、服を来て…………………………。」

うなされているエリオと来人。

するじ。

「……………ん！」

「……………はあ……………。」

二人が起きる。

「お前らまさか……………。」

「翔太郎さんと来人君も？」

「師匠とエリオさんも？」

「「「「」」」」」

この三人はなにかのシンパシーを感じた。

「・・・・・・・・またはいつてくるか。」

翔太郎は唾然としながらも汗だくの自分を見て起きる。

「じゃあ、僕も・・・・・・・・」

「僕も・・・・・・・・」

エリオと来人も起き上がり、三人はタオルと替えの寝巻きを持って退出する。

その後ろに四つの影が忍びよるのも気付かずに。

~~~~~数分後~~~~~

「ぬおおおおおおお~~~~~！」

「「「うわあああああ~~~~~！」」」

男性陣の悲鳴が響いたも寝ている女性陣は起きることなく眠っていた。

その後の朝食では男性陣は翔太郎とエリオは真っ白に、来人にいたっては極度の貧血なのか真っ青になっていた。

対して女性陣のスバルとキャロは顔を赤くして嬉しそうです。あり、ヴィオとアインハルトにいたってはまるで凄いものを見たかのようにぼくっとしていた。

総合評価400突破特別版・少女(前書き)

特別編になります。

今回はアインハルトとの絡みになります。

総合評価400突破特別版・少女

街中に立つアインハルト。

それなりにおめかししており、意識している異性とのデートとわかる。

（早かったですかねえ）

ちなみに待ち合わせは10時。

この子がここに来たのは9時。

今は9時50分である。

（いくらなんでも一時間前ではいるわけありませんよね）

何を隠そうこの子は楽しみすぎて早朝に起きてしまったからであり、いまもおそわそわしている。

するじ。

「アインハルト……」

来人が走ってきた。

来人もそれなりにおしゃれをしている。

「遅れたかなあ……」

「……ほ、ホントです。」

「でもまだ時間じゃないよね……。」

「……女性を待たせるなんて……。」

「ああ、ごめん。師匠だったらそう言うよね。」

「……そうです。」

「……ごめんごめん。」

「……。」

「アインハルト?」

「……許す代わりに……。」

「……な、何?」

「……代わりに手を繋いでくれたら……、いい……いいですよ。」

「え?」

「……というより繋いでくれないと一発入れます。」

アインハルトは拳を握りしめる。

「わかったわかった! わかりました! それじゃあ……はい。」

「・・・はい。」

二人は手を繋いで歩き始める。

(・・・ああ。柔らかいです)

ややアインハルトの顔が赤いまま。

ちなみに今から二人はデートの定番の映画館に行ったのち買い物に行く予定である。

こういうことをあまり知らないアインハルトがテレビやら小説やらからこういった王道ルートを選んだ。

そして以前のヴィヴィオの遊園地デートに対抗するためのルートであった。

「そういえば翔太郎さん。」

「なんだ？」

二人は今日は休日出勤である

「こないだアインハルトに何を渡したんですか？」

「ん？ 映画のチケットだが。」

「なんでですか？」

「いやあな。こないだ来人が好きだっていう俳優の新作映画のチケットもらつてな。来人に行ったら確実に食い付くと思っな。」

「なるほど。え、でもなんでアインハルトに？ どうせなら私達が・・・。」

「ちなみにアクション映画だぞ。恋愛映画にあいつが食い付くと思っつか？」

「・・・納得です。」

「だろ？ ほら手が止まってんぞ！ 動かせ動かせ！」

「翔太郎さん？ 少し休憩を・・。」

「誰のせいで休日出勤だと思ってるんだ？ お前が遅いからぞ。ほらっ、次！」

「ひゃああああああ〜〜〜！」

スバルの叫びが響き、スバルの屍化ルートが確定した。

「〜ですな、それでスバルつたら〜・・・。」

「・・・・・大変だな。」

ミッドチルダ東部、次元航空隊本部近くのカフェ。

東部に着ては必ず立ち寄るティアナはそのカフェのマスターである青年に愚痴を溢していた。

「……つたく。マスターだけですよ。他に愚痴を言えるのは。」

「……まあランスターはお客だからな。お客の愚痴を聞くのも仕事の内だ。」

マスターは笑って答える。

するとティアナは顔を赤くして聞く。

「……あの……。」

「……?」

「……もし良ければ名前で呼び合いたいんですけど……。」

「……なんでだ? 特に俺達はそんなに深い仲じゃないが……。」

ちなみにマスターがティアナの名前を知っているのは以前初めて来たときの帰りに言われたからである。

無論名前を言われた以上マスターも名前を名乗った。

ティアナの作戦とも知らず。

「……えっと、なんとなく……。呼ばれたっていうか呼びたっていうか……。」

「……。」

「……いやいやいや。嫌ならいいんですけど……。」

「……いや。構わないぞ。常連さんの頼みだからな……ティアナ。」

するとティアナの顔が晴れる。

「は、はい 賢さん」

ティアナはそのマスター、芦原賢の名前を恥ずかしそうながらも嬉しそうに呼ぶ。

その後二人は他愛もない会話を続ける。
若干ティアナの顔が赤いまま数時間近く。

「あ〜、楽しかったあ！アインハルトはどうだった？」

「……楽しかったです。」

「……やっぱりあの年齢でノースタントはやっぱり凄いやね〜
！特に僕は ロジエクトAの時計塔から落ちるシーンが燃えた！」

「……はあ……。」

饒舌に語り続ける来人にアインハルトは若干啞然としている。

「あ……。ごめんアインハルト。」

「……。いえ。……。あの……。」

「何？」

「……。やっぱり私も知っていた方が来人さんは楽しいですよね……。」

「うっっん。まあ……。でも……。」

「？」

「アインハルトとは何を喋っても、何をしても楽しいかな……。」

笑顔の来人のこの一言にアインハルトは……。

「（カアアアアアア……）」

顔面が急激に赤くなる。

「それじゃアインハルトさん。お昼に行こっか。」

「……。はい。」

「何処がいい？」

「来人さんにお任せします。」

「うん、わかった。でも……。」

「……ですね。」

二人はいつの間にか映画館を出て、今から歩く道を見て呆気に取られる。

今日が休日だけあって目の前の道には人が大勢。

「……なんだか手を繋ぐだけじゃ不安だね。」

「……よし。」

するとアインハルトはいきなり腕を来人に絡ませてきた。

「ちょ……。」

来人はたじろぐ。

「……手を繋ぐだけじゃ不安といたのは来人さんです。」

「ま、まあそうだけど……。」

「……嫌ならいいです。」

アインハルトはそっぽを向く。

「うっすん。わかった。じゃあ……。」

来人はアインハルトに腕を出す。

「……………はい。」

アインハルトは来人の腕に自分の腕を組む。

「行こっか」

「……………はい。」

来人、そして頬が赤いアインハルトは人並みの中を歩き出す。

そして来人行きつけのファーストフード店に向かった。

「どうアインハルト？」

「……………美味しいです。」

二人はファーストフード店で食事をする。

するど。

「！」

来人がなにかに気づき、アインハルトの顔に手を近づける。

「え？ ……なんですか来人さん？」

「まあまあ……。じつとして。」

「……はい……。」

アインハルトは目を閉じると頬を撫でられる感覚を感じた。

「はい？」

アインハルトが目を開けると来人の右人差し指にはアインハルトが食べていたハンバーガーのソースが。

「案外うっかりさんだね、アインハルト。」

「……す、すいません。」

すると来人はそのソースを舐める。

「!?!」

「うん美味しい さ、食べよう。」

「は、はははは……、はい。」

アインハルトはまるで壊れた人形のようにパニクる。

気が付き周りが視線を移し始めるもアインハルトは修復されない。

「あ、アインハルト！ はやく食べよう！」

「はひい……。」

アインハルトは燃え尽きたようにしながらも食べ進める。

やたらとその手は早かったが。

すると食べながらアインハルトが……。

「……次は買い物です。……つ、次もちゃ……、ちゃんとエスコートして下さい。」

「エスコート……。」

「……翔太郎さんが言ってる」

「わかったわかった。行こう行こう。」

「……はい。」

二人は密着して歩き出す。

アインハルトがあまりにも身体を押し付けてくるためやたらとふらふらであったが。

「……どうですか来人さん？」

洋服屋の試着室で藍色のワンピースを着たアインハルトは来人に聞く。

「うん、可愛い」

「……そうですか!?!」

アインハルトは嬉しそうに頬を赤くする。

「……じゃあこれにします。……お会計……、あれ?」

「どうかした?」

来人は財布を見てフリーズするアインハルトに寄る。

「……足りません……。」

「ありゃ。」

「……諦めます。着替えるので待っててください。」

「……うん。」

アインハルトはカーテンを閉める。

数分後退出したアインハルトは来人と合流。

そして二人して店を出ようとしたとき。

「ごめんアインハルト。ちょっと忘れ物した。ちょっと待ってて。」

「え……、はい。」

来人は店に入り、数分後アインハルトと合流し二人は歩いていった。

時間は夕方。

二人はアインハルトの家に向かって歩き出す。

アインハルトの家に辿り着いた二人。

ただアインハルトの歩くスピードが低かったためすでに夜である。

まるで来人との時間を惜しむかのように。

「……では来人さん。明日また学校で。」

「うん。また明日。」

アインハルトは玄関に向かう。

すると。

「あ、待ってアインハルト！」

「……はい。」

「これ忘れてた。」

来人は背中の肩掛けバックから小包を出す。

「……………これって?」

「さつき欲しがってたから……………奮発」

「……………でも……………あの……………」

遠慮するアインハルトに来人は小包を押し付ける。

「……………僕の好意だから……………受け取ってよ。」

「……………いいんですか?」

「モチ」

来人はアインハルトに笑顔で答える。

「……………あり……………」

「ん?」

「……………ありがとうございます。」

「どういたしまして」

照れるアインハルトに来人は笑顔で返す。

「……………。」

するとアインハルトは急に来人の手首を掴み自分に寄せ……。

「……………」

「……………私からのお礼です。」

アインハルトは来人から離れ家に駆ける。

そして扉を開け、閉じようとしたとき……。

「……………おやすみなさい来人さん。」

「……………うん。」

来人はぼーっとしたまま、アインハルトに返事を返す。

そのまま来人は数十分立ちすくんだ。

未だ唇に残る暖かみに唾然としながら。

その後来人は家に帰ったものの……。

一週間寝込むはめとなった。

ちなみに医者曰く風邪や熱などの病的なものではないらしい！

魔導（前書き）

模擬戦です。

四話分を圧縮しました。

正直大雑把です。

なので原作を知っていることをお勧めします。

魔導

旅行2日目。

ヴィヴィオ、リオ、アインハルト、他の部屋でまだ眠っている中、
コロナとルーテシアはジョギング。

なのは、エリオ、スバルは試合のミーティングをしていた。

そして翔太郎は……。

森の中。

「おりゃあ！」

辺りには滝の音や鳥の鳴き声しか聞こえないなか翔太郎の音が響く。

翔太郎は建前状そう言われる荘吉譲りの護身術を練習していた。

そして次回はたち……。

模擬戦場。

遠くからセインとメガーヌが見学するそこに翔太郎やスバルを始め
14人が集まる。

そしてノーヴェエが話を始める。

「えー……、ルールは昨日伝えた通り赤組と青組、七人に分かれ

たフィールドマッチです。ライフポイントは今回もD S A A公式試合用タグで管理します。あとは皆さん怪我のないよう正々堂々頑張りましょう。」

ちなみに翔太郎はなのは率いる青組、来人はフェイト側の赤組である。

「は 　　いつ!」×13

「おう!」

翔太郎を除いた13人が答え、翔太郎も返事を返す。

「ただし翔太郎と来人は仮面ライダー禁止な。」

「わ　　ってるよ。」

「はい!」

「な　　んだ。私仮面ライダーと戦ってみたかったのになあ。」

「洒落になんねえよりオ。」

「冗談冗談」

翔太郎とリオが漫才をしながらもみなデバイスを構える。

「じゃあ赤組元気にいくよ!」

「青組もせーの!」

フェイトとなのはの掛け声に皆が声を揃える。

「セーッとアープ！」×12人

「セッとアープ！」

翔太郎と来人は普通の”変身”の癖か短く叫ぶ。

そして皆はそれぞれのバリアジャケットを纏う。

翔太郎及び来人は遠近距離どちらにも対応なためライフ3000の
ガードウイング
GW、フェイトやエリオと同じポジションとなった。

「序盤は同ポジション同士の1on1！ 均衡が崩れるまでは自分のマツチアープ相手に集中ね。」

「おー！」

ティアナの作戦に皆が答える。

「……来人さん……。」

「ん？ どうかしたアインハルト？」

「くれぐれも無理はしないでくださいね。」

「大丈夫だよ それにね……。」

「？」

「何だか凄い燃えてきた。」

「・・・私もです。」

来人とアインハルトは内心に炎をメラメラと燃え上げらせていた。

一方青組・・・。

「向こうは前衛と中盤に突破力の高い子が揃ってる。序盤は守備を固めて向こうの足を止めていこう。」

「はいっ!」

なのはの作戦に皆は高々に返事を返す。

するとスバルが翔太郎に話しかける。

「そういえば翔太郎さん大丈夫ですか?」

「なにがだ?」

「だってこういう翔太郎さん初めてでしょ?」

「大丈夫だ。前日にちゃんと説明には目を通した。」

「で～～も～～、し～～ん～～ぱ～～い～～で～～す～～。～～。」

「だぁ、っしっしっしっ!」

スリスリするスバルに翔太郎は払いよけようとするのを周りは笑いながら眺めていた。

そして現れたモニターにはメガーヌとドラを構えるガリユーが移り・
・・。

「それではみんな元気に・・・、試合開始〜〜！」

フリードをビビらせたガリユーのドラが響き渡り試合が始まった。

「ウイングロードッ！」

「エアライナーッ！」

スバルとノーヴェがそれぞれ魔力の道を生成し皆が動き出した。

青組側。

「行くよリオ！」

「オツケーヴィヴィオ！」

ヴィヴィオとリオ、大人モードの二人はスバルのウイングロードを走り始める。

一方赤組・・・。

「コロナさん、リオさんの相手をお願いしても？」

「はい。お任せ下さいッ！」

アインハルトとコロナも動き出した。

GW側・赤組。

「よしっ！ 頑張りましょうフェイトさん！」

「うん頑張ろう未来の義息子さん」

「はい？」

「ううん。なんでもない。」

「？」

一方青組……。

「行くよストラダー！ 今日こそフェイトさんを撃ち落とすッ！」

『了解です』

エリオのデバイス、ストラダーが答える。

「俺らも頑張らねえとな、ネクサス。」

『負けられませんね翔太郎』

ネクサスも答え翔太郎もマグナムを強く握る。

ほぼ同時刻。

「さて、FBとしてどっちがチームをしつかり支えられるか？」

「負けられないだから！」

FBを担当するルーテシアとキャロ。

そしてCGのティアナとなのは。

（なのはさんに大きいのを撃たれら一瞬で全滅の危険がある。それにあつちには翔太郎さんもいる。正直翔太郎さんは魔法に関しては初心者だけどあの直感に加え推理力……。魔法もかなりの威力だった）

ティアナは警戒し……。。

（ティアナの徹甲狙撃弾は私のよりも速いし固い。撃たれたら味方も私も危ない。加えてあつちにはあの歳であれだけ動ける来人君がいる。風の変換はまだ未知の所がある。……。侮れない。必勝の一撃は……。）

なのはも警戒を怠らない。

そして二人の思いが重なる。

（（数の均衡が崩れた瞬間！））

FA同士、ノーヴェとスバルのぶつかりあい。

互いに魔力弾をぶつけたのちノーヴェの蹴りをスバルは受け止める。

「さすがにやるねノーヴェ！」

「ツたりめーよ！」

互いに距離を取り……。

「仕事じゃともかく格闘戦技じゃ……！」

「とはいえわたしもおねーちゃんだから……！」

「「負けないツツ（ねーツツ）！」」「」

スバルとノーヴェ、二人の回し蹴りがぶつかりあった。

そして別所ではヴィヴィオとアインハルト、リオとコロナがぶつかりあっていた。

その頃……。

両陣営のGWが鉢合わせする。

「エリオとやるのも久々だね。」

「お願いします！」

フェイトとエリオ、親子が久々の激突を始めた隣では……。

「負けませんよ、師匠！」

「上等だぜ……。かかってこい！」

ファイティングポーズをする来人に翔太郎はマグナムを回す。

「……………」

「……………」

そして互いに静まるが……。

「うおりゃあああああ！」

「でえええええええい！」

師弟は互いの蹴りをぶつけあった。

そのまま来人は拳を放つも翔太郎には当たらずに空を切る。

そして翔太郎は懐からマグナムを放つが来人は瞬時に風により弾丸の軌道を反らす。

そして互いに前蹴りで距離を開ける。

「やるな来人。」

「まだまだです。」

続けて互いは魔力弾を生成し撃ち出すが、放たれる魔力弾は互いに封殺され当たることはない。

すると来人は右足に風を纏い始める。

「遠距離が駄目なら直接・・・、風牙烈蹴！」

そして蹴りかかる。

しかし・・・。

「甘いぜー！」

翔太郎は当たる寸前でバックステップし紙一重で交わり、マグナムを放つ。

「つう！ でも！」

来人はまともに受け、後ろに吹き飛ぶも何か指で誘導する素振りを見せる。

「あん？」

翔太郎は振り向くと魔力弾が顔面に……。

「あ……。」

来人が唾然としながらも……。

「ぐおおおおおお……。」

顔面を抑える翔太郎。

「なかなかやんなあ……、来人お。」

顔をひきつらせて笑う翔太郎。

「し、師匠？ お、怒らないで……。」

「安心しな……、ただしその分ツケで返すからな？」

来人には翔太郎に血管マークが見えるような気がした。

「前置きはここまでだ。さあ来人……お前の罪を数えろ！」

「数えるほど悪いことはしてません……っよ！」

「それもそうだ……っな！」

互いに魔力を纏った二人の後ろ回し蹴りがぶつかりあった。

そして試合は終盤……。

二人がぶつかりあい、他にも同ポジションがぶつかりあい均衡が保られたこの模擬戦も、アインハルトの後退により2on1となり一気にけりをつけるべくなのはそばに翔太郎、ティアナのそばに来人が合流する。

そして……。

「スターライトブレイカー！」

「ジョーカー……フルカノン！」

「烈風爆砕波あ！」

なのはとティアナの集束砲、翔太郎の紫の砲撃、来人の竜巻が放たれ周囲を爆発させる。

その光景は……。

「……これ、なんて最終戦争？」

昨日女性陣にいたずらをしたセインが顔をひきつらせる。

「まー、集束砲同士が激突すればねえ。」

となりのメガーヌもやや笑顔が曇っている。

そして現状は……。

エリオはブレイカー直撃により目を回して気絶し、フェイトはブレイカー着弾直後にエリオに撃墜された。

ソニックフォームであったためその服装は女性の秘密の部分をぎりぎり隠す程度しか残っていない。

『大丈夫ですかマスター』

「な……、なんとか……。」

コロナも防御が間に合わずに戦闘不能。

「あ　ん。　や　ら　れ　た　あ　ー！」

涙目のなのはもティアナのブレイカーを相殺しきれずに撃墜される。

しかし……。

「な……、なんとか生き残った……。」

ティアナはライフを110残しまだたっていた。

そしてモニターを見ると近寄る何かが……。

「残ってるのは……あたしと……、あと二人？　近づいてくる……！　この速度スバル!?」

しかし実際は……。

「じゃなくてヴィヴィオですっ！」

ヴィヴィオが急速に接近。

「うそおっ！　なんでほぼ無傷ッ!？」

ティアナが驚くが実は……。

「えへへー、見たかレスキュー魂！」

「あー、くそ。やられた。」

スバルがヴィヴィオをかばい撃墜されていた。

となりにはブレイカー直撃直接にヴィヴィオに撃墜されて悔しそうにするノーヴェ。

その状況を見るセインとメガーヌ。

「よおし！　こりゃヴィヴィオがティアナを潰して終わりだッ！」

しかしこの後現れるインハルトを含めまだ立っているのが他に二人いた。

ヴィヴィオとアインハルトが再び混じりあつ最中……。

少し離れた別所。

瓦礫が動き中から……。

「おりああああ！」

「そいいいいい！」

上着を捨てる翔太郎と来人。

「あつぶねええ。」

「し、死ぬかと思つた……。」

実は二人はブレイカー直撃の前に瓦礫を縦にしてしのいでいた。

「しかし多分魔力も少ねえし……。ここはちよつくら……。。」

翔太郎はマグナムをしまい、右足を構える。

「僕だつて！」

来人も右足を構える。

そして互いに足に魔力を覆つ。

そして……。

跳躍。

「ジョーカー……ハンマー！」

「風牙烈空蹴！」

翔太郎の飛び蹴りと来人の飛び回し蹴りがぶつかりあう。

そして……。

「うおおおおお！」

「うわあああああ！」

二人は吹き飛んだ後に……。

「ほう！」

「おっ！」

二人は後ろのビルにぶつかり、ビルの壁にその型を形取る。

そして双方とも目を回し気絶していた。

そしてほぼ同時刻。

ヴィヴィオとアインハルトの相打ちによりこの模擬戦は終了。

その後の模擬戦もドローが続いたが、戦力バランスが同じなためかドロー、翔太郎と来人は結果的に3戦中3戦が相打ちという結果に

終わった。

魔導（後書き）

ちなみに旅行編終了後はインターミドルまでかなり期間が空いてい
るためオリジナルになります。

ところで新章とかに入るときってどうやるんですかねえ？

やり方を知っていたら是非教えてもらいたいです！

不安（前書き）

三巻終わります。

今回はちよつとせつぱ詰まったかもしれませんが、ストーリーがうかばなかったので一気に三巻を終えました。

インターミドルまでかなり間があるので次からは完全にオリジナルとなります。

ちなみに探偵関係ということで宮内洋さんが演じたある探偵を出したいと考えていますがみなさんどうでしょう？

不安

全試合終了後。

「さすがに3連戦はキツイわねえ。」

「ほんとだねー。」

ティアナとスバルは風呂上がりでリクライニングチェアでくつろいでいた。

「でもおかげさまで大分実戦勘が戻ったかも。」

「よかったよかった。」

すると。

「あ、ノーヴェ。」

スバルが気付くと……。

「おう。」

ノーヴェがいた。

「みんなはどうしてた？」

「さすがにくったりだな。フェイトさん一家は部屋でのんびりしてるし、なのはさんとメガーヌさんはキッチンで談笑中。んでチビたちはベッドにダウン。お嬢はチビたちと一緒にだ。」

「そういえば翔太郎さんと来人君は？」

スバルが聞くと……。

「あの二人ならな……。」

屋根の上。

翔太郎と来人は星空を眺めていた。

カルナージにはアルピーノ邸しかないためクラナガンよりも遙かに星がはつきりと星空を形成していた。

「きれいですねえ師匠。」

「……そうだな。」

「どうかしましたか師匠？」

「……来人……。旅行中にも関わらず暗れえ話をするがいいか？」

「……はい。」

「……俺達は今まで多くのドーパントを倒してきたな？」

「……はい。」

「・・・しかし今まで俺達が倒してきた連中はまだ弱いやつばかりだ。」

「！」

現に今まで翔太郎と来人が倒してきたドーパントは戦闘向けもあればパペティアーといったあまり戦闘に向かないドーパントも倒してきた。

しかし以前の園崎家が使った上位ランクのガイアメモリのドーパントとは戦ったことはなかった。

「・・・多分上位ランクのドーパントも遅からず出てくる。そうした場合今の俺達じゃ勝てない可能性だってある。」

「……………」

「…………そうした場合、・・・俺は我が身を降りみず無茶をする。……………そんなときはお前が仮面ライダーを継いでけ。」

「何いつてるんですか師匠！」

来人は立ち上がる。

事実翔太郎はウェザードーパントから仮面ライダーアクセル・照井竜を守るために禁術、ツインマキシマムを実行し倒れるという過去があった。

「そんなことさせません！ 師匠は一人じゃないんです！ 僕だっ

ていますし！ スバルさんがいるんですから悲しませるようなことは駄目です。」

「……………」

「師匠言つてたじゃないですか。愛してくれる人は死んでも悲しませるなつて…………。師匠は死なせません！ ……僕たちが！」

「来人……………」

「……………」

「そうだな…………。俺としたことが。弱気になつてたぜ。悪いな…………。来人。」

翔太郎は握り拳を突き出す。

「…………はい！」

来人も拳を突き出し、互いに拳を合わせた。

後に二人は家に入る。

屋根で二人で話したことを悟られぬように笑顔で。

「インターミドルかぁ。」

ヴィヴィオやアインハルトから話を聞いた来人は呆気に取られる。

「そんなんです私たちやっとう出場年齢になったんで参加するんです」

ヴィヴィオは嬉しそうに笑う。

「へ〜〜。頑張つてね。くれぐれも無理はしないように。」

「は、はい」

心配してくれる来人にヴィヴィオは嬉しくなる。

そんなヴィヴィオをリオとコロナはニヤニヤしながら笑う。

「な、なあにい二人とも!？」

「「べつにいい〜」。

「もおおおお〜〜〜!」

ヴィヴィオ対リオとコロナの鬼ごっこが始まる。

「アインハルトは出るの?」

「.....えつと.....」

「出るかはわからないよね。でも出るなら頑張つてね。応援に行くから」

来人はウインクして言う。

「・・・が、頑張ってみます。」

アインハルトは顔を赤くして答える。

「ら、来人さん。私には〜?」

ヴィヴィオが来人とアインハルトの間に首を突っ込む。

「もちろんヴィヴィオも頑張つて。期待してるよ 二人も」

「は、はい」

「もち」

「了解」

ヴィヴィオ、リオ、コロナの順に答える。

やたらにヴィヴィオは声のトーンが高いが。

そんなこんなでちびっこ達の雑談は続いたがやはり子供なのか、深夜前に皆寝てしまった。

「あ〜〜、きくぜえ〜〜。」

スバルの部屋で翔太郎はスバルからマッサージを受けている。

本来なら翔太郎がする予定であったが、翔太郎の理性を飛ばすためにスバルが全裸で受けようとしたため、逆となった。

「気持ちよさそうですねえ〜、翔太郎さん。この勢いで私も・・・、その・・・、気持ちよk・・・」

「寝言は寝てから言え。」

顔を赤く恥じらいながら言うスバルに翔太郎は鋭くつつこむ。

「む〜〜〜。」

「まあ怒んなよ。これだけマッサージがうまけりゃいいお嫁さんになれるぜ」

「ま、まままマジですか!？」

「お、おつ。」

急にテンションが上がったスバルに翔太郎は若干引く。

「えへへへ〜〜〜」

翔太郎に誉められスバルは嬉しそうにふぬける。

そしてマッサージは済み翔太郎は部屋を後にする。

そして廊下を歩きながら考え込む。

「……………」

（スバル…………。お前は俺の大切な人だ。…………皆も…………だからこそ！）

「…………俺は無茶だろうがなんだろうがやりぬいてやる。」

翔太郎は廊下を普通に歩くもその目には強い決意が現れていた。

そして3日目にはアインハルトは八神家とコンタクトを取り自らのデバイス作成を依頼、4日目も平和に終え一同はクラナガンに戻ってきた。

右風宅・来人の部屋。

『へえ……。来くんの友達も参加するんだあ……』

「うん。皆強いからきつといい成績を残せると思う。ミウも頑張つてね。」

来人はモニターである女の子と連絡をしていた。

相手は半袖半パンの一見少年にも見えるボーイッシュな少女。

若干頬が赤いが来人からは幼なじみで見慣れているため、特に不思議と思っていなかった。

『うん、うん。任せて。ボクも頑張る。』

「うん。その通り。ミウも頑張ってるね。絶対応援に行くからね。」

『うん。・・・それとね来くん。・・・約束覚えてる?』

「約束?」

するとモニターの少女は急にモジモジする。

『そのね・・・、もしいい成績を残したら・・・、い、一日付き合
うって言うことと』

「あゝあ。覚えてるよ。でも多分ミウのことだから組み手でしょ
う?」

『・・・』

「・・・あれ? 違った?」

『おやすみ!』

すると少女は怒ったように一方的に通信を切る。

「・・・なんか悪いこといったかなあ僕。」

来人は何も分からずに啞然としていた。

「来くんつたら相変わらず鈍感だよ。」

少女はまだ怒っている。

(…………でも約束覚えてくれてたのは嬉しかったなあ)

次には頬を赤らめる。

そして目に炎がともり……。

「だからこそいい成績を残して一日デートしてボクにメロメロにさせちゃうんだから！」

海に沈む夕陽に向かって少女、ミウラ・リナルディは叫んだ。

「……………」

後ろでは褐色色の肌に白髪、筋肉質な男性が若干引いていたことも知らずに。

翔太郎達が戻ってきたその日の夜。

とあるビルのある部屋。

「よく来て頂きました。」

若い男が黒いスーツにシルクハットの客にお茶を出す。

「いいえ結構です。私はどちらか言つと紅茶の方が……。」

「これは失礼。」

男は紅茶の準備を始める。

「あなたが私を呼ぶとは……。何かありましたか？」

「いいえ。ただ……。」

「ただ？」

「一応戦力は集中させておいた方がよろしいかと……。」

「なるほど。約束の日は近いですからね。巫子の用意はどうなんです？」

「それなら大丈夫です。候補は決まっていますし、簡単に手に入ります。そちらに写真が……。」

客はテーブルの写真、スバルの写真を見る。

「なるほど。なかなかいい娘ですね。これだけ美人なら私がひんむきたいのですが……。」

「いけませんよ。彼女は大切な巫子です。きたる約束の日のね。」

「なるほど。……では私はこれで。」

「せっかく紅茶が入ったのですが……。」

「今度頂きますよ。……そうだ。あの仮面ライダーとやら……
。どうするつもりです?」

「どうするとは?」

「あの程度ならあなたなら簡単に倒せるはずですよ。」

「良ければ殺ってしまってもかまいませんよ?」

「ありがとうございます。この力に対抗してくれる方がなかなかい
なくて暇だったんですよ。」

「そうですね。ではこちらからも数人寄越しましょう。」

男はアタッシュボックスから三本のメモリを取り出す。

「せいぜい足手まといは寄越さないでくださいよ? では。」

「ではまた。」

そして客は部屋を後にした。

「………仮面ライダー。あなたたちの未来は………死……
………だけ
です。」

男は懐からメモリを出す。

『テラーユニットピア!』

廊下を歩く客だった男。

「さあて……。楽しませて頂きますよ……。仮面……ライダー
」

そして男は懐からディスプレイにWと描かれたメモリを出し、鳴ら
す。

『ウエザー!』

不安（後書き）

調子によって二章をやるべきか綺麗に終わらせるか悩んでいます。

消失（前書き）

今回は全体的にシリアスです。

消失

とある休日。

「わああああ……。ほらほら翔太郎さん！ 見て見て！」

「あん？」

買い物を済まして歩くスバルと翔太郎の二人はとある店のディスプレイの前に止まる。

そこには純白のウェディングドレスとタキシードが飾られていた。

「私もいつか着てみたいなあああ。」

「そんないいもんかあ？」

「もう！ 翔太郎さん！ ウェディングドレスはすべての女性の憧れなんですよ！？」

「男にはよくわかんねえ。」

そういつて呆れながら歩き続ける翔太郎。

「ま、待ってくださいよぉ〜。」

続くスバル。

するど。

「！」

空からバットショットが飛んできた。

「まったく毎回毎回急に出てくるな。」

「まさか！」

「ああ、ドーパントだ。スバル、これ頼む！」

翔太郎は荷物をスバルに預け、走り出した。

河原。

「ば、化物……。」

そこで家族連れがバイラスドーパントに襲われていた。

「ふふふうふう。」

バイラスがゆっくりと近寄る。

すると。

「そこまでだ……。ドーパント。」

翔太郎が滑りながら降りてきた。

「逃げる！」

「は、はい！」

翔太郎に促された家族はすぐさま逃げ出す。

そして場には翔太郎とバイラスドーパント……。

しかいないと思えたが翔太郎は背後から歩み寄る気配に気付く。

「！」

現れたのはビーストドーパントにスミロンドドーパント。

そしてもう一人、黒いスーツの男……。

翔太郎はその男の顔をよく知っていた。

「井坂……深紅郎？」

その男は以前翔太郎達仮面ライダーが苦戦を強いられ、アクセルトリアルルの前に敗れた井坂深紅郎であった。

「ほう。私を知っているとは……。」

「何。」

（……まさかこいつはこの世界の井坂？）

「あいにくあなたの顔にはちつとばかり悪い思い出があつてな……
。といつても……、今回もいい印象は持てなさそうだ。」

「あなたが黒い仮面ライダーでしたね。」

「だったらなんだ？ サインでも頼むか？」

「いいえ。……どちらかといえば……。」

井坂は懐からWと描かれたガイアメモリを出し、スタートアップス
イッチを押す。

『ウエザー！』

「！」

井坂はウエザーメモリを右耳にスロットし辺りに雷鳴と風が吹き荒
れる。

そしてあちこちに雷神や風神がモチーフに描かれたウエザードーパ
ントが現れた。

「首を頂きましょう。」

「マジかよ……。ったくついてねえ。」

『ジョーカー！』

「変身！」

翔太郎はドライバーにジョーカーメモリをスロットし傾ける。

『ジョーカー!』

翔太郎はジョーカーに変身する。

「つたく4対1とは・・・、フェアプレイの欠片もねえなあ。」

「あいにく・・・、勝負には分が良くなければ仕掛けない主義でしてね!」

ウエザーの指示によりビースト、スミロドン、バイラスが襲いかかる。

「上等だ!」

ジョーカーは手首をスナップさせビーストに蹴りかかった。

「・・・翔太郎さん・・・、大丈夫かなあ・・・。」

スバルが心配そうに歩く。

すると。

「!」

さっきまで晴天だったにも雲行が怪しくなってきた。

「(・・・・・・・・ざわっ)」

そしてスバルは妙な胸騒ぎを覚えた。

「・・・・・・・・翔太郎さん！」

スバルは買い物袋を捨て、翔太郎が走っていった方向に走り出す。

「うわあああああああ！」

ウェザーの雷撃がジョーカーを襲い、爆発が起こりジョーカーは倒れる。

「がああああ・・・・・・・・。」

「いくら貴方が強かろうが多勢に不勢です。まあ私達の場合は一人一人も強いですがね。」

「んなおお・・・・・・・・。」

ジョーカーが立ち上がると背後からビーストが襲つ。

「!」

すると

「でりあああああああ！」

サイクロンがビーストに飛び蹴りをかましながら参戦する。

「すみません。遅くなりました師匠。」

「いや。いいタイミングだったぜ。」

サイクロンはジョーカーに肩を貸す。

「師匠。……あれが……。」

「ああ。……気をつける。束になってるがあの蚊みてえの以外強いぞ。」

「分かりました。では……。」

「ああ……。行くぞ。」

「はい！」

「また増えましたか……。まあ暇つぶしにはなるでしょう。」

対するウェザーは余裕を見せる。

「言ってる！」

ジョーカーとサイクロンは走り出す。

そしてサイクロンはビーストとスミロドン、ジョーカーはウェザーとバイラスにぶつかりあう。

「はあああ……！ せいっ！」

サイクロンはビーストに回し蹴りを叩き込む。

「とりゃああああ！」

そして横蹴りでビーストを吹き飛ばす。

「決める！」

サイクロンはマキシマムスロットにサイクロンメモリをスロットする。

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

「はあああああ……。」

サイクロンは右足に力を込めて飛ぶ。

「ライダーあー、トルネードお！」

サイクロンのマキシマム、ライダートルネードがビーストに放たれる。

しかし……。

「!?!」

サイクロンは妙な違和感に襲われる。

実はビーストは蹴りを叩きこんだサイクロンの右足を掴んでいた。

その上マキシマムの傷が急速に再生する。

「そんなぁ……。マキシマムが。」

「……………」

そのままビーストはサイクロンの足を放しひたすらに爪で切り裂く。

サイクロンもあかくもメモリチェンジの隙を与えずに吹き飛ばす。

「がああああああ！」

サイクロンは立ち上がるも……。

「！　がああああああ！」

高速移動するスミロドンからの連続攻撃が放たれる。

そしてスミロドンは倒れたサイクロンを掴み上げひたすら引き裂く。

そしてサイクロンをビーストに投げ飛ばし……。

「！」

ビーストのメモリの力を込めた一撃がサイクロンの腹部に放たれる。

「がああああああ！」

サイクロンは力なく倒れ、変身が解け青年姿の来人が傷付いた姿で現れた。

「来人おおお！」

全身が傷つき今もウエザーに首を締め上げられるジョーカーは来人の名前を叫ぶ。

「てんめえらあ！」

ジョーカーは力を振り絞りウエザーの手を離そうとするが……。

「ふん！」

ウエザーはジョーカーの首をわざと離し、高熱を纏った右手でジョーカーに拳を放ち吹き飛ばす。

「ぐわあああああ！」

そのまま休む間もなくスミロドンの高速移動からの連続攻撃にビーストの重い一撃、ウエザーからの落雷にジョーカーは徐々に追い詰められ……。

「うわあああああ！」

変身が解け翔太郎は痛み悶える。

「……がああああ……。」「……こんなと……。」

翔太郎はマグナムを手に立とうとする。

「……し、師匠……。」

来人も立とうとするがダメージのせいか立てない。

「ふん。そろそろ飽きました。消えなさい。」

ウエザーは翔太郎に熱を放射する。

「させるかあああああ！」

するとバリアジャケットのスバルが現れ、魔法で防ぐ。

「スバル？ よせスバル！ お前じゃ……。」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ……。」

しかしドーパントの力には叶わずスバルは吹き飛ばされ柱に叩きつけられる。

「つう！」

「スバル！」

「邪魔しないでください。貴方は大事な方なんですから。……来るべき約束の日……。」

「約束の日？」

「おっと口が滑りました。では貴方から死んでください。」

ウエザーは指を天に向け、雷撃を構える。

「くっ！」

翔太郎が身構える。

するとウエザーに風の魔力弾が放たれる。

しかしダメージは与えられた見込みはない。

「ん？」

ウエザーは放たれた方を向くと……。

「はあ……、はあ……、はあ……、や、やらせない！」

来人が拳を突き出していた。

「よせえ！ 来人お！」

「目障りですねえ……。そこまで死にたいならあなたから始末してあげましょう。せつかくですからじつくりとね。」

ウエザーはバイラスに指示を出す。

バイラスは口の針を来人に伸ばす。

「！」

来人は動こうにも足を負傷して動けない。

「こんなところで！」

来人は目を閉じる。

すると。

「来人……。させるかあああああ！」

翔太郎が走り出す。

「うおおおおおおお！」

そして……。

「痛っ。がああああ……。」

「し、師匠？」

来人はゆっくりと目を開ける。

そこにはバイラスの口の針に右胸を刺された翔太郎がいた。

しかもバイラスの針には猛毒のように緑色の液体が翔太郎に向けて流れていた。

「が……、があ……。」

体が震える翔太郎。

「し、師匠……。」

来人が啞然とするなか……。

「せめて……、てめえは……一緒にき……来てもらっぜ。」

翔太郎は手が震えながらマグナムにジョーカーメモリをスロットし変形させる。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

バイラスはあがこうとするも針を翔太郎が掴み離せない。

「一緒に……来い!」

翔太郎は引き金を弾き、放たれた紫色の弾丸達がバイラスに放たれ、爆発。

そして翔太郎は力なく倒れる。

「師匠!」

来人は直ぐ様側に寄る。

しかしバイラスだった男は塵となって消滅してしまった。

「これって……、一体……。」

来人は予想外のことに啞然とする。

「やはりマキシマムには弱い。所詮は操り人形の死人ということですか。」

ウエザーは冷たく言い放つ。

「死人？」

「おっと。口が滑りました。．．．．まあ今日はいいでしょう。．．．いい暇つぶしになりました。しかしまた現れたときには貴方の命も頂きますよ。」

「待て！」

「それとそちらの方なのですが．．．．．」

ウエザーは倒れた翔太郎を指差す。

「バイラスは街一つ侵せる猛毒のメモリ。そちらの方．．．、もう助からないでしょうね。」

「！ ま、待て！」

「お断りです。」

ウエザーはスミロドンとビーストを風に覆い、消えてしまった。

「．．．．．！ 師匠！ 師匠！」

来人は懐の翔太郎を呼ぶが翔太郎は唇を青くし悶える。

「師匠！ 師匠！ 師匠！」

来人はひたすら叫ぶが翔太郎はただ悶え苦しむだけであった。

「……翔太郎……さん。」

そして柱に叩きつけられ気絶していたスバルの目からは一粒の涙が流れた。

その後来人が連絡した救急車両により翔太郎は病院の緊急治療室、来人とスバルも治療を受けることとなった。

集中治療室の前で包帯を巻いたスバルと来人、他にも心配で駆け付けたアインハルトやヴィヴィオ達、ティアナやなのは、フェイトにノーヴェまでやって来た。

しかし暗い顔をする二人、特にスバルには皆話しかけることができなかった。

そんな中ティアナがスバルの肩を叩く。

「スバル……。」

「ティアナ……。どうしよう私……。翔太郎さんが死んじやったら……。やだよ私……。」

「・・・・・・・・。」

来人は辛そうにスバルを見る。

「・・・・・・・・。」

そんな来人を二人やなのは達は心配そうに見ていた。

その時。

集中治療室から主治医が現れた。

「！ どうなんですか翔太郎さんは！？」

スバルはすぐに立ち上がる。

「手は尽したんですが・・・・・・・・。」

医者は暗く話す。

「！」

スバルは直感で感じたのか、治療室の中に入っていった。

他のメンバーも後に続いたが……。

そこには……。

「……そんな……翔太郎さん……。」

膝から崩れ落ちるスバルの目の前には氷のようになった翔太郎。

繋がれた心電図には反応がなくなただ一本の線を映し出すだけであった。

「・・・・・・・・。」

来人も力なく壁に寄りかかりゆっくりと座り込む。

「・・・・・・・・スバル・・・・・・・・。」

ティアナやノーヴェ達がスバルのそばに寄る。

「・・・・・・・・来人さん・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

ヴィヴィオとアインハルトも来人に歩み寄ろうとするも動けない。

すると後ろから主治医が現れる。

「左さんの体内の毒素は人間の細胞を高速で破壊していく・・・、いわゆる動きの早いガン細胞で増殖速度も尋常じゃありませんでした。さらに人の体温で無限に増殖し、いくら駆除してもしきれません。残念ですが・・・。」

しかしそんな主治医の言葉も一同、とくにスバルには届かず・・・。

「・・・・・・・・翔・・・・・・・・太郎・・・・・・・・さん・・・・・・・・。」

スバルの頬から垂れる滴が床を濡らす。

そしてだれも一言とも発せずただ時間だけが過ぎていった。

「・・・・・・・・。」

真っ白な空間で翔太郎は起きる。

「何処だ・・・・・・・・。ここは・・・・・・・・。」

翔太郎は辺りを見回す。

すると。

「！・・・・・・・・おやっさん・・・・・・・・。」

ゆっくりと荘吉が歩み寄る。

そして翔太郎に向かい立った。

極限（前書き）

後編です。

今回は長くなりました。

正直自信がありません。

極限

白い空間に二人立つ翔太郎と荘吉。

「おやっさん。……だしてくれ……。ここから。」

「……翔太郎……。」

「出せよ……。」

「……。。。」

「出してくれよ!」

「……翔太郎。……お前は……。もう……。死んだ。」

「俺が聞きてえのはそんなことじゃねえんだよ! いいからここから出せよ!」

翔太郎は荘吉の胸ぐらを掴む。

「……死んだんだ……。お前は……。」

「……。。。」

翔太郎は後退りする。

「……………翔太郎……………」

「……………おやつさん。」

「……………お前は……………死んだ。」

屋上で空を眺める来人。

「……………来人さん。」

「……………あの……………」

ヴィヴィオとアインハルトが来人に近寄ろうとする。

「……………僕に……………」

「……………。」

「……………僕に力があれば……………力があれば……………」

来人は膝から力なく崩れ……………。

「わあああああああああ！」

空に向かって吠えた。

ウエザー達ドーパントへの怒り、そして何よりも自分に対しての無力さに底知れない怒りを秘め。

「……………」

スバルの頼みにより病室に横たわっている翔太郎の死体。

その横には力なく啞然とするスバルとそんなスバルを痛々しく思い、かける言葉が浮かばない一同。

「……………スバル。」

ノーヴェが声をかけようとするも言葉が浮かばない。

するとスバルが笑いながら喋りだす。

「私ね……、初恋だったんだあ、翔太郎さんと。やっぱり初恋って実らないだね。さ、来人君と頑張って事件早く終わって次の相手探さないとなあ……。」

「……………」

「……………でも……………実らなくてもよかったから……………」

スバルは徐々に体を震わせ……………。

「ずっと……………、生きてて欲しかったよおおお……………」

スバルの目から大粒の涙が流れる。

「・・・・・・・・スバル・・・・・・・・」

なのははスバルを自分の胸の内に包む。

「やだよお・・・・・・・・、なのはさん・・・・・・・・。翔太郎さん死んでほしくないよおおお。」

そのまま泣き続ける。

屋上の来人は壁に寄りかかり空を眺めていた。

というよりただ呆然としているだけだった。

「・・・・・・・・来人さん。少し休んでは？」

アインハルトが飲み物を差し出すも来人は上の空である。

「そ、そうだよ来人さん。来人さんだって怪我してるんだから休まない・・・・・・・・。」

ヴィヴィオも努力するも今の来人には響かなかった。
すると。

「！」

バットショットが現れる。

「……………これって…………、ドーパント？」

「……………そんなぁ…………。」

「……………なんでこんな速く…………。」

アインハルトとヴィヴィオが驚くも来人は動く。

「……………行かなきゃ。」

「「！」」

「……………駄目です来人さん…………。」

「そ、そうですよ来人さん！ まだ傷が治ってないのに…………。」

「……………こんなの怪我に入らない！」

来人は包帯を取り外すが傷はまだ残っていた。

「それに…………。」

「……………。」

「考えてみたら…………悲しんでも師匠は帰ってこない！ それに師匠だったら起こったことを嘆くよりも起きる悲劇を止めるために動け…………。そういうはず！ だから…………戦う。」

「……………来人さん。」

「……………」

ヴィヴィオとアインハルトは黙る。

「……………」

来人は気にせずドライバーをセットし屋上から飛ぶ。

「！！」

二人は驚いて下を見るとサイクロンがバットショットの後を追いかけていくのを確かめた。

「……………ヴィヴィオさん。」

「うん！」

「私達にも何か出来るはずですよ！」

そしてヴィヴィオとアインハルトも走り出す。

ドーパント出現の情報はスバル達翔太郎の病室にいるメンバーにも知らされた。

すでに局には大きい被害がでている。

「フェイトちゃん！」

「うん、私達も……。」

「私も行きます!」

なのはとフェイト、ティアナが動き出す。

「わ、私も……。」

ノーヴェも動き出すが……。

「ううん、駄目。ノーヴェは局の人間じゃないから危険にはさせないよ。私が行く。」

スバルがノーヴェを止める。

「スバル……。」

「……」「……」「……」

他が啞然とするが……。

「……それに翔太郎さんなら……、こんなところで道草食ってないで頑張ってこいっていうはずだから……。私も戦う! この街を守るために!」

「うん。」

「行く。」

「ただしくれぐれも無理はしないように。」

「うん！」

スバルはなのは、フェイト、ティアナと共に部屋を飛び出した。

「……………」

空中に現れた映像に啞然とする翔太郎。

その映像にはあちこちに局員が倒れる中、サイクロンやスバル達が戦うも圧倒的な力の差の前に追い詰められる様子が映っていた。

「……………駄目だ。……………奴らは……………並のドーパントじゃない。……………確実に殺される。」

「……………翔太郎……………」

「……………どうすりゃいい……………、どうすりゃ……………」

「……………翔太郎……………」

「おやっさん！、なんとかなんねえのか!？」

「……………策か……………」

「ああ。なんでもいい！ なんなら悪魔だろうが……………死神だろうが……………、なんだろうがなってやる!！」

「……………どうしてお前はそこまでこの街に執着する？ 風都と
も似ず来たばかりのこの街に……………」

「……………」

「何故だ？……………」

「……………俺はこの街が好きだ……………来たばかりだからこの街
についてはよくは知らない……………でもなあ……………俺がこの
街で仮面ライダーになったあの時から……………仮面ライダーを名乗
ったあの時から俺はこの街を守り抜くって決めたんだ。街の人の未
来を……………夢を……………笑顔を守るって決めたんだ！」

「……………」

「だから俺は戻らなきゃならない……………俺はこの街の……………」

「

「……………」

「仮面ライダーなんだ！」

「……………それがお前の決意か……………しかしこれからもっと強
い敵があらわれるぞ？ そのときはどうする？」

「……………俺は……………弱い……………でも……………俺
は……………一人じゃない！」

「……………お前の戦いで大切な人を失うことがあってもか？」

「……………」

「……………どうだ？」

「……………そうなるかもしれねえ。」

「……………」

「……………そうならないために俺は、……………強くなる。」

「……………一人じゃ無理でも……………仲間がいるなら、……………大切な人がいるなら！」

「……………仮面ライダーとして戦うのお前の使命か……………、仕事か？」

「……………使命とか仕事とかじゃねえ……………俺がやりたいから戦う……………俺が守り抜きたいから戦う！」

「……………これからの戦いは仲間を失いかねないぞ？」

「……………そうならないために強くなる……………街を……………人を全部守り抜く！」

「……………そうか。」

「ああ。だから……………」

「……………お前はまだ半熟だ……………」

「……………」

「……でも男としては、……戦士としてはもう俺と、……いや俺を越えたな。」

「おやっさん……………」

すると……………」

「！」

翔太郎の懐が光る。

取り出すと……………」

「スカルメモリ？」

スカルメモリが光輝き、そして爆発。

爆発の中から鳥型のガイアメモリが現れた。

「エクストリーム……………」おやっさん……………」これって……………」

「

翔太郎は莊吉の方を向くも莊吉はいなくなっていた。

「おやっさん？ おやっさん！」

するとそこには一枚のメモ用紙が。

「そのスカルメモリには持ち主の意思を一度だけ叶える力がある。」

お前の意思に呼応しお前を強くさせてくれるだろう。ただしスカルメモリが無くなると俺とお前はもう会うことが出来なくなる。しかしお前は俺がいなくても心配ない。お前には仲間がいる」

そして下の方には最後に書かれていた。

「Nobody's Perfect。．．．お前に幸あらんことを。」

翔太郎はそのメモ用紙を眺める。

そして紙に滴が落ちる。

「ありがとう．．．、おやっさん。」

翔太郎は涙を吹く。

「エクストリーム！」

翔太郎の呼び声に呼応しエクストリームメモリが光輝き、その空間は光で満ちていった。

「ほらよ。」

「ありがとう。」

「ありがとうノーヴェ。」

ノーヴェが病院の自動販売機前で缶ジュースをリオとコロナに渡す。

「スバルさん大丈夫ですかねえ……。」

「なんだか心配だよ……。」

「……さあなあ……。」

すると。

「せ、先生え　！」

廊下から看護婦が走ってきた。

さっきの処置で一緒にいた看護婦である。

そして看護婦はノーヴェ達を見つけるとノーヴェ達に駆け寄ってきた。

「あ……。」

「どうかしましたか？」

ノーヴェが聞く。

「部屋から妙な光が出てて不審に思って覗いたら……、左さんの……ご遺体が……、なくなっているんです！」

「「「「！」「」」」」

ノーヴェ達は急いで病室に戻りドアを開ける。

しかしそこにはなにも無くなっていた。

服も、メモリやドライバー……。

そして翔太郎自身も。

そして外からはバイクの走り去っていく音が響き渡った。

「があああああああ！」

ウエザーの雷にサイクロンは強烈なダメージを受け変身が解け、傷だらけの来人は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたところには気絶しているヴィヴィオとアインハルト、肩で小刻みに息をするなのは、スバル、フェイト、ティアナがいた。皆既にかなりの魔力と体力を消耗している。

「はあ……、はあ……、はあ……、こんな……ところでええええ！」

スバルがウエザーに殴りかかるが……。

「ふん。」

ウエザーは簡単に受け流し首をしめる。

「が……、きゃ……、あ……。」

「全く……。こっちが気をつけて殺さないようにしてるのに向かってくるとは……。馬鹿も馬鹿、大馬鹿です……。もう面倒です。代わりはまだいるだろうし……。ひと思いに殺してあげましよう。」

ウエザーはスバルの首をしめる手に更に力を込める。

「あ……。あ……。あ……。」

「仮面ライダーの……。後を追いなさい！」

「スバル！」

「スバルさん！」

ティアナとバリアジャケットの来人がウエザーに魔力弾を放とうとするもスミロドンとビーストに阻止され、叩き伏せられる。

更に力を込めるウエザーのしめあげにスバルは言葉を発することも出来なくなり徐々にあがきも弱まってくる。

(……。翔太郎……。さん)

スバルの目から涙が流れる。

「さようなら……。」

ウエザーが一気に力を込めようとしたとき……。

何者かがハードボイルダーでウエザーに突進しウエザーを吹き飛ばす。

「ぐわあああああ！」

吹き飛ばされたウエザーにスミロドンとビーストが駆け寄る。

「貴様あ、何者だ！」

立ち上がるウエザーはボイルダーに乗って現れた男に聞くと男はヘルメットを脱ぎ顔を晒す。

その顔を見て一同は啞然とする。

「遅くなつたな。スバル。来人。皆。」

「「「翔太郎さん！」」」

「師匠！」

現れた男はエクストリーム之力により蘇った左翔太郎であった。

翔太郎はスバルを抱き寄せる。

「・・・翔太郎・・・さん・・・。」

「悪い。遅れちゃった。・・・お詫びなら後でたっぷりする。ゆつくり休め。」

「・・・はい・・・。」

「来人お！ 頼めるか？」

「は、はい！」

来人が駆け寄る。

「よく頑張ったな。」

「……はい！」

感無量になる来人は泣きながらも拳をぶつけスバルを受け取り、後退する。

そして翔太郎はウエザー達に迎え立つ。

「貴様はバイラスの毒で死んだはず！」

「ああ。おかげでたつぷり寝れたぜ。でも俺は仮面ライダーだ！
この街を泣かせる悪がいる限り……俺は何度でも蘇んだよ
！」

『ジョーカー！』

翔太郎はロストドライバーをセットし左手にジョーカーメモリを持ちスロット。

「変身！」

右拳を開きながら左手でドライバーを傾ける。

『ジョーカー!』

風や塵のような装甲が翔太郎の体を覆い、仮面ライダージョーカーに変身する。

「行くぜ?」

ジョーカーは手首をスナップして走り出す。

「死にぞこないがあ!」

ウエザー達も走り出し、双方がぶつかりあう。

三方向からドーパントが攻撃を仕掛けるもジョーカーはビーストにパンチ、スミロドンには回し蹴りのラッシュを放ち吹き飛ばす。

「こしゃくなああああ!」

「おおおおおおお!」

ウエザーとジョーカー、両者がストレートパンチを放ちクロスカウンターとなるがジョーカーの拳のみが命中しウエザーは吹き飛ばす。

「貴様ぁぁぁ。だが我々にあなた方の技は通用しません。あなた方の負けです。」

立ち上がるウエザー。

「あいにくだったな。ジョーカー……切札は……常に俺の所

にくる！」

ジョーカーは手を掲げる。

すると何処からかエクストリームメモリが現れ、ロストドライバーに新たに左のスロットが生成される。

そしてジョーカーはエクストリームメモリをドライバーにスロットし展開する。

『エクストリーム！』

ジョーカーの周りをいくつもの黒い英文字が回る。

そしてジョーカーの体の真ん中のラインから金色の光が縦に展開し・
・。。

「うおおおおおおお。。。。。」

両手の拳を真ん中のラインに向け。。。。

「おぁ！」

左右に広げると体の真ん中から一気に姿が変わった。

両手足のアンクレットはX字、肩はW字、頭部のWの角は無くなり、赤い副眼のサイドから感覚器官エクスファイラーが形成される。

「し、師匠？」

「「「.....」」」

今までとはまるで違う姿に一同は啞然とする。

「こけおどしがああああ！」

ウエザー達が襲いかかる。

すると副眼内に英文字が上に登る。

「こいつらの言動や行動から想定すると次の行動は.....」

新ジョーカーは襲いかかるウエザー達をまるで柳に風のように受け流してゆき、後ろからのビーストの一撃を受ける前に懐に入りラッシュを放つ。

そして他のスミロドンやウエザーを蹴り飛ばす。

「はやいとこ怪我人を運びたいんでな。決めるぜ！ スペリオルビツカー！」

新ジョーカーが叫ぶとベルトのエクスタイフンから竜巻が発生しそこから剣盾一体の武器、スペリオルビツカーが生成され左手に持つ。

そして右手にはスペリオルメモリを持つ。

『スペリオル！』

そしてスペリオルメモリをビツカーのスペリオルソードにスロット

し引き抜き、スタータースイッチを押す。

『スペリオル・マキシマムドライブ!』

するとスミロドンが高速移動に入る。

そして後ろから襲いかかるも……。

「お前の行動は既に推理済みだ。」

新ジョーカーのスペリオルソードがスミロドンを貫く。

更にはビーストが後ろから飛びかかるが、新ジョーカーはまるで動じずにスペリオルソードをスミロドンから抜き、ビーストをすれ違い様に切り裂く。

「これで決まりだ!」

新ジョーカーの後ろでスミロドンとビーストは爆発し変身していた人間は二人とも塵となって消滅する。

新ジョーカーはゆっくりとウエザーに歩み寄る。

「何だと……。ドーパントを一度に二体も……。」

ウエザーは後退りし……。

「凄い……。」

来人は新ジョーカーの圧倒的な強さに唖然とする。

「井坂……、終りだ。」

新ジョーカーはスペリオルソードをウエザーに向ける。

「そ……、そ……、そんなわけがあるかあ！」

ウエザーは駆け出し、新ジョーカーはソードを納刀し歩み寄る。

ウエザーは拳や蹴りを連打するも、新ジョーカーはすべてをビツカ
ーでの受け取めや受け流しで捌く。

そしてウエザーの拳を掴みとり力を込める。

「が、がああああ……。」

そして痛がるウエザーを……。

「はあああああ……、はあ！」

新ジョーカーは右足に紫色のエネルギーを纏わせ蹴り飛ばす。

「ぐああああああ！」

蹴り飛ばされたウエザーは腹部を抑えながら立ち上がる。

「井坂……。教えてやる。街を守るため、誰かを守るために戦う。
そのためならいくらでも強くなれる。それが……。」

新ジョーカーはエクストリームを閉じ、再度展開する。

『エクストリーム・マキシマムドライブ!』

「仮面ライダーだ!　そして俺は左翔太郎、仮面ライダー・・・ジ
ョーカーエクストリームだ!」

右足に金と黒のエネルギーを込めた新ジョーカーは天高く跳躍し・
・。

「うおりゃあああああ!」

ウエザーに飛び蹴りを放つ。

「ぬおおおおおおお!」

ウエザーは飛び蹴りを受け、吹き飛ばされる。

そして新ジョーカーは変身を解く。

「さあ・・・、お前の罪を・・・かぞえろ!」

「ぐおおおおおおお!」

翔太郎の言葉を待っていたかのように翔太郎の後ろではウエザーは
爆発し井坂が転がりながら現れる。

そして・・・。

「が・・・、が・・・、ぎゃあああああ!」

井坂の皮膚は黒くなったのち消滅していった。

「まったく世界が違っても悪魔は悪魔か……。」

するとティアナが立ち上がる。

「翔太郎さん……。これって……。」

「あ、ああ。詳しくは後で話す。……とりあえず皆無事で……よかった。」

「……起きたらスバルと一緒にいてあげてくださいよ?」

「ああ。」

翔太郎はティアナ達に駆け寄る。

その後他局員と共にスバル達は他の局員と共に局の病院に搬送された。

重症者はいたものの幸い死傷者は0で済んだのは偶然の産物といえる。

そしてある程度軽傷であったティアナに翔太郎はことを話した。

井坂の死因とNEVERについて。

「あの方がやられるとは……。」

同員達の搬送を手伝う翔太郎を眺める男。

「しかしなかなか退屈させないですね。……面白いです。」

男は無表情のまま立ち去っていった。

切札極限（修正）（前書き）

ちなみに本編ではありません。
たぶんそれなりに頑張りました。

切札極限（修正）

仮面ライダージョーカー エクストリーム（黒に金のライン）

パンチ力：4.5t

キック：10t

ジャンプ力：ひと跳び110m

走力：100mを4秒

左翔太郎がアナザーダブルドライバーとエクストリームメモリ2で変身する仮面ライダー。

身体はサイクロンジョーカーエクストリームのような形であるが全身が黒く、横に金色のラインが現れる。エクストリームの能力によりジョーカーメモリの能力を「人間の限界を凌駕させる運動能力を発動させる」に変化させ、本来のエクストリームにも匹敵する力を発揮する。クリスタルサーバーを持たないため地球のデータサーバーを閲覧できない代わりに脳細胞、脳神経を発達させ、あらゆる情報をもとに敵の行動を瞬時に”推理”することが可能。

ガイアメモリ：

エクストリームメモリX「カイ」：

エクストリームメモリの兄弟機。翔太郎が持つスカルメモリが進化したメモリ。それにより莊吉とのコンタクトが完全に途絶える。形状は初代と同じ。初代よりも若干出力は下がるがフィリップがいずともエクストリームを発動できる。発動時は一時的にロストドライバーをダブルドライバーに変形させることで装填が可能になる。

スペリオルメモリ「S」（黒と金）：

「勇者の記憶」を内包するメモリ。スペリオルビッカーの発動に使

用。エクストリームが敵の能力を推理したデータを脳波として受け、そのデータをもとに相手の能力にバグを起こさせる。但し使いこなすには強い思いと勇氣、信念が必要。また四本マキシマムの際にはサイクロン、ヒート、ルナのどれか一つを擬似的に作りだすことが可能。

ツール：

スペリオルビツカー：

プリズムビツカーの緑の部分が黒になった剣と盾の武器。エクスタイフーンから召喚される。手の平から使用者の精神力を知りその強弱によって重量、威力、能力が比例する。

アナザードブルドライバー：

エクストリームメモリXの能力により一時的にロストドライバーに左スロットが現れたベルト。それにより一人で一度に二本のメモリを同時使用可能。

マキシマムドライブ：

デュアルエクストリーム：

エクストリームメモリを一旦閉じたのち展開することで発動。右足に金、紫の二色のエネルギーを纏つての飛び蹴り。破壊力は75t。

スペリオルブレイカー：

スペリオルソードのスイッチを押して発動。スペリオルメモリが相手のメモリの能力を理解し無効化するジャマープログラムを作り出し、プログラムを刃に纏わせて相手の能力を強制的に無力化させ切り裂く。メモリブレイクも可能。

ビツカーバーストカリバー：

スペリオルビツカーに四本のメモリをスロットした後、抜刀して発動。スペリオルカリバーに紫、銀、青、残りのソウルメモリの色の四色のエネルギーを刃として纏わせての斬撃。

ビツカーアサルtpaニツシャー：

スペリオルビツカーに四本のメモリをスロットした後発動。スペリオルビツカーの中央に四色のエネルギーを集束し放つ光線。

爆狸（前書き）

前回は真面目でながめだったので今回はコンパクトです。

ちなみに題名は「ばくだぬき」といいます。

爆狸

「なるほど。じゃあ井坂って人は多分メモリを使いすぎて、マキシマムによりウエザーを破壊された衝撃で複数使用の付けが回った。それとあの二体の獣のようなドーパントはNEVERという死者蘇生兵士でマキシマムの衝撃で細胞が維持できなくなつて消滅したと・・・。」

「そんなとこだ。」

翌日なのは、フェイト、ティアナ、スバルの病室で事件の犯人、井坂と二人の男について話す翔太郎。

事実翔太郎は蘇生した際ウエザー達にやられた傷が全快し、再戦時モエクストリームで圧倒的に倒してしまったためダメージを受けていないため普通に退院し今日はスバルや来人のお見舞いに来た身分である。

四人は怪我を負い特に近距離型のスバル、別の部屋の来人が一番重症である。

ちなみに来人と同じ部屋のヴィヴィオとアインハルトは戦闘時サイクロンが自らの判断により危険な時にかばつたため深手は済み数日で退院できる程度であった。

すると突然。

コンコン。

「どうぞ。」

ノック音にフェイトが答えると現れたのは……。

「元気がよく、皆。」

濃い茶髪に関西弁の女性、後ろには桃色のポニーテール、赤毛の子供、金髪の女性、青い毛の巨大犬に二人の小さい女の子が現れた。

「いらつしゃいはやてちゃん。」

「ごめんね忙しい時に。」

「そんなええよ。親友やん。」

その女性、八神はやてはなのはとフェイトに挨拶をした後ティアナとスバル、そして翔太郎に近寄る。

「ご無沙汰です。はやてさん。」

「い、ご無沙汰です。」

「ティアナとスバルも久々。それと……。」

「あ、ああ。はじめまして左翔太郎です。スバルの秘書をしています。」

「私の彼です。」

「……は？」

するとスバルの一言に後ろの八神の家族達は程々に驚いた。

しかし一番驚き顔がひきつっているのははやてだけである。

そしてはやての中で何かのギアがはずれ……。

「スバル！ なんやあんたあ！ 彼氏みせびらかしかあ！？ 彼氏連れこんでしけこんでるんかあ！？」

「いたたたた……！」

怪我人だからということなど今のはやてには関係なく鬼の形相でスバルの頬を引っ張る。

「お、おいあんた！」

「主はやて！」

「ちょ、はやて！」

「スバルは一応怪我を……。」

翔太郎と八神家の三人が止めにはいろつとするも……。

「止めんといて！」

「……は、はい！」

逆らえない。

「うちなんて・・・、うちなんて・・・。」

「？」×10人

「ここ十数年男つ気が全くなって初めての×××は愚かファーストキスや初恋もまだやのに~~~~~。」

そして感情がシフトしたかのように泣き出す。

この暴走狸を止めるのはその場の全員がかりで数分かった。

~~~~~数分後~~~~~

「とり乱して悪かったなあ。うちは八神はやて。スバル達の元上司や・・・それと・・・。」

「シグナムだ。」

「ヴィータだ。」

「シャマルです。」

「ザフィーラだ。」

「リインフォースツヴァイですう。」

「アギトだ。」

個々に自己紹介する。

ちなみに既に翔太郎は魔法やドラゴンがある時点でスモールサイズの人間や人語を喋る犬は既に覚悟していたため自然にいられることが出来た。

「ああ、どうも。左翔太郎だ。スバルの秘書で彼氏・・・ってことになってる。後は・・・。これ言っただけいいと思うか？」

「いいんじゃないですか？ もう旅行メンバーには全員知ってるんだし・・・。」

スバルは痛む頬を撫でながら答える。

「？」×7人

「それから・・・。仮面ライダーだ。」

翔太郎は証拠としてロストドライバーを見せて告白する。

「な、なななな・・・。」

「・・・・・・・・」

「ほ、ホンマか？」

「ホンマです。」

翔太郎が答えるとはやての怒りの矛先は再びスバルへ・・・。

「いたたたた・・・！」

「スバルううう、あんたどんな手使ったんや！　こんなイケメンで仮面ライダーの彼氏なんて！」

「ど、どんな手なんて……。」

「は、はやてさん？　俺はたまたまで。大丈夫っすよ！　はやてさんべっぴんだからいつか近いうちにいい男が見つかりますって！」

「ホンマか？」

「ホンマホンマ！　な、な！？」

その場にいる全員が大きくあたまを縦に降る。

「そか……。まあ仮面ライダーが言うならホンマかなあ……。」

（ほっ）×11人

はやて以外が皆息を吐き、翔太郎に隠れてサムズアップをする。

「しかし仮面ライダーとは……。翔太郎といったか？」

「あ、はい。確かシグナムさん。」

「ああ。今度は是非とも手合わせを願いたい。」

「は？」

「今度私と一体一で模擬戦をやってほしいのだ。」

「……………」

翔太郎は困った風になのはとフェイトの方を向く。

「気にしないでください、翔太郎さん。」

「シグナムの握手みたいなもんだから……………」

「どんなすか……………。まあでも……………受けて立ちますぜ？ さすがにここでは無理っすけど……………」

「ふっ。私もそこまで戦闘狂ではないさ。」

その後面々は他愛ない話を続けた。

ちなみにお見舞いに来ていたのは彼女達だけではなかった。

もう片方も……………。

「……………」

「……………」

「……………」

来人、ヴィヴィオ、アインハルトのベッドがある病室でフリーズするミウラを含めた四人。

現状はうさぎに切った林檎を来人のベッドに上がり食べさせようとした二人に恥ずかしそうにしながらも食べさせてもらおうとする来人、その様子をお見舞いに来たミウラが見て一同フリーズするとうなんと愉快な現場。

ちなみに来人が食べさせてもらっているのは聞き手の左手は絶賛複雑骨折中、右手はギブスをつけているためのやむを得ない状態であるためである。

しかしそんな来人の健康状態が目に入らないミウラは口を金魚のように開閉させる。

「ぱくぱくぱくぱく……」

「み、ミウ!? いやこれはあの……」

「……ぼ……」

「ぼ?」

「僕も来くんを食べさせたいです!」

ミウラは跳躍し持ってきていたバナナを瞬時に来人の向き口に突っ込むが……。

チーン。

「が……」

ミウラは膝から着地したが、着地場所は来人の下半身の……。

「……………（ガクッ）」

来人は下半身の強烈な痛みにより天に召された。

「あれ？」

ミウラは自分の着地した場所をゆっくり見る。

そして着地した場所が人間の男という生物の最大の弱点にざっくり  
食い込んでいることに気づく。

「……………きゅ〜〜〜。」

そしてミウラは顔が一気に顔が赤くなり倒れた。

「……………えつと。」

「……………誰ですか？」

アインハルトとヴィヴィオは急に参戦したこの女の子に対し？マ  
クを浮かべた。

その後来人よりも速く目を覚ましたミウラは二人と話しあった。

そして幼くても女の勘が働き、同じく来人が好きな好敵手となんと  
なく感付いた。

## 騎士（前書き）

題名からわかる通り、程々にあの方の出番があります。

我ながら八神家の登場が少ない。

## 騎士

あれから数日後。

模擬戦スペースに立つ翔太郎とシグナム。

シグナムは既に武装済みである。

「シグナムさん。本気ですか？」

「ああ。私は仮面ライダーと戦いたい。」

「……………はあ。なんだかこっちとしては気が引けるんですけどねえ……………。まあ約束だし。変身！」

『ジョーカー！』

翔太郎はジョーカーに変身する。

「行くぜ？」

「来い！」

「ふっ！」

「はっ！」

ジョーカーとシグナム、仮面ライダーと騎士、拳と剣がぶつかりあう。



「スゲエ……。シグナムと同等……。いやそれ以上なんて……」

モニターに映るシグナムを翻弄するジョーカーを見てヴィータは啞然とする。

「ホンマやね……。イケメンで強いなんて。嫌いやないわあ。」

「はやてちゃん、取ったら駄目ですよ。スバルの彼なんですから。」

「わかつとるよ。冗談や、冗談」

「はっ！」

「おらあ！」

シグナムのレヴァンティンをメタルはシャフトで弾く。

「そらあ！」

そしてシャフトの突き出しをシグナムは刀身で防ぐが、メタルは力を込めてシグナムを吹き飛ばす。

「さすがに遠距離は止めるとして……。次はコイツだ。」

『ジョーカー!』

メタルはジョーカーメモ리를 スロットし展開……。

『ジョーカー!』

右手にセイバーを装備したジョーカーにメモリチェンジする。

「ならばこっちも剣でいくぜ。」

「面白い!」

二人の刃が交じりあう。

互いに上げ斬り、下げ斬り、突きなどを放つが避けや受け止めで当たらない。

そして火花を散らし互いに後退する。

「やるな左。」

レヴァンティンからカートリッジが排出される。

「シグナムさんこそ。」

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

ジョーカーもメモ리를 マキシマムスロットにスロットする。

「紫電……。」

レヴァンティンの刃を炎が覆う。

「ライダー……。」

ジョーカーセイバーにも紫のエネルギーが纏われ、ジョーカーは駆ける。

「一閃！」

「スラッシュ！」

そして両者の刃がぶつかりあい爆発が起こる。

そして徐々に爆煙が消えると……。

「私の負けか……。」

シグナムの首筋にジョーカーセイバーの先端が突き立てられていた。

「ふう。」

ジョーカーは肩の力が抜ける。

すると。

「よお翔太郎！」

「？ 確か……アギト！」

「そつそつ。」

アギトがやって来ていた。

するとシグナムは何かを悟ったかのように聞く。

「どうだ左。二回戦は？」

「へ？」

「アギト！」

「おう。ユニゾン！」

アギトがシグナムの体に入っていった。

するとシグナムの騎士服、髪の色が変化する。

「おいおい。そんなのありかよ……。」

「あいにく……ここからは本気の本気だ！」

シグナムの覇気に危険を察知したジョーカーは手を掲げる。

「やっべえな……。こうなりやこつちもかくし球だ！」

するとエクストリームメモリが現れ、ジョーカーはドライバーにスロットし展開する。

『エクストリーム！』

ジョーカーの体の中心から現れた光の輪がジョーカーをジョーカー  
エクストリームに体を変える。

「それが本気か！」

シグナムは接近。

「スペリオルビッカー！」

エクストリームは現れたスペリオルビッカーのソードにスペリオル  
メモリをスロットする。

『スペリオル！』

そして抜刀。

「今までのシグナムさんの言動から見た性格、戦闘スタイルから見  
た所……。」

「はあ！」

シグナムが斬りかかるもビッカーシールドで簡単に防ぐ。

「まだまだあああ！」

シグナムはまけじと斬りかかるもエクストリームは全てを簡単に捌  
く。

「何！」

「あいにくツスけど、剣の軌道が俺には丸わかりです。」

そのままビッカーシールドで程々の力でシグナムを吹き飛ばす。

「くっ！」

吹き飛ばされるもすぐに立ち上がるシグナム。

その顔は笑っていた。

「強いな仮面ライダー。……いや左翔太郎！」

「あんたもな……。シグナムさん。」

「ではそろそろ……。」「

レヴァンティンからカートリッジが排出され変形、シュランゲフォームになり炎が纏われる。

「そつちがそれなら……。」「

エクストリームは納刀したのちビッカーにメモリをスロットしていく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『ヒート・マキシマムドライブ！』

そしてソードを引き抜くとその刀身は四色のエネルギーを纏い光輝

いていた。

「飛竜……一閃！」

「ビツカー……バーストカリバー！」

シグナムの炎の一撃とエクストリームの七色の斬撃がぶつかりあい  
辺りを爆煙に包んだ。

「……なんなんや。あの二人……」

「た、たぶん私がいつたら即やられてそう……」

「同じくリインも命の危険を感じるですう。」

「スゲエな。」

ビクビクするはやて達に対し……。

「けりはついたようだな。」

ザフィーラは冷静に言う。

「「「「？」「「「」

「ま、負けたあああ……」

「しかしなかなか楽しかったぞ？」

横たわるアギトとシグナム。

「ふう……。なんとか勝ったあ。」

駆け寄りながら変身を解き戻る翔太郎。

「大丈夫すか、シグナムさん。アギトも。」

そしてシグナムとアギトに手を伸ばす。

「悪いな……。」

「悪いい。」

肩を借りるシグナムと翔太郎の肩に乗るアギト。

三人はゆっくりと模擬戦スペースを後にする。

しかし疲れているはずが三人は笑っていた。

その後シグナムをシャマルに任せ、翔太郎は出口まではやてにお見送りしてもらったこととなった。

その前にシグナムから連絡先を聞かれた翔太郎。

おそらく次のデートのためである。



模擬戦という名のデートの。

廊下を歩く二人。

「しっかしすごかったなあ、翔太郎さん。」

「あ、ども。」

「こないなイケメンの彼氏、うちも欲しいわ〜〜。」

「う〜ん。まあ嬉しいっすけどあいつは裏切れないです！」

「うん。それでええ。スバルは元部下といってもまた親交がある。泣かせたら即うちの殿下の宝刀、ハリセンで叩きにいくから覚悟せえや。」

「お、おす！」

「せやけど・・・。」

「？」

「ええ男がいたら紹介してな？」

「ど、努力します！」

黒い笑顔のはやてに翔太郎はひきつる。

とりあえず翔太郎に新たにはやて限定の婚活紹介者という職業が増えた。

そういういつてる間に駐輪場についた翔太郎ははやてに別れを告げ去っていった。

行き先は未だにスバルと来人が入院している病院。

ちなみに二人以外は既に退院済みである。

「先生に聞いたんだがどうやらもうすぐ退院みてえだな。」

「はい。おかげさまで。」

翔太郎は屋上で来人と話していた。

「最初は両手が使えねえから大変だったろ？」

「ま、まあ・・・色んないみで・・・。」

一応1日で右手は治ったため食べさせてもらうことは1日で済んでいたが、来人はあれからしばらくミウラと顔を合わせるたび、とある一ヶ所が痛むようになっていた。

今は治ったようだが。

「しっかしお前にも迷惑かけたよな。弟子のお前に世話かけるとは

なあ。・・・師匠失格だ。」

「そ、そんなことはないです！ 実際助けてもらいましたし！」

「ま、まあそう言ってくれると気楽だな。」

「・・・師匠。」

「ん？」

「・・・僕もいつか師匠のエクストリームみたいな力を使えるようになれるか？」

「・・・わかんねえ。・・・お前はなんで強くなりたいと思う？」

「・・・それは・・・。」

「とりあえずお前は強くなる前にそれを見つけてからだ。」

「・・・はい。」

「・・・わかったら戻るぞ。」

「・・・はい。」

二人は部屋に戻る。

しかし終始来人は顔が晴れなかった。

「翔太郎さん……。」

「あん？」

「お詫びは？」

「ああ？」

スバルの見舞いに来た翔太郎は急に言われたスバルの言葉に豆鉄砲を受けたような顔をする。

「そ……、それって……。」

「そう　あの時に言ってた……。」

翔太郎は前スバルにいった言葉、エクストリームになったあの日に言った言葉を思い出す。

「お詫びなら後でたつぷりする」

「あ……！」

「思い出しました？」

笑うスバル。

ただし翔太郎には純粋な笑顔に見れなかった。

「お、おう!」

「それじゃあもうすぐ退院みたいだから、退院したら泊まりがけでデートしてくれますか?」

「と、泊まりがけ?」

「しかも今度の夜は翔太郎さんが先導で」

スバルは顔をほんのりさせながら大胆発言し翔太郎は顔をひきつらせる。

ちなみに翔太郎は一つ屋根の下で一回やったにも関わらず未だに抵抗がある。

しかし男に二言はないというのが翔太郎の座右の銘。

「わっ た・・・、わっ たよ!」

もはやヤケである。

「やった これで翔太郎さんの種」

「やな言い方すんじゃねえ!」

「えへへへへ」

「・・・ったく。」

しかし満面の笑顔に満更でもない翔太郎。

「…………でも…………。」

「あん？」

スバルが急に翔太郎に身体を寄せる。

「生きてて嬉しかったです…………。」

「一度死んだ…………。でも生き返った…………。お前や皆を守りてえからな。」

「もう…………逝かないくださいね…………。」

「…………おう。約束だ。」

「じゃ…………、じゃあ約束のチューを…………。」

「調子にのんな。」

翔太郎は軽くデコピンをする。

「いったああい。もう翔太郎さん…………。」

そして翔太郎は不意をついてスバルの唇を奪った。

「…………。」

「…………、これでいいんだろ！ それじゃあな！」

そのまま翔太郎は退室した。

翔太郎からキスされて顔が熱っているスバルを残して。

それから少し時間がたった夜の街。

「たあああああああ！」

「がああああああ！」

エクストリームのスペリオルソードに切り裂かれ吹き飛ばイエスタ  
デイドーパント。

「ば、馬鹿なあ……。」

「悪いな……。この街を泣かせるドーパントは俺達仮面ライダー  
が鉄槌を下すぜ！」

そしてエクストリームはエクストリームメモリを閉じ、再び開く。

『エクストリーム・マキシマムドライブ！』

「はああああああ……。」

右足にエネルギーを込めて跳躍。

「デュアルエクストリーム！」

「がああああああああ！」

エクストリームのマキシマムの飛び蹴り、デュアルエクストリームがイエスタデイを捉え、イエスタデイは吹き飛ばす。

「さあ・・・、お前の罪を数える！」

そしてエクストリームの背後でイエスタデイは爆発する。

「ふう。後は局に任すか。」

変身を解き翔太郎はスタッグフォンで管理局に連絡をとろうとしたとき、犯人の男が起き上がる。

「何！」

「馬鹿が。お前はもうすぐ一人になる。仲間の仮面ライダーが消えることだな・・・。」

そして犯人は気絶してしまった。

「おいお前！ どういうことだ！」

犯人をゆるする翔太郎。

すると犯人の首元にはイエスタデイの刻印が刻まれたあとがあった。

「こいつ自身にイエスタデイの力が・・・。」

イエスタデイドーパントの力は刻印を刻んだ者の昨日の記憶を今日



に巻き戻す力。

つまりは……。

「こいつは今日、この時間に俺に倒されることを知っていた？  
いや……考えて倒された？」

犯人を離し呆然となる翔太郎。

その後犯人は逮捕された。

しかし記憶はお馴染みの時限式の忘却魔法によりなくなっていた。

来人の病室。

眠る来人の机の上に一本の純正メモリが置かれていた。

薄い青色、ディスプレイにFと書かれたメモリが。

そして廊下を歩いていく一人の男。

「墮ちなさい。若き仮面ライダー。私たちが作ったファングメモリ  
を使って。というよりも……自らの力でね。」

男は足音を立たせたまま歩いていく。

しかしその影は人の形ではない異形の姿を形どっていた。

## 暴牙（前書き）

なかなかプレッシャーがあったので期待にそえられる出来かはわかりませんが。

## 暴牙

数日後来人が退院した。

そして明日スバルの退院も兼ねた退院パーティーが高町家で行われることとなった。

呼ばれたのは翔太郎と入院したメンバー、ミウラを含めた八神家というなんとも大人数。

そして今翔太郎は町中のベンチで今までのことをまとめあった。

さすがに感ずいていた来人からの呼び出しであった。

「……となると敵は今まで一般人を使ったケースに並の人間に忘却魔法をかけたケース、NEVERを使ったケースの三つで足を掴ませなかった……。」

「それで井坂に関してはメモリの使いすぎにより身体が限界を迎えて自ら滅んだ。」

「……でもウェザーは言っていました。あなたは殺さないように気をつけたって……。」

「……連中はスバルを特別視してるってことかぁ。」

「……うっっん。」

「わかんねえ……。」

「「……………はあ。」」

「やっぱり資料が足りねえな……………」

「はい……………」

「……………なあ（あの）。」」

二人の声が重なる。

「お前から言えよ。」

「いえ師匠から……………」

「……………そうか。じゃあお前に聞きたいことがある。」

「はい。」

「お前、最近……………」

翔太郎が言いかけた時……………

「「！」「」

いきなりスタックフォンが鳴り出す。

「これは……………」

「師匠……………」

「ああ、ドーパントだ！」

二人は走り出す。

町中を歩くヴィヴィオとアインハルト。

「明日楽しみですねえ〜、アインハルトさん、ミウラさん」

「……はい……。」

「……でもなんだかミウラさんって来人さんと仲いいですね。」

「そういえば……。」

「「……。」」

「……今度聞いてみますか……。」

「はい。」

「……答えによっては一発……。」

「私も……。」

二人が微妙に努気を纏う。

するじ。

「「!」」

爆音が鳴る。

鳴った方向からはいくつもの人たちが逃げてくる。

「アインハルトさん!」

「……はい……。私達も……。」

アインハルトとヴィヴィオは爆煙が立ち込める場所に走り出す。

「「変身!」」

街で暴れるジュエルドーパントとRナスカドーパントに駆けるジョーカーとサイクロン。

「まったくそのメモリをそんなことに使いやがって……。」

ジョーカーはナスカと……。

「せいっ!」

サイクロンはジュエルと組み合う。

拳を放つも……。

「いったああああ……。」

堅いらしく手を痛める。

「ふん！」

そんなサイクロンをジュエルは殴り飛ばす。

「くっ。ならこれで……。」

『ルナ！』

ルナメモリをスロットしてルナに変身する。

「はっ！」

アメイジングゲームでジュエルを叩き続けるが手を戻した後……。

「おおおおお……。」

やはり痛む。

対してジュエルは余裕を見せている。

「なら熱で……。」

『ヒート』

ヒートは両手に熱を纏って殴りかかる。

幸い熱による拳の保護と打撃力の強化のかいあって……。

「ぬあああああああ！」

ジュエルが吹き飛ばされる。

「よし！ 効いてる。このまま……。」

ヒートがそのままけしかけようとしたとき……。

「！」

ヒートにいくつかの陰が襲いかかった。

「おらあ！」

ジョーカーは前蹴りを放つもナスカは避けブレードで切り裂く。

そしてそのまま高速移動に入りジョーカーを切り刻みジョーカーは吹き飛ばされる。

「つつううう。メタルは鈍いし、トリガーじゃ捕えきれねえ。……  
・なら！」

ジョーカーは手を掲げるとエクストリームメモリが現れ、ジョーカーはドライバーにスロットし展開する。

『エクストリーム！』



エクストリームは手にスペリオルビツカーを持ち抜刀、途端に動きを止める。

「……………」

そんな中ナスカの刃がふられるが……。

「そこだ！」

頭を狙った一撃を紙一重で避けたエクストリームのスペリオルソードがナスカの懐を切り裂く。

そしてそのままナスカブレードの合間を巧みに突き、エクストリームは次々と斬撃を叩きこんでいく。

「決めるぜ。」

エクストリームがソードを収め、ビツカーにジョーカーメモリをスロットしようとしたとき……。

「!!」

数体のアリのような怪物がエクストリームを取り押さえる。

「なんだこいつら！ 邪魔すんじゃねえ！」

エクストリームはその怪物達をスペリオルソードで切り裂いていくも……。

「なんだこいつら……きりがねえ！」

アリの怪物は次々と現れた。

その時。

「がああああああ！」

「何！」

エクストリームは突如聞こえた悲痛な叫びの方向を向く。

そこには……。

「が……、あ……。」

三又の槍により持ち上げられるビート

「ふふふふ……。」

持ち上げられるのは女王アリのような姿のアントドーパント。

そして。

「はあー！」

アントはビートを投げ飛ばす。

「があああああああ!」

ヒートは壁に叩き付けられ、壁は脆くも崩れる。

「が……、はあ……、はあ……。」

ゆっくりと立ち上がるヒート。

「はっ!」

しかしアントは光弾を放つ。

「うわああああああ!」

「来人おおお!」

エクストリームが近寄ろうとするもアントの力により作られたアント兵士により阻まれる。

「はあ……、はあ……、はあ……。」

それでも立ち上がるヒート。

「ん〜ん。……ん?」

するとアントは何かを見つけたような素振りを見せる。

ヒートもその方向を向く。

「! ヴィヴィオ……、アインハルト……。」

そこにいたのはヴィヴィオとアインハルトだった。

「来人さん！」

「……来るな……来るなああ！」

しかしヒートの叫びも虚しく……。

「は！」

「きゃああああ！」

「ああああああ！」

アントの光弾に二人は変身が間に合わず吹き飛ばされ壁にたたき付けられ動かなくなる。

「！」

ヒートは急いで二人の側によるがアントが隙を突き後ろから切りかかる。

「があああ！」

倒れながらもいつくばりながら二人の側によるヒート。

そして二人を抱きよせるがアインハルトの後頭部を触れた途端……。

「！」

妙な感触を感じ手を確かめるとそこは、ヒートの赤い手を更に赤くする真っ赤な血がべっとりついていていた。

「あ……、あ……、あ……。」

そしてヴィヴィオの額からも血が垂れる。

「あ……、こんな……、なんで……。」

ヒートは震えながら離れ……。

「なんで……、なんで……、なんでだあああああ！」

空に向かって吠える。

「ふふふふ……。」

そんなヒートに近寄るアントとジュエル。

ヒートは視線を二体に移す。

「貴様らは……許さない……。絶対に……。許さない！」

『ファング！』

ヒートはファングメモリを取り出す。

「何！」

エクストリームはナスカを切り裂きながらヒートの方角を向く。

「よせ来人お！ ファングは……。」

エクストリームは警告するも……。

「壊してやる。……骨も……心も……全部！」

今のヒート、来人には届かない。

「よせえ！」

ヒートはファングメモリをスロットし展開する。

『ファング！』

するとドライバーにプラズマが走り、それは身体にも走り出す。

「が……、ぐ……、あ……。」

ヒートは苦しみ変身が解かれ……。

「がああああああああ！」

雄叫びを挙げながら来人の身体を風と装甲が覆い、来人を白い仮面ライダーに変化させた。

「あああああ……。」

「ふふふ……。成功よ。」

アントが言い放つ。

「何！」

ナスカを切り裂きエクストリームはアントに対峙する。

「彼のドライバーに使われたメモリは私達があなた達のメモリを研究して作り出したメモリ。そして使用者の怒りや憎しみといった感情により暴走する。」

「！」

すると。

「ぜあああああああ！」

エクストリームに白い仮面ライダーがとびかかる。

エクストリームはなんとか避けるも白い仮面ライダーは両手両肩両足に刃を装備し襲いかかる。

「辞める来人！ 俺だ！ 聞こえねえのか！」

「がああああああ！」

しかしそんな声も届かず白い仮面ライダーは両肩のショルダーセイバーを取り外しエクストリームに投げる。

「ったく！」

エクストリームはなんとなビツカーで防ぐ。

「来人お！」

すると。

「無駄よ。彼には何も聞こえない。ただ私達の命令にそって滅ぼすだけ。」

アントがフアングに歩み寄る。

「何！」

「だから今、この子に自我などない。だ・か・ら・．．．こんなことも！」

アントが倒れているアインハルト達を指差す。

「！」

「ぜああああああ！」

白い仮面ライダーは駆け出す。

「辞めろおお！ 来人おお！」

しかしエクストリームを大量のアント兵士とナスカが邪魔をする。



そしてファングの刃がアインハルトを切り裂こうと迫る。

「くっそがああああ！」

エクストリームはひたすらアント兵士を切り裂いていくも間に合わず……。

「ぜあああああああ！」

しかしアームセイバーがアインハルトを切り裂く寸前……。

「……………来人さん。」

アインハルトが涙を流しながら呟く。

「！」

セイバーが止まる。

「……………」

「何だと！」

エクストリームが唾然としながらアントは驚く。

そしてひとりでに変身が解け来人が現れた。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………」

息切れ、というよりも翔太郎やアインハルトに手を上げた自分を恐  
れての動悸。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……、はぁ……、はぁ……。」

自らの手を震わせ、まるで汚いものかのようにドライバーとメモリ  
を捨てる。

「来人……。」

「ふん。役立たずが。まあ楽しめたことには変わりないけど……。」

「

アントはナスカ、ジュエルと共に後退りしていく。

「待て！」

エクストリームは四本のメモリをビツカーに装填していく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

「ビツカーアサルトパニッシャー！」

ビツカーから七色の光線が放たれ爆発するもそこには何も残って  
いなかった。

「逃げやがったか。……ヴィヴィオ！ アインハルト！」

変身を解除し翔太郎が二人に駆け寄る。

「……………大丈夫だ。とりあえず病院だ。来人……………」

翔太郎が来人の方を向くと……………。

「はあ……………、はあ……………、はあ……………、はあ……………」

尻餅を突き自らの手を見て震えながら激しい動悸をする来人。

そして。

「うわあああああああ！」

まるで仮面ライダーとしてアインハルトを殺しかけた自分に対して恐怖するかのようにその場を走り去っていった。

「……………とりあえずお前は落ち着くことからだな……………。でもまずは病院だ！」

翔太郎はスタックフォンを操作する。

数分後訪れた緊急車両により二人は病院に搬送されるも数日の入院で済む事となった。

「お兄ちゃんご飯だよおお。」

「・・・・・・・・・・いらない。」

ドアから聞こえる来人の声に弟は困る。

すると。

「よう。ミック。」

翔太郎が弟、ミックの後ろから現れた。

ちなみに翔太郎は右風家とも既に顔見知りで何度か夕飯にも呼ばれたこともある。

「済まねえミック・・・ちょっと席を外してくれるか？」

「わ、わかりました。」

ミックは一階に降りその場には翔太郎、部屋に閉じ籠る来人だけが残る。

「・・・・・・・・・・二人なんだが怪我は軽いから数日で退院出来るそうだ。」

「・・・・・・・・・・そう・・・ですか。」

「・・・・・・・・お前も見舞いに行つてやれよな。」

「・・・・・・・・師匠・・・・・・・・。」

「……なんだ？」

「……僕……仮面ライダーを辞めます。」

「……あいつらを傷つけかけたからか？」

「……それもありますけど僕は足手まといです。」

「そんなことは……。」

「だって師匠には切りかかるし、ドーパントには勝てなくなってるし！……僕には最初から仮面ライダーなんて荷が重すぎたんです。」

「……お前はなんで仮面ライダーになった？」

「……。」

「……友達を……二人や街を守りたいからじゃないのか？」

「……。」

「……俺にはお前の力がある。街もお前を必要としている。」

「……でも僕は……弱い……。」

「……お前にフアングを恐れない覚悟があるか？」

「……。」

「もし覚悟があるなら俺は命がけでお前を支える。．．．なんせ俺達は．．．。」

「．．．．．師弟。」

「そつだ。俺は若干過保護かもしんねえが俺がやるのは道を作ることだ。決めるのも歩いていくのもお前次第だ。」

「．．．．．僕次第．．．。」

「．．．．．だからお前にもう一度ファングを使い、乗りこなせるようにするのも俺はあくまで案内だ。」

「．．．．．。」

「．．．．．それでもやる勇氣があるか？　．．．もう一度．．．仮面ライダーとして戦う勇氣があるか？」

「．．．．．。」

「．．．．．まあ急ぐことでもねえ。来週の土曜日、始まるの場所で待つ。」

「．．．．．。」

翔太郎は一階に降り右風家を後にした。

「始まるの場所．．．。」

始まりの場所・・・。

来人が翔太郎に弟子入りを望んだあの廃工場である。

暴牙（後書き）

わかった人はわかった。

来人の弟はミックです！

あの黒猫です！

ちなみに両親は……。

想像通りになります。



## 信念（前書き）

本日二度目の投稿になります。

誤字があったり変な部分があるかもしれませんがお許しを。

ちなみにすぐに投稿するであろう次回は紹介になります。

## 信念

始まりの場所の廃工場。

「・・・来たか・・・」

翔太郎はやってきた来人を見る。

「・・・師匠。」

「来たってことは覚悟が出来たんだな・・・。」

「・・・はい！」

「よし。じゃあこれだ！」

翔太郎はあるものを来人に投げる。

「ロストドライバー・・・。」

「来人・・・。もう一度ファングを使い。」

「！・・・でもまた暴走します。」

「確かにそいつには目にはったものを破壊しつくすプログラムがある。暴走しても被害を減らすためにここに呼んだ。だから俺がお前の身体を止めてる間、お前はお前の心のなかのファングを倒すんだ。」

「！」

「現に俺が以前相棒、ファングの暴走を止めるためにあいつのなかのあいつの意思を見つけて暴走を止められた。．．．だが今回は違う。俺達はWにはなれない。でも支えあうことはできる。お前が中で戦ってる間は．．．俺が外のお前を止める。」

「．．．．．。」

「安心しろ。あんな自我のねえ半人前にやられる程俺はヤワじゃない。」

「ははは。．．．でも．．．安心しました。．．．なんせ僕の師匠ですもんね。」

「おつよ。」

「．．．．．やります僕！」

「．．．．．よし。それでいい。．．．じゃあ．．．。」

「はい！」

『ジョーカー！』

『ファング！』

「変身！」

互いにメモリをスロットしジョーカーと白い仮面ライダーになる。

「がああああああああ！」

「頑張れよ来人……。お前は俺が止めてやるぜ！」

そして暴走する白い仮面ライダーとジョーカーはぶつかりあった。

「見つけた！」

「！」

岩があちこちに溢れる荒れる荒野。

ここは来人の中の世界であり、対峙するのはサイクロンと白い仮面ライダー。

「う……。うがああああああ！」

「君は僕が倒す……。未来を……。明日を掴むために！」

そして互いに駆け出し互いの刃と拳がぶつかりあった。

「でも二人とも大したことなくてよかったあああ。」

「ホントに。二人とも無理しちゃ駄目だよ……。」「

「ごめんね二人とも……。」

「……ご心配をおかけしました。」

リオとコロナにヴィヴィオとアインハルトは笑顔で答える。

しかし頭には包帯が巻かれている。

「……でも。」

「「？」」

「来人さん一体どうなったんだろう……。」

「翔太郎さんがいうには来人君と今日……なんだったっけ？」

「もうコロナ。始まりの場所っていうところで翔太郎さんと来人さん、二人同士でやり抜くことがあるって。」

「「やり抜くこと……。」」

「……私見に试试看みます。」

突如アインハルトがベッドからでる。

「「え？」」

「わ、私も……。」

「ちよっ、ヴィヴィオ……。」

「先生に怒られちゃうよおお。」

リオとコロナは止めるものの、二人は病院を抜け出して行った。

『エクストリーム!』

ジョーカーや他のフォームでは対処しきれないと判断したジョーカーはエクストリームに変身し、スペリオルビツカーを構える。

「・・・ちつとファング相手はきついな。」

「がああああああ・・・。」

「とりあえず目的は倒すことじゃねえからな・・・。来人・・・踏ん張れよ。」

そのままエクストリームはソードを抜かないままスペリオルビツカーを構えながら白い仮面ライダーと向かいあった。

「がああああああああ!」

サイクロンをセイバーが次々と切り裂き、サイクロンは地面に倒される。

そして白い仮面ライダーがサイクロンを持ち上げて首を絞める。

「ぐ……、が……」

苦しむサイクロン。

そのとき。

「お前にはわからない……。」

白い仮面ライダーが不意に喋りだす。

「！」

「お前にはわからない……。何かを壊すために作られた俺のことなど……。」

「壊す……ため……に？」

「そうだ。俺は牙……。壊すことしか知らない牙だ。」

「そんな……ことはないです。」

「……何……。」

サイクロンは白い仮面ライダーの手を掴み離そうとする。

「……人はみんな牙を持つてると僕は思います。……何かを……、大切な何かを守るための牙を……。」

「……守る……ための……。」

「僕は前あなたを使ったときに憎しみで動いて全てを破壊しようとした。・・・でも大切な友達や師匠が止めてくれた。僕は一人じゃない。支えてくれる師匠や仲間・・・。」

するとドライバーが輝き始める。

「友達がいる。・・・この力は・・・仮面ライダーの力は、・・・何かを滅ぼすにあるんじゃない・・・。」

輝きが収まると左スロットが現れていた。

「そんな人達を守るための力だ！」

すると。

「何!」

「!」

突如空中に黒いフレームにJと刻まれたメモリが現れた。

「ジョーカーメモリ・・・。師匠や皆の力・・・。」

サイクロンはメモリを手にとりそのジョーカーメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「はあああああ・・・。」



するとジョーカーの両手足を紫のエネルギーが覆う。

「おおおおおおお……。」

そのまま手を振りほどき蹴り飛ばす。

「ぐっ！」

「はぁ……、はぁ……。見せます……。僕なりの……。答えを！」

そしてサイクロンは跳躍し……。

「ライダー……ノールサイクロン！」

黒い竜巻を纏ってサイクロンが飛び回し蹴りを放つ。

白い仮面ライダーは胸部に放たれ吹き飛ばす。

「が……、が……。これが仮面ライダーか……。」

「そう。少なくともこれが僕なりの仮面ライダーの答えです。」

「そう……。か。」

「はい……。」

「悪く……はないかもな……。いいだろう。力を貸そう。右風来人！」

「え……、でも……。」

「……俺の牙は本来壊すことしか知らない。でもお前ならこの牙で誰かの未来を守れる。」

「……………」

「…………俺を活かしていつてくれるか……。」

「…………はい！」

すると白い仮面ライダーは徐々に変わっていき恐竜型のガジェットへと変わっていった。

そしてそのガジェットはサイクロンの手の平に飛ぶとサイクロンはそのガジェットを變形させメモリモードにするとスターティングスイッチを押す。

『フアング！』

そしてジョーカーメモリを左スロットにセットしフアングメモリを構える。

「変身！」

フアングメモリを右スロットにセットし展開しフアングメモリを置く。恐竜の頭のような装甲がアナザーダブルドライバーを包む。

『フアング・ジョーカー！』

そしてその世界を光が覆い……。

「来人……。」

エクストリームは目の前を見て唖然とする。

「師匠……。これは……。」

声の主、来人も自らの姿に唖然とする。

トゲトゲしいのは変わらないが右半身は白い身体、左半身は黒とい  
うまるで正反対な配色。

(……運命の悪戯か)

するとバットショットが飛んできた。

「師匠……。」

「来人。お疲れか？」

「……いえ。行けます！」

「よし、行くぜ？ 来人。」

「はい……。」

二人は急いで廃工場を出た。

「はぁ……、はぁ……。」

「くっ……。」

始まりの場所近くの港にヴィヴィオとアインハルト……。

「ふふふふ……。」

二人を壁に追い詰めているのはアントにジュエル、Rナスカ。

「ここは変身して……。」

「でも私達じゃ……。」

そんな二人にゆっくりと近寄る三体。

そのとき。

「ビッカーアサルトパンニッシャー！」

三体を七色の光線が襲う。

「ん……。」

そして……。

「はあああああああ！」

エクストリームがスペリオルソードを持って駆け寄ってきた。

エクストリームは三体を切り裂き吹き飛ばす。

「あなたは……。」

「また会ったな。」

「ふふ……。大丈夫なの？ お弟子さんは？」

「……。」

「そうです翔太郎さん……。」

「来人さんは？」

アインハルトとヴィヴィオが聞く。

「大丈夫だ……。知らねえのか、あんたら？」

「何。」

「俺の弟子の……。底力を。」

「……ん。」

アント達は振り向くと歩いてきたのは……。

「「来人さん！」」

「そういつこった。」

「お前・・・何故また・・・。」

「・・・僕は一度友達や師匠を傷つけかけた。・・・だからこそもうそんな過ちはおかせない。・・・この力に誓って。・・・友達に誓って！」

するとファングメモリが現れ、来人はそれを手にすると変形させメモリモードにする。

『ファング！』

そして左スロットが現れたドライバーの左スロットにジョーカーメモリをスロットし・・・。

「変身！」

ファングメモリを右スロットにスロットし展開、折り畳むと恐竜の頭のようなパーツがドライバーを覆う。

『ファング・ジョーカー！』

風が発生し来人の身体を変化させる。

そこに現れたのは今までの姿と離れた白い右半身、黒い左半身の仮面ライダー。

「……来……人……。」

「さん？」

「その姿は一体……。」

アインハルト、ヴィヴィオ、アントが啞然となる。

「この姿は……誰かを守りたいと思う僕の新しい牙……、それと仲間や友達との絆……思いの切札……その二つの力を纏いし仮面ライダー……。仮面ライダー……。ファンゲジョーカ  
ー！」

「ファンゲ……。」

「ジョーカー……。」

「ふ、ふん！ こけおどしよ！」

アントの指示によりアント兵士が走りだす。

ファンゲはタクティカルホーンを二回弾く。

『シヨルダーファンゲ！』

そして現れたシヨルダーセイバーをファンゲは投げ、アント兵士を次々と切り裂いていく。

「す……い……。」

アインハルトは唾然とする。

そしてファングは走り出しショルダーセイバーを左手に掴み、タクトイカルホーンを一回弾く。

『アームファング！』

右手のアンクレットにアームセイバーが現れ、ファングは二刀流でそのままアント兵士達を切り裂いていく。

「でりゃあああああ！」

次々とアント兵士は切り裂かれ消滅していく。

「俺も負けられねえな。」

エクストリームもスペリオルソードを抜く。

「さあ……、お前の罪を数える！」

そしてソードをドーパント達に向ける。

「行け！」

アントの命令でジュエルとナスカがエクストリームに接近する。

「悪いがジュエルの対策はすでに経験済みだぜ。」

エクストリームはナスカの刃をビッカーシールドで防ぎながらソードで切り裂き吹き飛ばす。



そしてジュエルの一撃をビツカーで防ぐ。

そのままのジュエルの攻撃をビツカーで防ぎつつエクストリートの副眼に英文字が上る。

「よし。完了だ。」

エクストリームはエネルギーを纏った左足でジュエルを蹴り飛ばす。

そしてソードを収めメモリをスロットしていく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

『メタル・マキシマムドライブ!』

『トリガー・マキシマムドライブ!』

『ルナ・マキシマムドライブ!』

そして抜刀。

「ジュエルの体格、そして一撃から計算した重量、体積から考えた所……。」

ジュエルドーパントは原子レベルで物質を固め強力な防御力を発揮出来るが、どうしても脆い部分が現れる。

エクストリームはスペリオルソードを構えて突進、邪魔するジュエルの拳を払い除けソードを突き刺す。

「ビツカー……バーストカリバー!」

そして抜くとジュエルは爆発し、犯人は消滅した。

そして残るナスカはやけになり超加速で接近するが……。

「ワンパターンな野郎だ。」

エクストリームはビッカーシールドで防ぎ、スペリオルソードで滅多斬りし吹き飛ばす。

そのままエクストリームはエクストリームメモリを閉じ再度展開する。

『エクストリーム・マキシマムドライブ!』

エクストリームは跳躍し……。

「デュアルエクストリーム!」

ナスカにデュアルエクストリームを放つ。

「たああああああ!」

ナスカを吹き飛ばしてエクストリームは着地。

「さぁ……、お前の罪を数えろ!」

着地したエクストリームが言った直後、後ろのナスカは爆発しその犯人もNEVERだったらしく消滅した。

「……さてと……残るは……。」

「せいっ!」

「ふっ!」

互いの刃が正面からぶつかりあうが、ファングのアームセイバーがアントの三又の槍を正面からまっぴたつに切り裂く。

「はあああああああ……!」

そのまま左手のショルダーセイバーと合わせてアントを切り裂いてゆき……。

「はあ!」

「ぎゃあああああああ!」

アントを吹き飛ばす。

「くっ……ゆけ!」

ファングはアームセイバーに魔力を込めて振るとセイバーから水色のかまいたちがアント兵士に放たれ、兵士達は切り裂かれ爆発していく。

「なんですって!」

「さあ……お前の罪を数えろ!」

そして爆発の中をフアングが駆け抜けながらタクティカルホーンを  
三回弾く。

『フアング・マキシマムドライブ!』

「はっ!」

そして跳躍し……。

「フアングストライザー!」

右足のマキシマムセイバーを回し蹴り感覚でアントに叩き込む。

「あああああああ!」

そのままアントは爆発する。

「やるじゃない。いい男だったわよ。」

そんな言葉を言い残しアントだった女性は消滅した。

「はぁ……、なんとかやれた。」

「やったじゃねえか来人。」

変身を解き翔太郎が歩み寄る。

「はい。なんとかなりました。」

「来人さん……。」

「……………」

ヴィヴィオとアインハルトも駆け寄る。

「二人とも心配かけたかな……。」

フアングは変身を解く。

「……はい。」

「でもいりませんでしたね。」

「へへへ……でも……。」

「「「？」」」

すると突然来人の腹が鳴る。

「お腹減った……。」

来人は言っつて尻餅をつく。

「（カクツ）……お前なあ、最後までぐらいちゃん決められねえのか？」

「すみません……。」

「……まあ、お前にはまだ早いか。」

翔太郎は手を伸ばす。

「ひどいですよ師匠」。 「

来人は手を掴み起き上がる。

「でも来人さん……。 」

「……。ホントは心配したんですよ……。 」

「あ、ああ。ごめんね。 」

「「もつとしつかり!」 「

「ごめんなさい!」 「

来人は二人に頭を下げる。

「うん 「

「……。仕方ないから許してあげます。 」

「でもなんにもないのもねえ……。ね。アインハルトさん。 」

「え? 「

「……。そう……。ですね……。 」

「そんなあ……。 」

「あははははははは。。。。」

「……………(ニコッ)」

「……………うっし。せつかくだしなんか食いにいくか。俺の奮発だ。」

「やった」

「やりい」

「(ペッコッ)」

そして翔太郎とヴィヴィオとアインハルト、二人に肩を借りながらの来人の四人は笑いながら歩いていった。

## 来人新フォーム（前書き）

紹介になります。

多分名前から見てもきらかでしょうが。



## 来入新フォーム

仮面ライダーファングジョーカー

来人がファングメモリとジョーカーメモリ、アナザーダブルドライバーで変身する仮面ライダー。見た目はWファングジョーカーと酷似しているものの来人のみの人格しかなくジョーカーメモリは身体能力強化に続きファングメモリの制御にも使われる。

獣のようなアクティビティな戦いが得意でファングメモリのタクティカルホーンを一回弾くことで右手にアームセイバーを生成するアームファング、二回で右肩に手裏剣や手持ち武器としても使用できるシオルダーセイバーを生成するシオルダーファング、三回で右足に巨大な刃マキシマムセイバーを生成するマキシマムドライブを発動させる。

また新能力として風の魔法強化、回数制限の切札の魔法を使用可能になり、一回の変身で一度だけツインマキシマムに耐えることが可能になる。

マキシマムドライブ

ファングストライザー：

水色のエネルギーを纏って右足のマキシマムセイバーで飛び回し蹴り状に切り裂く技。決まった際には恐竜の頭のようなエフェクトが現れる。

ツール：

アナザーダブルドライバー：

ファングメモリの能力により一時的に左スロットが現れたロストド

ライダー。

ガイアメモリ：

ファンゲメモリ：

「牙の記憶」を内包しまガイアメモリ。当初は他の純正メモリと同じ形で敵の組織から来人にもたらされ暴走した。しかし再度変身したとき、ファンゲの『意思』と対峙し仮面ライダーとしての思いを来人が見せたことにより自ら自己進化しライブモードを持った本来の姿へと変わった。ジョーカーメモリとの併用で仮面ライダーファンゲジョーカーに変身する。

また使用時はロストドライバーをアナザーに変える機能が働く。

ジョーカーメモリ：

来人が新たに得たメモリ。ただし特別なメモリであるため端子は銅。ファンゲの制御のためにファンゲと併用する。基本的にアナザーダブルドライバーとなった際、自動的にスロットされている。

## 緊急アンケート(前書き)

本編・・・というよりは本編に繋げるための回です。

感想お願いします。

## 緊急アンケート

皆さんにお聞きしたいことがあります。

今後の展開でこの緊張感のまま早速最終決戦にいくべきかも少し引つ張るかなんです。

最終決戦は一応四話編成で考えています。

皆さんはどちらがよいでしょうか？

ちなみに第二章はもう確定事項です。

それとインターミドルのキャラにも恋愛をさせたいと思いますがオリジナルの仮面ライダーにするかオリキャラでの原作ライダーにするかです。

ちなみにアクセルは無しです。

皆さんに頼るのは頼りないのですが、ぜひご意見お願いします！

ホントにお願いします（土下座）

## 想夢（前書き）

今回は今後のレールのために短めになります。

そして・・・。

第一章はもう少し続くことになります。

最終決戦押しの皆さん・・・。

すいやせん！

## 想夢

深夜。

並の人間なら既に夢の中であろう時間。

それぞれの楽しい夢を見ている時間。

そんななか町の上から街を見る人影。

『バク!』

メモリの声がこの真夜中の街に響き渡った。

しかしここに未だに寝ていない……。

というより眠れない人間が一人……。

「……………眠れねえ。」

彼、左翔太郎である。

今日は前日、二日分の仕事を済ましてしまったせいが出勤はしたもののずっと仮眠室で寝ていた。

そのせいである。

もはや隣のスバルにすらイライラを覚える。

(こんにやる〜。人が苦しんでるのにすやすやと寝やがって)

「んむ〜ん。翔太郎さあ〜ん。この子どっちですかね〜。男の子だったら翔太郎さんに似てイケメンだろ〜し〜、女の子だったら私に似てきれ〜になりますよ〜。」

「・・・何が起きたんだ。・・・こいつの夢の中で・・・。」

少なくともろくなことではないだろうと翔太郎は悟る。

「・・・さあ、お前の罪を数えろ・・・てか罪じゃなく羊を数えろってか・・・。羊が一匹、羊が二匹・・・。」

そして羊を数え始める。

しかし結局は眠りにつくことは出来ず・・・。

しかしそんな中事件は起きる。

「~~~~ん」

「……………」

「…………ら、来人さん……………」

「…………うなされています。」

翔太郎とヴィヴィオ、アインハルトがお邪魔している来人の部屋の中では来人がうなされていた。

来人の顔にはBと大きく書かれていた。

「あ~~~~、う~~~~。。。。」

「。。。。何だか似たような事件があったような。。。。。」

翔太郎は以前のナイトメアの事件を思い出す。

風都大学の学生が次々と眠り病になるという事件である。

「。。。。しか。。。。も。。。。。」

翔太郎はスタッグフォンを見るとそこにはいくつもものうなされている人々の写真があった。

「一晩に何人も。。。。これはまるで夢を食い荒らすような。。。。。」

「。。。。う~~~~ん。。。。おとぎ話で王子様のキスで起きるっ

て聞いたことg。。。。。」

「止めるよヴィヴィオ？」

「。。。。ね、寝てる間にはちょっと。。。。。」

「冗談冗談」



するよ。

「……………あ！」

「「（ビクッ）」

急な翔太郎の大声に二人はびくつく。

「どうしたんですか翔太郎さん？」

「……………何か……………」

「たしか夢を食うっていう動物が……………」

翔太郎はスタッグフォンをいじるとそこにはバクの写真が写っていた。

「……………これって……………」

「バク？」

「そうだ。バクは夢を食べる動物って言われてる。もしかしたら……………」

「この犯人はバクのドーパントってことですか？」

「可能性としてはあるだろ？」

「は、はい……………」

「……ま、まあ。」

「てなわけで今日は俺もやるか。」

「大丈夫なんですか？」

ヴィヴィオが心配する。

「昨晚まったく寝れなかったんだよ。だからいつでも寝れるぜ。」

「は、はあ……。」

二人は頭を傾げた。

そして夜中。

「本気ですか……翔太郎さん……。」

「そんな病んだヤツを見るような目で見るんじゃないやねえ！」

スバルは目の前の翔太郎、ジョーカーを痛そうな目で見る。

「それに以前もWで寝たとき一応効果はあったんだよ。」

事実Wで変身してナイトメアに対抗したときはナイトメアはフィリップを消去出来なかった。

「ホントですか？」

「おう。そんなじゃ・・・。」  
開いていた窓からエクストリームメモリが飛んできて展開される。

『エクストリーム!』

「そんなじゃ行つてくるぜ! 夢の中へ。」

「え〜〜〜。」

エクストリームはそのまま仮面ライダーのままいびきをかいて床に布団を敷き眠りだした。

今回エクストリームで行くのはフィリップがいない分、エクストリームによりメモリの力を相殺し夢の中でも対処出来るようにするためである。

「か〜〜〜・・・。」

「・・・私も寝よ。」

スバルもベッドに入る。

ちなみに来人以外はドーパントの被害を受けていなかった。

翔太郎は知らない・・・。

今日ドーパントが狙う夢は何の偶然か皆顔見知りの夢ばかりであることを。



## 夢界（前書き）

やっと投稿できました。

ホントは昨晚投稿したかったんですが、睡魔という名のドーパント  
があああ。

次回はエターナルの登場回かもしれないので翔太郎達レギュラーキ  
ャラは登場しないかもしれません。

## 夢界

「じゃあ行ってくるな。」

「行ってらっしゃい」

「いつてらっしゃい」

出勤する翔太郎にスバルと息子であろう小さい男の子がお見送りする。

「あ、そくだスバル。忘れものだ。」

「あ、そうだね。翔太また寝よつか。」

「うん。」

翔太という男の子は寢室に戻って、その場には二人。

「じゃあ・・・行くぜ？」

「はい」

「んむ。」

「んん。」

そのまま翔太郎はスバルの唇を強引に奪い、手はスバルの太ももに

行きそのまま……。

そんな二人を遠くから見るのは……。

「ふほほほ……。いいねえ……。」

動物のバクのようなバクドーパントがそんな二人を眺めていた。

すると。

「……。一体何が忘れ物なんだ？」

後ろでエクストリームが呆れていた。

「な、なんだ貴様！」

「プライバシーの侵害だ。……さあ、……お前の罪を数えろ！」

エクストリームは右手のスペリオルソードをバクに向ける。

「に、逃げろ……。」

「お、おい。待てコラ！」

そのまま二人は行為を行う翔太郎とスバル……。

正確にはスバルの夢の中の二人を放置したまま他の誰かの夢へ走り去って行った。

ちなみにその後、スバルの夢の中の翔太郎は無論遅刻しながらも二

人には新しく子供が出来たとか出来なかったとか……。

昨晚と同じ夢であったとか。

~~~~~

「……むふふふ。翔太郎さあ……ん。ダメですよ……。そんなに激しいのはあ……。ん、ん……。」

おそらく翔太郎が起きていたら張り倒されるであろうスバルの寝言であった。

「来っ人さん」

「なあ……に」

「なんでもないですう……」

「ヴィ……ヴィオ」

「はあ……い」

「なんでもなあ……い」

来人とヴィヴィオが一つのグラスに刺さっている二本のストローを吸いながらこんなやりとりをさつきから何十回と繰り返していた。

一方では……。

「てめっ！ ちょこまか逃げてんじゃねえ！」

エクストリートのソードがバクを霞める。

「うおっ！ 危な！」

そのまま二人が走り去っていく中、ヴィヴィオの夢の二人は再びそのサイクルを続けていく。

~~~~~

「はあ~~~~い . . . . 来っ人さん」

ヴィヴィオはよだれをたらしながら夢の中の桃色の空間を楽しむ。

正夢になるかはさておき。

「うおりゃあ！」

「ぬあああああ！」

バクはエクストリートの蹴りに放たれ吹き飛ばす。

「いい蹴りだああ。そんじゃ次の夢で~~~~。」

「待てやコラ！」

逃げるバクをエクストリームは追う。

エクストリーム達が去っていく中……。

「おめでと、はやてちゃん」

「おめでとう。」

なのはとフェイト、他の面々も祝福する中、白い協会からは日の光で顔が見えない男性と……。

「ありがとな〜、みんな」

満面の笑みのはやてであった。

~~~~~

「んふふふ〜」。これで男つ気のない生活とはおさらば〜」

はやてはにやけながら夢の中の自らの願望を全開に楽しんでいた。

ちなみに他八神家では……。

「はっはっはっはあ。強いやつがたくさんいる。次はお前だあ〜」

「あ、あ、アイス〜」。

「み、皆これで私が料理がうまいって認めてくれるわね〜」。

「リンの方がおっぱいおっきいですよ〜」。

「いやあたしの方がおっきいぞ〜」。

「……………」

個々にそれぞれの願望を夢の中で叶えて正に夢心地であった。

「ったく、なんだったんだ八神家は。強いやつと戦い続けるやつやら、アイスを食らい尽くすやつやら、料理を食べてもらって喜ぶやつやら胸を比べるやつやら……。ザフィーラは……、まともだったな。」

エクストリームは呆れつつもソードを振る手は止まらない。

「ホントならあの夢も食べていくのだがなあ。」

「いい加減に捕まれっつーの!」

「やーだねえ!」

二人の鬼ごっこは続く。

「来君……。僕……。来君が好きです!」

「ミウ……。」

「早いかも……しれ……しれないけどぼ……ばく……じやなくてぼ……僕とけつ……けつ、結婚！……じゃなくてえつとお……。」

「いいよ、結婚……。」

「……はへ？」

来人は指輪を差し出す。

「結婚しよう。」

「……は……は……は……はい！」

夕日に二人の陰が重なってゆき……。

そんな二人の近くで……。

「なんでこんなにミッドの子供は進んでんだ？」

「気にしたら負け負け」

「だな。……ってなんでてめえ俺の隣で呑気に眺めてんだコラア！」

「げふ！」

エクストリームは隣で眺めていたバクを蹴り飛ばし別の夢へ。

~~~~~

「来君~~~~。僕新婚旅行はここがいいなあ~~~~」

普段大人しいものの、夢では自らの願望に忠実なミウラであった。

「~~~~（轟轟戦隊ボウケンジャー）」

鼻歌で歌う賢。

「何の曲なんですか？」

「……いや、なんだか頭に浮かんでな……。」

「よくわからないけど結構アップテンポな曲ですよ。こっぴつ場合にもうちよつとロマンチックな方が……。」

「嫌か？」

「いえ。賢さんの隣にいただけで私は幸せですから」

「……（フツ）」

ウィンクするティアナに賢は嬉しそうに笑う。

カフェで隣同士で皿を拭く二人の薬指には指輪が輝いていた。

そんな桃色空間の二人は気づかないものの、目の前では……。

「ティアナの隣のやつ……、どっかで見たような……。おらあ  
！」

「ぶへー！」

エクストリームがビッカーでバクを殴り飛ばす。

飛ばされたバクにより壁が壊されエクストリームも壊れた壁にはいつてゆき……。

~~~~~

「賢さあ~~~~ん 今日賢さんの好きなリゾットですよ~~~~
」

素なのかは知らないもののメロメロな声をあげるティアナであった。

「「はあ……、はあ……、はあ……。」

炎が燃え上がる中、背中合わせに立つサイクロンとアインハルト。

「もう……駄目なんでしょうか……。」

「諦めちゃ駄目だ！ 君は僕が守る！ 絶対！」

「来人さん……。」

「僕は・・・君が好きだ・・・。」

「！ 来人さん、ちよつとは空気を・・・。」

「本気だよ。僕は君が大好きだ。」

「え・・・。」

炎のせいかわからないがアインハルトの頬が赤く染まったように見える。

「・・・だから大切な人を僕は守るよ。帰ったら・・・結婚指輪を渡すよ。」

「・・・じゃあ頑張つて戦い抜きましょう。」

「だね。」

そのまま二人は敵に突っ込んでいった。

しかし平穩に二人は無事帰還して数年後仲慎ましい夫婦となった？

「・・・まともか？」

「じゃない？ はあ・・・、はあ・・・。」

エクストリームのコブラツイストから逃れたバクは次の夢へ飛び・・・

。

「そろそろ捕まれっつーのに！」

エクストリームも続く。

~~~~~

「……来人さん。言い忘れてましたけど、……私も、大好きです。」

寝言ながらも思い切って言うアインハルト。

普通に言っていれば確実に告白である。

あれから色々な面々の夢を渡ってきたエクストリームとバク。

「ったくなのはさんとフェイトさんは落ち着いたまともな夢だったが他はなんだっただよ。リオは仮面ライダーになるわ、コロナはなにやらヴィヴィオとアインハルトの戯れやら、キャロは身長に、エリオは……、悲しかったなあ。」

そんなことを言いながらもエクストリームはビツカーにメモリをスロットしていく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』



『サイクロン・マキシマムドライブ!』

「ビッカー・・・アサルトパニッシャー!」

ビッカーから七色の光線が放たれバクを吹き飛ばす。

「おおあああああ!」

そしてバクが夢から追い出され夢も崩れていく。

「うっし。後は・・・。」

そしてその空間は光輝き・・・。

「ぬあああ!」

バクが現実世界の地面に倒れる。

「はぁ~~~~。危なかった。」

そして一安心したと思いきや・・・。

何者かが肩を叩く。

振り向くとそこには・・・。

「よ・く・も・僕の夢を・・・。」

素顔はわからないものさぞごりつぶくなファンゲジョーカーがいた。

「お、お、お前！　なんで……。」

「それ。」

ファンゲが指を差した所にはスパイダーショックの発信機が。

「……まさか。」

バクは夢の中でエクストリームにコブラツイストされたことを思い出した。

バクはあくまで人の中に本人が入るためダメージなどはそのまま残るため、夢の中で発信機をつけられたらそのまま現実世界にも響く。

「……よ……く……もお。」

「は、話し合おう。な。な。な。」

「断る！」

『ファンゲ・マキシマムドライブ！』

「さあ……、お前の罪を数えろ！」

「ぎゃああああああ！」

「……やり過ぎだぞ来人。」

「すみません……。」

管理局の搬送車両に運ばれていく犯人は命に別状はないもののボロボロであった。

「……とりあえずよお……。」

「はい？」

「俺はまだ眠いから寝るわ。お休みい。」

「ま、待って下さい師匠。」

「あん？」

「僕一日寝てたんですすごい目が覚めてるんですよ。だから運動に付き合ってください！」

「ちよっ！ ざけんな！ 俺は眠みいんだよ！ 寝かせろおおお  
お！」

「お願いしますよ師匠お！」

「止めるおおおお！」

「待って下さあああい！」

現実世界で二人は鬼ごっこを始める。

今後は翔太郎が追われる関係で。

ちなみに犯人はたまたまガイアメモリを見つけていたずらで能力を使ったらしく敵の組織に通じることは知らなかった。

## 策略（前書き）

エターナル回前半です。

SINさん、アイデアを採用していませんが頑張ってみました。  
活かさないですいません。

## 策略

ミッドチルダ南部・エルセア第9地区。

とある家の前でそわそわするポニーテールの女子が一人。

やたらと落ち着きがない。

「克巳……、いんのかな〜。」

すると。

「ハリーちゃん？」

家からその家の主婦、葵炎マリアが現れた。

「あ……ど、ども。」

「克巳なら今朝から出かけてるわよ。」

「え？ あいつまさか……。」

ハリーは若干努力を纏う。

「いつものロッククライミングよ。ただし今回は野外みたいだけどね。」

「あ。なあんだ。……（ほっ）」

「ハリーちゃん……。」

「？」

「克巳はあんな性格で勘違いされやすいけど、仲良くしてやってね。」

「は、はい！もちろんです。」

「ハリーちゃんならお嫁さんとしても歓迎よ？」

「よ、よ、よ、嫁え!??」

途端にハリーは顔を真っ赤にする。

「あら。気が早いかしら？」

「ほ、ほ、ほ、ホントですう。し、し、し、失礼しますう。」

後半の声を小さくさせながらハリーはその場を立ち去る。

(……嫁かあああ。でも克巳の嫁さん……)

数秒後ハリーの顔がさつきと勝るとも劣らないぐらいに顔を赤くする。

(あいつ……、見に来てくれっかな……)

ハリーは自分が好きな少年……。

葵炎克巳を思い浮かべながら歩いて行く。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ……。」

自然の中で岩を降りる一人の少年。

顔は美形で背もある黒髪に青いメッシュの入った髪の少年葵炎克巳が。

「今回はなかなか手応えがあった……。」

そのまま岩から着地した時……。

「!」

爆音が鳴り響き、鳥達が一斉に羽ばたいていく。

「……この場合はあまり関わらないほうが無難だな。」

しかし……。

爆音は徐々に近づき遂には……。

「ぐああああああ。」

何者かが吹き飛ばされてきた。

黒い身体に白い帽子、首にはマフラーの骸骨の戦士……。



「仮面・・・ライダーか？」

克巳は勘でその者と呼んでみると戦士は克巳を見る。

「フィリップ・・・。いや別人か・・・。」

戦士はたちあがる。

「あなたは一体・・・。」

「俺は・・・、！ 伏せろ！」

「何！」

克巳は戦士に無理矢理伏せられる。

その途端後ろの岩が粉々に碎ける。

「・・・・・・・・一体何が・・・。」

「・・・・・・・・来るぞ。」

「・・・・・・・・！」

二人は立ち上がると目の前に白い戦士が歩み寄ってくる。

白い身体に三つの角、両手は赤い火のような模様、足のアンクレットにもそのようなファイヤーモチーフが伺える。

「仮面ライダーか？　．．．こいつは一体．．．。」

「エターナルだ。」

「エターナル？」

克巳が聞き返すと．．．。

「よくわかりで．．．。」

「「！」「」

突如エターナルが語り出す。

「これはエターナル．．．。すべてのメモリの王にして最悪の悪魔．．．。それがこのエターナル．．．。」

「．．．なぜコイツを襲った！　こいつもあんたと同じ仮面ライダーだろう！」

「その男、仮面ライダースカルは我々の敵です。我々がせっかくこの街でガイアメモリを広めてあげようと考えているのにその男はそれを邪魔しているのです．．．。」

「．．．ドーパントっていうのは人々を襲う怪物だろう。そんなのがゴロゴロいてたまるか。しかもこの街は俺の生まれ育った街．．．。お袋や腐れ縁の連中がいる。この街は貴様らの実験のためのモルモットの庭じゃない！」

「．．．どうやらあなたは我々の事をわかってくれないようだ。」

「

「そんなくだらないことなど解りたくもない……。」

「なら……死ね。」

エターナルRFは右手を突き出す。

すると。

「ぐっ！」

克巳が吹き飛ばされ後ろの岩場に叩きつけられる。

「貴様ああ……。ネクロオーバー、セットアップ。」

克巳は瞬時に自らのデバイス、ネクロオーバーを発動させコンバットナイフ型デバイスのネクロオーバーとNEVERと後ろ背中と左胸に描かれたバリアジャケットを身に纏う。

そして足元に魔導陣が描かれたと思ったら克巳は立ち上がり腹部を内側に押す。

するとゴキツと鈍い音になり……。

「……………はあ……。」

深く息を吐く。

「！」

「貴様……あれだけの衝撃に加え岩にぶつけられながら何故……」

スカルとエターナルは驚く。

「俺の魔法でな……。魔力が尽きない限り、即死しない限り俺は何度でも治癒出来るんだよ。」

「化物が……。」

「傷つくことを言ってくれたお礼だ。……今度はこっちの番だ!」

克巳はエターナルRFに向けて走り出す。

そしてネクロオーバーをエターナルに振りかざしきりかかるもエターナルは簡単に避ける。

「ておおおお!」

克巳はまけじとネクロオーバーで斬りかかり続けるも隙を突かれて懐にストレートを受ける。

「ぐっ! ……つう……ておおりゃあ!」

吹き飛ばされながらも克巳は再び立ち上がりエターナルに向かっていく。

「しつこいですね。」

エターナルは赤い炎を右手に纏ってストレートを放つが克巳はギリギリで交わしドライバーに触れる。

「！」

その時克巳の頭に電撃のような衝撃が走る。

「……こいつは……。」

「ええい！ 放せ！」

「ぐっ！」

そのままエターナルは克巳を蹴り飛ばす。

「くっ！」

そのときスカルはマグナムをエターナルの足元に乱射する。

そしてエターナルは煙に隠される。

「ええい！ こしゃくな！」

エターナルは振りきり煙を超えるもそこにスカルと克巳はいなかった。

「……まあいいでしょう。やつは怪我を負っている。そう遠くにはいないでしょう。……それに私にはすべてを見通す”眼”があります。」

するとエターナルの後ろに巨大な二つの”眼”が浮遊し不気味に光らせた。

「これでいいだろう。」

「済まないな……。」

川沿いで克巳はスカルだった男性の怪我を直す。

「あの場でも治せたんだがあいにく俺は他人に使うのは苦手だな……。時間がかかる。」

「いや、助かった。……しかし……。」

「何だ？」

「さつきは何だったんだ？ ヤツのベルトに触った途端様子がおかしかったぞ……。」

「……俺にもわからない。……ただ……。」

「ただ？」

「……あのエターナルには……いや……あのエターナルメモリに並々ならぬ運命を感じた。」

「何!？」

「…………俺はあいつと初めて会った気がしない。…………不思議とな。」

「…………不思議ではないだろう。俺ももう二度と会えないであろう弟子と会えた。それがお前にも起きたんだだろうな。」

「かもな。…………紹介が遅れた。葵炎…………克巳だ。」

「鳴海荘吉だ。」

「よろしくな。」

「ああ。」

その時。

「！！」

二人が横に飛んだ途端そこを爆発が襲う。

「どうやらお客さんか。」

「みたいだな。」

克巳と荘吉はそれぞれ武器を構える。

その視線の先には…………。

「もう逃がしませんよ…………。」

そして二人の後ろからはクレイドールドーパントが迫り、二人は背中合わせになる。

「どうする？ あんた一人でもエターナルに勝てなかったのにもう一匹お客さんがいるぞ。」

「男の仕事の八割は決断、後の二割はオマケだ。いざとなったら克巳、君は逃げる。」

「……悪いが俺は同じ目的のヤツとは一緒に行動して楽しい主義でな。……第一俺も睨まれてる。逃げられそうにはない。」

「……我ながらふがないな。」

「……それにエターナル……。あいつとは遅かれ早かれ会うよな気がしていた。それが早くなっただけだ。……！」

その時克巳は何かを思いつく。

「一ついいか？」

「何だ？」

「この状況を打開する術を思いついた。」

「……ろくなことじゃないだろうな。」

「あんた心理学者かなんかか？」

「探偵だ。」



「そりゃあいいな。…………乗るか？」

「…………それしかないなら仕方ないだろう。」

すると克巳は小声で莊吉の耳元に語る。

「…………ろくなことじゃないだろ？」

「確かにな…………。しかし…………それしかないなら…………。」

「ああ…………。」

「しかしこれにはお前を危険にさらされる…………。」

「…………これくらいなど危険に入らない…………むしろこれくらいがちょうどいい。」

「口の減らないガキだ。」

「ガキで結構…………それじゃあ…………。」

「ああ…………。」

『スカル！』

莊吉は左手に帽子を持ってスカルメモリを鳴らし、ドライバーにスロットする。

「変身。」

『スカル!』

そして展開すると風が莊吉を覆い莊吉の肉体を変化させスカルへと変貌させる。

「……………行くか。」

「……………ああ。」

スカルはクレイドール、克巳はエターナルに突っ込んで行った。

スカルはクレイドールを止めるため……………。

克巳は逆転の一手、エターナルメモリとドライバーを奪ったために。

## 策略（後書き）

ちなみに克巳の名字は葵炎きえんといひます。

「葵」は単体だと「あおい」と読みますので名字で「青い炎」とな  
ります。

永遠（前書き）

やっとこさ投稿できましたエターナル後編。

頑張ったつもりです！

しかし自信は皆無！

## 永遠

「てえおおおおおお！」

後ろのクレイドルをスカルに任せた克巳はエターナルRFに突っ込み続けるもエターナルはさっきから軽く克巳をあしらい続ける。

しかし敵はクオークス……。

体力の消耗が激しいため徐々にエターナルの動きが鈍くなっていた。

そして再び克巳はエターナルに向かっていく。

「ふっ！」

エターナルはサイコネシスで克巳を攻撃する。

「つつう！ おおおお！」

骨を折られる痛みが克巳を襲うが、克巳は魔法で治癒させながらエターナルに突っ込む。

そしてネクロオーバーで斬りかかる。

「ておおおおおお！」

「つつ！ こしやくな！」

エターナルは腕で受け止める。

そのまま克巳のネクロオーバーをエターナルは腕で受け止め、避ける。

「頂く！」

そして克巳は隙を突きエターナルのドライバーに手を伸ばし掴む。

するとプラズマがドライバーに走る。

「何！」

しかしエターナルは直ぐ様克巳の手を掴み上げる。

「つつう！・・・しかし！」

「・・・・・・・・！！」

するとエターナルの装甲が粉々になる。

「なぜ変身が・・・・・・・・。」

「そいつはどうやらお前を拒んだようだ・・・な！」

克巳はボディブローを放ちエターナルだった白服の男を突き飛ばす。

その勢いによりメモリとドライバーが飛ばされる。

「狙い通りだな・・・。俺が求めるようにそいつも俺を求めた。だからふとしたことでこうやって外れると思った。」

「だからクレイドールをスカルに任せたのか!？」

「そう。・・・貴様とならただドライバーに触れるだけでエターナルが解けると思った。だとしたら俺でもなんとかなかなると思ってんでな。」

「そんな危険な賭けを・・・さっきのスカルとの会話はフェイクか!？」

克巳とさつきスカルと互いに敵に向かっていく際、克巳は耳元でスカルに呟いていたが、実はただ作戦の振りをしていただけであった。

「そうだ。しかしおかげでかなり魔力を持つてかれたがな。」

そのせいか克巳の頬の傷が治らないままである。

そして・・・。

「・・・とりあえず・・・頂くとする!」

ドライバーとエターナルメモリに向けて走り出す。

しかし・・・。

「させません。」

「ぐっ!」

白服の男はサイコネシスで克巳を吹き飛ばす。

「そのエターナルは強力な力を持つメモリです。言うことを聞かないなら言うことをきかせるまでです。その前にあなたを殺ります。」

「はっ！ やってみる！」

すると男は懐から非純正のミュージアム製のガイアメモリを取り出しスタートアップスイッチを押す。

『アイズ！』

そして首元にアイズメモリをスロットし男はアイズドーパントになる。

「今度は怪物か！」

「あなたはドーパントを知らないようですね。」

「ドーパント？」

「ガイアメモリにより進化した超人の名称……。それがドーパント。……では、……はっ！」

アイズの両手の眼が光る。

「！」

克巳は危険と判断し横に飛んで避けるとそこを爆発が襲う。

「あの爆発をまともに受けていたら即死だったな。」



「まだです。死ね！」

アイズは目玉を大量に生成し克巳に飛ばす。

「っち！」

克巳は走り出す。

目玉は克巳に当たらずに地面に当たると爆発。

克巳は爆発の中を駆け抜ける。

しかし克巳は若干冷や汗をかくも楽しそうに笑う。

そんな状況ながらも克巳はドライバーに近づいて行く。

「！ させん！」

目的を気が付いたのかアイズは手の二つの目玉を克巳に飛ばし吹き飛ばす。

「ぐっ！」

しかし……。

「はっ！」

克巳は目玉を踏み台にして一気に跳躍しドライバーの元に着地する。

そしてドライバーを腰につけるとベルトが巻かれ、ドライバーが装着される。

そのままエターナルメモリを手にする。

『エターナル!』

しかし……。

「今だ。死ね!」

「!」

アイズの目玉が爆発する。

「! 変身!」

克巳が叫んでスロットを傾けた途端、そこを爆発が襲う。

「克巳……。」

クレイドールとの取っ組み合いの最中にスカルは呆然と爆発を見る。

「ふっ。あれだけの爆発なら即死は間違いないでしょう。」

「……。」

「次はあなたの番です。……大丈夫です。直ぐに彼の後を……」

「」

「・・・残念だがそれは無理なようだな。」

「何!」

アイズは驚く。

「!」

そして何かの気配を感じたのか振り向く。

そこには・・・。

「・・・これが・・・、エターナルか・・・。」

エターナルRFが立っていた。

「・・・しかし・・・、お前の真の姿はこれではないはずだ。  
・・・起きろ、・・・エターナル!」

エターナルRFがエターナルメモリに喋りかけた時、エターナルから青い波動が放たれる。

そして両手と足のアンクレットのファイヤーモチーフは青くなり胸や背中、右腕や左太もみに計24個のマキシマムスロットのベルトが巻かれ首にエターナルローブが生成される。

「これは一体・・・。」

「・・・。」

アイズとスカルはその青き炎を宿したエターナルブルーフレアを呆然と眺める。

「これだ．．．．この青き炎を宿したこの姿こそが真のエターナルだ。」

「真のエターナルだと!? なら私の変身していたのは．．．。」

「貴様の変身していたエターナルは所詮まがいもの．．．。俺が手にした時、このエターナルメモリはすべてのメモリの王者の力を得る。俺こそが．．．．真のエターナルだ!」

克巳の変身した真のエターナル、エターナルブルーフレアはアイズに向かって走り出す。

「しにぞこないがあああ!」

アイズはエターナルとぶつかりあう。

一方．．．。

「俺も負けてられないか。とう!」

スカルはクレイドルにスカルマグナムを乱射する。

クレイドルは粉々に砕けるもクレイドルの能力により即座に再生するが．．．。

「貴様の再生能力は既に見きった．．．。」

スカルは再生する破片に攻撃を加える。

破片は傷つきながらもクレイドールに再生するも……。

「……………つづ。」

クレイドールは腹部を抑え、よろめきながら立つ。

スカルはこれ以上粉々になれないであろう破片に直接攻撃を加え、ダメージを蓄積させたまま再生させたのだ。

「いずれそれを繰り返せば再生スピードやエネルギーが切れ、再生できなくなる。それまで徹底的に砕かせてもらおう……。」

スカルはマグナムを構えたままクレイドールに突っ込んだ。

その一方エターナルとアイズの戦いは……。

「ておおおおおおお！」

「ぐわあああああ！」

エターナルが青き炎を纏った右手でアイズを突き飛ばす。

「この……程度でええ！」

「……………つづ！」

アイズはエターナルに殴りかかるがエターナルはロープで上半身を隠しながら殴りかかるアイズにカウンターからのラッシュを叩きこ

んでいく。

そしてエターナルは右手にコンバットナイフ型武器、エターナルエツジを手にし……。

「そりゃあああああ!」

「ぬあああああ!」

ローブにより隠されたエツジによりアイズを切り裂く。

そしてそのままローブを翻し、正面蹴りでアイズから間合いを取る。

「……………ふっ!」

「……………ぬあああああ!」

アイズの眼が光るとそれを確かめたエターナルは……。

「……………せあ!」

跳躍しその場に起きる爆発を避ける。

そして右手のエツジから斬撃波をアイズに放ち……。

「ぬあああああ!」

クレイドールに吹き飛ばしぶつかりあつ。

そしてエターナルはスカルに並び立つ。

「貴様はこの街に手を出した……。その時点で貴様らの逝く先は……」

そしてエターナルはエッジに、スカルはマグナムにメモリをスロットしマキシマムモードに変形させる。

『エターナル・マキシマムドライブ!』  
『スカル・マキシマムドライブ!』

すると……。

「が……がああああ……。エターナルにこんな力が……。」

「……っああ!」

アイズとクレイドルが苦しみ出す。

「……地獄だ。ておおおおおお!」

エターナルは走り出す。

そして青き炎を右足に纏いアイズにキック版エターナルレクイエムを叩き込む。

「が……があああああ!」

そしてスカルはマグナムから強力な光弾をクレイドルに放つ。

「……っあああああ!」

そしてエターナルはスカルの隣に着地し二人は背を向けエターナルは右手でサムズダウン、スカルは帽子を深く被り直して後ろの二体に言い放つ。

「「さあ……………」」

「地獄を…………、楽しみな！」

「お前の罪を…………、数えろ。」

その途端アイズとクレイドルは爆発し、後の犯人も塵となって消えてしまった。

「……………終わったか。」

「……………ああ。」

エターナルとスカルは変身を解く。

「……………鳴海…………、あんたはこれからどうする…………。」

「……………行き先など特に考えてはいない……………ただ…………。」

「……………何だ？」

「近いうちに嵐が来そうだ。その嵐が去り行くまではこの街にいたるうな…………。」



「……………そうか。」

「……………克巳。お前はどつする？」

「……………俺がコイツと出会ったのも……………」

克巳はエターナルメモリを見た後、莊吉を見る。

「あんたと出会ったのも運命かもしれない……………ならその運命に従ってみるのもいいかもな。」

「……………仮面ライダーとして戦っていくということか……………」

「……………あいにく俺はそんな大それたもんになる気はない……………」

「……………とりあえず……………」

「……………。」

「俺に関わる全てのヤツを守る……………こいつはそのための力だ。」

「……………ならお前に任せて大丈夫そうだな。」

莊吉は背中を向けて歩き出す。

「……………あんたこそ……………俺とまた会うまで死ぬな……………」

克巳も背を向けて歩き出す。

「…………ふつ。二度も死んでたまるか…………。」

「…………なんのことだ？」

「…………ふつ。……男は多少影があつた方がもてるんでな。」

「…………そうかよ。」

克巳は笑いながら荘吉と別れていく。

そして互いにその場を後にする。

自身のオフロードバイクで戻ってきた克巳はバイクから降りる。

すると。

「克巳……………」

ハリーが駆けて来る。

そして克巳に飛びかかる。

「どわ！」

そして状況は倒れた克巳にハリーが馬乗りになっている状態になる。

「克巳！ お前、次の休みには1日暇だって言ってたじゃねえか！」

「……………それがなんだ？ 第一なんで俺の休みをお前の言う通りに家でじつとしてなきゃいけない？」

「そ、……………そりゃあ……………」

ハリーは顔を赤くさせる。

「で……………ででで……………」

「で？」

「……………」

ハリーは顔を赤くさせ蹲ったかと思っただけ……………。

「……………あ、克巳！」

「何だ。」

「お前、その傷……………」

ハリーはさっきの戦いで治癒しきれなかった克巳の頬の傷を指摘する。

「あ？……………ああ。これが。」

「お前……………。ケンカでも直ぐに治すのに……………」

「大したことじゃない。つばでも付けていれば治る。」

すると。

「……………（ペタッ）」

ハリーが克巳の頬の傷に絆創膏を付ける。

「……………ハリー……………」

「お、お前が怪我すんのはいい気分がしねえんだよ！ それやっからさっさと傷なおせよな！」

ハリーは赤面させ、そっぽを向きながら言う。

「……………俺が治癒魔法が使えんのを忘れたか？」

「あ。」

「……………それにこんな暇があるならインターミドルの練習でもしろ。」

「え？」

「頑張れよ……………なんせ俺が応援に行つてやるんだからな。」

克巳は起き上がりハリーを撫でる。

「……………あつたりめえだ」

ハリーは満面の笑みで返す。

その後克巳はバイクを押しながら他愛もない話をしながらハリーの家  
にハリーを送っていった。

しかし他愛もない話でもハリーにとっては至福の時であったことを  
克巳は知らない。

永遠（後書き）

最終決戦・・・。

実は最近の夏の仮面ライダーの映画で新仮面ライダーが先駆けて登場しますが、今作にもそれを考えていたりします。

京水「そんなチャレンジ精神・・・、嫌いじゃないわ!」

来るなああああああ!

京水「お待ちなさ〜い!」

ぎゃあああああああ!

## 永遠紹介（前書き）

キャラ・仮面ライダー・デバイス紹介になります。

ちなみにデバイス紹介は雑です。

## 永遠紹介

葵炎 きえん 克巳 かつみ

年齢：16

身長・体重：菅田将暉と同じ

性格：口が悪いが、素直でないだけで内心は優しい

髪型：黒に青のメッシュ

目の色：黒に青いファイヤーモチーフ

魔導師ランク：A

能力：青い炎の魔力変換、驚異的な再生または治癒能力

趣味：オフロードレース、バイク、ロッククライミング、ナイフ、  
軍隊格闘

プロフィール：ミッドチルダ南部、エルセア第9地区にすむ少年。  
軍隊格闘やナイフを使った戦いが得意。

たまたま野外のロッククライミング中にスカルの戦いを目撃、巻き込まれたことでガイアメモリと関わる。その際スカルを襲っていた仮面ライダーエターナルレッドフレアのメモリを触った瞬間、運命を感じとりスカルと協力しドライバーごと強奪、仮面ライダーエターナルブルーフレアとなりガイアメモリ犯罪と関わっていくことになる。



性格上あまり友人がいないため、友人や親しい人間に襲いかかる者は誰だろうが容赦しない。  
ハリー・トライベツカとは幼なじみで好意を抱かれているが気がついていない。他のインターミドル編で登場するキャラ達とも親交がある。

仮面ライダーエターナル：

葵炎克巳がエターナルメモリとロストドライバーにより変身する仮面ライダー。エターナルエッジによる斬撃と体術により戦う。他にも両手足に青い炎を宿して戦うことも可能。  
新能力としてE以外のA to ZのT2ガイアメモリーつをランダムに作り出し使用することが可能。

マキシマムドライブ（必殺技）：

・エターナルレクイエム：  
オリジナルと違い純正メモリ以外にしか効果がないものの一時的に一定範囲のドーパントの動きを制限する。また右足にマキシマムのエネルギーを込めた飛び回し蹴りによりメモリブレイクも可能。

・ブラッディヘルブレイド：  
青い炎をエターナルエッジの刃に纏わせての斬撃。

・ネバーエンディングヘル：  
青い炎を巨大な球体にして飛ばす。

ガイアメモリ：

・エターナルメモリ：  
克巳が所有する「永遠の記憶」が内包されたガイアメモリ。オリジナルと違い、メモリの無効化能力が消失したものの、その分出力が増している。

ツール：

ロストドライバー：

見た目はオリジナルと同様。

エターナルエッジ：

エターナルが使用するナイフ型武器。  
刀身から斬撃波を放つことが可能。

エターナルローブ：

エターナルが纏うマント。新たに飛行能力が追加。

デバイス：

ネクロオーバー（ナイフ型）：

彼が使用するコンバットナイフ型のデバイス。普段は林檎型のペンダント。大気中の元素と触れ合うことによる静電気から電力を作りだし、内部のコンデンサーにより魔力に変換し戦闘を手助けする。  
バリアジャケットは大堂克巳と同じ服装。

**最終決戦 1・喪失（前書き）**

ラストバトルに入ります。

若干展開が甘いかもしれません。

## 最終決戦 1・喪失

「~~~~」

季節は夏。

現在翔太郎とスバルは夏休みに入っているところである。

「のどかなですね~~~~」

「.....」

「何ですか翔太郎さん？ 休みなんだからのんびりと..... 出るならベッドの上で二人で.....」

「.....そんなことよりスバル.....」

「はい？」

「さつさと手を動かせ！」

夏休みには入ったものの、スバルの仕事がたまっており翔太郎まで手伝わされる羽目になっている。

「え~~~~。ちょっとは息抜きを.....」

「お前は息抜きし過ぎだ！」

「は~~~~い。」

渋々スバルは手を動かす。

「でもこうやって一緒にやっていると夫婦みたいですね。」

「気が早くねえか？」

「私はいつでもOKですよ？」

「へいへい。」

翔太郎は軽くスバルをあしらう。

「ぶ〜」。

「^^^^。。。」

頬を膨らませるスバルを翔太郎は笑う。

「。。。。。」

「。。。。。」

そして互いを見つめ合う。

スバルがゆっくりと唇を近付けていく。

するとスバルの唇が翔太郎の唇と重なりかけた時……。

スタックフォンが鳴り出す。

「うお！」

「きゃ！」

二人は驚きながらも翔太郎はスタックフォンを開く。

「！」

「翔太郎さん……。」

「悪いな。ちよつと出てくる。」

「……翔太郎さん！」

「？」

「……気をつけて下さいね。」

「……ああ。」

翔太郎はそのまま家を出ていった。

そしてハードボイルダーで去って行く翔太郎をスバルは見送る。

「……気をつけて。」

しかしそんなスバルに屋根から一人の影が忍び寄っていた。

「はっ！」

ドーパント出現の知らせを受けて翔太郎よりいち早く駆けつけていたサイクロンはルナにメモリチェンジしてアメイジングゲームでー掃する。

しかし何処から群がってくるのか次々とドーパントが現れてくる。

一体一体は大した戦闘能力はないものの数が数でルナの体力をそぎ落としていく。

「はぁ……、はぁ……。きりがないな。……なら！」

ルナはルナメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『ルナ・マキシマムドライブ！』

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そして右手を伸ばしドーパント達を巻き付けて自分に向けて投げ飛ばす。

「ルナ……フantomウイップ！」

そして光る左手で次々と飛んでくるドーパント達に手刀を放ってゆき、ドーパントは爆発していく。

しかしドーパント達は何処から出てくるのかぞろぞろと溢れてくる。

その時。

ハードボイルダーでジョーカーが駆けつける。

「来人お！ 大丈夫か？」

そしてジョーカーはドーパント達を叩き伏せながらルナに駆け寄る。

「師匠……こいつら……」

「ったく。どつから沸いて出てくるんだこいつら？」

「わかりません。何だかどつかからドーパントの工場があるみたい  
に……」

「んな馬鹿げた話が……！」

ジョーカーは何かを閃く。

するとドーパント達がジョーカー達に遅いかかってくる。

「ちっ。やるぞ来人！」

「はい！」

『サイクロン！』

ルナはサイクロンメモリをスロットし仮面ライダーサイクロンにメモリチェンジする。



そして互いにメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『ジョーカー……』

『サイクロン……』

『マキシマムドライブ!』

「はあああああ……」

二人は気合いを込めて……。

「はっ!」

跳躍。

「ライダー……ツインマキシマム!」

二人揃って目の前のドーパント達にライダーキックとライダートルネードを放ち、ドーパント達を灰にする。

『トリガー!』

そして着地したジョーカーはトリガーメモリをスロットし仮面ライダートリガーにメモリチェンジし……。

『バット!』

『トリガー・マキシマムドライブ!』

マグナムにバットショットを合体させ、トリガーメモリをスロットし顔を下に向けて精神統一する。

そして……。

「……………！　そこだ！　トリガー……バットシューティング  
」

一点に向けてトリガーマグナムを発射する。

すると。

「ぐおおおおおおお！」

トリガーマグナムの軌道から火花が散り何者かが吹き飛び、足場に  
砕かれたメモリが落ちる。

正体は体に歯車のようなものがあちこちで回るファクトリードールパ  
ントである。

「これって……………」

サイクロンは事を理解しきれていない。

「トリガーは遠距離に特化した能力と五感を高める能力がある。そ  
れで透明だったヤツを見つけたんだ。」

「透明？」

「インビジブルメモリだ。」

「！」

「おそらくやつはファクトリー……。工場の生産能力で大量のドーパントを作り出していたんだ。それにインビジブルメモリを組み合わせれば……。」

「姿を隠して場所を知られずに大量のドーパントで敵を潰せる……。」

「ああ……。だがもうインビジブルはない。姿さえ表に出しちまえば俺らのもんだ。さあ……。お前の罪を数えろ！」

『ジョーカー！』

トリガーはジョーカーメモリを持った左手でファクトリーに指を向け、ジョーカーにメモリチェンジする。

そして手を掲げてやってきたエクストリームメモリをスロットし展開。

『エクストリーム！』

「行けえ！」

ファクトリーは自身の目の前にドーパント達を展開しエクストリーム達に接近させる。

しかしジョーカーエクストリームは冷静にエクストリームメモリを閉じ展開する。

『エクストリーム・マキシマムドライブ！』

「はっ！」

そして跳躍。

『デュアルエクストリーム！』

エクストリームの蹴りによりドーパント達は爆発しファクトリーと  
のルートを晒しにする。

そして……。

「今だ！ 来人！」

『ファング・マキシマムドライブ！』

立ち上がるエクストリームの肩を踏み、右足にマキシマムセイバー  
を装備したファングジョーカーが跳躍し……。

「ファングストライザー！」

ファングストライザーをファクトリーに叩き込む。

「なああああああ！」

ファクトリーは爆発し犯人の男が現れる。

NEVERらしく徐々に身体が消滅していく。

しかし犯人は立ち上がる。

「馬鹿め！俺はただの時間稼ぎで困だ。」

「何！」

エクストリームとファングが構える。

「そう……。」

犯人はエクストリームを指差す。

「お前と我々の巫子、スバル・ナカジマを離すためのな。」

「！」

「スバルさんが!？」

「今に……思い知らされる。」

犯人は身体が消滅してゆき……。

「待て！」

エクストリームが駆け出すも犯人は勝ち誇った顔で消えていった。

「……………やつらは……………はなっからスバルを……………」

「でも何でスバルさんを……………」

「わからねえ……………わかんのはスバルが危険に晒されてるってことだけだ！」

「はい！」

二人が駆け出した時、青い光弾が二人を襲った。

「がああああああああ！」

「うわあああああああ！」

不意打ちな上に当たり所が悪く、二人は変身が溶けた上に傷つきながら倒れる。

「ぐ……が……。」

「が……ぐ……。」

二人は痛みを悶える。

すると。

「ふふふ……。」

遠くから白服の男が歩いてやって来る。

その腕には……。

「スバル！」

気絶したスバルが。

そして翔太郎はその白服の男を睨む。

「てめえは……加頭順！」

怒りで驚きが吹っ飛んだ翔太郎はスバルを持つその男を知っていた。かつてミュージアムが成そうとしたガイアインパクトを繋げる為にフィリップの姉、園咲若菜をいけにえにしようとした財団Xの一員にしてユートピアドーパントであった男……。

しかし加頭は最後の力を振り絞ったフィリップと共に変身したWによって倒したため同一人物であるわけがなかった。

「この世界の……、加頭順か!？」

「よくご存知で……。別の世界の私はわかりませんが……。はじめまして、左翔太郎。右風来人君、ファングはどうですか？」

「まさかあなたがファングを……。」

「喜んで頂けたようで……。」

来人は加頭を睨む。

「てめえ……。なんでスバルを……。」

「彼女は大切な巫子であり私の悲願を成すために大切なんです。」

「巫子……だと!？」

「はい……。」

「とりあえずろくなことじゃなさそうだ。邪魔させてもらっせー!」

二人はガイアメモリを手にしようとするが……。

「させません。」

加頭もガイアメモリを手にする。

『テラーユートピア!』

「テラーにユートピアって……。」

「地球の記憶が二つ……、しかもよりによってテラーとユートピアかよ。」

加頭はテラーユートピアメモリを腰のメモリドライバーにスロットすると青い波動とともにテラーのような青い仮面をつけたテラーユートピアドーパントに変わった。

そして光弾を翔太郎と来人に放つ。

「がああああああ!」

「うわあああああ!」

二人は爆発に包まれ……。

爆煙が消えると翔太郎と来人は傷つき倒れていた。



「もうすぐです・・・、もうすぐ私の悲願が叶います。」

加頭はスバルを持ったままその場を去っていく。

その後二人は通行人によって病院に搬送された。

重症とは行かないが全快と言うにも程遠い状態の二人は厳しい状況であった。

「・・・・・・・・くっそが。」

「・・・・・・・・はあ~~~~。」

病室で悔しがる翔太郎と来人。

二人ともあちこちに包帯が巻かれている。

そんな二人をなのはやフェイト、ティアナやちびっこ達が心配そうに見る。

「あ・・・・・・・・。」

「大丈夫なんですか来人さん・・・・・・・・。」

。 ヴィヴィオとアインハルトは来人を心配するように側に寄るも・・・。

「……………」

当の来人はうなだれる。

「この怪我じゃ……、それにまだあつちの戦力もわからないのに・  
」

「……………」

すると翔太郎は何も喋らずにベッドから起きる。

「！ 師匠……………」

「奪われたもんは奪い返す……………。それだけだ。」

「……………」

「それにやつはろくでもねえことを考えてる。よりもよってスバルを使つてだ。……んなこと……俺がさせつかよ。」

「……………でも居場所が……………」

「念には念をと思つてな……………」

翔太郎はスタックフォンを開き、画面を見せる。

そこには地形にスバルと書かれた矢印が映っていた。

「……………まさか。」

「ああ。」

実はさつき翔太郎はテラーユートピアに攻撃させる直前にスバルにスパイダーシヨックの発信機を打ち込んでいた。

「これならあいつが動く前に叩ける。」

「……………師匠、……………僕は……………」

「お前は……………」

翔太郎が言いかけたとき……………。

「きゃああああ！」

「！！！！」

外からの悲鳴を聞き、身体を窓から出すとそこには大量のドーパントが暴れていた。

「……………来人。お前に頼みたいこと……………」

「大丈夫です師匠。」

来人は包帯を取る。

「師匠の分までこの街は……………僕が守ります。」

来人は拳を突き出す。

「……………任したぜ。」

翔太郎も拳を突き出し来人の拳にぶつける。  
すると。

「「！」「」

「私達も戦つます。」

「大切なものを守りたいから。」

「スバルをお願いします翔太郎さん。」

なのはとフェイト、ティアナもぎこちなく拳を合わせる。

「なのはさん……、フェイトさん……、ティアナ……。」

「……………ありがとうございます！」

翔太郎と来人は三人に礼をいった。

「あの…………。」

「私たちにも何か…………。」

ヴィヴィオとインハルトも歩み寄ってくるが…………。

「みんなは避難してて。」

「危険だから。」

なのはとフェイトが答える。

「でも……。」

ヴィヴィオとアインハルトが反対するも……。

「……大丈夫だよ。」

「……。」

「皆、……ヴィヴィオもアインハルトもなのはさんもフェイトさんもティアナさんも皆、僕が守るから。……だから二人は避難して欲しい。……僕を……信じてくれるなら。」

「……。」

「大丈夫。ちゃんとインターミドル応援に行くって約束したし……約束は……絶対に守るから。」

「……頑張ってください。」

「！アインハルトさん……。」

「……来人は仮面ライダーなんです。……だから信じて待ちましよう。」

「……約束ですからね。」

「うん。」

アインハルトとヴィヴィオ、リオやコロナの見送りのもと翔太郎達は病室を駆け出していった。

「……」

大量のドーパントにおののく三人に対し……。

「ぞろぞろと出やがって……。」

「全員倒しますよ。僕達が……。」

『ジョーカー！』

『サイクロン！』

翔太郎と来人はメモリをスロットし……。

「「変身！」」

『ジョーカー！』

『サイクロン！』

互いに変身しジョーカーとサイクロンが立つ。

「頼んだぜ来人！」

「はい！」

ジョーカーはハードボイルダーでドーパントの中を駆け抜けていった。

「任された以上・・・、戦い抜く・・・そして守り抜く！」

「うん。」

サイクロンとなのは達はドーパント達に突入していった。

街外れの岩場。

そこにテラーユートピアドーパントは立っていた。

すると爆音が響き渡り、そこにはジョーカーが立っていた。

「待っていましたよ。仮面ライダー。」

「その余裕・・・、今ぶっ壊してやる！」

ジョーカーはテラーユートピアに向かって駆け出して行った。

## 最終決戦1・喪失（後書き）

### ドーパント紹介

#### ・テラーユートピアドーパント

「恐怖の記憶」と「理想境の記憶」を内包したテラーユートピアメモリにより変身したドーパント。両ドーパントの力を使用できる。テラードーパントの精神波攻撃がない分のパワーをテラードラゴンや本来の戦闘力に回しているため、戦闘能力は極めて高い。

・ファクトリードーパント「工場の記憶」により変身したドーパント。データをもとに今までのドーパントをほぼ無限に生成することが可能だが、ファクトリー自身の戦闘能力はあまりなく、生成したドーパントの戦闘能力も低めである。

#### ・バクドーパント

「バクの記憶」により変身したドーパント。ナイトメアに似てはいるがバクは直接夢の中に入り、その夢を食べることで人々を眠り病にする。ただし夢の中に入るためその中のダメージや痕跡は現実世界にも響く。



## 最終決戦2・衝撃（前書き）

ラストバトル第二弾です。

ちなみに後半の展開は基本的な部分は初めての投稿から予定にありました。

## 最終決戦2・衝撃

「おらああ！」

ジョーカーは回し蹴りやラッシュを叩き込むがテラーユートピアは全て捌ききり、隙についてはジョーカーに的確かつ正確に攻撃を加えていく。

「くっ！ やろがあ！」

『メタル！』

ジョーカーはメモリチェンジ、メタルとなってメタルシャフトをテラーユートピアに叩きこむ。

「くっ！」

テラーユートピアは吹き飛ばす。

「よし！ おりゃあ！」

メタルは突きをテラーユートピアに叩きこむが……。

「なんてね。」

「何！」

テラーユートピアはシャフトの先端を掴みメタルを振り回す。

「うおおおおおおお……」

「食らいなさい。」

そしてテラーユートピアはそのままメタルを岩場に叩き付ける。

「がああああ！」

遠心力が加わった影響により勢いはかなりついていた。

「はっ！」

「ぐっ！」

そのままテラーユートピアはメタルを下ろしストレートを続けて叩き込んでいき投げ飛ばす。

「がああああああ！」

メタルは地面を転がる。

「てんめえ……」

『トリガー！』

トリガーはマグナムをテラーユートピアに乱射する。

するとテラーユートピアは理想郷の杖による重力で弾丸を弾いていく。

「何！」

「では私からのプレゼントです。」

テラーユートピアは紫の光弾を放つ。

「があああああああ！」

爆発をジョーカーが襲う。

「せいっ！」

なのは達が遠距離魔法で戦う中、サイクロンは回し蹴りを放つ。

しかしファクトリー時とは違い一体一体がそれなりの能力があったため、数から見れば明らかに不利であった。

「はぁ……、はぁ……。なら……。」「

『ヒートー！』

ヒートは拳でドーパント達を叩き伏せていく。

「でも、はぁ……。はぁ……。はぁ……。はぁ……。」「

ヒートは肩で息をする。



爆発が四人を襲った。

『エクストリーム!』

「うおおおおお!」

エクストリームはスペリオルソードを手にテラーユートピアに駆け出す。

「エクストリーム……。少しは楽しめそうですね。」

テラーユートピアも杖を手に立ち回る。

「はあああああ!」

エクストリームはソードを振るうもテラーユートピアは杖で受け止め隙についてストレートを放とうとするも、エクストリームはビツカーでそれを受け止める。  
そのまま互いに一撃を与え続けられないまま受け止め合いや避け合いを続ける。

「いいですねえええ。ぞくぞくします。」

「気持ちの……、悪りいやつだ!」

二人は間合いを取り合う。

「……はあ!」

テラーユートピアが先に動く。

(言動、戦闘スタイル、行動パターンから……。)

エクストリームは考えるがその際にテラーユートピアの杖が襲いかかるが……。

「！そこだ！」

振られる杖をソードの納刀で挟み込み止める。

「何！」

「おらぁ！」

エクストリームは杖ごとビッカーを捨て、そのままラッシュを叩き込み……。

「ぐっ！」

そのまま突き飛ばす。

「いくら力があるのが先を読まれたら意味ねえぜ！」

エクストリームはテラーユートピアに向けて走り出す。

するど。

「よろしいので？」

「何!」

テラーユートピアの余裕振りにエクストリームは足を止める。

「こちらを見れば言ってる意味がわかりますよ。」

するとテラーユートピアはモニターを映す。

「!」

そこに映っていたのは……。

「つ……、が……、あ……。」

バイオレンスに首を掴まれ上げられている来人であった。

「……う……。」

「……く……。」

「……あ、つ……。」

他の三人も地面に倒れている。

そのままバイオレンスは来人を地面に叩き落とし、踏みつける。

「あ……、がああああ!」



「……来人……君……。」

唯一氣を保っているのはが手を伸ばすも届くわけがなくホッパーが蹴り飛ばされる。

「きゃあ！」

「な……のは……さん……、がああああ！」

更にアームズが踏みつけ腕のマシンガンを向ける。

「……くっ……ぞ。」

来人は悔しさと痛みで歯をくいしばった。

776

「……てんめえ……。」

モニターを見てエクストリームはテラーユートピアを睨むように見る。

「さあて……、どうします？ 彼らを殺すも生かすもあなたの態度次第ですよ？」

「……何が望みだ！？」

「……変身を解いて下さい。」

「…………ちっ。」

エクストリームは変身を解く。

「…………利口です。」

「…………。」

「…………では！」

「！」

テラーユートピアは赤い炎を纏ったストレートを翔太郎の腹部に放つ。

「…………。」

そのまま翔太郎は後ろの岩場に叩きつけられ、ロストドライバーが飛ばされる。

「…………、てめ…………。」

翔太郎は腹部を抑えながら立ち上がるも足はふらついている。

「…………これであなたは変身できない。」

「…………っ。」

「…………では冥土のみあげにいいものを見せてあげます。」

テラーユートピアが指を鳴らした途端地面が割れ、巨大な塔が現れる。

その塔の十字架には……。

「！ スバル！」

頭に器具がつけられたスバルが礫になっていた。

すると翔太郎の声に反応したのか……。

「……ん、翔太郎……さん……。」

スバルが目を覚ます。

「これって……。」

「スバル！ 今助けてやるから待ってる！」

「人じゃないのに？」

「「！」「」

ふと言ったテラーユートピアの言葉に二人は啞然となる。

しかしスバルの表情には何かの秘密をばらされることに対する恐怖が現れていた。

「……どういうことだ？」

「おや？ 知らなかったようですな。」

「……………辞めて。」

「彼女は人ではなく……………」

「辞めて！ 言わないで！ 辞めてよ！」

スバルの悲痛な叫びを無視し……………。

「身体を機械で改造された戦闘機人なんです。」

「……………何……………」

翔太郎が啞然とし……………。

「……………（ガクッ）」

スバルは脱力し、頬から涙が流れた。

「……………。」

ミッドチルダ南部で克巳は妙な感覚を感じた

「どっしたんだ克巳？」

「……………ハリー……………」

「？」

「危険が近い……。気をつける。」

「危険？」

克巳の隣のハリーは頭を傾げる。

(……。嵐か……。いつそ本物の嵐の方が楽だっただろうに)

克巳が内心で思っている時、同じ南部の別所では……。

「……。翔太郎、守りぬけ……。大切なものを……。」

莊吉が暗雲立ち込める空に向かって離れた弟子の健闘を祈った。

「……。これは……。」

風車が回る街で一人の少年が突如目の前に現れたオーロラを見つめる。

「翔太郎……。君が戦っているのかい？」

するとその少年に赤いライダーズジャケットを着た青年が赤いバイクに乗って現れた。

「フィリップ……。これは一体……。」

「別の世界で彼が、左翔太郎が戦っている……。」

「……左が……。」

「ああ。でも敵は強大だ。僕たちの力がある……。いけるかい？」

「……。俺に質問をするな。仲間のためだ。共に戦おう。」

その答えを聞き少年は安心したように笑う。

その手にはつばに切れ目の入った白いソフト帽が握られていた。

そして二人はオーロラの向こうへと飛び込んでいった。

「映司君、それそこにおいといてくれる？」

「あ、はい。」

とある店内で女性に命令、というよりはお願いを聞き入れ一人の青年が荷物を指定された所に置く。

すると……。

「え？ うおっ！」

青年の目の前に突如オーロラが現れる。

「お……。なんだろうこれ……。。」

青年は興味津々にオーロラの中へ入って行ってしまった。

「映司くん。次はこれを……あれ？」

先ほどの女性が現れるもそこには青年もオーロラも消えていた。

真っ黒な空間。

辺りには細かい光とクレーターしか見当たらない。

なにせここは宇宙空間の月面だからである。

そんな世界に一つの人影とその人影の側には白いオフロードバイク。

「やっぱり地球は綺麗だなあ……。」

その白い戦士は目の前に広大に広がっている我が星、地球を眺める。  
するじ。

「！ あん？」

横にいきなりオーロラが現れる。

「なんだこりゃあ……。」

その戦士は何かを悟ったかのようにバイクに跨りオーロラに身体を

向ける。

すると。

「弦太郎！」

月面走行車に乗った宇宙服の少年が現れた。

「どこにいく気だ！」

「……わりいな賢吾。仮面ライダーの野暮用だ。ちょっとばつかし行ってくるぜ！」

「……ああ、そうか。行ってこい。ただしちゃんと帰ってこいよ！」

「おうよー！」

そのままその戦士はバイクに乗ってそのオーロラに突入していった。



### 最終決戦3・復活（前書き）

やたらと長くなってしまいました。

頑張りましたので喜んで頂けたら嬉しいです。

話が変わりますが、最終決戦後、いつの間にか総合評価が500、感想数が200を突破していたので何か特別編を二つ考えています。

何かアイデアをおおおお！

## 最終決戦3・復活

「戦闘・・・機人・・・、スバルが・・・。」

岩場で戦い合うテラーユートピアの発言に翔太郎は言葉を失い・・・。

「・・・・・・・・。」

塔の十字架に縛られたスバルは力無く下を向いていた。

「知らなかったようですね。しかも彼女だけでなく彼女の姉妹は皆ね・・・・・・・・。」

「あいつらも戦闘・・・、機人？」

「はい。・・・あなたは騙されていたんですよ。なんせ人間でないと知られたら嫌われる・・・、虐げられると思えば真実を語らなかつた彼女達にね。」

「・・・・・・・・本当か！ スバルう！」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・。」

スバルは涙ながらに答える。

「・・・・・・・・。」

翔太郎はそんなスバルに言葉を失う。

「・・・例え泣こうがあなたは戦闘機人・・・。しかしそのおかげで私の計画が成し遂げられます。」

「何！ どういうことだ！」

「彼女は初期に作られたタイプ0・・・。それゆえにその後の新型にはないプログラムが搭載されていたんです。しかしそのプログラムは私のシステムと組み合わせることで発動出来ることを知ったんです。今までの人間の負の感情をドーパントに変えて、人々を滅ぼす「星の終焉」をね。」

「・・・星の・・・終焉・・・。」

「・・・そしてそれは今叶われる・・・。」

テラーユートピアは指を鳴らした。

すると。

「い・・・、あ・・・、あああああああ!!」

磔になっているスバルが苦しみます。

「スバル！」

翔太郎が動こうとするも・・・。

「じっとしてして下さい。今から楽しいショーが始まるんすから。」

「がつ！」

テラーユートピアに突き飛ばされる。

「返し・・・やがれ！ スバルを！」

翔太郎は立ち上がりテラーユートピアに殴りかかるも軽くあしらわれる。

「おかしなことを言いますねあなたは。彼女は・・・、いいえ「あれ」は人ではない。機械で改造された化物なのに。」

「化物・・・、なんかじゃねえ！」

再び翔太郎は殴りかかるも裏拳ではねのけられる。

「あいつはあいつだ。人並みに泣くし、怒るし、笑う。・・・でもあいつを泣かせたりしない。・・・俺は決めたんだ！」

再度翔太郎は立ち上がりテラーユートピアに突っ込んでいった。

「くっ、・・・あつ・・・。」

今だにドーパント達に踏み台にされている来人。

「僕は・・・、負けられない・・・。この街を守りたいから・・・、がつ！」

来人は力を振り絞り起き上がるうとするもより強い力で押し付けられる。

すると。

「諦めたまえ。君は無力な子供だ。といつても殺すけどね。」

テラードーパントが来人に歩み寄り、手の平に光弾を生成する。

「君は無力だよ。誰も守れない。誰も守れずに大切な人が皆目の前で死んでいくんだ。」

「させない。……絶対。」

「口は達者だね。……ではこうしてあげよう。」

「！」

テラーは地面にエネルギーを貯める。

そしてそこから二人の少女が現れ……。

「！　なんで……。」

来人の顔色が変わる。

現れたのは……。

「ヴィヴィオ……、アインハルト……。」

「来人……。」

「……さん……。」

彼の友達、ヴィヴィオとアインハルトが紫のエネルギーにより縛られた姿だった。

「分かりますか？ 私が一気に手を握ればあの二人は……。」

「！ 辞めろおお！」

テラーが手を一気に握ろうとしたとき……。

「何！」

赤いバイクがテラーを突き飛ばす。

「くっ……お前は一体……。」

バイクに乗っていた男性はヘルメットを脱ぎ、素顔をさらす。

「俺に質問をするな。」

赤いライダーズジャケットを着た男性が現れた。

「何だ貴様はああ！」

テラーがドーパントをけしかけると……。

『エンジン・マキシマムドライブ！』

その男性はエンジンメモリを取り出しビートルフォンにスロットし投げる。

ライブモードのビートルフォンは高熱を纏い、ドーパント達をはねのける。

そのままビートルフォンは来人を踏みつけていたドーパントも突き飛ばす。

「大丈夫か？」

男性はすぐさま来人に寄り、起こす。

「貴方は一体……。」

「照井竜……、仮面ライダーアクセルと言えば分かるか？」

「！ 貴方がアクセル……。」

来人は翔太郎からアクセルやWについて聞いていた。

「それに俺だけじゃない。お前達と共に戦ったためにやって来た仲間  
は。」

「仲間？」

「ああ。」

「うおおおおおおお！」

翔太郎は生身のままテラーユートピアに突っ込み続けるもテラーユートピアは一撃を叩き込み吹き飛ばす。

「はあ．．．、はあ．．．、はあ．．．。」

「翔太郎．．．さん．．．。」

苦しみなながらも翔太郎を呼ぶスバル。

「わかりません。なぜ貴方はそこまであれに必死になるのです？あんな機械人形に．．．。」

「．．．スバルは．．．、機械人形じゃなんかじゃねえ！」

「何。」

「．．．翔太郎さん．．．。」

「あいつは人間じゃねえかもしれねえ．．．機械かもしれねえ．．．でもどっちだろうが俺には関係ねえ。あいつがスバル・ナカジマ、．．．俺の、．．．左翔太郎が愛する女だ！」

「．．．翔太郎さん．．．。」

「馬鹿な．．．。機械なんかそんな感情を．．．。」

「愛する人の笑顔のためなら、人々の笑顔のためなら身体を．．．、



魂をかけて戦う……。それが……。」

翔太郎が言いかけた時……。

「仮面ライダー、……。だろ？」

「……！」

翔太郎以外は聞き慣れない声に、翔太郎は聞き慣れ過ぎながらももう聞けないであろう声に啞然となりながらも声の方を向いた。

そこにいたのは……。

「フィリップ……。」

「久しぶりだね、……。翔太郎。」

翔太郎の相棒、フィリップが右手で莊吉の形見の帽子を回しながら立っていた。

「お前……。なんで……。」

「理屈なんてどうでもいい。相棒を助けに行くのは当然だろ？」

「……。」

「翔太郎……。久々に聞くよ。……悪魔と相乗りする勇氣、……あるかな？」

フィリップは帽子を差し出しながら翔太郎に聞く。

「……フィリップ……。」

「どうだい？」

すると翔太郎は笑いながら帽子を受け取り被ると……。

「……久々に半分力貸せよ……、相棒。」

答えを返す。

すると二人は何も言わずに右にフィリップ、左に翔太郎が立った状態でテラーユートピアに向かい立つ。

「貴様は一体……。」

テラーユートピアが殺意をむき出しに聞く。

「僕は……、いや……。」

「俺達は……。」

「二人で一人の……、仮面ライダーだ！」

ミッドチルダ首都・クラナガン。

「来人、いけるか？」

「はい！」

二人はドーパント達に向かい立ち、照井はAと描かれた赤いメモリを、来人はフアングメモリを手にする。

『アクセル！』

『フアング！』

「変・・・変身！・・・身！」

照井はアクセルメモリをアクセルドライバーにスロットし右のパワースロットを全開に捻り、来人はフアングメモリをスロットし展開する。

『アクセル！』

『フアング・ジョーカー！』

照井の正面にピストンパーツのようなエフェクトと数本の槍、照井の顔に回路のような模様が現れる。

そしてそのエフェクトと槍が消えた時、照井の身体が一瞬で変化する。

そして来人も水色と紫の風のエフェクトを纏い、身体を変化させる。

「・・・変わった・・・。」

「でも姿が一切・・・。」

「違う・・・。」

なのは達が唾然とする中……。

「「ああ……、」

「振りきるぜ！」

「お前達の罪を数えろ！」

赤い戦士、仮面ライダーアクセルはパワースロットルを捻らせながら副眼フェイスフラッシャーを光らせ、仮面ライダーファングジョーカーはドーパント達に右指を向けた。

ミッドチルダ南部。

ここだけでなく各地に何の前振れもなく現れたドーパント達は局員達の妨害をもろともせず迎撃に迎え討ち、局員達をねじふせて人間の排除に動いていた。

そしてここ南部でも……。

「くっ……。」

市民が皆避難した街の局員達が倒れている場所にドーパント達がゆつくりと近寄ってくる。

「ここまでか……。」

他も諦めの表情を浮かべるなか、局員の一人が今の気持ちを言葉に表す。

その時。

斬撃波がドーパント達を襲う。

「なんだ？」

「何が起きたんだ？」

局員達が急な事に驚く。

すると。

「！」

局員の一人が歩み寄る少年を見つける。

「……………つたく荘吉の野郎……。人手不足とか言っていないく  
なりやがって。今度あつたら覚えてやがれ。」

右手にエターナルエッジを持った克巳が歩いて来る。

「……………危険だ君！ 早く避難を……………」

「それはこっちの台詞だ。邪魔になるから退いてろ。」

「……………。」

その妙に自信の溢れた言葉に局員達は声を失う。

そして克巳はドライバーを装着し、ドーパント達の行く手に立つ。

「……てめえら……、どうやら相当俺に遊んでもらいたいみたいだな。」

『エターナル!』

克巳はエターナルメモリを手に取り装填しドライバーから青い波動が発生する。

「……ならお望み通りに遊んでやろう。……変身!」

『エターナル!』

そのままドライバーを展開すると克巳の身体を白い装甲が覆い、黒いマントを纏った仮面ライダーへと変身を遂げた。

「……仮面……ライダー?」

局員達はその姿を見てどよめきあつ。

「……もしあいつらを倒すのが仮面ライダーだとしたら名乗ろう。俺は……仮面ライダー……、エターナル!」

「……」

局員達が唾然としながらもエターナルはサムズアップをドーパント達に向け……。

「さあ、……地獄を楽しみな！」

反転させサムズダウンをドーパント達に向けた。

ミッドチルダ東部。

街から少し離れた所に現れたドーパント達はゆっくりと街に近づいていく。

その時、ドーパント達から火花が散る。

ドーパント達は攻撃を与えられた方向を向くとそこには……。

「……それ以上は行かせん。」

ライブモードのスタッグフォンを回収した荘吉がいた。

「……お前達はここで俺が一匹残さず倒す。弟子が頑張ってるんだ。……俺も頑張らなければあいつに会わす顔がないからな。」

『スカル！』

荘吉は腰にドライバーを装着し帽子を外しスカルメモリを装填する。

「変身。」

ドライバーを展開させると荘吉の身体を風が覆い、荘吉の肉体を変

化させ帽子を被る。

そして仮面ライダースカルはドーパントに右指を向ける。

「さあ……、お前の罪を……数える。」

ミッドチルダ西部。

「……………あれ？　ここって……………！」

オーロラの中へと飛び込んでいった映司は気がつくとも目の前にはドーパント達に襲われている人々を見つける。

「何処だここ？　それにあれはヤミーじゃないし……………」

映司は少し迷うも……………。

「とりあえずやるしかないでしょう。今俺にしか出来ないことだしね。」

青年、火野映司は腰に三つの円形のスロットがあるベルトを腰に装着し、黒いホルダーから赤、黄色、緑のメダルを取る。

そして右に赤、左に緑のメダルをスロットし最後に真ん中に黄色のメダルをスロットし傾け、走りながら右腰のスキャナーでベルトを読み込ませる。

「変身！」



『タカ！トラ！バッタ！ タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ』

映司の身体を五色のメダル型のエフェクトが周り、胸の前で赤い夕  
カ、黄色いトラ・緑のバッタが円形になり映司に合体し映司は上下  
三色の戦士、仮面ライダーオーズタブコンボへと変身する。

そして手に大型剣メダジャリバーを持ち……。

「はっ！」

ドーパント達に向かって走る足を早めた。

ミッドチルダ北部。

「なんだここ？」

突如街に現れた短ラン・リーゼントの少年。

少年は破壊された街を見る。

「ひでえな……。」

するど。

「！」

「怖い……、怖いよ……。」

破壊された街で泣く少女が一人。

「辞めて！ 辞めて下さい！」

向かい側で瓦礫に足を挟まれた母親らしき女性が叫ぶも、その少女にドーパントが車を持って歩み寄る。

そしてその車を少女に向けて投げる。

「！ やらせるかあ！」

少年は少女に向けて走り出す。

走りながら腰にフォーゼドライバーを装着し四つのスイッチをスロットしながら、そのスイッチを入力していく。

『3・・・2・・・、1・・・。』

「変身！」

そして右のレバーを手前に押し出す。

それと同時に少年、如月弦太郎は少女の元に行き投げられた車に隠れ、爆発が起きる

「・・・・・・・・そんな・・・。」

少女の母親らしき女性はぺたんと座り込む。

そしてドーパント達は次に母親にゆっくりと近寄る。

しかしその直後。

「うおりゃあああああ!」

地上から左足にドリルを装備した純白の戦士がドリルでドーパントを攻撃しながら現れた。

その懐に少女が抱かれていた。

「お母さん!」

「よかった! 無事で!」

母親はその少女を抱きしめる。

「よかったな。お母さんとまた会えて。」

「うん! ありがとう!」

ロケット状のマスクの純白の戦士は女の子を撫でる。

「あの子の名前は……。」

「ああ、俺っすか? 俺は……。」

母親に訪ねられながらも戦士はドーパント達に身体を向ける。

そして背中を向けた親子に言い放つ。

「俺はフォーゼ……、仮面ライダーフォーゼ！ ……さあ……」

その戦士、仮面ライダーフォーゼは目の前のドーパント達に右拳を構え……。

「タイムンはらせてもらおうぜ！」

駆け出した。

岩場で向かい合う三人。

「さあ、行くよ翔太郎！」

「ああ。行くぜ……、フィリップ！」

フィリップは左手にサイクロンメモリを、翔太郎は右手にジョーカーメモリを持つ。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

そして二人の声が重なる。

「変身！」

フィリップがダブルドライバーの右スロットにサイクロンメモリを

スロットするとサイクロンメモリは翔太郎のドライバーに転送される。

翔太郎はサイクロンメモリをセットし左スロットにジョーカーメモリをスロットし、両手をクロスさせてドライバーを展開させ両腕を開く。

『サイクロン・ジョーカー!』

フィリップの身体が倒れながら翔太郎の身体の周りに緑と黒の風が現れ、翔太郎の身体を装甲が覆い緑の右半身、黒の左半身の戦士になった。

「……………翔太郎さん……………」

「貴様は何者だ!」

テラーユートピアは殺気を出して聞く。

「俺は……………いや……………俺達は……………」

「二人で一人の仮面ライダー……………」

右の副眼が光る。

「仮面ライダー……………W!」

「仮面ライダー……………」

「W?」

「「さあ・・・」」

スバルとテラーユートピアが唖然とするなか、仮面ライダーWサイクロンジョーカーは左手をスナップさせ・・・。

「「お前の罪を数えろ！」」

テラーユートピアを左手で指差し、言い放った。

## 最終決戦4・決着（前書き）

何とか書けました。

一人一人の戦闘は薄いかもしれませんがご了承を。

特にオーズとフォーゼは程々をお願いします。

## 最終決戦4・決着

「おりゃああ！」

Wサイクロンジョーカーは風を纏った回し蹴りをテラーユートピアに叩き込む。

「なんだこの姿は！？ それにこの能力まで……。」

テラーユートピアは腕で受け止めるが……。

『メタル！』

メタルメモリを左スロットにスロットする。

『サイクロン・メタル！』

「半分変わった……。」

「おらめ！」

テラーユートピアが啞然としながらもWサイクロンメタルはシャフトに風を纏わせて叩き付ける。

「めう！」

『ユートー！』

『ユート・メタル！』



そのままヒートメタルによる高熱のシャフトの突きでテラーユートピアを突き飛ばす。

『ルナ!』

『ルナ・メタル!』

「うおりゃあ!」

隙を突きWルナメタルはアメイジング属性をつけたシャフトでスバルを縛ってした鎖を粉碎する。

「あつ……。」

「しまった!」

落ちていくスバルだが……。

『ジョーカー!』

『ルナ・ジョーカー!』

「よつと!」

Wルナジョーカーは冷静にアメイジングアームを伸ばし、スバルを掴み寄せる。

「……………翔太郎さん、あの……………」

「…………同じことを二度言わせんな。お前はお前だ。それ以外何者でもねえ。俺は何者でもねえお前を好きになつたんだ。いいな。文句は受け付けねえ。」

「……………」

「……………まったく相変わらずハーフボイルドだね君は。」

「んだと……………」

「でもまあ君らしいけどね……………」

「……………。なんかふにおちねえが…………、まあいいか。避難してるスバル。」

「はい。」

スバルは岩影へと逃げる。

そしてテラーユートピアを向く。

「彼女はあの機械の処理装置の代わりをしていた。でも離れた以上もうドーパントは作れない。君の企みはもう成せない！」

「貴様あ、彼女を返しなさい！」

「ざけんな！ こいつはお前のもんなんかじゃねえ。こいつにはもう……………指一本触れさせねえ！」

『ヒート・ジョーカー！』

「うおおおおおお！」

Wビートジョーカーは熱を纏いながらテラーユートピアに突っ込み、熱による打撃を叩きこんでいく。

すると。

「ふっ！ 捕まえましたよ。」

テラーユートピアはビートジョーカーの左手を掴むが……。

『トリガー！』

『ビート・トリガー！』

「おりゃあ！」

「おわあああああ！」

Wビートトリガーは左胸に現れたトリガーマグナムを持ち、ほぼゼロ距離で放ちテラーユートピアを吹き飛ばす。

『サイクロン・トリガー！』

更に休む暇もなく、Wサイクロントリガーは風を纏わせた弾丸をテラーユートピアに放つが……。

「そんな攻撃があああ！」

テラーユートピアは強引に突っ込んでくる。

「ならこいつだ。」

『ルナ・トリガー!』

「はっ!」

ルナトリガーが弾丸を不規則弾道で放つ。

「何処を狙っ……、!」

余裕を見せたテラーユートピアの表情が変わる。

不規則弾道を描いたルナトリガーの弾丸はホームニング弾のようにテラーユートピアを射ぬいていく。

「ぐおおおおおお!」

そのままテラーユートピアは吹き飛ばされる。

「このままいくよ翔太郎。」

「ああ。」

『サイクロン・ジョーカー!』

更にWサイクロンジョーカーの頭上にフィリップを取り込んだエクストリームメモリが現れ、Wはエクストリームメモリを手に取り、ドライバーにスロットし展開する。

『エクストリーム!』

「はああああああ……、はあ!」

「この、このおおおお!」

テラーユートピアはWサイクロンジョーカーエクストリームに駆け出す。

「うおおおおお!」

そしてエクストリームも駆け出し二人の拳がぶつかりあい……。

『エレクトリック!』

「はああああああ!」

「でりゃああああ!」

都市部クラナガンではアクセルのエンジンブレード、ファングのアームセイバーがドーパント達を切り裂く。

するとドーパント達が銃撃体制に入るが……。

「! 照井さん!」

『シヨルダーファング!』

「はっ！」

しゃがんだアクセルの頭上をショルダーセイバーが飛び、ドーパント達を切り裂いていく。

「！そこだ！」

『エンジン・マキシマムドライブ！』

「はっ！」

たじろぐドーパント達にアクセルはエースラッシャーを放ち、ドーパント達を粉碎し爆発が起きる。

そして爆発の中から駆けて来るのは……。

『トリアルル！』

「はっ！」

アクセルトリアルル。

そしてトリアルルはトリアルルメモリのスイッチを押し宙に投げ、残ったドーパント達にひたすらマシンガンスパイクを叩き込み、T字のエフェクトを刻んでいく。

「はああああああ！」

そして背中を向け落ちて来たトリアルルメモリを掴みスイッチを押す。

『トリアル・マキシマムドライブ!』

「9・8秒……。それがお前達の絶望までのタイムだ!」

ドーパント達は爆発する。

しかし空に逃げたドーパント達が……。

『アクセル・アップグレード!』

アクセルは銀色のアイテムを取り出すとアクセルメモリにスロットし、ドライバーにスロットしパワー・スロットルを捻る。

『ブースター!』

アクセルの周囲を黄色い円形のエネルギーが回り、アクセルの身体を黄色に、各所にパーツが装着されフェイスフラッシュャーがシャッターで隠され、アクセルブースターへの変身が終わる。

「はっ!」

ブースターは跳躍と共に飛行……。

「はあ!」

次々とドーパント達をすれ違い様に切り裂き、落ちていくドーパント達の後を続き……。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

「はああああああ！」

黄色い刃を纏ったエンジンブレードでドーパント達をすれ違い様に一刀両断していく。

そして残るは……。

「何だと……、あれだけのドーパントを……。」

テラーがたじろぎ光弾を放つが……。

「でりゃあああああ！」

ファングは投げたショルダーセイバーで光弾を相殺し、アームセイバーできりかかる。

「ぬあああああ！」

「はあ、そりゃあ！」

そのまま蹴り飛ばす。

そしてアクセルとファングは並んでテラーの前に立った。

「決めるぞ！」

「はい！」



「はっ！」

エターナルはロープで攻撃を交わしつつエッジで立て続けにドーパントを切り裂いていく。

「……つたくぞろぞろと……面倒だな。」

エターナルは指を鳴らす。

すると目の前にメモリが生成され、エターナルはメモリを手にする。

『ゾーン！』

そのままそのゾーンメモリを腰のマキシマムスロットにスロットする。

『ゾーン・マキシマムドライブ！』

するとエターナルは姿を消す。

その後……。

「そいつ！」

突如ドーパントの前に現れ青い炎を纏った右拳で殴り飛ばす。

ドーパント達がエターナルに迫るが……。

「遅い。」

すぐさまエターナルは消え、現れたと思いきや次々とドーパントをエッジで切り裂いていく。

「さて……、次は何が来る？」

エターナルが再び指を鳴らすと次にはUと書かれたメモリが現れる。

『ユニコーン！』

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

そのまま腰のマキシマムスロットにスロットし、右手に青い炎を竜巻のように纏う。

「せいっ！」

そのまま走り出し、隙を突きながら右手を勢いよくドーパント達に放ってゆき爆発させていく。

そして前に後ろに跳躍し、間合いを開ける。

そしてエターナルメモリを抜く。

「そろそろ幕を下ろそう。……今刻んでやる。……地獄への片道キップをな。」

「はっ！」

スカルはドーパントに囲まれながらも、ハイキックやストレートなどの格闘術を的確かつ冷静にドーパント達に叩き込んでいく。

すると背後からドーパントが殴りかかるが……。

「ふっ！」

ドーパントの足を思いつきり踏みつけ、痛みに跳ねるドーパントにマグナムを叩きつけゼロ距離でマグナムを放ち吹き飛ばす。

そしてそのままドーパント達に発砲しドーパント達を減らしていく。

「……そろそろ決めるか。」

「せいやあー！」

オースタトバコンボはメダジャリバーでドーパント達を切り裂いていく。

「結構いるなあ……。なら！」

オーズは二つの緑のメダルを取り出し、右と中央のスロットにスロットし、スキヤナーでスキヤンする。

「クワガタ！カマキリ！バッタ！ガッタガタガタキリバガタキリ  
バ」

オーズはガタキリバコンボになり複数の分身を作り出し皆で円状に背中に立ち……。

「ちよつと今回は特別サービスだ。」

ガタキリバ本体はプトティラのメダル、それぞれのガタキリバの分身は一体はタトバ、他は同色の三つのメダルをドライバーにスロットしスキャンさせる。

『プテラ！トリケラ！ティラノ！ プットツティラ〜ノザウル〜ス』

『タカ！トラ！バッタ！ タ・ト・バ、タトバタ・ト・バ』

『ライオン！トラ！チーター！ ラッタラッター、ラトラーター』

『サイ！ゴリラ！ゾウ！ サゴーズ……、サゴーズ』

『タカ！クジャク！コンドル！ タ〜ジャ〜ドル〜』

『シャチ！ウナギ！タコ！ シャシャシャウタ！ シャシャシャウタ』

『コブラ！カメ！ワニ！ ブラカ〜ワニ』

それぞれの動物のシンボルが円形になりそれぞれのオーズが様々な姿になる。

「行くぞお！」

「……………はあ！」「……………」

本体であるプトティラコンボの掛け声と共に計八体のオーズがドーパントに駆け出す。

「はああああああ！」

「せいっ！」

プトティラコンボはメダガブリュー、タトバコンボはメダジャリバーでドーパント達を切り裂いていく。

「はっ！」

タジャドルコンボは炎を纏ったタジャスピナーでドーパント達に空から殴りかかる。

「よっつ！」

他のガタキリバコンボはカマキリソードによる高速双剣術で……。

「そいつ！」

ラトラーターコンボはトラクローでドーパント達を切り裂いていく。

「でえい！」

そしてサゴーズコンボはゴリバゴーンで……。

「はいやあ……！」

シャウタコンボは電撃を纏ったウナギムウィップによりドーパント達を一掃していく。

「てい！」

そしてブラカワニコンボはワニレッグによる回し蹴りでドーパントを切り裂いていく。

そしてドーパントの人数は既に少量になり……。

「そろそろ決める。比奈ちゃんや知世子さんに心配かけたくないし。」

八人のオーズは並び、プトティラはセルメダルをメダガブリューに飲み込ませた状態で変形させ、タジャドルコンボは三枚のメダルをスピナーにスロットし、他のオーズはスキヤナーを構え、一斉にスキャンする。

「おらああ！」

フォーゼは次々とドーパント達に攻撃を加えていく。

前蹴りや頭突きなどそのスタイルはヤンキーのようである。

その時。

「！」

両足をドーパントが掴む。

「離せ！ 離せっつーに！」

フォーゼがあかくもそんな隙にドーパント達が殴りかかるうとしたが……。

「ならこいつだ。」

フォーゼはベルトの右端のオレンジのスイッチを押す。

『ロケツ……トモ……ジュール！』

すると右手にオレンジ色のロケツト、ロケツトモジュールが装備される。

「どりゃあー！」

そしてそのままブースターを点火させ殴りかかったドーパントを逆に殴り飛ばす。

さらに足元のドーパント達にも攻撃を加え吹き飛ばす。

「このまま行くぜ！」

次にロケツトの隣のスイッチを押す。

『ランチャー……モジュール！』

右足にランチャーモジュールが形成され、構える。

「そりゃあ!」

ランチャーからミサイルが放たれドーパント達を一掃する。

「先輩が頑張つてんでなあ。俺も決めるぜ!」

『ドリル・・・モジュール!』

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを装備しロケットスイッチの裏に隠れたスイッチを押す。

『リミットブレイク!』

「そい!」

フォーゼはロケットモジュールにより天高く飛びあがり・・・。

「おらぁああああ!」

上空からドリルモジュールによる急降下キック、ロケットドリルキックをドーパント達に叩き込み、全滅させる。

「さつと・・・、やることもやったし。早く帰って宿題やんねえと大杉の野郎がうるせえからな。」

フォーゼはマシンマッシグラーに跨る。

「頑張れよ。先輩」



そしてオーロラへと消えていった。

『プットティラ〜ノヒツサ〜ッ』

『『『『『『スキャニングチャージ!』』』』』』

『タカ!クジャク!コンドル!　ギン、ギン、ギン、ギガスキャン  
!』

「『『『』はああああああ．．．．．はっ!』』』」

タトバコンボはバッタレッグ、ガタキリバコンボは分身しながら全  
員で跳躍、ラトラーターコンボは三つの輪を走り抜け、サゴーズコ  
ンボはゴリラアームを構える。

「『『はっ!』』」

シャウタコンボは跳躍しタコレッグをドリル状にし、ブラカワニコ  
ンボは足を光らせながら駆け出す。

「『『『』せいやあああああああ!』』』』』」

それぞれタトバキック、ガタキリバキック、ラトラータークロス、  
サゴーズインパクト、オクトバニッシュ、ワーニングライドを叩き  
込みドーパント達を粉碎する。

そしてプットティラコンボはバズーカモードのメダガブリューを構え

て引き金を引き、タジャドルコンボは火の鳥を纏い突撃する。

「「せいやああああああ！」」

ブトティラコンボのストレインドウム、タジャドルコンボのマグナブレイズが残りのドーパント達を全て倒す。

「……………ふう。」

ブトティラコンボは皆が息を抜く。

「この世界は左さんがいるし他にも……………。俺は俺のやることを今…………、手を伸ばすだけだしね。」

オーズ達は皆並んでオーロラの彼方へと消えていった。

825

「スカル・マキシマムドライブ！」

スカルは空高くスカルの紋章型のエネルギーを放つ。

「はっ！」

そして跳躍し…………。

「とっっ！」

そのエネルギーを蹴り飛ばす技、シルエットシュートをドーパント達に放ち、ドーパント達を一掃する。

「・・・・・・・・・はああああ・・・・・・・・。」

スカルは大きく息をはく。

そしてそのままスカルボイルダーに跨り・・・・。

「・・・・・・・・・翔太郎、・・・・・・・・・一つ貸しだぞ。」

そのまま走り去っていった。

『エターナル・マキシマムドライブ!』

エターナルはエターナルメモリをエッジにスロットする。

するとドーパント達は苦しみ出す。

「地獄、・・・・・・・・先に行つて・・・・・・・・遊んで来い!」

エッジの刃が青い炎で覆われ、エターナルは走り出す。

そのままエッジでドーパント達をすれ違い様にブラッディヘルブレイドを叩き込んでいく。

そして切り裂いたドーパント達を後ろに・・・・。

「さあ・・・・・・・・・地獄を楽しみな!」

サムズダウンを放つとドーパント達は一斉に爆発し、爆炎が立ち込めた。

「「「」」」」」」」」」」」」

局員達が啞然とするなか・・・。

「・・・ふっ。」

エターナルは背中を向け歩き出す。

「ちょ、ちよつと君・・・。」

「・・・悪いが俺は何事においても後片付けが嫌いなんだ。・・・頼むぞ。」

そのままエターナルは跳躍しビルの影へと消えていった。

そしてエターナルは変身を解き・・・。

「・・・守り抜けたか・・・大切なものを。」

写真を取り出す。

そこにはふてくされた克巳と顔が赤いハリーが写っていた。

『ブースター・・・。』

『フアング・・・。』

『マキシマムドライブ!』

アクセルブースターはマキシマムクラッチを引きパワースロットルを捻り、ファングはタクティカルホーンを三回弾く

「はあああああああ……。」

「くっ! このおおおお!」

テラーが光弾を放つが、アクセルブースターとファングは走り出し跳躍し……。

「ライダー……ツインマキシマム!」

ブースター版グランツァー、ブースターグランツァーとファングストライザーがテラーに放たれる。

「があああああああ!」

そしてテラーを背にし……。

「絶望がお前達の……ゴールだ!」

アクセルのこの声によりテラーは爆発、変身していた男も消滅していった。

「……っ。」

「大丈夫か?」

アクセルは倒れるフアングを支える。

「な……なんとか……。」

「……………しかし君は強いな。……さすがは左の弟子か。」

「……………ありがとう、はぁ……………はぁ……………「じゅいませー!」

そのままフアングは拳を突き出す。

「……………ふっ。」

アクセルも拳を合わせた。

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

エクストリームの拳がテラーユートピアに放たれテラーユートピアは吹き飛ばされる。

「「」のお!」

テラーユートピアは拳を放つエクストリームは右手で受け止める。

「「こうなればユートピアの吸収能力でえ!」」

テラーユートピアはエネルギーを吸収していく。

テラーのパワーの分もパワーが高く……。

「ぐ……、が……。」

エクストリームは徐々に力が弱くなっていく。

「くくくく……。」

「まだだ……。」

「何！」

「俺達は……。」

「僕達は……。」

「「負けない！」」

すると。

エクストリームの身体の中央にあるクリスタルサーバーが輝きだし……。

「「うおおおおお！」」

エクストリームはゴールドエクストリームへと進化を遂げた。

そしてテラーユートピアの右手から火花が散る。

「な……に……。」

「てめえには理解できねえよ。」

「なん……だと……。」

「大切な誰かのために、その人を笑顔を守るためにいくらでも強くなれる。」

「そのために身体一つになっても喰らい付いて倒す。」

「それが……仮面ライダーだ!」

そのままゴールドエクストリームはテラーユートピアを蹴り飛ばす。

「ぐっ!」

「終了だテラーユートピアドーパント。いや……加頭順!」

「まだまだ……まだまだ!」

テラーユートピアは天高く浮遊する。

「フィリップ! 俺達もいくぜ!」

「ああ!」

『スペリオル!』

ゴールドエクストリームはスペリオルメモリを取り出し、マキシマムスロットにスロットする。



『スペリオル・マキシマムドライブ!』

そしてエクストリームメモリを閉じて再度展開する。

『エクストリーム・マキシマムドライブ!』

そして跳躍。

「はあああああああ!」

両足にエネルギーを込めたテラーユートピアのドロップキックと・  
・。

「『ゴールデンスペリオルエクストリーム!』」

ゴールドエクストリームの両足キック、ゴールデンスペリオルエク  
ストリームがぶつかりあう。

「ぬっっっっっっっっっ!」

「『はあああああああ!』」

両者互角と思われたが・・。

「『たあああああああ!』」

エクストリームが勝り・・。

「があああああああ!」



**最終決戦 4・決着（後書き）**

次回はエピソードになります。

絆

「終わった……か。」

「みただね……。」

Wは変身を解き翔太郎とフィリップが現れた。

「改めてけど……久々だね翔太郎。」

「ああ。ご無沙汰だったか？」

「ああ。相変わらず亜樹ちゃんと照井竜はラブラブだし、他の風都の皆も相変わらず元気だよ。」

「よかったぜ。」

「翔太郎、……君は、……いい人が見つかったみたいだね。」

フィリップは翔太郎に歩み寄るスバルを見て言う。

「フィリップ……。」

「翔太郎……もし君も一緒にこよつと言ったらどうする？」

「……悪い。」

「……………だろっね。」

「……………俺はこの世界で生きていく。この街で、この街で、この街で。」

「……………なるほど。君らしい。」

「……………悪い。フィリップ……………」

「いや、気にしないで。君ならそう答えると思っていたよ。」

「……………フィリップ……………」

「なんせ君の相棒だしね……………」

「……………ああ。」

「……………それに……………もうお別れみたいだしね。」

「…!」

するとフィリップの身体が徐々に身体が消えていく。

「……………。」

「……………僕と照井竜はこの世界には長くはいられない。もつすく君と三度目のお別れになる。」

「……………フィリップ……………」

「……………照井さん……………」

クラナガンではアクセルが光となって消えかけていた。

「……………安心しろ。俺はただ元の世界に帰るだけだ。」

「……………。」

「……………確か来人といったか。」

「……………はい。」

「……………君と左は似ている。大切なもののために後先考えずに突っ込む。」

「……………。」

「……………そちらの方々。」

アクセルは後方で座りこんでいたなのは達に視線を移す。

「左を……………頼む。」

「……………（コクッ）……………」

なのは達は無言のままつなずく。

そして一瞬変身が溶けた照井竜は……………。

「……………」

深くお辞儀をした来人の前で満足げな顔をして消えていった。

「……………フィリップ……………」

涙ぐむ翔太郎。

「泣かないでよ翔太郎……………ハードボイルドだろ？」

「……………おう。」

「……………スバルさん……………、だったっけ？」

「え？ はい。」

スバルは急に話を振られながらも返事を返す。

「これからも翔太郎を頼めるかな？ 僕の……………大切な相棒を……………」

「……………はい！」

スバルが返事を返すとフィリップの帰還を示す身体の消滅が加速する。

「……………翔太郎。僕がいない分はきつと彼女が君を支えてくれ

る。だから僕がいなくても君は大丈夫さ。」

「……………ああ。フィリップ……………でもな、フィリップ……………」

「？」

すると翔太郎は拳を突き出す。

「例え世界は違っても……………、離ればなれでも……………」

「……………ああ。翔太郎。僕達は……………」

フィリップは拳を突き出し翔太郎と拳を合わせる。

「俺達は永遠に……………」

「相棒だ。」

そして風が吹いたと思ったら……………。

「……………あばよ……………フィリップ。」

フィリップは消えていた。

「……………。」

「……………翔太郎さん。」

翔太郎は立ちすくむ。



隣にいるスバルを抱き寄せながら。

「あれから数週間後。クラナガンは俺達や局との連携により街は完全に復興し、街は完全に復興し、人々は笑顔を取り戻した。人々の笑顔を見るたびに仮面ライダーとして戦ったかいがあったと思う。それと俺と来人はかの三提督っていう局のお偉いさんにより特別行動、つまり仮面ライダーとして柔軟に活動できる許可を得た。おかげで俺達は仮面ライダーとしてより動きやすくなった。街が俺達を後押ししてくれているんだと思う。その期待に応えねえとな。さて今俺が何をしているかと言うと・・・」

「たああああああ！」

局員達が影で避難している中、ジョーカーは現れていたドーパントと戦っていた。

そして・・・。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「ライダー・・・キック！」

ジョーカーは跳躍しドーパント達にライダーキックを放つ。

「うああああああ！」

ドーパントは爆発し犯人の男が気絶して現れた。

「うしっ。」

ジョーカーは変身を解き、ハードボイルダーに走る。

「ありがとうございます。左さん！」

局員が犯人に駆け寄り翔太郎に礼を言う。

「あ、ああ。悪いい、ちょっと遅刻しそつだから後は頼む！」

「あ、ちよつと！」

局員の静止も聞かず翔太郎はハードボイルダーで走り去っていった。

「ふっ、ふっ、ふっ……。」

「はっ、はっ、はっ……。」

インターミドルに向け走るアインハルトに付き添って並走する来人達は公園で休憩する。

「インターミドル、延期しなくてよかったね。」

「はい。来人さんや翔太郎さんのおかげで……。」

「そう言ってもらえると頑張ったかいがあったかな。」

「……来人さん……。」

「？」

「……これからも戦っていくんですか？」

「うん。……なんで？」

「心配なんです。……来人さんが。」

「……心配してくれるの？」

「当然です！ 私は来人さんがだい……、だい……、だい……、だい……」

「だい？」

「……ふん！」

もはやお約束の照れ隠しのアインハルトの正拳突きだったが……。

「……ほっ。」

「！」

受け止める来人。

しかし……。

「はっ！」

「ぬはっ！」

アインハルトの蹴りが来人の横っ腹に。

「くづつづつづつづつ。せっかく勝ったと思ったのに……。」

そして来人はベンチに気絶する。

「……………」

アインハルトは無言のままベンチに座り、来人に膝枕をする。

そして頭を撫でる。

「はあああああ……。」

状況も分からず安心した表情を浮かべる来人に……。

「……………(ちゅ)」

来人の頬にキスをする来人。

「……………これからも支えていきます。だから……頑張ってくださいね。……来人さん。」

そして再び頭を撫でるアインハルト。

するつ。

「(じゅ)」

「……………(ビクッ)」

いきなり、というよりは幸せ気分で気がつかなかったアインハルトは突如目の前にいたヴィヴィオにびっくりする。

「……………あ、アインハルトさん……………」

「……………ヴィヴィオさん……………」

「……………。」

「……………代わりますか？」

「うん　でも私は……………」

ヴィヴィオがもじもじすると……………。

「ヴ、ヴィヴィオ？」

来人が目を覚まし、寂しそうにするアインハルトを知らずに起きる。

「来人さん」

「？」

「えいっ！」

「うわっ！」

ヴィヴィオが来人の膝に寝る。

「う〜ん」

「……まあ、いつか。」

来人はヴィヴィオの頭を撫でる、

そして幸せそうなヴィヴィオを羨ましそうに見るアインハルトは……。

(……次は代わってもらいましょう)

来人の拒否権を一切考慮せずに決めた。

そしてその後ヴィヴィオとアインハルトはバトンタッチしながら来人とメロメロな時間を楽しむ。

このサイクルはその後数時間近く続いたが三人は終始笑顔であった。

「フィリップ、事件だ。」

「フィリップ君、早速検索検索！」

ここ風都の鳴海探偵事務所では、やってきた照井竜の声に応え、彼の妻にして鳴海探偵事務所の所長、鳴海亜樹子が促す。

「ああ。」

フィリップは地球の本棚へと入っていく。

「翔太郎、僕達は生きていくよ。この風都で。君の分も守りぬいていくさ。だから・・・心配しないでね。・・・相棒。」

「ああ。」

「？」

竜も頷き、亜樹子が一人頭を傾げる中・・・。

「さあ・・・、検索を始めよう。」

フィリップは今日も検索を始める。

相棒の分も風都を守りぬくために。

「おい、克巳！早く起きねえと遅刻するぞ！」

インターミドルの予選でクラナガンに来ていたハリーは共に応援に来ていた克巳をホテルのドアから促す。

無論ハリーとは別室。

そして・・・。

「……………待たせたな。」

「ホントだよ、まったく。行くぞ、ほら！」

ハリーは克巳の手を握るが……………。

「（カア~~~~~）」

顔を赤くして手を離す。

「……………どうかしたかハリー？」

「なななな、なんでもない！ なんでもないからな！」

「そうかよ。ところで……………」

「？」

「遅刻するぞ。」

「あゝ！」

時計を見たハリーは啞然とするが……………。

「……………ほら行くぞ！」

「え？」

克巳がハリーの手を取って走り出す。



「…………俺のせいで遅れても嫌だからな。急ぐぞ！」

「あ……、え……、お、おう！」

顔を赤くするハリーのこと知らずに克巳は手を引いて、ホテルの廊下を走る。

ミッドチルダ南部のカフェでコーヒーを飲む荘吉。

そして荘吉はコーヒーカップを空にかざす。

「翔太郎……………見つけたか……………大切な人を……………守りぬけよ。お前の……………お前自身の手で……………お前が……………大切な人と笑いあっている未来を信じて。」

そしてコーヒーカップを自らの口へと運んでいく。

「スバル……………！」

「遅い！」

待ち合わせしていたスバルに翔太郎は駆け寄る。

「悪い悪い。途中でドーパントがな……………」

「言い訳は結構です！」

「ホントに悪い！」

「ホントに悪いと……。」

そっぽを向いていたスバルが振り返った途端翔太郎が抱く。

「……………」

「悪かったよ……ホントに……。」

「……………しょうがないですね。」

二人は身体を離す。

「……………翔太郎さん……あの……私……、人間じゃ……」

スバルが言いかけたとき翔太郎はデコピンを放つ。

「いったあ……。」

涙ぐむスバル。

「お前はお前だ。人だろうがなんだろうがお前は泣くし、怒るし、笑う。俺はスバル・ナカジマ……そんなお前しか知らないしそんなお前を好きになった。」

「翔太郎さん……。」

「だからお前は俺が守る。これからも一生守り続ける……。」

そして翔太郎は懐から小さい箱を取り出し開く。

翔太郎が開くとそこには指輪が輝いており……。

「安物だかな……。でも俺はお前をずっと守り続ける。だから……、だから!」

「……翔太郎さん……。」

「一生……。俺の側にいる。」

「……。」

「いいな!？」

「……はい」

スバルは笑顔で翔太郎に抱きつく。

そして身体を一旦離し……。

「……。」

「……。」

二人はゆっくりと顔を近づけてゆき……。



## 絆（後書き）

終わりました、第一章。

ここまで来れたのは皆さんのおかげです。

調子に乗って続編もやります。

これからもぜひお願いします。

第二章お楽しみに！

翔太郎 & a m p ; スバル「これで決まりだ！」

**感想数200突破特別編・宿泊（前書き）**

感想数が200突破記念です。

ちなみに今回はたまに成人向けな表現もあつたりします。

感想数200突破特別編・宿泊

「……………遅い。」

街のモニユメントの前で待つ翔太郎。

ちなみに格好はスーツではなく、歳相応の格好である。（言うなれば電王トリロジーの幸太郎風の格好）

（まったくなんで出る時間を別々にすっかな。そもそも遅れんなら待ち合わせなんてすんなっつーの）

翔太郎は心の中で怒りをぶつける。

すると。

「翔太郎さあ~~~~ん。」

聞き慣れた声が後ろから聞こえる。

「遅せえぞスバ……ル……。」

振り向いた翔太郎は啞然となる。

そこにいたのはワンピースを着たスバルであった。

「遅くなりました~~~~。」

「……………どうしたんだスバル？」

翔太郎は色んな意味で唾然となる。

普段パンツルックでボーイッシュなスバルがなぜスカートかということかである。

「だってえ、翔太郎さんとの初デートなんですもん」

スバルは回転する。

そしてスカートから水色の逆三角形がチラリと見える。

「す、スバルさん？ 短かすぎないっすか？」

「ふふふう 翔太郎さんのエッチ〜」

「な！」

「うっそうそ さっ、行きましょ」

翔太郎は翔太郎の腕に抱きつく。

そしてそれによりスバルの上半身の二つの膨らみが歪む。

(こ、こいつ・・・)

「~~~~」

顔が赤くなる翔太郎とそんな翔太郎を見て楽しむスバルは街を歩いていく。



ちなみにスバルのバックが少し開き中に赤マムシが入っていることを翔太郎は知らない。

「ん〜ん。おいひい〜ん」

「なかなかいけんな。」

二人は路上販売のアイス屋で買ったアイスを頬張るスバルと翔太郎。ちなみに二段の翔太郎に対し、スバルは五段だか一口で一玉まるごと食べるためバランスなどない。

「翔太郎さん」

「？」

「あ〜ん。」

「な！」

もはやお約束だがこんなことなど経験のない翔太郎はパニック。

「あのよお、スバル。ちょっとな〜ん。」

「いいじゃないですか〜。だって周りだって……。」

翔太郎は周囲を見ると……。

「(イチヤイチャ…………)」

「(チュツチュツ…………)」

「(モミモミ…………、バコン！バコン！…………)」

木の奥から聞こえる最後のはおいといて周囲はラブラブ雰囲気120%。

アイス屋すら奥にもう一人と桃色の雰囲気を出す。

そのためこの場では拒んだ方がKY…………。

空気を読めないという烙印が押されることとなる。

さすがにそっちもきついと判断した翔太郎は諦めて…………。

「あ、あ…………ん…………。」

「あ…………ん…………」

アイスを一口舐める翔太郎。

チョコミントが何故かやたらに甘く感じたとか…………。

すると。

「翔太郎さんもください…………」

しかし逆らえばKY（以下略）。

「……………わかった。ほら。あ~~~~ん。」

「あ~~~~ん　んむ。」

アイスの一玉がスバルの口へと消える。

「ん~~~~。翔太郎さんの味がします」

「どんな味だよ……………」

「ん~~~~」

翔太郎のツツコミも聞かずに翔太郎はやっぱりと味を楽しむ。

そして二人はその後アイスを楽しんだ。

そしてその勢いそのまま食事へ。

「あ~~~~、美味しかった~~~~。」

「お前……………、食い過ぎじゃねえか？」

「そうですね？　でもギン姉やエリオもあれくらいですよ？」

「……………どんな胃袋してんだよ……………」

すると。

「翔太郎さん次はゲームセンター行きましょう！」

「お、おう。」

二人はスバルが見つけたゲームセンターに入っていった。

そして二人はゲームを楽しんだ。

ちなみに翔太郎はシューティングゲームで二人分の料金を支払っての2丁拳銃で歴代最高の成績を叩き出した。

「あ~~~~、楽しかった~~~~。」

「久々に満喫したなあ。」

二人は夕陽の中、歩き出す。

しかし翔太郎は妙な感覚を感じていた。

なにせスバルが歩いていく方向は……。

「な、……なあスバル……。」

「何ですか？」

「こじって……。」

「そう。ホテルですよ。」

スバルの何気ない一言に翔太郎はフリーズする。

「はあ？」

「だってデートっていったら泊まりでしょ？」

「いや知らねえし……。」

「まあまあ……。今から帰るのも……。」

「……。」

「ね？」

「よし、帰ろう！」

翔太郎は逆方向に歩き出すも……。

~~~~~数分後~~~~~

「すみません。大人二人で。」

「かしこまりました。しかしそちらのかたは……。」

「途中で疲れて寝ちゃって……。」

「か、かしこまりました。」

そのままホテルの廊下をスバルと……。

「（キユ〜〜〜〜）」

ホテルマンに背負われていく気絶している翔太郎は進んでいく。

「あ〜〜〜、いつてえ〜〜〜。」

ベッドに座りながら腹をさする翔太郎。

そしてそこに……。

「翔太郎さあ〜〜ん」

グラスを持ったスバルが現れる。

「どうぞぞ。」

「おう。」

翔太郎はグラスを受け取り……。

「では特になんもないですが……。」

「んな適当な……。まあいいか。」

「かんぱ〜い。」

そして二人はグラスをぶつけ、飲み干す。

その後入ってこないようにスパイダーショックでスバルを縛っている間に翔太郎は入浴し、二人はベッドに入る。

しかし翔太郎は知らなかった。

自身がすでにスバルの手の内であったことを。

~~~~~数時間後~~~~~

「眠れねえ。」

翔太郎はやたらと目が覚める。

隣を見ると……。

「す〜、す〜、す〜……。」

気持ちよさそうに寝るスバル。

しかし服装が……。

「……やばい。」

翔太郎は意識を集中させる。

なんせスバルの格好はバスローブの隙間から水色の布と谷間が現れているからだ。

しかも顔が翔太郎の方を向いており、そのあまりにも整いすぎた綺麗な顔が翔太郎の意思をそぐ。

(・・・落ち着け、・・・落ち着け、・・・落ち着け、どうしたんだ俺は)

翔太郎が神経を集中させているさなか・・・。

「んんん、翔太郎さん？」

スバルが起きる。

「スバル・・・、俺はどうかしちまった・・・。やたらと目が覚めんだよ。」

「それって・・・。」

するとスバルは起き上がり、バックの中から赤مامシの瓶を取り出す。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「お前の仕業か〜〜〜！」

たちまち鬼ごっこが始まる。



「きゃ～～～!!」

「待てコリア～～～!!」

すると……。

「あっ。」

「えっ?」

翔太郎が偶然にもベッドに押し倒す形でスバルを追い詰めた。

「……………」

「……………」

するじ。

「……………翔太郎さん……………」

「……………スバル……………」

「私……………翔太郎さんと……………」

「……………でもよお……………」

「……………それに私たち……………」

スバルは翔太郎に抱きつく。

「夫婦になるんですもん。」

「……………つたく。お前が飲ませたやつ<sup>の</sup>せい<sup>かも</sup>しんねえ<sup>が</sup>自分を押さえられねえのは、俺の半熟具合のせい<sup>か</sup>。」

「私は半熟でも翔太郎さんが好きです。」

「……………今はそれでもいいかもな。」

「はい……………」

そのまま翔太郎はスバルを抱き、そのまま……………。

ちなみにこのR - 18な行為はその後何度も行われた。

「……………はあ〜〜。」

「はあ、はあ、はあ、はあ……………」

まるで激しい運動後のように汗をかく翔太郎とスバル。

「……………やつちまったなあ。しかもあんなに……………」

「……………私は嬉しかったですよ。」

「……………」

「嬉しかったです。翔太郎さんが抱いてくれて。」

「……………まあこれからは嫌でもずっと一緒だな。」

「……………はい」

二人は手を繋ぐ。

そして……………。

「こんどやったらただじゃおかねえからな。」

「もつと激しいのなら歓迎しますよ?」

「……………馬あ鹿。」

二人はゆっくりと唇を重ねた。

お気に入り登録200突破特別編・悪物（前書き）

連続特別版になります。

総合点500突破記念は二章でやります。

そういえばフォーゼには歴代仮面ライダーが都市伝説として語り告げられているとか・・・。

楽しみだあああああ！

お気に入り登録200突破特別編・悪物

「わかった。くれぐれも羽目は外すなよな。……ああ。わかった。じゃあな。」

母マリアからの通信を切る克巳。

実はマリアは学生時代の友人達と有給を使って旅行にいつている。

そのため家には克巳一人である。

しかし克巳はめんどくさがることはおろか、この5日間を存分に楽しめるため逆に待ち望んでいた。

昼寝や昼寝や昼寝……。

まさに自分の家を手にいれた感覚であった。

しかし……。

ピンポーン。

「……誰だよ。まあお袋が……いないんだっただ。」

克巳はしびしび玄関に向かいドアを開けると……。

「よ……、よっ！ 克m……。」

ドアを閉める。

「……………なんでハリーが……………」

克巳は帰ってくれることを祈りUターンしかけるが……………

「……………玄関前で泣かれても面倒だな。」

しぶしぶドアを開けると……………

「うえ、……………ひつく……………えぐつ……………」

「……………相変わらず泣き虫だなお前は。」

ハリーが泣きべそをかいていた。

実はハリーは普段男っぽい口調をしているものの、相当な泣き虫である。

故に克巳はドアを再び開けた。

「だってよお……………オレって知ってたら閉めることねえじゃんかよお……………」

「……………静かな俺の5日間を騒がしくしてほしくなかったただだ。」

「なんだよそれ……………。まるでオレがうるさいみたいにいいやがつてえ……………」

「間違っただことを言った記憶はない。なんのようだ？」

「えつとよお、お前面倒とか言っつて昼飯インスタントで片付けるだろ?」

「悪いか?」

「悪いよ! ちゃんと食わねえと・・・。」

「断る。俺が昔っから後片付けが嫌いなのはお前もしってるだろ。なんであえて自分で片付けなきゃならないことをしなければならぬ。ご免被る。」

「・・・じゃあよ・・・。」

「・・・何だ。」

「・・・オ・・・オレが作りにきてやっても・・・、い・・・い  
いぜ?」

「・・・断ったら?」

「大声でお前に犯されそうになっつたつて叫んでやる。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・断った方が明らかに面倒になりそうだな。」

「じじじゃあ・・・。」

「但し……。」

「？」

「食えないものやダークマターは作るなよ……。」

「お、おう……。」

克巳はハリーを葵炎家へ招き入れた。

「……。」

「ほら。粗茶だかな……。」

「わ、悪い……。」

克巳から渡されたお茶をハリーは受け取る。

しかしハリーにはそんなことはどうでもよかった。

（克巳と……二人っかり……）

事実克巳とは学校や他のところでは会っても基本二人っきりはない。

ハリーの腰巾着や他のクラスメートがいたりするためである。

しかし今は……。



「ふ、二人つきりかぁ……。」

するとハリーは自分の身体を見る。

（大丈夫だ。昨日はちゃんと何回も身体を洗ったし、今日は髪留めも一番いいのをつけてきた。それに……）

そのまま自分の胸を見る。

（そ……、それなりに胸はあるし……、何よりも今日はもしかしたらもしかしてで勝負下着装備だ！もしかしてでだ！……でもそのもしかしてがあつたら……）

いざ久々妄想の世界へ！

~~~~~

ハリーを床に押し倒す克巳。

「な……、何すん……んん！」

克巳はハリーの口答えを聞かずに太ももに手がゆきスカートの中へ……。

「あつ……ああ……んあ……。」

「お前に比べこっちは随分素直だな……。」

「ったく……。克巳……、お前……。」

「……嫌ならやめてやるが？」

「……嫌だ。」

「……聞こえなかったぞ。」

「続けるつつてんだよ。但し……。」

「？」

「中に出したらできちゃった婚覚悟しとけよ。」

「……面白い。」

そのまま昼間にも関わらず葵炎からはあえぎ声がきこえたとか。

~~~~~

「……何してる……。」

ぼーっとするハリーを不思議がる克巳。

「な、何でもねえよ！」

やや強めに返事するハリーだったが……。

(うわ~~~~)。なんであんなふうに返事を返しちまうんだオレは~~~~。こんなだから女って意識されねえんだよ~~~~)

そしてそんな事を振りきるかのように……。

「か、克巳！ 昼飯何がいい？」

「……特に構わないぞ。あえて言うならダークマター以外。」

「お、お前……。」

「……お前に任せる。」

克巳はいたずらに笑う。

「……わったよ。」

ハリーは顔を赤くしながらもそっぽを向き、調理を始めた。

しかし……。

~~~~~数分後~~~~~

「……。」

「……。」

「……作るなって言ったはずだが？」

「……わりい。」

二人が見つめる先には黒い固まり……。

というよりは暗黒物質、またの名を「ダークマター」が皿の上にて

かでかとその存在を現していた。

「…………お前に頼んだ俺が馬鹿だった。」

「……………(しょぼん)」

ハリーは落ち込んだ上に…………。

グ~~~~

「……………」

「……………(カ~~~~)」

慣れないことのためか無駄なエネルギーを使いすぎたハリーの腹から豪快な腹の音がなり、ハリーは顔を一気に赤くさせる。

そして…………。

(情けねえ…………、情けねえよ。克巳の前でいいとこ見せようと思つたのにあんな炭の塊作るし腹の音は鳴らすし…………)

「うぐつ…………えぐつ…………ひぐつ…………。」

途端に泣き出す。

「……………」

克巳はそんなハリーをみて少し考えたのち…………。

「……………仕方ない。」

ハリーの手を掴みキッチンへ連れてゆき自らもエプロンをつける。

「か、克巳？」

訳が分からずに泣きやむハリー。

「少しは料理を覚えろ。」

「……………わかってっけどよぉ……………」

「……………面倒だが俺も作ろう。良く見て覚えろよ。」

「え？」

「将来お前が嫁に行ったときに相手が不便な目にあうだろうからな。」

「……………克巳がもらってくれればいいじゃんか……………」

小声でハリーは呟くが……………。

「なんか言ったか？」

「な、ななななんでもねえよ！」

ハリーは顔を赤くしてそっぽを向く。

「それにな……………」

「なんだよ？」

「…………お前は笑っていた方が……、なんというか、……ましというか、……まあ簡単にいえば俺は泣き顔よりも笑顔の方が好きってことだ。」

「す…………。」

「わかつたら準備しろ…………。」

「す…………。」

「ハリー？」

「すきいいいい…………。」

ハリーは顔からまるで蒸気機関車のように蒸気をはっしながら、銅像のように綺麗に倒れていった。

「…………頭が痛くなってきた。」

克巳はそんなハリーを呆れながら見下していた。

くくそれから数時間後くく

「…………ん…………んあ？」

ハリーは目を覚ます。

しかし気絶していたはずが景色は歩くぐらいのスピードでゆっくり

と流れていく。

しかも足は宙に浮いて……。

正確には身体そのものがおぶられた状態であることをハリーは確認した。

しかもハリーはその人物をよく知っている。

なにせ彼は……。

「克巳……。」

「起きたか。つたく。俺の自由な時間を裂いた上にお見送りまでさせるとは……。大したもんだよなあ。」

「わ、悪かったよ……。」

「その上あの鍋どうしてくれるんだ？ お袋が帰ってきたらさぞ嬉しくない悲鳴を上げるだろうよ。」

事実さっきのハリーの料理……。

料理と言えるかはさておきダークマターを作るのに鍋が一つ、完全に天に召されていったからだ。

「悪かったよ……でもよお……。」

「……何だ。」

「オレだって克巳の役に立ちたかったんだよね。．．．それで．．．」

「わざわざ出来もしない料理で俺に迷惑をかけたって訳か．．．」

「．．．．．」

「．．．．．じゃばるのは良いが、作れるようになってからにする。」

「．．．．．はい。」

まるでシヨボンと聞こえてきそうな程の落ち込みようのハリーに克巳は．．．。

「．．．．．まあ、正直作りに来てくれたってのは悪い気分はしなかったがな。」

「．．．．．ほ、．．．．．ほ、ホントか？」

「．．．．．だから今度はちゃんと作ってから」

ギュッ

ムニユ

前者はハリーが克巳に強く抱きついた音。

後者はハリーの上半身の二つの膨らみが克巳の背中に押し付けられ

る音。

「……………ハリー、少し身体を離さ」

「よし！ オレは頑張るぞ！ いつか克巳にオレの料理を食べてもらうために！」

「……………わかったから身体を」

「だからよ克巳！ 明日も来っからオレに料理を教えてください！」

「……………わかったからさ」

「よし、明日から頑張るぞおお！」

(……………何を言っても今のコイツには聞こえないか)

空にガッツポーズをするハリーと呆れる克巳はゆっくりとハリーの家へと歩を進め続けた。

第二章・序章（前書き）

二章始まりです。

今回からはあの方に似た方が？

第二章・序章

暗い空に降りつづける雨。

そんな中で戦う影が二つ……。

「ふっ！」

「はあっ！」

片方は身体が灰色のカブトムシのような角の戦士。

手には身の丈にも近い大剣が握られている。

そしてもう片方は足や背中にバイクの車輪のような装甲を装備した赤い戦士。

二人は互いの刃を交わらせる。

「おおおおお！」

「はあああああ！」

二つの刃は激しくぶつかりあいながらも……。

「ふっ！」

赤い戦士は灰色の戦士の手から大剣を弾き……。

「でりゃあああ！」

灰色の戦士の顔面にきりかかる。

「ぬづづづづづー！」

灰色の戦士はバックステップで避けようとするが剣先が右の副眼を切り裂く。

「がくづづづづ．．．。」

灰色の戦士の右副眼は傷つき赤から黒に点滅する。

「さすがだな竜．．．。アクセルをそこまで扱うとは．．．。」

「貴様がまだタイラントを使いこなせていないからだ。だがそっちの方が俺には都合がいい。貴様にはここで絶望に堕ちてもらおう！」

「ふっ。悪いがその気はない。」

「！」

赤い戦士は構える。

すると．．．。

何処からか複数の光弾が放たれ赤い戦士に攻撃する。

「があああああー！」

装甲から煙を放ちながら戦士は膝をつく。

「悪いな竜。俺達の邪魔はしないで頂く。」

灰色の戦士の背にはいつの間にか三体のドーパントが。

「貴様は何を……。」

「言ったら邪魔されるだろうが、退屈にはならなそうだな。いいだろう。教えてやるよ。」

「……。」

「あの伝説は知ってるな竜……。」

「ブレイブとインフィニティ……。」

「そうだ。」

「しかしあれはあの赤い石が無ければ……。」

「そう……。だから取りに行くんだよ……。今からな……。」

そう言うと灰色の戦士は懐から二つのガイアメモリを取り出す。

「貴様！……その二つまで……。」

「試作品みたいだが一度は使える。これで俺は野望を叶える。」

「させん！」

赤い戦士は駆け出すが……。

「無駄だ……。」

灰色の戦士が言った途端ドーパント達が一齐に光弾を放つ。

「ぐ……、があああああ！」

赤い戦士は吹き飛ばされ後ろの崩れた壁に叩きつけられる。

「ぐ……、が……。」

「竜……、お前も確か同型を持ってたな。待ってるぜ？俺達の聖地……ミッドチルダでな。」

すると突如ワームホールのような穴が現れて灰色の戦士とドーパントはそこに消えていった。

「待て！」

しかし赤い戦士の静止など聞くはずもなく灰色の戦士達は消えた。

「……世界が危ない。」

赤い戦士は自分の赤いバイクに駆け寄りながらバイクハンドル型のドライバーから赤いメモリを抜き、変身を解いた。

「……させない。……貴様らは俺が止める。……も

「うこんな悲劇を繰り返させないために。」

赤い戦士だった青年、三童竜は自分のバイク、ディアブロッサに跨る。

そして懐から「D」と書かれたメモリを取り出す。

『ディメンジョン！』

するとディアブロッサの前にさつきと似たワームホールが現れる。

「……………今度こそは守りぬいてやる。……………世界を！」

青年、三童竜はディアブロッサのアクセルを捻りそのワームホールの中へと走って行った。

第二章・序章（後書き）

最近なんだかオーズのタジャドルコンボがやたらとかつこよく見え
てきた今日この頃。

いつか本編中でゴールドエクストリームと絡ませてみたいとも考え
ていたりします。

加速（前書き）

今回は我ながら無理矢理くさい展開に（汗）

どうかご了承を。

昨日セブンイレブンで「平成仮面ライダー徹底ガイド」という本を買ったんですが・・・。

なかなか満足です。

しかもガンバライドにも使えるARカードダスのバースがついてきます。

iPhone買おうかなあ・・・。

加速

ところ変わってここはミッドチルダ。

翔太郎がスバルに結婚指輪を渡して数日後。

「……………どういうことだ……………」

仮面ライダーとしての能力をかの三提督に認められた翔太郎は自分の部屋の机で考え込む。

「やつは倒した。だがなんでこんな……………」

その写真には砕かれたガイアメモリのみが写っていた。

しかし現場でドーパントを倒した翔太郎にはこの異常がわかっていなかった。

「犯人が……………いねえ……………」

実は犯人はいたがメモリブレイクした途端、現れていたのはガイアメモリだけだったのだ。

いくらNEVERでも即消滅するわけではない。

「……………なにかが起きてるな……………この街に……………」

翔太郎が考えこんだその時……………

「翔太郎さん、ちょっといいですか？」

自動ドアから声が聞こえる。

「スバルか。大丈夫だぞ。」

「失礼します。」

自動ドアから現れたのは青い短髪に白い制服の翔太郎の婚約者スバル・ナカジマである。

「どうかしたか？」

「いや、・・・昼休みに入ったんで一緒に昼食を・・・。」

「悪いなスバル。ちょっとこいつをまとめときてえんだ。」

「そう・・・ですか・・・。」

シュボンとしながらスバルは退出しようとするが・・・。

「・・・まあこんを詰めすぎても効率が悪いかもしんねえし俺も少し休むとすっかな。」

翔太郎のその言葉を聞いた途端・・・。

「そうですね！ 休憩してやった方が絶対いいです。だから一緒に行きましょ。」

スバルは翔太郎に寄りながら言う。

「・・・わ、わかった。とりあえず落ち着け。・・・ちよつと片付けるから少し待っててくれるか？」

「はい」

スバルが笑顔で答え、翔太郎は簡単に片付け始めるが・・・。

（例え危険が迫ろうが守りぬいてやるぜ。俺達・・・仮面ライダーがな）

内心では強い意思を露にしていた。

その時。

スタックフォンが鳴り出した。

翔太郎はその着信音がいやな知らせであることを知っているため、直ぐ様スタックフォンを開き、急いで退室する。

「翔太郎さあ〜ん。お昼は〜〜？」

「悪いスバル！ ドーパントだ！」

背中で答えた翔太郎は救助隊本部の廊下を走っていった。

一方現場では・・・。

「はあ……、はあ……はあ……、はあ……。」

傷付いたサイクロンがキメラドーパントと対峙していた。

「でえりあああああー！」

サイクロンは蹴りを放つもキメラは腕で弾き、爪で切り裂いていく。

「ぐぐぐぐぐぐぐ……。」

サイクロンは弾き飛ばされる。

「はっはっはあ〜〜。いいなあ〜。もっと殺りがいを出してくれねえか？」

「なら……、これだ。」

『フアングー！』

サイクロンはフアングメモリを変形させ、ドライバーにスロットする。

『フアング・ジョーカー！』

サイクロンは白と黒の装甲で覆われフアングジョーカーに変身する。

「うおおおおおー！」

フアングはカメラにラッシュを叩き込む。

キメラもラッシュを防ぎつつカウンターを放とうとするが、ファングはそれすらも捌きラッシュを叩き込み続ける。

そして互いにバックステップで間合いを開ける。

『シヨルダーファング!』

ファングはタクティカルホーンを二回弾きシヨルダーセイバーを生成し、手に取り投げようとするが……。

「!」

何処からか光弾が放たれ、ファングから火花が散る。

「ぐ……が……。」

ファングはその方向を向くとそこには……。

「……はあ〜。」

ラグナロクドーパントがいた。

「どうした? そんなガキ相手に……。」

「黙れえ! 油断しただけだ!」

「どうでもいいが、貴様がかけるだけでも我々の計画が遅れる。」

「さっさと片づけければ済む話だ! いいから見ている!」

合流するラグナロクを突き飛ばしキメラはファングに突っ込む。

ファングは光弾が急所に当たり動きが鈍くなっており、キメラの攻撃をただ受けてしまう。

「がああああああ！」

そのまま倒れこむファングをキメラは踏みつける。

「なかなか楽しめたが……終わりだあ！」

キメラは右手にエネルギーを込め放とうとするが……。

「！ キメラ！」

ラグナロクが気づくのも遅くキメラを斬撃波が切り裂き吹き飛ばす。

「ぬああああああ！」

そしてファングに歩み寄る者が……。

「楽しそうだな……俺も混ぜてくれよ。」

葵炎克巳であった。

インターミドルの応援でクラナガンに来ており、散歩していたところに爆音が聞こえたため駆け付けたのだ。

「誰だ君は……。」

「邪魔を……するなあ！」

ラグナロクの手を払いながらカメラが立ち上がり……。

「貴方は……。」

ファングはよろめきながら立ち上がる。

「……つたく、騒がしいと思って来てみたらこれだ。俺は葵炎……克巳。」

「葵炎……克巳さん？」

「……それと……。」

克巳は腰にロストドライバーを装着し、Eと刻まれたガイアメモリを手にする。

『エターナル！』

「変身。」

エターナルメモリをスロットし傾ける。

『エターナル！』

青い波動と共に克巳の身体を白い装甲が覆い、エターナルへと変身する。

「……………」

「キサマぁ……、何者だ！」

「エターナル……仮面ライダーエターナル。」

「エターナル……あなたも仮面ライダー？」

「ああ……南部の組織ぶっ潰して以来だな。」

「……力を……貸してくれませんか？」

「……………貸す気がなければ来ていない。少しは頭を使え。」

「す、すみません。」

ファングは頭を下げと……。

「キサマらぁ……………」

「俺も……久々に暴れるか。」

キメラとラグナロクが駆け出す。

「行きましよう克巳さん。僕は右風来人……仮面ライダーファングジョーカーです。」

「来人……行くぞ。」

「はい！」

「「はあああああああ！」」

二人も駆け出し両陣がぶつかりあった。

「……………」

海沿いの道から海を眺めるのはディアブロッサによりかかった竜。

そしてビートルフォンを操作し調べた事をまとめる。

(この世界ではレリック四年前になくなった。だからあいつの企みはもう叶えられない。あれを持っていない限りは……………しかし……………)

897

竜は手のひらのTと書かれたメモリを見る。

「こいつはもう一つあったはずだ。ディメンジョンも持っていた。……………もしあいつが持っていたとしたら……………」

すると。

ビートルフォンが鳴り出す。

「！」

画面には複数体のドーパントを示す印が。

(……やつを探すもだがこの力は誰かを守るための力だ)

竜はディアブロッサに跨る。

(この力を得た時のあの約束は必ず守る。……見ている……
シユラウド)

そのまま竜はアクセルを捻り、走り出す。

一方海上警備隊本部。

「……はあ……、はあ……、はあ……、はあ……。」

突如現れた数体のドーパントにより隊のほぼ全員が負傷し、現在戦闘が出来るのは八神はやたとヴォルケンリッターのみだ。

しかも皆負傷し魔力も相当消費している。

「はあ……、はあ……。主はやて……。」

「はやてには指一本触れさせねえ……。」

「私達が……。」

「我らが守る……。」

ヴォルケンリッター達がはやての前に陣を組む。

しかしドーパント達はゆっくりとある者は爪、ある者は武器を構え、ある者は能力を現しながらゆっくりとはやて達に歩み寄る。

「強い……。これがドーパントなんか……。こんなところで終わるんか……。うちの一生は……。そんなん……。いやや……」

はやての意思虚しくドーパント達が遅いかかる。

「……………」

シグナムとヴェータはドーパント達を睨み、ザフィーラは威嚇、シヤマルははやてを抱きしめた。

その時……。

先頭を走るドーパントを投げられた刃が切り裂く。

「……………」

驚く四人に一匹。

そこにはショットガンのように曲がったグリップに赤いカラーが施された剣が刺さっていた。

そしてはやて達の前を突如現れた赤いバイクに乗った青年が塞ぐ。

そのまま青年はバイクから降りヘルメットを外す。

「これ以上は通さん！」

「「「「「.....」」」」」

「だ、誰なん？」

ヴォルケンリッターはやてが啞然となる。

「.....俺は.....仮面ライダーだ！」

「「「「「!」」」」」

そのまま青年、三童竜は腰にバイクハンドル型メモリドライバー、アクセルドライバーを装着し右手に赤いメモリを持ちスタートアツプスイッチを押す。

『アクセル!』

「変.....身！」

竜はアクセルメモリをドライバーにスロットしパワースロットルを全開に捻る。

『アクセル!』

するとピストンパーツ状の円形のエネルギーと数本の槍のよいなエフェクトが現れ竜の肉体を変化させた。

「そう。俺は.....仮面ライダー.....アクセル！」

「アクセル？」

「「「「「.....」」」」」

はやてとヴォルケンリッターが啞然とする中アクセルはさっき自らが投げ地面に突き刺さっているエンジンブレードを引き抜き.....

「さあ！ 振りきるぜ！」

エンジンブレードを手にドーパント達に向かって駆け出した。

ハードボイルダーで街を疾走しながら来人の元に向かう翔太郎。

エターナルがファングと共に戦っていることも知らずに法定速度を無視して走り続ける。

その時。

「！」

ボイルダーの走行直前の道路に威嚇射撃が放たれ、翔太郎はボイルダーを止める。

「..... あん？」

そして目の前には黒いローブの青年。

深くフードをかぶってはいるものの、口元から翔太郎とほぼ同世代

である。

「左翔太郎……、仮面ライダージオーカーだね。」

「だったらなんだ？ 俺のファンならサインしてやるぜ？ ただしその物騒なもんを捨てた後、豚箱でな。」

翔太郎はそのローブの男の手に光る銃を睨み、男はゆっくりと銃をしまう。

「そうだね。サインも要らないし豚箱も遠慮するよ。」

「何もんだてめえ……。」

「俺？ ふふふっ、今教えてあげよう……。」

すると黒いローブの男はフードを下げる。

「！」

その素顔に翔太郎は啞然とする。

そこにいたのは……。

「……なんで……俺がいる……。」

翔太郎であった。

「そう。俺は君だ。今の名前は暴我葬。……元の名前は君と同様翔太郎……、我錬翔太郎だ。」

「……………何が目的だ……………」

「そうだね。単純明快に言おう……………」

「……………」

「左翔太郎……………君の力は素晴らしい。このままこの世界と道連れにするには惜しい程に。だから俺達の仲間になれ。」

「……………何だと。」

対峙する両雄。

笑顔の葬に対し……………。

「……………」

翔太郎はただ目の前の自分を睨み続けた。

加速（後書き）

ミニプラ豪獣神をいじっていると分かることがあります。

恐竜とドリルは男のロマン！

しかもなんだか最近仮面ライダーにドリルが使われているような気がします。バースのドリルアームやフォーゼのドリルモジュールとか。

異界の加速（前書き）

キャラ紹介です。

基本的にデバイスは出番を考えていないので適当です。

異界の加速

みんしゅりゅう
三童竜

年齢：23

身長・体重：木ノ本嶺浩と同様

魔導師ランク：A

能力：光熱の魔力変換、ウイングロードの生成

性格：冷静沈着かつ物静か、しかし内心は熱い

タイラントたちにより滅ぼされた異世界からやってきた青年。その世界である女性から与えられたアクセルドライバーとアクセルメモリで仮面ライダーアクセルに変身する。この世界を巻き込んだ罪悪感を感じながらも翔太郎や他のメンバーとともにタイラント達に立ち向かう。

服装は赤いライダーズジャケットだが他のツールに合わせたものであるため背中のマークはアクセルのマーク。

その世界で作られた試作型メモリ、タイムメモリとダイヤモンドンメモリを所持している。

仮面ライダーアクセル：

仮面ライダーアクセルトリアル：

仮面ライダーアクセルブースター：

竜が変身する仮面ライダー。風都で戦っている照井竜のアクセルと

は姿、技が同一。

ガイアメモリ（原作同様）：

アクセルメモリ：

トリアルメモリ：

エンジンメモリ：

マキシマムドライブ（原作同様・ブースター時は通常アクセルの強化版を使用）

アクセルグランツァー：

ブースターグランツァー：

ダイナミックエース：

ブースターダイナミックエース：

エースラッシャー：

ブースターエースラッシャー：

突撃攻撃：

マシンガンスパイク：

マシンガンスラッシャー：

マシンガンタイフーン：

トリアル時の新技。トリアルメモリスロット状態のままマキシマムクラッチを引き、エンジンのマキシマムドライブを発動させた状態でひたすら回し蹴りと斬撃を叩き込む。

ブーストスラッシャー：

『アクセル』で使用した横一闪斬り。

ツール：

アクセルドライバー：

エンジンブレード：

エンジンブレードは生身の際は数キロに減量可能。

ガイアメモリ強化アダプター：

時間制限がなくなる。

ビートルフォン：

竜が使用するメモリガジェット。ジャミングやドーパントの搜索機能が追加。

ビークル：

ディアプロツサ（ベース車：ドウカティ999S）：

竜が使用する赤いオンロードバイク。性能は照井竜のものと同一。

デバイス：

ターボアクセラール：

普段はハートを裏返したようなマークのネックレス。起動時は右手につくブレスレットになる。エンジンブレードとのリンクシステムが働くなど翔太郎のネクサスと詳細は同じ。竜がアクセルのツールを手にいれた時と同時に入手した。アクセルの時でも竜の一言によりウイングロードを生成するなど変身後にも重点が置かれている。

その他：

竜がいた世界：

ガイアメモリが有効活用された世界で、魔法と科学が双方ともにミッドチルダよりも発達している。

しかしタイラント達の反乱により崩壊、壊滅し人の住めない環境に

なった。

なおその世界の人々は大半が別の世界へ移住した。

タイムメモリ：

「時の記憶」を内包したメモリ。この世に二つしか存在せず不完全なものの特定期人物を二人まで過去へ送る。但し一往復により自動的にブレイクされる。

デイメンジョンメモリ：

使用者を異世界に送ることができるメモリ。ただし効力は一度きりで一度使えば自動的にブレイクされる。

暴君（修正版）（前書き）

なんとかかけました。

今回はほぼ全部バトルです。

描写の悪さはご勘弁ください。

今日はオーズを見に行きましたが・・・。

あまりネタバレはしたくないので言いませんが、いい意味で今回も期待を裏切ってくれました！

やはり夏の仮面ライダーの映画はテンションが上がります。

フォーゼもなかなかよかったです。放送が楽しみです。

そしてメダルも落ち着いて入手！

いち早くアストロスイッチを手に入れました。

はやく一ヶ月後のフォーゼドライバーとフォーゼモジュールチェンジが欲しい！

今回は後書きがあります。

暴君（修正版）

「……仲間になれ。……だと……。」

翔太郎は目の前の自分、暴我葬の誘いに啞然となる。

「そう。君の力は素晴らしい。共に我々と……。」

すると葬の横顔を弾丸が霞む。

「返事はノーだ。舐めんのも大概にしるよ。パクリ野郎……。」

翔太郎がジョーカーマガナムを葬に構える。

「……やはり戦うことになるか。」

「てめえみていにこの街を泣かせるやつは俺が許さねえ。味方になれなあ？ ……冗談じゃねえ！」

「だろうと思ったよ。それじゃ……。」

「どうする？ 大人しく物騒なもん全部捨てて土下座すんならいい弁護士紹介してやらないこともねえぜ？」

「いや……君に力の差を見せつけて忠誠を誓わせてもらおうとするよ。」

葬はおもむろにロストドライバーを装着する。

そしてTと描かれたメモリを手にする。

『タイラント!』

「タイラントだと!」

翔太郎が驚くも葬はタイラントメモリをスロットする。

「見せてやろう。暴君の力を……。」

葬はドライバーを展開する。

「変身!」

すると葬の身体を灰色の装甲が覆う。

現れたのは灰色の身体にT字型のアンテナ、左の赤い副眼に対し右の副眼は点滅して黒、全身に傷跡があり、コート型のローブを纏った戦士が現れた。

「てんめえ……。」

「仮面ライダー……タイラント。」

「……ふざけんなよ。仮面ライダーはこの街の人達の希望なんだ。てめえみたいなクズ野郎が名乗っていい名前じゃねえ。」

「なら証明してみるよ。本物の力を。」

「言われなくても見せてやるぜ。」

『ジョーカー!』

翔太郎は右手でロストドライバーを装着し、左手でジョーカーメモリを持つ。

そのままジョーカーメモリをスロットし、右拳を構える。

「変身!」

ドライバーを左手で展開させながら右拳を開く。

『ジョーカー!』

翔太郎の顔に回路状の模様が現れた後、身体を黒い装甲が覆い……

「行くぜ?」

仮面ライダージョーカーは手首をスナップさせ、タイラントに殴りかかった。

「おらぁぁぁ!」

「はぁぁぁぁぁぁぁ!」

アクセルがドーパント達をエンジンブレードで切り裂いていく。

ドーパント達に周りを取られながらもその場を回転してブレードで
一掃してゆき、殴りかかるドーパントに足をかけ、ホイールを回転
させ吹き飛ばす。

「すごい……あれだけの数を相手に……。」

「悔しいがアイツ強ええ……。」

「……シャマル……。」

「うん。はやてちゃん……。」

ヴォルケンリッターが立ち上がり……。

「なんなんやるこの感覚……、うち……、あの人を知ってる気
がする……。」

「……?」「」「」

自分に対して疑問に思ったはやてに騎士達が頭を傾げる中……。

「決める!」

アクセルはエンジンメモリをブレードにスロットする。

『エンジン!』

そして引金を弾く。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

そのままアクセルはドーパント達に突っ込み……。

「はあああああああ!」

周囲をA字に切り裂くダイナミックエースを放つ。

「絶望がお前達の……ゴールだ。」

ドーパント達は爆発するも、その場にはブレイクされたメモリしか残っていなかった。

「こいつら……あいつの……。」

アクセルは一瞬気にかけるも……。

「……はあああああ!」

残っていたウエザードーパントに突っ込む。

『トライアル!』

走りながらメモリモードに変形させたトライアルメモリをドライブにスロットしパワースロットルを捻る。

『トライアル!』

アクセルの身体が黄色になった後、周囲から円形のエネルギーが発せられ、アクセルを青いアクセル、アクセルトライアルに変える。

「はあああああああ！」

ウェザーの雷撃を避けながらアクセルトリアルはそのままウェザーにラッシュを叩き込んでいく。

そしていつの間にか握っていたエンジンブレードの引金を弾きつつ、マキシマムクラッチを握る。

『エンジン！』

『トリアル！』

『マキシマムドライブ！』

「はあああああああ！」

ブレードによる回転斬りと回し蹴りの嵐、マシンガンタイフーンによりウェザーに次々と十字のエフェクトが刻まれてゆき……。

「絶望がお前の……ゴールだ！」

トリアルの後ろでウェザーが爆発した。

無論場には碎かれたメモリのみである。

トリアルははやて達近づぐ。

「怪我は……あるみたいだが生きてはいるみたいだな……。」

「あの……貴方は……。」

「俺は三童竜・・・仮面ライダーアクセルだ。」

「アクセル？ とりあえず礼を言う。助けられた。」

シグナムは頭を下げるのに続き、他の騎士達も頭を下げる。

「大したことはしていない。それに・・・。」

トライアルが振り向くともうドーパントが全滅したはずの場に・・・。

「まだ助かったわけじゃない。」

そこには剣を構えたカオスドーパントが立っていた。

「・・・。」

カオスは無言のままトライアル達に刃を向ける。

アクセルはゆっくりと強化アダプターをアクセルメモリにセットし・・・。

『アクセル・アップグレード！』

ドライバーにスロットしパワースロットルを捻る。

『ブースター！』

黄色い円形のエフェクトにより身体が変色、身体や手足にブースターが装着され最後にフェイスフラッシュャーにシャッターが閉められ

アクセルブースターへと変身を遂げる。

「……………」

そのまま互いに動かない。

「……………」

はやて達も緊張状態で言葉を失う。

そして…………。

「……………」

「はっ！」

互いに駆け出し…………。

「ふっ！」

「はああああ！」

互いの武器を交えた。

別の場所では…………。

「せええええええい！」

「ざああああああ！」

エターナルとラグナロクが互いに組合っていた。

マントから変幻自在に放たれるエターナルの攻撃をラグナロクはすべて捌き、ラグナロクの打撃もエターナルは見事に捌き、互いに有効打を与えられないまま取っ組み合いがつづく。

「……貴様……何者だ……。」

「言う通りラグナロクだよ。君もなかなか素晴らしいな。殺りあっていて退屈しないよ。」

「……別に嬉しくもなんともない！」

「誉めてあげてるのに……傷つくな！」

互いに右手でストレートを腹部に放つも双方左手で受け止めるした後、バックステップで距離を取る。

そしてエターナルから駆け出し再び取っ組み合う。

そんな技で戦い合うエターナルとラグナロク達の横では……。

「でりあああああ！」

「ぬあああああ！」

ファングとキメラがセイバーと爪で互いを切り裂きあっていた。

それには華麗などと言つ言葉とは縁遠く、野生の獣のように力をぶつけあつていた。

「いいなあ……。お前気に入つたぞ……。」

「戦いの内でよそ見をしてる暇があるんですか!？」

余裕を見せるキメラにファングはアームセイバーで切り裂く。

しかしキメラも同時に爪で切り裂き互いに吹き飛ばす。

しかし直ぐ様立ち上がり……。

「でりああああああ!」

「しゃああああああ!」

互いにラリアットをかましあい倒れるも、直ぐ様立ち上がり互いの刃で斬り合いを始める。

「おらあああ!」

ジョーカーはタイラントに蹴りを叩き込むが……。

「ふっ!」

タイラントは軽々と手で受け止める。

「！」

「もう少し踏み込んでみたらどうだ？」

「やろがあ！」

ジョーカーはタイラントにラッシュを叩き込むが全てを簡単にかわす。

「てんめえ……。」

「他になんかないのか？」

「舐めんのも大概にしるよ。パクリ野郎。」

『メタル！』

ジョーカーはメタルメモリを取り出しドライバーにスロットして展開する。

『メタル！』

メタルはシャフトを手にタイラントに振り下ろす。

「おらぁああああ！」

しかし……。

「はっ！」

タイラントは片手で受け止める。

「！……………やろがあ！」

メタルは振り回しながら的確な場所にシャフトを突いていくが、全てを防ぎつつ……………。

「ふっ！」

タイラントはメタルの腹部に重い一撃を放ち吹き飛ばす。

「つつ……………」

「もう終いか？」

「なら……………コイツだ。」

『トリガー！』

ドライバーにトリガーマモリをスロットし展開する。

『トリガー！』

「こいつでも食らってる！」

トリガーはマグナムをタイラントに放つが……………。

「ふん。」

タイラントは灰色のプリズムソード、タイラントソードで弾き……………

。

「何！」

「お返した。」

斬撃波をトリガーに放った。

「がああああああ！」

爆炎がトリガーを覆う。

「なんだ？ 終わりか？ もうすこしたん……」

タイラントが言いかけたとき……。

「まだ……終りじゃねえぞおおおお！」

スペリオルソードとビツカーシールドを持ったジョーカーエクストリームが駆け抜けてきた。

「面白い！ せいっ！」

「おらあ！」

互いにソードをぶつけあう。

そのまま互いにソードを素早く振り回すが、エクストリームはビツカーによる防御、タイラントは避け、互いに有効な一撃を与えないままソードを振り下ろす。

そして互いのソードがぶつかる。

「やはり惜しいな……。ここで殺すのは……。」

「誰がやられるかっつーの。」

せばぜりあいから互いにソードを持った手で拳を放ち双方向に吹き飛ばす二人。

「決めてやるぜ。」

エクストリームは四本のメモリをソードが納刀されたビツカーにスロットしていく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

『メタル・マキシマムドライブ!』

『トリガー・マキシマムドライブ!』

『サイクロン・マキシマムドライブ!』

そのままエクストリームはビツカーからソードを引き抜く。

「面白い。」

タイラントはロストドライバーからタイラントメモリを抜き、タイラントソードの持ち手にスロットしスイッチを押す。

『タイラント・マキシマムドライブ!』

エクストリームのソードには虹色、タイラントには灰色のエネルギー

ーが纏われ互いに構える。

「……………」

そして…………。

「ビツカー、……バーストカリバー！」

「でああああああ！」

互いに強力な斬撃波を放ち爆発が起きる。

爆煙が消えると…………。

「はあ…………、はあ…………、はあ…………、はあ…………、はあ…………、ういつ…………」

膝をつくエクストリームとまだまだ余裕を見せるタイラントがいた。

「中々楽しめたよ…………まあいいか。君は諦めよう。」

「はあ…………、はあ…………、はなっから…………はあ…………、そうしろっつーの。」

「それに君はあくまでいた方がいいだけだ。俺の計画には特に必要はない。」

「てめえが…………どんなことを考えてつかは知らねえが、この街を泣かせるようなことはさせねえ。」

「…………君は邪魔出来ない。なんせ俺が動くのは…………おつとこれ以上は言えないな。では失礼するよ。」

するとタイラントは空に巨大な丁字の斬撃を打ち上げる。

「待て！」

エクストリームが追おうとするが…………。

「！が…………。」

胸を抑えて膝をつく。

「…………じゃあね。左…………、翔太郎。」

タイラントは跳躍しどこかに消えていってしまった。

一人残されたエクストリームは変身を解く。

「…………アイツの目的って…………。」

しかし変身を解いた翔太郎は未知の敵に対し呆然とするしかなかった。

一方…………。

「はああああああ！」

「おお！」

「はい！」

「承知した。」

はやてと騎士達もアクセルの飛んでいった方向に動きだす。

（それになんやこのかんじ……。うちはあの人を……。知ってる？）

ただ一人、はやてが内心で不思議に思いながら。

「もう終いか。」

「仕方あるまい。」

同じく斬撃波を見たキメラとラグナロクは互いにファングとエターナルから距離を取る。

「ファング！ お前はなかなか食いがいいがある。また遊んでやるから楽しみにな！」

「……………」

キメラはファングを指指し……。

「君とはまた会う気がします。その時はまた楽しませていただきま

すよ？ 命の盗りあいを。」

「……………」

ラグナロクは両手を広げ気味悪くエターナルに語る。

そのまま二体は地面に光弾を放つ。

「！ 待て！」

ファングが追いかけるも、そこには既に二体は消えていた。

「やつらは一体……………」

「……………分かることは二つだ……………」

「？」

「今までのやつとは一味違つたということ……………」

「……………」

「……………連中はろくなことを考えてないということだ。」

「何かを起こそうと？」

「多分な……………とりあえず今の俺には知っていることが少ない。」

「……………あの……………」

「？」

「もし良ければ僕の師匠に会いませんか？」

「師匠？」

「きっと何かを掴んでいるはずですよ。」

「……………」

「どうですか？」

「……………とりあえず今デカイことを起こされたらちよつと面倒だ。連れてけ。」

「はい。」

二人は変身を解く。

「改めて右風来人です。」

「……………葵炎……………克巳だ。」

頭を下げる来人に対し克巳は顔を向けずぶつきらぼつに答えた。

一方到着したアクセルは……………。

「！」

胸部を抑え座りこむ翔太郎を見つけた。

翔太郎自身もアクセルの方を向く。

「……………照井？」

「……………暴我？ いや……………この世界でのアイツか……………」

「……………なに言ってるんだ照井。」

「悪いが俺は照井という男ではない。」

アクセルは変身を解く。

「三童竜……………恐らくは君の言う照井竜という男は別の世界の俺なんだろう。」

「別の世界……………！ てことはお前……………」

「暴我葬と会ったな。」

「……………アイツは一体……………」

「やつは暴我葬。本来の名は我鍊翔太郎……………しかしそれは俺達の世界があったときの名前だ。」

「あったとき？」

「やつは……………自らの手で自らの……………俺の世界を滅ぼした

男だ。」

「！」

たちすくむ二人。

そんな二人を不意に降りだした雨粒が濡らす。

そして翔太郎は運命を呪わずにはいられなかった。

自分が愛した街をもう一人の自分が滅ぼそうとしていることを。

暴君（修正版）（後書き）

謝らなければならないことがあります！

「決戦」にてラトラータークロスと書いたラトラーターのスキヤニングなんですか正式名称は「ガツシユクロス」というみたいです。

しかしラトラータークロスの方がなんだか分かりやすいかなあと思
い修正はしないと思います。

こんな自己チューを許してください（：A：）

ちなみにプロティラのスキヤニングは「ブラスティングフリーザ」
っていうみたいです。

謀略（前書き）

今回は短めです。

今日のオーズが・・・。

メズール強っ！

久々のトライドベンダー！最近ラトラーター多くない？

そしてゴーカイジャーはまあギャグ回でしたが、次回はハリケンジャーが帰ってくる〜。

謀略

翔太郎の仕事部屋に集まった翔太郎と竜、スバル、八神家の面々と事情を聞いたなのは、フェイト、ティアナ。

しかしはやては何故自分が竜を知っているかが分からずに考えていた。

そこで竜からの話を聞いた翔太郎以外の面々は啞然となる。

竜の世界で葬が行った反逆によって竜の世界が滅ぼされたことを。

「当時はやつはタイラントを制御しきれていなかったが、俺にもアクセルを持っていなかった。世界が滅んでからやつとこの力を得られた。俺達仮面ライダーの制作者シュクラウドが頑張ってくれたがな。」

「シュクラウドまでいんのかよ……。」

「？」

「いや、なんでもない。」

「それでその葬って人は何が目的なんですか？」

スバルが疑問を打ち明ける。

「タイラントにもあくまで制限がある。アイツはその制限を突破するためにブレイブとインフィニティを手に入れようとしている。」

「！ 何なんだそりゃあ。」

「わからない。ただ……。」

「……ただなんだ？」

「アイツが欲する以上ろくなもんじゃないってことは分かる。しかしそれに必要な物質はこの世界にあった。」

「……どういうことだ……。」

「以前この世界に存在していたロストロギア「レリック」。……ブレイブとインフィニティを得るにはそれが必要だ。」

「……！！！！」

「そんなあ。レリックなんて……。」

「でももうレリックはないはず……。」

なのはとフェイトが異を唱える。

「……それについてはアイツも馬鹿じゃない。」

竜は胸の内からTと刻まれたメモリを取り出す。

「なんだそれ？」

「タイムのメモリ。……時を遡る力を持ったメモリだ。」

「時を……。」

「遡る……。」

シグナムとヴィータが信じがたい目で見ると。

「……でも本当にそんなことが出来るのかよ……。」

翔太郎が異を唱える。

事実記憶を遡るメモリは知っているが、直接時間を遡るメモリなど聞いたことがなかったからだ。

「俺の世界ではガイアメモリが有効活用されていた。少なくともこの世界よりはな。こいつは試作品だが一往復くらいは使える。ただし質量や時間の歪みから計算して二人までだがな。」

「二人か……。」

「それにこいつは二つまで作られた。だとしたら……。」

「連中は過去に戻ってレリックを集める……。」

「ああ。そしてブレイブとインフィニティをヤツが手に入れたら神にも近い力を得て……。」

「……街どころか……世界が終わる。」

「世界が……。」

「終わる……。」

スバルとティアナ、他の面々も啞然となる。

すると……。

「だとしても二人過去に戻って連中を止めればそれは起こらないんだろう……。」

「……！」「……」その場の面々全員が声が聞こえた入り口を見るとそこには……。

「ど、どうも……。」

「……。」

視線を集めて恥ずかしそうな来人とふてぶてしく入り口に寄りかかる克巳がいた。

そんな中翔太郎とスバルは……。

「フィリップ……。」

「フィリップ……君？」

克巳を呆然と眺める。

「誰だそれ。俺の名は克巳だ……。」

「克巳？ …… 大堂！」

「どれだけ人の名前を間違えれば済むんだテメエは。俺の名前は葵炎克巳だ。」

克巳は二人を睨む。

（葵炎克巳 …… こいつも来人や三童のような ……）

「あ …… ああ。悪かったな葵炎。」

「し、失礼しましたあ！」

翔太郎は軽く、スバルは深く頭を下げる。

「しかし彼の言う通りだ。奴らを止めるにはそれしかない。」

「失敗したら ……。」

「四年前の世界で成功させられたら時間が歪み今ごと全てが滅ぶ。」

「 …… 二人か ……。」

「どうしますか師匠 ……。」

考え込む翔太郎に来人が弱々しく聞く。

「 …… 増援は無理なんだろ？」

翔太郎は竜に問う。

「一度行ったら次に「今」と聞かれるのは帰りのみだ。行くべきは何事にも柔軟に動けるやつが望ましいだろうな。」

「柔軟にか……。」

「……。」

翔太郎と来人が考え込むと竜が……。

「……俺としては左翔太郎……、俺とお前が行くことが望ましい。」

「……!」「」「」

「師匠も……。」

「翔太郎さん……。」

来人とスバルが翔太郎を見つめ……。

「……。」

はやても複雑な表情を竜に向けるが……。

「……俺は賛成だ。」

克巳は翔太郎達に歩み寄る。

「連中はみなかなり強かった。話によると連中の頭はかなりの腕……」

。。そいつ自身が行くんなら、そいつと直接やりあったやつ。。。そいつを知っているやつが行った方が柔軟かつ先を読んで動ける。」

「でもそうしたら現代は！今は！」

「二人いればなんとかなる。それに行けるのは二人だけなら丁度人は足りるだろ？」

克巳はエターナルメモリを見せる。

(エターナルのメモリ。。。まったくアイツの顔でエターナルとは。。。運命のいたずらか。。。)

翔太郎はそんなことを思いながらも。。。

「三童。。。いつ行ける？」

「俺やお前も準備がいるだろう。明日だ。」

「わかった。」

翔太郎は了承するが。。。

「でも師匠。。。」

来人が異を唱える。

「なんだ？大丈夫だ。お前や克巳がい。。。」

「僕はいいんです。克巳さん、強かったし僕だって仮面ライダーで

す。師匠や三童さんは信じています。でも僕じゃなくて……。」

来人の向ける視線の先には……。

「……スバル……。」

スバルが複雑な顔をしていた。

「……なあ、スバル……。」

「私は止めないよ翔太郎さん。翔太郎さんは私達のために行くんだから……。」

「あ……、ああ。悪いな。」

そして翔太郎は竜に顔を向ける。

「明日の10時に海沿いの工場、23練で……。」

「わかった。」

「遅れんなよ。」

翔太郎は腕を上げる。

「そつちもな……。」

竜も腕を上げ互いにぶつける。

「「「……。」」」

(ぜってー、守りぬいてやる！)

(悲劇は繰り返させない。二度と！)

(やりぬく・・・師匠の分まで僕が！)

(面倒だが任された以上は・・・やるか。)

他の面々が心配そうに見つめる中、四人の素顔の仮面ライダーは強い意思を内に秘め、腕をぶつけあった。

しかし・・・。

「・・・・・・・・」

スバルとはやての顔は晴れないままであった。

暴君の戦士（前書き）

敵キャラ紹介です。

我ながら面倒なキャラです。

暴君の戦士

ぼうが そう
暴我葬

旧名：我鍊がれん 翔太郎しょうたろう

年齢：23

身長・体重：桐山漣と同じ

髪型：銀髪で形は翔太郎と同様

目の色：白と黒のオッドアイ

口癖：「さあ、砕け散りな」

竜の世界で管理局のような国家権力内でのエリートであつたが、タイラントメモリの魅力に取り付かれ世界を裏切り、三体のドーパント達と共にその世界を滅ぼした。

錬金術が得意であり、人造人間ホムンクルスを生成しそのホムンクルスをドーパントにし、兵士として利用する。なおホムンクルスが変身したドーパントはメモリブレイクされると跡形すら残らず瞬時に消滅し破壊されたメモリのみが残る。

現在の名前は元の世界を滅ぼした際、もう存在しない世界での名前はないと解釈したため、新たに自らに名付けた名前。

全てを手にするブレイブとインフィニティを手に入れるためにレリックを収集する。しかし現代ではレリックは存在しないためタイムメモリで過去へと飛び、カオスドーパントとともにレリック収集を開始する。

なおキメラとラグナロクは人員から漏れたため現代で破壊活動を行う。

仮面ライダータイラント：

身長：205cm

パンチ力：10t

キック：15t

ジャンプ力：ひと跳び200m

走力：100mを2秒

榊葬がタイラントメモリとロストドライバーで変身する仮面ライダー。コート状のローブを装備している（分かりやすくいうとオーガ）。モチーフカラーは灰色で副眼は片方が赤でもう片方が点滅状態（以前の世界で竜に受けたダメージにより）。角はカブトムシのように「T」が角としてある。葬の戦闘能力に加え、タイラントの圧倒的なパワーにより圧倒的な戦闘能力を誇る。他にも超能力や光弾などの魔術ぎみた戦いも得意。

マキシマムドライブ：

タイラントヘルバイト：マキシマムスロットにタイラントメモリをスロットして発動。両足にタイラントメモリのエネルギーを集約して放つレッグシザーズ。破壊力は95t。

タイラントヘルエンド：タイラントソードにタイラントメモリをスロットして発動。灰色のエネルギーを纏ったの斬撃又は斬撃波。

ツール：

ロストドライバー：
基本的な機能は変わりなし。

タイラントソード：
灰色のプリズムソード。柄の部分にメモリをスロットすることでさらに力を解放させる。

ガイアメモリ：
タイラントメモリ：

「暴君の記憶」を内包するメモリ。あらゆる状況においても正に「暴君」のごとく、圧倒的な力で敵を追い詰める力が搭載されている。その反面、使用者を凶暴化させる力が内包されており、元の世界では何重のセキュリティに置かれていたが葬が他三つとともに奪い去った。

旅立（前書き）

本日二度目の投稿になります。
はやてにも本格的に春？

旅立

翔太郎と竜が四年前への旅立ちを翌日に控えたその日の夜……。

スバル宅。

「……………うし。」

身軽に動くことを考え、バック（後藤のメダルバック似）にとりあえずの荷物を準備し終える翔太郎。

すると。

「……………翔太郎さん……………」

スバルが浮かない顔で近寄る。

「どうかしたかスバル？」

「それ……………明日の準備ですか？」

「ああ。一応あった方がいいと思っつやつを考えてな。身軽に動くのも考えて少なめにな。」

「……………そう……………ですか。」

「？ どうした？」

突如スバルは涙目になる。

「・・・翔太郎さん、私あんなこと言いましたけど・・・本当は翔太郎さんと離ればなれになっちゃうと思うと・・・。」

そのままスバルの頬を静かに涙が伝う。

「うおっ！ スバル、おい、泣くなよ。おい頼むからよあ〜」
「なあ〜」

静かに泣くスバルに慌てふためく翔太郎。

（どうすりゃいい、どうすりゃあ・・・。なんかねえかなんか・・・）

「わかったよスバル。はやく帰ってくつから。な？」

「・・・欲しくない。」

「は？」

「行って欲しくないんです。翔太郎さん・・・。」

「・・・んなワガママ言ったってなあ・・・。」

「ワガママと思われても良いです。だだをこねてると思われても良いです。子供と思われても良いです。だから・・・行かないでください・・・。」

「・・・スバル・・・。」

そのままスバルは翔太郎に抱きつく。

「お願いしますよ〜。私を泣かせないんじゃないんですか〜。」

「

「……なあスバル。聞いてくれ……。」

「頼みますよ。お願いしますよ。お願いだから……。」

「……聞け……。」

「どうしても行くっていうなら首以外の全身の骨を折ってでも……。」

「いいから聞け！」

翔太郎の怒鳴り声にスバルはびくつき声を失う。

「いいかスバル……、俺が行くのは俺やスバル、なのはさんやフ
イトさん、来人らの未来を守りてえからだ！」

「……でも……でも翔太郎さんが行かなくても……。」

「俺はやつと直接戦った。それなりにエクストリームは有効だった。
三童もだ。アイツがもし俺の知ってるアクセルと同等ならかなりや
れる。それにな……。」

「……。」

「やつは俺だ。だから俺がケジメをつける。」

「・・・馬鹿だよ・・・馬鹿だよ翔太郎さん！」

スバルも思わず声をあらげる。

「馬鹿だろうがなんだろうが俺は行く！ 例えお前と別れることになってもまだ！ お前の未来を守りたいから俺は過去へ行く！ それが今・・・俺が歩むべき未来だ。」

「・・・未来を・・・守るために・・・。」

「ああ。納得してもらえなくても俺はやめない。・・・必ず・・・やつは止める！」

「・・・。。。」

「・・・わかってもらえなくても俺は行く」

翔太郎が言いかけた時スバルが後ろから抱きつく。

「・・・スバル・・・。」

「信じてます。私・・・、きっと帰ってくるって。・・・だから止めません。・・・待ってます。」

「・・・おう。」

ギョツと抱きしめ続けるスバルとただスバルの抱擁を受け続ける翔太郎。

その後二人は大人しく眠りに着いた。

(きつと帰る……。俺には……。信じて待ってってくれるやつが……。居場所がある。だから誰にも邪魔させねえ。俺達の……。未来は！)

翔太郎は胸の内に強い意思を秘めながら。

一方八神家……。

助けられた恩かはわからないがはやては竜を泊めることにしていた。竜自身も遠慮したが、準備や休養が必要と判断しあやかることとした。

そして深夜……。

「ふわあああ〜〜」

お手洗いに起きたはやては寢室に戻る途中……。

「ん？」

窓から月の光で出来た移る人影を見つける。

その人影は屋根にいるような感があったためはやては足をおぼつかせながら屋根に登るとそこには……。

「あれ？・・・三童さん？」

屋根に竜が座っていた。

「おはよう・・・と言つべきか、八神。」

「ま、まあそうなんかなあ。どないしたんですか？　こんな夜遅くに？」

「ちよつと考えごとをな・・・。」

「考えごと？」

「思えば俺は・・・疫病神なのかもしれない。」

「！　何を言い出すんや！」

「俺がもつと早くアクセルを使って・・・、元の世界でヤツを止めていれば左とナカジマを離ればなれに、・・・君達を傷つけずに済んだのかもしれない。」

実ははやて達や騎士達は怪我を負ったが、シャマルによって治されたものであった。

それを竜は見ていた。

「気にせんで下さい。それに傷は・・・。」

「それでも俺がぶがないばかりに君らに痛い思いをさせてしまっ

た。・・・申し訳ない。」

竜ははやてに頭を下げる。

「そんな！ ホンマに気にせんといて下さいよ。・・・それより・・・」

「？」

「竜さん、うちと会ったことあります？」

「・・・いや、君とはつい数時間前に初めて会っただけだ。何故だ？」

「いやあ、なぐんか竜さんを知ってるような気がしはるんやけど・・・気のせいやろか？」

「さあな。ただひとつ言えるのは・・・。」

「？」

「二度と悲劇は繰り返させない。この世界は滅ぼさせたりなんかしない。俺が・・・おれ達が。」

「・・・なんか男前やなあ竜さんは。彼女おつたんやない？」

「あいにくこんな性格でな。彼女などいたことがない。」

「ほ・・・ホンマですかあ〜。」

(よっしや！)

はやてのサムズアップは竜に知られることはなかった。

「そ、そんじやあ……。」

「？」

うちがえつと、……あの……だ、……第……第一号になれませんか？」

「？」

「……。」

(鈍感やなこの人)

はやてはいきなり竜の手を握る。

「……何だ。」

「わからへん？　うちが恋人第一号になるゆーてんねん。……それとも何か？　この可愛くてスタイル抜群な美人は嫌いかな？」

「……とりあえずいきなり恋人は早いと言っているんだ。」

「なんやあ、古風な方がいなあ……。」

「かもな……。」

「そやったらお友達からはどうやっ？」

「それなら歓迎しよう。」

「まあその内恋人にさせてもらうんやけどなあ」

「………そうか。」

竜は安心したように笑顔を浮かべる。

「そんじゃ約束してな。絶対左さんと一緒に帰ってくること！ ええか？」

「………無理だったら？」

「ホンマに針千本飲ませに行くからな。」

「………だったら飲まされないように頑張らないとな。」

「それでええ」

いたずらに笑う竜に満面の笑みを返すはやて。

そのまま二人は並んで座ったままその月を眺めた。

翌日。

海沿いの工場、23練。

翔太郎と竜は互いにそれぞれのバイクに寄りかかっていた。

そんな二人をスバルはやて、なのは達が見送りに立つ。

そんな中翔太郎はスバルに歩みよる。

「・・・翔太郎さん？」

翔太郎はそのまま荘吉の形見のソフト帽をスバルに被せる。

「貸しといてやる。戻ってくるまで大事にしるよ。」

翔太郎は代わりに以前スバルにプレゼントされたソフト帽を取り出し被る。

「・・・はい・・・。それじゃ・・・。」

するとスバルも背伸びして翔太郎の頬に優しく唇をつける。

「続きは帰ってきてからに」

スバルは頬を赤らめて笑顔を返す。

一方竜とはやては・・・。

「・・・うちもチュウすべきかな？」

「ひ、必要ない！」

「うちはしてもええけどな」

「……まだ早い。まずは友d」

「友達からやる？ わかつとるって。せやから……。」

はやては小指を差し出す。

「指切りや。」

「それなら……。」

竜もしぶしぶなが小指を絡ませる。

「指切りゲンマン、嘘ついたらマジで大出力魔法かゝります
つた」 指切

「……なんか変わってないか？」

「嫌やったらマジで帰ってきてな」

「……努力」

「努力やなくて確実にや！」

「わかった。」

竜は静かにはやての頭に手を置き……。

「必ず帰る。」

優しく頭を撫でる。

「うん　待つとるからな」

嬉し恥ずかしが、頬を赤くしながらはやはやは笑顔を返した。

そして……。

「頑張つてね。」

「あ、あんまり無理しないように……。」

「おっす！」

「ああ。」

なのはとフェイト……。

「翔太郎さん、スバルを泣かしたら承知しませんからね。」

「お、おうよ。」

ティアナ……。

「帰ってこいよ。お前とはまだ戦っていないからな。」

「はやてを泣かすようなことしたらあたしがぶっ叩きに行くからな
！」

「怪我には気をつけてね。」

「……………健闘を祈るぞ。」

騎士達など他の面々も二人の健闘を祈る中……………。

「……………。」

来人と克巳が二人に歩み寄る。

「……………。」

四人は何も言わない。

ただ……………。

翔太郎と来人、竜、渋々ながらも承知した克巳は互いに裏拳をぶつけあった。

そして……………。

『タイム・マキシマムドライブ!』

竜はタイムメモリをビートルフォンにスロットするとライブモードとなったビートルフォンは目の前を円状に飛びワームホールを作ります。

そして二人はそれぞれハードボイルダー、ディアブロッサに跨り……………。

「……………。」

無言のまま後ろに翔太郎は拳、竜はサムズアップを向けブラスターユニットと共にワームホールの中へ走り去って行き、ワームホールは消えた。

二人が去った後……。

「……頑張りましょうね克巳さん……。」

「……あんまり馴れ合くなよ。」

来人に憎まれ口を叩く克巳に……。

「スバル……。」

スバルを心配するなのはとティアナ……。

「はやて……。」

はやてを気遣うフェイトとヴィータ……。

シグナム達も心配そうに二人を見るが……。

「大丈夫……きっと……。」

「二人笑顔で帰ってくるって信じとるから……。」

スバルとはやては揺るぎない瞳を二人が消えていった方へ向け続けた。
ていた。

そして過去のミッドチルダ。

「……葬……。」

カオスドーパントが葬を呼ぶ。

「なんだカオス？」

「奴らが……。」

「左翔太郎に竜の奴か……。」

「……良かったのか？」

「いいに決まってるだろう！」

葬は立ち上がり……。

「それくらいの障害があった方が野望つてのは果たしがいがある！
いいなあああ……。楽しくなってきたあああああ！」

高層ビルの屋上から空に向けて笑い声を高々に上げた。

過去／初陣（前書き）

二人の過去偏第一号になります。

原作でいうファーストアライトからですがその後はちよくちよくオ
リジナルが入るかもしれせん。

過去／初陣

4年前のミッドチルダに来た二人だったが……。

「……………」

「……………」

山奥の駐車場で二人は悩んでいた。

実は……。

「……………勢いつけて来たはいいけど俺らレリックを探す手段ねえじゃねえか！」

事実翔太郎が改造したスタッグフォンやビートルフォンはドーパント探知は出来てもレリックやガジェットのプロ知は出来ないからだ。

「……………仕方ないだろう。俺の世界にはレリックなど存在すらなかった。左の世界でも4年前にレリックは全て壊れてるくなく資料もなかったんだ。おまけに事を急いでいたからな。」

「ま、まあな。」

「……………しかしここまで動けないとはな。」

「俺の身分も未来でしか使えねえからなあ。」

「……………」

「……………困った。」

二人が黄昏ていると……………」

1台の黒い車が止まってきた。

「！ あれって……………」

翔太郎はその車から降りた女性を知っていた。

「バルディッシュ……………セツ トアップ！」

翔太郎がいた現代よりもまだ子供らしさが残っていたフェイトであった。

バリアジャケットを纏い飛んでいったフェイトをみた二人は……………」

「あれは確か……………」

「フェイトさんだ。となると……………近くに機動六課が……………」

「機動六課？」

「スバルやなのはさんが4年前に所属していたはやてさんが隊長の遺失物管理組織だ。」

「！ それなら……………」

「ああ、多分レリックについてもかなりな……。追うぞ。」

翔太郎はスタッグフォンを開くと画面に動く矢印が。

正体はさっきフェイトに取りつけたスパイダーショックの発信機だった。

二人は直ぐ様ボイルダーとディアブロッサに跨り、翔太郎を先頭にその場を走りさって行った。

しかし二人は気付かなかった。

既に暴我葬が動き始めたことを。

なのはとフェイトが戦い地面にガジェットの残骸を落としていた頃……。

「なかなか愉快だなあ。」

葬はその一部始終が一望できる崖上でそれを見物していた。

「それと……。」

葬が見た方向にはガジェットとフォワード四名が戦っている列車があった。

「それじゃあ……。始めるか。」

葬は地面に陣を描いていく。

しかし魔法陣ではなく……。

「……………よし。」

錬金術に使われる錬成陣であった。

「とりあえず四匹でいいか……。」

陣からプラズマが走り徐々に人型が四つ作られていく。

そして……。

「……………誕生日おめでとう。」

葬が拍手する先には白い土人形のような異形の生物、人造人間ホムンクルスが四体立っていた。

「とりあえず始めは大事だ。君ら二人はレリックを手に、君ら二人は空のハエを。邪魔するようなら殺そうが食おうが好きにしていよ。」

葬は懐から四つの非純正のガイアメモリを取り出し、四体のホムンクルスに投げつけるとガイアメモリ達はそのままホムンクルス達の中で入っていった。

『バード!』

『コマンダー!』

『バイオレンス!』
『ケツアルコアトルズ!』

四体のホムンクルスはそれぞれバード、コマンダー、バイオレンス、ケツアルコアトルズの四体のドーパントへと変貌し……。

「行ってらっしゃい。」

葬の一言でコマンダーはバード、バイオレンスはケツアルコアトルズに捕まり、列車へと飛び立っていった。

そのころ……。

「三童!」

「ああ左。この反応は……。」

「ドーパント!」

ボイルダーとディアブロツサを止める二人はそれぞれスタッグフォンとビートルフォンを見る。

「どうする……。二方向に二体ずつか……。」

「片方はフェイトさんと交戦中か……。」

「俺は空のやつを叩きに行く。左は列車の二体を頼めるか?」

「わかった。無理すんなよ。」

竜は無言で頷きアクセルドライバーを腰に装着する。

そして……。

『アクセル!』

「変……身!」

アクセルメモリをスロットしパワー・スロットルを全開に捻ると円形と槍のエフェクトが現れ、仮面ライダーアクセルへと姿を変える。

そしてアクセルの足元に魔法陣が現れ赤いウインググロードが生成される。

「そっちも無理すんなよ。」

「おう。」

アクセルはドライバーを外し跳躍しバイクフォームに変形、ウインググロードを疾走していった。

そして残った翔太郎は……。

「俺も続くか……。」

スタックフォンを操作し始める。

「はあ……、はあ……、はあ……、はあ……、はあ……。」

なんとかガジェットドローンを全て破壊したなのはフェイトだったが突如現れたバードとケツアルコアトルズに苦戦していた。

「くっ、強い……。」

「フェイトちゃん、なんなのこれ……。」

「わからないけどたとえ全開の私達でも……。」

「うん。多分勝て……ない……。」

二人はただ二体のドーパントからの遠距離攻撃をシールドで耐えるが、徐々に押されてゆきシールドにもヒビが入っていく。

そしてバードは巨大なエネルギー弾を生成し始める。

「！ フェイトちゃん！」

「あれを打たれたら耐えられない。」

しかしそれを気にせずバードはエネルギー弾を投げようとし……。

「っ！」

「くっ！」

二人が歯を噛み締めた時……。

「はあああああああ！」

赤いウイングロードがバードに伸びたかと思いきや、その上を走る赤いバイクがバードを弾き飛ばす。

「「！」」

二人はそのバイクを見つめる。

「なんでバイクが……。」

「しかも無人……。」

しかし……。

「はっ！」

赤いバイクは宙返りするとみるみる内に……。

「なんなの？」

「変形した……。」

そのバイクは仮面ライダーアクセルへと姿を変えた。

「怪我はないか？」

「え……、あ……。」

「だ……、大丈夫……です……。」

「なら良かった。……後は任せる。」

「あの……。」

「貴方は……。」

二人が聞くとアクセルはバードとケツアルコアトルズにエンジンブレードを向け……。

「俺は……仮面ライダー……、アクセル！」

「「仮面ライダー？」」

「さあ……、振り切るぜ！」

二体に伸ばしたウイングロードの上を駆け出していった。

「はぁ……、はぁ……、なんなのよこいつら。攻撃が……効いていない……。」

二体のドーパントを睨むティアナと隣にいるスバルとエリオ、後方には傷ついたフリードを気遣うキヤロ。

すると。

「考えても始まらないよ！　いっくぞおおおおお！」

スバルがバイオレンスに突っ込む。

「ちよつ、馬鹿！ スバル！」

「スバルさん！」

ティアナ達が止めるも……。

「うおりあああああ！」

スバルはリボルバーナックルをバイオレンスに放ち、命中したが……。

「！」

バイオレンスは打点をかきいかにも効いてないことを表す。

「そんな……、が……。」

バイオレンスは唾然とするスバルの首を掴み上げ、締め上げていく。

「スバル（さん）！」

ティアナとエリオも動きだすもコマンダーとコマンダー兵に止められる。

「スバルう！」

「あ……、あ……、が……。」

バイオレンスはそのまます容赦なく力を込めていく。

「スバル！」

「スバルさん！」

ティアナ達の声が虚しく響き……。

「……か……。」

（死ぬの……かなあ私……。こんなところで……。誰も守れず
に……。誰か……。助けて）

スバルの目から涙が流れかけた時。

バイオレンスから火花が散りバイオレンスはスバルを離し吹き飛ば
される。

「……あれ……。生きてる……。」

スバルは拍子抜けた声を上げるが……。

「間に合ったぜえ……。まったく変わらねえなあお前は……。」

「……！」

エリオではない男の声が聞こえ、一同は声の方を向く。

そこにいたのは……。

「そこまでだ！ ドーパント！」

ハードブラスターをバックにしたジョーカーマグナムを構える翔太郎がいた。

「あの……。」

「貴方は……。」

「……。」

ティアナ達が啞然とする中……。

「悪いのが後で話す。危ねえからちよつと退いてな。」

翔太郎はスバルやティアナ達の前、ドーパント達の正面に立つ。

「行くぜ？」

『ジョーカー！』

翔太郎はドライバーを装着しジョーカーメモリを手にし左手でスロットする。

「変身！」

そのまま左手でドライバーを展開させながら右拳を開く。

『ジョーカー！』

するとみるみる翔太郎の身体を漆黒の装甲が覆われていき、漆黒の戦士が現れた。

「うそ……。」

「マジ……。」

「すごおおい……。」

「かつこいい……。」

スバル、ティアナ、キャロ、エリオが個々の反応を示す中……。

「さあ、……お前達の罪を……。」

ジョーカーは左手をスナップさせ……。

「数えろ！」

左手の人差し指を二体のドーパントに向け走りだした。

過去／契約（前書き）

無駄に長くなりました。

次は現代偏かな？

ちなみに自分、ライダー48によると自分は仮面ライダーZ0でした。

過去／契約

「おらああ！」

ジョーカーは打撃や投げ技でコマンダー兵をなぎ払っていく。

しかしコマンダー兵はぞろぞろとジョーカーに群がっていく。

「ったくぞろぞろと……。ショッカーかよこいつら……。」

ジョーカーはヘッドロックしながらそのコマンダー兵を中心に兵達を蹴りふせていく。

「こうなりやあ……。」

『メタル！』

ジョーカーはメタルメモリを取り出しドライバーにスロットし展開する。

『メタル！』

ジョーカーは真ん中のセントラルパーテーションの跡から正反対に体色が変化し仮面ライダーメタルになる。

メタルはシャフトを手にし……。

「行くぜえ！」

「コマンダー兵の中へ飛び込んでいった。」

「うおりゃあ！」

シャフトを自在に叩き付けていくメタルを見て……。

「……………すげー……。」

「凄いですう……。」

啞然とするティアナとキャロは……。

「おお……。」

「かつこいい……。」

「……………。」

目を輝かせるスバルとエリオに苦笑いを浮かべる。

そんな中……。

「これで……………最後だ！」

メタルシャフトで突き飛ばされたコマンダー兵は静かに消滅していった。

すると次はバイオレンスが迫ってくる。

「へっ！ デカブツはこいつでもくらってな！」

『トリガー！』

メタルはトリガーメモリをスロットし展開する。

『トリガー！』

「おりゃあ！」

仮面ライダートリガーはトリガーマグナムをバイオレンスやコマンドーに放ち吹き飛ばす。

そして傷つきながらも立ち上がるつととするドーパントの前に立つトリガーは……。

「そろそろ決めるか。」

『ジョーカー！』

ジョーカーメモリを構えた。

「はああああああ！」

一方のアクセルはケツアルコアトルズの攻撃を避けつつバードにエンジンブレードを叩き付けていた。

「はっ！」

『ジェットー!』

そして隙あらばジェットやエレクトリックで着実にケツアルコアトルズにもダメージを与えていく。

そのかいあつてかケツアルコアトルズの動きは鈍くなっていく。

「凄い……。なんなんだろうフェイトちゃん……。」

「動きに無駄がない……。あの人……。かはわからないけどあの方は一体……。」

二人が呆然と人間離れしたアクセルの戦いを見つめる中……。

バードも……。

「はあ!」

アクセルの剣激で吹き飛ばされるがそのまま飛行し再度向かってくる。

しかしアクセルは冷静にブレードの引き金を弾く。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

「はあああああ……。はっ!」

アクセルは宙にブレードをA字に切り裂くように描き、バードにダイナミックエースとして飛ばし、バードは空中で爆発し破壊された

メモリのみが落下していった。

そしてアクセルはゆっくりとケツアルコアトルズを向くが、ケツアルコアトルズは動じずに向かってくる。

「……………はっ!」

アクセルは飛びかかるケツアルコアトルズを跳躍して避けた後……。

「はああああああ!」

エンジンブレードを両手で振るいケツアルコアトルズを叩き落とす。

「貴様にはこれだ。」

アクセルはウイングロードを落下していくケツアルコアトルズに伸ばし……。

『トライアル!』

トリアルメモリをスロットしパワーロットルを捻る。

『トリアル!』

ケツアルコアトルズに伸ばしたウイングロードを疾走しながらアクセルは黄色に、そして外装がはがれるかのようにアクセルトリアルへと変身し音速のスピードでケツアルコアトルズを追いかける。

そしてトリアルメモリを抜きメモリモードにしたトリアルメモリ

リのボタンを押した後宙に投げ、そのままケツアルコアトルズにマシンガンスパイクを叩き込み始める。

「はあああああああ！」

するとみるみる内にケツアルコアトルズにT字のエフェクトが刻まれていき……。

「はっ！」

アクセルトリアルはケツアルコアトルズを踏み台に飛び作ってあったウイングロードに着地するとトリアルメモリをキャッチし……。

「9.5秒……、それがお前の絶望までのタイムだ。」

ケツアルコアトルズは地面に激突し爆発し、大きな火柱をあげた。

「……………！」

アクセルトリアルが振り向くと……。

「……………。」

呆然としているのはとフェイトがいた。

「怪我はなかったが高町、ハラオウン……。」

「え、あの……。」

「なんで私達を……。」

「後で話そう。とりあえず列車の方も落ち着いたらろう……。」

「！列車の方って……。皆……。」

「心配はいらない……。」

「「？」」

「性格は温いがいい腕だ。」

「……あの……。」

「？」

「仮面ライダーアクセルさん……でしたか？ 詳しい話を聞きたいのでご同行願います。」

「ああ。」

アクセルはトリアルメモリを抜き三童竜に戻る。

「仮面ライダーアクセル……三童……竜だ。」

「私達は……。」

「知ってる。高町なのはにフェイト・T・ハラオウンだな。」

「は、はあ……。」

「どっも……。」

竜はゆっくりとなのはら二人に歩み寄っていった。

「決めるぜ。」

ジョーカーはジョーカーメモ리를 マキシマムスロットにスロットする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「ライダーパンチ……。」

ジョーカーは右拳に紫のエネルギーを纏い……。

「たああああああ!」

コマンダーにジャンピングパンチを叩き込む。

そしてジョーカーは身体にプラズマが走るコマンダーを踏み台に跳躍し、再度ジョーカーメモ리를 スロットする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「ライダーキック!」

そしてエネルギーを纏った右足でライダーキックをバイオレンスに

叩き込む。

そして着地したジョーカーの背後で二体のドーパントは大きな爆発とともに消えた。

その場には破壊されたガイアメモリが。

「！　なんでメモリだけが……。」

ジョーカーは驚いたのは本来現れるべき犯人が現れず、ブレイクされたメモリのみが残っていたからだ。

しかもそれは現代で翔太郎が頭を悩ませていた事例であった。

「……アイツらが関わってんのか……。」

ジョーカーが考える中……。

「あのお……。」

「あん？」

振り向くとティアナ達がジョーカーを不思議そうな目で見ていた。

「貴方は……。」

「あ〜、俺は仮面ライダージョーカー……。」

ジョーカーはドライバーを閉じ変身を解く。

「左翔太郎だ。」

翔太郎は丁寧に自己紹介する。

「ど、どうも……。」

「はじめまして……。」

ティアナとキャロは丁寧に挨拶を返すが……。

「（キラキラキラ……）」

スバルとエリオは翔太郎を光る目で見つめ続ける。

「……と、とりあえずよおティアナ、さっさとレリックを回収しちゃってくれねえか？」

「……！」

「！　なんで私のことを……、それにレリックについても……。」

二人にたじろぎながら言った翔太郎の言葉にティアナは驚く。

「いや、連中が出たんなら多分この列車内にあるのかと思ってな。」

「……！」

「あの怪物についても知ってるんですか!？」

目が覚めたのかスバルが驚く。

「一応な……。」

「……とりあえず左翔太郎さんでしたか。詳しい話を聞きたいんですが……。」

「こつちもそのつもりで来たからな。ただし丁重に頼むぜ。」

「えっと……、は、はい。」

翔太郎の答えにティアナは頭を傾げながらも返事を返した。

その後翔太郎はスバル達、竜はなのは達に保護され互いのバイクと共に六課本部に向かった。

彼らが飛び去ったへりを葬が笑って見つめることも知らずに。

「そやったら二人はその竜さんがいた世界から来た暴我葬っていう人を止めるために未来から来たと……。」

「ああ。」

「……………(コクッ)」

会議室で翔太郎と竜の話に啞然となるはやてや他の隊長陣にフォワード陣。

「そんでこの映像の怪物はなんなんですか？」

「星の記憶が内包されたアイテム、ガイアメモリにより人間が変化した怪人ドーパントだ。俺は未来でこいつらと戦ってた。俺だけじゃなく他にもな……。」

「あなた方の姿は？」

「仮面ライダー……アイツらとは違い純正のメモリとメモリと併用して使用するメモリドライバーを使って変身するガイアメモリの戦士だ。」

「……聞けば聞くほど現実味がないけど嘘を言ってるように思えへんし……。」

考えこむはやてに……。

「はやてちゃん、多分この人達本当のことを言ってると思う……。」

「私達やフォワード陣の皆を助けてくれたしね。」

なのはとフェイトの後ろではフォワード陣も頷く。

「うーん。皆が言うからは本当かもしれへんなあ。左翔太郎さんに三童竜さん、現在管理局は人出不足やし映像でもわかるくらい強力なドーパントゆう怪人を倒すだけの技量もある。もし良ければうちらに協力してくれませんか？」

「おう。よろしく頼みます。」

「よろしくな。」

「「「「「早っ!」「」「」「」

二人の速攻な返事にはやてとシグナムを除く隊長三人、スバルとテ
ィアナが驚く。

「早って……。俺らはレリックやガジェットドローンに対して全
くと言っていい程知識がないんですよ。」

「ヤツらがレリックを探すなら君らと一緒に行動した方が効率が
いからな。」

「それじゃあ……。お二人は民間協力者でええですか？」

「おう。」

「ああ。」

「……。ありがとうございます。助かります。それと左さん
に竜さん……。」「

「「「」

「うちの親友二人と皆を助けてくれて本当にありがとうございます
う。」

「……。大したことはしてねえっすよ。」

「誰かを守るために戦うのが仮面ライダーだ。俺達は当たり前のことをしただけだ。」

なのはやフェイト、フォワード陣に頭を下げられ二人はちょっと照れくさそうにする。

「自己紹介が遅れました。うちは……。」

「八神はやて。他にシグナムにヴィータ……。」

「「！」」

「！ なんでうちらを……。」

「未来で世話になったからな。」

「ほ、ほんまですかあ〜。びっくりさせんでくださいよ〜。」

「……悪かったな……。」

竜は微笑みながらはやてに答える。

「……い、いえ……。」

対してはやてはちょっと照れ……。

「とりあえずお二人、お疲れやろっしりイン、お二人を部屋に案内頼めるか？」

「はいですう！」

翔太郎と竜はリインフォース2について部屋を後にした。

「なんだか二人とも頼もしいよね。」

「うん。」

なのはとフェイトの後ろでは……。

（未来か……。そうや。未来は……。うちらが繋げていくんや。予言なんで実現させへん。うちらが……。絶対に）

はやてが夜天の書の待機状態の十字架のペンダントを握りしめた。

「なんだ左。話とは……。」

部屋にやって来た翔太郎に聞く竜。

「三童……。あなたなら知ってるか？ こいつを。」

翔太郎は例の事例の写真……。

メモリブレイクしても犯人が現れないドーパント犯罪の写真を見せる。

「あなた……。なんか知ってるな……。」

「機会がなくて話せなかったな。これは一応メモリの媒体はあった。」

葬の作り出したホムンクルスがな。」

「……人造人間……。」

「ああ。やつは自らの魂の一部をホムンクルス達に定着させて行動させる。その上やつらはマキシマムを受けると即細胞破壊を招き跡形すら残さない。」

「だから現場にメモリしか残らないのか……。」

「ヤツはホムンクルスを一度に作れる数は限られてはいるが無尽蔵に作りだせる。……強敵だぞ。……それにやつに従える三体のドーパント……。」

「まだなんかあんのか？」

「あの三体のドーパントは葬が作り出したそれぞれ意思を持ったメモリを核とした人間の媒体を必要としない純度100%のドーパントだ。」

「！」

「だから星の記憶の力を完全に使いこなせる。……強敵だぞ。」

「……それでも、俺らがやるしかねえんだよ。」

「……悪かったな。」

「？」

「……俺がお前達を巻き込んだ。俺が元の世界でヤツを止めていれば……。」

「それ以上言うな。前にあるヤツに言われた。ライダーは助け合いつてな。だから俺は戦うぜ。お前や……他のヤツらともな。未来は……。」

翔太郎は竜に右拳を突き出す。

「俺達が繋いでいく。明日は俺達が切り開く。あんな偽物野郎に邪魔させねえ。……だろ？」

「……ああ。」

竜も左拳を突き出し翔太郎の拳にぶつける。

そして翔太郎は無言で退室する。

(アイツの……、スバルの未来は……)

(はやてや……、アイツらが笑う未来は……)

(俺達が必ず守る!)

互いに内心に熱い決意を秘めながら。

現代／茶番（前書き）

題名が浮かばなかったです。

ちなみに今回ゲストが二人
あえて名前は出しませんが。

現代／茶番

時は戻り現代。

「全く騒がしいですね。」

「まあ今日からインターミドルつつー大会があるみたいだから当たり前じゃね？」

「騒がしいのは苦手です……。」

「そう言わないの。ほらほらおでん食ったら？」

「いいません……。」

「そんなこと言わずにさあ。ほらほら人形に持たせたら、……あれこいつ手堅てえな。ちよつと貸してよドクター。」

「やめなさい……。」

「ちよつ本当に堅てえな。伊達さんこんぐらいじゃ負けねえぞ。」

「やめなさい……。」

「頑固だなこいつ。ドクターそっくりだ！」

「ヤ〜〜〜〜メ〜〜〜□〜〜〜！ ヤ〜〜〜〜メ〜〜〜□〜〜〜！」

大会会場前のベンチで茶番を繰り広げる二人はさておき……。

ここは大会会場の客席。

今日はヴィヴィオ達やハリー達のエリートクラスへの昇格のための予選当日である。

「……………いけるなこいつ……………」

克巳は客席でたこ焼きを食べている。

するど。

「これはこれは克巳さん。」

「！ ヴィクトーリアか。久々だな。」

上段からヴィクトーリアが降りてきて挨拶をする。

実は克巳は以前のインターミドルでハリーにほぼ強制的に応援されたときヴィクトーリアと知り合っていた。

それから高飛車な性格であるにも関わらずヴィクトーリアは何かと克巳に近寄って来るようになった。

まるで好意を持っている女子が好きな男子に近寄るかのような。

「今日はどのような？」

「見てわからないか？ 応援だ。まああいつなら予選で落ちることはないだろうがな。」

「……………ずいぶんとあの不良娘を信頼しているんですね？」

ヴィクトーリアの額に若干血管が浮かぶ。

「……………まあ付き合いは長いからな。」

「……………そうですか。」

再度血管が。

「とりあえず座ったらどうだ？」

「お邪魔しますわ。……………あら？ その食べ物は何？」

「なんだ？ お嬢様はたこ焼きも知らないのか？」

「たこ焼き……………、お一つよろしくて？」

「ああ……………ほら……………。」

克巳はたこ焼きを爪楊枝に刺しヴィクトーリアに差し出す。

「い、いただきますわ。あ〜ん。」

ヴィクトーリアは顔を赤くしながらたこ焼きを頬張る。

「ん。なかなか絶品ですわね。」

ヴィクトーリアは若干顔が赤いまま飲み込む。

すると。

「あゝ！ 何お前、克巳に食べさせてもらってんだ
！」

ハリーがさぞご立腹で歩み寄る。

「あら？ いましたの？ プレッシャーで泣き出して顔を出せない
のかと思いましたわ。」

「なんだとお〜〜。」

「それにわたくしはそんなに克巳さんと会う機会はなくてもあなた
のようにいつまでもうじうじせずに一発一発を確実に当てています
のでわたくしの方が克巳さんよりも距離は近いのではなくて？」

「うぐぐぐぐぐぐ。。。」

ヴィクトーリアとハリーが妙なことで競いあっている中。。。

「。。。一生やってる。。。。」

克巳は関係ないかのように席から予選の内容を見物していた。

一方。。。。。

「みんなお疲れさま〜。」

「ありがとうございます来人さん」

「・・・ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

来人は予選を無事勝ち進みスタンドに帰ってきたヴィヴィオ達四人に自前のタオルと水筒を渡す。

「予選通過おめでとう。みんな凄かったよ〜。」

「ありがとうございます 来人さんがいたからですよ」

「そ、そう？ なんか照れるなあ〜。」

ヴィヴィオに笑顔で言われ来人は若干照れるように頬をかく。

「・・・でもこれからも負けません。」

「うん。頑張つて。僕はバックアップぐらいしかできないけど皆が精一杯できるように、僕も精一杯頑張るから。」

「・・・はい・・・。」

アインハルトは若干頬が赤い。

すると・・・。

「ふっふっふっ・・・。甘いよ来人さん。」

「「「「?」「」「」

「狙うは優勝有るのみ!」

リオは天井に拳を掲げる。

周囲からの痛い視線を気にせずに。

「ははははは・・・。」

苦笑する来人に・・・。

「ちょ、ちよつとリオ・・・。」

「恥ずかしいよあ・・・。」

「・・・。。。」

リオを落ち着かせようとするヴィヴィオにコロナ、いきなりテンションが上がったりリオに唾然とするアインハルト。

しかしここから見ると来人が普段仮面ライダーとして戦っているとは周囲は夢にも思わないだろう。

すると。

「！」

来人のデバイス、スピリッツが鳴り出し現れたモニターには矢印が映る。

「……………」

それを見るやいなや……………」

「…………悪い皆。ちよつと野暮用が出来ちゃった。」

「え〜〜〜〜。これからエリートクラス昇格のお祝いがうちであるのに〜〜〜。」

ヴィヴィオがだだをこねるが……………」

「大丈夫。ちよつと遅れるかもしれないけどちゃんとお邪魔するから。ねっ？」

「わ、わかりましたあ。待ってますからね！」

来人にウィンクされたヴィヴィオは顔を赤くして納得する。

「で、でも翔太郎さんはいないんじゃない……………」

アインハルトらは翔太郎はとある出張で他の世界に行っているという事になっている。

翔太郎が過去に行ったということは局の極秘事項であるため彼女らは翔太郎がいないということしか知らない。

そして新たに二人、味方が増えたこともまだ聞いていなかった。

「それなら大丈夫。頼もしい人がいるから……。」

「……?」「……」

「とにかくちゃんと行くから料理とっついてね。」

「あ、ちよつ……。。」

アインハルトが止めかけるもそれを聞かずに来人は走り去って行った。

「……ぬぐぐぐぐぐ……。。」

ハリーとヴィクトーリアは克巳の後ろで張り合っている。

「…………。。」

当の克巳は他人の振りをするかのようには距離を離し缶コーヒーを飲んでる。

「……騒がしいなオイ……。。」

すると克巳のネクロオーバーも……。

「あ?。」

映し出されたモニターには矢印が。

「……ったく。……まあこの場は助かったがな。」

克巳は席を立ち走り出す。

「あっ、おい！」

「克巳さん、何処に行きますの!?!」

二人の止める声も聞かずに走り続け、駐輪場の自身のオフロードバイクに跨った。

そして克巳が前を走り去っていったベンチでは……。

「ちょっとドクター、こいつ目つき怖いよ? ちょっと貸して! 俺がコーディネートしてやっから。」

「それを言うならコーディネートです。ちょっとやめなさい。」

「いいからいいから……。」

「やめなさい……。ヤ~~~~メ~~~~口~~~~! ヤ~~~~メ~~~~口~~~~!」

未だに人形男とおでん男の茶番が続いていた。

「着いた！」

「……ふう。」

アイスエイジとマグマが暴れる現場に到着した二人。

「さっさと片付けて……。」

「……寝るか。」

「なのはさんとフェイトさんの料理！」

克巳と来人、二人の動機は違うが二人並んでドライバーを付ける。

『サイクロン！』

『エターナル！』

「「変身！」」

来人はサイクロンメモリ、克巳はエターナルメモリをドライバーにスロットし展開する。

『サイクロン！』

『エターナル！』

来人は緑の、克巳は白い装甲を纏った後波動を放ち仮面ライダーサイクロン、仮面ライダーエターナルに変身を遂げる。

「さあ……、お前達の罪を数えろ！」

サイクロンが右の人差し指を向けると、二人はドーパントに向け走り出した。

現代／後談（前書き）

思った以上にバトルはあっさりですが、ちょっと二人に＋ を加えてみました。

次は過去編？

現代／後談

「そいつ！」

エターナルはマグマ……。

「でりゃあー！」

サイクロンはアイスエイジと戦い合っている。

「ふっ！」

しかし相手が悪くマグマはエターナルの青い炎の打撃により徐々に追い詰められてゆき……。

『ヒートー！』

アイスエイジは高熱のヒートの連続パンチにダウン寸前である。

そして……。

「よし！ そろそろ決めましよう克巳さん！」

「……………いい加減に……………寝ろ。」

ヒートはマキシマムスロット、エターナルはエターナルエッジにメモリをスロットする。

『ヒート……………』

『エターナル……』
『マキシマムドライブ!』』

すると二体のドーパントは苦しみ出す。
そしてヒートは両手に炎を纏い、エターナルはサッカーボールくらいの青い炎の球体を作り出し……。

「ヒート……バーニングヒート!」

「そいつ!」

ヒートのヒートバーニングヒートとエターナルのオーバーヘッドキックで放たれたネバーエンディングヘルで二体のドーパントは爆発。
後には破壊されたガイアメモリのみが残る。

それを見た二人は……。

「またメモリだけ……。」

「……どうなっている。なぜメモリだけが……。」

啞然とする。

その時。

「……かくれんぼが趣味か?」

「!」

エターナルが喋りかけた方向にサイクロンも向くと……。

「う〜ん。やはり君に気配を察しられないようにするのは難しいな。」

ラグナロクがいた。

「……こいつら、お前らと関わりがあるようだな。」

「何故そう思うんだい？」

「関わりのないやつ場に現れる馬鹿がどこにいる。」

「なるほど。今回は実験だよ。自分の作ったホームクルスがちゃんと動くかのね。」

「！じゃあ最近の犯人のいないガイアメモリ犯罪は……。」

サイクロンが構える。

「そう。まあ以前のは葬が作ったやつだけだね。」

「……目的はなんだ？ そいつが帰る場所のお留守番か？」

「いや。幸い自分は彼と違って慎重派だね。言う訳にはいかない。」

「ならばその口をこじ開けてやる。」

エターナルがエッジを向けるが……。

「悪いが今日は戦う気はない。そんなじゃ。」

ラグナロクは跳躍し立ち去っていった。

「……………なんだったんですかね、アイツ。」

「……………俺が知るか。…………ただ…………。」

「ただ？」

「……………どうやらアイツにはレクイエムが効かないみたいだ。」

エターナルのエッジにはエターナルメモリがスロットされていた。

実は会話の途中、エターナルは密かにエッジにスロットしていたがラグナロクには何の反応もなかった。

「それじゃあ…………。」

「……………多分連中にレクイエムは通用しない。」

「……………。」

「……………だがそれぐらいなければつまらん。」

「え？」

「叩きがいがあるってことだ。」

「はあ……………。気楽ですね。」

「……とりあえず今日は何も無い。俺は帰って寝る。お前は
どうする？」

「僕はみんなにお呼ばれしたので料理をごちそうになり……。」

「……呑気だなお前。」

克巳の辛口を聞きながらも二人はその場を駆けつける局員に任せる
ことにし、その場を変身を解きながら後にした。

「みんなエリートクラス昇格おめでとう。」

「今日は楽しんでいてね。」

「……いただきま……す。」

「い、いただきます。」

料理をもてなしてくれたのはとフェイトにギリギリ間に合った来
人含めた五人は食事を始める。

「みんな凄かったね……。カッコよかったよ……。」

「ありがとうございます。」

「うん。ありがとうございます。」

リオとコロナは笑顔だが……。

「な、なんか……。」

「複雑です……。」

ヴィヴィオとアインハルトは微妙な顔を浮かべる。

好きな男子に可愛いではなくカッコいいと言われることは嬉しい感情は浮かばないだろう。

「ん？ どうかした？」

「い、いえ……。」

「なんでもありません。」

来人が聞き返すもヴィヴィオとアインハルトの表情はやはり浮かない。

「？」

「……はあ。」「」「」

頭を傾げる来人になのはら四人はため息をはく。

しかしそんなこんなありながらも六人は食事を始める。

その時。

「あ。」

来人がフォークを落とした。

すると。

「（ニコニコ……）」

「……（オドオド……）」

ヴィヴィオとアインハルトはいつの間にか来人の両サイドにいた。

「……えっと……なのはさんちょっとフォークを……」

「

「大丈夫 二人が食べさせてくれるから。」

「……フェイトさあ〜ん……。」

「……（サツ）」

フェイトは顔を反らす。

そして来人は……。

「は、はい来人さん」

「……あ、あ〜ん。」

「……あ、あ〜ん。」

結局、現在高町家限定で成立している女性優先社会に背くことが出来なかった。

「克巳〜〜〜。」

「克巳さま〜〜〜ん。」

「「出て〜〜〜い（きなさま〜〜〜い）！」」

克巳の泊まっているドアを叩くハリーとヴィクトーリア。

先ほど勝手に立ち去った克巳に対して話を聞くためである。

すると……。

「「ん！」」

ドアの下から紙が。

「うるさいから失せろ」

紙にはただそれだけが書かれていた。

「「う……。」」

「「失せろとはなんだあ〜〜〜（なんですの〜〜〜）！」」

その二人の怒り方は周りからは髪が逆立っている風に見えるだろう。

そして……。

「「はあああああ！」「」

二人は魔力を込めた一撃によりドアを思いっきり開け……。

「「克巳^{さん}、失せろとはなんだ（なんですよ）！」「」

中で不機嫌そうな表情を浮かべる克巳に怒鳴る。

「……紙に書いた通りだ。お前らが組むとやたら騒がしいんだよ。」

「ぬぐぐぐ……。」

「反論できませんわ……。」

反論できない二人は縮こまる。

「……でもよ……。」

「それは……。」

（オレはお前のことが……）

（わたくしはあなたのことが……）

二人は心の中で告白し顔を赤くさせる。

そんな二人を見た克巳は……。

「……そんなところにいられると外から見えるだろ。さっさと入れ。」

ドアでつつ立っていた二人に強く促す。

「お、おう……。」

「……お邪魔しますわ。」

二人はリビングのソファに大人しく腰かける。

すると克巳も腰かける。

「……とりあえずさっきは急用が出来たから退いただけだ。大したことじゃない。」

「急用ってどんなだ？」

「詮索してくる女は嫌いだ。」

「そ、そうですね。紳士は多少ミステリアスな方が魅力的ですわ。そんなことも知らないなんて。あなたは子供ですわね。」

「んだとお……。」

二人は張り合いを始めるが……。

「だからうるさいっつたる。」

克巳は二人にげんこつを放つ。

「いったゝゝゝ。」

「何するんですの克巳さん！」

「なんでお前らはすぐ騒がしくなるんだ？　　まったく耳ざわりだぞ。」

「……………(ぐずっ)」

「(しょぼん)」

拳げ句の果てにはハリーは涙目になり、ヴィクトーリアは落ち込む。

「……………。」

「……………(たく面倒な)」

すると克巳はキッチンを向かい慣れた手付きでホットケーキを作りだし、二人に差し出した。

「……………。」

「……………(いくらつるさるつが騒がしかるつが客だからな)」

「お、おつ。」

「……………(いただきますわ)」

二人ははちみつをかけてホットケーキを食べ出す。

「……………うめえ。」

「ホントですわ……………」

二人が立ち直ったのを確認すると……………。

「……………とりあえず俺とお前ら二人はそんな浅い関係じゃない。そんな顔見知り二人がケンカするのはあまりいい気分はしない。ちやんと察しろ馬鹿共が。」

克巳は二人の目の前に座る。

「……………ごめん。」

「悪かったですわ。」

「……………これから気をつければいい。わかったな。」

「おう。」

「はい。」

二人は笑顔で返事を返すが……………。

……………数分後……………

「……………ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……………」

「……………はあ。」

再び張り合う二人に克巳はドライバーを拭きながらため息を吐いていた。

「ほらドクターもどうよ？ 普通に売ってるおでんもうめえんだよ？」

「私はいません。」

「そう遠慮すんなって。あれ？ その人形捻れ鉢巻き似合うんじゃない？」

「やめなさい……………」

「いいから貸してよほら。」

「やめなさい……………」

「そう堅いこと言わねえでさあ……………」

「ヤ〜〜メ〜〜口！ ヤ〜〜メ〜〜口〜〜！」

その時第三者！

「あら〜〜。片方は髭が似合うダンディさんね〜〜。嫌いじゃないわ〜〜。そちらの方も不思議ちゃんね〜〜。貴方も嫌いじゃないわ〜〜。」

「……………ドクター……………」

「伊達くん……………」

「……………逃げろ!」

「待って……、そのいい男おおん……!」

「……………うおおおおおおお!」

その日ミッドチルダを世界記録すら凌駕するスピードで三人の男性（一人は？）が駆け抜けていった。

しかも一人の男性（？）に追いかけられる二人の男性の顔は恐怖に脅えるように蒼白だったとか。

過去／思惑（前書き）

今回はまあ当然のようにあのバトルマニアがでしゃばる？

とりあえず今日のオーズ・・・。

帰ってきましたたぜ我らの伊達さん！

映司がグリードに~~~~。

果たしてどうなるのか。

気になります。

オーズも後二回。

なんだか寂しいです。

過去 / 思惑

あれから数日後。

翔太郎と竜は既に六課に馴染みつつあった。

そして今二人は……。

「……多少あぶなっかしいがそれならいい腕だな。」

「ああ。なのはさんやフェイトさん、ヴィータの教えがいいんだな。」

「

ネクサスが開いたモニターを二人で眺めていた。

すると。

「暇そうだな。」

「シグナムさん。」

シグナムとヴァイスが後方から歩いてきた。

「おっす。挨拶が遅れたな。ヴァイス・グランセニックだ。」

「左翔太郎だ。」

「三童……竜だ。」

「二人とも映像みたんだけどすごいっすね〜。なんか人離れしてるっつーか……。」

「んなことねえよ。俺は結構長いからな。」

翔太郎はヴァイスに返事を返すと……。

「左……、三童……。」

「!?」

「どちらか、ちょっと私と手合わせ願いたいのだが……。」

シグナムが早速素を出してきた。

「……。」

(……この人四年後と全く変わんねえ)

すると呆れる翔太郎をよそに……。

「面白い……。」

「!?」

竜が乗った。

「決まりだな。先に行っているぞ。」

シグナムは嬉しそうに模擬戦スペースへ歩いていった。

「何考えてんだお前？」

翔太郎が聞くも……。

「俺に質問をするな。」

竜も笑いながら模擬戦スペースへと歩いていった。

「……………どいつもこいつも……………」

「どうするんすか左さん……………」

「とりあえず暇だし、なんかドーパントの出現もねえからちよつと訓練見てくる。」

翔太郎はヴァイスと別れフォワード陣が訓練をしている場所に歩いていった。

「お前も剣を使うと聞いていた。久々にいい勝負が出来そうだ。」

向けられたレヴァンティンの先には…………。

「俺も一応味方の実力は知っておいて損はないだろうからな。」

エンジンブレードを持った竜がいた。

「……………行くぞ。」

『アクセル!』

「変……身!」

竜はアクセルメモリをドライバーにスロットしパワースロットルを捻る。

『アクセル!』

ピストンパーツ状、槍状のエフェクトが竜を仮面ライダーアクセルへと変化させる。

「それが仮面ライダーとしてのお前の姿か。」

「ああ。仮面ライダーアクセル……、それが今の俺だ。」

二人は互いに刃を構え……。

「面白い……、はっ!」

「さあ……、振り切るぜ!」

互いに刃を交えるために走り出した。

「よお、やってんなあ。」

「あ、左さん」

「よっ。」

やって来た翔太郎にスバルとヴィータが返事を返す。

「随分頑張っつてんなあスバル。」

「はい。なのはさんや翔太郎さんみたいにちゃんと戦えるように。」

「そ、そっか……。」

目を輝かせるスバルに若干翔太郎はたじろぐ。

「どうだヴィータ。スバルは？」

「ああ。まだまだ甘いがそれなりに育てがいがあ。お前もどうだ？ 聞いた話じゃお前も長物で戦うって聞いたんだが……。」

「ま、まあな。メモリチェンジしてなったメタルはそうなるな。」

「棒術ならエリオにもなんか教えてやれよ。」

「エリオも翔太郎さんの戦い、凄く見てましたから。」

「お、おう。」

翔太郎はそそくさと立ち去って行った。

(しかし……)

翔太郎は最近竜に聞いた事を思い出した。

~~~~~

「あいつらの記憶がなくなる？」

「ああ。」

「なんでだよ。」

「俺達が使ったタイムメモリには過去に介入したことや俺達の痕跡を残らず抹消する機能がある。無論人の記憶もな。だから俺達が戻ったときにはあいつらは俺達を忘れてるってことだ。」

「まじかよ……。」

「俺達自身は影響なく覚えているがな……。俺達は時間を歪めているイレギュラーな存在だ。そのため歴史は過去を直すために修正力が働く。それにより俺達の痕跡は完全に抹消される。」

「……でも本来の歴史に戻るんだよな。」

「ああ。」

「……なら構わねえ。……俺は……未来を守るために戦う。」

「ただしその未来も連中が力を得たら未来ごと今が破壊される。」

「んなことぜってーさせねえ。」

「無論だ。」

~~~~~

(こっちが覚えてもあつちが覚えてねえのはなんか虚しいよな)

その背中は何故か虚しさを感じさせた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……。」

「よっ、ほっ、ふっ……。」

エリオのストラダーダをメタルはシャフトで軽く受け止め続ける。

「凄いですねフェイトさん……。」

「うん。エリオもだけど左さんも……。」

キャラとフェイトはそんな二人を見物している。

「やっぱりエリオは長物が巧いな……。」

「あ、ありがとうございます。」

「今から大したもんだぜ。」

「今から?」

「あ、いや。なんでもねえ。」

「？」

「ほ、ほら油断大敵だ……ぞ！」

「あ。」

メタルのシャフトがストライダーを弾き飛ばし飛ばされたストライダーが地面に突き刺さる。

「「あ〜〜」。」「」

「……（がくっ）」

「いや大したもんだ。なのはさん達に教えてもらえればかなりいい形になるだろうな。」

変身を解いた翔太郎は落ち込むエリオを支える。

「ありがとうございます！」

「おう。」

すると。

「あの……翔太郎さん……。」

「なんすかフェイトさん？」

フェイトが歩み寄る。

「竜さんは……。」

「あゝ。三童のやつは……。」

「はああああああ！」

「だああああああ！」

アクセルとシグナムは互いに剣を交えていた。

「なるほど。大した腕だな。」

「お前もな三童。しかしこれはどうだ！」

シグナムは炎の魔力弾を生成し放つ。

「面白い……。」

『トリアルル！』

アクセルはトリアルルメモリをドライバーにスロットしパワースロットルを捻る。

『トリアルル！』

アクセルの身体は黄色くなったのち一瞬でアクセルトリアルルへと変化した。

「！青くなった。」

「全て……振り切るぜ！」

アクセルトリアルは高速移動でシグナムの炎の魔力弾を全て避けていく。

「なんて動きだ。テストロッサと同等……またはそれ以上……。」

「

「そろそろけりを付けるぞ、シグナム！」

「いいだろう……。」

レウアンティンからカートリッジが射出され刃に炎が纏われる。

そしてアクセルトリアルはトリアルメモリをマキシマムモードに変形させスイッチを押したのち走り出す。

「紫電……一閃！」

「はあああああ！」

シグナムの刃とアクセルトリアルの連続蹴り、マシンガンスパイクがぶつかりあう。

「ぐ……、なんて連打だ……。」

「重いな……。しかし！」

マシンガンスパイクの勢いが増し……。

「何！」

シグナムが驚いた時にはレウ、アンティンはシグナムの手元にはなく……。

「俺の勝ちだ。」

『トリアル・マキシマムドライブ！』

アクセルトリアルの右足がシグナムの首筋をあと数cm足らずの距離に捉えていた。

「参った。しかし大した腕だな。」

「あなたもな……シグナム。」

変身を解いた竜はシグナムに笑いかける。

するじ。

「どん。」

「！何！」

はやてが後ろから竜に飛び交った。

「八神！ お前……。」

「あ、主はやて……、三童は疲れ……」

言いかけたシグナムをはやてはジト目で黙らせる。

「竜さん、やたらと楽しそうやったで？　なんでなん？」

「お、俺に質問をするな！」

「教えて　な、教えて　な……。」

暴れる竜にはやては思いつきり身体を寄せる。

それによりはやての豊かな膨らみ二つが竜の背中に押しつけられ形状が歪む。

「！　は、離れる八神！　頼むから離れてくれ！」

「だったら質問に答えてくれますか？」

「……くっ。純粹に剣での戦いが楽しかったただけだ！　いいから早く離れる！」

「ホンマ？」

「ホントだ！　いいから早く……。」

「そないですか。ちょっと安心しました。」

「？　なんでだ八神？」

「……………」

頭を傾げる竜にはやてとシグナムは頭を抱える。

「主はやて……やはり三童は曲者です。」

「ホンマやな。色んな意味で……。」

「？」

「まあええわ。竜さん疲れてへん？ 戻ってお茶せえへんか？」

「まあかまわないんだが俺はコーヒーの方が好ましい。」

「それじゃあ……。」

「ご好意に甘えとしよう。」

「よっしゃ！ シグナムもどうや？」

「私はちよつと新人達の訓練をしています。」

「そ、そか。残念やな。そんじゃ竜さん行こつか！」

「……………その前に早く離れろ！」

「もしかして竜さん純情？」

「な!？」

「冗談や冗談」

はやては竜から離れる。

「そんじゃ行こっか竜さん」

「あ、ああ。」

二人はそのままはやてのオフィスに向かった。

しかしはやてには竜との距離感をもどかしく感じていた。

「………凄えな。」

翔太郎はなのはによる多方位からの訓練を受けているティアナに啞然としていた。

そして訓練が終わりティアナがぶっ倒れている横で……。

《翔太郎さんはこういった訓練をやったことは？》

《いや、俺は師匠みてえな人から基礎を習って、他には自分で応用ですね。仮面ライダーになってからはメモリの力を理解して使いこなすのに苦労したぜ》

なのはと翔太郎は念話で話していた。

《それなら基礎は大事ってわかってくれますよね？》

《そうっすね。基礎がなくなってなきゃガタガタになりますからね》

《でもティアナなんか焦ってるみたいで・・・失敗に繋がらなきゃいいんですけど・・・》

(・・・そうならスバルは・・・)

「・・・信じましょうよ。」

「え？」

「自分の・・・教え子を。」

「・・・ですね。」

この時は翔太郎もなのはもあんな事になるとは予想にもしていなかった。

無論ティアナや・・・。

スバルも。

「・・・なんでここが？」

「ちょっとしたトリックでしょね。ではどっしります？」

とある巨大なモニターのまえで葬とカオスはある白衣の男と交渉していた。

「面白い。ドーパントにガイアメモリか。あちらに仮面ライダーがいるのならこちらにもいた方が色々都合がいいかもしれないね。協力を頼むよ。その代わりに生活は保証しよう。」

「ありがとうございます。……では俺達はこれで。」

二人はその白衣の男、ジェイル・スカリエッティに自分達を売り込み仲間となっていた。

スカリエッティをレリックを集めるための駒と見込んで。

「ああ。ゆっくり休みなまえ。」

「失礼します。」

左右に培養の液体が溢れるガラスが目立つ道を歩く葬とカオス。

（とりあえず寢床は出来た。まあちょっとでこの世界ごとおさらばだけど）

葬は笑う。

その笑顔からは狂気が溢れ出ていた。

過去／波乱（前書き）

今回はちょっと原作の記憶が微妙なので微妙です。

魔王は次？

過去 / 波乱

「それじゃあ事態を説明するよ。黒幕はこの男、違法実験で広域指名手配されているジェル・スカリエツィ。フェイトちゃんが追っている次元犯罪者や。」

「主に捜査は私だけど皆も覚えておいてね。」

「」「」「はい！」「」

はやて、フェイトの言葉にフォワード四名の声が重なる。

「そんで今から行くのは今日オークションが行われるホテルアグスタ……。」

「取引許可が出てるロストログアに反応してガジェットドローンが出てきちゃうかも知れないから私達と呼ばれたんだ。」

その後はやてやなのは、フェイトによる今回の任務の詳細が話されると不意にキャロがあることを口にする。

「そつえばシャマル先生、これって……。」

「これ？ 隊長さん達のお仕事着」

「そつえば翔太郎さん達は？」

「翔太郎さん達はね……。」

シヤマルは質問したスバルにウインクを返した。

「……………なんか慣れん。」

「んなこと言うなよ。変装も気にせず仕事すんのも大事じゃねえのか？」

「……………やむを得ん。」

ホテルアグスタの廊下で慣れない竜はさておき普段からハードボイルドを目指す翔太郎は抜群にスーツを着こなしている。

「……………しかし。」

「あ？」

「……………遅いな。」

「ああ。」

すると。

「竜さ〜ん。翔太郎さ〜ん。」

「「!」「」

二人が声が聞こえた方を向くと…………。

「お。やっぱりイケメンは何着ても似合っな。」

ドレス姿のはやてやなのは、フェイトがいた。

「ど、ども。」

「遅かったな。」

「（カクッ）　そんだけかいなあ。」

「・・・まあ似合っているぞ。」

「ホンマ？　ありがとうございます。」

竜に誉められてはやてはご満悦である。

「・・・なのはさん町やフェイトさんも似合ってますよ。」

「ありがとうございます！」

「なんか恥ずかしいですけど・・・。」

なのはやフェイトも翔太郎に誉められ好印象である。

「二人もうちらと同じように会場内部の警護に当たってもらったんやけど良かった？」

「俺は特に大丈夫っすよ？　警護なら前の仕事で慣れてましたから。」

「俺も職業柄慣れている。この服装には慣れないがな。」

「ええやないですかあ。似合ってますしい。」

「・・・まあ任務が終わるまでは辛抱しよう。」

そして五人は歩き出した。

竜ははやてとは別ルートで見回り、翔太郎は正面リビングで待機した。

「うん。わかった。」

『頼んだよルーテシア』

森の中で薄紫色の髪の毛の少々、ルーテシア・アルピーノはモニターでスカリエッティと会話をしていた。

「ううん。ドクターのお願いだもん・・・。」

『済まないね。その代わりに私から助っ人を頼んだよ』

「?」

『安心したまえ。見た目は人間離れしてはいるが君の命令に従わせると製作者が言っていたからね』

「・・・誰?」

『そのうち会えるさ』

「……………わかった。じゃあね……………」

『ああ。作戦の成功を祈っているよ』

スカリエッティとの連絡が切れるとルーテシアは足元に魔法陣を形成した。

そして後ろから異形の存在が二つ……………。

「……………貴方たちがドクターの言ってた？」

「（コクッ）」「（コクッ）」

「……………とりあえずガジェットを手伝って……………」

「（コクッ）」「（コクッ）」

異形の怪人二体はホテルに向け走り去って行った。

《シグナム！ ヴィータちゃん！ ザフィーラ！》

シヤマルが何かを感じ取った。

《ああシヤマル……………》

《間違いねえ》

《ガジェットだな》

念話で他の騎士にも語りかける。

《しかもガジェットだけじゃないの。他にも高いエネルギー波を発するのが二つ……。これは……》
《多分ドーパントです、シャマルさん》

翔太郎も念話に入る。

《翔太郎さん？》

《俺はドーパントを叩きます。他のガジェットとかゆーのは任せて大丈夫か皆？》

《無論だ》

《上等……》

《承知した》

他の騎士達も同意し四人はそれぞれの戦いの場へと赴いていった。

「ここは以上なしか……。」

竜はホテル内を警戒しつつ見回りをしていた。

すると。

「なかなか似合ってるじゃないか竜……。」

「！」

翔太郎の声ながらも若干トーンの低い声の方向を竜がは睨むとそこには……。

「……何故貴様がいる……葬！」

「ご挨拶だなあ、竜……。」

「貴様こそよくその顔を出せたものだ……。」

「なんだよ。この顔なら見慣れてるだろ？ なんせ君の味方は……。」

「貴様と左は違う！ あいつはこの世界を守るために魂をかけて力を貸してくれている。」

「つまり顔は同じでも考えはまるで逆か……。まるで鏡写しだなあ。」

「壊されるのは貴様だ。……今ここで！」

「いいなあ。久々に遊ぼうかあ！」

『アクセル！』

『タイラント!』

「変……身!」

「変身。」

それぞれがドライバーにガイアメモリをスロットし竜はパワースロットルを捻り、葬はドライバーを展開させる。

『アクセル!』

『タイラント!』

変身を終え、仮面ライダーアクセルと仮面ライダータイラントが向き合う。

「さあ……砕け散りな。」

タイラントは自らの親指で首を切るように挑発する。

「貴様がな!」

アクセルは駆け出しタイラントとぶつかりあった。

別所でシグナム達が戦っている中ジョーカーはジュエルとアームズ、スバルとティアナはガジェットと戦っていた。

「おらぁ!」

ジョーカーはアームズに横蹴りを叩き込み弾き飛ばす。

そのままジュエルに拳を放つが……。

「か、かかかかてえ……。」

手を痛める。

「しゃーねー。奥の手だ。」

何処からかエクストリームメモリが現れジョーカーはアナザーダブルドライブに装填し展開する。

『エクストリーム!』

「スペリオルビッカー!」

『スペリオル!』

ジョーカーエクストリームはスペリオルメモリをソードに装填し抜刀……。

「さぁ……お前達の罪を数える。」

英文字をソードに纏わせてジュエルを切り裂いていく。

スペリオルメモリは相手のメモリの機能を阻害するジャマープログラムの、つまりはウィルスを生成する。

現在はそのジャマープログラムをソードに纏わせてジュエルを攻撃すると接する直前でジュエルの原子結合を一時的に自己崩壊させることで、ジュエルを易々と切り裂いている。

そんなエクストリームをスバルは……。

「かつこいい……。やっぱり翔太郎さんは凄い！」

そして……。

(なんて動き……。やっぱり翔太郎さんも特別な天才……。でも証明してやる……。ランスターの弾丸に打ち抜けないものはないって)

ティアナは何故か焦りを感じていた。

するとティアナの足元に魔法陣が形成され……。

「でああああああ！」

クロスミラージュや魔力弾を乱射しガジェット達を一気に破壊しにかかる。

「！ティアナ！無理すんな！」

エクストリームが呼びかけるもティアナは止まらない。

そして恐れていたことが。

「！スバル！」

「え？」

エクストリームが叫びスバルがふぬけた声を上げた時、ティアナの弾丸が一発スバルに。

「馬鹿野郎！」

「なるおが！」

ヴィータが急ぐも間に合わないと判断したエクストリーム素早くビツカーシールドを投げつけ弾丸を弾く。

「！ 翔太郎！」

「翔太郎さん！」

「翔……太郎……さん……。」

ヴィータやスバル、ティアナが驚く。

すると。

「馬鹿！ ティアナ！ 味方に撃つてどうすんだ！」

「いや、あの、ヴィータ隊長……、これは作戦で……。」

「あんな無茶な作戦があるか！ 無茶やったうえに味方を撃つてどうすんだッ！」

スバルの意見も激昂するヴィータには聞こえない。

すると。

「！ ティアナ！ 避ける！」

アームズがティアナに銃口を向けたことに気がついたエクストリームが叫ぶも呆然とするティアナの防御魔法が間に合わない。

「まったく世話がやける！」

エクストリームはティアナに抱きつき身代わりになり、エクストリームから火花が散る。

「……………痛っ……………」

グレネード弾を受けたらしくエクストリームでもダメージを負う。

「翔……太郎……さん……、私……………」

「！ 説教は後だ！ いいから退いてるティアナ！ 戦意のないやつがいても足手まといだ！」

「あ……………う……………」

エクストリームはティアナに怒鳴り、身体を離すとソードのスイッチを押す。

『スペリオル・マキシマムドライブ！』

「スペリオルブレイカー！」

エクストリームが上段から振ったスペリオルソードから紫色の斬激が放たれジュエルをまっぴたつに切り裂く。

そしてそのままエクストリームは駆けながらエクストリームメモリを閉じ再度展開する。

『エクストリーム・マキシマムドライブ!』

「デュアルエクストリiiiiiiiiーム!」

そのまま跳躍しアームズにデュアルエクストリームを放ち、アームズを粉碎し爆発と砕かれたメモリのみが残る。

「……なんでガジェットとホムンクルスが……」

「なんだよ翔太郎、ホムンクルスって……」

「詳しくは後でなのはさん達と一緒に話す。でも今は……」

「ああ……」

エクストリームとヴィータが向く方には……

「……ティア……」

「……」

スバルの声も届かず自らの大失態に呆然とするティアナがいた。

その頃別所では……。

「はああああああ！」

「ふっ！」

アクセルのエンジンブレードとタイラントのタイラントソードが激しく火花を散らす。

「貴様は俺が倒す。……今日……ここで！」

「笑わせるなあ……。」

タイラントはブレードをはねのけ自身のソードでアクセルを切り裂き吹き飛ばす。

「まあ今日は楽しめたよ。それにスポンサーにも力を証明できたしな。」

「何。」

「それじゃ。」

「！ 待て！」

アクセルが追うも……。

「しつこい男は嫌われるぞ。」

タイラントが光弾を放つ。

「ぐっ！」

ブレードで防いだアクセルが駆け出すも……。

「……………逃げたか。」

そこは既にもぬけの殻だった。

（だがあいつは確実にタイラントの力に慣れ始めている。……急がねば）

竜はその場を立ち去りながらも焦りを感じずにはいらなかった。

しかしそんな竜は後の翔太郎からの連絡で今、ホテルの裏で涙を流しているティアナの失態を知ることとなる。

過去ノ魔王（前書き）

魔王が降りてきます。

しかし魔王をも超える？

ちなみにかなりアレンジがあるのでご覚悟を。

過去／魔王

「ヤツが？」

「ああ。スポンサーに力を見せると言っていた……。」

ホテル内の待合室で竜は翔太郎に先日の葬の一件を話していた。

「しかもガジェットとドーパントが一緒にいたと言っていたな。まさかスカリエッティと……。」

「わからん。……ただわかるのはヤツもレリックについての足掛かりを見つけたということだ。……多分これからはレリックの奪い合いが激しくなるだろう。」

「まったく面倒なことになったな。ただでさえさっきのことでギクシヤクしてるっつーのに。」

「？」

頭を傾げる竜に翔太郎は昨日の戦闘での出来事を告げた。

その後六課の面々はへりに乗り六課本部へと戻っていったが、へり内はやはり重い空気が漂っていた。

《……なるほどな。ランスターにそんなことが。そして昨日にも・

《ああ。その結果があれだ》

ティアナの兄、ティータのことを知った竜と翔太郎が二人、念話で話し合う先にはティアナとスバルが朝練をしていた。

《しかもあの練習は高町のではない・・・自主練か。しかし基礎がまだ未熟にも関わらずあんな動きでは実戦に・・・》

《でもあいつはわかってねえ。なのはさんが伝えたいことが》

《しかし高町も高町だろう。彼女にも・・・。》

《だな。なんかあの二人、昔の俺みてえだ》

《何》

《言ってなかったな。俺には師匠みてえな人がいてな》

翔太郎は自らの師、鳴海荘吉のことを思い出す。

自分に探偵として、大人の男として全てを教えてくれた恩師であり・・・。

《俺が勝手なことをしたせいで俺はその人を殺しちゃった。だから師匠のことも知らないで空回りするあいつらがなんか俺と被るんだよ》

事実翔太郎はフィリップと共に始めてWに変身したあの始まりの夜、ビギンズナイトの時自身の独断により結果的に荘吉を殺す結果にな

ってしまった。

(でもなんか・・・)

二人はただ必死にスバルから至近距離での戦いを指南されているティアナをみていた。

(なんだか知らねえが不吉な予感がするな。・・・スバル、お前もな・・・。)

翔太郎はスバルに対し複雑な思いを抱かずにはいらなかった。

そして翔太郎の予感は当たることとなる。

「なんかティアナ、動きにキレがねえなあ。」

そう呟くヴィータは翔太郎や竜、ライトニングの三人はなのは対スバルとティアナの模擬戦を見ていた。

「最近朝早くから夜遅くまで自主練してるみてえだからな。」

「・・・本当に無理しなければいいんだが・・・。」

しかしそんな翔太郎と竜の考えも知らずにスバルとティアナの二人の戦いはあぶなっかしさを通りこし、危険なものであった。

そしてスバルがなのはに正面から、ティアナがウイングロードを駆け上がり、上空から切りかかり周囲を爆風が覆う。

「なのは!」

ライトニングとヴェータ、竜が爆風に顔を隠すが、竜が気づくとすでに横にいたはずの翔太郎はいなかった。

「……ふたりともどうしちゃったのかな。模擬戦は……ケンカじゃないんだよ。練習中言うこと聞いてても本番に勝手に動くんじや練習の意味……ないじゃない……。」

「……あ……、あ……。」

さげすむような目つきのなのはにスバルは啞然となるが……。

「つつ!」

ティアナは跳躍しウイングロードに着地しクロスミラージュの引金を弾くが不発。

「私は……もう、誰も傷つけないから!」

泣きながら弾丸が放たれないミラージュの引金を弾くティアナ。

「……ティア……。」

そんなティアナにスバルは言葉を失う。

「だから……強くなりたいんです！」

「少し……頭冷やそうか。」

そんなティアナになのははゆっくりとクロスファイアシュートを構え……。

「うわあああ！ ファントムブレイ……。」

「シュート。」

ティアナが言い切る前になのははティアナに大量の魔力弾を放ちてイアナに命中する……。

筈だった。

「……ティア　！」

「……なんで邪魔するんですか？　……翔太郎さん……。」

「え？」

なのはの言葉に唾然とするスバルがティアナの方を向くとそこには……。

「……。」

「……翔……太郎さん……。」

ティアナの前にはビツカーシールドを構えたジョーカーエクストリームがいた。

「……………」

するとエクストリームは無言のままティアナの腹部に拳を叩き込む。

「……………」

倒れるティアナを支えるとエクストリームは無言のままなのは方を向く。

「……………あんたそれでも教える立場かよ……………」

「……………あなたに何が分かるんですか。」

「わかんねえなあ。そんな自分勝手な教え方は……………なのはさん、あんた自分の意思をティアナに示したか？」

「……………」

なのははエクストリームを無言で睨み、スバルはそんな二人の迫力に啞然となる。

「ただ教えられる立場としては言える。」

「……………何がですか。」

「教えられる側っていうのは教えてくれている人に少しでも追い付けるように……………早く追い付けるように無茶をするもんだ。あんた

は自身の教えの本当の意味をティアナに、・・・スバルに伝えたか？」

「・・・・・・・・それぐらいわかってもらえないと・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・あなたはこいつらに心が読めるとでも思ってたんじゃないのか。言葉にしねえとなんも伝わらないんじゃないのか！」

「！」

「・・・・・・・・人つつうのは何かしら言葉やら行動で示せなきゃわかりあえねえ面倒なもんだ。それはずっと一緒にいてもそれは変わんねえ。こいつらにはあなたの家族でもなきや姉妹でもねえ。つい最近知り合った仲だ。そんなやつらに・・・・・・・・なんで自分の意思を伝えない！」

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・。」

「あなたのやり方をちゃんと伝えたらあいつは反発するかもしれないねえ。・・・でもそれでも互いにぶつかりあって、信じあって、一緒に歩いていくのが師弟なんじゃないのか・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・仲間なんじゃないのか！」

「・・・・・・・・邪魔・・・・・・・・しないで下さい。」

なのははレイジングハートを持つと魔法陣を作り出し出力砲の発射体制を構える。

「……そこ……退いて下さい……」

「撃ちたいなら撃ちやあいい。」

「……なら……」

「！なのはさん！」

スバルが止めるのも聞かずになのはは出力砲を放つ。

「……ちったあおいたが必要みてえだな。」

エクストリームはビツカーシールドにメモリをスロットしていく。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

「ビツカー……アサルトパニッシャー！」

なのはの出力砲と見るからに加減されたビツカーアサルトパニッシャーがぶつかり合い相殺したかのように爆発が起こる。

「おらあああああ！」

そんな爆風の中からエクストリームがなのはに殴りかかる。

「！」

「……話し合えねえなら俺が話させてやる。」

「え？」

啞然とするなのはをよそにエクストリームはなのにも一発腹部に拳を放つ。

なののはは防御魔法を張るもドーパントにすら効かない防御魔法が現在、例外を除きドーパント相手に圧倒的な戦闘能力を見せるエクストリームには意味がなく破壊され、エクストリームの拳がなののはの腹部に叩き込まれた。

「かつ……。」

「安心しろ。ちったあ威力は抑えた。」

なののははエクストリームに寄りかかるように気を失う。

「……スバル！」

「あ、はい！」

怒鳴るように呼ばれスバルはびくつくように返事を返す。

「……ティアナを連れてこい。」

「え……でも……。」

「いいから連れてこい！」

「……はい……。」

スバルはティアナの元に駆ける。

エクストリームはなのはを抱えたままハードブラスターに乗って、スバルはウイングロードの上を走りながらフェイト達のいる屋上にたどり着く。

「……あの……翔太郎さん……。」

「……フェイトさん……空いてる部屋在りますか？」

エクストリームはフェイトに静かに問いかける。

「……い、一応……。」

「案内お願いします。スバルも来い。」

「……は、はあ。」

「……おい……。」

ヴィータには目もくれずになのはを抱えたエクストリーム、ティアナを抱えたスバル、二人を案内するフェイトは静かに隊舎の廊下を歩いて行った。

そしてなのはとティアナ、二人をその部屋に寝かせると変身を解いた翔太郎は手にレイジングハートを持ったまま立ち去っていた。

スバルや他のフォワード陣も翔太郎に聞こうとするが、翔太郎はただ無言のままである。

(左……、そういうことか)

翔太郎の行動の本当の意味を知っているのは竜のみである。

(話し合いなら嫌でもさせてやる。多少荒療治だがな)

翔太郎はただ廊下を歩いていく。

(……翔太郎さん……何を……)

そんな翔太郎の後ろ姿をただ眺めるスバルは翔太郎が一人にしたことの本当の意味も翔太郎の心情も分からずにいた。

過去ノ和解（前書き）

今回は原作に近いながらも違う点にスポットが行っています。

そしてとうとうスバルが・・・。

過去／和解

「……………！　ここは……………」

空き部屋で寝ていたなのはが起きる。

「空き部屋……………ティアナ起きて……………」

「……………ん……………なのは……………さん？」

揺すられてティアナも目を覚ます。

「……………ここは……………」

「……………多分空き部屋……………でも私達翔太郎に殴られて……………」

すると。

「気が付いたみてえだな二人……………」

「「！」「」

二人が声が聞こえた方を向くとそこには……………」

「……………翔太郎さん……………」

「よく眠ってたな。特にティアナ。」

翔太郎がドアに寄りかかっていた。

「翔太郎さん……なんで……。」

「わりいがこいつも預かってる。」

翔太郎は懐から待機状態のレイジングハートを出し、なのはに見せる。

「レイジングハート！　なんで翔太郎さんが……。」

「これからあんたら二人をこの部屋に閉じ込める。」

「「！」「」

「なのはさん、あなたは部屋から出ることも出撃も出来ない。もし出たけりゃあ……。」

「「……。」」

「話せ。ティアナに自分の本当の気持ちを……。」

「なのはさんの本当の……気持ち？」

「……私の……教導の意味……。」

「ああ。ティアナがちゃんと納得するようにな……。」

するじ。

突如隊舎にアラームが鳴り響く。

「！ 敵！？」

「・・・まさかガジェット！？」

ティアナとなのはが立ち上がるが・・・。

「あんたらはここでじっとしてろ・・・。」

「でもガジェットが・・・。」

「言っただけ。あんたが本音を話さないかぎり出撃もさせねえつて・・・。」

「・・・でもなのはさんが出撃しないんじゃあ・・・。」

「それなら三童が出る。俺もな。つってもあんたらが出られねえよ
うにちよつと細工してな。」

翔太郎はドアのパネルを操作し閉じなくすると、スパイダーシヨックにスパイダーのギジメモリをスロットする。

『スパイダー！』

そして翔太郎が部屋を退室するとスパイダーシヨックは抜け目が無いほどに入り口をワイヤーで覆い二人を閉じ込める。

「・・・じゃあな。帰ってくるまでには部屋を出られてることを祈

ってるぜ。」

そのまま翔太郎は廊下を走り去って行った。

「……………」

しかし二人は気まづくなかなか会話に入ることが出来なかった。

しかしそんな二人は翔太郎がさりげなく置いていったライブモードのバットショットが二人を中継していることを知らない。

「遅いぞ……………左！」

「わりい。遅れた。」

翔太郎はヘリポートに到着する。

そこではヴァイスが待機しているヘリがプロペラを回し、すでになのはとティアナ以外の面々がすでに揃っていた。

「……………あの……………翔太郎さん……………なのは……………」

「今は二人だけにします。なんだかんだであの人も本音を溜め込むだろうし……………。俺はあんま経験がないですが俺が働いていた事務所
の所長様流の荒療治であの二人を仲治りさせます……………」

「……………なんだよ荒療治って……………」

ヴィータがつかかかると、竜はヴィータの肩をすぐに掴む。

「アイツにはアイツのやり方があるんだろう。少なくとも俺達は今戦うだけだ。」

「……………わかった……………」

竜の言葉になにか不思議な説得力を感じたヴィータは大人しくひきさがった。

すると。

「……………翔太郎さん！」

「なんだスバル……………」

スバルが翔太郎にいくかかか。

「あの二人、どうしてるんですか……………」

「……………お前が知る必要はねえ。お前は待機だ。」

「……………そんなんじゃ納得出来ません！」

「……………お前は待機だ。」

「……………だから……………」

「……………いいから待機だ！」

「……………」

怒鳴るように言われたスバルは黙る。

「……………帰ってきたら話す。そんなときゃあの二人の間でもカタあついでるだろうからな。」

「……………それってどういう……………」

「秘密だ……………いいから行くぞ！」

「(コクッ)」

「わ、わかった！」

「は、はい！」

翔太郎と共に竜、ヴィータ、フェイトはへりに駆け出す。

(大丈夫だね……………ティアナ……………なのは……………)

フェイトは走りながらも内心ではティアナとなのの事を考えた。

そして四人が戦いに向かった後、シャリーによって三人はなののはの過去を知った。

なののはの教導の意味も。

「あれがガジェットか……。」

竜はへりから外のガジェット達を睨む。

「でも大丈夫なのか？ 翔太郎はともかく竜は……。」

「ガジェットにはAMFが……。」

「安心しろ。」

竜は無言のままドライバーを装着し……。

「ふつ。」

へりから飛び降りる。

「なっ！」

「ちよっ！」

ヴィータとフェイトが咄然とするが竜は落ちながらアクセルメモリに強化アダプタを装着し……。

『アクセル・アップグレード！』

「変……身！」

そのアクセルメモリをドライバーに装着しパワースロットルを捻る。

『ブースター！』

竜の身体の前に黄色の円形と槍型のエフェクトが現れ、一瞬で竜は仮面ライダーアクセルブースターに変身する。

そのままアクセルブースターはガジェット達の群れに飛んでゆき数秒後、ガジェットが次々と墜ちていった。

「俺達も行くか……。」

「はい……、バルデイツシュ！」

「よっしゃあ……、グラーフアイゼン！」

「セーットアップ！」

「変身！」

『ジョーカー！ エクストリーム！』

武装したフェイトとヴィータ、ハードブラスターに乗ったジョーカーエクストリームはガジェットの群れへと飛んでいった。

しかしガジェットだけで仮面ライダー二人を含めた出動した六課四人に敵うはずもなく、ガジェット一体一体が火花を散らせ夜の町を照らしながら海へと散っていった。

そんな四人が帰還中、なのははティアナに自らの教導の本当の意味を述べ、クロスミラージュのダガーモードをティアナに見せた。

そんななのはの懐の深さ、自分の愚かさにティアナはただなのはに抱きつき泣くしかなかった。

翔太郎はやむを得ず話さなければならぬ状態にして二人が早く仲直りできるようになるように二人を閉じ込めた。

自称美人所長直伝の破天荒なお節介が働いたと翔太郎自らが自覚しつつの行動であった。

その詳細をバットショットを経由して見た翔太郎ら四人は心に刺さっていた楔が外れたようなすがすがしさを感じつつ、四人の乗るへりは六課の帰路を飛んでいく。

「すみませんでした！」

いきなりのスバルの謝罪に翔太郎は……。

「……な、何がだ？」

すつとんきよんな顔を浮かべる。

「私、翔太郎さんがそんな風にティアナのことを思ってたなんてわからなくて……。それであんな風に言っちゃって……。」

「ああ〜。いや、大したことはしてねえよ。昔の俺となんか俺と被ってな……。」

「昔の翔太郎さん？」

「俺は子供の頃憧れたある探偵に弟子入りした。でもその人には結局追い付けねえで、その人は遠くに行つちまつた。だから教えてもらつ人に追いつきてえつつー気持ちには痛い程わかんた。」

「……………」

「でもな……………人は一人じゃ強くはなれねえ。誰かがそばに居てくれるから強くなれる。俺も相棒がいたから強くなれた。」

「相棒……………」

「そんで時にぶつかりあつて、時に支えあつて頑張つていくのが人と人のつながりだ。事実お前やティアナは間違つた道を進んだし誤つたことをしたかもしんねえ。でもお前らには間違つても正してくれる人がいる。支えてくれる人がいる。だから安心してこれから頑張つてけ。俺も支えてやる……………それにな……………」

「？」

「アイツにそこまで付き合つて一緒にがんばつたんだ。お前はすげえよ。」

「私が……………」

「おう。人は優しくなけりゃあ強くはなれねえし強くなけりゃあ優しくはなれねえ。」

翔太郎はスバルの頭を撫でる。

「俺はそんなお前嫌いじゃねえ。これからもその優しさを忘れんな・
」

「……はい！」

スバルは顔を赤くして強く返事を返す。

「……あの！」

「？」

「……翔・太郎さんもこれからも一緒に頑張って……。」

「おお。安心しろ。一緒に戦っていくしお前らは俺が必ず守ってやる。俺が……必ずな。」

「……ありがとうございます……。」

二人は屋上に座り星空を眺める。

暗いせいかスバルの顔が赤いのは翔太郎には察しられない。

「あの……翔太郎さん……。」

「あ？」

「肩……借りてもいいですか？」

「おっ。」

スバルは翔太郎の肩に寄りかかりながら座る。

「・・・翔太郎さんって未来から来たんですね？」

「ああ。」

「じゃあ彼女も未来に？」

「・・・・・・・・。」

翔太郎は途端に黙る。

まさか自身が未来で付き合っているのが「お前」とは言いづらい。

「・・・・・・・・いないんですか？」

「・・・・・・・・だ、だとしたら何だ？」

「じゃあ今フリーですよ？ 付き合いますよ。」

「は？」

「私翔太郎さんのことが・・・。」

スバルの顔が赤いが暗くて翔太郎には知られない。

「・・・彼女がいたら？」

「今から奪います!」

「（カクッ） どっちにしる変わんねえよつな……。」

（つーか、これって浮気に入んのかスバル？）

「……翔太郎さん……。」

「あ？」

「これからずっとに頑張りましょうね。」

「？……おう。」

「できれば仕事じゃなくて二人でずっと……。」

「何か言ったか？」

スバルの小声は翔太郎には聞こえなかった。

「な〜ん〜んにも」

スバルは翔太郎の腕に抱きつく。

「……ったく。」

「えへへへへ〜〜。」

そのまま二人は夜の星を眺める。

翌日フェイトの口からフォワード四人はなのはから自分達がストライカーとして信頼を寄せられていると実感した後ろで……。

「なんとか解決したな……。」

「ああ。だがこれからだ。……葬の目的やスカリエッティの目的がわからん以上は……。」

「だな……。でもな三童……。」

「？」

「俺には理屈じゃなくなんかアイツらとならんんでも解決できる気がする……。」

「……ふっ。同意だな。」

フォワード四人が今日も訓練に汗を流す中、翔太郎と竜は四人と二人の隊長に何か心強さを感じていた。

過去（EF）／映画（前書き）

今回はパロディが多めなギャグ回です。

とりあえず色々多めに見て下さい。

過去（IF）／映画

「映画を作るで！」

「「「「「」」」」」」

ふと言い出したはやての一言に翔太郎と竜、なのはとフェイトは顔が固まる。

「・・・・・・・・なんやみんなあ、その顔は・・・・・・・・。」

「なんつーか・・・・・・・・。」

「唐突というか・・・・・・・・。」

翔太郎となのはは顔がひきつっており……。

「はやて、なんで映画？」

「どんな理由で映画なんだ？」

「大した理由はあらへんよ。テイアナもなんか肩の荷が降りたみたいやし他のフォワード四人も慣れてきた。なんかみんなで作りたいと思うただけや。ちなみに脚本も書いた！」

「「「「はやっ！」」」」

「・・・・・・・・・・はあ。」

「主演はうちら三人、うちがメインで……それで竜さんも出演や！」

「断……。」

「拒否権はあらへんよ？ なにせもう決定事項やもん」

「……何だと……。」

竜は急いで脚本を読む。

そこには……。

「主人公八神はやての恋人役……。」

「「……。」」

「（ニコニコ……。）」

翔太郎ら三人が固まる中から唯一一人笑顔。

あえて誰かは言わない！

「……な」

「なぜ俺だ。他にも左が……。」

「左さんは監督やもん　まあうちは脚本・プロデューサー・主演
みな兼用やけど。なあええよなか・ん・と・く」

「……あの……はやてさん……俺は……。」

「くちごたえは許さへんよ　くらいなさい！　うちの新必殺技！」

「「「「「！」「」「」」

「八神家秘伝？　笑いのツボ！」

するとはやては翔太郎の首筋に親指を突く。

すると翔太郎は……。

「はっはっはっはっはっは！　なんだこれ！？　笑いが……。」

「あーだこーだの理屈はなしに人を問答無用で笑わす技や。なんだか知らんけど夏みかんっちゅー人の本に書いてあった！」

「は、はやてちゃん？」

「私達には……まさかね……。」

「二人も一緒にがんばってくれる？」

はやてはなのはとフェイトに笑顔（黒）を向ける。

「「うんうん！」」

激しく同意する二人。

そして一同の視線は竜に……。

「……………くっ。」

「竜さん さあ……………振りきりんさい！」

「……………絶望が俺のゴールだ。」

そして撮影は始まった。

監督は翔太郎、シグナムはカメラ、ヴィータは照明、エリオはマイク、ティアナとキャロはサポートである。

なんだかんだで意外と皆ノリがよく皆直ぐに同意。

そして物語の内容は……………。

「ええか？ これは車椅子の美少女が憧れの先輩と一緒に歩くために親友二人とがんばってリハビリして、ラストには無事告白して最後には拳式を拓くゆうラブストーリーや。」

「頑張りましょう主……………。」

「はやてが綺麗に移るように頑張るぜ！」

はやてが主演なのとはもかく首謀者であることを知らない騎士二人は俄然やる気……………。

「……………私と翔太郎さんでやりたかったなあ……………。」

「あんだと車椅子じゃどんな科学反応があってもいきつかないわよ。つーかあんだたったら松葉杖で動き回りそうだわ。」

ティアナも何か重みが降り、スバルへの辛口にも若干彼女なりの優しさが垣間見える。

「が、頑張ろうキャラ！」

「う、うん。」

エリオとキャラもやる気であるが……。

「……正気なのか八神は……。」

「……なかなか似合ってたな……。」

「気休めはいらん……。」

翔太郎は衣装であるブレザー服を着た竜の肩を叩く。

当の竜は誰がどう見てもテンションが低い。

「ま、まあ大丈夫だ。俺もそれなりにはやてさんを抑えっから。」

すると竜は翔太郎の両肩を掴み……。

「頼んだぞ！」

「お、おう……。」

本気の目で翔太郎を信じた。

しかし……。

「翔太郎さん！　ここはこうや！」

「な、なあはやてさん？　それはちょっと……。」

「文句ある？」

笑顔のはやての手にはなんでやねんと金文字で書かれた緑色のスリッパ……の形をした数百万ボルトのスタンガンが握られていた。

ちなみに本人曰く発売元は”美人所長”という謎のメーカーらしいが詳細はテラーの闇よりも深い闇の中……。

「ドウゾオオセノママニ……。」

「聞えへんなあ？　もっと大きな声で言いなさい。」

「ドウゾオオセノママニ！」

「よろしい　ええか？　うちに逆らうな！　うちは常に正しい！

あの狸親父にもいつかヤキいれたる！　鬼のようにな！」

あのスリッパであって欲しかったという翔太郎の気持ちも両極から電撃を光らせるその凶器と化したスリッパ（？）は構わずぶち壊し……。

（オンドウニウラギッタノカ……！）

竜は内心某ババの方のジョーカー風にジョーカーである男を睨んだ。
そしてその後も撮影は続いた。

撮影は終盤……。

「もう……すぐ……終わるな……。」

「……あたしのアイス……。」

竜は誰がどう見てもお疲れなまま棒アイスを食べる。

ちなみに隣には自身があげたにも関わらずに物欲しそうにアイスを見つめるヴィータ。

「悪かったな。もらった分は後でちゃんと返す……。」

「お、おう。当然!」

すると。

「三章〜! ヴィータ〜! ラストシーン行くぞ〜!」

翔太郎が二人を呼ぶ。

「おう。分かった。」

「…………まあもつすぐ終わるからな…………。」

しかし…………。

今回はネタ回…………。

並な終わりが有るわけがなからう！

あくまで作者の発言…………。

「……………なんだ…………。」

純白の服に身を包んだ竜が全身を震わせていた。

その竜の前には…………。

「いやだからな、はやてさんが…………。」

「キスシーン追加な　竜さん　」

呆れる翔太郎と満面の笑みのはやて。

ちなみに本来なら二人で花吹雪の中を歩くシーンで終わるはずだったが、はやてが急遽、「屋上でのキスの方がロマンチックでは？」ということ急遽脚本が代わりキスシーンが追加された。

「……………止める左…………、頼むから八神…………。」

「……いやな……三童……。」

翔太郎の後ろでははやてが例のスリッパ型スタンガンを軽く押し付けていた。

たまに接しては若干身体に微弱ながらも電圧が流れる。

そのせいで翔太郎はなんとなくシスの暗黒郷の気分を味わった。

「そついつ訳や竜さん」

「……左……、一生の頼みだ……。」

「……わりい三童……。逆らったら俺の一生が終わりかねねえ……。」

「まあまあ竜さん　ええやないですか。こんな美人とキスできるんやし……。」

「……。」

竜が黙るが……。

「……さあ、振り切れ！」

対してはやては竜の台詞を右手を左頬の横に立たせて言う。

すると何処からかトライアル変身時の音が鳴った……。

気がした。

そしてトリアル変身終了時のシグナルが全部光った時のような音が響いた気がしたとき……。

「……………絶望が俺のゴールだ。」

竜は逃げ出した。

「あ、逃げた！」

「ま、そりゃあなあ……………」

はやての後ろでは翔太郎が遠くを見るような目をする。

すると。

「翔太郎さん、ヤツを捕えろ！」

まるで自称美人所長を思い出すかのように翔太郎に命令をする。

「え……………いや……………命令……………つかその台詞どっかで聞いたような気が……………」

「確保……………！」

「お……………おっす。」

翔太郎は竜の後を追いつく。

そして遠くからは……………。

「頼む左！ 見逃してくれ！」

「俺だって手ぶらで帰ったら天国の霧彦に会う羽目にならあー！」
そして……。

「……………見逃してくれ！」

「そうはいかへんよ？」

竜はバインドで縛られたままながらも最後まで頼むが、はやては無情にも笑顔でさらりと却下する。

すると。

「でもさはやてちゃん……………」

「ん？ 何、なのはちゃん？」

なのはがはやてに一言。

「これじゃ相思相愛の絵にならないかなあ……………」

「あ。」

はやては手をポンと叩く。

狸だけに。

(・・・た、助かった)

なのはにかなり感謝の意を持った竜であつたが・・・。

「そやつたらシャマル連れて来て。シャマルのクラーヴイントでいいツボを突・け・ば」

「！ 止める八神！ 頼む！ 一生の願いだ！」

そんな竜の意思を無視し数分後シャマルがやって来た。

「本当に頼む！ シャマル！ 八神！ 本当に・・・。」

「あの・・・、いいんですかはやてちゃん・・・。」

善意が働いたシャマルの後ろでは・・・。

「やっちゃって」

「わ、わかりました。」

「よ、寄せシャマル、はや、・・・。。。。。。あああああ
あああああああああああああああ！」

数分後・・・。

「今度こそ振り切るぜ！…………いや…………振り切らせて下さい！」

翔太郎達が撮影するなか竜ははやてとのキスシーンへ。

首筋に何か鋭いものが刺さった後があったことは他の面子は気がつかなかった。

「そんじゃあ…………いくで？」

「ああ。」

はやてと竜…………。

二人は目を閉じ…………。

「……………悪夢だ。」

竜は汗びっしょりでベッドから起きる。

それから竜は若干はやてと目を合わせられなかったとか…………。

現代／追跡（前書き）

現代編は過去編に比べラブコメ臭がします。

今回はボクっ娘！

ボクっ娘って嫌いじゃないですが・・・。

次回オーズが最終回・・・。

オーズよ・・・。

色々ありがとう・・・。

個人的にはVシネでも劇場版でもいいから続編を！

マニアックに走ると伊達さんのバース変身秘話とか・・・。

現代／追跡

ピンポン

右風家のドアのインターフォンを鳴らすヴィヴィオ。

ミニスカートにお気に入りのリボン……。

逆にわかられたら問題の何故か既に所有、着用している勝負下着などかなりおめかししていることから来人に用があることがわかる。

「来人さん……、いるかなあ……。」

翔太郎が過去へ飛んではいるものの克巳の分でプラマイゼロになっているこの街の仮面ライダー……。

キメラとラグナロクもいざというときまで行動はない、ホムンクルスの思考能力の低さ等を克巳が推理したことで二人はやることになった……。

というよりドーパントは現れては倒れているし、極力二体の情報を得ようとするもなにぶん証拠が残らないホムンクルスの性で二人はやることが浮かばなかった。

そして二人は訓練はしつつも普段は普通に生活することとした。

そして今日は休みかつヴィヴィオは来人が休みと聞いていた……。

するとドアが開き……。

「あら。ヴィヴィオちゃん。どうかした？」

来人の母、右風文音が現れた。

「あ、……あの、来人は……。」

「来人はねえ、ちょっと前にミウラちゃんとおでかけしちゃったのよ。」

「はへ？」

「何か用だった？」

「……いえいえ……。お、お邪魔しましたあ！」

「？」

文音が不思議がるもヴィヴィオはそそくさと去って行ってしまった。

「そっか……。来人さんミウラさんとお出かけ……。タノシイダロウナ。」

ヴィヴィオは笑顔ながらも顔はぴくぴくとひきつっていた。

そして背後には気のせいだとはおもうが スノートや リーチのものとは違う死神が見えた……。

気がした。

「……………（ゾクッ）」

何か殺気を感じた来人はプラネタリウムの前……………。

「どうかした来君？」

「な、なんだか殺気を感じたような気が……………」

「？ それよりもさあ……………、あ、改めてどうかなこの服？」

ミウラはヒラヒラのワンピースのスカートの裾を掴み来人に見せる。

ちなみに三度目……………。

「う、うん。似合ってるよ。」

「ホント？ ホント？ ホント!？」

普段パンツルックであるミウラのスカートは正直来人には衝撃的であつた。

「う、うん。可愛いよ。」

来人に誉められたミウラは顔を真っ赤にし……………。

「……………もう来君つたらあ。」

照れ隠しか来人の懐に回し蹴りを叩き込む。

「んふう！」

来人は当然のように腹部を抑え悶える。

いいところに入ったようで小刻みに身体が震える。

「……………あ！ 大丈夫来君！？」

「大丈夫……………って言いたいけど大丈夫じゃない。」

「ご、ごめんね来君……………なんか頭がぼーとしちゃって……………」

「ぼーっとして人に蹴りを入れる理由はわからないけど大丈夫だよ……………じゃ……………じゃあ行こっか……………」

まだ腹部を抑える来人とミウラはプラネタリウムの中へ入っていった。

終始来人が腹部を抑えていたのは言うまでもなく。

そして後ろに一人、少女がつけていることも。

「(じ〜〜〜〜〜)」

プラネタリウムの中で来人とミウラをじっと監視するように見つめ

るオツドアイの少女。

（文音さんが教えてくれた通りだったなあ。．．．．でもプラネ
タリウムって色々だけどよく考えたらカップル多くないかなあ．．．
）

帽子を深く被ったヴィヴィオは二人を鋭く監視する。

当の二人は．．．。

「．．．．．。」

既に腹部の痛みは癒え静かにプラネタリウムを見る来人と．．．。

「（ドキドキドキドキ．．．）」

隣には心臓がバクバク鳴り続けるミウラ。

なにせ周りは手を握り合うカップルばかりでたまに．．．。

チュツチュ．．．。

怪しい音が聞こえる。

そんな中、心臓をバクバクさせるミウラはゆっくりと顔を来人に近づけていく。

（来君．．．）

そんなミウラを．．．。

（あわわわ・・・。ミウラさん大胆だよぉ〜）

ヴィヴィオは目を見開き二人を見る。

すると突如爆音が鳴り響き周りが明るくなった。

「！」

「うわぁ！」

突然立ち上がった来人にミウラは驚く。

周囲もあわてふためいている。

すると。

「しゃあああああぁ！」

突如マンモスドーパントが扉を突き破って現れた。

「きゃああああぁ！」

他の客は一気に非常口に逃げていく。

「ちよっ！ 来人さぁ〜ん。」

中にはその雪崩に吞まれ無理矢理おいだされるヴィヴィオも。

ただし二人のみ残っている。

「ドーパント……。」

「来君逃げよよ。危険だよ。」

「大丈夫大丈夫。君は僕が守るから。」

「来君……。」

笑顔で頭を撫でられたミウラは顔を赤くしてうずくまる。

「まったくいつもこいつもろけやがって……、不愉快……。
非常に不愉快！」

マンモスは両拳をぶつける。

「だとしたらそれはこっちの台詞！」

『サイクロン！』

来人はサイクロンメモリを手にする。

「変身！」

来人はロストドライバーにサイクロンメモリをスロットし来人の身体は風に覆われ……。

「来……君……。」

スカートを抑えるミウラの前で来人は仮面ライダーサイクロンへと

変身を遂げる。

そして右手の指を向ける。

「さあお前の罪を……、数える！」

そんなサイクロンをミウラは……。

「来……君が……仮面……ライダー……。」

サイクロンはしゃがみこむミウラにしゃがみながら頭を撫でる。

「ごめんね黙ってて。後で話すからとりあえず避難してて貰えると
たすかるかな……。」

「う、うん。」

ミウラはサイクロンを気にしながらその場を立ち去っていった。

「さてと……。」

「これで戦える！」

マンモスはサイクロンに殴りかかる。

サイクロンはそのラッシュを手で捌きつつ打撃を叩き込む。

「そりゃあ！」

そのまま横蹴りでマンモスを蹴り飛ばしつつ……。

「星空にちなんでこれで。」

『ルナ!』

サイクロンはルナメモリをスロットし展開する。

『ルナ!』

ルナにメモリチェンジするとルナはアメイジングアームでマンモスを打ちのめしていく。

そのまま足を掴み・・・。

「あ~~~~らよつと。」

マンモスを投げ飛ばす。

「ぐ~~~~」。 「

「そろそろ決める。」

ルナはメモリをスロットしようとするが・・・。

「じゃあ!」

マンモスは牙を放つがルナは簡単にアメイジングアームで叩き落とす。

「そんなの。」

ルナはメモリを再度スロットする。

『ルナ・マキシマムドライブ!』

ルナは右手を伸ばしマンモスを掴み引きつける。

「ルナ・・・フロントムウィップ!」

そのままひきつけたマンモスに光を纏った左手の手刀を叩き込みマンモスは爆発、破壊されたメモリと若い男が現れた。

「・・・・・・・・ふう。後は管理局の方に任せてっと。」

変身を解いた来人はその場を後にした。

数分後犯人は来人の通報によりやってきた管理局員により御用となつた。

「・・・・・・・・来君・・・・・・・・。」

手を胸に來人を心配するミウラ。

すると何者かがミウラの肩を叩く。

「! きゃあああああ!」

ミウラは驚きその者におもいきり蹴りを放つ。

「んじゅー!」

その者は……。

「ら、来君！」

腹部を再度抑えこみうずくまる来人だった。

「な、なんかデジャブ……。」

「ご、ごめんね来君。なんか驚いちゃって……。」

「僕、盲腸で入院しそうだよ……。」

「ごめんね本当に……。」

ミウラは来人を起こす。

「まあでもわざとじゃないし驚かしちゃった僕も悪いし……。気にしないで。」

「……うん。」

笑顔で返す来人にミウラは顔が赤くなる。

「そんじゃあ次は映画いこっか？ ちょっとみたい映画があるんだ。まあミウはあまり好きにはならない時代劇なんだけど……。」

「ううん。そんなことないよ……。」

ミウラは来人の腕に抱きつき……。

「来君と一緒にならなんでも楽しいもん」

その一言に思わずキュンとする来人。

「う、うん。ありがとう。」

「でも……。」

「？」

「すぐに言ってくれなかったのはちょっとムカツとした」

「う、ごめんなさい！」

「う、うん。仕方ないから許してやろう」

「ははは。」

そのまま二人は去っていった。

そしてそんな二人を……。

(な……なんか……いい雰囲気……)

ジト目のヴィヴィオは引き続き追跡を続けた。

その後二人は来人が見たがっていた映画【風の左平次ザムービー2】を見た。

ちなみに来人自身は翔太郎によって影響されていた。

翔太郎自身もこの映画を見たがっていたとか。

ちなみにヴィヴィオは……。

「……な、なんか時代劇って難しい……。」

鑑賞中なかなか触れない文化に少々苦戦していた。

「なんかすごかったね〜」。時代劇って初めて見たけど面白かったね〜。」

「そう言ってくれてよかった〜。」

ミウラとパンフレットを持った来人は帰り道を歩いていた。

そしていつの間にかミウラ宅前へ。

「……ねえ来君……。」

「ん?」

「来君はなんで仮面ライダーになるの?」

「ん〜」。なんていうか……。」

「?」

「最初は皆を守りたいなんて言ってたけど。今は……。」

「？」

「みんなと明日笑いあっていたいからかな。」

「笑いあうため？ それだけ？」

「うん。それだけ！」

「あはははは。なんか来君らしいね。」

「そう？」

「うん。でも来君ばくてボクは好きかな。」

「そうかなあ？ じゃあ明日も頑張らないとなあ……。」

「でもね……。」

「？」

「あんまり無理しちゃ駄目だよ。ボク心配なんだから……。」

「……うん。ありがとう。」

「うん。それじゃあね。」

「うん。また。」

ミウラはドアに走って行き、来人は背中を向けて歩き出すが……。

「……来君！」

ミウラは駆け出し来人の肩を掴む。

「？」

「これお守り」

しかしもらったのはものではなく……。

「……………」

来人は何かを口にしようにもミウラの唇により自身の口が塞がれて……。

つまりはキスをされて何も言えなかった。

そのままミウラは身体を離し……。

「じゃあね来君。頑張つてね。」

「……………りよ、了解……………」

ミウラは勢いよく家の中へ逃げるように入ってしまった。

そして家の中ではミウラはドアに寄りかかり……。

「……………やっちゃった……………でもなんか頑張ったよねボク！」

自身の唇のほのかな温かさに顔を赤くさせていた。

その後ミウラと来人は眠れなかったとか。

そして翌日、ミウラの知らない所では来人は後ろに黒いオーラを纏った二人のオッドアイの少女から楽しい楽しいお話を受けることとなった。

来人はつくづく思った。

”女の子はある意味ドーパントよりも手強い”と。

現代／追跡（後書き）

次回は克巳が逃げる？

誰から？

現代／秘密（前書き）

現代編エターナル回です。

バトルはありますがあまり描写が・・・。

現代／秘密

「ぬあああああ！」

倒れ転がるコックローチドーパント。

歩み寄るのは……。

「言語能力がある。……ということはあいつが作った人形ではなさそうだな……。」

エターナルがエッジを回しながらコックローチに近寄る。

「貴様あ……、俺の邪魔をするなあ！」

「……それはこっちの台詞だ。せつかく人様が気持ちよく寝ていたのに。生憎今の俺は目覚めが悪い。」

エターナルは指を鳴らすと宙にメモリが生成され、エターナルはそのメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『アクセル・マキシマムドライブ！』

「何をする気だあ！」

コックローチは高速移動に入る。

「……ふっ。」

エターナルもアクセルメモリの能力、超加速に入りコックローチと交える。

コックローチの高速の打撃をエターナルはロープで避け続け、隙を無理矢理作りカウンターを叩きこんでいく。

そして右手に炎を纏い……。

「そりゃあああああ！」

回転したのちのストレートによりコックローチを吹き飛ばし……。

「そろそろ……終われ。」

エターナルはエッジにエターナルメモリをスロットする。

『エターナル・マキシマムドライブ！』

すると……。

「が、な……なんだこれは……。」

コックローチは苦しみ出す。

「お前を眠らせるための……鎮魂歌だ。」

エターナルは走りながら右足に青い炎を纏い……。

「せりゃあああああ！」

キック版エターナルレクイエムを叩き込む。

「ぬあああああああ！」

エターナルは着地し……。

「さあ……地獄を楽しみな！」

サムズダウンを背後のコックローチに向ける。

そしてコックローチは爆発し中年の男が現れる。

「………つたく面倒だ。」

変身を解いた克巳はネクロオーバーのモニターを開き管理局に問い合わせを始める。

後に管理局によりその男は御用となり克巳はホテルの自室へと戻っていた。

ちなみに今は夜……。

そして克巳が部屋を退室したのをハリーとヴィクトーリアは目撃していた。

「「克巳^{さん}！」」

部屋でネクロオーバーを拭く克巳にハリーとヴィクトーリアは顔を

近付けて問いたです。

当の克巳は……。

「……………顔が近い。」

そのまま顔色を変えずにネクロオーバーを拭き続ける。

「なんなんですのその態度は！」

「昨晚何処に行ってたんだ！ オレら見てたんだぞ！」

「あんな時間に外出なんて……………」

「ま、ままままさかなんかそういう系の店に……………」

「は、は、は、はしたないですわ！ そういうのならわたくしめが処理してあげますのに！」

「なっ！ 何言ってたんだテメ、ならオレだって……………」

「ふん。貴方のそんな貧相な胸で殿方を満足できなくてよ？」

「んだとお！」

二人は互いに顔を近づけ電撃がぶつかりあった……………気がした。

そして……………。

「「克巳^{さん}！ お前はどっちが……………」

二人が克巳のいた方を向くと……。

「……あれ？」

そこには何もなく……。

「……」

気配を感じた二人が向いた先に……。

「……ちっ。」

退室しようとしてドアの前にいる克巳がいた。

「……。」

「……。」

「……克巳い（さん）！」

ダッ！

二人が駆け出すのと同時に克巳も走り出す。

こうして何かよくわからない鬼ごっここの崔が投げられた。

「……しっしっ。」

「まてええええええええええ！」

「克巳さああああん！」

ホテルの廊下を走りながら逃げる克巳と追いかけるハリーとヴィクトリア。

すると前から清掃員がカートを押しながらやって来た。

「…………ちつ。」

すると克巳は壁に飛び、三角飛びの感覚で清掃員を飛び超える。

「なっ…………。」

「凄いですわ…………。」

二人は啞然としながらも…………。

「……待てええええええええええ！」

清掃員の横の隙間を歩き再び追いかける。

「……………姑かあいつらは。」

克巳は追いかけれながら走ると前のエレベーターが開く。

「しめた。」

克巳はそのエレベーターに入り閉じボタンを連打し追跡者二人を振りきることに成功する。

「……………克巳い……………」

「……………逃がしませんわよ……………」

ここは二階かつ矢印は下……………」

「……………一階だあ!……………」

二人は階段を駆け抜ける。

エレベーター前に到着した二人。

「克巳い……………」

「逃げられませんわよ……………」

なにか黒いオーラのようなものを放ちながら二人は構える。

そして扉が開くと……………」

「……………あれ……………」

そこには誰もいなかった。

「なんでだ?……………」

「逃げ道はなかったはずなのに……。」

二人はただ扉が閉まるのを呆然と眺める。

そしてエレベーターは上へと上っていく。

「あ……。」

「なんですか？」

「前に克巳が見てた映画で天井に張り付いて銃を避けてたシーンが……。」

「……。」

二人は笑顔でみつめあったのち……。

「……無茶苦茶だ（ですわ）！」

再度階段に向かう。

三階。

エレベーターが開くと何も……。

と思ったら天井から克巳が着地する。

「・・・・・・・・やってみたら案外だるいな。」

啞然とする他の客を尻目に克巳は走り出すと……。

「あゝゝゝ！ いた！」

「逃がしませんわよ！」

二人が現れる。

「・・・・・・・・つたく。」

克巳は駆け出す。

「逃がすか（ませんわよ）！」

二人も走り出す。

そして一人と二人は引き続き鬼ごっこを続けるもハリーとヴィクトーリアは克巳に指一本触れられずにいた。

「くっくっくっ・・・・・・・・。」

ホテルの屋上に現れたのはスパイダードーパント。

「通気孔からこのくも爆弾を送って楽しい花火を……。」

すると。

「……………は!」

屋上のドアを突き破り追いかけられていた克巳が屋上に。

「……………。」

スパイダーがただ睨む中、克巳はゆっくりとネクロオーバーのモニターを開き……………。

「……………気がつかなかったな。」

ドーパントの反応が出ていたことに気づく。

そしていつの間にか腰にはロストドライバーが巻かれていた。

「お前……………、邪魔を……………。」

「それはこちらのセリフだ。あいにく雑魚くせえしちやっちやと片付けさせてもらう。」

『エターナル!』

「変身!」

克巳がエターナルメモリをスロットしかけた時……………。

「克巳い!」

「もう逃げ場は……、あれ？」

ハリーとヴィクトーリアがドアを突き破り現れた。

「か、怪物……。克巳逃げるぞ！」

「そ、そうですわ克巳さん！ そういうのは専門の……」

「仮面ライダーにだろ？ ……言わないで悪かったが、……俺が……。仮面ライダーだ。……変身！」

『エターナル！』

克巳はエターナルメモリをスロットし展開すると、克巳の身体を風と共に白い装甲が纏い、青い波動が放たれ……。

「マジ……。」

「克巳さんが……。」

「「仮面ライダー……。」」

「ああ。俺は……。仮面ライダー……。エターナル。」

「「エターナル？」」

「さあ……。」

エターナルはエターナルエッジを順手で回しながら……。

「地獄を楽しみな。」

エッジをスパイダーに向けた。

無論スカルにことごとくやられたスパイダーがいかに努力しようが、エクストリームに匹敵する力を持つエターナルに叶うはずもなく秒殺された。

「……じゃあ昨晩いなかったのはただ単に仮面ライダーとして戦っていたから？」

「何か水商売の店ではなかったのですね？」

ハリーとヴィクトリアは克巳の部屋で克巳の話にきよんととしていた。

「ああ。……そういえばハリーには言ってなかったか……。」

「初耳だっつーの！　なんで教えてくれなかったんだよ！」

「……言う必要がなかったから。」

「（ガクッ）　お前なあ……、オレとお前の仲じゃねえかよ。」

「わ、わたくしもですわ！」

「……言いたくねえ。」

「なんでだよ！」

「なら言うまで離れませんわよ。」

「……もう反論が面倒だ。……わかった。……言わなかったのはお前らを巻き込まないためだ。」

「オレらを……。」

「巻き込まないため？」

「ああ。……納得したか？」

「……克巳……。」

「克巳さん……。」

二人はうずくまると……。

「克巳い（さあん）！」

勢いをつけたように克巳に抱きつくが克巳は……。

「よつと。」

克巳は トリックスのキ ヌ・リーブスのように腰を曲げて二人を避け、二人は壁に顔面をぶつける。

「……。」

「何するんです克巳さん！ せつかくわたくしのような美人が抱きついてあげようと思いましたがに……。」

「……………ってオレはなんなんだよ！」

「その他……………ですわ。」

「なんだそ……………」

ハリーが言いかけた時二人の頭に克巳の拳が放たれる。

「つてえ！」

「痛いすわ……………」

二人は頭を抑えながら静まる。

「……………納得したなら出てけ。昨晚のせいで俺は眠い……………」

克巳の逆鱗に触れたと判断した二人はしぶしぶ退室しようとするが……………。

「……………お前らの試合は邪魔させない……………俺がな。」

克巳のこの一言に二人は……………。

「お……………おう。」

「た、頼りにしていますわよ。」

二人は笑顔で退室しドアを閉めた。

しかし……。

「あれはオレに言ったんだ！」

「わたくしですわ！」

「オレだ！」

「わたくし！」

「オレ！」

「わたくし！」

「オレ！」

「わたくし！」

「お前ら」と言ったことを自分だけに言ったと勘違いした二人による口喧嘩がドア越しから聞こえるが……。

「……ふう。」

克巳は楽しげに笑いながら耳せんをして眠りについた。

過去ノ都内（前書き）

過去に戻ってきました。

それならアレンジがあります。

過去／都内

陽の光が差し込む部屋……。

ここはスバルとティアナの部屋である。

すると。

パチッ

スバルは起きる。

そして……。

「ティア〜。朝だよ〜。」

二段ベッドの下で未だに寝ているティアナに呼びかけるがティアナは起きない。

するとまだ起きる手段があるつにも関わらずティアナのベッドに入り……。

「……ん？」

妙な感触で起きるティアナが見たのは……。

「あ！ 起きた。」

自分に乗り自分の胸を鷲掴みするスバル。

「……………」

顔を赤くさせつつ一瞬思考が止まっていたティアナだったが……。

「ふみゅ！」

瞬時にスバルをベッドから追い出し……。

「あんたは！ 昔っから！ 隙があればすぐセクハラばかり！」

涙目で怒りながらスバルの尻を蹴る。

「ちょっとしたスキンシップなのに……」

しかしこんな風景もティアナが徐々になじんできていた証拠であった。

その後四人は毎日通り、なのはの教導を始める。

一方その頃……。

「ブレイブとインフィニティの条件か……」

「……………わからん。」

翔太郎と竜は森の中で葬の最大目的、ブレイブとインフィニティに
対し改めて考えていた。

「そもそもその二つってなんなんだ？ 物なのか？」

「わからん。．．．．俺にわかるのはその二つには巨大なエネルギーの塊．．．、この世界でいうレリックが必要ということだけだ．．．。」

「色々と曖昧すぎだぜ．．．。あいつはわかってんのか？ その二つについて．．．。」

「さあな。やつは昔から影が多いやつだった．．．。」

「謎だらけだな．．．。」

二人が考えこんでいると．．．。

「あれ 翔太郎に竜．．．。」

ヴィータが歩いてきた。

「おうヴィータ。」

「教導はどうしたんだ？」

「今日は第二段階のテストだったんだよ。まああんなにみっちり叩きこんでやったんだから大丈夫だったけどな。それで今日はこれべ
終いだ。」

「なるほどな。」

「そうしたらあいつらは午後はここに来て始めての休みだ。……まあ休みも大事だろうからな。」

「指導者としてはいい判断だな……。」

「う、うるせえ！」

ヴィータは照れ隠しに竜に肘うちをするも軽く竜にあしらわれる。

「そついやお前らはどうすんだ？」

「俺らは……。」

翔太郎がいいかけると……。

「翔太郎さあああん」

スバルが後ろから翔太郎に抱きつく。

「ちよっ！ スバル！ おま……。」

「翔太郎さんも一緒に街に行きましょうよ……。休みもらったんですし……。」

「お前なあ……、俺らは……。」

「いいんじゃないんですか……。」

「翔太郎さんも竜さんもたまには気分転換したほうがいいんじゃないですか？」

ティアナは苦笑、なのは達は笑いながら歩み寄る。

「でもなのはさん……。」

「一流は休み方も一流……だろ？」

とどめはヴィータ。

「……わったよ！」

「やった」

承諾した翔太郎に抱きつきながらスバルはガッツポーズをする。

「竜さんはどうします？」

フェイトは竜に聞くと……。

「俺もお言葉には甘えるが俺は隊舎でのんびりさせてもらつとしてよ
う……。」

すると……。

「なあ竜。それならあたしらと一緒にお茶でもしねえか？」

「……俺はコーヒーを頼むぞ……。」

「うしー！」

竜の承諾にヴィータは笑う。

そしてフォワード陣と翔太郎は街へ、隊長陣は隊でのんびりするという事になった。

「すげえなティアナのバイク……。」

「実際はヴァイス陸曹ですけどね。でも翔太郎さんのも凄いですね。合体したとこしか見たことなかったからなんか新鮮……。」

二人は互いのバイクを見合い、感銘の声を上げる。

「ハードボイルダーっつーんだ。今度乗ってみるか？」

するとティアナはヘルメットを被り……。

「喜んで……それじゃ翔太郎さん、私の後についてきてくださいね。」

バイクに跨る。

「え！？ ちょっとティア、私は？」

「ん？ 翔太郎さんに乗っけてもらったら？」

「え！？でも……。」

しかし混乱するスバルに……。

「スバル！」

翔太郎はティアナから受け取っていたメットをスバルに投げる。

「乗れよ。はやくしねーと遊ぶ時間なくなっぞ。」

「……はい。」

スバルは笑って翔太郎の後ろに乗る。

そして三人はバイクで走り出していった。

(でかしたでヴィータ！)

皆で集まりお茶を楽しむ中、竜の隣のはやては誰にも悟られないようにガッツポーズをする。

するとモニターには中年、小太りの男性が演説している所が映る。

「このおっさんはまだこんなこと言ってるのな。」

とりあえず偉い立場の人間をおっさん呼ばわりするヴィータに竜は若干言葉遣いを考慮すべきと思ったり……。

「誰だ？」

「レジアズ・ゲイズ……昔からの武闘派で有名な地上本部中將だ。」

竜の疑問にシグナムは紅茶を飲みながら答える。

「後ろの方々は……。」

「伝説の三提督、……ミゼット提督に……。」

「ミゼットばあちゃん？」

相変わらずの口調に竜となのは達は苦笑。

「あ、キール元帥やフィルス相談役も一緒なんだ……。」

「でもこうみると……普通の老人会だ。」

「もう駄目だよヴィータ。今の管理局システムを作った功労者さん達なんだから……。」

フェイトがヴィータに柔らかく指摘。

そして一同の他愛もない会話はそのまま続き……。

とりあえずはやてに關しては竜に対し色々とやばい妄想に入り、会話に入ることとは殆どなかった。

そんな最中、フェイトのデートプランをこなすエリオやキャロとは別行動するバイク組三人は……。

「はふはふ……おいひいいい。」

「ん〜ん〜。」

「ここは変わんねえなあ……。」

「「変わらない?」」

「いや、なんでもない。」

三人仲良くアイスを食べていた。

「まあでも悪くねえな……。」

翔太郎がアイスを食べている間……。

《スバル……スバル!》

《ん? 何? ティア……》

二人は念話を始める。

《あんたちよつとは頑張つて翔太郎さんにアタックしなさいよ》

《ふえ? なななんのこと?》

《とぼけられてもないわよ。あんた翔太郎さんのこと……》

《・・・・・・・・うん・・・・・・・・》

すると・・・・・・・・。

「どうしたんだよお前ら。ぼくとしてよあ〜。」

念話が聞こえなかった翔太郎は二人に疑問を思う。

「なななんでもないですよ翔太郎さん！」

スバルは顔を横に振り精一杯ごまかす。

対しティアナは・・・・・・・・。

「翔太郎さん。この後ゲーセン行きませんか？」

冷静だ。

「おっ、いいなあ〜。久々に行くかあ。」

「わ、私も・・・・・・・・。」

三人はゲームセンターに向かった。

しかしそんな時にも街の地下道で起きたトラックの横転事故で見つけた生態ポットを見たスバルの姉、ギンガが眉をひそめたことなど翔太郎達は知るよしもなかった。

「呼びましたかドクター……。」

スカリエッティのアジトでスカリエッティに呼ばれた葬とカオスド
ーパント。

「おお葬君にカオスくん。君達にちょっと仕事を頼みたいのだが・
」

「内容は？」

「大したことじゃない。ちょっと探し物が見つかったかかも知れない
から彼女達に追跡に向かってもらったんだが……。」

「仮面ライダーも出るだろうから俺らにそいつらの相手をしろとい
うことですよね……。」

「頼めるかい？」

「もちろんです。」

「………敬意。」

葬とカオスはスカリエッティに一礼し立ち去っていった。

その頃……。

「ずるいわよ翔太郎さん。2丁拳銃って……。」

「一辺やってみたくてな……。」

ティアナと翔太郎がさっきのシューティングゲームのことを話し合っている中……。

「ティア、翔太郎さあ〜ん。プリクラ取る〜よ〜。」

「おっ、いいなあ〜〜。」

「いいわねえ。」

翔太郎とティアナもスバルの後に続き、プリクラマシンの中へ入っていった。

「じゃあ……これで」

スバルが全体のフレームを決めたが……。

「……なあスバル……。」

「何ですか？」

「なんでハートばっかなんだ？」

「え？ ただなんとなく……嫌でした？」

「なんつーか……。別の……。」

すると。

「（ピカーン）」

ティアナは何かを閃く。

「いいじゃないですか翔太郎さん。後ろもつかえてるし……。」

「……………わーったよ。」

ティアナの言葉に翔太郎は納得する。

『「行きますよ〜」。はいポー……』

機械が掛け声をするなか、ティアナはスバルを翔太郎に密着させつつ自身はプリクラマシンから出る。

「「あ……………」」

『……………ズー!』

プリクラマシンの中をフラッシュが覆う。

するととたんに挙動不振になるスバル……。

「す、すすすすいません!」

「いや大丈夫だって。気にすんなよ……………」

「は、はい……………」

それはそれで何かすつとしないスバルとよくわかっていない翔太郎はプリクラマシンから出ると、ティアナが写真を持ちながらニヤニヤして待っていた。

「スバル・・・、あんたも大胆ねえ〜〜。」

「・・・も〜〜！ ティア〜〜！」

スバルは顔を真っ赤にしながらティアナを追いかける。

「お、おい待てよ！」

二人に翔太郎も続く。

スバルから逃げるティアナの手にはハートが満載のフレームに翔太郎に身体を密着させるスバルがしっかりと写った写真が握られていた。

ティアナのクロスミラージュがエリオからの通信で鳴り出すのはこの後数秒後になる。

過去／対峙（前書き）

今回なのは達の戦闘はあまり書いていません。

なるべく原作には近いのでみなさんが知っていることを願います！

過去／対峙

「レリックに繋がれた少女？」

竜はフェイトに聞き返した。

「エリオとキヤロによれば……。」

「……やつが動き出す前に保護する必要があるな。」

「はい。」

少女を見つけたエリオとキヤロの知らせにより竜と六課メンバーはヘリコプターに乗り込んだ。

「……………」

（……この子は……）

エリオからの通信によりスバル達と路地裏にやって来た翔太郎はキヤロの膝の上で眠る少女に啞然とする。

（赤と緑の瞳にウェーブのかかった金髪……。間違いない……。
ヴィヴィオだ）

その少女は現代にいた時知り合い、今では自分の弟子である来人に

ホの字なあのヴィヴィオであった。

「どうしたのこの子？」

翔太郎をよそにスバルがキャロとエリオに聞く。

「街を歩いてたら路地裏で倒れてて……。」

「それにこの箱って……。」

「なんだんだこりゃあ？」

箱を叩く翔太郎に……。

「おそらくは……レリックの収納ケース……。」

ティアナは冷静に箱の正体を言い放つ。

「！　なんでヴィヴ……この女の子とレリックが……。」

「……とりあえずわかるのはレリックの回収と……。」

「この外れたレリックの回収……だろ？」

レリックケースにはもう一つのケースが外れたような形跡の鎖が。

「はい。」

すると……。

「！ どころやら招かれざる客みてえだな。」

「「「「「？」」「」「」」

翔太郎が睨む方にフォワード陣が見ると……。

「失敬だなあ……。もう少し祝福してくれてもいいんじゃないかねえのか？」

「翔太郎さんが……。」

「二人……。」

「翔太郎さん双子だったんですか？」

「でもなにか……。怖い……。」

「あいにく俺は一人っこだ。こいつは……。」

スバルとティアナとエリオ、キャロが向いた方向にはもう一人の翔太郎……。

もとい……。

「暴牙………葬！」

「「「「「！」」「」「」」

翔太郎の一言にフォワード陣が警戒する。

「あれ……。やたらと嫌われたもんだなあ。誰かさんらのせいです……。」

「当然だが……。この世界を滅ぼそうとしてるヤツに仲良くするヤツが何処にいる！」

「そりゃそうだ。」

「何がやりてえんだてめえ……。なんなんだブレイブとインフィニティって！」

「それは秘密だ。男は多少ミステリアスな方がもてるんだぞ？」

「だったらその減らず口を叩けなくした上で、秘密とやらを嫌でも聞き出してやらあ！」

「……。やってみな。」

二人は互いにロストドライバーを装着し……。

『ジョーカー！』

『タイラント！』

「変身。」

メモリをスロットし展開……。

『ジョーカー！ エクストリーム！』

『タイラント！』

ジョーカーエクストリームとタイラントが向かい合う。

「……………」

互いに歩み寄りすれ違いかけた時……。

二人の拳がぶつかあい、そのまま互いに拳を放ちつつ組み合う。

「翔太郎さん！」

スバルが叫ぶ中……。

「もうすぐ三童らも合流する……。ヴィヴィ……。じゃなくてその子をヴァイスらに任せたらお前らはレリックを捜せ！ こいつは俺が相手する！」

「でも翔太郎さんは……………」

「安心しな！ 逆にぶっ潰してやつから大丈夫しろ！」

「ずいぶん自信満々じゃぬえか。なら楽しませてもらおうかあ！」

「上等お！」

二人は組み合ったまま跳躍しビルの屋上へと消えていった。

一方……。

ヘリコプターで向かっていた六課陣だったが……。

「……………どうします竜の旦那あ……………」

ヘリコプターを運転するヴァイスが聞く隣の竜が睨む先には…………。

「…………カオス……………」

空中を浮遊するカオスドーパントと大量のガジェットドローンがヘリコプターを塞いでいた。

「…………しかも遠くからはお客さんが大量においでになりましたぜ……………」

ヴァイスが見るモニターにはガジェットの機影が大量に映っていた。

すると竜は…………。

「…………はやて、お前は増援を頼めるか？」

「う、うん。」

「高町とハラオウンはガジェットを、俺はカオスを。その隙にヴァイス、お前はナカジマ達と合流し少女とレリックを……………」

「は、はい。後ヴァイータちゃんも此方に向かってるって……………」

「よし。ヴァイータにはナカジマ達に合流して行動を。ハラオウンとヴァイスもいいか？」

「わかりました。」

「うっすー！」

「よし。いくぞ。」

なのは、フェイト、はやてがデバイスを構える中……。

『アクセル・アップグレード！』

竜は強化アダプタをアクセルメモリに装着し……。

「変……身！」

アクセルドライバーにスロットしパワースロットルを捻った。

「「おらぁあ！」」

エクストリームのスペリオルソードとタイラントのタイラントソードが激しくぶつかりあうも未だに互いの身体を捉えてはいなかった。

「やはり自分との戦いってというのは新鮮味があって楽しいなあ。」

「きめえこと……、いってんじゃねぞコラア！」

エクストリームのスペリオルソードの横斬りをタイラントは避け、懐にタイラントソードで突きを放つがエクストリームはビッカーシールドで其を防ぐ。

「なんだかんだいつて隙をださないなあ左い……。さすがは俺だ。」

「いちいち変なこと言ってるじゃねえぞてめえ……。」

「連れないこと……。言うなよ！」

互いに前蹴りを放ち両者吹き飛び間合いが空く。

「あいつらが心配だがてめえを倒しちまえば全てが戻んだ。ここで倒させてもらっぜ！」

「そうそう。その意気だ。存分に殺りあおう。」

互いに起き上がり……。

「……………おらあああああああ！」

「ふっ。」

走り出すエクストリームに対しタイラントはタイラントソードを構えた。

「はあああああああ！」

アクセルブースターは周囲のガジェットドローンをなのはとフェイトに任せ、カオスと剣を交えていた。

「貴様らあ……何故スカリエツティに力を貸す!？」

「……………わからないか? ……我々にはレリックを捜す手段がない。なら彼らと共に行動したほうが明らかに都合がいいだろう…………。」

「それだけではないだろう…………。」

「……………なぜそう思う…………。」

「アイツとはくされ縁だったからな。アイツの考えることややることには必ず裏があるとなんとなくだが感じた。」

「……………外れではないことだけは教えてやる!」

カオスの一撃をアクセルブースターはエンジンブレードで受け止めるが、相当重い一撃だったらしく後ろに大きく吹き飛ばされる。

「悪いがそれだけでは俺は満足できない…………。」

アクセルブースターはエンジンメモリをブレードにスロット…………。

『エンジン!』

そして引き金を引き…………。

『ジェット!』

ブレードの剣先から弾丸を放つ。

カオスは難なく避けるとジェットの弾丸は後ろのガジェットドローンを貫き爆発する。

「逃がさん！」

『エレクトリック！』

アクセルブースターは雷を纏ったブレードを手にカオスと再び剣を交えた。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

『タイラント・マキシマムドライブ！』

ビルから降りた二人は地上でエクストリームはビッカーにメモリをスロットし抜刀、タイラントもソードにタイラントメモリをスロットし互いに構え動かない。

そして……。

「！ビッカー……、バーストカリバー！」

「だあ！」

エクストリームのビツカーバーストカリバーとタイラントのタイラントヘルエンドの二人の斬激派がぶつかりあう。

「ぐ……つう……。」「

「ふふふ……ふははははあ！」

すると二つの斬激派は逸れると地面を切り裂き地面に大きな切目を作る。

「ちよつとステージをかえようか……。地下道っていうのもシチュエーションとしていい。」

「ちよつ……。までコラ！」

タイラントに続き穴にダイブしたエクストリーム。

「行かせつかあ！」

「まあ、このまま落ちていくのもつまらないか。人生限られてるからな！」

二人は落ちながら……。

「ほらあー！」

「おらあー！」

タイラントのソードとエクストリームのソードが激しくぶつかりあ……い……い……。

「……………ん？ そろそろ広い所に出そうだ……………な！」

「何！」

落下していくと二人は広い空間へたどり着く。

「そらぁあー！」

「やろおー！」

互いの身体を刃が切り裂き、それぞれ正反対の方向に吹き飛ばされる。

「てんめえ……………」

「！ どうやら僕は彼女らに好かれてるようだな。」

「！」

エクストリームが周りを見るとそこは広い地下空間。

スバルやティアナ、エリオやキャロ、途中合流したギンガには驚いたが確認。

しかし次に確認したのは……………。

「覚えてな！ あたしは烈火の剣精アギト！ どっからでもかかってこいやあー！」

派手に名乗りをあげるアギトあった。

とりあえず翔太郎は自分がいた時代のアギトと比べ……。

（アギトってこんな痛いヤツだったのか……）

マスクで見えないものの少々痛い目でアギトを遠くから見ていた。

そのせいでルーテシアとガリユーを確認するのが数秒遅れる羽目になるが。

過去／対峙（後書き）

唐突なこと。

仮面ライダーで好きなバイクTOP5

- 5．ライドベンダー
- 4．マツシグラー
- 3．サイクロン（FIRST）
- 2．カブトエクステンダー
- 1．ハードボイルダー

凄くオンロードばっか。

ツーカートップ3がみなCBR？

ライドベンダーは黒いシックな感じ、マツシグラーは真っ白でスペースシャトルなんていう独特なデザインが好きです。

サイクロンとハードボイルダーは劇中のバイクチェイスがやばくカッコいい！

カブトエクステンダーはあんなデカイ角が出るっていうインパクトと普段の角があるフロント、そして水嶋さんが乗るとやたら絵に・・。

みなさんはどうでしょう。

ちなみに自分は城戸真司の愛車でもあるブーマーに乗っています（なんと原付！）。

過去ノ乱戦（前書き）

今回はかなりアレンジが・・・。

原作よりも好きな方すいません！

過去／乱戦

「ルーテシアにガリユー？ どうなってんだ？」

「なんであなた私達のことを……。」

エクストリームに大して驚く素振りも見せずにルーテシアが尋ねる。

「ちょっと此方のことだな……。」

「……よくわからないけど貴方も私の邪魔をするんだったら……。」

ルーテシアが手を向けるとガリユーが構える。

しかし……。

「アルピーノちゃんにガリユー君。悪いけど俺の獲物は取らないで貰おう……。」

ルーテシアの後ろに跳躍しタイラントが立つ。

「うん……。」

「てんめえ……。」

エクストリームはスペリオルソードを構える。

すると。

「貴方が左翔太郎……ですか？」

隣に拳を構えるギンガが立つ。

「あ？ ああ。久しぶりだなギンガ。」

「久しぶり？」

「あ……いや、なんでもねえ。左翔太郎改め仮面ライダージョーカーだ。よろしくな」

「はい。」

会話しつつも二人の視線はタイラント達から離れない。

そして他のフォワード陣も二人に並び、両陣ともじりじりとした緊張状態になる。

すると。

地下空間に巨大な穴が開き……。

「でりゃあああああ！」

ヴィータがギガントハンマーでルーテシアに殴りかかるが……。

「ぶっ。」

タイラントは片手でギガントハンマーを止める。

「何い！」

「小さい女の子はハンマーよりもお人形の方が似合ってるんじゃないのか？」

「てんめえ……。」

「言葉遣いも悪いなあ。俺が直してやろう。ただし……。」

タイラントはタイラントソードを振り上げる。

「！」

「ショック療法だな。」

ヴィータが悔しがる中、無情にもソードが下ろされるが……。

「させつかー！」

エクストリームがスペリオルソードを投げつけタイラントソードを弾くと駆け出し……。

「こおんの……偽物野郎があー！」

タイラントに殴りかかる。

「なんだ嫉妬か？」

「頭の回路直してこいー！」

剣を持たずに互いに組み合う。

拳を放ち合うも空を切り続ける。

そして……。

「ヴィータ下がれ！ こいつはガジェットとも並のドーパントともレベルがちげえ……。」

「わ、分かった。頼むぜ。」

ヴィータは視線をルーテシアに向ける。

「なんか危なそう。ガリユー……逃げよう……。」

「（コクッ）」

ガリユーはルーテシアを抱えて、アギトと共に穴から地上へと戻っていった。

「あいつら地上に……。」

「こいつは俺がやる。あつちは頼めるかヴィータ！」

「まあいいか。外野がいなくても。」

エクストリームとタイラントは互いにソードを取り戻し再び切り合う。

「お、おう。頼んだぞ翔太郎！ スバル！」

「はい！ ウイングロード！」

ヴィータの指示に従いスバルはウイングロードを穴の中に発生させ、スバル達はその穴から外へ脱出し……。

「残るは俺達だけかぁ……。」

タイラントは周りを見回す。

「まあ、いつか。じゃあ続けようか。」

「上等だ……。」

二人は再びソードをぶつけあう。

エクストリームの回し斬りをタイラントは腕ごと止め、懐に斬りかかるもエクストリームはビッカーシールドで受け止める。

そのままエクストリームの斬りかかりとカウンターを狙うタイラントの斬り合いは続くが互いに斬ることができない。

「やはりさすがだなぁ……。」

「認めたくねえがためえも考えが同じだったらいい仮面ライダーになつてたかもしれねえ……。」

「俺は自分が素晴らしい仮面ライダーだと思ってるが？ 何せ人々を地獄から救つてやるんだからなぁ……。」

「何！」

「そうだろ？ 皆死ねば地獄もへったくれもないだろう……。」

「……前言撤回だ。てめえはやはり俺が止める！」

「やってみるよ！」

互いに間合いを取るとエクストリームはドライバーを閉じた後再度展開、タイラントはタイラントメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『エクストリーム・マキシマムドライブ！』

『タイラント・マキシマムドライブ！』

エクストリームは右足、タイラントは両足にエネルギーが集約していき跳躍……。

「デュアルエクストリーム！」

「ぜりああああああ！」

エクストリームのデュアルエクストリームとタイラントのタイラントヘルバイト、二つの蹴りがぶつかりあう。

「ぐ……く……つう……。」

「はっはっはっはあ！ 楽しいなあ楽しい！」

そして互いに反対方向に大きく弾かれ……。

「うああああああ！」

エクストリームは柱に叩き付けられ、柱は跡形もなく崩れ落ちる。

「……………ならあ！」

瓦礫の山から起き上がったエクストリームだったがそこには……。

「……………どこいきやがった……………」

周りを見渡すもタイラントは見当たらない。
すると一機の紙飛行機が飛んできた。

「あ？」

エクストリームはそれを受け取り開くとそこには……。

「なぞなぞだ。今一番無防備なのはな……んだ？」

「一番無防備……、！ ヴィヴィオ！」

エクストリームは紙を投げ捨て走り出した。

エクストリームが紙飛行機の中を見た同時刻。

「逮捕はいいけど大事なへりは……放っておいていいの？」

「「「「「「「「「「「」

バインドにアギト共々縛られたルーテシアが言った一言に一同哑然となる。

空中でカオスと斬り合うアクセルブースター。

すると。

「！ あれは……。」

アクセルブースターはへりに砲身をむけるナンバーズ、デイエチとクアットロを見つける。

「やるみたいだな……。」

「何！」

「……葬の言葉を借りるなら……ちょっとした大魔術だ。」

「まさか……、！」

アクセルブースターは方向転換しへりに向かおうとするもカオスが其を邪魔する。

「……こういった茶番は嫌いだが……あいにく作られ

た立場なんでな。文句は言えん。」

「貴様あ……。」

カオスは再び剣をアクセルブースターに向けた。

一方別のビルの屋上では……。

「行くよクアットロ……。」

「いいわよ〜ん。」

クアットロのそばでディエチは自身のIS、イメースカノンをチャージし始めていた。

「！」

強化された視力でディエチとクアットロを確認したアクセルはディエチらに向かおうとするが……。

「！ 邪魔をするなあ！」

カオスが前を遮る。

「……悪いが却下する。」

「くっ！」

(ここにはガジェットはない・・・なら！)

アクセルブースターはわざと間合いを取るとトリアルメモリをスロットしパワースロットルを捻る。

『トリアル！』

一旦ノーマルアクセルに戻ると黄色く変色、下から装甲が剝がれるようにアクセルトリアルへと姿を変えた。
無論ブースターでなくなったため飛行能力が無くなり落下していくが・・・。

「はっ！」

瞬時にウイングロードを作りへりに伸ばすと、ウイングロードを疾走していく。

「やられたか・・・。」

そんな間にもエネルギーチャージが終わりイメースカノンの砲口に光が集まっていく。

そして・・・。

「発射。」

無情な一言と共に引き金を引いたディエチのイメースカノンからの砲撃がへりに直行する。

「レリックのケースは残り、中にあるのが我らの探しているピースなら大丈夫であろう。……まあ当たればの話だがな。」

「え？」

側に降り立ったカオスの一言に驚くディエチだったが発射された砲撃の先のへりには……。

「仮面ライダー？」

ウイングロードに乗り砲撃を待ち構えているアクセルが立っていた。

「ません！」

アクセルはエンジンメモリがスロットされているエンジンブレードの引き金を引く。

『エンジン・マキシマムドライブ！』

アクセルのマスクのフェイスフラッシュャーが光り……。

「はっ！ はあ！ はああああ！」

空中をエンジンブレードでに斬ると赤いAの字の軌跡が描かれ、ダイナミックエースが砲撃に向け放たれる。

ダイナミックエースはいとも簡単に砲撃を粉碎するとそのままディエチ達の元へ。

「うそ……。」

「マジですのおおお!?!」

驚く二人の前にカオスは立つ。

「……今お前らがかけたら作戦に支障が生じる。」

エネルギーを刀身に纏わせてダイナミックエースを両断する。

すると……。

「その作戦教えてくれたら嬉しいんだがなあ……。」

ハードブラスターに乗って現れたエクストリームがカオスらにスペリオルソードを向ける。

「いつの間に来てたとはなあ……。」

「ふう……。」

へりへの砲撃をアクセルが防いだのを見たヴィータは一安心するが直ぐ様切り替えて視線をバインドで縛っているルーテシアとアギトに向ける。

「そういつわけだ……。あいにくだったな。」

そのままじりじりとルーテシアに近寄っていくと……。

「それ以上は進まないことを薦めるよ赤ゴスロリちゃん……。」

「！」

何処からか声が聞こえヴィータや他の面々は警戒。

すると。

「ご期待に沿って頂きありがとうございます。」

タイラントがヴィータとルーテシアの間に飛び下りてきた。

「てんめえ……。」

「この子は大事なんだ。とりあえず……セインちゃん、よろしく。」

「あいよ葬ちん。」

すると地中から水色の髪の少女が現れ……。

「！ レリックを！」

レリックケースを手に地面に沈んでいった。

「よせえ！」

ヴィータが飛びかかるも間に合わずセインは消えてしまった。

「こつちも行くか。ルーテシアちゃんにアギトちゃん」

「うん……。」

「ちゃ、ちゃんずけすんじゃねえ！」

「ごめんごめん……。ではドロン……。なんちゃって。」

タイラントは二人を掴み……。

「ま、待ててめえら……。」

「待てと言われて待つ人がいたら見てみたいもんだ。」

ヴィータを無視し、タイラントは跳躍すると……。

「へいたクシー。」

何処からか現れたケツアルコアトルズドーパントに乗り飛び去っていった。

「……ちつくしょうが！　なんて様だ！　レリックまで捕られるなんて……。」

ヴィータが壁に拳を叩き付ける。

すると。

「あの、ヴィータ副隊長……。」

「あんだよ……。」

あからさまにイラついているヴィータだったが……。

数秒後ティアナの策で隠されていたキャロの防止の中の花……。

もとい花に偽造されたレリックを見て、その顔は間抜けた表情を浮かべることなる。

「同じく同意見です。」

「私も……。」

更にガジェットを全て撃破し、なのはとフェイトもエクストリームに合流する。

「……大人しく投降してください……。」

フェイトはカオス達にバルディッシュを向ける。

「さ、さあ……お前達の罪を数えろ。」

「ちよつ、なのはさん。それ俺の台詞……。」

「一度言ってみたくて……。」

しかし……。

「……………左翔太郎、仮面ライダージョーカー。お前は詰めが甘い。」

カオスは余裕を見せる。

「何！」

すると……………。

『タイラント・マキシマムドライブ！』

ビルの下から突如タイラントが現れた。

「これぞまさしく切札だ！ 左い！」

そしてカオスも自らの刃にエネルギーを纏わせ……………。

「「はあ！」」

二体の斬激波が重なりエクストリーム達に迫る。

「やるお……………。二人とも俺の後ろに。あれは魔法じゃ捌ききれねえ。」

「う、うん。」

「わかりました……………。」

なのはとフェイトは経験から納得しエクストリームの後ろへ。

「要領は同じだ。やってやらあ！」

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『ビート・マキシマムドライブ！』

「ビッカー・・・ファイナリージョン！」

エクストリームはビッカーシールド表面を回し両手に持つとビッカーシールドから七色の盾が現れ、斬撃波を受け止める。

「くっ！ お、おもてえ！ うおおおおお！」

斬撃波は爆発しその場を炎が隠す。

「貴様あ！」

アクセルトリアルがカオスに蹴りかかるがカオスは難なく受け止め、カオスも高速移動で対応するが・・・。

「安心しろ。どうやらやつこさんの盾は思ったより丈夫だったようだ。」

「何！」

アクセルトリアルが驚いた際にカオスが剣で切り裂き吹き飛ばす。

「くっ！」

「竜・・・もうすぐ始まるぜ。楽しい宴がな。」

「何！」

タイラントが意味深な言葉を吐くと、タイラント達はケツアルコアトルズに乗り飛び去っていった。

「宴だど………、！ 左！ 高町！ ハラオウン！」

アクセルトライアルはエクストリーム達がいた未だに炎が燃える方を向くと……。

「はぁ………、はぁ………、はぁ………、はぁ………。」

膝をついたエクストリームと無傷のなのはとフェイトがいた。

「大丈夫ですか翔太郎さん！」

「だ、大丈夫つすよなのはさん。こう……見えても俺丈夫なんすから……。」

「………とりあえず左、肩を貸すぞ。」

「ああ、わりい……。」

アクセルトライアルの肩を借り、エクストリームは起きる。

そして四人の正面にはヴァイスが操縦するアクセルが守り抜いたへりが待っていた。

過去ノ乱戦（後書き）

気まぐれ第三弾

好きな変身ポーズ！

5 ・タイガ

4 ・ジョーカー

3 ・バース（後藤さん）

2 ・オーズ

1 ・W

まさかのタイガ・・・。

現代／虎馬1（前書き）

題名は「トラウマ」と読みます。

現在、あることでメンタル面が傷ついている状態です。

それに関係あるフォーゼにすら寒気を感じるぐらいに……。
つまり今回の題名のような……。

次の更新はちょっと先になりそうです。

現代／虎馬 1

「……………はあ……………」

克巳の部屋で来人は落ち込んでいた。

テーブルにはストローが刺さったグラスがある。

しかし普段来人はジャンクフード以外にはストローは使わない。

これには事情が。

「……………来人……………まあ元気出せ。」

普段は辛口の克巳も今の来人には励ましの言葉を投げ掛ける。

「とりあえず俺はジーンを使ったことがない。1日あれば……………」

「……………ありがとうございます。」

「とりあえずなんとかなるだろう……………」

来人は手を出すとその手は……………。

「いくら手が牛と蛙だからって……………」

その手は普通の人の手ではなく、まるで ペットマシンの画手のような牛と蛙の縫いぐるみであった。

それはついさっき……。

数時間前に遡る。

~~~~~

「そいつ！」

サイクロンがジーンドーパントを蹴り飛ばす。

「ふう！」

サイクロンはそのままジーンに接近し回し蹴りを叩き込むが……。

「うわぁー！」

ジーンはへっぴり腰になりギリギリに避ける。

「にがすかぁ！」

それでもサイクロンはジーンの首を掴み持ち上げる。

「はぁ……、はぁ……。」

するとジーンは何処からか葉っぱを取り出すとサイクロンの手に合  
わせ左手のストローのような手を密着させると遣伝子のようなエフ  
エクトが発生し……。

「んえ？ 何？」



次には葉っぱとサイクロンの右手は……。

「なあああああああ！ ててて手がああああああ！」

サイクロンの右手は牛のパペットへと変わっていた。

「な、ななな……。そんな僕の手が……。う、ううう牛に……」

自らの右手が牛のパペットになっているという事実で戦闘そっちのけになるサイクロン。

するとジーンは再び葉っぱを手にして恐る恐るサイクロンの左手に近寄り……。

「……………ん？ 何してるんですかあ！」

サイクロンは気がつきジーンを蹴り飛ばすも時は遅く、妙な違和感を感じ左手を見ると……。

「か……かか蛙~~~~！ 今度は蛙~~~~！ なんて蛙~~~~！？」

左手は蛙のパペットになっていた。

「そ、そんな両手が……。なんで牛と蛙う！？」

恐る恐るジーンが立ち去ろうとするが……。

「ふう！」

何処からかメモリスロットが搭載されたコンバットナイフがジーンを切り裂く。

するとそのナイフは……。

「……………ふん。」

持ち主、仮面ライダーエターナルの手に戻る。

「どうしたんだ来人……。何の大道芸だ……………」

「んなわけないでしょ克巳さん！ 手が手があ~~~~。」

「……………とりあえずこいつは俺がやるつ。」

エターナルはエターナルメモリをエターナルエッジにスロットする。

『エターナル・マキシマムドライブ！』

「な……………ぬお……。」

途端にジーンの動きが止まる。

エターナルはエターナルエッジの刀身に青い炎を纏わせ……。

「……………ふう！」

ジーンに投げつけるとジーンは爆発し若い男が倒れ、エッジはエタ

「ナルの手に戻る。」

エターナルはサイクロンの側に寄ると変身を解くが……。

「……………変身を解いたらどうだ……………」

「思った通り……………に……………出来な……………くて……………」

サイクロンは離れない両手、もしくは牛と蛙に苦戦していた。

「……………世話がやける……………」

克巳はサイクロンのロストドライバーを閉じ、サイクロンメモリを抜きサイクロンの装甲が剝がれる。

しかし……………。

「……………戻らない……………」

来人の両手は相変わらずの牛と蛙。

「……………とりあえず俺の部屋にこい。」

「はい……………」

克巳は落ち込む来人を起こし、二人は歩き始める。

~~~~~

「……………すれば……………」

「……まあジーンは戦闘には使えないから扱ったことはない。しかし1日あればそれなりに使い方は覚える。ようはやった時と逆をすればいい話だろう。」

「たぶん……。」

「……とりあえずは家族に事情を話して……。」

克巳は以前電話をかけたため来人の家族を知っていた。

特に父、琉兵衛のあまりの放任主義にはさすがに呆気にとられた。

「……多分あの人達なら気にせず1日くらい面倒を……。」

「皆一週間の旅行に……。」

「……踏んだり蹴ったりか……。」

「どうすれば……！ 克巳さ」

「却下だ。俺にそんな義理はない。」

「そんなあ殺生な……。」

すると克巳は立ち上がりヘルメットを両手に持つと片方を来人に投げたが牛と蛙では受けとれず、顔面に当たる。

「ったあ……。」

「……いつにもまして……。」

見かねた克巳は落ちたヘルメットを持つ。

「とりあえず家までは送ってやる。そこから自分でも考える……。」

「

「すみません……。」

克巳と相変わらず手が牛と蛙の来人は部屋を出た。

来人は色んな人からすれ違い様にイタイ目で見られながらも……。

「「……。」」

「……いないですねアインハルトさん……。」

「……いないですねヴィヴィオさん……。」

二人は右風家の前で途方に暮れていた。

（旅行には行かないって言ったのに……。せっかく料理を作りに来たのに……）

（……二人きりになろうと思ったのですが……）

ヴィヴィオとアインハルトにはやっぱり目的があったりするが……。

すると。

青いオフロードバイクが停まる。

乗っていた二人がヘルメットを取ると克巳と来人であった。

「あれ？ ヴィヴィオにアインハルト・・・どうかした？」

「来人さん・・・。」

「その手は・・・。」

やはりヴィヴィオとアインハルトも今の来人の両手に疑問を浮かべる。

「聞かないでやれ・・・。」

「「・・・貴方は？」」

「葵炎克巳だ・・・。」

「よ、よろしくお願いします。高町ヴィヴィオです。」

「・・・よろしくお願いします。アインハルト・ストラトスです。」

「ああ・・・。」

「あの克巳さん・・・。来人さんは・・・。」

「ちょっと事情があつてな・・・。」

克巳は来人の今の状態になった経緯を話した。

「遺伝子のドーパント？」

「ああ。．．．とりあえず1日あれば使い方はわかる。問題はこの1日だ。ろくに物も掴めない状態だからな。」

「．．．ホントにどうしよう．．．。」

克巳と来人が悩んでいると．．．。

「．．．来人さん．．．。」

「何？ ヴィヴィオ．．．。」

「．．．も、もし良ければ1日くらい私がお手伝いを．．．。」

「わ、私も．．．。」

ヴィヴィオとアインハルトが顔を赤くしながらさらっと爆弾を言い放った。

「．．．えっと．．．。」

「いいんじゃないのか．．．。」

「はい!?!?」

「さっき言ってたろ。知り合いも皆用事があつて無理だつて……もうしのごの言ってる立場じゃないのはわかるだろう……。」

「で、でも……。」

「とりあえず解決策は見つかった。俺は帰って寝る……。」

「ちよっ！ 克巳さん！」

「とりあえず二人……、あまりハメを外すなよ……。」

「は、はい！」

「ちよっ 克巳さん！」

そんな来人をよそに克巳は出て行ってしまった。

そして二人は何やら用意があるとか言つて一旦帰宅したが、取り残された来人は自らの両手の牛と蛙を見て……。

「……はあ……。」

ため息を吐くしかなかった。

現代／虎馬2（前書き）

後編です。

多分題名の意味がわかるかと・・・。

ちなみに言いますが・・・。

私普段買わないコンプティークを藤真先生が描いたヴィヴィオの巨大水着ポスターがついてるからといって買ったりしましたが・・・。

決してロリコンではありません！

多分！？

オーズが終わってしまいましたあ~~~~。

最後はタジャドル様が冴えました！

エフェクトパーツもつたいねえ・・・。

なんかうるつときたあ！

Wといい涙腺をぶっ壊してくれませう。

でもあれで一体どうやってMOVIE大戦に繋がるんでしょう・・・。

来週からはフォーゼ！

現代／虎馬2

「どうかなんなりとご命令を、ご主人様」

「…………ご、ご主人様…………。」

「…………。」

目の前の二人、よりよってへソのでたミニスカメイドの二人に啞然とする来人。

聞いた話によるとヴィヴィオは話を聞いたなのはに掴まされ、アインハルトに至ってはメイド姿の女性が裸にされる絵がたんまりのつている雑誌を男性がニヤニヤしているのを見て男性は皆こういうものが好きだという間違った知識から、以前購入したとか…………。

(…………なのはさんどんなことを。とりあえずアインハルトの知識は間違ってるような気が…………)

来人は思わず頭を抱える。

しかしそんな来人を気にせず…………。

「どうなさいましたご主人様…………。」

「…………な、なんなりとご命令を…………。」

ヴィヴィオと赤面するアインハルトは上目使いで来人に顔を近付ける。

ヴィヴィオに至ってはやたらとメイドとしての完成度が高い。

アインハルトよりも遅めに戻って来た原因が自宅で栗毛のサイドポニーに短時間でメイドを叩きこまれたことなど知る由もない来人は、やたらと形になっているヴィヴィオを不思議がる。

「と、とりあえずお茶出すよ……。」

しかし来人は両手がきかないことに気づく。

「そうだった……。」

「……あの、私が出します。」

「いやでもさあ……。」

「……い、今は私は来人さんのメイドなんですから……、べ、別に好きでやってるわけじゃないんですからね……。これはあくまで命令にきいてるだけなんですからね。」

アインハルトの慣れないツンデレ。

ちなみにこれもその怪しい本参照らしい。

しかしそんなアインハルトの気持ちを無駄にはしたくないと考えた来人は……。

「じゃ、じゃあお願いしようかな……。」

「かしこまりました……。」

命令というよりはお願いに近いものを発言しアインハルトは動き出しました。

すると。

「ご主人様、それじゃあその間に耳掃除でもいかがですか？」

ヴィヴィオが耳かきを手にして切り出した。

「え？ でもさあ……。」

ちなみにこれもなのはからの知識らしい。

「いいからいいからご主人様」

「え？ いやでも……。」

しかし両手に思わぬモノがついている来人は動きにキレがなくヴィヴィオに無理矢理膝枕をされる。

「ちょ、ヴィヴィオ……。」

来人はあくまであがこうとするもヴィヴィオの膝枕は予想以上に効くらしく……。

またヴィヴィオの匂いも直に来る。

そして徐々にあがいても無駄な気がした来人は……。

「…………お、お願いします。」

郷に従うことにした。

「かしこまりました」

ヴィヴィオの耳かきが始まる。

しかし来人は従いはしたものの、顔が赤い。

とりあえず羞恥なのかただ照れてるのかは本人にしか知らないこと。

そして定期的にヴィヴィオの吐息が来人にかかる。

その度に来人は自らの心拍数が上昇するのを感じた。

そして…………。

「ご主人様、次は反対側…………。」

さすがに耐えられないと思ひ辞めてほしいと言おうとする来人だったが…………。

「女性の誘いを断るのは男として失格」

次は以前翔太郎に言われたことが引つかかる。

拳句…………。

「……はい……。」

反対側を向けた。

しかし次に体の向きではなく体自体を変えればよかったと後悔する。

それは……。

「……………(ダラダラダラダラ……………)」

現在ヴィヴィオの方を向いている状態であり、ヴィヴィオはミニスカメイド。

つまりは……。

(……………ぱ、パンツが)

目の前に入ってきたの逆三角形のピンクの布地。

とりあえず目をつむればいい話であるが今の来人はそんな余裕はなかった。

13歳という歳は言わば思春期や発情期。

頭の中では悪魔と天使が抗論するが視覚は働いており、未だにその逆三角形が目には焼き付いてくる。

すると。

「ん？ ん~~~~見えなない。」

今度は顔を近付けてくるヴィヴィオ。

その度に更に濃度が増した吐息が当たってくる。

とりあえず来人は自身のネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲の巨大化を抑えるのに精一杯だった。

すると。

「オマタセシマシタ。」

笑顔ではあるが棒読みかつ背中に何か黒い物を背負っているアインハルトがお茶の乗ったおぼんを持ってきた。

しかし……。

「……ん、……ん、……持てない。」

やはり両手が牛と蛙では都合が効かない。

すると。

「ら、来ても、じゃなくてご主人様……。もし良ければ私が飲ませ
てあげましょうか？」

「え？ いや大丈夫」

遠慮しようとした来人だったが辞めた。

今遠慮したらくならないだろうと野生の勘、よく言えば
アインハルトの黒い笑顔と眉間に隠れた血管浮上マークと後ろの黒
い物から危険と推理したからだ。

あくまで推理らしい。

察知ではなく。

「オネガイシマスアインハルトさま……。」

「ご主人様……、様付けはいりません。呼び捨てで……。」

「わかったよ……、アインハルト……。」

「かしこまりました……。」

するとアインハルトは来人の茶飲を冷ましスプーンで……。

「はい来人さん……。あ、あ……ん。」

「あ、あ……ん……。」

隣でヴィヴィオが指をしゃぶる中、来人の口にスプーンのお茶が吸
い込まれていく。

そして……。

「はいあ……ん。」

このサイクルはお茶だけでなく、夕飯にも繰り返された。

「「「……」」」

夕飯を済まし、来人の部屋に集まっている三人。

二人は顔が赤く、来人に至っては明後日を見るような目をしている。

何せこの部屋に集まっているのは……。

「う、ご主人様……。」

「ご主人様の……し、下着は……。」

今から入浴するのに来人の下着を取りにきたためである。

さすがに来人自身も2日続けて同じ下着というのはさすがに衛生上、正しくはないと思いはするもの……。

(……やっぱり下着を見られるのはちょっと……。今なら女性の気持ち分かる気がする)

しかしそんな来人の考えなど分からぬ二人は……。

「ねえ何処ですか……。」

「……ちよ、ちよっと緊張しますが分からなければお風呂にいませんよ……。」

夜中の近所迷惑をよそに来人の悲しき叫びが夜空に響き渡った。

そしてその後入浴のため二人に脱がされる来人。

とりあえずアームストロング砲は見られずに済んだ。

しかしまだ終わりではなかった。

「は~~~~」。 「

湯船に浸かる来人。

牛と蛙にも多少は慣れ、あまりお湯の入っていない桶程度なら両手で、執念で持つくらいは出来るようになった。

「今日はなんか色々あったなあ。。。。ホントに色々。。。。」

この一時に気が抜ける来人。

かなり気が抜けていたらしく、更衣室で脱衣している例の二人のことに気付いたのは。。。。

「お邪魔しま~~~~す。」

「お、お邪魔します。。。。。」

「& a m p ; ㄐ#@~~~~!」

二人がバスタオル姿で入ってきたときだった。

ちなみにここの風呂は無駄に広く大人10人くらいならギリギリ入るくらいなため、狭いという理由は通用しない。

「ひ……、ひい……。」

もはや羞恥ではなく、恐怖のような声をあげる来人だが、暴走特急とかした二人は……。

「ささ、ㄐ、ご主人様」

「お、お背中お流しします……。」

「いやいいから。ホントにホントに……。」

しかし元々性別問わず押しに弱い来人が断れるわけもなく……。

数分後……。

「来人さんってやっぱり背中大きいですね〜。」

「ア、アリガトウ……。」

「……で、ではわ、私はま……、ままま前の方をあ、……あら、……洗います。」

「いや駄目アインハルト！ さすがに前は！ 前だけは勘弁！ い

やホントに本気で！ あ、駄目タオル捕ったら！ 捕った・・・、
・・・。 ああ吾あああ娃ああ阿あああ唾あ亞あああ會あ
あああ亜ああ！」

翌日克巳がジーンの使用方をマスターして来人を訪ねた時には、や
つれた上に真っ白になった来人が椅子に座り燃え尽きて・・・。

むしろ燃え過ぎた（？）のか体が透けていた。

一方・・・。

「じょ～～だろ～～～ざ～～ん」。

「あ～～、うっさい！ 寝ぼけてねえで離れるスバルう！」

「ばやぐ～～～がえっでぎで～～」。

「翔太郎～～～！ 早く帰ってこ～～～い！」

ナカジマ家に帰ってきている寝惚けたスバルを引きずるノーヴェエの
叫び声が響いた。

四年前の過去・・・。

「ぶえつくしよん！」

誰がくしゃみをしたかはご想像通りに・・・。

現代／虎馬2（後書き）

今回は過去編になりますが戦闘はないと思います。

過去／幼女（前書き）

今回はちょっと微妙です。

次回は原作ではなく漫画版の「誰が一番六課で強いか」という騒ぎを改正してやろうかと考えています。

過去／幼女

「ヴィヴィオ？ あのオッドアイの女の子か？」

「ああ。」

翔太郎は先日タイラント戦で聞いたことを竜に話していた。

「しかしあの子に何かがあるというのか？ お前の時代では普通に……。」

「でなきゃアイツが気にかけるか？」

「確かにヤツなら関係なければ基本的には無視するが……。」

「とりあえずなにかがあるのは確かだな……。」

「……今後は彼女にも気を配る必要があるな……。」

「つたく次から次へ問題が出やがる……。」

「……このことは八神達も察しがついているだろうな……。」

「あの手の連中は関係ねえやつや関わったやつじゃねえ限り自ら手は下さねえ……。現場にいたなのはさんやフェイトさんだけなくはやてさんも多分な……。」

「……。」

二人が考えにふけていると……。

「……ん？」

翔太郎のネクサスが鳴り出す。

「スバル？　なんだよ……。」

翔太郎がスバルからの通信にでると……。

『うえ~~~~ん』

「「！」「」

モニターにオッドアイの少女が映る。

「な、なんだ？」

『翔太郎さんも助けてください！　ヴィヴィオがなのはさんから離れてくれなくて……』

「お、おお。わ　った。」

翔太郎と竜はスバル達がいる部屋に向かった。

しかしすでにその部屋では……。

「ぐずっ……。」

そこでは……。

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたくないんだよね……。」

「……うん。」

既にフェイトが神業近い技でヴィヴィオをなだめていた。

《………すげえ……》

《何者なんだハラオウンは……》

翔太郎と竜はは念話でフェイトに対する圧巻の声を挙げていた。

《フェイトさん使い魔さんもいますから……》

エリオが二人に説明する。

《使い魔って……。もうなんでもありだよなこの世界は……》

《？》

《なんでもねえ》

「とりあえず俺らがくる必要はなかったな……。」

「ああ……。」

二人は退室しようとするが……。

「翔太郎さん……三童さん……ちょっとお願いが……。」

「「？」」

キャラロが二人に頼む……。

「部隊長やフェイトさん、なのはさんはこれから聖王教会に行くみたいで私とエリオ君、ヴィヴィオを任されたんです。なので頼みづらいですけど……。」

「……安心しな。書類仕事は前に散々手を焼いたからいたな……。」

「ヴィヴィオは任せたぞ……。」

「「はい！」」

気がきく二人にエリオとキャラロは感謝する。

そしてなのはら三人は聖王教会、子供組はヴィヴィオのお守り、スバルとティアナと翔太郎、竜は書類仕事に向かった。

「……ふう。終わりっ！」

「はっっ！」

竜、翔太郎に続き仕事を終らせたティアナにスバルはたじろぐ。

「なんだよスバル。おっせえなあ……。」

《……考えたら俺がいた時代の方がまだマシだったな……》

「だつてえ……。苦手なんですもん書類仕事……。」

「つたくしゃーなーなあ。手伝つてやつからよこせ。」

「あはは。すいません。」

翔太郎のパソコンにスバルの仕事のデータが入り翔太郎はさっそくかかる。

とりあえず量が多いのは残りの殆どを翔太郎に任せたのか、又は思った以上にスバルが書類仕事が苦手なのかのどちらかであるが真実は誰も知らず……。

するとスバルが暗い表情を浮かべる。

視線の先には先日の子の事件のクアットロとディエチの写真。

「こいつらも戦闘機人なんだ……。」

「……。」

「ナンバーズは魔力と別系統のエネルギーを体の中に内包してるけど……。」

暗い表情を浮かべるスバルだったが翔太郎は立ち上がり……。

「スバル……。」

「？」

「喋る暇があったら手え動かせ！」

ゲンコツを放つ。

「ったあ〜〜。」

「お前は始末書作りなんだから細けえことは後回しにしやがれ。」

「う〜〜。」

「それにお前はお前、スバル・ナカジマだ。それ以上でもそれ以下でもねえ。だから気にすんじゃねえ。分かったな！」

「………わかりました」

頭を撫でてくれてる翔太郎にスバルは頬を赤くして笑顔で返す。

「おう。落ち込んでるなんてお前らしくねえ。お前は笑顔が一番だ。」

「そ、そうですねえ………もしかして惚れましたあ？」

セクシーポーズをするスバルに……。

「……………調子のとてねえで手え動かせつつつてんだろが！」

「きゃ~~~~~！」

再び翔太郎のゲンコツがスバルに叩き込まれた。

なごかやな彼らに対し、なのはら隊長陣が聖王教会でカリムから六課の立ち上げを聞いていたところ……。

「……………ふう。」

とある建物内では葬が錬金術によりホムンクルスを作っていた。

「とりあえずこれで今日の分は終わりだ。」

タオルを手にして水をのむ葬。

事実彼は錬金術の最大法則、等価交換を無視した錬金術を使用できるがその代わりに1日に作れるホムンクルスは四体まで。

そして葬は自らの魂の欠片の代わりにガジェットに使われているものを研究し作りだした人口知能AIを使用し、ホムンクルスを作るたびに減る自らの魂の器を気にせず錬金術を行っていた。

その錬金術は毎日行いすでにホムンクルスは数十体。

「これだけあれば足りるだろうなあ。・・・祭に、・・・そして・・・。」

葬は仰向けに倒れ・・・。

「楽しみだなあ・・・、ホントに楽しみだあ！」

腕で顔を隠す葬だったが、腕で隠しきれていない口元は狂気に笑っていた。

場所は戻り六課隊舎・数時間後。

なのはらは戻り殆どのメンバーが自室に戻っている中・・・。

はやては自らのオフィスで待機状態のデバイスを見つめ初代リインフォースのことを思い出し、自分が味わった悲しみや後悔を誰にもさせないことを誓っていた中・・・。

《何か考え事か・・・》

念話で竜が話しかけてきた。

《どないしたんですか？ 竜さん・・・》

《もう業務が終わった時間に隊長がオフィスに入るとしたらそれぐらいかと思った。それだけだ》

《・・・なんか初めてこんなに話すんやから念話やなくて直接

話したいんやけど・・・」

《そうか？》

《そつや。念話出来るんやから近くにいはるんでしょ？》

《部屋の前だ》

「どうぞ入ってきてください。」

《では言葉に甘え・・・》

するとドアが開き・・・。

「邪魔するぞ。」

竜がはやてのオフィスに入り、椅子に腰かける。

「なんか初めてやないですか？ 竜さんと二人になるの・・・。」

「確かにな・・・。しかし大して話すこともないだろう・・・。ヴィオのこともお前なら察しがついてるだろうからな。」

「そうなんやけど・・・。竜さん、これからは今までよりも危険なことがあるかも知れへん・・・。」

「・・・。」

「・・・。うちは竜さんや翔太郎みたいに強くない・・・、頼りないかも知れへん。・・・せやけどうちはこの隊長として・・・。」

「俺はな……。」

「？」

「俺は正直ヤツが憎い。いまでもヤツへの憎しみは心の中にある。しかし左やお前達は仮面ライダーとして戦っていつている俺を信頼してくれている。だから俺は復讐者としてではなく仮面ライダーとして戦う。……守るために。左が言うには誰かの涙を拭うのが仮面ライダーらしい。なら俺は誰かのために戦うお前達の涙を拭うために戦おう。」

「……。」

「お前は凄腕の魔導師かもしれない。隊長かもしれない。……だとしてもお前はあくまで一人の女性だ。頼りたければ頼ればいい。……お前にはそういうった支えてくれる人がいるだろう……。」

「……。竜さんにも頼ってええんですか？」

「助けを求める者に手をさしのべるのが仮面ライダーだ……。遠慮せずにいつでも頼れ。」

「……ありがとうございます。」

「……話が済んだなら俺は失礼する……。」

竜が立ち上がりドアに向かうと、はやては駆け出し竜の手を握る。

「……。」

「……………竜さんやて一人の男性やし人間や。頼りたければいつでも頼ってもらいたいです……。皆や……………うちにも……………」

「うちは……………竜さんのことが好k……………」

はやてが言いかけるも竜は振り向きはやての頭を撫でる。

「夜更かしは美容の天敵だ……………。あまり遅くまで起きてるなよ……………」

「……………それじゃあ頼みが……………」

「何だ……………」

「名前で……………呼んでくれへんか？」

「……………いずれ……………な。」

竜は笑いながら部屋を後にした。

「……………いつでも頼れ……………かあ……………。ならお言葉に甘えるよ
竜……………さん。」

頬を赤くさせはやては安心したように微笑んだ。

過去ノ強者（前書き）

とうとう九月に・・・。

今回は漫画版の話に介入しました。

過去／強者

「へえ〜、ひだりおじちゃんってかめんらいだあなんだあ・・・」

「お、おじちゃん？」

なのはら三人とヴィヴィオが笑い、竜が微笑む中、翔太郎が間拔けた声を上げる。

一応翔太郎はまだ二十代であるがこれでおじさん扱いは二度目である。

「お、おう。そうだヴィヴィオ・・・」

相手は子供と自らに言い聞かせる翔太郎。

「それになあヴィヴィオ、隣の竜さんも仮面ライダーなんやで・・・」

はやてが竜のことも言い出す。

「そつなのりゅうおにいちゃん？」

「ああ。」

「な、なあヴィヴィオ・・・」

「ヴィ、ヴィヴィオ俺達は仲間だからそういつのはいらないんだからな……。」

「そーなの？」

「おう。それとおじちゃんは辞めてくれ。ホントに……。」

「うんわかった。しょうたろう……おにいちゃん」

「うお~~~~。ありがとよお~~~~ヴィヴィオ~~~~。」

翔太郎はヴィヴィオを抱きしめる。

「ははははは……。」

苦笑するなのは。

他の面々も笑う。

すると。

「せやけどホンマに二人ってどっちが強いん？ 今度模擬戦やってみたらどうや？」

はやてが再び話題をだす。

「そーいやぁ……。俺は一回アクセルと戦ったけど、フェアじゃなかったし結局ドローだったからなぁ……。」

「たまにはやってみるか？」

「たまには・・・いいかもな。」

後に翔太郎と竜はその場を去った。

しかしヴィヴィオの言い出した話題、「翔太郎と竜ではどちらが強いか」という話題はあっという間に六課内に広まった。

隊長陣内で最強は誰かという話は以前あったが、仮面ライダーの二人は次元が違うということで除外されていたからだ。

そして・・・。

「やっぱり強いのは翔太郎さんだよ。四つ姿があるしエクストリームになったら相手の先を読めるし・・・。」

「戦術面では柔軟に対応できる翔太郎さんは強いわよね・・・。」

翔太郎サイドのスバルとティアナに対し・・・。

「でも竜さんもバイクになったりトリアルになったらすごい早いし、ブースターになったら空も飛べるし・・・。」

「は、はい。」

竜サイドのエリオとキヤロ。

そして他のバックヤードにもその話は広まってゆき……。

翌日の模擬戦時の時は……。

『左の旦那と竜の旦那……。つええのはどっちや〜〜!』

「「「うおおおおお!」「「「

食堂で盛り上がるバックヤード達のスタッフ達。

フォワード四名を含めるが大半が男性局員である。

マイクで司会をするのははやて。

ちなみに側には……。

「ん、ん……。」

口を塞がれ縛られたシグナム。

二人の模擬戦と聞き自身もやるといった結果、はやてや隊長陣達により拘束された。

『さあてさて! 果たして六課内でもっとも最強なのはどちらか!
そこんとこ決めちゃってえなお二人い!』

はやてのやたらテンションの高い司会に皆の意思が一つとなり、皆拳を上げる。

「ははは．．．．．」

「もうはやてったら．．．．．」

隣で苦笑するのは解説のなのはとフェイト。

しかしこちらは裏の舞台．．．．

更に裏では．．．．

「俺は左さんに．．．．」

「俺は竜さんに．．．．」

密かに金が集まっていた。

ちなみに割合は翔太郎は5、竜は4、ドローが1である。

ちなみに．．．．

「頼むぜお二人い．．．．」

彼らのトップでありこれを引きおこした張本人、ヴァイスはドローにかけていた。

「なんかやたらと空気が重いんだが……。」

「俺もだ……。」

竜と翔太郎はこの重い空気を不思議がる。

何せ二人ははやて達やバックヤード陣がこの模擬戦を解説しているのも、ヴァイスが賭博に使っていることも知らない。

「しかしお前と戦うの初めてだよな……。」

「そもそも戦う理由がないのに戦う必要がないだろう……。これはあくまでも訓練だが、……。半端にはやらんぞ……。」

『アクセセル!』

「望むとこだつつーの。」

『ジョーカー!』

「変……変身!」……身!」

二人はドライバーにメモリをスロットしそれぞれジョーカー、アクセルへと変身した。

「行くぜ?」

「さぁ……振り切るぜ!」

そして互いに駆け出しぶつかりあった。

『おお〜っつと！ 互いにぶつかりあつたあ〜っ！ 互いに譲らん
戦い！』

やたらとテンションが高い会場。

フワード陣もティアナを除き興奮、他のスタッフもテンションが
鰻上りにあがっていくのが熱気からわかる。

「やたらとはやて盛り上がってるね……。」

「関西人の血が騒いでるのかなあ……。」

フェイトとなのはは苦笑いしながらはやてを見守る。

ちなみに盛り上がりはもう一ヶ所でも同様で……。

「おらあ！」

「はあ！」

メモリチェンジしたメタルのメタルシャフトとアクセルのエンジン
ブレードが激しく火花を散らす。

そして互いにせばぜりあいをする。

「やはり一筋縄ではいかないな……。」

「てめえもな……。」

そのままシャフトはアクセル、ブレードはメタルの腹部を捕らえ互いに吹き飛ばされる。

「くっ……。ならば……。」

『トリアルル!』

青い光と共に一瞬で変化したアクセルトリアルルは音速移動でメタルの間合いを詰め、蹴りを叩き込んでいく。

「はああはあああ!」

そしてそのまま蹴り飛ばす。

「うああああああ!」

しかしメタルも立ち上がると……。

「負けつかよ……。」

『ジョーカー!』

メモリチェンジしたジョーカーは飛翔したエクストリームメモリをドライバーにスロットし展開する。

『エクストリーム!』

ジョーカーエクストリームに変化するとスペリオルソードを抜き動きを止める。」

(トライアルの速さに三童の戦闘スタイル、性格から見るに・・・)

そして・・・。

「!」

「はあああああ!」

トライアルの蹴りをエクストリームはビッカーシールドで止める。

「何!」

「おらあ!」

そのままエクストリームはスペリオルソードでトライアルを突き吹き飛ばす。

「ぐあああああ!」

「お前のトライアルは見切ったぜ。」

「ならば!」

『アクセル・アップグレード!』

アクセルトライアルは強化アダプターをアクセルメモリにスロットし、ドライバーにスロットしパワースロットルを捻る。

『ブースター!』

黄色い円形と槍型のエフェクトがアクセルトリアルを包むとブースターが全身に装備され、フェイスフラッシュャーがシャッターで覆われアクセルブースターへと変化する。

そして身体のブースターから光熱を放ち空へと飛翔する。

「そう来つかよ……。なら……。」

エクストリームがスタッグフォンを操作するとハードブラスターがエクストリームの側にやってくる。

「とことん付き合ってやるぜ……。」

エクストリームは乗り込みアクセルブースターを追いかける。

そして……。

「はああああああ!」

「おらああああああ!」

ターンしてきたアクセルブースターと剣を交じりあった。

「頼むテストロッサ! 私を行かせてくれ……!」

「駄目ですシグナムううう！ 落ち着いて下さあああいい！」

「あんな楽しそうなところに行くなという方が無理だああああ！」

フェイトは縄がほどけた、というよりほどいたシグナムを精一杯抑えていた。

『お〜。二人とも本気や〜。気張りいやあお二人い！』

はやての声もありその場のテンションは最高潮に。

「頑張れ〜翔太郎さあああん！」

「ガンバです竜さん！」

スバルとエリオもテンションが上がる。

「……………」

キャラも無言ながらも手に汗をかく。

そんな面々に…………。

「……………なんか皆……………」

「……………テンションが異常な気が……………」

なのはとティアナは一緒にお茶を飲んでいた。

そして……。

模擬戦スペースではエクストリームとアクセルブースターが空を飛びながらぶつかりあっていた。

「面白い……。やはりお前は強いな……。」

「……なあ三童……。」

「？」

「……お前何だかシグナムさんに似てきてないか？」

「俺に質問をするな。だらだらやっけていても互いに疲れる。決めるか？」

アクセルブースターはエンジンメモリを見せる。

「おんもしれえじゃねーか。」

エクストリームもメモリを手にし……。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『メタル・マキシマムドライブ！』

『トリガー・マキシマムドライブ！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

ビッカーシールドにスロットスペリオルソードを抜刀し刃を七色の光に覆う。

『エンジンー!』

アクセルブースターもエンジンブレードにエンジンメモリをスロットし……。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

引き金を弾くとブレードを黄色い刃が覆う。

そして互いに動きを止め……。

「……、」

互いに動き出し……。

「ビッカー……バーストカリバー!」

「はあああああああ!」

ビッカーバーストカリバーとバーストスラッシャーがぶつかりあい周囲を爆炎が覆う。

そして……。

「……う……お……。」

「……ふ……不覚……。」

模擬戦スペースの地面には目を回す翔太郎と竜がいた。

『てなわけで結果はドロー！ 相打ちや〜〜！』

相打ちながらも・・・。

「「「ううおおおおおおお！」」」

スバルとエリオを含めたバックヤード陣のテンションは落ちない。

一方では・・・。

「テストロツサああああ！」

「抑えて下さいしい〜グう〜ナあ〜ムう〜。」

決着がついたのも気付かずにまだ続けている。

そしてこの話題を持ち出した張本人、ヴィヴィオは・・・。

「（す〜・・・、す〜・・・、す〜・・・）」

苦笑するティアナの隣のなのはの膝で無邪気に寝ていた。

ちなみにこの後、ヴァイスの景気がよたらよかったのは六課内でちよっとしたミステリーにもなったり・・・。

過去／強者（後書き）

今回は動き出すスカリエッティ一味にスポットを当てようと思っ
ています。

その次の現代版は克巳回で少々シリアスにしつつフラグを立てよう
かと・・・。

過去／悪意（前書き）

今回はかなり短いです。

昨日受注したフィギュアーツのアクセルブースターが届きました。
かっけえ〜。

新規のアクセルの頭も慣れればかっこいい。

赤・青・黄色のアクセルが三人並ぶとホントにエクシードラフト・
・。

過去 / 悪意

雨が降る空。

その雨は悲しみにくれる青年を無情にも濡らしていく。

その青年は自らの最愛の人の墓前でただ呆然と立ちすくむ。

その人を失った喪失感、悲しみ……。

そして何よりもその最愛の人を奪った少年犯罪者への怒りとその事件を金と権力で揉み消した少年の父である政治家への憎しみと、この世界そのものへの激しい怒りがその青年の中を走り巡っていた。

そして青年は手にする。

”暴君”を。

そして人を捨て、仲間として”混沌”、”終焉”、”合成獣”を手にし、この世界の地球の核、”コア”を破壊しその世界を滅ぼした。しかし彼はより力を求め、人を憎み続ける。

そして力を手にし、更に憎悪渦巻く世界を終らせるために……。

”力”を得るためにこの世界、ミッドチルダに降り立ち、四年前に来た。

暴牙葬を名乗り。

「……………相変わらず虫ずが走る……………」

スカリエッティのアジト内に設けられた部屋で葬は起きる。

「……………さつさと終らせたい……………この世界とも……………この力の無さとも……………」

葬は上着を来て懐にドライバーとメモリをしまい退室した。

ちなみに葬はナンバーズとは基本会話はしない。

ナンバーズは純粋な人ではないものの、彼女達から”人間特有の腐った臭い”がすると言い……………」

「……………お前はいいな。」

「何がだ……………」

訓練所ではカオスドーパントがデイド、トーレ、セツテと訓練を行っていた。

しかしナンバーズ三人がかりとはいえアクセルと互角に渡り合うカオスドーパントに敵うはずがなくいともたやすくねじふせられていた。

「お前には命はあるが魂がない。だから夢も見ないし過去もないだろ。」

「……………それが何だ……………」

「過去に縛られなくてうらやましいってことだ。……………じゃあな。くれぐれも加減はしろよ？ 作戦に支障がでるからな。」

「……………承知している……………」

そのまま葬は訓練所を後にした。

「不安かい？」

「いえ……………。なんせこういったことは二度目なので……………」

次に葬は部屋でウーノから散髪を行っているスカリエッティと話していた。

「二度目とは？」

「以前の世界を俺は滅ぼしましたから。あいつと他二体、俺だけで……………」

「ほう。大したものだね……………」

「その世界が脆かったのでは？」

「まあそうだったらいくら四人しかいなくても……。」

スカリエッツィに対しウーノとクアットロは葬に疑いの目を向けるが……。

「その世界ではガイアメモリが順応していてドーパント犯罪も仮面ライダーが対応していた。俺達はそいつらも世界をぶっこわす前にまとめて潰しましたが？」

「……。」

狂気に笑う葬に二人は途端に言葉を失う。

「味方ながらおそろしいねえ……。」

「とりあえず今は貴方の元で動きます。いずれはガイアメモリも……。」

「楽しみにしているよ葬君……。」

散髪を終えスカリエッツィは立ち上がる。

「はい。とりあえずは貯めに貯めたドーパント……。是非お使いを。」

葬はモニターを開く。

そこにはモニターを埋め尽くす程の大量のドーパントが。

「素晴らしい……。来るべき4日後、襲いかかって奪い取るつもりがないか……。素晴らしい我が々の夢を。」

「はい……。」

(スカリエツィ……、あなたは嫌いじゃない。でもなあ……
・所詮は人間……人間は皆……滅ぼす……
そのためにあんたは使える。ただし今だけ……あなた……
・捨てゴマだ……)

狂気を静かに表に出す葬。

(……そのためにインフィニティを手に入れ……全
て壊し尽くす)

過去／悪意（後書き）

気まぐれ企画

好きな仮面ライダーの武器

- 5 ・メダガブリュー
- 4 ・タジャスピナー
- 3 ・エンジンブレード
- 2 ・エターナルエッジ
- 1 ・マチュー・テディ

自分はこちらになりました。

殆ど剣系に・・・。

現代／逃走（前書き）

今回克巳回なんですけど二章の中で一番出来が悪いと思います。

話を変えて今日から始まった仮面ライダーフォーゼ！

弦太郎のキャラ嫌いじゃないわ！

そしてもうすでにフォーゼのデザインに慣れた自分が・・・。

オープニングが土屋アンナさん！

素晴らしきかな！

やはり動くとかッコヨク見えるのはすべてのモノに等しいです。

現代／逃走

「……………」

ホテルの自室で二度寝をしている克巳。

朝は基本的に鍛錬をするために早いからである。

学校がある場合は基本授業中に寝る。

しかし勉強も出来るため特におとがめはないらしい。

「……………！……………ふう。」

目を覚まし克巳はベッドから起きる。

「……………もうこんな時間か……………」

克巳は時計を見て時間を確認すると空気の入れ替えに窓を開ける。

するど。

「ふうど。」

「……………あ？」

ベランダに立つ克巳の隣にある女の子が立つ。

どうやら隣の部屋から壁をはいつくばりながら来たらしい。

「……………おいお前……………」

「あゝすいません。ちょっとかくまってk……………」

しかし克巳はそのオレンジ髪、修道女の女の子に詰め寄る。

「人をなめんのも大概にしろよコスプレ女……………。なんで俺が見ず知らず、しかもベランダに勝手に入ってきた他人をかくまう義理がある。いいからとつと……………」

するとドアから……………。

「シャンテ！ シスターシャンテ！」

再び克巳の知らない声がする。

「あわわわわ……………。シスターシャツハだよ……………」

「……………次から次へと……………。この疫病神が。」

克巳はシャンテの手を掴みドアに連れて行くこととする。

すると。

「私、あの人に殺されちゃうんだよお。」

「……………今ドアを叩いてるヤツか？」

「うん。だから助けて。」

「……………つたく。絶叫系は……………その性格なら大丈夫そ
うだな……………」

「ふえ？」

シャンテが間抜けた声をあげると同時に……………。

「そいつ！」

克巳はシャンテを担ぎ上げると窓から飛び降りる。

「ふえええええええ？」

しかしここは二階……………。

克巳の身体能力ならたやすく落下の衝撃を受け流し着地する。

「……………後は勝手に……………」

克巳は言いかけるが……………。

「(モジモジモジ……………)」

シャンテはやたらともじもじしている。

「……………まさかお前……………」

「……………ごめんね 殺されるってのは嘘 シスターシャツ八が
楽しみにしてるプリンを食べちゃってそれで追われてました」

「……………(ピクッ)」

まるでペコヤんのように謝るシャンテに克巳は自身の眉間がぴくついていることを自覚できた。

「……………じゃあなんだ？俺はそんなくだらないことに巻き込まれたっていうのか？」

「はい あれ？笑ってます？」

シャンテは克巳が笑顔なことに疑問を浮かべるも実際は克巳の顔がひきつっているだけである。

「……………とりあえず戻るぞ……………」

「え？ちよつと！」

克巳はシャンテの手を掴みホテルの入口に向けて歩き始める。

「こんなくだらないことに関わってやってる程俺は暇じゃない。」

「お願いしますお願いします見知らぬイケメンさん！」

「名前も知らない人を巻き込むなんざ一層タチが悪い。捕まっせばかれる。安心しろ。俺から良く言って一層厳しく指導して頂こう。」

「うえ？ お願いします。それは勘弁を！」

「……………断る……………潔くしばかれてこい……………」

あるんです!」

「んなことは俺には関係ない。さっさと……。」

「でも私が言わないと……。」

周囲を見ると周りは通報する者や恐る恐る近寄る者が。

「……とことん疫病神だなお前……。今日は付き合ってるからさっさと弁解しろ。」

「やい」

「……はあ。」

克巳は深くため息をはく。

「皆さ〜ん! 今のはちょっとした演技の練習で〜〜すお騒がせしました〜〜」

シャンテ自身の説明により何とか周囲は落ち着き、克巳は事なきを得た。

しかしこの声はホテルにも聞こえたらしくホテルの入口から……。

「あ〜〜! シスターシャンテ! 見付けましたよ! 私が楽しみにしてたプリン〜〜!」

半泣きの赤髪・短髪、しかもなにやらデバイスを装備したシスターが駆け寄ってくる。

「あわわわわ。シスターシャツハ……。」

「そんなもんで大の大人が……。ホントに聖王協会か？ 全く……。ネクロ、あれ使うぞ。」

『承知』

克巳がネクロオーバーに言った途端、克巳の青いオフロードバイクが無人走行で駆け付けてきた。

ちなみに克巳はシャツハが普段からシヤンテを困らせており今回の件、人気洋菓子店のプリンをシヤンテが食べてしまったことにより堪忍袋の尾が切れたことなどは知らない。

「すっごあい……。」

そんな事件の張本人、シヤンテは無人走行してきたバイクに驚く。

「左のボイルダーからプログラムをコピーし尚且中に入れといたのは正解だったな。」

ちなみに本人には内緒で。

『さすがです克巳』

「とりあえずは！」

克巳は自身はフルフェイスのヘルメットを被るとシヤンテにも半キヤップのヘルメットを投げる。

「うん？」

「とりあえず気に入くわれないが契約だ。今日1日は付き合ってやる。乗れ。」

「ホント!？」

「男に二言はないらしいからな。あの男女いわく。」

「へっくしい。」

「おやびん風邪っすか？」

「いや誰かオレの噂を……。それに何か腹ん中がイライラする。」

場所は戻り……。

「やっぱりあなたいい人！ねえねえ名前は？」

シヤンテは笑って克巳の後ろに跨る。

「葵炎……克巳だ……。」

「じら〜〜！ そのあなた〜〜！」

シャツハのことをよそに克巳はバイクのクラッチを引き、アクセルを回す。

そして二人の乗ったバイクは走り出し……。

「行っちゃった……。も～～～！ シスターシャンテ～～～！」

その場には悔しがるシャツハだけが残っていた。

ちなみにその後、呼び出されたセインがシャツハから愚痴を含めたお説教を散々喰う羽目となりシャンテに新たな敵(?)が。

一方……。

「俺の1日が……。」

克巳は女性服の試着室の前で途方に暮れていた。

シャンテは修道服なため流石に目立つため着替えている。

ちなみにシャンテ自身財布をもっていないため克巳が全額負担。

「まあいいじゃない　こ～～んな可愛い娘と1日デート出きるんだし」

対して試着室の中のシャンテは声のトーンが高い。

「お前……。今から殴……。」

克巳は試着室のカーテンを掴むも思い留まる。

確実に変態扱いされ、これ以上面倒なことを避けるがために歯をくいしばり耐え、手を離す。

(……………厄日だな)

すると。

「お待たせ……」

シャンテが着替えて現れた。

短パンにヘソの出たノースリーブの服。

流石にシャンテ自身も克巳が全額負担なため多少は気を使ったようである。

「どう？ どう？ どう？」

「馬子にも衣装だな……。」

「何それ？」

「……………」

もはや説明すら面倒に思えてきた克巳は……。

「・・・似合ってる・・・。」

とりあえず口応えすらも嫌なため誉めた。

「ホント!? もしかして惚れて・・・。」

「ひんむくぞガキ!」

「すみません・・・。」

流石にシャンテも自重。

「・・・とりあえずは遊園地だったか?」

「そう、そう! それじゃあしゅっぱっつ」

もはや疲れきった克巳をシャンテは目を輝かせながら手を掴み歩き始める。

(・・・はぁ・・・。・・・まだアイツらの方がましだったな)

同時刻・・・。

二ヶ所で二人の女の子がくしゃみ且つなんとなく殺意をもったのは言うまでもなく・・・。

現代／逃走（後書き）

気まぐれ企画！

仮面ライダーの中で好きな曲！（ただし英語が苦手なのでわかりやすくカタカナ等で）

- 5 ・フォーゼ OP
- 4 ・MOVIE大戦2010テーマ
- 3 ・タジャドルテーマ
- 2 ・剣 初期OP
- 1 ・W OP

早速フォーゼが・・・。

現代ノ遊戯(前書き)

引き続きエターナル偏です。

今回は若干バトルは簡単です。

次回からはノンストップで過去偏です。

現代／遊戯

「……………ついてない。」

そんなこという克巳だがそんなことも気にせず克巳の身体は徐々に高所に運ばれていく。

「まあまあそんなこと言わない言わない」

隣にはテンションが異様かつワクワクを全面に出すシャンテ。

「……………お前はいいだろう。だが俺はどうだ？ お前の変な趣味のせいでさつきからこんなものばかりだ。」

現にさつきから克巳はシャンテにつられ、入場以来ずっと絶叫マシンに付き合わされている。

そして今も克巳とシャンテはコースターにより絶叫マシンの一番の山場である頂上に運ばれている最中である。

「俺も流石にここまで連続は……………」

「ほらほら。喋っていると舌嚙むよん」

そしてコースターは一気に……………。

「……………たぐついてない!」

落ちてゆく!

ちなみに最高時速は200k。

「やつほ~~~~~!」

はしゃぐシャンテの声が響き渡った。

ちなみに絶叫系はこの後数周、何度も周り負けん気が働いた克巳もこの絶叫系をあと数回味わう羽目となった。

「……………助かった……………」

「あ~~~~、楽しかったあ」

観覧車内のゴンドラで休む克巳と満面の笑みのシャンテ。

「……………お前、さぞ問題児だったんだろうな……………」

「え？ そんなことは……………」

シャンテは頭の中で今までのことを浮かべるが基本、シャッハに怒られた記憶しかない。

「そ、そそそんなことはないよ?」

「……………そうかよ……………」

あえて何も言わない克巳。

「しかし何故聖王教会の修道女がクラナガンにいるんだ？」

「実は今のインターミドルに出てるんだ私　しかも予選突破しちゃうくらい私強いんだから」

「インターミドルに？」

「うん　知らない？」

「いや……。知り合いが二人、知り合いの知り合いが四人出てる・
」

「へえ〜〜。でも誰でも私が倒しちゃうけどね　なんせ私はインターミドルで優勝するのが夢だもん」

「夢……。か……。」

「克巳君は夢ってあるの？」

「……。夢か……。特に考えたこともなかった……。」

「勿体無いなあ〜〜。若いんだから夢持たないと〜〜。」

「中年かお前は……。」

「失敬な！　私はまだ14だよ。」

「……。そうか。俺は16だ。……もう少し年上には言葉遣いを・

「・・・」

「・・・細かいことは気にしない」

「・・・あゝ、そうかよ・・・。」

笑うシャンテに対してもう呆れ半分の克巳は適当に返事する。

「それで克巳君の夢って？」

「・・・特に俺は今に満足しているから希望してることなんてない・・・。」

「え〜〜。つまないよそれじゃ〜〜。」

「・・・あえて言うなら・・・。」

「あえて言うなら？」

「俺はこんな性格だからあまり親しい間柄のヤツがいない・・・。だから親しいやつや腐れ縁の奴ら全員の夢が叶うこと・・・。浮かぶとしたらそれぐらいかもな・・・。」

「・・・なんかおつきいね　だとしたら私も？」

「どうだかな・・・。」

「ちよつとお〜〜。じゃあ名前で呼んでよ　そうしたら友達になれるって陛下が言ってたし」

「名前？」

「うん」

「……………」

「ちとさ　遠慮しないで」

「……………お前の名前って何だったか？」

「な！　女の子の名前を忘れるなんて！」

「冗談だ。……………シャンテ……………」

「そうそう　それぞれ」

克巳に名前を呼ばれシャンテは頬をほんのり赤らめ笑顔になる。

すると。

突如二人が乗るゴンドラが大きく揺れる。

「な、ななな何？」

焦るシャンテに対し……………。

「……………少し落ち着いたらどうだ……………」

克巳は冷静である。

そして下を眺める。

「……………遊園地から見れば正に招かれざる客だな……………」

「え？ 何何？」

克巳につられシャンテも下を見るとそこではバイオレンスドーパントとアイズドーパントが人々を打ちのめし、人々は悲鳴を挙げながら逃げ、今周りには誰もいない状態である。

「どどどどーしよ。克巳君！ 実は私飛行魔法があまり……………」

慌てるシャンテに対し……………」

「必要ない……………。あのうじ虫共を片付ければいい話だ……………」

克巳は何も言わずにロストドライバーを身につける。

「え？ え？ え？ 何それ？」

頭を傾げるシャンテを無視し……………」

『エターナル！』

「……………変身……………」

。克巳は静かにエターナルメモリをスロットしドライバーを展開……………」

『エターナル！』

青い波動を放ちながら仮面ライダーエターナルへと変身を遂げる。

「か、かか克巳君が……、仮面ライダー!? 私聞いてない!」

某所長の言葉をさりげなく言ったシャンテに対し……。

「言う必要もないだろう……。さつさといくぞ……。」

エターナルはゴンドラのドアを無理矢理ぶち抜くとシャンテをお姫様抱っこする。

「……なんか恥ずかしいなあ……。」

「……不思議だな……。お前の辞書には羞恥心などないと思っていたが……。」

「なあ!? 何よそれ!」

「気にするな……。安心しろ……。」

「?」

「俺の夢は友達……。というべき奴らの夢が皆叶うことだ。だからお前の夢も叶わせたい。そのためにこんな所でお前は死なせない。俺が……。葵炎克巳が……。仮面ライダーエターナルが。」

「克巳君……。」

「お喋りは後だ……。舌を噛むぞ……。」

「……………うん。わかった。」

シャンテの返事を聞いたエターナルは頷きつつ……。

「……………はっ!」

高所で止まったゴンドラから飛び降りた。

エターナルはロープにより落下速度を殺し大した衝撃もなく見事に着地した。

「隠れてる……………」

「うん!」

エターナルの指示にシャンテは従い、近くの木側に隠れる。

「さあ、今の俺は不思議なことに機嫌がいい……………」

エターナルはエッジを二体に向け……。

「すぐに……………、墮としてやろう!」

二体に向け走り出す。

バイオレンスの拳をエターナルは首を剃らし避けるとそのバイオレンスの腕にエターナルエッジを突き刺す。

痛がるバイオレンスを蹴り飛ばし、アイズと取っ組み合うがエターナルは以前アイズと戦ったことがあるため対策を知っていた。

ロープにより身体を隠し、殴りかかるアイズの腕を掴み僅かな隙に確実かつ、強烈なラツシュを放つ。

「せいっ！」

そしてアイズを前蹴りで吹き飛ばしつつ自身も後退し、背後で痛み能耐えつつ殴りかかるバイオレンスに肘打ちを放ちつつエツジを容赦なくバイオレンスから引き抜く。

そして……。

『ユニコーン！』

ユニコーンメモリをマキシマムスロットにスロットし……。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「せりゃあー！」

右手に竜巻を纏ったコークスクリューパンチをバイオレンスの顔面に叩き込みバイオレンスはプラズマを走らせ動きを止める。

そのままエターナルはエツジにエターナルメモリをスロットする。

『エターナル・マキシマムドライブ！』

そのまま右足に青い炎を纏いながらバイオレンスを踏み台にし、ア

イズに向け跳躍……。

「せりゃあああああ！」

イズにエターナルレクイエムを叩き込む。

そしてエターナルは着地するとロープを翻しつつサムズアップを掲げ……。

「さあ……地獄を楽しみな！」

反転させサムズダウンを向ける。

そして二体のドーパントは火柱をたてて爆発、若い男女が倒れていた。

「……………」

エターナルは変身を解き、克巳に戻る。

そしてネクロオーバーのモニターを開き管理局に連絡をする。

すると。

「どん」

「!?!」

シャンテが後ろからダイブし、克巳に抱きつく。

「……お前……。」

「私の名前はお前じゃなくてシャンテ！ シャンテ・アピニオン！」

「……シャンテ……、離れる……。」

「はいはい　かつこよかったよ克巳君」

「……大したことじゃない……。」

「駄目だよ克巳君！　嬉しいときは嬉しいって言わなきゃ！」

「……別に……。……それよりももう気は済んだな？」

「うん　でも最後に……。」

「？」

頭を傾げる克巳をよそにシャンテは克巳の横に立ち……。

「ありがとう」

克巳の頬に優しく唇をつけた。

「……シャンテ……、何を……。」

「だからお礼だよ　ささっ、帰る」

「あ、ああ……。」

完全にペースを崩された克巳は頬をほんのり赤らめるシャンテに引張られ駐輪場に向かった。

特にその後の克巳の運転はなんともなかったが、ホテルについた二人を待ち構えていたのは努気を纏ったるシスターと二人の女の子だった。

そしてその後、シャンテはそのシスターから、克巳はその二人から楽しいお話(?)を受けることとなった。

そしていつものように克巳がその二人を軽く受け流したのは言うまでもなく……。

過去／負傷（前書き）

二話分です。

原作の記憶が曖昧なためたまたまに変わってしまったかもしれません。

過去／負傷

公開意見陳述会を翌日に控えた夜。

「待つててヴィヴィオ。絶対明日は帰ってくるから。」

「……うん……」

警備に向かう先発隊として出発するのはと留守番するヴィヴィオが約束をするのを翔太郎と竜、フォワード陣は和やかに眺めていた。

「なんかいいよな、ああいうの。」

「ああ……。」

「そうですね……。」

「はい……。」

「翔太郎さんは女の子と男の子どっちがいいですか？」

「あ〜〜、俺は……ってかなんで、んなことを聞くんだよ？」

「それはもちろん……（ポツ）」

「……だ　　！　　なんでんなことに頭を直結させんだよお
めえはー！」

「すみません」

そんな翔太郎とスバルの痴話ケンカを皆は笑って見ていた。

しかしそんな和やかさももうじき壊れるとはまだ誰もわからなかった。

特になのはは……。

そして先発隊はへりに乗り込み地上本部に、当日の朝には後発隊も到着した。

そして陳述会当日。

警備も夕方になり……。

他のフォワード陣も少し息抜きをし始めた頃……。

「……………なんだ、この感覚……………」

「ああ……………。何か強い悪意を感じる……………」

翔太郎と竜は仮面ライダーとしての勘、今までの戦いで磨かれた直感から何かを感じていた。

「どうしたんですか翔太郎さん？ 竜さん？」

「怖い顔して……………」

ティアナとスバル、エリオやキャロも心配そうに見る。
すると。

何処からか爆発が起こる。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「どつちらお客さんみてえだな……。」

『ジョーカー!』

「ああ……。やるか。」

『アクセル!』

「いくぜおめえら! 一仕事だ!」

「「「「「はい!」」」」」」

フォワード陣の返事に心強く頷いた二人は腰にそれぞれドライバーを装着し……。

「変……変身!」……身!」

それぞれドライバーにメモリをスロットしながらのはらにデバイスを渡すために後続するフォワード陣と共に本部のビルに突っ込んで行った。

そしてヴィータもルーテシアを止める際に対峙したゼストと対面し、
二方面で戦いが始まった。

「おらぁぁ！」

「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

ギンガを先行させジョーカーとアクセルはフォワード陣と共にガジ
エットドローン達をスクラップにしていた。

スバル達にも歯が立たないガジェット達は無論仮面ライダーにも敵
わず次々に破壊されていった。

すると。

「でりぁぁぁぁぁぁぁ！」

どこから襲撃者が蹴撃を放ってきた。

「！ おらぁぁ！」

ジョーカーはその襲撃者の蹴りを受け流し投げ飛ばすが襲撃者は軽
く着地する。

「！ お前！ ノーヴェ！？」

その襲撃者とは現代でスバル達と笑って過ごしていたノーヴェだっ
た。

「お前……、なんであたしのことを……。」

「ちょっと色々とな……。それにてめえもかよ……。ウエンデ
イ……。」

「あれ？ バレちゃったツスす。」

ジョーカーの見る方向には自身のIS、ライディングボードを構えたウエンデイがいた。

「ったく……。やりずれえったらありやしねえな……。」

「同じくな……。」

「なにがですか？」

「「なんでもねえ（ない）」」

二人はスバルに声を揃えて返す。

「とりあえずはギンガを追わねえとな……。」

「それには及ばないツスよ。」

「「「「「？」」」」」」

「旧式とは言え……。タイプゼロがこれくらいでつぶれるかよ。」

「何……。」

ノーヴェの声にジョーカー達は身構える。

そして……。

「それにお前の相手は俺がするしな……。」

「「!」」

二人が声の方向を見ると……。

「久しぶりだな……。翔太郎に……。竜も……。」

「「葬!」」

腰にロストドライバーを纏った暴牙葬が立っていた。

「てんめえ……。」

「貴様あ……。」

一気に殺気だつ二人に対し……。

「翔太郎さんが……。」

「二人……。」

「どうなってるんだろつエリオ君……。」

「僕に聞かれても……。」

葬を初めて見るフォワード陣は啞然とする。

「三童、こいつは俺に任せてお前はスバルらと一緒になのはさんらを頼む……。」

「お前は……。」

「とりあえずコイツらを止めとく。任せませ……。」

「わかった。」

竜が返事をする何処からかエクストリームメモリが飛翔しジョーカーのドライバーに合体し……。

『エクストリーム!』

「悪いが少々目を潰させてもらおう!」

アクセルはエンジンメモリがスロットされたエンジンブレードの引金を弾く。

『スチーム!』

周囲を煙が覆い……。

「な……。」

「けむいッス……。」

二人のナンバーズの視覚を一時的に封じる。

そして……。

『タイラント!』

「はぁ!」

「おらぁ!」

タイラントとエクストリームは壁をぶち破り別所へ……。

「俺達もやるべきことをやるぞ……。」

「……はい!」「」「」

アクセルとフォワード陣は先を急いだ。

そして残るのは……。

「……何処行つた~~~~~!」

ノーウエとウエンディのみであった。

「..」

「..」

タイラントのソードとエクストリームのソードがぶつかりあう。

「こんなときにも騒ぎたあ、全く大したトラブルメーカーだな、てめえは……。」

「誉めてくれてありがとう……。」

「誉めたつもりはねえ！」

「そうかよー！」

そして互いのソードが互いを斬る。

「がああああああー！」

「ぐぐぐぐぐぐぐー！」

互いに吹き飛ぶも……。

「……おらああああー！」

互いの身体を切り裂くため再びぶつかりあった。

その頃……。

「！ 六課が襲撃を……。」

「ヴィヴィオ……。」

なのはらと合流したフォワード陣と竜は六課の本部が襲撃を受けていることを知る。

「……………とりあえず高町、ここは分隊に分けて行った方が……」

「はい。……………ライトニングは六課に、竜さんをお願い出来ますか？」

「ああ。それにヤツがこっちにドーパントを寄越していない分、あちらに回してる可能性もある……………」

「よろしくお願いします。」

「了解した……………行くぞハラウン、エリオ、キャロ。」

「……………はい……………」

アクセルとライトニングの三人は六課本部、スターズの三人は先行したギンガを追い掛けた。

六課隊舎。

そこではオットーとデイド、ガジェットが数十体、そして……………

「……………さっさと片付ける……………」

大量のドーパントを率いたカオスドーパントが六課を攻撃していた。

そしてそんな相手にシャマルとザフィーラは苦戦していた。

「はぁ・・・はぁ・・・、なんて数なの・・・。」

「しかし今ここを守りきれるのは我々しかない。なんとか食い止める！」

「えええ！」

しかしやはり数が数で二人は徐々に追い詰められていくこととなり、二人はドーパント達に、ガジェットを狙撃しヴィヴィオ達を守るヴアイスも自らのトラウマとルーテシアにより・・・。

そんな中、ライティングの三人とアクセルブースターは六課に向かっていった。

たちはだからガジェットもアクセルブースターによりスクラップになり落ちていった。

すると。

「！」

アクセルブースターが止まる。

「どうしたんですか竜さん？」

「アイツの言葉を借りるとしたらお客さん……らしいな。」

「「「「！」」」」」

アクセルブースターに次ぎ構えるフェイト達の前にトーレとセツテが現れた。

「貴様らは……。」

「お初にお目にかかる。ナンバーズ3、トーレだ。」

「セツテです。」

「そんなことはどうでもいい。そこを退け……。」

しかしアクセルブースターの声を無視し二人のナンバーズは身構える。

「やるしかないか……。」

「ここは私が！ 竜さんはエリオとキャロと一緒に六課に……。」

「しかし……。」

「見たところドーパントもいませんし大丈夫です……。」

「「フェイトさん！」」

「皆や二人……ヴィヴィオを……お願いします。」

「……………わかった。」

「はい！」

アクセルブースターとフリードに乗った二人は六課隊舎に向け飛び去っていった。

「行かせん！」

トーレとセツテが動きかけるも…………。

「行かせない…………。」

フェイトがバルディッシュを握り締め、それを阻む。

(頼んだよ……………三人共…………)

。内心三人を気遣いながらも今自分にやるべきことを成すために…………。

現在状況は最悪…………。

ヴィータはゼストとの戦いにより墜落し、ギンガはチンクらナンバーズにより拉致、スバル自身も激情し負傷…………。

そして…………。

「ビツカーバーストカリバー！」

「そらああ!」

エクストリームとタイラントの二人はマキシマムのエネルギーをソードに圧縮させ、ぶつけあっていた。

普段は互角にも関わらずエクストリームには普段通りのキレがなく、たまにタイラントソードを身体が霞める。

「どうした? お仲間が心配か?」

「んなわけねえだろがあ!」

しかし内心では仲間達、特に感情的になりがちなスバルは心配であった。

「仲間は心配だろうがようはてめえを倒してけばいい話だ。」

「・・・悪いけどそれは無理だ。」

「何・・・。」

「ベタで言いたくはないが、・・・ここがお前の墓場になるからな。」

「

あ?」

すると周囲に魔法陣が現れ、中から大量のドーパントが現れる

「何! これは・・・。」

「気を抜く暇はないだろ！」

一瞬気がそれたエクストリームをタイラントは切り裂き吹き飛ばす。

「がああああ！」

「さすがはドクターの作った時限式の召喚魔導機。時間通りに送ってくれるな。」

「てんめえ、はなっから……。」

斬られた後をかばいつつエクストリームは立ち上がる。

「やっちまいな！」

そんなエクストリームにタイラントの掛け声でドーパント達は一気に襲いかかる。

「つちい。なるおお！」

エクストリームはスペリオルソードでドーパント達を切り裂いていく。

「悪いがお前は……ここで死ね。」

『タイラント・マキシマムドライブ！』

タイラントはタイラントソードにタイラントメモリをスロットし……。

「この世界に俺は……一人がいい……。」

灰色のエネルギーを纏ったタイラントソードからタイラントヘルエ
ンドを斬撃波としてエクストリームに放つ。

「！なるお！」

エクストリームはビッカーシールドで防ぐも斬撃波はビッカーシー
ルドをまっぴたつにしエクストリームを切り裂く。

「が……。」

エクストリームは火花を散らし、ふらつく。

「……いい加減くたばれ。」

タイラントはタイラントメモリをマキシマムスロットにスロットす
る。

『タイラント・マキシマムドライブ！』

タイラントは駆け出し跳躍……。

「でりゃあああああ！」

タイラントヘルバイトをエクストリームに放った。

「ぐ……が……がああああああ！」

エクストリームは吹き飛び壁に激突するもそのまま勢いは死なずに

吹き飛ばされ続け、壁に人型を作りつつ吹き飛ばされる。

そして……。

「さぁ……。砕け散りな。」

タイラントがソードを撫でた瞬間、エクストリームは爆発、エクストリームがよりかかっていた壁、貫いてきた壁が次々と崩れさっていった。

「これで一人……。」

タイラントは大量のドーパントと共にその場を後にした。

「……これは一体……。」

アクセルブースターとエリオとキャラコが六課隊舎に到着するとそこには燃え上がる炎と……。

「シャマル先生！」

「ザファイラ！」

エリオとキャラコが抱き抱えるのは傷つき倒れていたシャマルとザファイラ。

その時……。

「騎士だろっがなんだろうが所詮は人……我々ドーパントには

敵わない……。」

そこには多数のドーパントを従えたカオスドーパントが。

「……カオス……。」

「……そして、……最後のピースも我らの手に……。」

「「！」」

「最後の……ピース……、！ ヴィヴィオ！」

。アクセルブースターの視線をエリオとキャロも追うとそこには……。

「ヴィヴィオ！」

オットーとデイード、そしてヴィヴィオを抱き抱えたガリユを隣に
従えたルーテシアが上空高く飛び去っていた。

するとそれをみたエリオは歯をくいしばり……。

「……くっ！ ストラダー！」

高速で突撃した。

「エリオ君！」

「よせエリオ！ お前だけでは……。」

するとアクセルブースターの気がそれている間にカオスは間合いに入り、アクセルブースターの腹部に刃を突き付け……。

「……楽しかったが……終りだ……。」

「！」

動こうとした瞬間、アクセルブースターの腹部をカオスの刃が貫き火花が散る。

「ぐ……がああああああ！」

そんなアクセルブースターに刃を突き刺したままカオスはアクセルブースターを蹴り飛ばす。

「が……かはっ……。」

「竜さん！」

そんな間にも四人に突撃したエリオはガリユーの爪を砕くもディードに後ろを疲れ海中に沈んだ。

「……エ……リオ……君……。もうこれ以上……。私たちの居場所を……。壊さないでエッツ！」

キャラの足元に魔法陣が現れ、キャラの召喚竜の一体ヴォルテールが出現しガジェットドローンを全て燃やし尽くす。

しかし……。

「ドーパントには効かないぞ小娘……。」

そんな中でもカオスらドーパントはピンピンしていた。

そしてカオスは何もなかったかのようにヴォルテールの身体半分に近い程の巨大な光球を作り出し……。

「我らに掛れば所詮責様も……ただのデかいだけのトカゲだ……。」

その光球をヴォルテールに放ち爆発、ヴォルテール地面に沈んだ。

「……とりあえず俺は帰ろう……。後はお前達……。好きにいたぶってやれ……。」

カオスはそう言い残し今はもう去ってしまったルーテシア達の後を追った。

そして残るキャロにドーパントが迫る。

「……………」

キャロは涙目で気絶しているエリオを抱きしめる。

すると……。

『エンジン・マキシマムドライブ！』

黄色いエースラッシャーがドーパントを粉碎した。

ドーパント達が振り向くとそこには……。

「はぁ……、はぁ……。これ……。以上……。はぁ……。はぁ……。俺の……。仲間は……。」

カオスの刀を左手に握り、懐から血を流すアクセルブースターがふらつきながら立っていた。

アクセルブースターはマキシマムクラッチを握り……。

『ブースター・マキシマムドライブ!』

パワースロットルを捻つつエンジンブレードの引き金を弾く。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

「誰一人……。奪わせん!」

エンジンブレードの刀身に黄色い光が覆われ、アクセルブースターの身体を黄色い炎が覆う。

「うおおおおおおお!」

そして……。

「はぁぁぁぁぁぁぁ!」

左手にカオスの刀、右手にエンジンブレードを持ちドーパント達に突っ込んで行った。

その後地上本部のモニターにスカリエッツィが移り声明が発表された。

しかしはやてとカリムは諦めない心と、目にはまだ炎がもっていた。

そして負傷した六課メンバーも救助された。

崩れ落ちた六課跡で炎の中、右手にエンジンブレードを掴んだまま傷つき倒れた竜も……。

地上本部の地下で傷つき、瓦礫の隙間から手が見だした気を失っていた翔太郎も。

過去／再起

隊舎を失い多くの負傷者を出した六課。

しかし今回は身体だけでなく心にも傷を与えた。

中には約束を守りきれずに後悔と悲しみに包まれる者……。

自身の無力さを嘆く者……。

自身の過去と向き合い、志を仲間と共に硬く心に決めた者……。

そして……。

病院屋上。

「……………」

彼方を見つめるのは全身に包帯を巻いた翔太郎。

実は昨日……。

~~~~~

「!」

タイラントのマキシマムを発動させ、両足に灰色のエネルギーを纏いながら接近するタイラントを前に……。

(……なんとかなるか！)

エクストリームはスペリオルメモリをマキシマムスロットにスロット……。

『スペリオル・マキシマムドライブ！』

スペリオルの力を腹部に集中し……。

「が……があああああああああああ！」

エクストリームは腹部にタイラントヘルバイトを放たれ爆発、タイラントは大量のドーパントを率いその場を立ち去った。

その後……。

「………が……。」

瓦礫の中からはいつくばりながら現れた翔太郎。

何とかタイラントのマキシマムをスペリオルで弱体化し何とか助かった。

その後救難信号を送り、なんとか救助された。

~~~~~

しかしそんなことは今の翔太郎に関係なく……。

「あ、ちきしょうがああああああ！」

翔太郎は手すりに思いきり頭を叩きつける。

頭からはポタポタと血が垂れるが翔太郎の頭は冷えず……。

「あああああああああ！」

手すりにひたすら拳や蹴りを叩きこむ。

自らの身体など考えず今の翔太郎には自身の憤りしかない。

「あの時……俺がもつと強かったら……。」

翔太郎は膝をつき両手の拳をひたすた叩き付け、そこを血で染める。

「所詮……俺は俺……。半熟なのは力もなのかよ……。
所詮エクストリームを手に入れても俺は所詮甘い半人前なのかよ……。」

翔太郎の頬に水滴がしたる。

その途端。

「！」

ネクサスが鳴り出す。

「・・・何だよ・・・。」

モニターを開くと・・・。

『翔太郎！』

ヴィータが映る。

「・・・何だよ・・・。」

「はやく来てくれ！ 竜が・・・。」

「！」

翔太郎は急いで中に戻った。

竜が運ばれた集中治療室。

翔太郎が着くと・・・。

「落ち着け竜！」

「落ち着いて下さい三童さん！」

「放せ・・・放せえ！」

ヴィータと医師に止められながらも暴れる竜がいた。

「これって……。」

「！ 翔太郎！ 止めるの手伝え！」

翔太郎にヴィータが命令するように促す。

「どうなってんだよこれ……。」

「知らねえよ！ 起きた途端こうなったんだ……。」

「……たくよお……。」

翔太郎は駆け出し竜に掴みかかる。

「落ち着け三童！」

「放せ！ 左！ もうこれ以上ヤツを好き勝手には……。」

「今のおめえが行った所で何も出来ねえのがわかんねえお前じゃねえだろがぁ！」

「ならば差し違える覚悟でヤツを！」

「んなことしたって誰も喜ぶやつなんていねえ！」

「俺はヤツを倒せるなら命など要らない……、死んでも構わん！」

「！」

それを聞いた翔太郎は……。

「こおんの・・・馬鹿があ！」

思いきり竜を殴り、壁に叩き付ける。

「・・・・・・・・。貴様あ！」

竜も負けじと翔太郎の胸ぐらを掴み壁に叩き付ける。

「お前に何が分かる・・・・・・・・。故郷を・・・・・・・・、仲間を失った俺の気持ちか！俺は！・・・・・・・・。もう二度と・・・・・・・・。故郷を・・・・・・・・。仲間を失いたくない・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・お前は一人で戦ってる気になってんじゃないかねえのか・・・・・・・・。」

「何・・・・・・・・。」

「仲間なら俺も・・・・師を失った・・・・・・・・。だからその分戦うし生きるって誓った！」

「・・・・・・・・。」

「てめえもだ三童・・・・・・・・。てめえも残されたんならその分生き抜かなきゃなんねえんじゃないかねえのか！？ああ！？」

「生き抜く・・・・・・・・。」

「それにな・・・・・・・・、奪われたただだ・・・・・・・・。失ったわけじゃねえ・・・・・・・・。奪われたんなら・・・・・・・・。」

「・・・取り戻せる・・・。」

「ギンガもヴィヴィオも・・・未来も全部取り返す！ そのために今は身体を休めることが今の俺達に出来ること・・・やるべきことなんじゃねえのか・・・。」

「・・・。」

竜は地面に崩れ落ちる。

そんな竜に・・・。

「少なくとも俺はこの時代でくたばる気はねえ・・・。約束したからな。・・・必ず帰ってくるって・・・。アイツと・・・。」

手を差し延べる。

「・・・。」

竜も無言で手を掴み・・・。

「俺も・・・。約束を・・・果たす！ そのために戦う！」

「おう。」

二人は腕をぶつけあう。

そして翔太郎が去ろうとした途端・・・。

「左・・・。」

「あ？」

「返すぞ……。」

竜の拳が翔太郎の顔面に放たれ……。

「奪われたものは奪い返す……。助け出す……。全部よー！」
病室で拳を突き出しスバルに言い放つティアナ。

「……うん。」

スバルも強く、そして深く返事を返す。

すると。

「ちよつといいか？」

「「！」「」

声の方に二人が向くと……。

「よう……。」

入り口によりかかる翔太郎。

ただし……。

「どうしたんですかその頬……。」

スバルが指摘する左の頬は腫れており、左の口元には若干血が。

「なんでもねえ……。それよりもスバル！」

「は、はい……！」

「今！ 今日！ この時間！ 俺はお前に約束する！」

「は、はい……。」

「ぜってえ、ギンガを取り返すぞ！ 俺達の手で……。俺達の手で！」

「……。」

「男の仕事の八割は決断……。後の二割はおまけだ……。これは俺の……。仮面ライダーとしての決断だ！」

「……勿論です！」

「はい！」

ティアナとスバルも強く答える。

そして翔太郎は拳を突き出し、二人も拳を軽くぶつけた。

「…………一人じゃない……か。」

病室の屋上でアクセルメモリを眺める竜。

そしてアクセルメモリを空にかざし……。

「皆……何もできなかった俺が憎いかもしれない……。それならいずれあの世でいくらでも付き合う……。だからせめて……。次の戦いだけでいい……。俺に力を貸してくれ……。復讐者としてでなく仮面ライダーとして戦う俺を……。」

そして気のせいかはわからないがアクセルメモリが光った……。

気がした。

あちこちに風車が回る街。

ここは以前翔太郎が愛し、守るために戦った街”風都”。

「フィリップく……ん。おはよ……。…………あれ？」

朝の鳴海探偵事務所にやって来た二代目所長、照井亜樹子が出勤する。

しかし普段いるはずのこの探偵、フィリップがいない。

「フィリップく……ん？」

亜樹子が事務所内を探すもフィリップはいない。

地下のガレージを探すが……。

「リボルギャリーすらない……。」

普段はあるWの装甲車、リボルギャリーがなくなっていた。

そして上のホワイトボードには……。

《急用ができたからしばらく留守にします。あとはよろしく亜樹ちゃん》

「な！ 何よこれ！ 私聞いてない！」

しかし亜樹子の悲痛な叫びはガレージに響くだけであった。

ちなみにその後風都ではない街である妙な車（？）が走行しているところが目撃される。

目撃者曰くその車（？）は赤い目にW字の角、後方には円形のシリンドラーが搭載された幅が車二台分に相当する大きさだったとか……。

過去ノ記憶（前書き）

ラストバトルが近いです。

今日のフォーゼはなんかすごかったあ……。
宇宙でライダーキックとかカブト劇場版以来……。地球をバツク
にしてロケットとドリルを装備したフォーゼかっこよかったなあ。
。。。

惚れてまうやる~~~~！もう遅い！

しかも仮面ライダーが都市伝説！

1号にスーパー1にRXにクウガが！

Wはでなかったのは残念でしたが風都の写真が！

いつかコラボをやって欲しいです！

過去／記憶

アースラに本部を移した六課。

エリオはシグナムと鍛錬、はやてはレリック捜査上にスカリエッティがいるという名目で正式にスカリエッティを捕らえることを心に決める。

「大丈夫ですよ竜さん。傷はかなり癒えてきています。」

「すまない……。」

治療室で竜はシャマルから検査を受けていた。

怪我人とはいえ竜と翔太郎はドーパント、特にタイラントやカオスに対しては唯一と言っていい程の戦力であった。

無論二人の意見もあり。

「しかし腹部の傷はまだ完全には癒えてはいません。くれぐれも無理はしないでくださいね……。」

「安心しろ……。俺の身体は俺が一番よく知っている……。」

「それはそうですが……。」

「大丈夫だ……。仲間を悲しませるような真似はしない……。」

「……………本当に無理はしないでくださいね。はやてちゃんが悲
しみますから……………」

「何故だ？」

「……………いえなにも……………」

「？」

竜はため息をはくシャマルに頭を傾げた。

「無理させてごめんね……………相棒……………」

『いいえ。気にせず』

スバルはマツハキャリバーと話……………。

そしてマツハキャリバーの強化プランを受け入れ戦うことを決めた。

「だから今度は絶対……………一緒に走ろうマツハキャリバー！」

『イエス』

すると。

「邪魔だったか？」

「しよ、翔太郎さん！？ 大丈夫なんですか怪我は……。」

壁に寄りかかる翔太郎にスバルが気づき途端に慌てる。

翔太郎に至っては若干包帯は残ってはいるものの、竜よりはまだ動ける程度だった。

「キャリアバーの強化か……。」

「はい。必ずギン姉やヴィヴィオを……。」

「だな……。」

「……それと翔太郎さん……。」

「あ？」

「今回の事件が終わったら……あの……。」

「なんだよ？」

「い、一日……つ、つ……付き合ってもらえませんか？」

「……でもなあ……。」

（いつ帰る羽目になるか分かんねえしなあ……。でも……）

「わ、わった。約束だ。」

「はい！」

「だからそのためにもぜってー取り戻して笑顔になるぞ……。俺達の拳で…………俺達の力で。」

「はい！」

翔太郎とスバルは互いに拳を合わせる。

「そんじゃあな。」

翔太郎が振り向き立ち去ろうとすると…………。

「…………翔太郎さん！」

スバルは駆け出し…………。

「ん？ どうしたスバ…………」

不意に翔太郎の唇を奪う。

「…………スバル…………。」

「…………約束ですからね…………。」

頬を赤らめスバルが翔太郎に身体を寄せる。

「…………おう。」

翔太郎もスバルの頭を撫でる。

「……………必ずな……………」

翔太郎は決意を改めて固める。

奪われたものを取り戻す……………。

仲間も、笑顔も……………。

まとめて全部を……………。

「……………」

とある砂漠を歩く青年。

手にはパンツが旗のようになびく棒。

「ん……………つふう。」

青年は背伸びをして遠く彼方を見る。

「いや……………。一面砂漠だな……………。夢見町とは大違いだ。」

辺りは砂漠一色……………。

かと思えた。

「ん？ 何あれ？」

遠くから妙な車が走ってきたのを青年は見つけた。

「なんか変わった車だなあ……。」

しかしその車は車というよりは戦車に近い巨体、二つの赤い副眼にW字の角……。

「って変わりすぎい……！」

その車は青年に向け一直線に接近する。

「うわあああああ！」

青年は迫るその車にたじろぐが車は激突ギリギリで止まる。

「た、助かったあ……。」

思わず腰が抜ける青年。

すると車の副眼部分が開きある少年が現れる。

頭にはクリップ、袖のないパーカーという変わった容姿の少年……。

「あれ？ 君はたしか……。」

青年はその少年を知っていた。

その少年とは……。

「久しぶりだね・・・オーズ。」

「貴方は確か・・・Wの・・・。」

「ああ。Wの右側、ソウルサイドのフィリップだ。」

その少年とはWとして翔太郎と共に戦いつい最近事務所をリボルギヤリーと共に消えたフィリップだった。

「どうしたんですか？ そんな変わった車に乗って・・・。」

「ああ。そういえばリボルギヤリーを見るのは初めてだったかな？」

「へえ〜。リボルギヤリーっていうんだあ〜。俺もこついの欲しかったなあ〜。」

「・・・要件いいかな？」

「ああ、すみません！」

「いや、いいさ。それよりもオーズ・・・。」

「はい・・・。」

「実は・・・。」

フィリップはその青年、火野映司に語り出す。

自身の目的と相棒の危機を・・・。

~~~~~数分後~~~~~

「わかりました。でもいまの俺に何ができるか……。ベルトはあつてもメダルは……。」

映司は以前の戦い、真木との戦いによりすべてのメダルを失い変身が不可……。

なによりも仲間であったグリード、アंकを失っていた。

「大丈夫さ。君達の戦いは地球に”記憶”として打ち込まれた。記憶は過去かもしれないけど時に、……。未来すら変えられる力を出してくれる。」

フィリップは懐からあるものを取り出す。

「これって……。」

「一緒に戦ってくれるかい？」

「……はい！ それと……。」

「？」

「後二人仲間がいます。その人達も……。」

「ああ。とりあえずは戻ろうか……。」

「……日本に！」

二人はリボルギャリーに歩き始める。



日本へ向け……。

現在は元の職に戻りやるべきことを成しているその男と、友達のためにならずべてを掛けてまで戦おうとする若き戦士と再会するため……。

「……」

「ギン姉……」

一同が啞然とする映像にはアインヘリアルを破壊し地上本部に向かうナンバーズ内で共に行動しているギンガが映っていた。

そんな一同の後ろでは……。

「……待ってるよ……ギンガ……ヴィヴィオ。」

映像を睨みつける翔太郎がいた。

聖王のゆりかご内の玉座の間に歩を進めていくヴィヴィオを抱き抱えるウーノと……。

（もうすぐだ……もうすぐ……）

彼女らの護衛についた葬が狂気を内に秘めたまま共に歩いていた。

過去ノ出陣（前書き）

今回原作としてはかなり飛びました。

次回からは完全オリジナルになっています。

## 過去／出陣

「……………でっか……………」

「確かに……………」

へりからゆりかごを確認する翔太郎と竜。

すでになのは達はバリアジャケット姿で出動、フオワード陣四名もへりにより地上本部に向かったナンバーズの迎撃に向かっていた。

そして翔太郎と竜も出動を控える。

「そんじゃあ行くか……………死ぬなよ……………三童……………」

「知らないのか……………俺は死なない……………」

翔太郎と竜は互いに腕をぶつけあう。

そして双方ドライバーを装着し……………。

『アクセル・アップグレード!』

「変……………変身!……………身!」

『ブースター!』

『エクストリーム!』

それぞれアクセルブースターとジョーカーエクストリームに直接変

身する。

「さあ……振りきるぜ！」

そしてアクセルブースターとハードブラスターに搭乗したエクストリームは……。

「行くぜ？」

「ああ……。」

ヴィータとなのはの後を追いゆりかごへと飛び去っていった。

ミッドとは違う別世界・地球・日本。

ある市街地に二人はいた。

「彼は何者なんだい？」

「えつと……。俺より大人で落ち着きがあって頭がキレて……、とにかく頼りになる人ですよ。」

「へえ……。」

どうやら誰かを待っているようである。

すると二人にある男が歩み寄り二人も気がつく。

「悪かったな火野……。準備にてこずった。」

「いえいえ。お久しぶりなのにいきなりすみません……。後藤さん……。」

その男は背中にリュック、軍色の強い服装に左の手首のバンドには銀色のメダルが……。

「ああ。幸い辞職記念に受け取っておいて正解だったな……。しかしお前の方は大丈夫なのか？」

「はい。それは……。」

二人の内の一人、火野映司はフィリップを心配そうに見ると……。

「心配ない。聞いた話ではオーズは800年前に存在していた。ならその跡は地球に”記憶”として刻まれているはずさ。ぼくも久々にメモリを作ったけど……。」

フィリップは懐からあるメダルを取り出す。

そこにはひと描かれたメモリが……。

「もし君が強い欲望を持てばこのメモリもそれに応えるはずさ。」

「俺の……欲望は……。」

「……。」

「お前とまた……。一緒に戦いたい……。アंक！」

するとUと描かれていたメモリは赤く発光し砕ける。

しかしその欠片は三つのメダルへと徐々に形を変えて……。

その後待ち合わせた青年、後藤慎太郎も行動を共にし三人は次の場所に向かった。

次の目的地、天の川学園高校へと……。

「……やはり死んではいなかったか……。」

ゆりかご内のモニターから外で戦うエクストリームを見る葬。

「……アクセルも……。」

葬の後ろからはカオスドーパントも……。

「当たり前だ。なんせ別世界の俺と竜だからな……。そう簡単に死んでやるほどどつちも素直な人間じゃないさ。」

「どつちりでな……。」  
すると。

「あら〜〜。なんか貴方達が殺り損ねた二人がゆりかご内に入ってきてしまいました〜〜。」

ウーノから立場を交代したクアットロが二人に指摘をする。

「それが何かな？」

「殺しに行かないでよろしくて？」

「俺の方はな……。まあカオスの方は……。」

「承知している……。」

カオスは玉座の間を後にする。

「おそらく翔太郎はここにくる。チャンピオンってのは大人しく挑戦者を待つもんだ。」

「何を偉そうに……。」

「ああ。なにせ俺様……だからな。」

葬はニヤリと笑う。

しかしその笑いは不意に見たクアットロでさえ恐怖心を覚えるものであった。

フォワード陣はナンバーズ、シグナムはゼスト、フェイトはスカリエッティやナンバーズと戦い始めた頃……。

「トリアル・マキシマムドライブ！」

「9.5秒……。それがお前達の絶望までのタイムだ。」

アクセルトリアルとヴィータは立ちはだかるガジェット達を破壊し動力炉に進んでいた。

「はぁ……。はぁ……。はぁ……。」

「大丈夫かヴィータ……。」

「当然！ そんなくだらねえ質問すんな。」

「……。愚問だったな……。」

「ああ。先を急ぐぜ！」

「ああ……。！ ヴィータ！」

「あ？」

アクセルトリアルは直ぐさまヴィータを抱き抱えたまま高速移動で後退する。

すると後退したギリギリの範囲まで光弾が撃ち込まれる。

「な……。なんだ！？」

そんなヴィータに返答せずにアクセルトリアルは身構える。



その先には……。

「さすがはアクセル……。危機感知も大したものだ……。」

カオスドーパントがいた。

「貴様……。他のドーパントやガジェットはどうした!」

「あいにくドーパントはこの先にはいない……。ガジェットはともかくな……。」

「……。」

アクセルトリアルは身構えたままウィータに寄ると小声で話し始める。

「ウィータ……。俺がこいつを引き止めておく。お前は自身のやるべきことを……。」

「!でもお前……。」

「安心しろ……。俺は死なない……。まだやらなきゃいけないことが……。あるからな……。」

「……頼んだぜ。」

「ああ。」

途端にアクセルトリアルは走り出す。

「ふっ。」

カオスも刀を持ち互いに高速移動しながら斬撃と蹴撃を放ち合う。

そしてアクセルトライアルが隙を突きカオスを捕らえると……。

「今だ！ 行けえ！」

「おう！」

ヴィータに促し、ヴィータは奥の動力炉へと進んでいった。

「……………よし。」

「気を抜く暇はないぞ……………」

「！」

カオスの刃をアクセルトライアルは後退しギリギリで回避する。

「これで動力炉は壊せる……………」

「……………何故ドーパントがないと思った……………」

「……………いい気分はしないが貴様とは今まで何度も手合わせしてきた……………。だから貴様は嘘をつくような奴でないと感じとった……………」

「もしいたらどうする……………」

「貴様を倒して後を追えばいい話だ！」

「面白い……。」

二人は一気に駆け出し互いの刃と蹴りをぶつけあった。

しかしドーパントはいなかったものの、ヴィータは新たなガジェットにより差し貫かれ重傷を負っていた。

それでもヴィータは血を吐きながら動力炉に向かった。

そしてフェイトの方もスカリエッティのデバイスの赤い檻に閉じ込められ、シグナムや他フォワード達も過酷な戦いを繰り広げていた。

「ビッカーアサルトパニツシャー！」

ビッカーからの光線とレイジングハートから放たれた魔力砲がガジェットをなぎ払う。

そのままエクストリームとなのはの二人はゆりかご内を飛びながら玉座の間に向かう。

しかしエクストリームは妙な不振感を抱いていた。

「おかしい……。」

「何がですか……。」

「さつきから全くドーパントと会わねえ……。」

「そつえば……。」

「多分あいつが出し惜しみしてるんだろうが……。」

「でもそんなことよりも早くヴィヴィオを助けて……。」

「だな。連中がヴィヴィオを奪ってたつてことだからヴィヴィオが連中の鍵になる。ヴィヴィオさえ助けだしゃあ……。」

「恐らくは……先を急ぎましょう。」

「その前にお客さんだ。」

「!」

エクストリームが言うとなのははレイジングハートを通して遠くから高エネルギーが接近してくることに気づく。

しかし聖王協会のカリムによるリミッター解除により全開の力を発揮できるなには遠く及ばず、レイジングハートからの砲撃によりデイエチのイノーマスカノンをはねかえしデイエチを吹き飛ばしバインドで拘束する。

そしてエクストリームとなのはは玉座の間へ……。

「たどり着いたぜ……葬!」

「大人しく投稿してください！」

エクストリームは葬に、なのははクアットロにそれぞれの武器を向ける。

「まちくたびれたぞ……。」

『タイラント！』

「変身……。」

『タイラント！』

葬はタイラントに変身し前方に立つ。

「メガネさん……。そろそろ起こしたらどうだ？ その子を……。」

「あら、そうですね。では……。」

タイラントに促されクアットロは玉座に電力を流し始める。

「ああああああああ！」

部屋に痛みに泣き叫ぶヴィヴィオの声が響く。

「ヴィヴィオ！」

「てんめえー！」

エクストリームはビッカーとソードを構えクアットロに向かうがタ  
イラントが立ちはだかり……。

「てんめえ……。」

「邪魔すんなよ……。」

互いにソードをぶつけあう。

そんな間になのははアクセルシューターをクアットロに放つが幻で  
……。

そして別の場所から……。

「あの悪魔は貴方のママをさらった倒すべき悪魔なのですよ……」  
……。

ヴィヴィオの思考を操り吹き込んでいく。

そしてヴィヴィオは宙に浮くと肉体が変化、体に聖王の鎧が纏われ  
る。

そしてその場に聖王ヴィヴィオが立つ。

「ヴィヴィオ……。」

呆気を取られるのはとエクストリームだったが……。

「この時を待ってた……。」

タイラントはソードでエクストリームを切り伏せ吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

そのままタイラントは聖王ヴィヴィオの正面に立ち……。

「頂くぞ！ その鍵を！」

ヴィヴィオの首を掴み上げる。

「！！！！」

「あ……が……。」

「！！ヴィヴィオ！！」

なのはが動くも……。

「邪魔だ……。」

タイラントが指を弾くとエクストリームとなのはの周囲をドーパントが囲む。

「てめえ。このためにドーパントを……。」

「くっ……。」

エクストリームはドーパント達を切り裂き、なのはを囲っていたドーパントも切り裂いていく。

しかしドーパントは減るところか……。

「なんなんだこの量……。」

逆に増えていた。

そんな間にも……。

「が……か……。」

引き続きヴィヴィオを掴みあげているタイラント。

「な、何を……。」

啞然とするクアットロだが……。

「黙ってる機械人形風情が……。」

タイラントはクアットロを蹴り飛ばし壁に叩きつけ気絶させる。

「さあ……パーティタイムだ！」

聖王ヴィヴィオから鎧が剝がれてゆき鎧は鍵の形へと変わる。

そしてタイラントはその鍵を掴むとヴィヴィオを玉座に座らせ……。

「これで……俺は……。」



タイラントはタイラントメモリを抜き変身を解く。

そして葬はタイラントメモリにその鍵を合わせると鍵は消滅し……。

『タイラント・リミットアウト！ プログラムインフィニティ！』

タイラントメモリから鎖が飛び散るように波動が放たれる。

「何……。邪魔だあてめえら！」

『スペリオル・マキシマムドライブ！』

「スペリオルブレイカー！」

ドーパント達をエクストリームはスペリオルブレイカーで切り伏せて一掃する。

しかし時は遅く……。

「残念だったな……。もう遅い……。」「

そこには不適な笑いを浮かべる葬が。

「てめえ……。なにしやがった！」

「目的を果たしただけだ。インフィニティを手にいれるという目的を……。」「

「何！」「

「インフィニティというのはタイラントメモリの最大出力状態のこと……。その力はインフィニティのなの通り無限大……。そのために俺はこいつらに協力基利用させてもらった。」

「……ならレリックは……。」

「直接的には必要はないが、一応間違ったことは言っていないだろう？ 俺に必要なだったのはこの聖王の鎧を錬金術により形状や能力を変え、インフィニティのためのリミッターを破壊する『解放の鍵』だけだ。そのためのこいつを利用した。俺から見ればこいつらはただの道具だ。スカリエツティもナンバーズもガジェットもこの少女も。」

「そんな……。」

啞然とするなのはの横では……。

「……て……んめえ……。」

ソードを握る手を怒りで震わせるエクストリームが。

「ここまで酌にさわるやつは初めてだ……。」

「面白い……。やってみろよ。」

『タイラント！』

「変身。」

『タイラント!』

ロストドライバーが自動で展開されると葬の身体が変化し、仮面ライダータイラントへ姿を変える。

しかし周りには灰色のエネルギーが常に漂う。

「これが真のタイラント……、本当の暴君だ!」

「上等だあ!」

エクストリームは真タイラントに向け駆け出す。

過去／無限（前書き）

ラストバトルまで一直線です。

今回ちょっと苦戦しました。

次回は狂気乱舞を！

## 過去／無限

「んでよ～～、大杉がうつせえんだよ。園田先生がどうとかよ～」。

「まあ大杉先生はねえ……。」

天ノ川学園高校のとある使われていない部室に向かう二人の少年と少女。

しかし少年の方は今どきではない短ランにリーゼントという変わった風貌である。

二人は部室のロッカーに入るとそこには光の道が。

しかし二人は違和感なくその光の道を歩く。

そしてやって来たのは月面基地ラビットハッチ。

二人は中に入るとそこには……。

「凄いね。これはなんだろう……。興味深い……。」

「ちょ、ちょっとフィリップさん？ あんまりいじると……。はあ……、せめて後藤さんがいたら。先に行くって言うて先に行っちゃったしなあ……。」

「「は？」」

見慣れない二人がいた。

「……………なんなんだてめえら！」

「「！」「」

少年と少女に気づく二人の珍客。

「そ、そそそそだよ！　ここは私達にしか知られてないはずなのに……………」

少年、如月弦太郎の後ろに避難する少女、城島ユウキ。

「僕は地球の本棚を持っているんだよ？　わからない訳がないじゃないか。まあこの学校に入るのには苦労したけどね。」

「そうそう。なんかほっそりとした人に止められて隙を見てなんとか入れたけど。」

「肝心な時に頼りになんないんだから。」

ユウキは頭を抱えるが……………。

「んなことはどうでもいい。なんなんだてめえらは！」

弦太郎は二人に身構える。

「紹介が遅れたね……………。僕はフィリップ。」

「ふい、フィリップ？」

「そう。仮面ライダーWの右側……と言えば分かるかな？」

「か、仮面ライダー!? アンタが!?!」

「それと俺は……。」

「この声……あ~~~~! アンタはオーズか!?!」

「そうそう。俺は火野映司。」

「とりあえず君は如月弦太郎、仮面ライダーフォーゼだね。」

「え? な、なんで俺のことを……。」

「オーズに聞いたんだ。君に頼みたいことがある。」

「あ? なんだよ。」

フィリップは一部始終を弦太郎とユウキに話した。

~~~~~数分後~~~~~

「なるほどなあ……。」

「そんなことが別の世界で……。」

「力を……貸してくれるかな?」

「おう! 当然! 何せ俺は全てのライダーと友達になる男だから

な！ それにライダーは助け合いだろ？」

「ありがとう！ 助かるよ！」

「お、おう。」

手を握ってきた映司に弦太郎は若干おののく。

「じゃあ行くっか……。」

「はい！」

「おう！ ヌウキ悪いが賢吾には納得行くようなこと言っといてくれよ！」

「うん 頑張ってきてね」

「おう！」

弦太郎はユウキを握手した後、拳合わせから拳を上下にぶつけあう恒例の挨拶を交わしフィリップと映司に続きラビットハッチを去って行った。

「おらあー！」

四年前のミッドチルダ、聖王のゆりかごの玉座の間で真タイラントにスペリオルソードを振り下ろすエクストリームだったが……。

「ふん。」

真タイラントは避けることは愚か動かずに肩を切らせるがダメージはなく小さい火花を散らすだけである。

「！ 何！」

「終わりか？」

真タイラントは普通にエクストリームの顔面を殴るが……。

「がああああああ！」

かなりの威力らしく火花が散り、後ろの壁にめり込む。

「翔太郎さん！ アクセルシューター！」

なのはも負けじと真タイラントにアクセルシューターをはなつがタイラントは片手で受け止め……。

「悪いが俺は女性のプレゼントはキスしか受け付けられないんで……。利子つきで返してやろう……。」

もう片手で逆に打ち返す。

「！」

かなり威力が増しているらしくなのはの表情が歪む。

「なるお！」

瞬時にエクストリームがなのはの前に立ちビッカーシールドで防
が。。。。

「く。。。お。。。重てえ。。。」

「無駄だ。。。」

「！」

ビッカーシールドは破壊されエクストリームに直撃する。

「があああああああ！」

エクストリームから大量の火花が散り膝をつく。

「翔太郎さん！」

「あ。。。あぶねえぞなのはさん。。。はあ。。。はあ。。。今
のやつは。。。はあ。。。はあ。。。俺でも。。。」

「。。。。。。」

なのはは動けない。

「その通り。。。邪魔はしないで頂こう。。。」

真タイラントが手をあげるとドーパント達がなのはを捕まえる。

「きゃあああ！」

「なのはさん！ てめえ！」

エクストリームは唯一残っていたスペリオルソードを手に真タイラントに突っ込む。

『スペリオル・マキシマム』

「おらあああああ！」

エクストリームのスペリオルブレイカーが真タイラントに放たれるが真タイラントは防御は愚か微動だにしない。

そして。

「ふん。」

スペリオルブレイカーは真タイラントの肩に放たれるも、先程よりも若干大きい程度の火花を散らすだけである。

「何！」

「痒いな。」

「てんめえ！」

エクストリームは引き続きソードで切り裂くも通用しない。

「それじゃあ次は俺だ。」

真タイラントが蹴りを放つ。

「！なるお！」

エクストリームはスペリオルソードで防ぐも……。

「無駄だ。」

「！」

スペリオルソードの刀身は真タイラントの蹴りに耐えられずに粉々に碎かれる。

そしてそのまま蹴りはエクストリームの脇腹を捉える。

「がっ……。」

大きな火花が散りエクストリームは膝をつく。

「消えとけ……。」

真タイラントはタイラントメモリをマキシマムスロットにスロットする。

『タイラント・マキシマムドライブ！』

「はあああああ……。」

真タイラントは右手にマキシマムのエネルギーを貯めつつ、右手でエクストリームの首を掴み上げる。

そして……。

「はぁ！」

真タイラントが力を込めるとマキシマムのエネルギーがエクストリームを駆け巡り……。

「があああああああ！」

エクストリームの全身から大きな火花が散り爆発、変身が解ける。

「翔太郎さん！」

後ろではドーパントに捕まっているのが叫ぶ。

「がは……、が……。」

当の翔太郎自身は身体中傷つき痛み悶えている。

「そろそろパーティーを揃えよう。ゾーン。」

真タイラントが呼ぶと何処からかゾーンドーパントが現れる。

そして……。

「あいつらもやりたがっているだろうからな……。」

タイムメモリを取り出すと……。

「インフィニティ！」

インフィニティの力を込める。

「てめ……、何を……。」

「現代のあいつらも呼んで暴れさせてやるつといつ俺の『慈悲だ・
・。そしてお前らにさらなる絶望をな……。」

『タイム！』

「来い……。お前ら！」

「はあ……。」

じりじりと対立しあうエターナルとラグナロク……。

「でりゃあああああ！」

「ざあああああ！」

互いの刃と爪を突き立てあうフングジョーカーとキメラ。
すると宙にワームホールが現れる。

「何……。」

「あれって師匠達も通ったタイムの道……。」

二人が気を剝られた内に……。

「やっと手に入れたか……。」

「思う存分殺るか！」

ラグナロクとキメラは二人と間合いをとる。

「どういうことだ……。」

そんなに二体にエターナルはエッジを向ける。

「あいつがやっと手にいれたんだ……、インフィニティ……。
本当のタイラントを。」

「本当の……。」

「タイラント？」

エターナルとファングジョーカーが息を飲む。

すると。

「インフィニティによりタイムメモリに再び焔がともった……。」

「そんじゃあ俺達は過去で暴れさせて貰うぞ！」

二体はワームホールに向け走り二人は消えていった。

「！」

「待て！」

エターナル達も続くが……。

「！！！」

ワームホールから電撃が放たれ二人を拒む。

「つつ！」

「ぐっ！」

「どうやらお呼びじゃないみたいだな……。」

「でもあの二人が過去にいったら……。只でさえタイラントとカオスで精一杯なのに……。」

「受けた以上はやりぬくぞ……。」

「はい！」

二人は構え……。

「……でりゃあああああああ！」

突っ込んでいくが再び電撃が二人を襲う。

「ぐっ……。」

「つつ……。負……。け……。」

「負け……。」

「……。負けるかあああああ！」「」

二人は無理矢理にでも前に進む。

その時。

『スカル・マキシマムドライブ！』

「「！」「」

何処からか紫の弾丸が電撃の放電部分に放たれ、電撃を一時的に消す。

「今のは……。」

「……。そんなことはどうでもいい……。今の内に……。」

「はい！」

二人は電撃の消えたワームホールの中へ飛びこんでいった。

そしてワームホールは消え、その場を見つめるのは……。

「……。」

帽子を深く被り直すスカルのみだった。

再び過去、ゆりかご内。

「がああああああ！」

壁に叩きつけ地面に落ちるアクセルトリアル。

「ぐっ……。」

何故か腹部を抑える。

「どうやらあの傷がまだ癒えていないようだな……。」

「……。」

実は先の戦いでカオスに刺された腹部の傷が開き欠けていた。

「そんな手負いで俺に勝とうなどと……。」

カオスは高速移動に入る。

「！」

アクセルトリアルも高速移動に入ろうとするが腹部に強烈な痛みが走る。

「思うな。」

「！」

その刹那アクセルトリアルをカオスが切り裂く。

そして着地を待たずにカオスは高速移動したまま幾度となくアクセルトリアルを切り刻む。

「があああああああ！」

アクセルトリアルの装甲から火花が散り変身が解ける。

「があああああああ！」

服が破け全身傷ついた竜が地面で悶える。

そして腹部のシャツは血で滲む。

「どうやら傷が開いたみたいだな……。」

「ぐっ……。」

「お前はまたとめられない……。世界の終わりも……。終末も……。」

「はあ。」

「がっ！」

真タイラントに蹴られ壁に叩きつけられる翔太郎。

「そろそろゾーンも効き始めてるか……。」

「何を……する気だ……。」

「こない日を俺たちだけで堪能するにはもったいないだろう……だからちよつと声明をな……。」

そして真タイラントは手を上げるとモニターが開き……。

「くっ！」

スバルやティアナにエリオ、ルーテシアを抱き抱えるキャロ、そして気を保っているナンバーズのノーヴェを囲むのは突如として現れたドーパント達。

「はぁ……はぁ……一体何処から……。」

ティアナやフォワード陣らが肩で息をする中……。

「どうなってんだ……。なんでドーパントが……。」

ノーヴェがドーパント達を睨むと突如至る所にモニターが現れ、真タイラントが映る。

『今日この日を持ってこの世界、ミッドチルダはこの俺、仮面ライ

ダータイラントが破壊する。今の俺は無限を得た究極の存在……。いわば神に等しい存在となった。こんな俺に滅ぼされることを光栄に思え。誰にも邪魔はさせん……。管理局にも……。仮面ライダーにも……。」

モニターには二画面で傷ついた翔太郎と竜が移し出される。

「翔太郎さん……。」

「竜さんまで……。」

「……。」

スバルにティアナ、エリオとキャロも息を飲む。

「……おしまいだ……。仮面ライダーが二人がかりでも勝てないなんて……。」

ノーヴェがその場に力なく座り込んだ。

「何故だ……。何故だ暴牙君……。」

ドーパントに首を締めあげられるスカリエッティ。

側にはすでに気絶しているトーレとセツテ。

「止めるおおおおおー！」

過去／無限（後書き）

気まぐれランキング！

仮面ライダーの中で好きな作品（映画、Vシネのみ）

- 5・MOVIE大戦CORE
- 4・劇場版仮面ライダーカブト
- 3・仮面ライダーアキュセル
- 2・仮面ライダーエターナル
- 1・仮面ライダーW Atoz

特にAtozはボイルダーでのバイクチェイスが大好きです。

過去／勇士（前書き）

何とか書けました。

なんだかんだで今回は一章のラストよりも苦戦しましたね。

まあ出来は期待しないでください。

過去／勇士

過去・市街地。

「あいつ……。あたしらを道具として利用してたつてのか……。」「

身体中に傷をつけたノーヴェは歯をくいしばる。

「その通りよお！」「

するとその場にキメラドーパントとラグナロクドーパントが現れる。

「君らは葬の道具だった……。ならここで壊してもいいだろうなあ……。」「

「ぶつつぶしてやる。」「

ラグナロクとキメラがドーパントを率いながらフォワード陣とノーヴェに歩み寄る。

「くつ……。こんなとこでくたばんのかよ……。」「

ノーヴェが諦めかけたとき……。

「でりゃあああああ！」「

スバルがキメラに殴りかかりそのままラッシュに繋げる。

「お前なんで……。」

「戦闘機人だつて笑えるし普通の生活もできる。私だつて笑えてる・……。ティアナやなのはさん、エリオにキャロにギン姉にフェイトさんにはやて隊長……、翔太郎さんがいるから！ だからそれを証明するために今貴方は死なせない！」

しかしスバルのラッシュもキメラには大して効いていない。

「くっ！」

「貧弱な……。」

キメラはスバルの腕を掴み爪できりかかる。

「……スバル（さん）！」「」

ティアナ達もドーパントにより防がれているため手が出せない。

「おい！ 止める！」

「くっ！」

スバルが思わず目を閉じる。

そのときキメラを何処からか投げられたメモリスロットが搭載されたコンバットナイフが霞める。

「あゝ！？」

「な、何？」

驚くスバルをよそにキメラとラグナロクはナイフが投げられた方向を向くと……。

「……そろそろいい加減にしろよ……。」

「それ以上はさせない……。」

克巳と来人が腰にドライバーを巻いた状態で立っていた。

「貴様らぁ……。」

「しつこいと嫌われるぞ？」

キメラとラグナロクは来人と克巳に言うが……。

「粘り強いつて言ってもらいたいですね。」

「……お前らに好かれても嬉しくもなんともない。むしろ不気味だ。」

二人はメモリを構える。

「貴方達はここで僕達が止める……。」

「あいつらの夢はあいつらが叶える。俺達があいつらが夢を叶えるために……、叶えられるためにお前らを倒す。あいつらの夢は……。」

「誰にも邪魔させない(ねえ)!!」

『ぐ……、が……』

ゆりかご外に浮かぶ空中モニターに血が滲む腹部をカオスに踏みつけられている竜が映る。

「竜さん……。ヴァイタ……。」

そして竜の側には腹部から血を流しながらドーパントに吊されているヴァイタの姿も映っている。

『貴様は変えられないし守れない……。今も前も……。こんなぬるま湯につかっていなければ復讐者として俺程度なら差し違えて倒せたもの……』

『俺は……お前達と差し違う気などない！ 少なくとも今の俺は……。未来で約束した……。必ず帰ると！』

『守れない約束をするやつだ……』

『守れない約束なんてしない……。守れるから約束したんだ！』

「何……。」

ゆりかご内で竜を踏みつけるカオスは竜に思わず恐れを抱き、竜はカオスの足に掴みかかる。

「ぐ……おおおおおお！」

「何だと……。」

「ぐおおおおおお！」

そのまま竜はカオスの足をあげ立ち上がり蹴り飛ばしつつ間合いを開ける。

「運命は変えられる。一人では無理でも支えてくれる誰かが側にいれば……。」

「綺麗ごとを……。」

「俺は変わった……。俺は……。復讐者という呪われた運命を振り切り生まれ変わった。この街を守るために戦う……。仮面ライダーとして！」

「はぁ……。はぁ……。」

壊れかけのライオットザンバーで自身を支えるフェイト。

なんとかスカリエッティはドーパントから解放したものの、スカリエッティは壁に叩きつけられ気絶し、フェイトも先のトーレとセツテとの戦闘にドーパントからの攻撃によりふらふらである。

「こんな……所で死んだら……。この人達は……。」

フェイトはふらつきながらも横のケースに入った人達を見つつライ
オットザンバーを回復させドーパント達に向ける。

「この人達は私が守る……。絶対に！」

そんなフェイトにドーパント達が襲いかかる。

「つつ！」

フェイトが歯をくいしばったその時……。

円盤のような弾丸がドーパントに放たれ火花を散らした。

「えっ？ 何？」

フェイトは辺りを見渡すと……。

「人をこんなに入れるなんて悪趣味極まりないな……。」

歩み寄ってくる青年が一人……。

「貴方は一体……。」

「あんたもあんただ……。勝てない相手につっこむなんて……。
勇敢と無謀は違うぞ……。」

「……………」

「火野といい伊達さんといい何で俺の周りには……。後は俺に任

せて下がってる……。」

青年は腰に左にダイヤルを備えたベルト、バースドライバーを装着しフェイトの前に立ちドールパント達に迎え立つ。

「貴方は……。」

「俺は後藤慎太郎……。またの名を……バース！」

ゆりかご内・玉座の間。

「なんだあいつは……。それにあの二人は現代で……。まさかあいつらしくじったか……。」

真タイラントは市街地とスカリエツティのアジトに現れた来人、克巳、後藤をモニターで見て混乱する。

「来人に克巳……。それにアイツはオーズの仲間の……。」

モニターを見る翔太郎も思わぬ顔に啞然とする。

「お前の仲間か……。」

「ああ……。一人のてめえとは違い……。一人では弱いかもしれないし過ちを侵すかもしれない……。それでも俺らは互いに力を合わせながら未来を築いていく……。てめえの手に未来が……。明日があるなら！俺が奪い返す！」

「そんなボロボロで何ができる……。お前一人では俺には……。」

「一人じゃないさ。」

「「「「！」」」」」

翔太郎と真タイラント、なのはが声の方向を見ると……。

「フィリップ……。」

「やあ翔太郎。」

翔太郎の相棒、フィリップが立っていた。

そして後ろのオーロラからは新たに……。

「お久しぶりです。」

「おつす。はじめまして……だなW！」

映司と弦太郎が現れた。

「お前……オーズ……。お前は……。」

「俺？ 俺は如月弦太郎！ 全てのライダーと友達になるライダー、
仮面ライダーフォーゼだ！」

「ふお、フォーゼ？」

「ああ。よろしくな」

弦太郎は拳を突き出し翔太郎も唾然としつつ拳をぶつけ弦太郎恒例の挨拶がなされる。

「でもフィリップ……。なんでお前……。どうやって……。」

「この過去の世界には本来仮面ライダーは存在しない……。でも君達が来たことでこの過去の世界に仮面ライダーが存在するようになったことにより今の世界は本来のミッドとは違った一時的に存在する別のミッドとなったんだ……。」

「……。」

フィリップの質問に翔太郎、映司、弦太郎は頭を傾げる。

「つまりは今、この世界は一つの世界として一時的ではあるけど存在していることになるんだ……。だったら次元を超えるのは彼の専門だよ……。」

「……まさか……。」

風都。

「いいよ土君！ 頑張れええええ！」

ビルの屋上で応援する亜樹子の目線の先は……。

「でりゃあああー！」

試作品メモリで変身・暴走するコックローチドーパントと戦う仮面ライダーカブトライダーフォーム……。

しかしカブトのベルトはカブトゼクターでなく過去の平成ライダーの紋章が刻まれた白いベルトである。

するとコックローチドーパントは高速移動に入る。

「逃がすか！」

カブトは左腰のライドブッカーからカードを取り出すとそのカードをベルト、ディケイドライバーにスロットしレバーを操作しドライバーを閉じる。

『アタックライド・クロックアップ！』

途端にカブトは高速移動クロックアップに入りその場には茶色と赤の残存がぶつかりあつ。

しかしコックローチが敵うはずもなくコンクリートに叩き伏せられる。

カブトもクロックアップを解くとカブトをマゼンダ色のエフェクトが包み真の姿、仮面ライダーディケイドの姿を現した。

「そろそろ決めるか。」

ディケイドはブッカーから黄色いカードを取り出しドライバーにスロットする。

『ファイナルアタックライド・デイデイデイケイド!』

デイケイドは跳躍すると黄色いカード状の10枚のエフェクトがコックローチまでの道を作りデイケイドは其を突き抜けながら右足にエネルギーを込めていく。

そして……。

「たあああああああ!」

デイメンジョンキックがコックローチに放たれ爆発、頭がはげた男性が気絶して現れた。

「やった!」

「ふう。……まあ別の世界が危ないと言い出したのは俺だからな。そっちは頼んだぞ……。」

デイケイドは変身を解除、首からマゼンダ色のトイカメラを下げた青年、門矢士が空に向けて呟く。

何せ今通りすがりの仮面ライダー、デイケイドは異世界へと相棒を助けるために一時的に街から離れているフィリップに変わりこの街を守る仮面ライダーであるためである。

異世界をフィリップに任せ一時的に次元を超える力を貸して。

過去のミッド・ゆりかご内玉座の間。

「じゃあディケイドがこの世界の危機を察知してお前を……。」

「ああ……。彼には僕に変わって頑張ってもらってるけどね。それに大堂克巳以上の悪の仮面ライダーが敵と聞いてね……。」

「俺達と呼ばれたってわけだ。」

「ライダーは助け合いですしね……。」

フィリップ、弦太郎、映司が翔太郎を支えて起こす。

「……そっか。なら俺が折れてる場合じゃねえよなあ。約束したもんなあ、お前が相棒と思ってくれてる内は俺は二度と折れねえつて。なあ、……フィリップ！」

「ああ……。」

二人は一瞬目を合わせた後翔太郎は腰にダブルドライバーをセット、そしてフィリップの腰にもダブルドライバーが現れる。

続いて映司もオーズドライバーを、弦太郎もフォーゼドライバーを腰に装着する。

そして四人は真タイラントに向かい並び立つ。

「味方の仮面ライダーか？　だがいくら相手が増えようが……。」

「悪りがてめえの悪巧みもここで終るぜ！　俺達がてめえを止める！　てめえとは違う真正銘本物の……。」

「『『『仮面ライダーとして!』』』」

「行くぞ来人……。」

「はい!」

『エターナル!』

『フアング!』

克巳と来人はメモリを手にし……。

スカリエツティアジト内のフェイトの前では後藤が左手首のバンドからセルメダルを抜き……。

『アクセル!』

ゆりかご内では竜が目に強い炎を灯し……。

「アंक……、行くよ。」

玉座の間では後ろに微笑むアंकの幻を背負う映司が三枚の赤いメ

ダルをドライバーにスロットしスキャナーでスキャンし……。

弦太郎は赤い四つのスイッチを入れアストロスイッチをドライバーに直結してゆき……。

『3……2……1……』

弦太郎は左拳を構え、右手でエンターレバーを握り……。

『サイクロン!』

『ジョーカー!』

フリリップは左手にサイクロンメモリを持ち右に、翔太郎は右手でジョーカーメモリを持ち左に立ち、構ええ互いに頷きあう。

そして四ヶ所で八人の声が重なる。

「変……変身っ!」「……身!」

『フアング・ジョーカー!』

『エターナル!』

市街地ではそれぞれ来人は白と黒の装甲で覆われ、克巳は白い身体に青い炎を燃え上がらせる仮面ライダーに変身を遂げる。

「か……。」

「仮面ライダー……。」

「……。」

スバルやティアナ、エリオ達が息を飲む中……。

「さあ……お前の罪を……。」

「さあ……地獄を……。」

「数えろ！」

「楽しみな！」

フアングジョーカーは右手の人差し指をカメラに、エターナルはサムズダウンをラグナロクに向けた。

『カポーン！』

後藤の身体を十個のリセプタブルオーブが覆い各オーブは装甲を作り上げながら後藤の身体に装着され各所が徐々に変わってゆく。

そして最後に頭全体を仮面が纏い、その場に現れた仮面ライダーバースが副眼Uフラッシャーを赤く光らせるながら、ドーパント達にバースバスターを構えた。

竜はアクセルメモリをスロットしパワースロットルをバイクを吹かせるかのように二度捻る。

『アクセル!』

竜の前を爆音と共にピストンパーツと槍のエフェクトが現れ竜の身体を一瞬で変化、フェイスフラッシャーを眩く光らせ復讐の思いを完全に拭い去った真の仮面ライダーとして仮面ライダーアクセルがエンジンブレードをカオスに向ける。

「さあ思いきり……振り切るぜ!」

『タカ! クジャク! コンドル! タ~~~~ジャ~~~~ドル~~~~!』

映司の周りを赤い紋章が回り一つの円形の不死鳥になると映司に合体され、映司の身体を一瞬で変化させ……。

エンターレバーを入れた弦太郎を光の輪と白い煙が覆い……。

『エクストリーム!』

翔太郎とフィリップ、二人をエクストリームメモリが飛びながら緑と黒の竜巻が二人を覆う。

そしてその場に仮面ライダーオーズジャドルコンボ、仮面ライダーフォーゼベースステイツ、仮面ライダーWサイクロンジョーカーエクストリームがその姿を現した。

「はあ！」

オーズはタジヤスピナーを構え……。

「さあ……タイマン……じゃねえけどまあいいや……。タイマンはらせてもらっぜー！」

フォーゼは右拳を突き出し……。

「世界を滅ぼす悪魔、暴牙葬、……。いや、……。我錬翔太郎！ さあ……。」

Wは左手をスナップさせ……。

「お前の罪を数える！」

左手を真タイラントに向けた。

過去／勇気（前書き）

なんとか書けました。

今回は色々考えました。

とりあえず出来はなんとなくです。

過去／勇気

「ッビツカーファイナリユージョン！」

「はあああああああ！」

「チエーンソーキイキイック！」

Wのビツカーからの光線、オーズの羽手裏剣、フォーゼのチエーンソーのリミットブレイクでドーパント達を一蹴する。

「すごい……。」

そんな仮面ライダー達になのはは驚きを隠せない。

「おらあ！」

「はあ！」

「どらあ！」

そして唯一残った真タイラントにWはプリズムソード、オーズは打撃、フォーゼはチエーンソーモジュールをそれぞれ放つが真タイラントは余裕で避ける。

しかし隙をつかれ三人に取り抑えられる。

「なのはさん！ 今の内にヴィヴィオを！」

「！ は、はい！」

なのははWに促されヴィヴィオが座る玉座の間を目指す。

「させるか！」

「てんめえの相手はこっちだ！」

フォーゼのチェインソーモジュールが真タイラントの腹部に放たれるが片手で止められる。

「四股に武器を装備するとは……。妙なやつだ！」

そのまま片手でフォーゼを殴り飛ばすが……。

「隙ありだぜ！」

「！」

『ロケットオン』

フォーゼは瞬時にロケットモジュールをマテリアライズし……。

「はああああああ！」

「どりゃああああ！」

フォーゼを踏み台にしたオーズのスピナーと同時に真タイラントの腹部にロケットモジュールを叩き込む。

「ぐっ……。」「

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

そして二人の肩を踏み跳躍したWの七色の光を刀身に宿したプリズムソードが真タイラントに振り降ろされる。

「「ビツカー・チャージブレイク!」」

ソードは真タイラントの肩を直撃するが効いた様子はない。

「き……かないぞ……。」

すると……。

「悪いけど僕らの攻撃はまだ終わっていない!」

Wの右の副眼が光る。

「何……。」

「「スペリオルソード!」」

するとクリスタルサーバーからメモリがスロットされたスペリオルソードがWの左手に現れる。

『スペリオル・マキシマムドライブ!』

「「スペリオルブレイカー!」」

そして次にスペリオルソードで切りかかる。

「つつう！ この程度で！」

真タイラントは火花を散らしつつWを殴り飛ばすが……。

「そこだあ！」

Wは吹き飛ばされつつスペリオルソードを真タイラントに投げつけ腹部に突き刺さる。

「がつ！」

「今だっ！ オーズ！ フォーゼ！」

既にヴィヴィオとクアットロを救出したなのはを二人はかばうように前に並び立つ。

ゆりかご内。

『エレクトリック！』

電撃を刀身に纏わせたエンジンブレードでアクセルはドーパントを乱れ斬る。

周りを囲まれるも……。

「はあああああああ！」

その場を回転しドーパント達を一掃する。

そして……。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

アクセルのフェイスフラッシャーが発光し……。

「はああああ……」

エンジンブレードでA字を空中に描き……。

「はぁ!」

。ドーナツ達にダイナミックエースを放ちドーナツ達は爆発……。

「……心の……強さか……」

カオスドーナツのみが残る。

「竜……お前……」

竜を案ずるウィータを背に……。

「お前だって身体に穴が空いてるんだ……。安静にしている……。」

「そういうお前こそ大丈夫なのかよ。傷が開……」

「俺に質問をするな……。俺は……。」

アクセルはカオスに駆け出しながら強化アダプタをアクセルメモリにスロット。

『アクセル・アップグレード!』

『ブースター!』

パワースロットルを捻り一瞬でアクセルブースターになる。

「こんな所では死なん!」

スカリエッティアジト内。

「はっ!」

バースはドーパントに向けバースバスターを乱れ撃つ。

それによりかなりのドーパントが床に伏せられていく。

しかし……。

「! 弾切れか……。」

気がつくともバスターの内部にはセルメダルがなくなっていた。

「こんな時に……。おいその!」

「え！？ 私？」

バースは向かってってくるドーパントに蹴りをかましつつ後ろにいるフェイトを呼びかける。

「お前以外に誰がいるんだ！ そこに俺のバツクが有るだろ！」

「え？ バツク？ あった。」

フェイトは後藤が変身する前に床に置いたバツクを開ける。

「・・・メダル？」

中には大量のセルメダルと数個のバースバスターのメダルポットが入っていた。

「中にあるポットを投げしてくれ！」

「え？ あ、はい！」

フェイトは言われるがまま中のメダルポットをバースに投げ、バースはキャッチする。

「ナイスだ！ えっと・・・。」

「フェ、フェイトです！ フェイト・T・ハラウン・・・。」

フェイトは最後が小声になりつつも名前を言う。

「ああ。助かったぞ・・・。」

バースは裏拳でドーパントの顔面を殴りつつ……。

「フェイト！」

さりげなくサムズアップをフェイトに向けた。

「……は……はい……。」

何故かフェイトの頬は赤いがバースはそんなことも知らずにポットでバスターミにメダルを装填しドーパントを撃ち抜いていく。

「一気に決める！」

バースは走りながらメダルをドライバーにセットしダイヤルを回す。

『キヤタピラレッグ！』

両足のリセプタブルオーブからパーツが現れバースの両足にキヤタピラレッグが装備され……。

「はあ！」

バースはキヤタピラレッグでドーパントを蹴りつつさっきの動作を繰り返す。

『クレーンアーム！ ドリルアーム！』

バースの右手にクレーンアーム、その先端にドリルアームが装備されバースはそのクレーンアームを振り回しドーパント達に叩きつけ

る。

「はあああああ！」

そしてそのまま……。

『カッターウイング！ クレーンアーム！ ブレストキャノン！』

残りのCLAWSを装備し、全装備形態、バースディとなる。

『セルバースト！』

そしてバースはキャノンにエネルギーを貯めつつドーパントをドリルアームやクレーンアームにより一ヶ所に集める。

そして……。

「はああああ……、でりゃあああああ！」

ブレストキャノンシュートが放たれドーパント達を一瞬で蒸発・爆発させる。

「はああああ……。」

「……凄すぎる……。」

そんなバースディをフェイトは口を開けたまま呆然と眺める。

すると。

アジト内にアラームが鳴り響く。

実は真タイラントがエクストリームと戦っていた際、さりげなく自爆装置を発動させていた。

「！」

「フェイト、これは一体……。」

バースは周りのカプセルの人達を見ながら聞く。

「恐らく自爆装置です。このカプセルの人達はそこの科学者により実験台にさせられていたんです。」

「なんてことを……。助けるぞ！ 俺達が！ 俺には火野や伊達さんのように凄い度胸も力もない。それでも目の前に命があるなら俺だって命がけで命を助ける！ 世界を守るこのバースの力はそのために俺が望んだ力だ！」

「後藤さん……。」

「やるぞ！ フェイト！」

「はい！」

バースとフェイトは崩れゆくアジト内で自爆を阻止するために爆破装置解除にキーボードを叩き始める。

市街地。

『アームファング！ ショルダーファング！』

「でりあぁ！」

右手にアームセイバー、左手にショルダーセイバーを持ちファングジョーカーはエターナルと離れてキメラと切り合う。

互いに斬撃を放ち、その衝撃波が周囲を次々に切り刻む。

『ファング・マキシマムドライブ！』

そして足にマキシマムセイバーを装備し全てのセイバーを纏ったファングは跳躍しマキシマムセイバーでキメラに切りかかる。

「でいやぁー！」

しかしマキシマムセイバーの一振りはキメラの両手により止められる。

「ふん！ ただのマキシマムで俺を倒せると……。」

「まだ……、まだだ！」

『サイクロン！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

ファングはサイクロンメモリをマキシマムスロットにスロットし、

全てのセイバーに風を纏わせる。

そして間合いを取り再び……。

「でいやあああああ！」

マキシマムセイバーで切りかかる。

「！ こんのお！」

キメラは両手にエネルギーを込めて受け止めるも……。

「はあっ！」

ファングのマキシマムセイバーはいつも簡単にキメラの両手を切断しキメラを切り裂く。

「ぎいやあああああ！」

身体から火花を散らしつつキメラは後退する。

「あなたの刃は壊すだけしか知らない。でも僕の刃は守るための刃……。だとしたら僕の刃は貴方には傷つけられない！」

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

『ファング・マキシマムドライブ！』

ファングはタクティカルホーンを三度弾きつつサイクロンの風を纏う。

「はああああああ．．．．．」

そして構えつつ．．．。

「はあ！」

跳躍。

「フアングサイクロンストライザーアアアアアア！」

風を纏ったストライザー、フアングサイクロンストライザーをキメラに放った。

「でええええええええ．．．。」

「く．．．こんな所で．．．。まだまだ暴れ足りんのにiiiiiiii
！」

「暴れさせたりなんてさせない！ 僕が．．．、仮面ライダーとして！」

そのままカメラをストライザーで横一文字に切り裂く。

「が．．．か．．．。」

「これで．．．．．決まりだ！」

「があああああああ！」

キメラは爆発し、キメラメモリが砕けながらその場に落下する。

「……………ふう……………」

ファングは力無くその場に座り込む。

「そいやあ！」

「ぜりやあああい！」

ファングと別れたエターナルはエッジを放つが、ラグナロクはギリギリ避けつつエターナルにカウンターを放つも、エターナルは何の不備もなくカウンターを捌く。

「貴様あい加減に……………インフィニティを得たアイツには誰にも……………」

「相手してるのが並の相手ならな……………せやあ！」

そのままエターナルは回転し遠心力と青い炎を加えた拳でラグナロクを殴り飛ばす。

「ぐ……………」

「とりあえずてめえは俺が墮とす。それは誰がどう言おうが揺るがない決定事項だ……………」

エターナルは指を弾くと宙に黒いメモリが現れる。

『ジョーカー!』

「俺も使わせてもらっぞ。切札を……。」

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

エターナルもジョーカーメモリを身体のマキシマムスロットにスロットする。

すると空中にA t e o Z全てのT2メモリが現れる。

「何……。」

『ゾーン!』

驚くラグナロクをよそにエターナルは宙に現れたメモリの一つ、ゾーンメモリを手にしマキシマムスロットにスロットする。

『ゾーン・マキシマムドライブ!』

それにより全てのT2メモリが身体のスロットにスロットされていく。

『アクセル・バード・サイクロン・ダミー・ファング・ジーン・ヒート・アイスエイジ・キー・ルナ・メタル・ナスカ・オーシャン・パペティアー・クイーン・ロケット・スカル・トリガー・ユニコーン・バイオレンス・ウエザー・エクストリーム・イエスタディ・マキシマムドライブ!』

身体中のスロットにメモリがスロットされエターナルの副眼が黄色く発光する。

「26本のマキシマムだと……。」

「怖じけついたか……。」

「……貴様ぁ！」

ラグナロクは激情しエターナルに駆け出しラッシュを叩きこんでゆくがエターナルは其を全て受け止めカウンターを叩きこんでゆく。

「ぐっ……。」

たじろぐラグナロクに……。

「せやぁー！」

エッジでラグナロクを切り裂き吹き飛ばす。

「ぐがああああぁー！」

「せいぜい地獄で……。」

『エターナル・マキシマムドライブ！』

エターナルはエッジにエターナルメモリをスロットしながら走り出す。

「遊んでこい……。」

「馬鹿が……。俺にはお前のマキシマムは効かん！」

ラグナロクは両手にエネルギーを込めるが……。

「ふん！」

エターナルは瞬時に自身のロープを投げラグナロクの視界を奪う。

「何！ こんなものが……。」

「遅い……。せりゃああああ」

そのままエターナルはラグナロクにエッジを突き刺す。

「ぐぎゃあああ！」

そして……。

「遠くて効かないならてめえの中で奏でてやる……。鎮魂歌を……。」

すると。

「ぎい……。が……。」

途端にラグナロクは苦しみ出す。

「貴様……。何を……。」

「レクイエムの力を貴様の中に直接叩き込んだ……。そしてこいつで決める……。」

エターナルは右足に青い炎を宿しつつ跳躍……。

「そいりゃあああああ！」

ラグナロクにキック型エターナルレクイエムを放った。

「があああああああ！」

そしてエターナルは身体からプラズマを走らせるラグナロクを背に宙に浮かぶロープを再び纏い、手をゆっくりと……。

「さあ……、地獄を楽しみな！」

「ああああああああ！」

サムズダウンにし後ろのラグナロクは爆発、ラグナロクのメモリが砕け散った。

ゆりかご内。

「はあああああああ！」

「ふう！」

アクセルブースターのエンジンブレードとカオスの刀がぶつかりあ

う。

「歯向かわなければ楽に消えたものの……。」

「そうはいかん……。例えインフィニティをあいっが得たとしても俺達にはまだブレイブがある！」

「馬鹿が……。そんなものはただの夢幻だ！」

「だとしても俺達はインフィニティを破る……。この街を守る仮面ライダーとして！」

アクセルブースターはブースターを点火させ威力をあげた蹴りでカオスを蹴り飛ばす。

「くっ……。加速！」

カオスは高速移動に入りアクセルブースターに切りかかるが……。

「……………！そこだ！」

アクセルブースターはカオスの刃を左手で受け止める。

「何！」

「肉を切らせて……。骨を絶つ！」

そのままカオスをエンジンブレードで切り裂く。

「ぐっ！」

「はっ！」

アクセルブースターはブースターを点火させながらエンジンブレードをカオスに突き刺しそのまま動力炉に飛ぶ。

「うおおおおおおお！」

そして動力炉にたどり着くがそのまま動力炉をカオスを貫通したままのエンジンブレードで突き刺す。

「ぐ……が……。」

「はあああああああ！」

アクセルブースターはブレードの引金を弾く。

『エンジン・マキシマムドライブ！』

ブレードから発する黄色い刃は動力炉のみならずゆりかごの外まで貫く。

「ぐ……が……。楽……しかったぞ……。仮面ライダー……アクセル……。」

「俺も……お前とこんな形でなければ良い友になれた気がする……。」

「嬉しいな……。なんだか命を感じる……。」

「もし機会があれば……、また生まれ変わってこい……。その時はいつでも相手になってやる……。」

「……ありが……。とう……。」

そのままカオスは塵になって消滅、床にはカオスのメモリが砕け散りながら落ちていった。

アクセルブースターは着地すると……。

「……せめてものたむけだ……。」

カオスメモリを拾いあげ、そのままヴィータがいる場所へと向かった。

ゆりかご内・玉座の間。

『ランチャーオン レーダーオン』

『ランチャー・レーダー・リミットブレイク!』

フォーゼはランチャーとレーダーをマテリアライズしエンターレバーを入れ……。

『タカ! クジャク! コンドル! ギンギンギン! ギガスキヤン!』

オーズはドライバーから三枚のメダルをスピナーにスロットしスキ

ヤナーでスキヤンする。

『サイクロン・マキシマムドライブ!』

『ヒート・マキシマムドライブ!』

『ルナ・マキシマムドライブ!』

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

そしてWのプリズムビツカーの中央には七色の光が集まり……。

「くらえ!」

「せいやああああああ!」

「ビツカーファイナリユージョン!」

フォーゼのロケットモジュールの集中放火、オーズのスピナーからの不死鳥弾、Wのビツカーファイナリユージョンが真タイラントに放たれる。

「「「うおおおおお!」「」「」

「ぐ……があああああ!」

真タイラントは爆発する。

「やつ……たんですか?」

W達の後ろでなのはは尋ねる。

しかし……。

「そんなに素直じゃなさそうっすわアイツ……。」

Wの目線の先には身体に傷を追った真タイラント。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……。」

「さすがのめえもきついみてえだな。」

「まだだ……。インフィニティの力は……俺の力はこんなものではない！」

真タイラントが叫ぶと周囲をインフィニティの灰色のエネルギーが破壊していく。

そして真タイラントは天井を破壊し飛び去っていった。

「くっ！ あんにやろうが！ オーズ！ フォーゼ！ とりあえずなのはさんを連れて俺達も脱出するぞ！」

「はい（おう）！」「」

すると。

玉座の間の扉が爆音と共に破壊される。

「あ？」

現れたのは……。

「翔太郎さん！なのはさん！」

「助けに来まし……。た……。」

スバルとバイクに乗ったティアナだった。

実はフォワード陣はその場を「任せろ」と言うファングとエターナルにその場を任せていた。

おかげで今二人はなのはらを助けに来ており、エリオとキャロはスカリエッティのアジトへ向かうことができた。

そしてノーヴェとルーテシア達は無事に管理局員に保護されていた。

「えつと……。」

「誰……。」

二人はWやオーズ、フォーゼに頭を傾げる。

「あ……、スバル……。俺だ俺……。」

「翔太郎さん？ 何ですかその姿！？」

「それに他のお二人は……。」

「安心しろよ……。味方だ。」

「ど、どうも……。」

「よっ！」

オーズは二人にお辞儀、フォーゼは軽く手を上げる。

二人も軽く頭を下げる。

「と、とりあえずスバルにティアナ、なのはさんを頼む。」

「え？ 翔太郎さんは？」

「……………アイツを倒す。任せて……………大丈夫か？」

「……………はい！」

「はい！」

スバルとティアナは大きく返事をし……………。

「必ず……………帰って来てくださいね。」

「おう。」

スバルとWは拳を合わせた。

「……………行くぜ！」

「はいっ！」

「…っおう」

三人の仮面ライダーは先程真タイラントが開けた穴に向けて走り出す。

走りながらWのクリスタルサーバーは光輝きゴールドエクストリームになる。

そしてWとオーズは翼で、フォーゼはロケットモジュールを駆使し三人はタイラントが開けた天井からゆりかごを脱出した。

「翔太郎さん……。」

翔太郎を案ずるスバルの肩を叩くのはティアナ。

「わかってんでしょスバル。今私達がするのは……。」

「うん！ 行きましようなのはさん！」

「うん！」

スバルとティアナ、ヴィヴィオを抱き背中にクアットロを背負ったなのははゆりかごを後にした。

「こうなれば俺自らの力をぶつけてこの世界を……。」

空に向けて飛んでいく真タイラントだが……。

「「そうはさせねえ（ない）！」「」

「！」

後ろからの声に気づく。

「貴様らぁ……。」

そこには真タイラントの後を追いかけてきたWとオーズとフォーゼが迫っていた。

「……いい加減に……。」

真タイラントが手をかざすとゆりかごすら凌駕する程の巨大な光球が作り上げられる。

「くたばれえええええ！」

そのままその光球を三人に投げつける。

「ま……まじかよ！」

「でもあんなのが地上に当たったら……。」

「俺達で止めんぞ！」

フォーゼはロケットモジュール、オーズはスピナー、Wはビッカーを盾にし光球を止めるが……。

「ちよ！ なんなんだよこの重さ……。」

「なんて力……だ……。」

「くっ……。そのままじゃ……。」

三人は徐々に押され始める。

光球からのエネルギーが徐々に仮面ライダー達に傷をつけていくが・
・。

「こんな……。ここで負けなるか！」

「ああ……。僕たちは負けない！」

「はい！ この力は……。あいつと……。助けるために何処までも伸ばす手だから……。力だから……。」

「まだ学園全員と友達と友達になれてねぇつつうのにこんなとこで・
・。」

「「「負けるかあああああああ！」「」「」
する。」

「仮面ライダー　　！」

「「「「！」「」「」

三人が振り向くとそこにはへりから声をあげるスバルが。

「スバル……。」

更に……。

「仮面ライダー！」

なのはにティアナ……。

「かめんらいだあ〜〜！」

ヴィヴィオも叫ぶ。

「仮面ライダーアアアアア！」

「仮面ライダー！」

モニターに仮面ライダーを応援する声をあげる人々。

「仮面ライダー！」

フリードに乗りながらエリオとキャロも叫ぶ。

するとへりや街、多くの場所から光がWの手のひらに集まる。

「これは……。」

「それは……。」

「すっげえ……。」

オーズとフォーゼもその光の圧縮を眺める。

光は徐々に物質となる。

その物質は……。

「メモリ？ B？」

ガイアディスプレイにBと描かれた金色のメモリになる。

「これって……。」

「恐らくは人々の思いが光になり僕達に力を……、勇気をくれる
！」

「勇気……、ブレイブ！」

『ブレイブ！』

「何！ ブレイブだと！ 存在しないはずが……。」

真タイラントはインフィニティとは違った架空であるはずのものに
驚く。

「さっそく……使わせてもらっぜー！」

『ブレイブ・マキシマムドライブ!』

Wがマキシマムスロットにブレイブメモリをスロットする。

するとブレイブメモリから金色の光がW、オーズ、フォーゼを包み・
・・。

「おっ・・・なんだこれ？」

「凄い・・・力が・・・。」

三人の全身は金色に輝く。

「馬鹿な・・・。ブレイブなど俺が勝手に作った嘘まやかしなはず
が・・・。」

「それが嘘じゃなくなったってことだ。」

「何・・・。」

Wの言葉に真タイラントはおののく。

「人は間違えるし時に争いあうかもしれない。」

フォーゼはロケットモジュールに力を込める。

「それでも思いが・・・、意思が一つになれば例えどんな困難でも
覆せるしどんな奇跡だって起こせる。」

オーズも徐々に押されていた力を逆に押し始めスピナーにエネルギー

―を貯めていく。

「それが本当の人の強さだ!」

Wも右手に金色の力を纏う。

そして三人、ブレイブリミテッドとなった三人は……。

「たああ!」

「せいやあ!」

「おらあ!」

光球に一撃を叩き込み巨大な爆発と共に消滅させる。

「何だと……。」

「そろそろ決めるぜ……、タイラント!」

驚く真タイラントに三人は持ち直す。

「望む……、所だ!」

『タイラント・マキシマムドライブ!』

『ロケット・ドリル・リミットブレイク!』

『スキヤニングチャージ!』

『エクストリーム・マキシマムドライブ!』

みなが必殺技を構える。

そして……。

「はあああああああ！」

タイラントのマキシマム、タイラントベルバイトと……。

「たあああああああ！」

「せいやあああああ！」

「おりゃあああああああ！」

Wのブレイブエクストリーム、オーズのプロミネンスドロップ、フオーゼのロケットドリルキックという三人の必殺キックがぶつかりあい……。

空中に広範囲な波動を放ちながら巨大な爆発が起こった。

「……………」

森の中で目覚める葬。

「そうか……。俺はあの死んだのか……！」

すると歩いてくる人が一人。

「……………なんでお前が……………」

葬はその女性を知っていた。

「何だか変だけど迎えに来たの……………翔太郎……………あなたなら私はどこまででも……………」

「……………俺は数えきれない程の罪を犯した……………お前のいる天国にはしばらくいけない……………」

「私も一緒に行かせて……………」

「……………でもお前……………」

「心から愛してる貴方だからこそ一緒にいたい……………これはただの私のわがままだから……………」

「……………すまない……………」

「謝らないでよ翔太郎……………」

「……………悪いな……………」

「うん……………」

二人は手を繋ぎ森の中を歩き始める。

過去／勇気（後書き）

ラストバトル用語

ブレイブメモリ（B・金色）：

「勇気の記憶」が内包されたガイアメモリ。本来はインフィニティの存在意義を薄くするために葬が仕込んだ幻だったがラストバトルの際、人々の祈りと仮面ライダーの勇気が呼応し生成された。ダメージ回復に加えW、オーズ、フォーゼをブレイブリミテッド化させる力を持つ。

ブレイブリミテッド：

ラストバトルで全身が金色になったW、オーズ、フォーゼの特殊強化形態。

基本スペックの上昇に加えそれぞれの心身の強さにより未知のスペックが追加される。

トライブレイブエクストリーム：

ブレイブリミテッドが発動した三人による破壊力のトリプルライダーキック。

過去／未来（前書き）

前回上がり上がったボルテージを下げないか心配です。

とりあえずは頑張りました。

過去／未来

なのはやスバルが待つ地上に降り立つW、オーズ、フォーゼ。

「終わったぜ。」

Wは指をスバル達に向ける。

スバルたちも安堵の表情を浮かべる。

「なんとかになりましたね。」

「ふう……。これであんたともダチだな！」

「おう。」

フォーゼとWは挨拶を交わす。

すると。

「……………あれ？」

「もう時間かよ。」

オーズとフォーゼが徐々に消えていく。

「お前ら……、世話かけたな。」

「いえいえ。気にしないでください。ライダーは助けあいですし、

俺はまたオーズになれて嬉しかったです。」

「俺も俺も。なんせ俺は全てのライダーと友達になる男だからな。」

「おう。頑張れよ。えっと……。」

「あ、ご紹介が遅れました。映司です。火野映司。」

オーズは手を伸ばす。

「左翔太郎だ。また助けてくれてありがとな……、映司。」

Wも手を伸ばし二人は握手を交わす。

「ああ、いえいえ。」

オーズも若干照れる。

すると。

「「！」「」

たまたまオーズはなのと目が合う。

「「……」

「ど……ど……」

「ど……」

二人は軽く頭を下げる。

そしてオーズとフォーゼ、二人のライダーは光になり本来の世界へと戻っていった。

「なんかあったな……。」

「はい……。」

スカリエッツィのアジト外で後藤とフェイトは自爆を止め抜き空を眺めていた。

すると。

「後藤さん!」

「!」

後藤の身体も徐々に消えていた。

「時間みたいだ……。」

「もうお別れなんですか……。」

「ああ。俺は本来この世界にはいない……。今回もある通りすがりの力で一時的に来られただけだ。」

「そう……ですか……。」

途端にフェイトは憂鬱な表情を浮かべる。

すると後藤はゆっくりとフェイトに歩み寄り頭を撫でる。

「後藤……。」

「慎太郎でいい……。名前を呼ばれるのはあまり好きじゃないがお前ならな……。」

「慎太郎さん……。」

フェイトは涙目になる。

そして頭をあげるともう後藤はいなかった。

「……。」

空を見上げるフェイト。

しかしその表情は涙目ながらも笑顔であった。

エリオとキャラコが飛んできたのはこのあと数秒後だった。

「ししよ　　！」

「……。」

「来人に克巳？　なんでお前らが？」

Wの元に来人と克巳が走って来る。

「あれ？　なんで僕が……。」

Wの右の副眼が克巳を指差し光る。

「何がだ？」

「いいや。なんでもない。」

「師匠、その姿が……。」

「ああ。これがWだ。見るのは初めてだったか？」

「はい……。」

「緑と黒の間がクリスタルとは……。独特なものもいたもんだな……。」

来人と克巳はWを珍しそうに眺める。

すると。

「！」

来人はなのはの影で恐る恐る自分を見るヴィヴィオを見つける。

「師匠、あの子って……。」

「あ？ ああ。ヴィヴィオだ。」

「ちっさ！」

「あたりめえだろ。四年前なんだから……。」

「あゝあ。確かに。小さくて可愛いな〜〜。」

来人は手招きをするとヴィヴィオが恐る恐る歩いてくる。

来人はしゃがむとヴィヴィオの頭を撫で始める。

ヴィヴィオも戸惑いつつも来人が優しい人間と認識したのか笑顔になっていく。

すると。

「……あ。」

来人は自身の身体が徐々に光になってきていることに気づく。

「？ あ……。」

ヴィヴィオはそんな来人に頭を傾げる。

「さよならは言わないよヴィヴィオ。またいつか会えるから。」

「そーなの？」

「うん　だからまたいつか会おうね。」

「うん。またいつか。」

来人は優しくヴィヴィオの頭を叩く。

そして……。

「それでは師匠、先に戻ってます。」

「……………」

来人と克巳は光になって現代のミッドへと戻っていった。

その時、W達は宇宙でゆりかごが局の戦艦により撃破されたのを見た。

「終わったか……………」

「せやな……………」

ヴィータをお姫様だっこするアクセルブースターは上空ではやてと宇宙で爆発するゆりかごを眺めていた。

「離せ！　離せよコラー！」

アクセルブースターの手元ではヴィータがあくも……………。

「そんなこと言ったらあかんよヴィータ。うちが変わって欲しいくらいなのに……。」

「……。」

ちよろつと本音を言ったはやてに二人ははやてをジトツと見る。

アクセルに関しては顔はわからないが……。

「と、とりあえず竜さん……。」

「？」

「事件も終わったし……ちよ、ちよつと今度お食事でも……。」

「……悪いな八神……。それは出来ない……。」

「なんで……。」

「もう帰らなければならない……。」

「……。」

はやてとヴィータはアクセルブースターの手が徐々に光になっていくのを確認する。

「手が……。」

「竜さん……。」

「俺達は本来この時代にはいない存在……。俺達がいなくなった後歴史は修復されお前達は本来の歴史を辿る。俺達と会った記憶や俺達の痕跡は跡形もなく消える……。」

「何だつて……。」

「……せやつたら今までのこと皆忘れてしまっくん？」

「ああ……。」

「いやや……。いやや……。うちは竜さんと離れたくない！頼むから一緒にいて欲しいんや！お願いや……。うちの一生のお願いや……。」

「……。」

「……お願いや……。」

はやては涙を流し始めるがアクセルはその涙を拭う。

「そのお願いは未来で聞こう……。お前が覚えてなくても俺が覚えていよう……。これは契約なんかじゃない……。れっきとした……。約束だ。」

「約束……。」

「ああ……。いつか未来で……。はやて。」

「……。いつか……。未来で。」

笑顔で顔を上げたはやての前からはすでにアクセルは消えていた。

そして市街地ではWにもその現象が現れていた。

「翔太郎さん……。」

スバルはなのはやティアナの前でWと向き合う。

「悪いなスバル……。もうお別れだ。」

「約束は……。あの時の約束は……。」

「……。」

「……。わかってます。自分勝手だって……。」

「……。あのなスバル……。」

「私……。覚えてますから。例え頭では忘れてても心で……。」

「知ってたのか？ あのこと……。」

「翔太郎さんも守ってくれますか……。約束……。」

「……。未来で果たすからな……。その約束……。」

Wはスバルを抱き寄せる。

「破ったら承知しませんからね……。」

「上等だ……。未来で待ってるからな。浮気すんなよ。」

「はい……。」

スバルが返事を返したときにはWはもういなくなっていた。

「翔太郎さん……。」

なのはとティアナに肩を叩かれながらもスバルは空を眺めていた。

真っ白な空間には翔太郎とフィリップの二人のみ。

「まーたお前に苦労かけちゃったなフィリップ。」

「なに……。いつものことさ……。」

「お前……。言ってくれんじゃねーか。しばらく見ねーうちに大人になりやがって……。」

「ふふふ。君を追いついちゃったかもよ?」

「ああん?」

「冗談さ翔太郎……。僕は君を越えられない……。僕に君の代わりは一生勤まらないよ。なんせ君は君、仮面ライダー……。左翔

太郎だからね。」

「……俺もだ……。お前がいねーと俺は弱い……。」

「忘れたかい翔太郎？ 人はみな……。」

「……完全じゃない……。」

「僕だって完全じゃない……。今だって風都があるから……、皆がいるから戦えてる……。守るもののためなら……。」

「ああ、フィリップ……。俺達はいくらでも強くなれる。それが……。」

「風都のみんなが僕達に与えてくれた仮面ライダーの名前の意味……。僕はこれからも風都で戦うよ。君の分も背負って。でもどんな時でも僕の相棒はただ一人……。」

「……それはこっちの台詞だぜ……。」

二人は拳を合わせる。

「さよならは言わねえぜ……。」

「互いに信じていればまた会えるからね……。」

「ああ……。」

「」「相棒……。」

二人はすれ違い対局に歩き始める。

すれ違い際に互いの手の甲をぶつけあいながら。

「なあ三童……。」

「俺に質問するな……。」

「僕も聞きたいんですが……。」

「俺に質問をするな……。」

「……言える立場がお前……。」

「……好きにしろ……。」

「じゃあ質問するが……、なんで俺らは海のご真ん中にいんだ
だ」

翔太郎、竜、来人、克巳はミッドの海のご真ん中に漂っていた。

彼ら曰く気が付いたらここにいたらしい。

「そんなこと俺が知るか……。タイムメモリに聞け……。」

「メモリが答えるか！」

翔太郎と竜に対し……。

「冷たくて気持ちい……………」

「……………気楽すぎてもはや言葉すら……………」

お気楽な来人に克巳は頭を抱えていた。

すると。

「！なんだこりゃ。」

翔太郎は胸のポケットに何かが入っていることに気づく。

そこには……………」

「……………そういやあ……………」

過去のクラナガンでスバルと二人きりで撮ったプリクラの写真は入っていた。

「……………ちゃんと約束は守っからな……………」

翔太郎はスタッグフォンを開く。

そしてディスプレイにプリクラを貼る。

まだ幼さが残る頬がほんのり赤いスバルと自分が写っている写真を。

その後四人は管理局により救出され、四人は救助艇内で爆睡してい

た。

その前に翔太郎は一言スバルに言った。

” 次の休みは空けとけ” と。

数日後。

「こんなんであえんちゃいます?」

「ああ……。いいんじゃないのか?」

はやてと竜はショッピングモールで買い物をしていた。

買うものは竜の日用品。

竜が正式に八神家に住むことになったためである。

「せやけんど竜さん、なんで帰ってきた途端うちを名前て呼ぶようになったん?」

「嫌なら辞めるが?」

「いやいやいや! イヤやあらへんよ! ただ……。」

「ただ?」

「なんか照れてもつて……。」

「……なら八神でいいか……。」

「！ イヤやイヤや。名前がい〜い。」

はやては竜にだだをこねる。

竜はそんなはやてを微笑むと先を歩く。

「買ったものはまだ残ってる。さっさと行くぞ。……はやて……。」

はやてはドキンとしつつ……。

「はあ〜い」

満面の笑みで竜の後を追い掛けた。

「……。」

「……な、なんでうちのととと隣に……。」

アリーナの最前列に座る克巳と一昨年の優勝者、ジークリンデ・エレミアが。

「空いてたし近いからだ……。」

「ま、まあそ、それは……。そ、そういえば葵炎さん……。」

「何だ？」

「ば、番長やヴィクターとは何処まで……。」

「何処までとは？ 別に休日とかならたまにはハリーと遊びには行くが……。」

「そ、そうですね……。」

「？」

「いえいえいえ……。こっちのことです……。」

「……とりあえずはジーク……。」

「な、なななななに？」

「……今年頑張れよ……。」

慌てふためくジークのポップコーンを克巳は一掴みし自身の口へ運んだ。

「……は……はい」

ジークは笑顔で答える。

「じゃあ俺は行く……。第六感で面倒なのが三人来そうなんだな。」

「？」

頭を傾げるジークをよそに克巳はその場を立ち去る。

ちなみにその後ハリー、ヴィクトリア、シャンテが口喧嘩をしながら現れた。

ある意味のライバル達が揃いに揃っていた。

「~~~~」

家の中で本を読んでいるヴィヴィオ。

すると玄関のベルが鳴る。

「ヴィヴィオお願い~~~~い。」

「は~~~~い。」

手が離せないなのは代わりにヴィヴィオが玄関に向かいドアを開ける。

「は~~~~い。どちらさま。。。ま。。。。」

「こんにちはヴィヴィオ。。。。」

そこにいたのは来人であった。

「ど、どうしたんですか？」

「うちの家族が旅行から帰ってきてね。これおみあげ。マカデミアナッツ。」

「あ、ありがとうございます……。」

ヴィヴィオは来人からおみあげを受け取るが……。

「どうかしました？ まさか私の顔になんかついてます!？」

来人がやたらと顔を見つめるので恥ずかしさ反面にテンパリながら聞く。

「4年前と変わんないねヴィヴィオは。」

「はへ？」

「なんでもないなんでもない。それじゃあね。」

「？ あ、あの来人さん……。」

「？」

「これからの予定とかは……。」

「とりあえずはアインハルトやミウヤリオやコロナの家におみあげを届けに……。」

「ちょ、ちょっと家が上がっていきませんか？」

「？でも迷惑じゃないかな？」
すると。

「あゝ来人君。こんにちは。そんな所にいるのも何だからヴィヴィオ、上がってもらったら？」

ヴィヴィオの背後からはなののある意味の援護射撃。

「駄目ですか？」

そしてヴィヴィオ自身も男が逆らえないのは直伝の秘密の作戦、『上目づかい+涙目』を早速実行する。

「じゃ、じゃあお言葉に甘え……。」

するとヴィヴィオは満面の笑みになりつつ……。

「ささっ　こっちこっち」

来人の服の裾を掴み共に家の中へと入っていった。

「翔太郎さんこっちこっち」

結婚式で教会から多くの人々から祝われ新郎新婦が歩いてくる所を見る翔太郎とスバル。

「お〜〜。なんかすげえなあ……。正面からってこんなふうになるのかあ〜〜。」

「こ、今度は私達があそこから歩いてくるかも……。いや、歩いてくるんですよ?」

「お前がドレス……。ぷっ。」

「な、なんですか今の笑いは!？」

「なんかお前がドレスってなんか似合わなくねえか?」

「ひど〜〜い!」

「わりいわりい。冗談だよ冗談。」

「それに私が一番望んでる未来は……。」

「?」

「翔太郎と一生ツーマンセルで一緒に人生走って行きたいんです。」

「……。俺の相棒はあいつ一人だけだぜ?」

「代わりは勤まりませんが私は翔太郎さんを支えて行きたいです。……一人の女として、……妻として。」

「……。逆プロポーズかよ。」

「前は翔太郎さんからだったので……。」

スバルは徐々に翔太郎に近づく。

そして目を閉じもう少して唇と唇が触れようとした時……。

「！」

スタッグフォンが鳴り出し翔太郎はスバルのキスを避けてしまった。

「しよ、翔太郎さん？」

しかし鳩の豆鉄砲を喰らったようなスバルに対し……。

「わり、スバル。招かれざる客だ。」

翔太郎は走り出す。

「ちよ、翔太郎さ……ん！」

すると翔太郎は走りながら振り向き……。

「スバル！俺はこれからも守っていくぜ。この世界も……、お前も！」

「……はい！」

スバルは戦いに向かう翔太郎の背中を見送り続けた。

「見つけたぜ、ドーパント！」

街で暴れているドーパントは新たに現れた翔太郎に視線を移す。

「てめえみてえな悪は許さねえ。この街をこれからも守り続ける・・・
・仮面ライダーがな！」

『ジョーカー！』

「変身！」

翔太郎は漆黒の装甲に覆われ、仮面ライダージョーカーに変身する。

「変身！」

『サイクロン！』

ミッドではない各所に風車が回る街でドーパントの前に立つ仮面ライダーサイクロン。

「君は今でもこの街を・・・この風都を思い続けている。ならば僕は・・・君の思いも背負って・・・この街に涙を流す者へこの言葉を投げ掛けていくよ・・・」

風都ではサイクロンが右手を、別所のミッドではジョーカーがスナップさせた左手を……。

「「ああ……。」」

それぞれ指をドーパントに向け、師匠から受け継ぎ、幾度となく相棒と共に投げ掛けてきた言葉……。

そして離れ離れでも信じあう永遠の相棒への思いを込め、あの言葉をドーパントに投げ掛けた。

「「お前の罪を……、数える！」」

過去／未来（後書き）

今回で二章は終了しました。

ご愛読して頂いたみなさん、ご感想を頂いたみなさん、ありがとうございます！

とりあえず作者、調子に乗って三章いきます！

三章からはWのライダー以外に最低でも二人増えます。

とりあえず次回からは特別偏へ。

では次回！

特別編・ギャグ短編集(前書き)

名前の通りのギャグ集です。

いろいろキャラ崩壊があるかもしれませんが暖かい目で。

みのもん 「ファイナルアンサー？」

竜 「俺に質問をするな……。」

タモ 「じゃあ明日来てくれるかな？」

竜 「俺に質問をする……。」

リュウタロス 「いい？」

竜 「俺に質問をするなあ！」

リュウタロス 「答えは聞いてない。」

はやて 「まるで会話が成り立たないやないかい！」

スパーン！

・アインハルトの妄想

アインハルト 「そういえば来人さん……。」

来人 「？」

アインハルト 「大人の姿の来人さんってあまり見ませんが……。」

来人 「普段戦う時に瞬時になるからね。」

アインハルト 「大人の来人さん……。」

～妄想中～

大人来人「お前は未来永劫僕のもんだ……。心も……。そして……身体もな……。」

~~~~~

アインハルト「……………（ブホッ）」 鼻血を出して悶絶

来人「ちよっ！ アインハルト!？」

・裏取引

?「どうっすかリーダー？ この写真……………」

?「おま……………。相変わらずすげえな……………」

?「あたいの手にかければ……………。でおいくらで?」

?「こゝ、こんなんで……………」 電卓を見せながら

?「オツケーっす……………。ではこれがブツっす……………」 封筒を渡す

?「（ドキドキ……………）」 封筒の中には合成写真により様々な服装になった克巳の写真が大量に

?「しっかしリーダーもすきっすねえ。」 写真をにやにやしなが

ら見るハリーににやけながら見る

~~~~~別所~~~~~

克巳「(ぞくっ)」

・下ネタ

翔太郎「俺のスペリオルビツカーでお前をエクストリームにしてやるぜ？」

竜「俺のエンジンブレードがお前の中で火を吹く。さあ・・・おれがお前を振りきらせてやる。」

~~~~~

スバル「はやて「……………」」 妄想中

スバル「もう翔太郎さんったら…………。エクストリームなんて…………。もつと上がいい…………。」

はやて「ええよええよ…………。なんならうちの中にマシンガンスパイクでも…………。」

翔太郎・竜「……………はあ……………」

・悩み

ミウラ「ボクって男の子によく見られるんだよねえ……。」

来人「そうかなあ……。まあ僕も初めてミウを見たときはそう思ったかな……。」

ミウラ「ひどいよ来君！　ボクだって女の子なんだからね！」　パ  
ンツを一気に脱ぐ

来人「……………（ブホッ）」

ミウラ「……………あ……………来君のエッチい！」　顔を赤く  
しながら抜刀の蹴りを来人に叩き込む

来人「ちよつ、理不尽んんんん！」

・成立？

ジーク「そういえば葵炎さん、うちのポップコーン食べましたよね  
え？」

克巳「……………それがなんだ……………」

ジーク「だ……………だつてか……………かかか関節キスに……………」

克巳「……………なんで……………」

ジーク「えっ？」

ジーク・克巳（口に投げる　口をつけない　触れ合わない　関節キ

ス不成立)

ジーク「……………はぁ……………」

克巳「何を落ち込んでいる？」

ジーク「なんでもありません……………」

・まるでパトラツ ユ

>朝<

シグナム「よし竜。私と模擬戦だあ！」　ちなみに竜が八神家に泊まるようになってから毎朝

>昼<

シヤマル「どうですか竜さん！　私の料理……………おいしいですよ  
ねえ」　毎日昼に味見させる

>夜<

はやて「竜さぁぁぁぁん！　今晚こそはうちを女にしてえなぁぁ  
ぁぁぁ！」　毎晩迫ってくる

>居酒屋<

竜「……………お前だけが俺の味方だ……………」

ザフィーラ（人型）「……………まあ飲め。おやつさん、こいつに一本……………」

・ 事實は小説より奇なり

来人「……………ふう。ようやくIS読み終わったあ。しかし主人公の人すごいなあ……………こんなに女の子に好かれるなんて……………」

ヴィヴィオ・アインハルト・ミウラ「……………」

来人「これがハーレムっていうんだろなあ……………」

三人「……………」

来人「まあやっぱり小説だから実際こんなハーレムにはならないよね普通……………」

三人（……………気づいてない……………自分がおんなじような立場なこと……………）

・ 過剰反応

フェイト「エリオ、次はそつちをお願い出来る？」

エリオ「はい！……………あれ？ 肉じゃがって次は何を入れるんだつたっけ？」

キャロ「えつと次は……砂糖だね。」

フェイト「後藤!？」

エリキャロ「……砂糖ですよフェイトさん。」

フェイト「ああ。聞きまちがえちゃった。」

フェイト（でもなんで後藤っていう言葉に過剰反応しちゃったんだろう……）

・一人身

なのは「なんで私って男つ気ないんだろっ……。スバルやティアナ、はやてちゃんにヴィヴィオまで……。」

レイジングハート「きつと高根の花で手を出しづらいのでは？」

なのは「嫌だよ私は。そんなことで一生独身は……。こうなったら脅してでも……。またはどっかいい男を規制事実で……。」

レイジング「頭を冷やしてくださいマスター。きつといい方が現れますよ……。」

なのは「良ければ早めがいいなあ……。そんでもって私なしだと生きていけないぐらいに心も身体も調教……。」

レイジングハート「……一旦精神科に行かれては？」



> 別所<

? 「ふえつくしよん!」

・ 過去を振り返り

フィリップ「いろんなことがあったね翔太郎……」 過去の報告書を読むフィリップ

フィリップ「……………ん! ……んんん?」 異常を発見

フィリップ「ふう……………翔太郎……………母音が間違ってるよ……………」  
「ローマ字の報告書の中で母音の間違いを発見

> 別所<

翔太郎「……………あ。また間違えた。」 モニターに向かい字を入力中にまた同じ間違い

・ 一人だけ

来人「そういえば仮面ライダーの中で僕だけバイクに乗れないんですよね……………」

竜「しかしまだ13では免許は取れないだろう……………」

来人「はい……………そういえばアクセルってバイクになれるんですよね?」

竜「ああ……。」

もしかしたら……  
来人

~~~~~

サイクロン「さあ……振りきるぜ！」 アクセルのバイクフ
ォームに跨りながら

~~~~~

アクセル「……何やら腹の中がイライラするんだが……。」

来人「スイマセンスイマセン！ だからブレード下ろしてください  
ああああい！」

## 三章 プロローグ（前書き）

三章プロローグです。

結構オリジナルが・・・。

### 三章 プロローグ

タイムメモリとディメンジョンメモリ……。

暴牙葬が使ったこの二人のメモリ、時間と次元に影響を与えた二つのメモリは有らぬ所に影響を及ぼした。

ここは地球・今から800年前。

とある部屋にそれぞれ単色のロープに仮面をつけた四人の人間が円形のテーブルを囲みある物を作っていた。

五色各三枚、計十五枚のメダルはそれぞれ刻まれたレリーフが違う金枠のメダルやすべて銀色でX字が刻まれたメダル。

そしてテーブルの真ん中には枠が銀色で他のメダルとは一線を描いた力を感じられる三枚のメダル。

そして同じテーブルには三つの円形のスロットが設けられた謎の機械が置かれていた。

すると。

「「「「「！」「」」」」

突如空中に巨大な穴が現れる。

その穴の吸引力は凄まじくロープの人物達、四人の錬金術師は周りのものにしがみつく。

そして数秒後穴は消え、錬金術師達は起き上がる。

すると彼らはあることに気がつく。

テーブルにのっていた銀枠の三枚のメダルと金枠の十五枚のメダル、数枚の銀色のメダル、そして三つのスロットがある機械が消えていた。

彼らは辺りを探すも見当たらない。

そもそもあの金枠のメダルとあの機械は彼らを集めた”王”の目的”神に近い力を得る”という目的のために作られた。

しかしそれも今はない。

そこで彼らは失った分の金枠のメダルと例の機械と全く同じ物を作り、このことは他言無用とした。

後に各十枚存在することとなる”コアメダル”と”オーズドライバ”を。

これで彼らが共有する秘密は神と同等の力を秘めた銀枠の試作型メダルを加え二つ目となった……。

そして穴に吸い込まれたメダル達はとある世界へと行き着き、三つの道を辿る。

一つは偶然ある村に住むある青年の元に。

一つは例の機械と共にある村近くの崖に。

そしてもう一つは次元の歪みの中で自ら自己理解、自己進化してゆき……。

この日失ったメダルは……。

タカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バッタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウナギ、タコがそれぞれ一枚ずつとセルメダルが数枚……。

そして今だに謎が多い銀棒の三枚のコアメダル……。

## 出会いと危機と初変身（前書き）

三章一話です。

まだこの携帯には慣れません。

ちなみにMOVIE大戦には翔太郎とフィリップも登場するので今から楽しみです。

## 出会いと危機と初変身

夜のジャングル。

そこには今鳥の鳴き声や森林が風により葉をかすめあつ音のみが響く。

しかしそんな沈黙は一瞬で壊される。

「おらぁあー！」

「ぶっ！」

ジャングルの中でぶっかかりあつ二つの影。

「いい加減捕まれつつうの！ ガイアメモリ販売のバイヤー、ゾル  
「！」

「そついうわけにはいかないなあ！」

片方の異形の怪物、ウルフードーパントは仮面ライダージョーカーからの拳を受け止めるが……。

「おらぁあー！」

瞬時に切り替えたジョーカーの膝蹴りから拳のラッシュが放たれ……。

「ぐおっ！」



ウルフドーパントは吹き飛ばされる。

「そろそろ……、終わすか。」

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

ジョーカーはマキシマムスロットにジョーカーメモリをスロットし  
・・。

「ライダー……キック!」

跳躍しウルフにライダーキックを放とうとするが……。

「させるかあ!」

ウルフは指の先端からマシンガンを放ちジョーカーを攻撃……。

「がっ!」

ジョーカーはライダーキックを放つ前に叩き落とされる。

「しかし……さすがに仮面ライダーと真つ正面からやりあつ  
のは無が悪いな。ここは逃してもらつ。」

ウルフは地面に発砲、周囲には煙が立ち土が散らばる。

「! 待てコラッ!」

ジョーカーは煙の中へと飛び込んでいったがそこにはすでにウルフ

はいなかった。

「……逃げ足のはええ野郎だ……。」

ジョーカーはドライバーを閉じジョーカーメモ리를抜き取り変身を解除、左翔太郎へと戻る。

すると。

「翔太郎さん！」

翔太郎の後を追ってきたバリアジャケットのティアナが息を切らしながら追いついた。

「おせえぞティアナ。もうちつとはやく……。」

「翔太郎さんたちが……はあはあはあ……速すぎるんですよ……。」

「ああ。そうか。それとわりっ！ 逃がしちゃった。」

「いえいえ……。私の方もすいません。広域指名手配されている次元犯罪者ゾルがまさかガイアメモリにまで手を染めてるってことで急遽協力してもらっちゃって……。」

「大したことじゃねえさ……。とりあえずそれなりにダメージは追ってるからしばらくは動けねえだろう……。今日は休んで明日近くの村で話を聞いてみるか……。」

「ですね。」

二人はその場を立ち去っていった。

炎が辺りにうごめく中、光る目が二つ……。

”その者”はまがまがしい容姿に加え、獣のような雄叫びを上げる。

”その者”はただ炎の中を歩いていく。

その先には頭にソフト帽を被った青年。

青年は”その者”を呼ぶが、首を掴み上げられる。

そして鈍い音が青年の首から鳴り、青年は静かになる。

そして”その者”はその青年を投げ瓦礫に叩き付けると”その者”は天に向け猛々しく雄叫びを上げた。

~~~~~

「はあ……。またこの夢かぁ……。」

夢から覚める青年。

いくら温暖な地域とはいえ格好はカラフルなトランクス一長という
なんとも独特な姿である。

「なんだか最近よく見るよな〜」。……まあいいや。とり

あえず今日も頑張ろう」

青年はベッドから起き服を着る。

横には以前までこの村にいた知り合いが作ったバイク、ライドベンダーが置かれているその部屋を青年、騎野映司は後にした。

「まさかこの村にゾルが……。」

「何事も捜査はコツコツやるもんだ。探偵だったところが懐かしいぜえ……。」

「……私は執務官です……。」

「おんなじようなもんだろ？」

「ま、まあ……。」

翔太郎とティアナは翌朝、戦いの近くにあった村を歩いていた。

「そついえば翔太郎さん……。」

「あ?」

「あの後スバルとはなにかありました?」

「え!?!?」

「過去から帰ってきてスバルとは……。」

「……と、とくにはなにもねえよ……。」

「相手してあげたらどうです？ 多分スバル欲求不満ですよ？」

「ま、まあ帰ってきたら考える……。とりあえず今は聞き込みだ。」

「

「ですね。別れて……。」

「おう。」

二人は解散し聞き込みを始めた。

「そうつすか……。ありがとございました。」

翔太郎は軽く頭を下げと村民と別れる。

「なかなか手がかりがねえな。」

翔太郎がため息をはくと……。

「うおっ！」

「うわぁ！」

翔太郎は青年とぶつかる。

「いつつう。わりいわりい。ぼーっとして……た……。」

翔太郎は転んだ青年に手を伸ばしながらも啞然とした。

目の前にいる青年は……。

「いえいえ……。こちらこそすいません。よそ見してて……。」

その青年、騎野映司は手を掴む。

「お前は……。」

「？ 何処かで会いました？」

映司は頭を傾げる。

(こいつ……。映司じゃねえのか？ だとしたらこいつも葵
炎や三童みてえな……。)

「あんた……。名前は？ 俺は左翔太郎……。」

「あ、俺は騎野映司って言います。」

「……。そうか……。なあ騎野……。」

「はい……。」

「あんたオーズに関しては……。」

「オーズ？ 何ですかそれ……。」

（やっぱりこいつは俺が会ったオーズとは違った……）

「いや。なんでもねえ……。」

「？」

すると。

「翔太郎さあ……ん！」

ティアナが駆けつけてきた。

「どうしたティアナ……。」

「ジャングル奥でゾルを見かけたって情報が……。」

「！ わかった……。」

翔太郎はティアナと共に走り出す。

「……何だっただらう……。」

映司は啞然としていたが……。

「……なんかほっとけない！」

二人の後を追いかけた。

「そこまでだぜ……。ゾル！」

「！」

ジャングル奥でゾルに翔太郎はジョーカーマグナム、ティアナはミラーージュを構えていた。

「てめえの敗けだ……。」

「諦めてメモリを渡してください。……そうしなければ……。」

「そうしなければ？」

『ウルフ！』

ゾルはウルフメモリを首筋のアダプタにスロットし狼の遠吠えと共に狼男のようなウルフドーパントへと変身した。

「下がってる……。」

ティアナが下がるのを確認し翔太郎は腰にロストドライバーを巻く。

『ジョーカー！』

翔太郎は左手でジョーカーメモリをスロットし右手を握る。

「変身！」

『ジョーカー!』

そして左手でドライバーを展開すると翔太郎の身体を風と黒い装甲が覆い、翔太郎の肉体を黒い仮面ライダージョーカーへと変化させた。

「行くぜ?」

ジョーカーは手首をスナップさせウルフに突っ込む。

「おらぁあ!」

そしてウルフに右ストレートを放った。

「なんだよあれ……。」

二人の後を追う木の陰に隠れた映司は目の前で繰り広げられる戦いに息を飲む。

「さっきの人が……仮面……ライダーだったなんて……。」

映司はふと自分の手の平を眺める。

「あんな力が俺にもあったら……。」

しかし運命は皮肉にも近づいていた。

「おらぁあー！」

「ぐおっ！」

ジョーカーはウルフを殴り飛ばす。

「はぁ．．．はぁ．．．はぁ．．．はぁ．．．。やはり強いな．．．。」

「わかつたらメモリを渡せ．．．。」

「．．．．．わかつた．．．．．なんてな。」

「！」

ジョーカーが構えるのも遅くウルフは指先から弾丸を高速で連射、
ジョーカーから火花が散る。

「ぐー！　　があー！」

ジョーカーが膝をつくと．．．。

「いくら力があるうが中身がそれではなあー！」

「翔太郎さん！」

するとウルフは叫ぶティアナを見つけ．．．。

「！　　ー！」

「きゃ！」

「！ ティアナ！」

ジョーカーの前にはティアナを捕まえ脇腹に爪を突き立てるウルフ。

「コイツを助けたければ変身を解け。」

「何！？」

「！ 駄目です翔太郎さん！ 変身をといたら……。」

「お前は黙っている……。」

「…… ティアナは解放するんだな。」

「！ 翔太郎さん！」

「心配すんなよティアナ……。お前はスバルの大切な親友だ……。なら俺にはお前を命がけで守る義務がある……。」

ジョーカーはドライバーを閉じメモリを抜き変身を解除、翔太郎に戻る。

「…… さつさとティアナを放せ……。」

「…… ああ……。」

ウルフはティアナの脇腹から手を離れた……。

その途端。

「・・・・・・・・なんてな。」

「「！」」

ウルフはティアナの脇腹に向けていた指先から弾丸を・・・・。

「・・・・・・・・がつ・・・・・・・・。」

「翔太郎さんッ！」

脇腹に弾丸を放たれた翔太郎は膝から崩れ落ちる。

「こんな仕事をしてればどこに撃てばいかに痛みを与えられるかが自然と理解していくんだ・・・・・・・・。悪いな。」

「・・・・・・・・あなた・・・・・・・・。」

ティアナはウルフを睨むが・・・・。

「なんだその目は・・・・・・・・。お前はどうかやら自分の立場をわかっていないようだな・・・・・・・・。」

ウルフは指先から爪を伸ばしティアナに突き立てる。

「！　　寄せ！」

「それにはこたえられそうになさそうだ・・・・・・・・。」

ウルフは爪を突き立てた腕を高くあげる。

「ティアナあ！」

「！」

叫ぶ翔太郎をよそにウルフは目をつむるティアナに爪を突き刺そうとする。

その時。

「やめろおおおおお！」

映司が生身のままウルフに突っ込んだ。

「何！」

「！」

それによりティアナは解放されるが映司はウルフと取っ組み合いになる。

「ぬおおおおお！今のうちに早く！」

「お前！なにしてんだ！危ねえから逃げろ！」

「そうはいかない！そのままじゃ確実に殺されます！俺でも多少は時間を稼げます！」

「それでもお前……。」

「それに……、翔太郎さんも……、その女の子とも……、朝からの長い付き合いだから……。」

「「！」「」

二人はそんな映司に唾然となる。

しかし生身の人間がドーパントに敵うはずもなく……。

「うるさいわ貴様あ！」

ウルフはそんな映司を投げつけ壁に叩きつける。

「ぐっ！」

映司は痛みに顔を歪める。

（どうすればいいんだ……。飛び出したはいいけどどうすれば……）

するとかなりの振動だったらしく壁の上でシーソー状態だったあるものが映司が叩きつけられた壁の上から映司の元に落ちてきた。

「！　なんだこれ？」

映司は”それ”を手取る。

「それは……。」

翔太郎は”それ”をみて驚く。

すると。

「！　なんだこれ……。」

映司は急な頭痛に教われ頭を抱えて苦しみだす。

映司の脳裏にはもう一人の自分、火野映司の戦いの歴史、そして……。

(これは……。)

さらには同じように壁の上部から新たに三枚のメダルも映司の手元に落ちてきた。

「これは……。もしさっきのが正しいんだたら……。これは俺にしか出来ない！」

映司は腰に”それ”、オーズドライバーをつけると腰にベルトが巻かれ右腰にはスキヤナーが形成される。

「たしかタカはこっちでバツタはこっち……。」

映司はドライバーの右スロットにタカのメダル、左のスロットにバツタのメダルのをスロットする。

そして中央に黄色いトラのメダルをスロットし……。

「そんでこれを……、こっか！」

ドライバーを傾けスキャナーを手にし滑らせるようにドライバーのメダルをスキャンさせる。

「えつと……変身！」

『タカ・トラ・バッタ！ タトバ！ タトバ、タ・ト・バ』

すると映司の身体の周りをそれぞれ五色の動物の円形のエフェクトが回転しその中のタカ、トラ、バッタのエフェクトがひとつの円に合体しそれがさらに映司の身体に合体され、映司の肉体を変化させた。

「なんだ貴様は……。」

「……。」

殺意を向きだすウルフと唾然とする翔太郎、ティアナの前に……。

「俺は……オーズ。仮面ライダーオーズ！」

この世界に仮面ライダーオーズタトバコンボが堂々とその勇姿を現した。

初戦と偽物と失ったもの（前書き）

間が空いたにもかかわらずクオリティと内容が・・・。

初戦と偽物と失ったもの

「なんだ今の歌……。タカ・トラ・バツタつて……。」

オーズは身体の各所を見ながら変化した自分に驚く。

「それがオーズだ！」

「これがオーズ……。これが俺なんだ……。」

翔太郎によりオーズは自身のもうひとつの名前を自覚する。

すると。

「俺を……。無視してんじゃねえ！」

ウルフドーパントがオーズに爪を突き立てながら襲いかかるが……。

「！ よつと。」

オーズはウルフの攻撃を避けつつ横蹴りでウルフを蹴り飛ばす。

「なんだこの感覚……。妙に慣れ親しんだような……。」

オーズは不思議に思いつつもトラクローを展開し……。

「せいやあー！」

ウルフに斬りかかる。

「ぐう！ なめるなあ！」

ウルフは一度吹き飛ばされるも激情し立ち上がると爪でオーズに斬りかかる。

「ぐああ！」

オーズはウルフのラッシュに吹き飛ばされ壁に叩きつけられが……。

「あいたたた……。あれ？」

その壁がさつきドライバーとメダルが落ちてきた壁であった。

「えっと……。たしかさつきのビジョンだと他にもメダルが……」

「よそ見してんじゃねえ！」

オーズが見上げた隙にウルフが斬りかかるがオーズは難なく避けたのち……。

「よっど。」

ウルフの背中を踏み台にし跳躍する。

「すじ……。」

壁の上には他にも……。

「こんなにもメダルが……。」

オーズはそこに無造作に置かれていたコアメダルを素早く拾っていく。

「とりあえずさっきのだと……。」

オーズはドライバーをあげるとバッタのメダルを抜き取りゾウのメダルをスロットレスキャンさせつつ飛び降りる。

『タカ・トラ・ゾウ!』

オーズの身体の周囲を複数の円形のエフェクトが回り、オーズ・タカトラゾへと変わる。

そのまま……。

「そいやあ!」

ゾウレッグでウルフを踏みつける。

「ぐおおおおおお!」

ウルフから火花が散り吹き飛ばされる。

「おお~~~~。すごい。」

オーズは自身の足を見て驚きつつ……。

「えつと・・・、確か他には・・・、これかな？」

オーズはドライバーにシャチ・カマキリ・コンドルのメダルをスロツトしスキャンする。

『シャチ・カマキリ・コンドル！』

オーズはシャキリドルとなり・・・。

「はあ！」

ウルフに飛びかかる。

「調子に乗るなあ！」

「はあ！」

ウルフは指先から弾丸を放つがオーズはシャチヘッドから水流を放ち弾丸を相殺しつつカマキリソードとコンドルレッグで連続斬りを放つ。

そしてそのまま・・・。

「せいやあ！」

ドロップキックを叩きこみウルフを吹き飛ばした後着地、ドライバーに三枚のメダルをスロツトしスキャンする。

『タカ・トラ・バッタ！ タトバ！ タトバ！ タトバ！ タ・ト・バ』

再度タトバコンボへとコンボチェンジしそのままドライバーをスキヤンする。

『スキヤニングチャージ!』

オーズの両足がバツタを模した形態へ変化し……。

「はあああああ……、はあ!」

三色のエネルギーを纏った後跳躍し3つのリング状のエフェクトをくぐりながら……。

「せいやあああああ!」

ウルフにタトバキックを放ち……。

「ぎいやあああああ!」

ウルフは爆発し翔太郎とティアナが追っていたガイアメモリ流通組織の構成員、ゾルが衰弱しながら倒れる。

「やった……のか? 俺……。」

オーズは啞然としつつ……。

「とりあえずは翔太郎さん達を……。」

変身を解除しながら映司は翔太郎とティアナのもとへ走り出す。

「…………オーズ……。あれが…………。」

「あれが本来のコアの力が…………。」

「…………。」

映司らを森の影から眺める三人の異形の怪物達。

それぞれがイカロス、タイタン、ポセイドンといった空、陸、海を担う神を型どった怪物達が…………。

「大丈夫ですか翔太郎さん…………。」

「映司…………。お前…………、オーズに…………。」

「え…………はい。なんか成り行きっていかんかというか…………。そういえば翔太郎さんなんで俺をオーズって…………。」

「…………もう一人のお前は俺がいたような異世界でさっきの戦士、仮面ライダーオーズとして戦ってた…………。多分身体が慣れたのはそういったことが関係してるんだろ…………。」

「な、なんかSFみたいですね…………。俺よくわかりですけど…………。」

(…………なんか抜けたやつだなあ…………)

(この人が翔太郎さんや竜さんみたいな仮面ライダーとは……)

翔太郎とティアナは内心、映司の雰囲気飲まれつつ苦笑いする。

「とりあえずは翔太郎さん……、映司さんも手伝ってもらえますか？」

「あ、はい。」

翔太郎はティアナと映司に支えられつつ起き上がる。

「……………」

「どうかしましたか翔太郎さん？」

「……………いや、なんでもねえ。」

翔太郎は自身を心配してくれている映司に笑い返す。

無理やり作った偽物の笑顔を。

その後翔太郎は病院に搬送されゾルは逮捕された。

証言から後に組織は管理局により全員逮捕された。

夜。

「……………なんでだよ……………」

運ばれた病室内で翔太郎は震える自身の足を涙ぐんだ目で見る。

「なんでだよ……………感覚もねえ……………力も入らねえ……………痛みさえ感じねえ……………。俺は……………こんなとこで止まるわけにはいかねえのに……………」

涙を流しながら毛布を握りしめる翔太郎。

この夜、昼間の戦いによりウルフが放った弾丸は翔太郎の足の神経系を断裂し、翔太郎は両足を失った。

これは事実、仮面ライダーとして戦う翔太郎にとっては死刑宣告に近いものであった。

検問と執務と放たれる弾丸（前書き）

今回は初？のフェイト回です。

そんな方もある方も。

最近ガンダムAGEとトライエイジにはまってきました。

AGEのユリンかわいいッス。

検問と執務と放たれる弾丸

映司が翔太郎と対面していたころ。

周りには何も無い荒野。

そこにはただただ平行線のみが伸びる。

そしてそんな荒野に唯一伸びる走路を走るのは黒をベースに金色のラインが入った一台の大型バイク。

そのバイク、ライドベンダーで疾走するのは一人の若い青年。

軍隊のような迷彩柄のズボンにベスト、背中にはリュック。

そして左手のバンドには銀色一色のサソリが描かれたメダルが挟まっていた。

(・・・) 空気がざわついているな。周りでなにか大きいことが・

青年、六甲慎太郎はアクセスを捻りスピードをあげた。

「どう思われますかテストロッサ執務官・・・。」

「そうですね・・・。おそらくは」

フェイトは数人の局員と検問をしていた。

「ドクトルが組織に接触するしたらきつと……。」

フェイトがうなだれていると……。

「そのバイク。止まって下さい。」

局員がやって来た黒いバイクを止めていた。

バイクは指示に従い停車、エンジンを止める。

「お手数ですが、身分証明を見せていただけますか？」

バイクに乗っている男は無言で懐から身分証明を差し出し局員に見せる。

「六甲……、慎太郎？」

「！」

フェイトはその名前を聞きつけその男に駆け寄る。

「ああ……。」

男はヘルメットを脱ぐ。

フェイトはその顔になぜか安堵の表情を浮かべる。

(・・・・・・・・あれ？　なんで私・・・・)

しかし何故自分がこんな感情を思っているかフェイトは理解出来なかった。

「失礼ですがご職業は・・・・・・・・」

「以前はある村で機械修理をしていた・・・・。今はただの旅人だ・・・・」

「そう・・・・・・・・ですか・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

「何だ？」

「何処かで・・・・・・・・お会いしませんでしたか？」

「少なくとも俺は管理局に世話になるようなことはしていないしなによりも・・・・・・・・」

「？」

「管理局じゃなくとも君みたいな美人なら覚えているはずだ。」

「・・・・・・・・。」

フェイトは耳まで真っ赤になる。

「もういいか・・・・・・・・。急ぐ用はないが時間は惜しい・・・・・・・・。」

「は、はい・・・・・・・・。お手数おかけしました。」

「たいしたことじゃない……。気をつけてな……。」

慎太郎はヘルメットをかぶると再度エンジンをつけ、アクセルを捻り走り去っていった。

「……なんなんだろうこの気持ち……。私……。あの人と会ったことが……。」

フェイトは慎太郎の後ろ姿を終始眺めていた。

検問から数キロ走った走路。

「しばらく街は見えない……。久々の野宿になるか……。」

慎太郎はある装置を取りだし中央のボタンを押し地面に投げる。

すると装置は一瞬でテントになる。

慎太郎はその中に入り非常食を食べ始める。

横にカプセルがデザインされたベルトと銃、バーストライバーとバースタスターを置いた状態で。

「さっきの人……。」

フェイトはいまだに慎太郎のことを考えていた。

（初対面のはずなのに胸が熱い……。でもなんだか初対面っていう気がしない。……。前にも会ったような気が……。ダメダメっ！今は仕事仕事っ！）

フェイトは振り切るように頭を振り仕事に集中するようになった。

すると車が一台止まる。

「その車！止まって身分証明を見せて下さい。」

局員の指示に従い車は停止し窓が開く。

そこには髭をはやした中年の男がいた。

「身分証明を……。」

男はにやつきながら身分証明を見せる。

「拝見します……。」

すると局員が身分証明を見ている間に……。

『クラブ！』

「！貴様が！」

車の男、ドクトルはクラブメモリを体にスロットしクラブドーナツに変身、ドアを突き破り局員を殴り飛ばす。

「っがあ！」

「！ しっかりしてください！」

フェイトは他の局員とクラブに吹き飛ばされた局員に駆け寄る。

「こんな所で検問などしても魔導師ふぜいがドーパントにかなうとでもおもっているのか？ だとしたらあの世でそんな自分を悔いるがいい……。」

「ドクトル！ ガイアメモリを使つての連続殺人容疑かつ公務執行妨害であなたを逮捕します。 バルディッシュ！」

『イエッサー！』

「セー……ットアップ！」

「……。」

テントの中で慎太郎はセルメダルを眺めていた。

（改めて見るとこんなちっぽけなもんに振り回されてるとは……。我ながら情けない……。しかしまあ……。悪くはないかもな……。しかしさっきの女性は何故俺を……。）

慎太郎はフェイトを思いだが……。

「……………考えすぎか……………」

メダルをバンドに戻し瞼を閉じようとした。

その時、爆音が鳴り響いた。

「！」

慎太郎はバスターを手にしてテントから飛び出ると……………。

「あれは……………」

慎太郎は先ほど自分が走ってきた道、つまりは先ほど検問にあつていた場所から煙が立ち込めていることに気づいた。

「……………悪い虫に当たったみたいだな……………」

慎太郎は急いでテントに向かうと中にあるバーストライバーを腰に巻きながらライドベンダーに跨がった。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………」

同員が傷つき倒れている中バリアジャケットを傷だらけにしたフェイトが肩で息をしながらクラブドローパントと対峙していた。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………。強い……………」

「いくら黒い死神とは言えドローパントの前ではただの女か……………」

どうする？ 命ごいをするなら命だけは助けてやる……。ただし
身体で稼ぐ道具としてな……。」

「！」

フェイトはライオットザンバーで斬りかかるが……。

「ふん。」

クラブは背中の甲羅で受け止める。

甲羅は破壊されるどころかライオットザンバーを砕き……。

「はあ！」

「きゃあああああ！」

フェイトにハサミによる一撃を叩き込み岩に叩きつけられバルディ
ツシュを手放してしまつ。

「つつう……。」

「つたく……。あがきさえしなければ生かしてやったもの……。
まあいい……。お前には特別な殺し方をプレゼントしよう……。
」。

クラブの顔にあたる部分が開きそこからビームの銃口のようなもの
が現れる。

「死ね……。。」

銃口に光が集まっていく。

「っ！」

フェイトは目をつむり覚悟を決める。

その時。

クラブの頭部の銃口に円盤型の弾丸が放たれ火花を散らした。

「がああああああ！」

クラブは銃口を抑え悶える。

「誰だ！」

「……………悪いな……………」

そこにはライドベンダーに跨がったままバースバスターを構えた慎太郎がいた。

「…………カニは嫌いじゃない……………ただしビームを撃つのは別でな……………」

「何者だ貴様……………」

「あなたはさっきの……………」

慎太郎はベンダーから降りるとフェイトを後ろにかばうようにクラ

ブの前に立つ。

「俺は六甲慎太郎……。……。そして……。」

慎太郎は左手のバンドからセルメダルを抜き取る。

「変身！」

そしてセルメダルを腰に装着していたバースドライバーのスロットルに投げ入れ一気にダイヤルを回した。

『カポーン!』

すると慎太郎の身体の周りを10個のリセプタブルオーブが回ると身体に定着、生体強化スーツを形成していく。

そして顔を装甲が徐々に覆ってゆき……。

「仮面ライダー？」

「仮面ラーイダー？」

フェイトとクラブが啞然とする目前には複眼Uフラッシャーを光らせた黒いボディーツに銀と緑の装甲で身を包んだ戦士が立っていた。

「仮面ライダー……。バース！」

慎太郎が変身した仮面ライダー、バースは手持ち武器バースバスターをクラブに向けた。

検問と執務と放たれる弾丸（後書き）

ドーパント紹介

ウルフドーパント：ガイアメモリ組織の一員、ゾルが「狼の記憶」が内包されたウルフメモリにより変身した姿。狼のような俊敏な動きに加え牙や爪により近距離、指先から弾丸を高速発射することによる遠距離を使い分けるが仮面ライダーオーズのタトバキックに破れる。

モチーフは『仮面ライダー』のゾル大佐と狼男。

(前書き)

キャラ紹介です。

ちなみに特に名字は『騎』という漢字は『ライダー』という意味を込めている以外は何もありません。

騎野^{きの} 映司

年齢：23

容姿：渡部秀と同じ

魔力ランク：A（ただし魔導師としての知識は皆無）

性格：温厚だがかなりのお人好し、女心に鈍感（原作の火野映司同様）

プロフィール：とある村で静かに暮らしている青年。基本的に1日1日を過ごせればいいという無欲な青年。たまたま犯罪者が変身したドーパントとジョーカーの戦いに巻き込まれるが、負傷した翔太郎に代わりたまたま落ちてきたオーズドライバーによりオーズに変身、翔太郎の代わりに戦うことを決める。

仮面ライダーオーズ：

映司がオーズドライバーとオーメダルで変身する仮面ライダー。基本的な戦闘能力は原作と同様。

尚メダルが鳥系、虫系、猫系、重量系、水棲系しかいないため理論上プトティラとブラカワニには変身不可。

必殺技（原作同様）：

タトバキック：

オーズバツシユ：
ガタキリバキツク：
ガツシユクロス：
サゴーズインパクト：
オクトバニツシユ：
プロミネンスドロップ：
マグナブレイズ：

ツール：

オーズドライバー：
映司が使うベルト。今作のドライバーはタイムメモリとディメンジ
ョンメモリにより歪んだ時間・次元の狭間により800年前から他
のメダルと飛んできた初号のオーズドライバー。紛失したことは錬
金術師達の中で闇に隠され、先代の王には新たに作られたもう一つ
のオーズドライバーを差出した。
ただし時間・次元を越えてきたせいかわかるとオーズメダルからセルメ
ダルを作りだせる機能が追加。

オーメダル：
オーズドライバーと共にやって来たメダル。本来のメダルと同様だ
がドライバーと共に紛失。800年前ではドライバー同様に新たに
同じ物が作られ紛失が知られなかった。変身後の基本的な機能は変
わりなし（タカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バツ
タ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウ
ナギ、タコ×各1枚ずつ）。

メダジャリバー：
カンドロイド：

基本的に機能や形状は原作同様

ビークル：

ライドベンダー：

映司が普段から使用するバイク。制作者は六甲慎太郎。太陽光や風力エネルギーにより無限に走行が可能。トライドベンダーに合体することで飛行が可能。内部にはカンドロイドが大量に内蔵されている。トラカンドロイドとの合体によりトライドベンダーになると飛行も可能になるが、ラトラーターコンボにしか乗りこなせなくなる。

×××(前書き)

連続でキャラ紹介です。

名前の『六甲』とは六個の甲

機械、つまりは六個の装備、バース

CLAWSを表します。

×××

六甲慎太郎 むいろう

年齢：24

容姿：君嶋麻耶と同じ（服装はバース二代目になった後藤の服装）

性格：クールで頭が堅いが仲間思い

プロフィール：映司と同じ村で機械修理をしていた青年。現在はライドベンダーで様々な世界を旅している。

セルメダルを発見しそれを研究、データを元にバースのシステムやバースドライバー、バースバスター、ライドベンダー、メダジャリバーなどを全て自作したためかなり機械には強い。

なおそれら全てがセルメダルを使用するため自身の魔力からセルメダルを生成できるバンドを常に左手につけている。

たまたま指名手配犯が変身したドーパントに殺されかけたフェイトを助けたことにより協力を要請される。

仮面ライダーバース：

慎太郎が変身する仮面ライダー。

基本的な戦闘能力は原作と同様だがセルバーストは全ユニットで使用。

必殺技（基本的に原作同様・但しセルバーストはCLAWS全てに存在）：

バスターバースト（バースバスター）

：

ブレストキャノンシユート：

ドリルアームスピク：

シヨベルアームブレイク：

クレーンアームウィップ：

キャタピラレッグアタック：

カッターウイングブーメラン：

ツール：

バースドライバー：

バースバスター：

但しメダルポットを複数所持しポットごと弾丸を装填する。

カンドロイド：

主にトリケラカンドロイドを使用しセルメダルを充填させる。

ビークル：

ライドベンダー：

機能は映司のベンダーと同じ。

光る複眼と粉碎と一歩（前書き）

バトル回といいつつバトル少ない・・・。

アニメイトで買ったvivids巻についてきた特典がなんかイラ
ストがきわどい！

でも嫌いじゃないわ！

（どっちだよ！）

光る複眼と粉碎と一歩

「「「……」」」

対峙するバースとクラブ、二人を唾然としつつ見守るフェイト。

そして……。

「はぁ！」

「ふっ！」

クラブドーパントが駆け出すのと同時にバースも駆け出した。

「はぁ！」

クラブのフックをバースは受け止め逆に殴りそのままラッシュになげるが……。

「堅いな……。」

思った以上の甲羅の堅さにバースが眩く。

「当然！ この俺の甲羅を傷つけることなどできんわぁ！」

クラブが殴るが、バースはその手を踏み台に後ろに跳躍する。

「なら簡単だ……、貫かせてもらおう……。」

バースはセルメダルをドライバーにスロットし、ダイヤルを一気に回す。

『ドリルアーム!』

右手のリセプタブルオーブからパーツが現れると一瞬でバースの右手を包んでゆき、ドリルアームを形成した。

「何っ!」

「でりゃあ!」

驚くクラブにバースはドリルアームでストレートを放つ。

すると先ほどまでびくともしなかった甲羅から火花が散っていく。

「くっ! こんなこけおどしでっ!」

「こけおどしかどうかは……。」

『セルバースト!』

バースは左手でドライバーにセルメダルを二枚スロットしダイヤルを回す。

そして右手に力を込め……。

「身体で確かめてみるッ!」

ドライバーのセルバツシュモードにより青いエフェクトを纏ったド

リルアームの一撃、ドリルアームスピンを放つ。

「んなもんがあー!」

クラブは甲羅で防御するもあっけなく甲羅はドリルアームにより粉砕され……。

「があああああああー!」

火花を散らしながらも吹き飛ばされる。

「凄い……。」

(でもなんでだろう……。あの装備を私は知ってる? なんて……)

そんな二人の戦いをフェイトは啞然としながら眺めていた。

そして……。

「決めるか……。」

バースはバースバスターのメダルマガジンを銃口にセットする。

『セルバースト!』

バスターの銃口にメダル型のエフェクトが集約されてバースは踏ん張る。

「でりゃああー!」

そして引き金を引くと銃口から巨大な黄色のメダルが集約された弾丸がクラブに放たれ……。

「がああああああ！」

クラブは爆発、ドクトルが目の下にクマを作って地面に倒れた。

「……俺も、……運がなか……。」

ドクトルはそのまま気を失った。

「ふう……。」

バースはバースバスターを肩にかけつつ、フェイトに駆け寄り……。

「大丈夫か？」

そして変身を解除、六甲慎太郎がフェイトに手を差し伸べる。

「は、はい……。」

フェイトは顔を赤くしながら手を掴み立ち上がる。

すると。

「あつ……。」

フェイトは立ち上がった際、慎太郎に寄りかかった。

「す、すいません。腰が抜けちゃって……。」

フェイトは顔を真っ赤にして急いで身体を離す。

「……気にするな。それよりも彼らを。幸い医術ならある人から教えてもらったから応急措置ぐらいならできる……。」

「はい！」

慎太郎はフェイトと倒れている局員の元に駆け出す。

その後医療班が駆けつけ傷ついた局員やフェイト、そして慎太郎も保護された。

「……というあなたは以前拾ったメダルを元に仮面ライダーの力を……。」

「ああ……。」

局員は慎太郎から話を聞いていた。

「……しかもそのメダルが落ちてきたって……。そんな凄
い力が秘められたメダルがどうしてあなたのもとに……。」

「よくはわからない……。……が……。」

「？」

「俺は何か運命に導かれたような気がする……。少なくとも俺はバースの力を私利私欲のために作った訳でも自己満足のために作った訳でもない……。だから旅に出た……。この力で少しでも誰かの命を守るために……。」

「……………」

局員は慎太郎の焰が灯った目に言葉を失う。

すると。

「その人は嘘をついてません……。」

フェイトが会話に入ってきた。

「ハラオウン執務官……。」

「すみませんけど少し席を外してもらえますか？」

「わ、わかりました。」

局員はフェイトに一礼し立ち去った。

「……………えっと、……………六甲さん……でしたか？」

「ああ……………」

「なんで私を……。」

「……特になんでもない……。知り合いみたいに動いてみただけだ……。」

「はぁ……。」

「とは言え助けてみて良かったと思う……。いい笑顔が見れたからな……。」

「……。」

笑顔で答える慎太郎にフェイトは顔を赤くするがすぐに笑顔になる。

（よくはわからないけど……今ならあの時の熱がわかる気がする……）

「どうかしたか？」

「慎太郎さん……。」

「？」

「また……、会えますか？」

「……。」

「私は会いたいです……。わがままっていうのはわかってるんです……。でも……。」

フェイトは上目遣いで慎太郎にたずねると、慎太郎は少し考える。

そして……。

「……………あのような怪人はまだ現れるのか？」

「えっ？ ドーパントのことですか？」

「ああ……………」

「恐らくはまだガイアメモリ犯罪組織はまだ沢山……………」

「……………」

慎太郎はわざとらしく財布の中を見る。

そしてため息をはくと……………」

「今までは貯金を切り崩しながら旅をしていたが、将来を考えたらさすがにな……………。何かいい仕事はないだろうか……………」

「えっ……………」

「例えばある執務官と一緒にこのバースの力で犯罪者を取り締まるような……………」

「じゃあ……………」

「何処かにないものか……………」

「……………！でも……………」

「かつこつけて死ぬのが男の特権なら、多少のわがままを無理やりきかすのは女の特権だぞ……。」

「……じゃ、じゃあ……。慎……太郎……さん……。」

「なんだ……。」

「もしよろしければ……、私と一緒にガイアメモリ犯罪に……。」

「民間人としては局員に協力するのは当然のことだ……。是非協力させてもらおう……。」

フェイトは頬を赤くしながらも笑顔になり……。

「ふ、ふつつかものですが……。よろしくお願いします!」

「ふつつかもものって……。」

慎太郎は苦笑しつつ手を差し伸べる。

「よろしく……。テストロッサ執務官……。」

「……フェイト……。」

「はっ?」

「テストロッサ執務官じゃなくてフェイトって呼んで下さい……。」

「

「……………」

「多少のわがままは女の特権でしたよね？」

フェイトは意地悪そうに笑う。

「……………わかったよ……………、フェイト。」

「……………はい」

フェイトは笑顔を慎太郎に返し、慎太郎は頬をかきつつそっぽを向く。

（バースの力は……………このためだったのかもな……………。）

ちなみに周囲の局員からはフェイトをメロメロにした男として慎太郎は妙な殺意を向けられていた。

こうして慎太郎はフェイトと共にガイアメモリ犯罪に協力することとなった。

光る複眼と粉碎と一歩（後書き）

ドーパント紹介

クラブドーパント

ガイアメモリにより連続殺人をつみ重ねるドクトルが「蟹の記憶」
が内包されたクラブメモリにより変身したドーパント。硬い甲羅と
両手のハサミ、内部にしまっているレーザーにより戦う。

男泣きと来春と風との出会い（前書き）

すいません・・・。

翔太郎サイドといいながらほとんど映司の話になってしまいました。

話が変わりますが今度ゴージャスがメタルヒーローの元祖、ギヤバンとのコラボ映画がやるとか。

自分メタルヒーローはビーファイターからなのでギヤバンは早めにおさらいしときたいです。

男泣きと来春と風との出会い

首都クラナガン・管理局直属病院。

「・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・」

「はい・・・・・・・・回復の見込みは今の所は・・・・・・・・」

翔太郎は暗い部屋で担当医師と話をしていた。

映司やティアナとは別れ、今部屋の外にはスバルが椅子に座りつつもせわしなくしていた。

そして医師の手には先ほど撮ったレントゲン写真が。

「ここを見ていただければわかりますが、脇腹に通った神経系が敵の放った弾丸で貫通され断裂されています・・・・・・・・これを直すのは9割不可能です・・・・・・・・」

医師は暗い顔で話すがそれよりも暗いのは・・・・・・・・。

「・・・・・・・・」

当の翔太郎である。

「もう足が・・・・・・・・もう・・・・・・・・俺は・・・・・・・・戦えないのか・・・・・・・・あいつと約束したのに・・・・・・・・違う世界にいても・・・・・・・・戦い続けるって約束したのに・・・・・・・・」

「……………」

男泣きする翔太郎に担当医師はただただ肩を叩くことしか出来なかった。

その頃……。

「おお〜〜。」

映司はライドベンダーを駐車し、クラナガン内を見渡しつつ歩いていた。

「街の中を知っておいた方がいって……。なんなんだろう、翔太郎さん……………」

本来ならば翔太郎に付き添いたかったが、クラナガンに初めて来たと言う映司のことを聞き、翔太郎はこの街を下見しておけと言っていたことを映司は思い出した。

「でもさすがにこの歳になって迷子はさすがにやだし……。見とくべきかも……………」

映司は能天気にも空を眺めつつ道を歩く。

すると……………。

「あ……………」

「えっ……。」

曲がり角に入った途端、栗色のサイドポニーの女性とぶつかった。

「きゃあ！」

「危ない！」

女性は転んで倒れかけるが映司はすぐさま女性と地面の間に入り、女性の下敷きになり頭を地面のコンクリートに叩きつける。

「ぶっっ！」

女性の勢いも相まってかなりの勢いでぶつかったらしく痛い音と映司の変な悲鳴が響く。

しかし映司の表情は見えない……。

というよりは隠されている……。

「……あっ……。」

女性は飛び起き、顔を赤くしながら自身の胸を両手で覆う。

映司の顔を埋め尽くしてした自身の巨大な胸を。

「す、すいません！ 助けて貰っちゃて……。」

騒ぐ周りを気にせず女性は正座し頭をひたすら下げ映司に謝る。

「じ、こちらこそ!」

映司も頭のたんごぶをさすりつつ、正座しつつ礼をする。

「すみません……。私、ちょっとそそっかしくて……。」

「いえいえ! 俺もよそ見してて……。田舎ものでしてクラナガ
ンが珍しくて……。」

「……………」

(あれ……。なんだかこの声……)

女性は頭を傾げる。

なぜかわからないが聞いたことのある声に……。

「あ……………」

映司を見つめるのはに映司は問いかける。

「は、はい!」

「俺の顔になんかついてます?」

「あ、いえ……。なんというか……………」

「?」

「でもクラナガンに来たのは初めてなんですよね……………」

「はい……。」

「……。」

「どうかしました?」

「ああ、いえ……。あの……。」

「はい?」

「差し支えなければお名前を……。」

「俺? 映司です。騎野映司……。」

「映……司……さん……ですか……。私はなのはです。高町なのは……。」

「へえ……。可愛い名前ですね」

「か、可愛い……。」

屈折のない笑顔を浮かべる映司になのはは照れて頬を赤くする。

「そういえば高町さん……。」

「は……。はい!」

「なんだか急いでみたいですけど……。」

「……………あ！ すいません映司さん！ またいつか！」

なのはは映司に一礼し走り去っていった。

「……………綺麗なひとだったなあ……………」

映司もなんだかんだでれけながら歩いていった。

「なのはママあ！ 遅いよお。」

「ごめんごめんヴィヴィオ！ ちょっと途中で……………」

なのはは金髪のおツドアイの少女、自身の娘である高町ヴィヴィオと待ち合わせていた。

「途中で？」

「あ……………えっと……………」

なのはは先ほどのことを思いだし顔が赤くなる。

「どうかした？」

「……………あ、ううん！ なんでもない！ なんでもないよー！」

いかにもな感じになのははテンパる。

「……………もしかして……………」

「何？」

「なのはママにも春？」

少女は意地悪そうに笑いつつ、人差し指を頬につける。

「……………」

（女の勘って怖い…………。私も女だけ…………）

なのはは苦笑いしながら自身の娘の第六感（？）に呆れつつ二人は親子二人、水入らずのお買い物に向かった。

「……………はあ……………」

来人は一人、バイクショップ内のCBR1000をガラス越しに眺めていた。

ちなみに翔太郎が帰って来ているということは竜や克己同様まだ聞かされていない。

「まだ僕って13歳だからライセンスが…………。仮面ライダーなんだからバイクに乗りたいのになあ……………」

来人は唯一バイクを所持していないことを気にしていた。

「師匠はボイルダー、竜さんはディアブロッサ、克己さんだってオ

フロードもってるのになぁ……。」

そしてとぼとぼとバイクショップのショーケースから顔を離し歩き始めた。

すると突如……。

「！ な、何？」

スピリッツが鳴り出す。

来人は驚きつつモニターを開くとそこには……。

「ヴィヴィオ？ 何かあったの？」

ヴィヴィオが映っていた。

『来人さん！ 怪人が！』

「！ そんなぁ！ スピリッツにはドーパント反応は……。わかった！ 待ってて！」

来人は急いで駆け出した。

「そういえば今日どこに泊まるか考えてなかったなぁ……。」

映司はあれ以降今日の寝床をライドベンダーに乗りながら探していた。

入院の翔太郎を差し置きスバルやティアナの家に泊めてもらうわけにもいかなかったため自分で探していたが、相手は初めてきた町……行き詰まりベンダーを停めて途方にくれていた。

すると。

「あれ？」

目の前を少年が走っていくのを見た。

「ねえ君！　ここらへんで何処か泊まれるところは……」

「すみません！　ちょっと取り込み中で！」

その少年は映司に軽く一礼しそのまま走り去って行ってしまった。

しかし……。

「何かあったのかなあ……。」

その少年の焦り具合は何かがある……。

映司は何か勘が働いた。

そして何よりも空気が震えているのをなんとなくながらも感じた。

「……行ってみよう！」

映司はグローブをつけヘルメットを被りベンダーのエンジンをつけ爆音を響かせる。

そして先程の少年、来人の後を追った。

「ヴィヴィオあ！」

「来人さん！」

来人は息を切らせつつも建物の影で戦うのはを見守っていたヴィヴィオと合流した。

そしてそのまま目線を戦いの場に移すが……。

「これは……。」

来人の目の前には局員を打ちのめす怪人だがその見た目はドーパントとはまた違った風貌であった。

「なんだあれ……。……。……。……。ドーパント？」

そこには立ちはだかる局員をねじ伏せる顔がデザインされたカブトムシの怪人がいた。

「ヴィヴィオ……、あれって……。」

「よくわからない……、でも……。」

「とりあえず善意はなさそうだね……。」
すると。

「！これは……。」

映司が来人の後を追って駆けつけた。

「あなたはさっきの……。」

「知ってるんですか来人さん？」

見ず知らずの青年を知るような来人にヴィヴィオは問う。

「ちょっとね……。ここは危険ですか……ら……。」

来人はロストドライバーを構えるが……。

「それはこっちのせ……り……。」

映司はオーズドライバーを持つ。

そして互いにすつとんきょうな顔で互いのドライバーを指を差す。

「え？ なんですかそれ……。」

「君こそそれ……。なんで翔太郎さんと同じのを……。」

「！ なんて師匠のことを……。」

「それは……新米だけど俺も同職だから……。」

「それじゃあ……。」

「うん……。」

すると怪人は……。

「う……うおおおおお！」

体内から新たにクワガタムシ型の怪人を産み出した。

「増えた……。やっぱりこいつはドーパントじゃない……。」

「ありがたいかも。これで2体2……。フェアかもね……。」

「呑気ですね……。僕は来人……。右風来人、仮面ライダーサイクロンです……。」

「俺は騎野映司……。仮面ライダー……。オーズ！」

二人はそれぞれドライバーを装着する。

「ヴィヴィオ！ 危ないから下がっててね。」

「は……。はい……。」

返事を返すヴィヴィオをよそに二人は怪人に向かっていった。

「はあ．．．．はあ．．．．はあ．．．．」

局員が倒れている中でバリアジャケットのあちこちを破かせながらなのはは、怪人相手にレイジングパートを向けていた。

（火花は散るのに身体からメダルが出るなんて．．．。ドーパントじゃないのかなあ．．．）

すると怪人はなのはに向けて突進する。

「っ！」

なのはは魔力弾を怪人に放つ。

火花を散らしメダルを身体から漏らしつつも怪人は効かないようになのはに突っ込む。

「くっ！」

なのはは瞬時に魔法でバリアをはり怪人を止める。

しかし怪人は簡単にバリアを破壊しなのはに怪人の角が突き刺さる．．．。

かに思えた。

「うおりゃああああ！」

その途端映司が横から転がりなのはを抱え寸前で避けた。

「大丈夫ですかなのはさん！」

「来人君！」

来人も続き合流する。

「それにあなたはさっきの……、騎野さん？」

「また会いましたね高町さん……。とりあえずは……。」

映司はなのはを離すとかばうように前に立つ。

「危ないです！ 避難してください！」

なのはは映司に異を唱えるも……。

「大丈夫大丈夫。こんなんですけど俺、なんか専門家みたいですし……。」

「なんですかそれ……。」

意味不明な映司の発言に頭を傾げつつ来人は映司の横に並び立つ。

「そういえばなのはさんと知り合いなんですか？」

「ま、まあいろいろと……。」

映司、そして映司の後方にいるなのはは若干頬を赤くする。

「？ とりあえず今は……。」

「うん……。」

『サイクロン！』

来人はサイクロンメモリのスターティングスイッチを押しドライバーにスロットし、映司は赤と緑のメダルを左右のスロットにスロットし真ん中に黄色いメダルをスロットしスキヤナーでスキヤンさせる。

「「変身！」」

来人はドライバーを展開する。

『サイクロン！』

『タカ！ トラ！ バッタ！ タトバ！ タトバ、タ・ト・バ』

身体を緑の装甲が覆い来人は仮面ライダーサイクロンへ、周囲を円形の紋章が回転しその中の三色の紋章が一つとなり身体に合体、映司は仮面ライダーオーズタブコンボへと変身した。

「………なんですか今の歌……。」

「歌は気にしないで……。」

「はぁ………さぁ、お前の罪を………数えろ！」

「…………俺もそういうの考えとこっかなあ…………。」

サイクロンの決めセリフに憧れつつ二人は2体の未知の怪人に身構え…………。

「ふっ！」

「はぁ！」

駆け出し怪人とぶつかりあった。

共戦と翔太郎の告白と冷たい廊下（前書き）

11月に入り初めての投稿。

やっところさの投稿です。

三章に入り初顔が数人・・・。

学祭シーズンなので来人やアインハルトの学祭番外編を考えていますが出店にするか劇にするか悩んでいます。

皆さんはどちらがいいでしょうか。

ちなみに出店は執事&メイド喫茶を考えています。

共戦と翔太郎の告白と冷たい廊下

「せいやあ!」

「でえいやあ!」

オーズはカブトムシのような怪人カブトヤミーと、サイクロンはクワガタヤミーと戦っている。

オーズはトラアームの強靭さを駆使しカウンターを、サイクロンはヒット&アウェイで隙に突き刺すように蹴りを放つ。

そして間合いをあけると……。

「いった!」

「かった!」

オーズは手を、サイクロンは足を抑える。

「なんなんだあの固さ……。なんか素手で鉛を受け止めてるみたい……。」

「硬い相手には……。力で!」

『ヒート!』

「それもそうだね。」

サイクロンはヒートメモリ

をドライバーにスロットし展開、オーズはドライバーの真ん中に灰色、左に水色のメダルをスロットしスキャンする。

『ヒート！』

『タカ・ゴリラ・タコ！』

サイクロンはヒートに、オーズはタカゴリタにチェンジし殴りかかる。

ヒートはクワガタヤミーと格闘戦になる。

クワガタヤミーの一撃にヒートは手に炎を纏いストレートで迎え撃つ。

クワガタヤミーがたじろいだ隙にヒートは両手足に炎を纏わせる。

「このままッ！」

そのまま拳を叩き込み回し蹴りからのラッシュを叩き込みクワガタヤミーは吹き飛ばす。

「虫は熱が弱いつて聞いたけど……。まさかここで役立つとは！」

そのままヒートはクワガタヤミーにジャンピングパンチを放った。

「せいやあー！」

オーズタカゴリタはゴリラアームでカプトヤミーを殴る。

カプトヤミーも対抗し拳を放つがオーズは拳を払うと変化したタコレッグで体に絡みつき……。

「はあああああああ！」

ゴリラアームで殴り……。

「はあっ！」

そのまま回転し遠心力でヤミーを投げ飛ばす。

「ふう！　すごいなあ……。」

オーズは腕と足を見つめる。

するとカプトヤミーは頭の角から電撃を放つ。

「おわあ！　危なっ！」

オーズはギリギリで避けるが電撃の先には……。

「！　高町さん！」

傷ついたなのはがいた。

「間に合え！」

オーズはドライバーの左のスロットに黄色いメダルをスロットシス

キャンする。

『タカ・ゴリタ・チーター!』

オーズはタカゴリターになり疾走……。

「はあ!」

なのはに高速で駆け寄りゴリラームで電撃を受け止める。

「騎野さん?」

「大丈夫ですか?」

「はい……。なんとか……。すみません!」

なのはは丁寧に礼をする。

若干ほほが赤い。

「ああいえ! こちらこそ!」

オーズも思わず頭を下げる。

「いえいえ。危ないところを助けてもらっちゃって……。」

「いえいえ! 当然のことですから……。」

互いに謙遜しあうのはとオーズに殴りかかるカブトヤミーだがオーズのゴリラームの一撃に吹き飛ばされる。

「すみませんなのはさん……。とりあえずこいつを片付けちゃいますから。」

するとクワガタヤミーが投げ飛ばされカブトヤミーにぶつかる。

そしてヒートがオーズに合流する。

「騎野さん？　なんかまた姿が……。」

「来人君こそ色が……。」

互いに指を指しながら指摘する。

しかし直ぐ様ヤミーに体を向ける。

「詳しい話は後の方がよさそうですね。」

「だね。」

『サイクロン！』

『タカ・トラ・バッタ！　タトバ！　タトバ、タ・ト・バ！』

ヒートはサイクロンメモリによりサイクロンに、オーズはタトバコンボにチェンジ。

そのままサイクロンはメモリをマキシマムスロットにスロット、オーズはスキヤナーでドライバーを再スキャンする。

『サイクロン！ マキシマムドライブ！』

『スキヤニングチャージ！』

「はあああああああ……」

サイクロンは身体に風を纏わせ、オーズは変形したバッタレッグで踏ん張る。

そして駆け寄ってくる二体のヤミーに対し跳躍……。

「喰らえ！ 新技！ ライダートルネードストおおおム！」

「せいやあああああ！」

サイクロンは風を纏わせたドリルキック・ライダートルネードストーム、オーズは三色のリングを覆いながらタトバキックをそれぞれヤミーに放つ。

そして二体のヤミーは爆発し、銀色のメダルの雨が降る。

「ふう。」

息を吐くオーズ。

しかしそんな光景にサイクロンは……。

「どうなってるんだ？ やっぱリドーパントじゃない……。」

未知の敵に警戒をせざるを得なかった。

「と、とりあえずさあ……、なんとかなっただし……。ね？」

「ま……。まあ……。。」

二人は変身を解除する。

「どんな相手だろうが人々のために立ち向かうのが仮面ライダーなんだから。だから今はいいんじゃない？ 深いことは考えないでさ……。」

「はあ……。でも今は新しい敵相手に勝てたってことを大事にします！ えっと……。ありがとうございます。映司さん。それと……。」

「？」

「ようこそクラナガンへ。仮面ライダーオーズ。」

「うんー！」

少し照れくさそうにしながらも強く返事を返す映司。

するじ。

「騎野さん……。」

「？ 高町さん……。」

「なのはさん……。」

なのはが恐る恐る映司に歩み寄ってきた。

「そういえばお二人とも知り合いなんですか？」

「！ま・・・まあね・・・。」

二人は先ほどのことを思いだし顔を赤くする。

「？」

頭を傾げる来人だったがそんな来人を・・・。

「まあまあ来人さん」

「ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオが来人の腕に抱きつく。

「ママにも春が来たんですよ」

「はい？」

「いいからいいから　じゃあなのはママ、私達これからデートに行くから　なのはママも頑張ってるね」

「え？　ちよつとヴィヴィオお～～。　僕はまだ聞きたいことがあ～～。」

そんな来人の訴えも虚しく来人はヴィヴィオによりデートに強制連

行かれていった。

残ったのは映司となのはのみである。

「……………」

「……………」

「……………あの！」

「……………お先にどうぞ。」

「……………いえいえ！ レディファーストですし……………」

「……………いえいえ！ 騎野さんから……………」

「じゃ、じゃあ……………とりあえず……………」

「はい！」

「まずは手当てを……………」

「……………はい……………」

なのはが返事するとちょうどどのタイミングで救護班が到着した。

「えっと高町さん……………」

「はい……………」

「助けに来るのが遅れてすみませんでした。無事で良かったです。。。」

笑顔の映司になのははかおを赤くする。

「。。。。私の方こそ。。。。ありがとうございました。。。。
かつこ良かったです映司さん。。。。」

「。。。。あれ？」

「。。。。！　すみません！　私ったら名前で。。。。」

「いえいえ。俺の方も名前で呼ばれる方が仲良さそうでいいですし
なんか親しくなれた気がしますから気にしないでください。」

「なんなら私も名前で呼んで。。。。」

「なんで？」

「。。。。いや。。。。名前で呼ぶんだからこっちも名前の方
がいいんじゃないかなあ。。。。って。。。。」

「ああ。。。。。そういうことか。。。。。わかったよ。。。。えっと。。。。
・なのはちゃん。」

すると途端になのはの顔の温度が急上昇する。

「えへへ。。。。。もう一回呼んで」

「なのはちゃん」

「もう一回」

「なのはちゃん」

「もう一回」

こんなやり取りをヴィヴィオと来人、特にヴィヴィオは肩が痒そうに眺めていた。

なのはが怪我の痛み気づくのはこんなやり取りがあと数十回続いた後になる。

その後映司は合流した来人の家に泊めてもらうこととなる。

翌日・翔太郎の病室。

「失礼しまゝです。」

病室に訪れた来人と映司。

そこにいたのは……。

「よう来人、映司。」

「こんにちは。それとそちらの方は初めましてかな……。スバル・ナカジマです。翔太郎さんの彼女です。」

ベッドに座る翔太郎とそばで座るスバル……。

「君が……オーズか……。」

「……………」

コーヒーを入れる仮面ライダーアクセルこと三童竜、仮面ライダーエターナルこと葵炎克己が壁に寄りかかっていた。

「ど、どうも！ 騎野映司と言います。」

来人や翔太郎とはまた違った雰囲気の二人に映司は緊張する。

「緊張することはない……。」

「さっさと入ったらどうだ……。」

「は、はい。」

竜と克己に促され映司は来人と共に入室する。

すると。

「……………スバル……。」

翔太郎が口を開く。

「何？」

「ちょっとこれから仮面ライダーだけの大事な話があるんだ……。席を……。外してくれるか？」

「わかりました。また来ます。」

「ああ……。。」

スバルは席を立ち……。。

「それじゃあ翔太郎さん。また来ますね。」

「ああ……。。」

部屋を後にした。

途端に部屋に重い空気が流れる。

そんな空気を断ち切ったのは……。

「俺達を集めたからには何か話があるんだろう左……。。」

克己だった。

「話したらどうだ……。、左。」

「「？」

竜もコーヒーを煎れ終え会話に入るが来人と映司は頭を傾げる。

「ああ……。お前らにも用事があるだろうつからまどろっこしいは

なしで単刀直入に言う……。」

「「「「……。」」「」「」

「俺の……足が……動かなくなった……。」

「「「「!」「」「」

「俺は……もうお前らみたいに……前みたいには……
・戦えない……。」

来人や映司に竜、克己すら言葉を失う。

しかし彼らは気づいていない……。

わずかながらドアが空いていることを。

「……。」

忘れ物を取りに戻ってきたスバルは病室前の廊下のドア近くでその告白を聞いてしまい……。

「う……そ……。」

ゆっくりと力なく壁に寄りかかりながら廊下に座り込んだ。

「……翔……太郎……さん……。」

そしてゆっくりとスバルの頬を涙が流れた。

切り札の意味と忍び寄る影とライダーバトル（前書き）

明日から大学の学祭・・・。

正直主催側なのでだるいです・・・。

行きたくねえ・・・（-。-）

切り札の意味と忍び寄る影とライダーバトル

「師匠……もう戦えないって……。どういう……。」

翔太郎の病室で来人は力なく訪ねる。

「ティアナと一緒に別世界に行ってた時、そこで一撃もらっちゃまってな……。辺りどころが悪かったらしく足の神経をやられたんだ……。おかげでこの有り様だ……。まったく自分がいやになるぜ……」

「……………」

「あ那时的傷が……………」

「知っているのか……………」

竜は映司に尋ねた。

「その時俺もその場にいたんです。その時初めてオーズに変身したんです……………」

「素人が……………」

克己が呟くが……………」

「でもこいつはなるべくしてオーズになった……。こいつとは違うやつだが俺は一度一緒に戦ったことがある。」

「ほう……。」

「こいつは異世界ではオーズとして戦っていた……。それで……映司……。お前は欲しい」

「えっ？」

「お前はオーズの力をどうしたい……。」

「俺は……。この力でてを伸ばしたいです……。助けを求める誰かの手を掴みたいです……。」

「……しかし左……。」

竜が口を開きかけるが……。

「というわけだ三童……。こいつが入ったんだから今まで通りの人員になった。俺は仮面ライダーを……降じる。」

翔太郎の一言で竜はいきなり翔太郎に掴みかかる。

「本気で言ってるのか……。」

「ああ……。」

「他人にまかせてお前は高見の見物か……。」

「ああ……。」

「……どうやら足だけじゃなく根性までやられたようだな……。」

「。。。」

「！」

途端に翔太郎も竜の胸ぐらを掴む。

「てめえになにがわかんだよ！ 今の俺は戦うことは愚か普通に歩くことだってできねえただのお荷物だ！ なら仮面ライダーなんざやっても意味がねえだろうが！」

「こんなところで諦めるのかお前は！」

「どうしようもねえんだよ！ どうしようも。。。。。」

「。。。。。」

二人は互いに掴みかかる手を弱める。

「師匠。。。。回復の見込みは。。。。。」

「今先生が探し回ってくれてるが9割がた無理だそうだ。。。。。」

「。。。。。」

「1割か。。。。。」

来人と克己もおとなしくなる。

すると。

「俺は諦めません……。」

「……！」

映司が重い口を開く。

「映司……。」

「翔太郎さん……。俺は仮面ライダーとして戦います。でもそれはあなたの代わりとしてじゃない……。俺は俺にしかねない……。ジョーカーではなくオーズにしかねない……。だからあなたの代わりは誰にも勤まりません……。だからあなたはまた戻ってこなきゃいけないんだ……。」

「でも……。」

翔太郎の目から涙が流れる。

「でも1割だぞ！ そんな数字で……。」

「あなたは何ですか……。」

「！」

「あなたの名前はジョーカー……。切り札でしょう……。どんな逆境だろうがどんなにアンフェアな状態からでも逆転する……。それが切り札のはずです……。」

「……。」

「まあ大富豪からですけど……。違いますか？」

「……………」

「大丈夫です……。どんなに時間が掛かろうが俺は待ってます……。翔太郎さんと一緒に戦うのを……。その日までは……。俺がこの街を守ります。ただの一人の仮面ライダーとして。」

「……………」

すると映司に軽く突きを放ちながら来人が歩みよる。

「映司さん……。それを言うなら僕たちが……。ですよ？
ねっ？ 師匠！」

「ああ……………」

「……………仕方ない……………」

竜もつなずき、克己もそっぽを向きつつ答える。

「お前ら……………」

「だから翔太郎さん……………」

「……………お前らがそんな風に言う以上、肝心の俺が折れてる訳にはいかねえよな……………。わいいがお前ら……………。少しばかり任せる。俺は……。必ず立ち上がってみせる……………。それまで……………頼む……………」

「「はい！」」

「ああ……。」

「……やむを得ん……。」

四人は翔太郎のそばにより皆が拳を合わせあつた。

「……はあ……。」

病院の受付の椅子に座り込むスバル。

さっきまで翔太郎の部屋での映司達の会話を聞き、憂鬱になつていた。

（私なんかには翔太郎を励ますこともできない……。助けられるのはおんなじ仮面ライダーの皆さんだけ……）

椅子に膝を抱えて座るスバルの目からはじわりと涙が滲む。

そしてそんなスバルを外の森林から謎の生物が興味深そうに眺めていた。

病院の前。

「一緒に帰ればいいのに。」

「馴れ合いはあまり好かない……。」

そう言つて克己は自身のオフロードバイクで走り去つて行つた。

残つたのは映司、来人、竜のみである。

「ところで騎野……。」

「？ なんですか三童さん？」

唐突に竜が映司に質問をする。

「明日予定は空いているか？」

「ま、まあ……。」

「実は最近自分が同居人に似てきたと思つていてな……。それに
ガイアメモリではないメダルの戦士とやら……。少し興味がある。
……。」

「はあ……。」

「だから明日……。俺と一戦交えないか……。」

「……！」

映司と来人は啞然となる。

「左や来人はともかく俺や葵炎はお前の実力やオーズの力はまだ知
らない……。実戦よりも早めに知っていた方がなにかと作戦が立

てられるだろう……。」「

「なるほど……。」「

一人納得する来人の隣で……。

「わかりました。では明日……。」「

「ああ……。」「

「でも場所はどつするんですか？」「

「それなら心配には及ばない……。」「

「「？」「」

頭を傾げる二人をよそに竜はディアブロッサに乗り走り去って行った。

翌日。

海上保安隊の模擬戦スペースに二人はいた。

「よく場所確保できましたね。」「

「少し裏技をな。」「

「？」「

そんな二人を……。

「……………」(トキトキトキトキ……………)

モニターから見る二人の女性が……。

(映司君……、映司君……)

(竜さん……、頑張つてな!)

なのはとはやてである。

「まあどちらが勝つてもうちに……は……。」

はやてにクスクス笑う。

昨日、竜に言われた約束『模擬戦スペース貸し出しの代わりに1日独占する権利』に思い出し笑いであるがこれについてはヴォルケンすら知らない。

そしてそんな二人の後ろからは……。

「……………」

「……………お手並み拝見と行くか……。」

来人は落ち着きなさそうに、克己は冷静にモニターをにらんでいた。

「なんでもない……。では！」

「はい！」

模擬戦スペースで竜と映司はそれぞれドライバーを装着する。

『アクセル！』

「変……。变身！」……身！」

竜はアクセルメモリをスロットしパワースロットルを捻り、映司もメダルを三枚スロットさせたドライバーをスキャンする。

『アクセル！』

『タカ・トラ・バッタ！ タトバ！ タトバタ・ト・バ！』

円形と槍状のエフェクトにより竜は赤い装甲に身を包んだ戦士、仮面ライダーアクセルへ……。

映司も三色の円形のエフェクトが身体に合体され、仮面ライダーオーズ・タトバコンボへと変身を遂げる。

「さあ……。」

「……。」

アクセルはエンジンブレードを手にし、オーズは手を半握りにし互いに止まる。

そして……。

「振り切るぜ！」

「はぁ！」

互いに走りだしぶつかりあった。

挑戦と灼熱と新しい家族（前書き）

今回は3章初の女性とのからみ。

やっとかけた。

ちなみにしばらくスバルと翔太郎のなごやかムードは書けません。

挑戦と灼熱と新しい家族

海上保安隊・模擬戦スペース。

「はぁ！」

「うわぁ！」

アクセルのエンジンブレードがオーズを切り裂く。

そしてその場を回転しながら連激を放ち吹き飛ばす。

「動きは悪くはない……。しかしそんなんじゃ左の代わりは勤まらないぞ……。」

「ま……、負けません！」

オーズはトラクローを伸ばしアクセルに斬りかかると、剣と爪による殺陣が始まる。

アクセルのすばやい斬激とオーズの両手による爪激がぶつかりあう。

そして隙をついたオーズがトラクローの間にブレードを挟む。

「何！」

「今だ！」

オーズはもう片方のクローで斬りかかるがアクセルはその腕事態を

受け止めクローを止める。

「！」

「狙いは悪くない……。しかし甘い！」

そのままアクセルは剣先を一瞬オースの腹部に向け……。

『ジエツト！』

刀身型の銃撃をオースに放った。

「うわあああああ！」

『エレクトリック！』

「はあああああ！」

たじろぐオースにアクセルは直ぐ様雷を浴びたブレードで斬りオースを吹き飛ばす。

「がああああ！」

立ち上がるうとするも膝をつくオースに……。

「まだまだ……。お前の力を俺に……。見せてみる……。ガイアメモリではないメダルの戦士の力を！」

アクセルはエンジンブレードを向けた。

「「「「」」」」」

そんな二人の戦いをなのは、はやて、来人、克己は何も言わずにモニターから見物していた。

（あわわわわ……。大丈夫かなあ映司君……。怪我とか大丈夫かなあ……。さっきのあれとか雷とかかなり痛そうだったし……。それに竜さんも少し手加減しようよぉ〜）

（なんや竜さん……。戦いだと随分積極的やなあ……。うちにもあれぐらい積極的に迫ってくれたら……。少しくらいは激しくたつて……。ああ、いかん。よだねが……。）

約二名を除き……。

「どう思いますか克己さん……。」

「……。あの騎野……。とかいうやつ、まだぎこちないな……。」

仮面ライダーである二人は冷静にオーズを観察していた。

「俺や来人は元から体術を習っていた……。三童や左に関しては経験から即座に対応できる柔軟性がある……。しかしあいつにはどちらもない……。」

「なるほど……。でも……。」

「？」

「オーズの力はまだわからない点が多いです……。それにまだ映司さんには取って置きがあります。」

「ほう……。」

二人は再びモニターに視線を移した。

「なら……。こいつで……。」

オーズは左のスロットにメダルを入れスキャンする。

『タカ・トラ・チーター!』

オーズはタカトラターへとチェンジし……。

「はっ!」

高速移動に入りアクセルの斬激をよける。

「!」

そして接近し連続蹴りを放つ。

「はあああああああ!」

「!」

そのままアクセルを蹴り飛ばす。

「やるな……。ならこつちも……。」

『トライアル!』

アクセルはトライアルメモリをドライバーにスロットしパワースコ
ットルを捻る。

『トライアル!』

アクセルの身体が黄色くなりその後円形のエフェクトが下から鎧を
剥がすようにアクセルトリアルへと変身を遂げる。

そしてオーズはトラクロー、アクセルトリアルは格闘でぶつかり
あう。

「はああああああ!」

そしてトラクローの斬激を避けたアクセルトリアルは懐に連続蹴
りを叩き込み吹き飛ばす。

「ぐう……。。」

膝をつくオーズにアクセルトリアルも動きを止める。

「どうした……。もう終わりか……。」

「いや……。疲れるから使いたくなかったんだけど……。まだ
これがあります。」

オーズはトラクローを振り回すも回避、アクセルトライアルの蹴りも紙一重で避けられ互いに有効打を与えられないまま2つの残像のぶつかりあいが続いた。

「……………ついでけない……………」

「ほんまはやすぎやで……………」

見学スペースではなのはとはやてが目を凝らしてモニターの二人を見ようとしていたが双方共に100mを0.2秒台で走る仮面ライダー……………。

生身の人間が目視などできるわけがなかった。

そして……………。

「……………なかなかすばしっこいな……………」

「これはすばしっこいの度を越えてると思いますけど……………」

克己と来人も目を凝らしてなんとか後を追っていた。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

息を切らすオーズ。

オーズの同色メダルのコンボはかなりの体力を使う。

しかしそんなことは昨晚初めてコンボを体験した映司しか知らないことである。

「……どうした……。もう息切れか……。」

「なんか……この姿……、かなり疲れるんですよ……。」

「まあかなり能力は高めだからな……。なら！」

「はい！ こいつで決めます。」

アクセルトライアルはトライアルメモリを抜き、オーズはオースキヤナーを掴む。

『スキヤニングチャージ！』

そしてアクセルトライアルはトライアルメモリのスイッチを入れ、オーズはドライバーをスキャンする。

「はっ！」

そしてオーズは目の前に発生した3つの円ごしに駆け出す。

「はあ！」

アクセルトライアルも駆け出す。

そして……。

「はああああああ！」

トラックローにスキヤニングのエネルギーを込めたガツシユクロスの連激とマシンガンスパイクがぶつかりあう。

「うわあ！」

「ぐっ！」

そして互いに総裁されたエネルギーが互いに跳ね返り双方共に反対方向に吹き飛ばされ壁に叩きつけられ周囲に煙が立ち込める。

徐々に煙が晴れるとそこに……。

「ぎゅ〜」。

「……ふう……。」

は目を回し気絶した映司と座り込む竜がいた。

するど。

「映司くうん！」

「映司さあん！ 竜さあん！」

「竜さあん！」

「……………」

二人に駆け寄るなのは、来人、はやて、克己。

「映司くん、大丈夫？」

「な、なんとかね……………」

「無理しすぎですよ。」

映司を介抱するなのはと来人。

そんな三人を竜と克己は見ていた。

「どうだ……………オーズは？」

「まだまだ戦いかたは未熟だが……………」

「？」

「後々化けるだろうな……………」

「……………化けるまでが一苦労か……………」

克己はそう言い残すとその場を去っていった。

「……………素直じゃないやつだ……………」

「竜さんもな」

「そうか？」

「自覚のない人やなほんま……。」

「……すまん……。」

「ええよ別に　それよりも……。」

「？」

「約束忘れないでな」

「ああ……。問題ない……。」

「忘れんでな　とりあえずは怪我治さな。せつかくのいい男が台無しや」

「ああ……。」

「とりあえずなのはちゃん！」

「？　何？」

はやてに呼ばれなのはも答える。

「竜さんはうちが面倒みるから大丈夫や。映司さんどないする？」

「こっちは大丈夫。竜さんお大事にね。」

「さよか。わかった。ほんじゃな」

「うん。」

はやては竜を支えながら模擬戦スペースをあとにした。

「それじゃ来人君、私の車まで運ぶの手伝ってくれる?」

「それが……。」

「?」

「実は家に今日から親戚が泊まることになってまして……。映司さんの部屋が……。」

「……。」

「……ないんですよ……。」

「……。」

笑顔のまま固まるのはと冷や汗をかく来人。

「べっしまじょう……。」

「うっっん。しょうがない　ここは私が一肌脱ぐよ」

「はい?」

「とりあえず運ぶの手伝ってくれるかな?」

「はぁ……。」

来人はなのはと共に気絶したままの映司を担ぎなのはの車まで運んだ。

なのはの「一肌脱ぐ」という発言の意味は後に知ることとなる。

「……………ん……………」

目を覚ます映司。

目の前には元の家でも来人の家の部屋でもない知らない天井。するとドアからノック音が鳴る。

「！ど、どっぞ。」

知らない場所だけに少しは警戒する映司だったが……。

「あ、起きたかなあ。」

声の主、高町なのはを見たことで一安心する。

「ここは？」

「私の家なんだけど……。映司君、来人君の家にいられないって聞いてたから……。」

「えっ。なんでそのことを？」

「来人君から聞いてね。荷物も持ってきてるよ。」

「ありがとう。じゃあ……。」

映司はベッドから起き上がる。

「お世話になりました。」

そして自身のリュックを持ち退室しようとするが……。

「ちよっ、どこいくの？ 泊まる場所は……。」

「大丈夫 クラナガンも慣れてきたしいざとなったら野宿でも……。」

「駄目だよ。クラナガンはなにかと物騒だし、夜ドーパントに襲われたら……。」

「大丈夫だよ。俺仮面ライダーだし……。」

「大丈夫じゃないよ。」

「大丈夫」

「大丈夫じゃないよ。」

「大丈夫だって。」

「大丈夫じゃない！」

なのはが怒鳴る。

「は、はい！」

「いくら仮面ライダーだからってずっと神経使ってたら気が滅入っちゃうし夜はなにかと冷えちゃうし・・・それに・・・。」

「？ それに？」

「・・・映司君には・・・わ・・・私の近くにいってもらいたいの！」

なのはが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「？ なんで？」

「それは・・・。わ・・・私は有名人だから夜襲われちゃうかもしれないじゃない？ だからぼ・・・ボディーガードが欲しいの！」

なのはは髪の毛を指で捻りそっぽを向き、頬を赤くする。

「ボディーガードもなにもなのはちゃんなら・・・。田舎者の俺でもなのはちゃんは知ってるよ。なにせエースオブエースだし・・・。なのはちゃんにはボディーガードは・・・。」

「わ・・・私だってプライベートは普通の女の子なんだから！ か弱い乙女なんだから！ 男の子だったら少しは女の子を守るく

らしい気配りは持ってよね！」

「うっ……ごめんなさい！」

「あ……謝るぐらいだったら考え改める？」

「いやでも……。」

「大丈夫だよ。うちにはヴィヴィオもいるし……。ああヴィヴィオは私の娘ね。」

「え？　なのはちゃん結婚してたの？」

「いや、それは……。」

「そりゃそうだよな。なのはちゃんくらい綺麗な人なら周りの男は放っておかないよね……。」

「わ、私が？」

「？　うん。なのはちゃんが……。」

「……私まだ結婚もしゅ……出産もまだんだけど……。」

「えっ？」

~~~~~数分後~~~~~

「なんだ。そういうことかぁ……。」

ヴィヴィオの説明を終え映司は納得する。

「うん。ごめんね。なんか勘違いさせちゃって……。」

「ううん。娘さんもいるんなら俺がいても大丈夫かな……。」

「じ、じゃあ……。」

「いつまでになるかはわからないけどしばらくお世話になります。」

「はい お世話します ちなみにさあ……。」

「？」

「幼女趣味とかは……。」

「何それ？」

「なんでもない……。それじゃあ新しい家族さんにお夕飯頑張らないと」

「あつ、俺も手伝うよ。」

「いいよ。映司君は。座ってて。」

「少しくらい手伝わせてよ。俺もこの家の一員なんだから。」

「……じゃあ……お願いしようかな……。」

「わかった。」

二人は退室し台所までの廊下を歩く。

少し間が空いた二人の間をなのは自身が自ら狭めたことを映司は知らず知らず、二人は台所へと歩いて行った。

「……………(じい〜〜)」

そんな二人をヴィヴィオの部屋のドアの隙間からヴィヴィオと来人が盗み見していた。

「ねえヴィヴィオ……………盗み見なんて悪趣味だよ……………」

「まあまあ……………なのはママにも春が来たってことだよ」

「春ねえ……………」

「私の後輩ですけどね」

「え？　今ヴィヴィオに春が来てるの？」

「……………来人さん……………」

「何？」

笑顔のまま怒気を纏うヴィヴィオに来人は声を裏返す。



「自覚がないって恐ろしいですねえ〜」。

「すみません・・・。」

訳がわからずも謝る来人だった。

そして今日、映司は残りの二人の仮面ライダーに認められ、高町家の居候としてクラナガンに自身の居場所を見出だした。

番外編・学祭とメイドと執事（前書き）

連続投稿になりました。

ちなみに今回は時系列的には3章突入前です。

番外編・学祭とメイドと執事

「いらっしゃいませ〜」

「い……いらっしゃい……ま……せ……」

「うん。カッコいいですよ来人さん！ アインハルトさんも可愛い  
です」

学園祭のメイド・執事喫茶でホール担当になった執事姿の来人とメ  
イド姿のアインハルトにヴィヴィオは笑顔で答える。

ちなみに学祭があるのは中等部のみである。

「でもアインハルト……」

「アインハルトさんは少し緊張しすぎですよ……」

来人とヴィヴィオの視線にはスカートの裾を恥じらいながら掴むア  
インハルト。

そんなアインハルトに不覚にもドキツとした来人もいたり……。

「でも可愛いよアインハルト。本物みたい」

「そう……ですか？」

来人の一言にアインハルトは少し嬉しそうに笑う。

「来人さんもカッコいいです……。」

「そうかなあ……。なんか恥ずかしいけど……。中等部に入っ  
て初めての学祭だからがっぽり稼がないと！」

「ははは……。。」

ヴィヴィオはそんな来人に苦笑いする。

「そんなわけでアインハルト！」

「は、はい……。」

「これから本番まで毎日特訓だよ！」

「ま、毎日……。ふ……。二人つきりで？」

「？ ま、まあアインハルトがそっちの方がいいっていうなら……。  
」

恥じらうアインハルトにつられ来人まで照れて頬をかく。

しかし一人……。

「来人さあ……ん？」

「は、はい……！」

いつの間にも後ろにいたヴィヴィオに来人は途端に硬直……。

「私も付き合いますよ？ なにせ二人つきりなんてアインハルトさんが心配ですから」

笑顔のヴィヴィオ……。

しかし後ろには黒い何かが見える。

「な……何がかなあ……。」

「それはもう若い二人が密室に二人つきりだなんてアインハルトさんが襲われたらいけませんし……。」

「いや……僕らまだ子供なんだけど……。」

「でも来人さんになら……。」

ぼそりと呟くアインハルトだが来人には聞こえない。

ヴィヴィオにも聞こえなかったが何やら女の勘で察したヴィヴィオは……。

「なので私も付き合います……。」

「はいい！？ いやでもさあ……。」

「私がいたらお邪魔ですか？」

背中に何やら大きい鎌を構えたスタンドを携えたヴィヴィオには逆らえない来人とアインハルトは……。

「「よろしくお願いいたします……。」

「な〜んか善意がないですよ〜〜?」

髪に隠されたヴィヴィオの額に血管が浮き出る。

二人はなんとなく今のヴィヴィオの危険性を察し……。

「「よろしくお願いいたします!」」

はつきりいさぎよくお願い……。

というより脅迫に負けた。

「よろしい」

まだ黒い笑顔を浮かべるヴィヴィオに二人はびくつくしかなかった。

その後当日まで練習は続いた。

特に来人が。

学祭1日目・当日。

「「「お帰りなさいませ! ご主人様!」」」

「「「お嬢様!」」」

来人とアインハルトはそれぞれの執事服、メイド服を身に纏い接待していた。

(うっっ)。やっぱり恥ずかしいですっっ)

特訓したにも関わらず未だに服装が恥ずかしいアインハルトはもじもじしながら接客をする。

そんなアインハルトに萌死そうな方々もいたり・・・。

そんなアインハルトを・・・。

「か・・・」

「か・・・」

「『可愛い』」。『』

クラスの男子達ははたからアインハルトをテレ顔で眺めていた。

「皆・・・、仕事しようよ・・・。」

冷静に注意する来人だが・・・。

「馬鹿者！ あんな可愛いメイドを舐め回・・・ごほん！ 見ない男がどこの世界にいる！」

「いまなんかすごいこと言わなかった!？」

「「「「気のせい気のせい」「」「」

「・・・・・・・・それになんか女子の皆の視線が・・・・・・・・」

来人の見る方向には男子達を軽蔑の目で見る女子達が。

「「「「気にしたら負けだ!」「」「」

「なんて前向き・・・・というかポジティブ!」

そんなことをしていると・・・・・・・・。

「来人さあ〜ん。」

「! 何? アインハルト?」

男子達が何事もなかったかのように仕事をする中、アインハルトが来人に歩み寄る。

「「」指名です・・・・・・・・。」

「いや・・・・・・・・。ここはホストじゃないから・・・・・・・・。ていうかなんでそんなことを!?」

「前にテレビで・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・子供は早く寝なきゃダメ!」

「来人さんは?」



「僕もだけでも！ でそれは誰？」

「そ……。」

「？」

「それは……。」

「こんにちわ来人さん」

「……。」

「どうかしました？ おかえりなさいませは？」

来人がジト目でみる先には笑顔のヴィヴィオがいた。

「……おかえりなさいませお嬢様……。」

「はいはい」

「お嬢様……。おひとつ良いでしょうか……。」

「なあにかな」

「なぜここへ？」

「だって小等部には学祭がないからお客さんとして」

「さいですか……。リオとコロナは？」

「ああ、二人なら……。」「

「でりゃあああああ！」「

「がんばれ……。リオ……。」「

リオはゲーム研究会の作ったゲームに、コロナはそんなリオをうるから応援していた。

「なるほど……。」「

「それじゃあ執事さん」「

「？」「

「ご奉仕お願いします」「

「！？なんで僕！？」

「それは……。」「

「？」「

「……。」「

もじもじするヴィヴィオ。

「どうかした？」

「ら．．．ら．．．ら．．．ら．．．」

「らっ」

「来人さんがいいからです！」

いきなりの大声に来人は驚き周囲の男子からは嫉妬、女子からは恋愛ドラマをみるような目でみられる。

特に男子からの視線はエンジンブレードやらマキシマムセイバーやらスペリオルソード並みに鋭い。

しかし何よりも鋭いのはお盆に指力のみでヒビを入れるインハルトだったり．．．。

「わかりましたから静粛にお願い！　なんだか身体に穴が空きそう．．．。目からビームが出てきそう．．．。」

「じゃあよろしくお願いします」

「．．．．．では。」

郷に入りては郷に従えか来人は注文を受けケーキとカフェオレのセツトを運んだ。

前日に何やら独身女性教師、執事喫茶大好き国語教師（仮）の指導ていどうしやうしんぎを受けた来人は本物並の手さばきでミルクを入れたり満面の笑顔で接待した。

その度にヴィヴィオからは熱烈、男子達からは嫉妬、無言かつ笑顔のインハルトからは嫉妬がRPGで何周ぐらいかした後の猛者並になったようなオーラをまとっていた。

しかしそんな学祭も2日を終え来人達のメイド・執事喫茶は予想外に稼ぎ終えたが……。

「来人さん……。」

「はいいいー!」

インハルトの部屋に呼び出された来人はフォークを押し付けられ壁に追い詰められていた。

「……………い……。」

「はへ?」

「……………る……。」

「る……い……?」

「……る……い……?」



「美味しいです……。」

まだ借りていた執事服に身を包んだ来人をそばに控えたアインハルトは頬を赤くして答える。

目線は何故か来人に向いている……。

すると。

「執事さん……。」

「いかがしましたか？」

「……どうかあの時みたいに膝枕で耳掃除をしてくれませんか？」

「……。」

思わぬアインハルトの注文にフリーズする来人。

先日の学祭時にヴィヴィオがした注文と同じであった。

(あの時はヴィヴィオが涙目だったから……)

すると戸惑う来人に……。

「ヴィヴィオさんはしてあげたのに私にはしてくれないんですか……。」

アインハルトは涙目で迫る。

「うっ。。。。。」

「。。。。。。。」

「。。。。。。。」

「。。。。。。。」

「。。。。。。わかりましたお嬢様。。。。。」

耳搔きを持つ来人にアインハルトは自分が頼んだにも関わらずおどおどしながらも、来人の膝に頭をのせた。

そして来人の耳搔きが始まり互いに無言になる。

すると。。。。。

「。。。。。。来人さん。。。。。」

急にアインハルトが口を開く。

「どうかなさいましたか？」

「。。。。。。今回はともかくあまりよそよそしいのはいやです。。。。。」

「えっ？」

「ですからこれからはもっと仲良く……。今よりも親密に……」

「？」

「……なんでもないです……」

「……でもアインハルト……」

「はい……」

「僕ももっとアインハルトと仲良くなりたいよ？」

「ホントですか……」

「うん　だってアインハルトは大切な友達だもん」

「……友達止まり……ですか？」

「えっ？　……じゃあ……し……親友は？」

「……もういいです……」

「？」

（……まあ友達から……っていつことでこれから……）



耳搔きが終わるといつも通りの仲で二人はいつも通りの他愛もない談笑をした。

互いに思っていること（片方は想っているの間違いだ）を確認しそんなことを嬉しく感じながら。

「来君」

「な、何？」

「わ・た・し・に・も」

「うえ~~~~~!？」

数日後来人はミウラのお陰で二度あることは二度あることをしみじみ味わうこととなる。

陰と初朝とメダルの怪物（前書き）

今回はオリジナルが入ります。

詳細については他の二人も出てから。

## 陰と初朝とメダルの怪物

クラナガン都内・夜。

「なんなんだ……なんなんだお前！」

足を振るわせながら壁に座り込む男性。

その先に立つのは人ではなく……。

「お前の欲望……解放しろ……。」

その怪人はただそれだけを言いセルメダルを手にする。

男性の額に投入口のようなものが現れ怪人はメダルをそこに入れる。

すると男性の身体から白い包帯に巻かれたような怪物が現れる。

「な……なんなんだよこいつ！ お前、俺に何をした！」

「何も……。ただお前の欲望を解放しただけだ……。」

そして怪物は新たに現れたもう一体の怪物と暗闇の中へと消えていった。

ほぼ同刻。

「「メダルで変身する仮面ライダー？」」

「ああ……。」

その夜、八神家で食事をする面々の中、声を揃えて驚くのはザフィ  
ーラ以外の三人の騎士達。

「メダルを変えることにより頭、胴体、足を入れ換えることができ、  
その三枚が同じだとより強力な力を発揮できるか……。」

「戦いたい……とか言っなよ……。」

「……なぜわかった……。」

「同じ屋根の下で暮らしてる以上嫌でも考えてることはわかる……。特にお前はわかりやすい……。」

「……。」

「凶星か……。」

黙るシグナムに竜は若干自分も人のことを言えないと内心感じてい  
た。

「せやけど映司さんも苦労するで？ 何せ相手はあのなのはちゃん  
やから……。」

「……なにがだ……。」

「……鈍いやつちやなあ……。」

「？」

「なにがだよはやて……。」

「わかってないわねヴィータちゃん。それ……。」

シヤマルは唐突にヴィータに耳打ちをする。

「……やつとあいつにもいいやつができたか……。」

「ティアナも好きな人がいるみたいだし残るはフェイトちゃんだけね。」

「せやなあ。」

「？……！　そういうことか……。テストロッサも頑張らねばな……。」

女子達の会話の流れから察したシグナムだが……。

「……なんのことだかまるでわからん……。」

「……同じく……。」

竜とザフィーラは蚊帳の外であつた。

その後皆々がそれぞれの部屋で眠りにつく。

竜に関しては夜に襲ってくるというある狸対策にライブモードのレポートフォンと何重もの鎖をつけ。

「くしゅん。」

「……………風邪か？」

「かもしれません……………体調管理も気を付けなさいと。」

時はたち翌朝。

「……………」

顔を真っ青にする映司の目の前には……………

「……………」

逆に赤いなのは。

ここはなのはの部屋。

なおかつ早朝。

といっても映司が襲いにきたわけではない。

~~~~~数時間前~~~~~

「ふあ~~~~。」

お手洗いに起きた映司は蛇行で眠たそうに壁にぶつかりながら廊下を歩く。

「…………あれ？ 俺の部屋…………。」

実は寝ぼけてるのもあって映司は自身が寝ていた部屋を見失っていた。

そして目の前に部屋のドアが…………。

「…………まあいいか…………。」

そういつて映司は部屋に入りベッドに入る。

その手に何か柔らかいものが触れその感触にはまりさわり続けたりした。

なにやらあえぎ声が聞こえたような、なかったような。

そして徐々に睡魔に負け眠りについたが…………。

~~~~~

朝起きたら目の前になのはの顔があった。

そして今、映司は仁王立ちしたなのはの前で土下座している。

「…………お…………おはよう…………。」

「…………映司君…………、初日からいきなり襲ってくるなんて…………。」

「ごめんなさい!」

映司は床に頭突きするぐらいの勢いで頭を下げた。

「…………映司君…………。なんで私を襲ったの?」

「いや! えつと…………寝ぼけてて部屋を間違えて…………、事故…………。そう事故だったんだよ! だからわざとっていうかやりたくてしたんじゃない…………。」

「それじゃあ私は襲われる価値もない女ってこと?」

なのはは目を潤わせる。

「え!?! いや、そういふことじゃ…………。」

「じゃあ映司君はなんで私の部屋で寝てたの? なんで何度も私の胸を?」

「いや、それは…………。ていうか起きてたの? ていうか俺なのはちゃんの胸を触っちゃったの!？」

「がっちりと…………。」





「それで？」

「……………」

「……………」

そして煮を決したなのはが怒鳴る。

「もう！ 今日付き合っってって言うてるの！ 気づいてよ鈍感！」

「すみません……………なんだそんなことかあ……………わかつて」

映司が言いかけた途端……………

バッタカンドロイドが現れた。

「何これ……………」

なのはが目を点にするが……………

「何か出たんだ……………ごめんなのはちゃん！ 少し出てくる！」

「ちよつと映司君！」

なのはの話も聞かずに映司はすぐさま部屋に戻りヘルメットを手に高町家を後にした。

クラナガン都内では包帯を身体に巻いたような怪物が人達を襲って

いた。

「うわぁ~~~~~!」

怪物がサラリーマンに襲いかかりかけたが……。

爆音を響かせながら赤いオンロードバイクが怪物を突き飛ばす。

「大丈夫か？ はやく逃げろ!」

「は、はい!」

バイクから降りながら竜はサラリーマンに促しサラリーマンもすぐさまその場を後にした。

「貴様が……。来人や映司が言っていたメダルの怪物は……。」

竜は腰にアクセルドライバーを装着……。

『アクセル!』

「変……身!」

アクセルメモリをスロットしながら駆け出した。

都内をライドベンダーで疾走する映司。

すると映司の目の前に謎の怪人が現れる。

「！」

急停止する映司。

そのままベンダーから降りる。

「お前は……。」

その怪人は妙な姿であった。

剣を持ち腰には金色のベルトを着けた怪物……。

「悪いがオーズ……。この世界に来てまだセルメダルが足りない！  
だから邪魔はしないで頂こう！」

怪物は剣を掲げ映司に襲いかかる。

「お前は一体……。」

映司はドライバーをつけメダルをスロットしていきながら避け間合いをあける。

「コアメダルから生まれし怪人、グリードの一体！ 名をデスハ！」

デスハと名乗った怪人は剣から破壊光弾を放ち映司は炎に包まれた。

しかしそこにいたのは映司ではなく……。

「あぶなかつたあ……。」

オーズ・タトバコンボだった。

「オーズ、せいぜい楽しませろ！」

「なんだかわからないけどやらなきゃやられる！」

オーズは襲いに駆け出すデス八に構えた。

**最強コンボと知識と暗躍（前書き）**

決着です。

今回でやっと三人揃います。

## 最強コンボと知識と暗躍

「うわあああああ！」

火花を散らしながら吹き飛ばされるオーズ。

「どうした……。そんなもんか……。」

デスハは剣を構え歩み寄る。

「……まだ！」

オーズは以前慎太郎からベンダーと共にもらっていたメダジャリバーを手にデスハに斬りかかる。

しかしデスハはオーズの乱撃を容易く受け止める。

「踏み込みがまだまだ甘い……。戦ったことはないが先代の王の方がまだ手応えがあるだろうなあ！」

デスハは剣で切り裂き突きでオーズを突き飛ばす。

「くっ！」

「それに本来のコアの力がそんなものか……。期待はずれにもほどがあるわあ！」

デスハは右手のハサミから電撃を放つ。

「があああああああ！」

その電撃はオーズの身体から火花を散らし膝をつく。

「つ・・・強い・・・。でも俺だって仮面ライダーのはしくれ・・・  
。こんな所で諦めない！」

オーズはオーメダルネストから緑の二枚のメダルを取りだしスロツトする。

「一対一でだめなら数で押しきる！」

そしてスキャナーでドライバーをスキャンする。

『クワガタ・カマキリ・バッタ！ ガツタガタガタキリツバ！ ガ  
タキリバ』

クワガタとカマキリの紋章によりオーズの頭部と腕が変化、緑のメダルのコンボ・ガタキリバコンボへと変身した。

「うおおおおおおおおお！」

オーズは空へ咆哮を放ちデス八へと駆け出し、走りながらオーズの身体からは文身体・ブランチシェイドが大量に現れる。

「数で来たか。面白い！」

デス八は剣を構え計50体のガタキリバを迎え撃った。



クラナガン都内

「はぁ！」

アクセルは途中変化したカマキリヤミーにエンジンブレードを叩きつけ火花を散らしその度にセルメダルが辺りに散らばる。

「手応えがない……。メダルの力とはその程度か！」

アクセルのラッシュにカマキリヤミーは攻めつづけられ、吹き飛ばされる。

カマキリヤミーも斬りかかるが……。

「はぁ！」

アクセルはパワーロットルを捻りながら蹴りを放つ。

それにより両足のタイヤが回転し、カマキリヤミーの鎌を両断する。

そのまま後ろ回し蹴りによりカマキリヤミーを蹴り飛ばす。

「貴様らの正体なら辺りにばらまいてくれたメダル達で間に合う。これで決める！」

アクセルはドライバーのマキシマムクラッチを引く。

『アクセル・マキシマムドライブ！』

パワースロットルを捻るアクセルの身体を深紅の炎が包み駆け出す。  
そして……。

「でりゃあああ！」

後ろ飛び回し蹴り・アクセルグランツァーがドレッドパターンを残しカマキリヤミーに放たれカマキリヤミーは爆発、周囲には大量のセルメダルが散らばる。

「今の怪人……。全てこんなメダルで……。」

アクセルは散らばったメダルを拾おうとする。

その途端。

「！」

アクセルがエンジンブレードを盾にした途端辺りを爆発が襲つ。

アクセルがゆっくりとブレードを下げるとそこには……。

「誰だ……。お前達は……。」

ヤミーとはまた違った怪人が二体セルメダルを全て拾い上げていた。

「あなたがアクセル……。お会いできて光栄です……。」

「こんにちは。」

三叉の槍をもった怪人は一礼、素手の怪人はじつとアクセルをにらむ。

「貴様らか……、この怪人を作ったのは……。」

「怪人……。ああ……。ヤミーのことですか……。」

「ヤミー？」

「それにヤミーを作ったのはデス八であって私でもウゼスでもありません。ちなみに私はドポセインといいます。」

「ウゼスとは僕のことね。」

素手の怪人、ウゼスは自身を指差す。

そのままドポセインは話を続ける。

「どうやらメダルについて何も知識がないようですね。」

「ああ……。悔しいが俺達はメダルに對しまるで知識がない……。」

「我らの糧は人間の欲望が元で生まれるメダル……。私達グリードはヤミーとは違い特別なメダル、コアメダルを核とした存在……。」

「貴様らがヤミーとやらを作ったのはこのセルメダルを手に入れるためか……。」

「はい……。私達はコアメダル一枚にセルメダルを纏った存在で、まだセルメダルが足りないのです。ですからよりヤミーを貪らせてメダルを手に入れたかったのですが……。」

「どうやらヤミーとやらは人の欲望の化身……のようなものか……。」

「察しがいいですね。」

「そして俺はお前達にとっては邪魔者か……。」

アクセルはエンジンブレードを二体に構える。

「あいにく今日のご挨拶とちょっと手がかりを教えにきただけです。戦う気はありません。とりあえず今日は……。」

ドポセインとウゼスはアクセルに背を向け立ち去っていった。

「……グリードに……。ヤミー……。ある意味ドーパントよりもたちが悪いな……。」

アクセルは唯一手に入れていたセルメダルを見つめる。

「……はあ！」「」「」

大量のガタキリバの分身がデス八に斬りかかるが……。

「生ぬるいわあ！」

デスハは剣で分身達を斬り伏せていく。

その中から……。

「はあ！」

本体のオーズが斬りかかる。

「！ くっ！」

デスハは分身に気をとられ本体への反応が遅れ一撃を受け大きく後ろにのけぞる。

「今だ！ はあ！」

「」「」「はあ！」」「」

そのまま大量の分身とオーズはラッシュをかけデスハを突き飛ばす。

「やるな……。オーズ……。」

「はあ……。はあ……。はあ……。でも……。きつつい……。だからこれ以上は……。」

『スキヤニングチャージ！』

オーズはスキヤナーを手にしドライバーをスキャンし……。

「はあ！」

「「「「はあ！」「」「」

「「「「「せいやあああああああ！」「」「」「」

全員で跳躍しガタキリバキックをデス八に連続で放つ。

「ぐっ……。」

全てを剣で受け止めるデス八の足元にヒビが入るが……。

「こ………しゃくなあああ！」

剣を振り衝撃波でガタキリバを吹き飛ばす。

「ぐあああああああ！」

オーズは地面に叩きつれられ分身達が消滅する。

「やるな……オーズ……。」

「あなたも……。」

肩で息をする双方。

「こいで殺るのは惜しい……。まだ戦いたいが……。そのうちにな……。」

デスハは跳躍しその場を立ち去る。

オーズもあとを追おうとするが……。

「ま……………て…………。」

変身が強制的に溶け映司が膝をつく。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………。けっ……………じっ……………  
・コンボって……………疲れるなあ……………。」

映司はその場に仰向けになり……………。

「でも……………頑張らないと。今のこの力なら掴めるんだ……………。  
助けを求める……………誰かの手を……………。なら……………俺は立  
ち上がるだけ……………。」

映司は身体を起こす。

すると映司が座り込んでいる場所に頭○字D並のドリフトをかまし  
ながら車が止まる。

その中から……………。

「映司君!」

なのは飛び出しそのまま映司にダイブする。

「なのはちゃん!? どうしたの?」

「なんかニュースで怪人がたつて聞いて……。映司君が心配が  
。。。」

涙目になるのは。

「なのはちゃん。。。」

「余計な心配かもしれないけど翔太郎さんや竜さんと違って負担が  
大きいから心配で。。。」

「俺なら大丈夫だよ。。。。心配してくれてありがとね。」

「ホント？ ホントに大丈夫？」

「うん。」

映司は立ち上がろうとするがふらつき膝をつく。

「映司君！」

「大丈夫大丈夫。。。」

「大丈夫じゃないよ！」

「大丈夫だって。」

「大丈夫じゃないってば！」

「心配いらな。。。「大丈夫じゃないったら大丈夫じゃないの！」



「は、はい！」

なのはに怒鳴られ正座する映司。

「ホントは今日一緒にデー・・・じゃなくてお出かけしようと思っただけど予定変更！」

「えっ？ さっきのってそういうことだったの？」

「そうだったよ！ そうだったけど予定変更なの！ 今日家でおとなしくすること！ 異論をしたら身ぐるみはがして外に正座！」

(・・・外に正座はいらないかも)

「ええっ？」

「これは高町家の主の命令です！ いいですか！」

「えっと・・・。」

「こんな美人さんが食事までお世話してあげるんだよ。嬉しくないの！？」

「いや・・・嬉しいけど・・・。」

「ならいいでしょ。ねっ？」

「うっっん。でもベンダーは・・・。」

「それなら心配いらないから！ 帰るよ！」

「えっ？ ちよつとお……。」

異論も認められず映司はなのにより車へと引きずられていった。

ちなみにその後レッカー車が出動しベンダーは無事回収されたが、レッカーの使用料はなのはの投げキッスで済まされた。

「はい映司君あーん」

「あ、あーん。」

「……。」

箸をくわえ啞然とするヴィヴィオの前でなのはは箸に食事をつまみ映司に運ぶ。

「ね……ねえなのはママ……。」

「ん？」

「いつの間に映司さんとそんなに……。」

「そ、それは……。」

映司が喋りだそうとした途端なのはがそれを遮る。

「今朝映司君おもいつきり無理したから今日1日はおとなしくする  
って約束してくれたから、今日は1日私がお世話してたの。」

「約束!? 俺そんなの……。」

「まあ今日の分はこんど埋め合わせしてもらっけどね」

「なのはママ強引だよ……。」

「ヴィヴィオもこのくらい来人君に積極的にいかないと。」

「……うっっん。確かに……。」

「とりあえず映司君あーん。」

「……なのはちゃん……。」

「身ぐるみはがされたいの?」

笑顔のそこには何か黒いものをひそめるのはに映司は逆らえず……。

「……あーん。」

おとなしく口を開いた。

ちなみにその後日付が変わってもなお、映司はなのになされるが  
ままであった。

病院・翔太郎の病室。

「……………」

眠る翔太郎のそばでスバルは体育座りしてうつむいていた。

「翔太郎さんの足……………。どうにかして……………治って……………もら  
い……………たい……………」

スバルの目にじんわりと涙がたまる。

そんなスバルを……………。

「……………いいのみつけた」

窓の外からウゼスがセルメダルを手のひらで転がしながらスバルを  
眺めていた。

### 三大グリード（前書き）

名の通り。

今日のフォーゼOPのワンシーン、ベース・エレキ・ファイヤーの揃い踏みを一度やってみたいです。

### 三大グリード

ウゼス：

銀棒コアメダルの一枚を核にするグリードの一体。主に鳥系ヤミーを作り出す。手足の爪を用いた鳥のように俊敏な動きによる近距離の格闘戦が得意。性格は純真で子供っぽい。ネーミングは天空を司る神、ゼウスのアナグラム。

デスハ：

銀棒コアメダルの一枚を核にするグリードの一体。主に重量系、虫系、猫系ヤミーを作り出す。性格が荒い剣を用いたパワーファイター。ネーミングは地下を司る神、ハデスのアナグラム。

ドポセイン：

銀棒コアメダルの一枚を核にするグリードの一体。主に水棲系ヤミーを作り出す。丁寧口調だが一番腹黒く何を考えてるかわからない。三叉の槍を使った中距離戦が得意。ネーミングは海を司る神、ポセイドンのアナグラム。

事件と託されたモノと鳥ヤミー（前書き）

三章初の翔太郎編ですが変身はありません。

## 事件と託されたモノと鳥ヤミ

「……………はあ……………」

病院帰りのスバルはため息をつく。

(先生達は一生懸命翔太郎さんの足の回復に情報収集に走ってるけど……………、私には……………なんの力もない……………)

自身の手を眺めるスバル。

その時。

「くんばんは。」

「！」

どこからか聞こえた声に目付きを鋭くし辺りを見渡すスバル。  
すると。

「こつちだよこつち。」

近くの木から天の神のグリッド・ウゼスが現れた。

「あなたは一体……………」

スバルはマツハキャリバーを構える。



「グリードの一人、ウゼスって言うんだ。よろしくね。スバルお姉さん。」

「私になんのような・・・、ウゼス君・・・。」

「あなたの欲望を満たしにきた・・・。それだけ。」

「私の・・・欲望・・・。」

「うん。今あなたは大好きな人の足を治したいと思っている・・・。僕はそんなスバルお姉さんの願いを叶えにきただけだよ・・・。」

「・・・本当に・・・翔太郎の足を・・・。」

ウゼスの声にスバルは構えていたマツハキャリアバーを下ろす。

「うん。」

「どうやって・・・。」

「それは企業機密・・・だったっけ？ まあどうするかはお姉さん次第だよ。」

「・・・・・・・・あなたが何者かは知らない・・・。悪いことかも知らない・・・・・・・・。でも！ 私は！ 翔太郎には！」

するとスバルの額にメダルの投入口のようなものが現れる。

「了解しました。」

ウゼスはその投入口にセルメダルを投げ入れた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ……。」

街中を走る男性。

彼はミッドでも有名なマラソン選手である。

すると空から怪人が現れ、男性の前に着地する。

「うわあああああ！ な、なんだお前！」

「お前に恨みはない……。用があるのは……。」

「なんだよ……。」

「お前の……足だ！」

その怪人、青オウムヤミーが手を男性の足にかざすと男性の足から光が出てオウムヤミーの手の中に入っていく。

「あ……ああああああ！」

痛みにもだえる男性の足はまるで精気がなくなるように痩せ細っていく。

そして……。

「なかなかよかったぞ……。」

怪人は飛び去っていった。

その後、ミッド内ではこのようなアスリートや健康な人間の足が怪人により衰弱させられる事件が多発した。

「グリード……か……。」

「ああ……。」

翌日、翔太郎の病室に集まった仮面ライダー達は竜からグリードとヤミーについて話を聞いていた。

「そのヤミー……ってのは俺も戦ったことがある……。しかしグリードってのは……。」

翔太郎は亜樹子の結婚式の際、ヤミーと戦ったことがあった。

ちなみにコアの騒動で見たアंकがグリードとは気づいていない。

「奴らはドーパントとは違い人間の欲望からヤミーを生み出す……。」

「人間の……欲望……。」

「……人の欲望とは……。また厄介なのがあらわれたも

のだ……。人間の欲望なんざ底なしだからな……。」

映司や来人とは対照的に冷静な克己に竜が答える。

「その通りだ……。だからこそ俺達はグリードを叩く必要がある……。そこで俺達のガジェットやデバイス、映司はカンドロイドか。それらにこのプログラムを入れる……。」

竜は小さなSDカードのようなものを取り出す。

「これには先日てに入れたセルメダルからのデータを元にはやての知り合い、シャーリーという女性に協力してもらい作ったメダル感のプログラムだ……。まだ未完成だがな……。」

「……未完成でもないよりはました……。」

「まあまあ……。」

克己と来人はそれぞれデバイスを竜に差し出し竜も入力し始めるが……。

「俺……どうしましょう……。」

映司は両手をあげる。

実は映司はデバイスは愚か携帯端末すら持ち合わせていない。

カンドロイドがいるがかなりの量である。

する……。

「だとしたらよお映司、俺の使えよ。」

翔太郎はスタッグフォンとスタッグのギジメモリを映司に投げた。

「え？ でも翔太郎さん……。」

「しばらくつかうことはねえ……。それまで貸しといてやる。」

「どういふことですか？」

「……先生達が見つけてくれてな……。とある別の管理世界で結城丈二っていういい医者があるみてえな……。その世界で手術を受けようと思う……。」

「ホントですか？」

「よかつたああああ。」

来人と映司はハイタッチして喜ぶが……。

「しかしそれでどうして映司にガジェットを渡すんだ……。」

竜がそんな二人を無視し聞く。

「手術の成功率はその人がやっても4、5割……。成功したら環境がいいあっちの世界に滞在してリハビリ、足が治り次第ちつとでも早く復帰したいと考えてる……。それまではこいつは俺が持つても意味ねえ。お前が持ってた方がいいだろ。」

「……………確かにな……………」

「師匠……………」

「映司さん……………」

納得する克己に対し唾然とする来人と映司だが……………

「わかった。プログラムは俺が入力しておく。」

竜も納得する。

「でも竜さん……………」

「勘違いしてるんじゃないのか映司……………」

「え？」

「それまで……………ということはいずれ返してもらったために戻ってくる……………ということだ……………。そうだろう……………。左……………」

「ああ……………。ぜってえ俺は戻ってくる。それまでぜってえ壊すんじゃないぞ……………映司。」

「翔太郎さん……………。わかりました。それまでお借りします。」

「ちよつと映司さん……………」

一人異を唱える来人だが……………

「来人君・・・、翔太郎さんは再び仮面ライダーとして戦うために俺達を信じてこの世界を離れるんだ。」

「・・・・・・・・。」

「だから俺達は翔太郎さんから託されたこの世界や街を翔太郎さんの分まで守る・・・。仮面ライダーとして・・・。」

「・・・・・・・・はい・・・、わかりました。僕も師匠の分まで戦います。」

「うん！ 頑張ろう来人君！」

「はい！」

映司は来人の肩を抱き跳ねる。

来人もそんな映司にこわばった顔を緩める。

「そういえば左・・・。」

「あ？」

途端に竜が翔太郎に聞く。

「ナカジマにはこのことを・・・。」

「いや・・・。まだまだ・・・。スバルには後で話す。」

「そうか・・・。」

納得する竜。

しかしそんな彼らの会話はドアの前で立ちすくむスバルにはまる聞こえだった。

「別の世界……。」

オフロードバイクで走る克己。

すると。

「！」

目の前にオウムヤミーが滑空してくる。

「こいつ……。」

克己はバイクでジャンプし、後輪でオウムヤミーを突き飛ばす。

そして着地した克己はバイクから降り、腰にドライバーを装着する。

「こいつがヤミー……。それともグリード……。どっちにしてもかかる火の粉は払うまで……。」

『エターナル!』



「変身！」

克己はエターナルメモリをドライバーにスロットし展開する。

『エターナル！』

克己の身体を白い装甲にマントが身を包み仮面ライダーエターナルへと変わる。

「さあ……地獄を楽しみな……。」

エターナルのサムズダウンに挑発されてかオウムヤミーが飛びかかる。

「ふっ！」

エターナルは軽く受け流し裏拳で突き飛ばす。

「ドーパントと違いどうやら脳までメダルみたいに浅いようだな……。」

歩み寄るエターナルはオウムヤミーの攻撃を避けその隙間隙間にカウインターを容赦なく叩き込んでいく。

そしてエターナルエッジを装備すると……。

「ていやあー！」

その刀身の短さを駆使し取り回し、すくない動きでオウムヤミーを切り刻んでいく。

そのまま左手に青い炎をまとわせ……。

「せやあ！」

一回転してからのストレートを叩き込みオウムヤミーを突き飛ばす。

「レクイエムは効かないみたいだが……、そのエネルギーを破壊に繋げればお前をメダルに換金することなど容易いことだ……。」

そしてドライバーからエターナルメモリを抜きエッジにスロットしようとする。

その時。

「はあ！」

ウゼスが右から滑空しエターナルを爪で切り裂き突き飛ばす。

「っー！」

エターナルは膝をつきながら着地したウゼスをにらむ。

そのすきにオウムヤミーはその場を飛びさっってしまう。

エターナルも後を追おうとするがウゼスが前を遮る。

「あまり邪魔しないでほしいなあ。あの後ほとんどデスハの欲張りにメダル取られちゃったからぼくもメダルが欲しいんだ。」

「お前がグリード……話によるとウゼスというやつか……」  
「当たり前。君は……」

「エターナル……仮面ライダーエターナル……」

「そう。じゃあエターナル、邪魔しないでほしいなあ。」

「そうはいくか……」

「なんだよお〜。せっかく君のお知り合い、……スバルお姉さんの欲望を叶えてあげてるんだから。」

「何……」

「あのヤミーはね……」

病院・翔太郎の病室。

花瓶に花を入れるスバルと翔太郎の間に重い空気が流れる。

その空気を断ちきつたのは翔太郎だった。

「スバル……」

「……はい……」

「実はな……」

「手術の話なら聞きました……。」

「……そうか……。なら話ははええ……。お前は……。」

「私……。正直翔太郎さんの足は治ってもらいたいです……。でも！」

「……。」

スバルが泣きながら本当のことを話そうとした時、窓から先ほどエターナルから逃げたオウムヤミーが現れた。

「！　なんだてめえ！」

翔太郎はジョーカーマグナムを向けるがオウムヤミーはマグナムを叩き落とし翔太郎の腹部に一撃を放つ。

「がっ！」

「欲望を果たすにはここは不都合だ。」

「！」

スバルもマツハキャリバーを構えるが、オウムヤミーの羽手裏剣を足元に放たれ爆風で壁に叩きつけられる。

「あっ！」

スバルは倒れ気を失い、オウムヤミーは気絶した翔太郎を抱え飛び去っていった。

「翔……太郎……さ……ん……」

一人取り残されたスバルの瞳からは一筋の涙が伝った。

「貴様……」

「彼女の大切な人の足を元に戻したいという欲望はとても強い。だからその欲望をかなえてあげたんだ。君も知り合いなら少しは協力しないの？」

「下らない……。だがそんな下らないことに頭を突っ込まずにはいられない……。それが俺なんでな……」

エターナルはエッジをかまえウゼスに駆け出す。

ウゼスも身体から大量の羽手裏剣を生成する。

そして……。

「はっ！」

ウゼスの手に従い全ての羽手裏剣が一斉にエターナルに襲いかかった。

探索と真意と立ち上がった切り札（前書き）

長くなってしまいました。なんだか微妙に……。

なんだか最近ウルトラマン熱が出てきた自分……。  
でも一番好きなのはジャンボット！  
あのごつさ、惚れてもうたやろ~~~~~！  
来月の a c t が楽しみ。

## 探索と真意と立ち上がった切り札

廃工場内。

そこにパジャマ姿の翔太郎が縛られた状態で気絶していた。

そして……。

「……………！ つう……………」

腹部の痛みを顔を歪めつつ目を醒ます翔太郎。

「ここは……………」

すると。

「！」

オウムヤミーが現れた。

「てんめえ……………」

翔太郎は立ち上がろうとするが足に力が入らない。

そんな間にもオウムヤミーは翔太郎の首を掴み上げる。

「かつ……………」

「欲望を叶えよう……………」

そのままオウムヤミーは翔太郎を地面に落とし2つの羽を取り出す。

そしてその羽を翔太郎の両足に突き刺した。

「ッ！」

痛みに一瞬顔を歪める翔太郎。

しかしその後妙に足に力が入るのを感じた。

「……………足に力が……………。お前まさか……………」

「待っている。これからもいい餌を運んできてやろう。」

そう言い残しオウムヤミーは立ち去っていった。

「……………餌って……………、一体……………」

その場に一人残された翔太郎は再び動きつつ足を呆然と眺めていた。

『バード・マキシマムドライブ！』

「ふっ！」

バードメモリのマキシマムによりエターナルの周囲を羽のようなエネルギーが覆う。



そしてウゼスが放った羽手裏剣がエネルギーに当たり火柱が立つが・  
・。

「・・・・・・・・やはり鳥には鳥か・・・・。」

エターナルは無傷だった。

「うゝゝん。やっぱり素直にやられてはくれないよねゝゝん。」

「愚問だ・・・・。」

エターナルはウゼスに駆け出しウゼスも迎え撃つ。

エターナルエッジのラッシュをウゼスは腕ごと受け止め止めたかと思いきや、ウゼスの鎌鼬を兼ねた回し蹴りをエターナルはローブを回転させ防ぐ。

そして互いに一撃を放ち火花を散らし合い互いに吹き飛ばされる。

「ッ！」

「いつてい！」

すぐさま立ち上がるエターナルだったが・・・・。

「・・・・・・・・ちっ・・・・。」

そこにはすでにウゼスはいなかった。

エターナルは黙って変身を解く。

「…………あれがグリード……。そう簡単には殺らせてはくれなさそうだな……。」

克己が黙ってその場を去ろうとした瞬間、デバイスであるネクロオバーが鳴り出し克己はモニターを開く。

「何のようだ来人……。」

『大変です克己さん！ 師匠がヤミーに拉致されました。』

「…………次から次へと……。」

克己は自身のオフロードバイクに乗ると道にドレッドパターンを残しUターン、病院に向かっていった。

「…………。」

啞然とする克己の前にはヤミーの攻撃によりぼろぼろになった翔太郎の病室。

「突然ヤミーが襲ってきて師匠を拉致したみたいです……。」

「なぜ翔太郎さんを……。」

すでにその場にいた来人、映司は傷ついたスバルを介抱している。

「…………どうやらヤミーを生んだ欲望は左が関係しているよう

だな……。」

その場を観察している竜。

「関係もなにも……、ヤミーの元の欲望はそいつだ……。」

しかし克己はそんな彼らに目もくれずスバルを指差す。

「えっ！」

「スバルさんが……。」

映司と来人は疑うような眼でスバルを見つめるが竜は……。

「ナカジマ……、詳しく話を聞きたい……。」

「……。」

スバルは少し考えた後……。

「わかりました……。」

あの夜、ウゼスにより自分の欲望がヤミーとなった夜のことを語り始めた。

~~~~~数分後~~~~~

「……。」

「スバルさん……。」

「スバルちゃん……。」

「でも考えてみたら本当は私……。」

スバルが口を開きかけるが……。

「それは直接翔太郎さんに言わないと。」

「映司さん……。」

映司がそれを拒む。

「俺達なんか言うよりも言いたいことははっきり本人に言わないと何も伝わらないから……。伝わらないことで誤解やすれ違いが起きるから人は伝えあわなきゃいけないんです。俺達にできるのはスバルちゃんの真意を伝えることじゃない……。君が翔太郎さんに思いを伝える手伝いだけだよ……。」

「映司さん……。」

「とりあえず竜さん、二手に別れて翔太郎さんを探しましょう……。まずはそれからです。」

「ああ……。俺は克己と、映司は来人と頼むぞ。」

「「はい！」」

「いくぞ克己……。」

「仕方がない……。」

竜は克己と部屋を駆け出して行った。

「それじゃあ俺達も行こう。来人君・・・、スバルちゃん・・・。」

「はい！」

「・・・はい。」

映司と来人、スバルも部屋をあとにした。

「来人君！ どう？」

映司の乗るライドベンダーの前を走るスバルの車の助手席に座る来人にスバルが促すが・・・。

「まだです。反応がありません。」

ネクサスのモニターを見る来人からは良い返事はかえってこない。

「一体ヤミーはどこまで師匠を・・・。」

「わからない・・・。でもきつと人気のない場所だと思っけど・・・。」

すると後ろを走るライドベンダーにうごきが見えた。

映司の元にタカカンドロイドが現れた。

「！ 翔太郎さんが！？」

映司はライドベンダーを走らせる。

「スバルさん！ 多分映司さんが！」

「う、うん！」

スバルの車もライドベンダーの後を追った。

「てんめえ……。最近噂になってた鳥の怪人の通り魔ってのはまさかこんなことのために……。」

そんな翔太郎の視線は若干震える自身の足。

つまり今翔太郎はあの時以来久々に自身の足の感覚を取り戻していた。

「全ては欲望をかなえるため……。」

「なんなんだよその欲望って！ なんだって俺の足を……、……、……まさかスバルが！？」

その時、壁を突き破ってライドベンダーに乗ったオーズ・タトバコンボ、反対側からは窓を突き破ってサイクロンが現れた。

「！ 映司！ 来人！」

「翔太郎さん！ やつと見つけた！」

「師匠！ 大丈夫ですか！？」

二人は翔太郎に寄り添いオウムヤミーに対峙する。

「お前らなんで……。」

「ヤミーが飛び去ってくのをカンドロイドが見つけて……。
それでここがわかりました。それにここに来たのは俺達だけじゃありません。」

「何！」

すると。

「翔太郎さん！」

オーズが突き破ってきた壁を通りスバルが合流した。

「！ スバル！？」

「良かった……。無事で……。」

「お前まで……。」

翔太郎が唾然としていると……。

「貴様ら……、欲望を満たすのを邪魔するな！」

オウムヤミーが襲いかかるが……。

「させない！」

オーズとサイクロンがオウムヤミーを止める。

そのままオウムヤミーは二人の仮面ライダーに押された形で壁を突き破り外へと連れていかれた。

「俺も……、行かねえと……。」

翔太郎はやつとの勢いで足を震わせながら立ち上がった。

そんな翔太郎をスバルは支える。

「翔太郎さん！ その足は……。」

「さっきの鳥やろーの性が知らねえが今だけは足が言つことを聞く。」

「だからってそんなふらふらの状態で何を……。」

「俺は仮面ライダーだ！ だからこの街を脅かすやつは倒す。そんな簡単なことだ。」

「だめです翔太郎さん！ あの怪人は……。」

「わかってる。あの鳥やろーはお前の欲望がもとだったんだろ？」

「なんで私だって……。」

「どんだけお前と一緒にだと思ってんだ。俺の足を治したいなんてそんなに強く考えるやつなんてお前ぐらいしかいねえだろ。」

「……。」

「わかったな。だから行かせろよ。」

しかしスバルは後ろから抱きつき翔太郎を止める。

「！ 翔太郎さん！ 行かないください！ 私も最初は治って欲しいと思いました。でも考えたんです。行ってもし回復したら翔太郎さんはまた仮面ライダーとして戦うようになる……。今は足だけでもいずれば命だって……。ならこのまま治らないで欲しい……。翔太郎さんにはこれ以上戦わないで欲しいです……。」

「スバル……。俺だってそんなお前に応えてやりてえ……。でもなスバル、俺が仮面ライダーとして戦う本当の理由は街を守るためじゃねえ……。」

「えっ？」

「お前を……。守るためだ……。だから俺は……。仮面ライダーを辞められねえ……。それが俺だ……。俺は俺にしかなれねえ……。今までも……。今も……。これからも……。」

「私は……。待ってることしかできないんですか……。」

「お前は……そばにいてくれるだけでいい……。それだけで俺は……強くなれる。」

「……………」

するとスバルは無言のまま翔太郎が手放していたロストドライバーと三本のガイアメモリ、さらには普段の翔太郎の服もバックから差し出す。

「……………戦ってください……。仮面ライダーとして……、翔太郎さんとして……。」

「わかってらあ……。」

翔太郎はスバルの額を撫でた。

そしてスバルに渡された物の一つ、莊吉の形見の帽子を受け取った。

「「うわあああああ！」」

空中から飛来しオウムヤミーの爪に切り裂かれるオーズとサイクロン。

「まだ終わらん。」

そのままオウムヤミーはサイクロンに掴みかかり飛翔……。

「ちよ！ 高っ！ 高あ~~~~い！」

そのままサイクロンを落とす。

「あああああああ！」

サイクロンは工場の屋根を突き破り消えた。

「来人君！！」

サイクロンに気をとられている間にオウムヤマミが飛来し突撃。

「うわああああああ！」

大きく火花を散らしオーズは後ろに吹き飛ばされる。

「ぐっ……。相手は空を飛ぶ……。ならこつちも……。」

オーズが赤いメダルを二枚スロットしようとしたときオウムヤマミが襲いかかる。

その時オウムヤマミの身体から火花が散り、オウムヤマミは地面に落とされる。

「なに今の!？」

オーズはメダルを入れるのも忘れ啞然となる。

そんなオーズの後ろから歩み寄る人影が一つ……。

「!」

オーズもそんな人影に気づき振り向くとそこにいたのは……。

「……………翔太郎さん……………」

ジョーカーマグナムを構えた普段着の翔太郎がいた。

腰にはロストドライバー、頭には荘吉の形見の帽子。

その上……………。

「翔太郎さんが立った……………!」

「俺はクラ○かよ……………」

足で立っていた。

「手え出すなよ映司。こいつは俺一人でやる。」

「でも翔太郎さん!」

「こいつを作ったのも……………スバルにあんな思いさせたのも……………元はといえば全部俺の責任だ……………。なら要件は簡単だ。自分のまいた種ぐれえ……………自分で刈り取る。俺のけじめは……………俺がカタをつける!」

「……………わかりました。」

オーズは了承し後退する。

「さあ鶏ヤロー！」

「オウムです。」

「この際どっちでもいいだろ！ さあ……。」

翔太郎は左手をスナップさせ……。

「お前の罪を……、数える。」

『ジョーカー！』

ジョーカーメモリを手にした左手でオウムヤミーを指差した。

そのまま走りだしながらジョーカーメモリをスロットし展開……。

『ジョーカー！』

「変身……。」

走りながら翔太郎の身体を黒い装甲が覆い、仮面ライダージョーカーへと変身し、オウムヤミーと組み合った。

「らあ！」

オウムヤミーの拳撃をジョーカーは回避や拳で受け止め、連続蹴りからラッシュを放つ。

『メタル！』

回し蹴りを放ち回りながらメタルメモリをスロットし、仮面ライダーメタルになると……。

「おらぁ！」

遠心力を追加させたメタルシャフトでオウムヤミーを突く。

そしてそのままシャフトを連続で叩き込み、たじろぐオウムヤミーの股間にシャフトを下から叩きつける。

「喰らつとけ！」

シャフトを持ち上げオウムヤミーが浮き上がるとメタルは野球のバットのようにならしてシャフトを持ち……。

「どらぁー！」

シャフトを横に叩き込みオウムヤミーを吹き飛ばす。

「まだまだ暴れるぜえ！」

『トリガー！』

オウムヤミーが宙を舞っている間にメモリを変え、仮面ライダートリガーになると……。

「どんどんいくぜえ？」

トリガーマグナムを発砲、オウムヤミーから火花が散る。

「うおおおおおらああああ！」

炎の中から疾走してきたのはビッカーシールドとスペリオルソードを装備した仮面ライダージョーカーエクストリームだった。

「おらあ！」

エクストリームはそのままスペリオルソードをオウムヤミーに叩きつける。

オウムヤミーの反撃もすべてビッカーシールドで防いでは幾度もスペリオルソードでオウムヤミーを切り裂き周囲にセルメダルを撒き散らす。

そしてビッカーシールドでオウムヤミーを殴り飛ばす。

「決めるぜ……。」

『エクストリーム・マキシマムドライブ！』

エクストリームはドライバーのエクストリームメモリを閉じ再度展開すると後ろにいるオーズに振り向く。

「映司……、街を……、頼んだぜ……。」

「はい！」

エクストリームはオーズの答えを聞くと跳躍し……。

「おらああああああ！」

デュアルエクストリームをオウムヤミーに放った。

次元港。

「そんじゃな……。」

スバルに押される車椅子の翔太郎は見送る映司やなのは達に別れを告げる。

「がんばってくださいね」

「おう。」

「師匠、待ってます……。」

「ああ……。」

映司と来人に対し……。

「「……。」」

無言の竜とそつぽを向く克己は黙って握りこぶしをあげる。

「……。」

翔太郎も二人に答え拳を突き上げた。

「そんじゃあなのはさんにティアナ……。」

「行ってきます……。」

翔太郎の後に続きスバルも一時の別れを告げると……。

「いつてらっしやい……。」

「身体にはくれぐれも気を付けなさいよ。」

なのはとティアナにも見送られ次元船のゲートへと進んでいった。

次元船内。

「なにもお前までくることなかっただろ……。」

翔太郎は隣にいる同行してきたスバルに言う。

「これくらいのがままぐらい許してくださいよ。そんなんじやいつまでたってもハーフボイルドですよ？」

「ほつとけ。」

「それに……。」

「？」

「これは覚悟です……。仮面ライダーの……妻としての……。」

「

「……………こっ恥ずかしいこと言ってんじゃねーよ。」

「それに意外と翔太郎さん、甘えん坊だから私がいないと駄目かなあ〜と思ったんです!」

「誰がだ誰が!」

「まあ私ですけど……………」

「……………まあいつか……………その代わりしっかり俺を支えろよ!
俺もしっかり頼りにするからな!」

「はい」

そして二人の乗る次元船は仲間達に見送られ別の管理世界へと飛び立っていった。

探索と真意と立ち上がった切り札（後書き）

久々気まぐれ。

仮面ライダーの中でも人物的に好きなキャラクター。

- 5 ・五代雄介
- 4 ・紅音也
- 3 ・火野映司
- 2 ・鳴海荘吉
- 1 ・左翔太郎

やっぱり自分の一番は翔太郎です！

番外編・幼児化と玩具化と混浴（前書き）

注1・今回はもし翔太郎の足がそのままかつ映司が合流した場合の話です。

注2・今回は若干キャラ崩壊があります。

番外編・幼児化と玩具化と混浴

「「はあ！」」

「おらあ！」

「ぐああ！」

オーズのトラックロー、アクセルのエンジンブレード、ジョーカーの蹴りがチャイルドローパントを吹き飛ばす。

「てめえかぁ……。今ちまたで噂の若返らせ屋つつうのは……。つたくパチもんくせえ名前しやがって……。」

「「何の話だ（ですか）？」」

「なんでもねえ……。嫌なこと思い出すからこれ以上は言つな。それよりもさっさと決めるぜ。」

「はい！」

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットにスロットし、オーズはスキャナーでドライバーをスキャンする。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

『スキャニングチャージ！』

「ライダーキック！ はっ！」

「はあああああああ……、はあ！」

二人は跳躍し互いにライダーキック、タトバキックを放つが……。

「させるかあ！」

チャイルドは二人に向けて泥のような攻撃を二体に放つ。

すると。

「ぐ……、が……。」

「が……、つあ……。」

落とされた二人の身体に電撃が走る。

「左！ 映司！ 貴様何をした！」

アクセルが二人をかばい立つ。

「貴様も食らえ！」

チャイルドは先ほどの攻撃をアクセルにも放つが……。

「ぐ……。……？ これだけか？」

大して効いたそぶりはない。

「何故貴様にはこれが効かない！？ ここは一時退却だ！」

チャイルドはしゃがんで地面に手を置くと黒いオーラのようなものがチャイルド自身を包み、その場から消えてしまった。

「！……………逃がしたか……………左……………映司……………大丈夫……………ぶ……………」

振り向くアクセルが見たのは……………。

先ほどまで翔太郎や映司が来ていた服をだぼだぼながら着る見ず知らずの約三歳児の子供が二人。

「まったくなんだよいまの！ ぶざけたこうげしきやがって！」

「ほんとですよ。いや……………しびれた……………。ね、しょうたろうさん」

「ああ……………」

二人は互いを見る。

そして笑顔から顔が徐々にひきつり……………。

「あああああああ！」

悲鳴がその場を包んだ。

「……………というわけですまん。俺がぶがないばかりに……………」

「いはいえ気にしないでください。」

「私も私も……。」

にやけ顔のなのはとスバルの膝の上には……。

「スバル、はずかしいからおろせよお。」

「なのはちゃんもそんなちがつかないですよ。なんかこうとつづぶになにかふたつぶつかって……。」

幼児化した翔太郎と映司が無理矢理に近い形で座らされていた。

ちなみに座らせている二人はなんだかにやけている。

「それよりもよおみどう……、なんでおまえにはドーパントのこうげきがきかなかつたんだ？」

「そうそう。おれもきにしてたんだ……。」

ちび翔太郎とちび映司が竜に訪ねる。

「どつやら俺にはあの類い……、精神的攻撃が効かない特異体質らしい……。おかげで助かったがな……。」

竜は一瞬自身が幼児化した場合を考え、冷や汗をかく。

「とりあえず今は来人や克己にも頼んだ上でガジェットやカンドロイドも使って探索中だ。その姿では変身しても戦えないだろうから家で安静にしているよ。」

「えっ?」

「それではナカジマに高町……。二人を頼んだぞ。」

「はい」

「ちよっ! おい!」

「りゅうさん!」

翔太郎と映司が呼ぶも竜は高町家を立ち去ってしまった。

すると。

「翔太郎さん 帰りましょう」

スバルが抱きつく。

小さい幼児の身体の翔太郎はすっぽりとスバルに包容される。

「お、おいスバル! やめろって!」

「説得力ない〜〜 かわい〜〜」

しかしスバルは聞く耳をもたずさらに強く抱きしめる。

それによりスバルの身体の上半身のふたつの膨らみが歪む。

「や、やめろってスバル！」

「あ、そうですね。続きは帰ってから」

「は？」

「それじゃなのはさん、私達は帰ります。映司さんお大事に。」

「うん。またね。翔太郎さんもお大事に。」

スバルは翔太郎の手を掴み、高町家をあとにする。

その最中、翔太郎は恥ずかしがって手を放したが、説得力も迫力もかけた翔太郎の声など聞こえずスバルは手を引いて車へと強制連行していった。

そして高町家には小さな映司となのはだけが残る。

ちなみにまだ昼前な上、今日はヴィヴィオはりオ達と図書館に行くため6時くらいまで帰ってこない。

「・・・・・・・・。」

二人は口を閉じ周囲に沈黙が走る。

それを断ったのは……。

「ねえ映司君。」

「な、なに？」

「お昼でも食べない？」

「う、うん。ちょうどおなかすいてたところかな。」

「じゃあちよつと待っててね。」

なのはは台所に立つ。

「……………はあ……………おれどうなっちゃうんだろう……………」

そして映司は深くため息をはいた。

「……………」

「う~~~~ん　　翔太郎さん可愛い~~~~」

スバルの家に帰ってきた翔太郎はスバルの抱擁をもろに受けていた。

黙りつつ抵抗するものの力の差は歴然で……………

「たのむよスバル……………はなしてくれよお。」

「はなしてくれよおなんて！　可愛いすぎる~~~~」

逆効果で抱擁がさらに強まる。

「なあスバル……………」

その後もスバルは抵抗する翔太郎を抱擁し続け、翔太郎の心はブレイク寸前にまで陥れられた。

「~~~~~」

「.....」

鼻歌を歌う映司とそんな映司に呆然とするのはは、昼食としてチヤーハンを食べていた。

「ねえ映司君.....」

「なに？」

「なんか余裕だね.....」

「そんなことないよ。ただりゆうさんたちがかいけつしてくれるからあせつてもしょうがないもん。ならおちついてまってるほうがつかれないなあ~~~~って.....」

「お気楽だなあ~~~~もう。そんな格好じゃ旦那さんじゃなくてヴィヴィオの弟.....に.....」

「え？ だんなさん？」

「いや.....その.....えっと.....あの.....だから.....う~~~~んと.....。.....映司君!」

「はい！」

「今のは忘れること！ いいね！」

「はい……。」

すると映司がまだ慣れない身体のせいかな飯をこぼしてしまつ。

「あ……。「じ」ごめん……。まだなんかなれなくて……。」

「もう……。しょうがないなあ……。」

なのはは映司のとなりに座り……。」

「はいあ……。ん。」

「えっ？ でもなのはちゃん……。はずかしいしこどもじゃないんだから……。」

「今は子供だよ？ もっとも前から中身は子供だけどね？」

「なんかいますごくひどいことをきい……。」「気のせい気のせい
ささつ。早く食べないと冷めちゃうよ。」

「わ、わかった。」

映司はおずおずとなのはに従い口を開き食事を続ける。

(……。でも……。もし映司君と私の中に子供が生まれたら
こんなふうになるんだろうなあ……。それを考えたらいい予行練

習かも)

「どうかしたの？」

「な、ななななんでもないよお！ それよりも、はいあ~~~~ん。

」

「あ~~~~ん。」

そのまま食事は続いた。

~~~~~数分後~~~~~

「すう~~~~、すう~~~~。・・・。」

ソファアの上でちび映司はなのはに膝枕されて昼寝していた。

「もう映司君、ほんとに呑気なんだから。」

憎み口を叩きながらもなのはは優しく映司の頭を撫でる。

「いつかこんなふうに映司君の子供を膝枕できるかなあ・・・・・・。」

なのはは周りを見渡すが実際いるのは二人きりである。

なのはは赤い顔でゆっくりと小さい映司の顔を上に向ける。

そしたゆっくりと自分の顔を映司に近づける。



映司となのはの唇が触れあう……。

その途端。

「ごめえ……ん。途中寄り道して荷物が増えちゃったから一旦帰って……き……た……。」

帰ってきたヴィヴィオがその一部始終を目撃してしまう。

「……。」

笑顔のヴィヴィオとなのは。

「ごめんねなのはママ。まさかなのはママに年下趣味があったなんて。大丈夫だよ……。人はそれぞれあるから……。」

「いや違うよヴィヴィオ！ これには深いわけが……！」

バックを下ろし家からでるヴィヴィオになのは映司をソファーに寝かせ急いで後を追った。

その後なのは数十分かけてヴィヴィオを説得した。

「ん……。あしたのパンツはこれがいいかな……。」

そんななのは苦勞も知らない映司は夢の中で明日のパンツをいきいきとチョイスしていた。

「はぁ……。」

スバルの家では翔太郎が一人浴室の中にいた。

未だに翔太郎の身体は小さい。

「どうなっかなあ……。」

すると。

「お邪魔しま……す。」

「！」

スバルがバスタオル姿で入ってきた。

「お、おおおまえ！ な、なななななんで！」

「小さな身体で翔太郎さん苦労するだろうから私がお世話してあげるね……。」

「いやいいから！ よけいなことしないでいいから！」

「照れないでいいですよ……。」

「いややめろって……。いやてれてないからマジでホントに……。いやホントにやめてくだ……。あああああああああああああああああ！」

浴室から翔太郎の断末魔(?)が響き渡った。

対して高町家。

「はぁ……。」

未だに小さい映司は脱衣場で服を脱いでいた。

「いつまでこんななんだ……。」

すると。

ドアが開きヴィヴィオが現れた。

「ちょ！ ヴィヴィオ！ な、なんで！」

「聞きましたよ映司さん！ 今の映司さんは私よりも小さいんだから私の弟みたいなもんです！ だからお姉ちゃんが弟のお世話をするのは当然だよ。だからお風呂も背中洗ってあげるね」

「いや、いいよ。大丈夫だから……。」

「いいからいいから」

更に……。

「もう騒がし……。」

騒がしいことを聞き次にはなのはが脱衣場に入ってくる。

そして小さくとも映司の裸を見て、手で自分の目を覆い隠すが手の隙間が僅かに空いている。

「な、・・・なにしてるのヴィヴィオ？」

「何って・・・。今の映司さん小さくて苦労するだろうから身体を洗ってあげようなあ~~~~って。なのはママ代わる？」

「「え？」」

声を揃えるのはと映司。

「だ、だいじょうぶだよなのはちゃん！ ヴィヴィオちゃんも！」

「遠慮しないでいいよ。ほらほら早く脱いで」

「いやいいよホントに。なのはちゃんも止めてよあ~~~~。」

「・・・・・・・・ヴィヴィオ！」

「？」

「部屋からでて・・・・・・・・」

「「？」」

するとなのはは服を脱いで行き・・・・・・・・。

「私のターンだよー！」

「！」

そして驚く映司の服を手際よく脱いでいくと自身も脱ぎ、浴室へと強制連行していった。

その後映司の声にもならない悲鳴が高町家に響き渡ることになった。

結果、二人が元通りになる一週間後の間、毎日続いた。

エターナルのマキシマムによりチャイルドが撃破されて二人が元通りになり事なきを得た。

そして竜、来人、克己は三人は頭を傾げる。

被害者約二名が異様に衰弱していることを。

そんな二人のそばではなのはが若干残念そうに、スバルは小さく舌打ちをしていた。

## 編と喪失とへんなスイッチ（前書き）

福音振さんネタ提供ありがとうございました。

いろいろ考えた結果、それぞれ仮面ライダー四名にスポットを当てたストーリーにしようと思います。

今回と次回は来人編です。

## 縞と喪失とへんなスイッチ

「えつと……。」

中等部の図書室で高所を梯子を使って本を探しているアインハルト。結構な高さな上、服装は普段の制服……。

そのためかさつきから男子達が下をさりげなく横切っては見上げ、その度に満足したような表情を浮かべて行く。

つまりは彼らは発情期だけに異性の下着が気になる訳で……。

しかしそんなことはアインハルトご本人は知らずに本を探し続ける。すると。

「アインハルトお〜〜〜！」

図書室だけあり少し声を小さくしてアインハルトを呼ぶのは……。

「来人さん……、どうしてこちらに？」

来人が梯子の下からアインハルトを見上げていた。

「ちよつと本を探しにね。……でもアインハルト……。」

「はい？」

「……てる……。」

梯子をゆっくりと降りるアインハルトに視線を反らし小さく言う来人だが……。

「聞こえませんか……。もう一度お願いします……。」

アインハルトは不思議がる。

「いや見えてるんだよ……。」

「？ 何がですか？」

アインハルトは動きを止め再度聞くと来人は小刻みに震えた後……。

「パン……ツが……。」

「……。」

アインハルトの思考回路が一旦停止し、考えた。

服装はスカートで高所だったその上……。

来人に見られた。

この事実がセーラーオーンの歌の歌詞にあったようにアインハルトの思考回路をショートさせた結果……。

アインハルトの足が梯子からずれ落ちる。



「！ きゃあ！」

「アインハルト！」

来人は直ぐ様アインハルトが落下する地点で足を踏ん張り受け止めようとする。

しかし何故かアインハルトの落下形態はスカートを下、つまりは下からパンツが丸見え状態に……。

「え？」

来人が啞然としたときには遅く来人の顔面に水色の縞パンが押し付けられた。

「ぬじっ！」

そして図書室に鈍い音が響く。

「ちよつと大丈夫です……か……。」

図書委員の女子や周囲の生徒たちが野次馬のように集まった方がいいが彼らは顔を赤らめて状況を呆然と眺めた。

「ん……、あ……、んん……。」

妙なあえぎ声をあげるアインハルトだが、彼女のスカートにより顔が隠れた男子生徒が約一名……。

しかもそこから大量に赤い液体が・・・。

「はぁ・・・・・・・・・・！！ 来人さん！」

若干頬が赤いインハルトだったが現実に戻り来人からすぐ様離れるとそこには鼻から間欠泉のように赤い液体を噴かせる来人がぶっ倒れていた。

その後インハルトは数十分かけて野次馬と化した生徒たちに事情を説明し、来人は保健室で輸血パックのお世話になる羽目になった。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

保健室のベッドで目覚める来人。

「来人さん・・・・・・・・」

「良かった来人さん。生きてて・・・・・・・・」

周りにはインハルトやヴィヴィオ、リオやコロナまでいる。

「頭を強く打ったのね。大丈夫よ。頭にたんこぶができたぐらいだから。でも鼻血で輸血したのは初めてだったけど・・・・・・・・」

女医が付け足す。

しかし来人の返事は思わぬものであった。

「……どこ？　僕だれ？」

「……は？」「」「」

その場の全員が耳を疑った。

つまり来人は記憶喪失……。

頭に強くショックを受けたこととあまりにも強い性的ショックを受けての結果であった。

「来人君……。」

「次から次へと……。」

映司と克己が頭を抱える中……。

「なるほどな……。その強いショックを同時に受けその影響で来人の記憶が……。」

竜だけはただ冷静に物事を把握していたが……。

「どうすればいいんですか竜さん！　はやく元に戻してくささい。」

「そ、そうです……。」

そんな竜をヴィヴィオとアインハルトは揺する。

「まあまあヴィヴィオちゃん……。」

「いくら言っても簡単には戻らんだろう……。」

「」「うっ……」

映司と克己により一旦止まる二人。

「しかし記憶がないのでは戦うこともできないだろうな……。」

「確かに。俺達が頑張らないと。」

「仕方ない……。」

仮面ライダー達が今後のことを話している横では……。

「「……(じい~~~~)」「」

「……えっと……どうかしました?」

来人が自身を見つめるヴィヴィオとアインハルトにたじろいでいる。

「何も思い出せないんですか?」

「はい……。すみません……。えっと……、高町さんにスト  
ラトスさん?」

( 来人さんホントに記憶が…… )

するとヴィヴィオの頭に何やら豆電球が浮かぶ。

「来人さん……、実は来人さんは私と恋人なんですよ？」

「!?!」

驚いたのは……。

「ヴィ、ヴィヴィオさん……、ずるいですこんな時にそんな……」

「えへへへ　ちょっといたずらを」

「そ、それだったら私も……。」

アインハルトもほほを赤くして嘘を言うと……。

「え？　え？　どっちなの？　それともどっちも？　だったら僕二股？　じゃあなんで二人ともそんな楽しそうなの？」

来人は目を回し混乱する。

そんな来人を二人はちよつとたのしそうに眺めていると……。

「アインハルト……。」

竜がアインハルトに歩み寄る。

「はい？」

「確か来人が記憶を失うショックを与えたのは君らしいな……。」

「うっ……。」

「ならアインハルトと一緒にあれば何か記憶を取り戻すきっかけになるかもしれん……。」

「ホントですか!？」

すると来人が頭を突っ込む。

「だからしばらく時間を使って……。」

そのとたん。

「なら来人君、少しの間アインハルトちゃんと一緒に暮らしてみたら……。」

「……!?!?」「」「」

映司がとんでもないことを何の屈折のない笑顔で言い出した。

「少しでも早く記憶を取り戻したいんなら随時一緒にいたらいいんじゃないかなあ……って……。」

「確かに来人はまだそういったことに無頓着だし、素直だ……。それに左がない今、戦力を削がれるのはいいことではないが……。」

「……。」

啞然とするアインハルトだったが……。

「大丈夫だよストラトスさん」

「来人さん？」

「僕は大丈夫！ 要はお泊まりみたいなものだよね？」

「……………」

「ストラトスさんはいや？」

「いいえ……。あの……………」

顔を赤らめるアインハルトだったが……。

「大丈夫！ 僕はなんともないから！」

屈折のない来人の笑顔だったが対しアインハルトは何か冷めた表情である。

「なんともない」という言葉に自分は異性として意識されていないのではないかと思ったのだ。

アインハルトは無表情のまま来人に歩み寄りボディブローを来人にかました。

「ぬいっ！」

腹部を抑えしやがみこむ来人に……。

「私も支障はありません。さっきの言葉……、よく覚えておきますから……。」

アインハルトは見下しながら拳を震わせる。

そんな二人にヴィヴィオは……。

「な~~~~んか楽しそうだな~~~~。」

笑顔である。

しかし手は血管がにじむほど握りしめ、近くの映司に悪寒を感じさせた。

ちなみにその後ヴィヴィオは八つ当たりとして言い出しっぺの居候に生身の状態で本気の拳を放ったとか……。

アインハルトの部屋。

簡単に了承した来人の両親により持ってこられた来人の手荷物の一つ、パジャマをまとった来人はアインハルトと背中合わせに寝ていた。

「zzzzzzzzzz。」



いびきとはいかない静かな寝息を立てて幸せそうに寝ている。

しかし……。

「……………寝付けません……………」

アインハルトは寝付けずにいた。

(来人さんは気にしていなくても私は気にするんです……………)

若干しかめっ面になるが……………。

「……………。」

後ろの来人をチラ見するとベッドから起き上がる。

そのまま来人の前に立つと来人を先ほど自分がいた方へ押す。

そして自分が来人の前に寝そべる。

「……………、なんだかよくわからないけど幸せです……………」

頬が赤くなるアインハルト……………。

そして青春スイッチならぬ妄想スイッチが……………。

~~~~~

「アインハルトお……………!」

「きゃあ！」

ベッドにアインハルトを押し倒す来人。

「……………」

そのまま互いに見つめあう。

「アインハルト……、僕は……。」

「来人さん……………」

自分を見つめる来人にアインハルトも頬を染める。

そして上着のリボンを外しゆっくりとボタンを外していく。

そのしぐさで来人のスイッチも入ったのか……。

「アインハルトお……………」

そのまま抱きしめベッドから転がり落ち見えなくなる。

しかしそこから服が投げ出されていく。

上着からズボンにスカート、はたまた下着まで。

その後その部屋からあえぎ声と共に異様な熱が発せられた。

……………

「……………」

顔面が赤くなるアインハルト。

しかし妄想で頭を使ったからか徐々に来人ではなく睡魔が襲う。

アインハルトは重くなる脛に耐えながら来人の額に軽く唇をつけ……。

「おやすみなさい……………」

重い脛に抵抗することなく、自身も夢の中へと落ちていった。

といても妄想の延長戦であったが。

膝蹴りと秀田気とおま罪（前書き）

来人編後半です。

今回は竜又は慎太郎編を考えてます。

新タトバ、スーパータトバをその内この小説でも出したいです。
なんだかねで最強フォーム扱いにしそう・・・。

膝蹴りと雰囲気とおま罪

アインハルトの部屋。

カーテンの隙間から光が差し込み部屋を照らす。

「……………ん……………」

妙な感覚に襲われ起きるアインハルトが見たものは……………。

「！ら、ららら来人さん!?!」

至近距離の来人だった。

しかも自身はまるで抱き枕のように来人におもいつきり抱きしめられている。

「え？ え？ ええ？」

混乱するアインハルト。

しかし抵抗はおろか嫌がる気もなく……………。

「……………。」

自分も手をゆっくりと来人の背中に動かしていく。

その時。

「んむう~~~~」。

来人がアインハルトの耳に甘噛みしてきた。

「え？ ちょっと来人さん！？ あ……。」

いきなりのことにアインハルトは抵抗しようとするものの、力が入らない。

「んむう~~~~。」

「あ……、んああ……。」

甘噛みから更に舐めてきた来人にアインハルトはあえぎ声をあげるしかなく……。

「……、あれ？」

しかし急に舐められるのが止まり若干汗だくになったアインハルトが不思議がると……。

「あれ？ おはようストラトスさん」

何の屈折もなく無邪気に笑う来人がいた。

「来人さん……。覚えてないんですか!？」

「何を？」

「あんなことして何も覚えてないんですか？」

「あんなこと？」

「……………」

途端に熱が冷めるアインハルト。

「それよりもなんで抱き合ってるの？」

そんな来人の言い草にアインハルトは…………。

「……………仕返しです……………」

膝蹴りをかまし来人を悶絶させた。

「あゝ、お腹が……………」

「……………」

腹部を抑えながらリビングの椅子に座る来人と食事を作るしかめっ面のアインハルト。

今日は平日だが二人は欠席ということとで学校に連絡済みである。

「ねえ僕なんかしたの？ ていうかなんで蹴られたの？」

「知りません……………」

どんな質問にもただそれだけの答えに來人はどんどんと滅入っていく。

「ねえ教えてよお〜」。ただでさえ前のことを覚えてないんだからさあ〜」。 「

「……………そ……………」

「そ?」

「そそ……………」

「そんなこと……………言える訳があああ……………」

アインハルトの顔が赤くなり熱を発する。

「?」

……………でも……………二人きりの朝っていつのは悪い気は……………

顔が赤いアインハルトは作った朝食をテーブルに置き自身も座る。

「おいしそ〜」。きっとストラトスさんはいいお嫁さんになるね
「

「……………ズ、ズつに嬉しくなんか……………」

「? じゃあ……………」

「はい……。」

「いただきます。」

二人は向かい合い食事を始めた。

ピキーン。

そんな初々しい新婚夫婦のような雰囲気の二人を感じ、ニュータイ
○のような効果音を轟かせたのは……。

「なんだかいやあ……なことが起きてるような……。」

「た、助かったあ……。」

朝の練習という名の虐待により生身の映司を足蹴にするヴィヴィオ
と……。

「うふふふう……。」

「お、おいザフィーラ。なんかミウラがこえ ンだけど……。」

「……。」

黒い笑顔でヴィータとザフィーラをびびらせながら、蹴りを放つミ
ウラだった。

「いやあ〜。おいしかったあ〜。」

「なんだか妙な殺気を感じましたが……。」

「気のせいじゃないかなあ？」

「はあ……。」

「これからどうしようかあ。どうにかして記憶を取り戻したいけどどうすればいいか……。」

「記憶を戻すには強いショックが必要と聞きました。でも来人さんの場合は……。」

途端にアインハルトの顔が沸騰する。

何せ来人が記憶をなくしたは自分のせいであるが、衝撃ともうひとつの要因は自分の……。

「き、気長……とは言えませぬよね……。ただでさえ翔太郎さんがいなくて人手不足なのに……。」

「でも僕が頑張らなかつたらアインハルトが怪我してたんだよね？」

「はい……。」

「ならよかったかな。」

「え？」

「記憶がなくなってもストラトスさんは大切な友達だってなんとなくわかるんだ。なら怪我がなくなつて良かったよ。多分今の僕でもそれは変わらないし、今の僕でもそんな立場だったら迷わずに駆け出す。」

「来人さん……。」

「だからあんまり気にしないで。友達が悲しいと僕だって悲しくなっちゃう。僕に申し訳ないと思ってるならいっそう笑顔でいて。」

「……はい……。」

アインハルトは頬をほんのり赤らめ笑顔になる。

すると爆音が響く。

「！今のつて……。」

「！来人さん……、あれ？」

アインハルトが気づいたときには来人は既にいなく、ドアが空しく開いていた。

「来人さん……、記憶がないのに……。」

アインハルトは冷や汗をかきつつ、自身も部屋を出た。

「た、助けてえ……。」

「怖いよお……。」

街でコックローチドーパントに襲われている母親と子供。

母親は子供をかばい後ずさる。

「お前に用はない。そのガキを寄越せ……。」

「なにをする気なの!?!」

「なあに、ゆつくりとなぶり殺すだけだ。ガキの泣き叫ぶ声は何かとぞくぞくするからなあ……。」

「! そんな!」

「いいからそのガキを寄越せえ!」

コックローチが壁に追い詰めた母親に手を上げた時。

「待てえ!」

声が響く。

「あ?」

コックローチが声のほうに振り向くとそこには魔法で大人になった

来人がいた。

「スピリッツが教えてくれたから変身魔法は使えた……。早く逃げてください！」

「あ、ありがとうございます！」

来人に促され母親は子供を連れて逃げ出す。

すると。

「来人さん！」

アインハルトも追い付く。

「ストラトスさん、下がってて……。」

「危険です来人さん！今のあなたは……。」

「相手がなんだろうが友達は命がけで守る……。それが今、僕が一番したいことなんだ……。」

「お前……。よくも邪魔を！」

コックローチは目標を来人に移し来人に殴りかかる。

「！」

来人は紙一重で避けていくがコックローチの動きに徐々についていけずに……。

「くらええ！」

コックローチの一撃が来人の腹部に入り来人は壁に叩きつけられ、地面に倒れる。

「痛っ！」

その際、頭も壁に当たり頭から血が垂れる。

「来人さん！」

アインハルトが来人の側に寄る。

しかし来人の様子はおかしかった。

「あ・・・アインハルト・・・。」

来人は頭を抑えながらふらふらする。

「来人さん・・・、もしかして記憶が・・・。」

「う・・・、つつ・・・。」

しかし来人は頭を抱える。

「・・・来人さん・・・。こっとなったら・・・。」

今の来人を無理に動かすの危険・・・。

そしてあの時のような性的ショックを与える……。

そしてあのときに似た状況にするとしたら……。

「これしかありません……。」

アインハルトはスカートのすそをつかむと……。

「ストラトスさん？」

「来人さん！ 戻ってください！」

その思い切りたくしあげピンクの縞パンを来人に見せつけた。

「ぶふう！」

鼻血を出す来人。

するとこの唐突な性的ショックと鼻血により来人の頭の中の記憶というパズルが急速に合わさってゆき……。

「……まったく……。だめだよアインハルト、女の子がはしたない。」

「来人さん……。」

「でもおかげで全部思い出せたよ！ ありがとう！」

記憶が修復され完全復活した来人が立ち上がった。

「来人さん！ 記憶が……。」

「うん！ 下がってアインハルト……。」

「はい……。」

すると。

「何夫婦漫才してる！」

コックローチが飛びかかるがライブモードのファングメモリが飛びかかり叩き落とした。

ドライバーを腰にセットした来人はファングメモリを手に取るとメモリモードに変形させる。

『ファング！』

アナザーダブルドライバーの左スロットにジョーカーメモリをスロットする。

「変身！」

そのままファングメモリを右スロットにスロットし展開、ファングメモリのボディを畳み恐竜の頭部のような装甲がドライバーを包む。

『ファング・ジョーカー！』

すると白と黒の塵のような装甲が来人の周囲に飛び散りそれらは来人の体に定着、来人を仮面ライダーファングジョーカーへと変身さ

せた。

そのまま右手でコックローチに指を指す。

「僕、完全ふつかあ　　つ！ さあ……………お前の罪を……………
数える！」

「数える気にもならんわあ！」

「せいっ！」

コックローチとファンゲジョーカーが駆け出しぶつかりあう。

コックローチは俊敏な動きで迎え撃つが記憶を取り戻し、更には復活記念かいつもよりも一層エネルギーギッシュになった来人の敵ではなく……………。

『シヨルダーファンゲ！』

「せいっ！」

シヨルダーセイバーを手に回し蹴りと共にコックローチを切り刻む。

「ていやあー！」

そのまま踏み台にして間合いを開けシヨルダーセイバーを投げつける。

シヨルダーセイバーはコックローチの周囲を回り切り刻んでいく。

「ぐがああああああ！」

しかし復活記念を兼ねたファンゲジョーカーのエネルギーギッシュな動きを具現化したようなショルダーセイバーの動きは若干ながらかまいたちを生み、アインハルトのある布を傷つけていく。

そんなことも知らないアインハルトの目前で戦う二人は……。

「せいっ！」

ファンゲジョーカーの蹴りでコックローチは吹き飛ばされていた。

「復活記念！ このままド派手に一発！」

『ファンゲ・マキシマムドライブ！』

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

ファンゲジョーカーはタクティカルホーンを三回はじいた後、サイクロンメモリをマキシマムスロットにスロットすると右足にマキシマムセイバーを装備し風を纏う。

そして跳躍。

「ファンゲサイクロンストライザあああああ！」

ツインマキシマム、ファンゲサイクロンストライザーをコックローチに放つ。

「ぎゃあああああ！」

コックローチは真つ二つに切断され爆発、若い男が地面に気絶していた。

しかしこのマキシマムもまた復活で活気づいた来人が思い切り放ったせいか普段より強力になり周囲に微弱なかまいたちを産み出した。

そのかまいたちがアインハルトの体を包むある布をさらに傷つけたが……。

「ふう……。」

そんなことも知らない来人は変身を解除し本来の子供の来人に戻りアインハルトの元に駆け寄る。

「後は局の人に任せよっか。」

「はい……。あの……来さん……。」

「？ 何？ アインハルト？」

名前を呼ばれ記憶が戻ったことを確信したアインハルトは笑顔になる。

しかしその直後強風が襲いアインハルトのスカートをたくしあげる。

「……」

そしてその直後、アインハルトのピンクの縞パンの両脇の布が切れ、一気にずれ落ちた。

それによりアインハルトのヤバい部分が来人の目に焼き付いた。

「あ、あ、あ、あ、アインハルト……。」

「？ど、どうかしましたか来人さん……。」

アインハルトは来人にパンツを見られたと思い赤面している。

「ぱ、ぱ、ぱ、ぱ、パン……、パンツが……。」

「？」

アインハルトは来人が指を指すところを向くとそこには……。

「……。」

横の布が切れずれ落ちていている自分のパンツだった布切れが。

「……。」

再び思考回路がショートし動きは愚か頭の回転も止まる。

そしてショートが済み再び再起動すると最新機器すらびっくりするほどの処理速度で頭が回転し始める。

そして顔も徐々に発熱から発火までヒートアップし小刻みに震え始める。

「……ら……来人さん……。」

「み、見てない！ 見てない！」

来人は両手を全開に降り否定するが、鼻からの鼻血が証拠付ける。

「……………来人さん……………」

「断じて女の子ってやっぱり違うとか思ったり毛が生えてないんだあとか思ったりは！」

「……………」

「……………!!!」

「……………ら……………来人さん……………」

暗い顔を浮かべ一步一步寄り寄るアインハルトに来人はム〇クの叫びのような表情を浮かべ後退りする。

「……………来人さん……………」

「な……………何？」

「……………あ……………」

「あ？」

途端にアインハルトは駆け出し……………。

「あなたの罪を数えてください！」

真っ赤な顔のまま、来人に飛び蹴りを放った！

「なごおー！」

その瞬間、再びパンツの中身を見てしまい再び鼻血……

しかも人体の半分に近い……

高町家。

「あ~~~~~」。

状況報告にきている来人はソファアの上で横たわっている。

隣にはぼろぼろの映司。

「なんだか二人ともぼろぼろだね……」

「「おかげさまで……」」

疲れきったようになのはに返す二人。

すると。

「らあ~~~~い~~~~とお~~~~さあ~~~~ん」

「らあ~~~~い~~~~くう~~~~ん」

来人がギギツという効果音を放ちながら上を向くとそこには黒い

笑顔かつ後ろに巨大なスタンドを構えたヴィヴィオとミウラがいた。

「ヴィ、ヴィヴィオ！ ミウまで！」

「「いったい、アインハルトさんとなあ~~~~にがあったのかあ、くわ~~~~しく聞きたいな~~~~。」」

「ひ。。。」

「おじさんやおばさんにはOK貰ってるからじい~~~~くり尋も。。。あ、噛んじゃった　じゃなくてお話できるよあ~~~~。」

「

「今尋問って言ったよね！？　明らかに言ったよね！？　噛んでないよね！？　お話と言つ名の尋問だよねぇ！？」

来人がミウラに突っ込むがスルーされ。。。

「「細かいことは気にしないの」「

「あ。。。いやだ。。。助けて。。。映司さん。。。なのはさん。。。」

来人はヴィヴィオとミウラに引きずられながらヴィヴィオの部屋へと連行され。。。

「あ。。。いやヴィヴィオ、これはさすがに。。。いやお願いだから。。。ね？　ミウも。。。あ、ホントにやめ。。。」

〇×&　¥\$　#@&%〒　~~~~~

「~~~~~」

「映司君も浮気は駄目だよ!？」

「よくわからないけど肝に命じておきます……。」

来人を放置したのはと映司は茶飲みを傾けお茶を飲んだ。

おかげで一週間近く来人は輸血パックのお世話になることとなり、
ヴィヴィオとアインハルト、ミウラに逆らうことができなく半分パ
シリ化していた。

複雑と拡張と対面する若騎士（前書き）

浮かばないなりに頑張りました今回は慎太郎編ながらもエリオにも
スポットを当ててみました。
そして初挑戦が一つ。

ちなみにいずればミハルも出したいです。
どっちになるかはMEGAMAXを見てから考えます。

複雑と拡張と対面する若騎士

「……………」

管理局の次元船のとある部屋の前でそわそわするフェイト。

さっきから小一時間こうしては横切る局員に妙な目でみられる。

（やっぱり民間協力者だしあまり深く頼るのは……。ああでも二人に紹介したいし……）

船が目指しているのはフェイトの家族二人が働く他の管理世界である。

するとフェイトが迷っている部屋のドアが開き……。

「さっきからなにをしてるんだ？」

六甲慎太郎が不機嫌そうな顔で出てきた。

「慎太郎さん！ 何で……。」

「小一時間部屋の前でこそこそされて俺が気づかないとも思ったか？」

「えっと……………、すみません……。」

「謝られる気はないし謝る必要はない……。用件はなんだ？」

「えつと……。」

フェイトが手をもじもじさせ困り出す。

すると周囲からなにやら慎太郎に色んな視線を浴びせられる。

そしてなにやら「フェイトさんになんてこと言っただメエ……」
やら「フェイト萌える……」やら「リア充死ね」等と妙な声が聞
こえる。

フェイトも周囲にアワアワし始める。

慎太郎は見かねたのかため息をつく……。

「コーヒーがいい？ それとも紅茶か？ 中で話そう……。」

「え？ でも……。」

「いやなら構わない……。」

「いやだなんてとんでもないです！ お……お邪魔します！」

フェイトはカチカチになりながら慎太郎の部屋へと入っていった。

その後廊下にいた男局員達は女性局員から白い目で見られながら防
音対策万全な慎太郎の部屋に耳をつけ盗聴を試みるも、聞こえるの
は機械の機動音だけだった。

慎太郎の部屋。

「飲むか？」

「ど、どうも……。」

慎太郎はフェイトにコーヒーを手渡し、自身もベッドに座る。

「しかし民間協力者にもこんないい部屋を用意するとはな……。管理局も税金を無駄遣いしているな……。」

「すみません……。」

「……ああ、すまん……。君が局員と忘れていた……。」

「……すみません……。」

「「……。」」

途端に静まり、コーヒーをすすする二人。

無論気まずい。

しかし……。

「……あの！ し、し、し、慎太郎さん！」

フェイトは勇気を振り絞り動いた。

「な、なんだ？」

「じ、実は次にいく世界は私の家族が二人働いてまして……。二人に紹介したいのでちょっと付き合っても、も、も、もらえませんか!」

前屈みになるフェイトに脅されたような感覚になった慎太郎は……。

「あ、ああ……。」

恐る恐る了承した。

「ホ、ホントですか!？」

「ああ……。」

(断つたらなにされるかたまったもんじゃない。それに時間はあるからな)

「じゃ、じゃあ楽しみにしてますね! おやすみなさい」

コーヒを一気飲みしフェイトは部屋を退室した。

「……まだ昼だぞ……。」

慎太郎は懐から小さい端末を取り出すと……。

「あっちでは忙しかったが一応使えるようにしておいて損はないだろう……。」

自分のバックからバーストドライバーを取りだし端末を接続、キーボードを叩き始める。

しかしこのバーストドライバーは普段慎太郎が使用するものではなく、現在のバースを作り出す過程でできたプロトバースのドライバーであった。

ちなみにその日、次元船の局員達はスキップする満面の笑みのフェイトという伝説の〇ケモン並みに伝説な生物を見かけたらしい。

それから数十時間後。

「ねえエリオ君、楽しみだね。」

「うん。前の旅行以来だからね……。」

次元港でフェイトを待つのはキャロとエリオ。

「でもなんだか連絡の時のフェイトさん、なんか嬉しそうだったよね……。」

「まさかフェイトさん、いい人がみつかったんじゃないかな？」

「え？」

嬉しそうに言うキャロに対しエリオはなんと複雑な表情。

「フェイトさんだって女性なんだし恋だってするよ。スバルさんや

ヴィヴィオだってそうなんだし……。」

「う〜〜ん。でもなんだか複雑……。」

「私は嬉しいよ？ 要は私達のお父さんができるんだもん……。」

「気が早いんじゃない？」

すると。

「エリオ〜〜。キャロ〜〜。」

フェイトが二人に向かって駆け寄ってきた。

後ろには慎太郎が微笑ましく笑いながら歩く。

「フェイトさん！ お久しぶりです！」

「ですう〜〜！ あの人は？」

「え？ あ、そうそう。二人にも紹介するね。」

「六甲慎太郎だ……。よろしく……。」

「よ、よろしくお願ひします……。」

「よろしくお願ひします お話聞きたいですフェイトさん。早く
帰りましょ。」

「キャロ、お話って？」

「例えば・・・慎太郎さんとどうやって知り合ったとか・・・。」

「えええっ?」

「?」

テンパるフェイトに頭を傾げる慎太郎。

そんな一同は次元港を出てエリオ達が住む局の寮へとバスで向かっていった。

「へえ〜〜」。慎太郎さんって仮面ラ・・・っと声大きすぎた。仮面ライダーなんですか?」

小さく聞き直すキヤロ。

「ああ・・・。まあ仮面ライダーなんて言葉は最近知ったがな・・・。」

「へえ〜〜」。

キヤロが慎太郎に質問攻めしている横では・・・。

「じゃあ慎太郎さんがフェイトさんを・・・。」

「うん・・・。危ないところを助けてもらったんだ・・・。かつこよかったなあ〜、あのときの慎太郎さん・・・。」

のろけ顔になるフェイトにエリオは複雑な表情になる。

「怪我はなかったんですか？」

「あつたはあつたけど慎太郎、医学もかじってたみたいでたすかったよ……。」

「よかつたあ〜。それでフェイトさん……。」

「ん？」

「……いえ……。」

歯切れを悪そうにいうエリオ。

そんなエリオの視線にはキャラコの質問攻めに若干たじろぐ慎太郎がいた。

その夜。

エリオ達にとつてもらっていた部屋でキーボードを叩く慎太郎。

そのモニターにはプロトバースが映っていた。

(……プロトだから大した装備は装備できないが……)

モニターには他にも両太股のリセプタブルオーブについての「拡張

装備」と映る。

「形状はどのようなものか……。」

慎太郎が考えた時、ドアがノックされる。

「誰だ？」

「僕です……。」

「エリオか……。入っていいぞ……。」

「失礼します……。」

エリオは慎太郎の了承を得て部屋に入った。

しかしエリオが部屋に入ったのとすれ違いに……。

「慎太郎さん、食べてくれるかなあ……。」

手製の菓子を包んだ包みをてにきよどきよどしながらフェイトが歩いてきた。

「喜んでくれるかなあ……。慎太郎さん……。」

するとフェイトは素早く正面に立ち……。

「おおフェイト！ 嬉しいよ！ 凄い美味しそうだ！」

慎太郎の声真似、つまりは一人芝居に入る。

「嬉しいです慎太郎さん。なんなら今度はお食事を一緒に、いえなんなら私の手料理を！」

「それは楽しみだ！ 是非今度！ いや今から！」

慎太郎（実際は慎太郎になりきったフェイト）は手を伸ばしフェイトの肩を掴み歩き出す……一人芝居をしたが……

「……なんだか慎太郎さんぽくないかなあ……」

再びトライ。

「慎太郎さん、お食事を……」

「悪いが今は腹一杯だ……」

「……な、なら私を……頂きませんか？」

「……」

「……要りませんか？」

「……骨の髄までしゃぶってやるう……」

慎太郎（実際は慎太郎になりきったフェイト）はフェイトを襲う……振りをした。

「なんだか話が飛躍してた……うっん！ こんなじゃないって！」

三度……。

「慎太郎さん……、機械作りが得意なんですよね？」

「あ、ああ……。」

「なら私と共同作業で……あ、新しい家族を……つ、作りませんか!？」

「……言つとくが……。」

「?」

「俺は欲張りだから一人じゃ我慢できないぞ……。」

再びフェイト（実際は慎太郎になりきったフェイト）がフェイト（エア）に襲いかかり……。

「ああ……、慎太郎さん！ そんなにセルバーストしちゃ壊れちゃう……。……つてもうなんか直接的……。それじゃ……。」

廊下を歩く人々の視線に気づかないフェイトは引き続き一人芝居、基シミュレーションで妙なキャラづけをされていた。

慎太郎の部屋。

フェイトの赤っ恥を知らない二人は重苦しい空気の中にいた。

「で……、何か俺に話があつて来たんだらう……。」

「はい……。」

「……聞こう……。」

慎太郎は作業を止め端末を畳んだ。

そして慎太郎は椅子に座り直しエリオに向き合った。

複雑と拡張と対面する若騎士（後書き）

またまた気まぐれ！

今度のはなのはサイドで好きなキャラ！

- 10．ノーヴェ
- 9．リオ
- 8．エリオ
- 7．キャロ
- 6．フェイト
- 5．なのは
- 4．はやて
- 3．アインハルト
- 2．ヴィヴィオ
- 1．スバル

なんなんだこの順位・・・。

。ちなみにエリオは真面目かついじられキャラでおいしいと思っ・・・。

不安と新装備と送る言葉（前書き）

慎太郎編後半です。

なんで後半はすらすらかけるのに前半は書けないんだ・・・。

不安と新装備と送る言葉

慎太郎の部屋。

「慎太郎さん……、僕がなんで暗い顔してるかわかりますか？」

エリオは喋り出す。

「……いや……、わからない……。」

「僕は心配なんです……。フェイトさんは慎太郎さんのことが……。でも慎太郎さんが本当にフェイトさんを幸せに出来るのか……。」

「……。」

「フェイトさんは僕やキャロのお母さんみたいな人で……。マザコンって思われるかもしれませんが……。」

「いや……。自分の母親の幸せを願うのは当然のことだ……。」

「僕は……。僕たちは僕達を笑顔にくれて……。僕達を笑顔にしてくれたフェイトさんが幸せになってもらいたいです……。それに……。辛い思いをした分フェイトさんには笑って欲しんです……。」

「辛い思い？」

頭を傾げる慎太郎にエリオは自分やフェイト、キャロのことも喋りだす。

~~~~~数分後~~~~~

「君も・・・、フェイトも・・・、クローン・・・。」

「・・・・・・・・。」

「キャロもその力で故郷を追放・・・か。俺は・・・そんな思いを味わったことはない・・・。」

「過去は過去かもしれない。でもそんな過去を持ちながらもフェイトさんは優しく笑ってくれました・・・。僕達に笑顔を取り戻してくれました・・・。」

「・・・・・・・・なるほどな・・・。」

「慎太郎さん・・・。答えを・・・、聞かせて。俺はそんな根拠のない約束は出来ない・・・。」

「そんな・・・。」

「精一杯の努力はする・・・。しかしそれでも彼女の幸せを守りきれるか分からない・・・。でもなエリオ・・・。」

「・・・・・・・・。」

「俺の知り合いが言っていた・・・。手が届くのに手を伸ばさなかつたら死ぬ程後悔するから、手を伸ばす・・・。俺がバースの力を

得たのも……、あの日、俺の手にメダルが落ちてきたのもきっと必然だ……。そんな必然の積み重ねで得たバースの力でも……こんな俺でも……誰かを守ることはできるはずだ。」

「……………」

「彼女を幸せにする自信はない……。しかし必ず命に代えても彼女を……、君達を守り抜く……。約束する……。仮面ライダーとしてでなく……。ただの六甲慎太郎として……。」

「慎太郎さんとして……。」

「ああ……。」

「……………なんだか考えてた自分が馬鹿馬鹿しくなってきました……。気がついたら僕は慎太郎さんに妙なプレッシャーをかけてたのかもしれない……。」

「中々の眼力だったぞ……。竜騎士として将来が楽しみだな……。」

「は……はあ……。」

照れ臭そうに笑うエリオ。

「なんだかお兄さんが出来たみたいです……。」

「いくらでも頼れ……。俺にできることならいくらでも力になる  
う……。」

慎太郎は手を差し出す。

「はい！」

エリオも手を伸ばし握手する。

「ところでエリオ……。」

「はい？」

「フェイトを幸せにとはどういふことだ？」

「それは後々フェイトさんから聞いてください……。」

「？」

「そういえば慎太郎さん……。」

「何だ？」

「なんで仮面ライダーのベルトが2つも……。」

「ああ、これが……。バースはセルメダル、この銀色のメダルからエネルギーを取りだしてエネルギーを得るバースシステムと呼ばれるシステムなんだ……。ただし俺が使うバースの前には過程で完成したプロトタイプがある。このバースドライバーはそのプロトバースになるためのプロトバースドライバーだ……。」

「プロトバースドライバー……。」

「まあ完全版との違いはメーカーがあることとCLAW・sという特殊装備が今のところ、2つだけということだけだがな……。」

「今のところ？」

慎太郎はモニターを開き映るプロトバースを見せる。

「設計時点では装備を考えていなかったため忘れていたが……、両太股のリセプタブルオーブにも装備をつけることができることに気づいた……。なんとなく再び使えるように調整した時に何かつけられないかかんがえたんだ……。」

「……………これはだれでも使えるんですか？」

「使いこなすにはそれなりに鍛練を積み重ねなければならないが、それさえ成せればだれでもな……。」

「……………」

エリオは考え込む。

そして何かを決心した。

「慎太郎さん！」

「なんだ？」

「このプロトバースドライバー、僕に使わせて貰えませんか……。」

「

「何……。」

「実は僕……、クラナガンに仮面ライダーの知り合いがいるんです。以前目の前で変身も見だし、戦いも見ました……。正直その時から僕は仮面ライダーに憧れてたんです……。」

「……仮面ライダーは憧れだけでは勤まらないぞ……。」

「それだけじゃありません……。僕は守りたいんです……。魔導師じゃドーパントには歯が立たない。だからこそ仮面ライダーの力でフェイトさんやキャロ、慎太郎さんをこの手で守りたいんです！」

「……悪いが……。」

「……駄目……ですか……。」

残念そうな表情でうつむくエリオに慎太郎はプロトバーストライバ  
ーを胸に押し付けた。

「お前に守られる程俺はやわじゃない……。背中を預けるなら別  
だがな……。」

「じゃあ……。」

「明日から忙しいぞ……。」

「……はい！」

エリオはプロトバーストライバーを受け取り満面の笑顔を浮かべた。

(たしかエリオの武器は槍だったな……。だとしたら新装備は槍で決定だな……)

こうしてエリオはもうひとつの名前、仮面ライダープロトバースとして仮面ライダーの一員となった。

二人が部屋から出ると……。

「もう慎太郎さんったら……。」

「別にいいだろうフェイト……。お前にだって既成事実っていうメリットができるんだから……。」

「そ、それは嬉しいけど……、……!!」

一人芝居もといシミュレーションを続けていたフェイトは今までの視線とは違う視線に気付き、ギギギと擬音を立てて視線の方へ振り向くとそこには……。

「……………」

真顔で冷や汗をかく慎太郎と笑顔がひきつったエリオがいた。

「……………な……ながかったね……。」

冷や汗をどっぴりかき下着が湿る感触に襲われるも、フェイトは満面の笑みで返すが……。

「……………エリオ……、明日にしようと思ったがバースの説明を始めよう……………」

「……………よろしくお願いします……………」

二人はゆっくり後退りしながら部屋に入り静かに扉を閉じた。

「……………ちょっと待ってよ二人ともお！ さっきのはちょっと執務続きで疲れてて欲求不満……、じゃなくてえつと……………」

フェイトの声が虚しく響く。

その後フェイトは頑張った。

頑張って二人を部屋から引きづりだし強いショックを与え、自分の赤っ恥の記憶を消去することに奇跡的に成功した。

これでフェイトはしばらくいいことはないだろうとなんとなく確信したという。

数日後。

頭を抱えながらも対局に立つのは慎太郎とエリオ。

「未だに頭が痛い……………」

「それに一部の記憶が……。」

「……まあそんなことはいい……。始めるぞ……。」

「はい！」

慎太郎とエリオはバーストドライバーを腰に装着する。

そして慎太郎は左手のバンドからセルメダルを取り出す。

エリオもセルメダルを取り出すと天に投げる。

そのまま落ちてきたセルメダルを左手の人差し指と中指で受け止める。

「「変身！」」

そして両者はドライバーにメダルをスロットしメダルを手にしていた手で一気にダイヤルを回した。

『『カポーン！』』

互いの体にリセプタブルオーブが回ると体に定着し装甲がおおわれ  
てゆき、最後に顔に仮面が形成され、互いに仮面ライダーバース、  
仮面ライダープロトバースへの変身を遂げた。

「よし、エリオ。試してみる。」

「はい！」



プロトバースはセルメダルをドライバーにスロットしダイヤルを回す。

『スラッシュランサー!』

すると両太股のリセプタブルオーブが出現し右のオーブは刃、左のオーブは棒の部分を形成し連結……。

「これがスラッシュランサー……。」

新装備、スラッシュランサーが完成した。

「使ってみるエリオ……。お前なら使いこなせるはずだ……。」

「はい!」

プロトバースはスラッシュランサーを構える。

バースもバースバスターを構える。

そして……。

「うおおおおお!」

プロトバースは駆け出し……。

「でええええい!」

スラッシュランサーを振りかざしバースに斬りかかるが、バースはそれをよけ懐にバスターを放つ。

しかしそれをプロトはバースはランサーの棒部分を地面につけ、それを軸に宙に舞い避ける。

するとバースはセルメダルをドライバーにスロットしダイヤルを回す。

『キヤタピラレッグ！』

両足に瞬時にキヤタピラレッグが形成され、バースは駆け出しちよつと着地したプロトバースに蹴りかかる。

「ぜりあー！」

「くっ！」

プロトバースはランサーの槍部分を盾にしたものの大きく後ろに吹き飛ばす。

「やっぱり強いです……、慎太郎さん……。」

「君もな。初めてにも関わらずよく使いこなしている。」

エリオの装備は槍型のストラダー。

そのためエリオは槍の扱いに長けていた。

バースは再びセルメダルをスロットしダイヤルを回す。

「しかし俺とて新人に……、プロトタイプに負けたら他の同業者

に会わず顔がないんでな……。」

『ドリルアーム!』

さらにセルメダルを二枚スロットしダイヤルを回した。

『セルバースト!』

ドリルアームを装備したバースは腰を深くして構える。

「僕だつて!」

『セルバースト!』

プロトバースも一連の操作をし緑の光を刃に纏うスラッシュランサーを構える。

そして互いに駆け……。

「でりゃあああああ!」

「でええええい!」

ドリルのセルバースト、”ドリルアームスピン”とランサーのセルバースト、”スラッシュランサーシュナイダー”がぶつかりあった。

結果バースに軍配が上がったものの、変身を解いた二人は兄弟または親子のように肩を貸しあった。

「どこ行っただんですかねえフェイトさん……。」

エリオ君に慎太郎さん……。」

「わからないけど……、エリオもなんだか慎太郎さんに和解できたように見えたかな。」

「これなら慎太郎さん、いつお父さんになっても大丈夫ですね。」

「ふえ？」

「私も嬉しいですフェイトさん。仮面ライダー、お父さんだもん。すごいですよ。」

「でも考えたら私もなんだか凄いね……。今ならスバルの気持ちもわかる気がするかな……。」

すると。

「ただいま……。」

「……。」

若干ぼろぼろになったエリオと慎太郎がかえってきた。

「慎太郎さん？」

「エリオ君？ どうしたの？」

「ちよつと男の会話・・・、みたいなことをね・・・。でも慎太郎さん今・・・。」

「？ なんだ？」

「いい忘れていたことがあります・・・。家に帰ってきたら必ず言うことを・・・。」

「！」

驚く慎太郎。

何せ今催促されている言葉を言うことを注意されるなど子供の時以來だがそれだけではない。

この言葉を言うて欲しいとは家族として迎え入れられているからだ。

慎太郎はエリオだけでなくキャラやフェイトにも視線を向けると、二人も頷く。

そして慎太郎も笑うと・・・。

「・・・。。ただいま・・・。」

今言うべき、かつ慎太郎自身が言いたい言葉を放った。

フェイトとキャラは互いに頷き合つと彼女らもまた言葉を返した。

「おかえりなさい。」

## 不安と新装備と送る言葉（後書き）

新用語説明：

スラッシュランサー：

プロトバースのみ装備する全長2mの槍型武器（緑色のストラダーで槍の部分の長さは約50cm）。普段は両太股にあるリセプタブルオーブに槍部分と棒部分に分離して内蔵される。

用途はドリルアームに似ているが、エリオ用が使用することを考えて手持ち型かつ槍型にしている。

セルバースト時は手の表面からエネルギーを供給する。

スラッシュランサーシュナイダー：

スラッシュランサーのセルバースト。発動プロセスは他のCLAW

・S同様。

刃に緑の光を浴びての斬撃。

水浸しとハーレムの醍醐味と強制連行（前書き）

克己編です。

久しぶりに克己を書きました。

今回は伏線っぽい。



## 水浸しとハーレムの醍醐味と強制連行

「ていやぁー！」

エターナルは目の前の大量のサメヤミーに立ち回っていた。

エターナルエッジがサメヤミーに次から次へと喰らいつき、サメヤミーの身体からは血のようにセルメダルを吹き出す。

しかしサメヤミーはぞろぞろと続く。

「こいつら・・・、無駄に一体一体造形が深い癖にどっかの戦闘員みたいにぞろぞろわきやがって・・・。」

何を言ってるのかわからないと自分で思いつつ、エターナルは指を鳴らし宙にメモリを生成する。

「じついつ連中には・・・。」

『ウエザーー！』

『ウエザー・マキシマムドライブ！』

エターナルはウエザーメモ리를マキシマムスロットにスロットする。  
エターナルは手を掲げ・・・。

「はっ！」

振りかざすと赤い雷が現れサメヤミー達を一掃していった。

「帰るか……。」

変身を解除、克己はその場の後片付けをせずにセルメダルを一枚掴むとコイントスをしながらホテルの自室へと戻っていった。

「……………そんなバナナ……。」

あまりの目の前の事実思わずつまらないだじゃれが出た克己。

その事実とは目の前の自分の部屋である。

克己の部屋の上は実はお手洗いになっているらしい。

しかしその水道管が詰まり破裂、克己の部屋のみがピンポイントに水浸しになっていた。

その一部始終の貼り紙が水浸しになった部屋のドアに貼りられており……。

「……………えつと……。」

啞然とする克己をハリーは重苦しそうに眺めていた。

「なあ克己、これからどうすんだ？」

「どっするって……、しばらく部屋には戻れん……。」

「じゃ、じゃあオレの部「なに寝ぼけたこと抜かしてんだお前……」

「だって……、お前いつも仮面ライダー頑張ってるから少しでもお前の力になりてえんだよ……。」

「……………」

克己は無言のままハリーの頭を軽く叩く。

「……………まあ悪い気はしない……………」

「ホントか？」

「ふん。」

克己はそっぽを向くが、ハリーはこの反応が照れていると長年の付き合いでわかっていた。

そのためか頬を赤くし若干にやけた。

するじ。

「「ちょっと待て（ちなさあ~~~~い）~~~~い」「!」「」

「さ、さ~~~~い……………」

二人に向けてヴィクトリア、シャンテ、ジークが走ってきた。

「なんだお前ら……………」

克己はそんな女子達を冷やかな目で見る。

「克己ったら、困ったときは相談してよ〜〜。」

「克己さんの困りごとなんて放っておけませんわ！是非とも私が力をお貸ししますわ！」

（そうすれば克己に恩を売れるし（ますし）・・・）

「何か企んでるだろお前ら・・・。」

「別に？」

二人は腹黒いことを企みつつ、屈折のない笑顔でごまかした。

途端に二人は揃った反応にイラついたのか口喧嘩の末、喧嘩をし始めた。

事実シャンテは本戦でヴィクトーリアに負けたことを若干根に持っていた。

「う、うちも克己君の力になりたい・・・。」

「お前はずっと純粹でいる・・・。」

そんな二人を傍観する克己は上目遣いでひそかに寄り添うジークに小動物的な可愛らしさを感じ、頭を撫でた。

すると取っ組み合う二人が一旦休戦し・・・。

「「克己さん！ 克己さんは一体誰の部屋に泊まる（ります）の！？」」

「「！？」」

とんだ爆弾発言にハリーとジークも啞然となる。

すると二人は被ったのにイラついたのか、口喧嘩を少々した後バトルが始まる。

両者とも本戦のことを根に持っていたらしく、若干目が本気である。

ちなみに……。

「克己と二人つきり……。いや実際にはあいつらも一緒だけど・・・、克己と同じ部屋……。」

「克己君と同じ部屋……。いけない。うちの部屋ジャンクフードしか……。」

残るハリーとジークは顔面が沸騰した後、変なスイッチが入ったのかなにやらぶつぶつと唱え始める。

しかし当の克己は彼女の部屋に泊まる気ことなど微塵もなかった。

ミッドには知り合いはあまりいないが、仮面ライダー同士とはそれなりに仲はいいため竜あたりに頼んで数日世話になる気だった。

しかしシャンテの三人の分身に捕まった今となってはそれは敵わない夢だった。

「克己君は誰の部屋に泊まるの？」

「まさかそのボンコツ不良娘のところではないでしょうね？ 腰巾着がうるさくて寝不足になりますわよ？」

「んだとヘンテコお嬢……。お前んとこそ執事なんかがいて克己が落ち着けねーだろ。そのシスターもどきだつてシスターが男を部屋に連れ込むなんていけないんじゃないのか？」

「それなら大丈夫　ちゃんと騎士カリムから了解得てるしそれに……。」

「いいんですか？」

「だいじょぶだいじょぶ　私の家と違ってくつろいでね。」

「実際お前の家じゃねえだろ……。」

シャツハをナカジマ家に招き入れたセインにノーヴェエが冷めた目で睨んでいた。

(シヤンテ……一つ貸しだからね)

そんなセインをよそに……。

「聞いてくださいよノーヴェエ……。それでシヤンテったら……。」

「そ、そうだな・・・。」

シャツハの愚痴をノーヴェエが苦い顔で聞いていた。

ちなみにカリムの愚痴に関してはセインがちゃっかり録音しちゃっていた。

「っていつ訳で部屋には私だけ　騒がしくないよ」

「「いやいやいや・・・。」」

「てなわけで克己君は私の部屋に～～～。」

シャンテの分身達は克己を連れてシャンテの部屋へと進み始めるが・・・。

「ちよつと待て！　克己は普段お袋さんと二人きりだから、オレらみたいな愉快な方がいいに決まってるだろ！　だから克己はオレらの部屋に泊まんのだ！」

「納得いきませんわ！　それなら私の部屋に！　それに私の部屋でならエドガーがいるから家事は万全です！」

「ぐっ！　それなら奪ってみなさい！」

シャンテズは新たに分身を作り出すと、そっちに克己を任せ構える。

「上等だ……。力づくは嫌いじゃねえ……。」

「面白いですわ。言っときますけど雷帝の力はあるものではなくてよ?」

ハリーとヴィクトーリアも戦闘体制に入り、一触即発になる。

「……えつと……。」

ジークだけがあたふたしている。

すると克己はため息を吐くと……。

「お前ら……、わかったからそんなに騒ぐな……。下手すればお前らの部屋ごとこのホテルが崩壊する……。」

「「「じゃあどうすんだよ」の……ですの(」?」

「ど、どうするん?」

「もうシンプルでじゃんけんでもいいだろ……。」

「……おもしれえ……。」

「受けていただきますわ……。」

「神よ……。私に厚いご加護を。」

「う、うん……。」



四人は向かい合い……。

「……最初はグー……、じゃんけん……。」

「……。」

デバイスを拭く克己。

「……。」

そんな克己をソファアでジークはぼくぼくと眺める。

すると。

「……なんだ……。」

克己が妙な視線に気づき、

「えっ？ いや、ただぼくぼくとしちやて……。」

「……ああ、悪いな……。お前の部屋なのにくつろいで……。」

「いえ……。ああそうだ！ 何か食べます？」

「お前のことだからどうせジャンクフードしか置いてないだろ……。」

「うつつ……。」

凶星のジークは言葉を失う。

すると克己は立ち上がりジークの手を掴む。

「えっ?」

「余計なお世話かもしれないが……、お前はちゃんとした食事をとる必要がある……。少なくとも俺がこの部屋にいる間はちゃんとしたものは食べてもらうぞ……。」

「……………」

ジークは反論しようとするも……。

(うちのことを……………)

自分のことを心配してくれていると理解し、克己に連れられたまま部屋をあとにした。

ちなみにそんな二人を三人の影が尾行していった。

## 水浸しとハーレムの醍醐味と強制連行（後書き）

本編にミハルを出そうと考えてますが、効果音やエフェクトがまだわからないので12/10まで書けません・・・。

キスとトリオとテーブル（前書き）

やっと書けました克己編後半。

苦戦しました〜〜。

MOVIE大戦がもう少しで公開！

早くみたいです！

## キスとトリオとテーブル

とあるスーパー。

「・・・・・・・・。」

無言のままカートを押す克己とジーク。

「・・・・・・・・。」

しかしジークは頬が赤いまま克己をちらちら見る。

(・・・・・・・・なんだか恋人通り越して夫婦みたいやな〜)。・・・  
・・・え？ うちつたらなに考えとるんやろ〜)。・・・で  
も克己君と夫婦か〜)。・・・ええかも。・・・いやい  
いや！ 悪い訳があらへん！ ・・・夫婦か〜)

ぼ〜っとして歩き柱に激突するジークをよそに・・・。

「・・・・・・・・。こいつがよさそうだな・・・・・・・・。」

克己は鮮魚らの口に人差し指を突っ込み鮮度を計っていた。

本人曰くこれでなんとなくわかるらしい・・・。

「ねえママア〜」。あのお姉ちゃん達なに〜」。

「駄目よ、目会わせちゃ。」

そそくさと去っていく親子をきにせずに二人を監視するのは……。

「ジークつたら〜、なに克己さんと一緒に買い物なんてしてますの?」

「ホントホント! なんだかいい雰囲気だし……。」

ジト目のヴィクトーリアとシャンテである。

「だいたい克己さん、ジークにやたら優しくありませんこと?」

「そりゃあどつかの高飛車お嬢様よりはジークの方が可愛いからじゃないの?」

「あ〜〜ら。露出狂修道女もときよりはましと思いますけど?」

「露出狂なんかじゃないもん。私のこのナイスバディを皆に見せて  
悩殺、もといどんな人でも神の道に正すためなんだから。そんなに  
恥ずかしがってちゃ、いざってとき克己君といいこと出来ないよ〜  
〜。」

「言つときますけど胸なら私の方が大きくてよ? あなたみたいな  
中途半端な胸でよくもまあ、この私と張り合おうなどと……。」

「わかってないね〜。おつきりゃいってもんじゃないよ?  
克己君もしかしたら大きすぎる胸なんて嫌いかも〜。」

「な! 私はあくまであなたより大きいっていうだけで……。」

「ならあんたも中途半端じゃ～～ん。それに私のうりは大ききさじやなくてみずみずしさだから」

「だ、だったら私は柔らかさがうりですわ!」

「んむ～～～～」

いつの間にか胸の話にシフトした二人の近くでは……。

「……オレの……、……やっぱ小さいよな……」

ハリーは自分が二人と比べ、明らかに成長していないことを自分の胸を見て自覚し落ち込んでいた。

そんな追跡組のことなど知らず克己は新たに魚を選んでは人差し指を口につっこむ。

「……ふむ……。ジーク……」

「な、何？」

「お前……キスは嫌いか？」

「き、キス!？」

魚のキスについて聞いたにも関わらず、とたんにテンパージークに克己は少し若干頭を抱える。

「いやいやいや！好きとか嫌いとかはまだファーストもまだやら知らんけど……、まあ克己君になら……。ああでも好きや嫌いかなんてそのときによって……。ていうより初恋はイチゴの味とかなんとか……。」

「……………目をさませ……………」

克己はジークの後頭部に軽く一発。

「……………いたい……………」

「俺はスズキ科のキスが好きかについて聞いたんだ……。そこまですズキ科のキスが嫌いか？」

「ああ、いえ……。基本的に好き嫌いはないんやけど……………」

「ならいいか……………」

克己はキスを袋に数匹入れる。

「ジークったらキスで一体何を創造しましたの？まさか……………」

「そりゃそうだよ。いくら同年代最強とは言えジークだって女の子だもん」

「そうだとってもなあ……………」

「……………」



「克己のファーストを奪うのはオレだ！ ジークだろうが譲る気はねえ！」

「声がおおきいよ（ですわ）！」

急に立ち上がるハリーをシャンテとヴィクトーリアはむりやり座り込ませる。

そのお陰か……。

「？ ……何か今……。」

ジークに間一髪で気づかれずに済んだ。

「えっと………克己君……。」

「却下……。」

「まだ何も言っていないのに……。」

そんなジークの手にはポテチやらポップコーンやらの大量のジャンクフードの袋。

「何も言わないでもわかる……。まだあんなにあってただろう……。」

「せやけど……。」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・、一つだけだ・・・・・・・・・・。」

シユンとするジークを見かねて、克己はそっぽを向きながら手を伸ばす。

「ホンマ！？　ありがとう克己君！」

ジークはそんな克己の手にジャンクフードの袋をのせるどころか思わず抱きつく。

しかし・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・。」

数秒後、頭が冷静になると逆に顔面が一気に赤くなり、離れる。

周りでは主婦達がひそひそ話を始めるが・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・なんで手を伸ばしたのにお前が抱きつくんだ？」

当の克己は冷静である。

「す・・・・・・・・・・すい・・・・・・・・・・ません・・・・・・・・・・。」

ジークは赤い顔を見られないように反対方向を向きながら、ジャンクフードの袋を克己に手渡した。

「「あ

！」

ジークが抱きつくところを見て物陰から身をのりだしかけるハリーとシャンテ。

「お・・・もいですわ・・・。あなた方すこしはダイエットを・・・。」

その二人を支えるヴィクトーリアは一人震える。

しかしハリーらとはまた違い感情を内に秘めた顔をしている。

「あんにやる。。。オレだっておんぶしかしてもらってないのによ。。。。」

「ふっふ。。。ん。私なんてお姫様だつこだもんね。。。。」

「なあ！？ 羨ましい。。。。」

「その点私は皆よりも一枚上手。。。。」

「「き。。。！！」

ヴィクトーリアより小さく、ハリーより大きめな胸を張るシャンテに二人がハンカチを食い縛る程ではないものの、かなり悔しがっていた。

「とりあえず魚介類はこんなもんか・・・。」

「は……はい……。」

シヤンテは小さく返事を返す。

その途端……。

「あれ？ 克己君？」

後ろから妙に抜けた声が聞こえる。

「……なんて嫌なタイミングで……。」

克己はその声の主が誰だかわかっていたのか溜め息を吐き振り向くと……。

「やっぱり克己君だ！」

映司が走ってきた。

「どうしたのこんな所で？」

「お前には関係n」ねえ、その娘は？ もしかして……。」

「だからお前にはk」まさか……妹さん？」

「……妹……ではないな……。」

「……うち、そんなに小さく見える……。」

「えっ？ 違った？」

ジークのメンタル面に確かなストレートをかました自覚もなく、映司はすっとんきょうな声をあげる。

すると誰かが映司の側に駆け寄り一発。

「この鈍感！」

「あいたっ。」

一緒に買い物に来ていたなのはである。

「まったく急に走り出したとおもったら……、甘い……、じゃなくて……、まあいいや、いい雰囲気か台無しだよ！」

「？ なんだかわからないけどごめん……。」

映司が平謝り。

するとなのははジークと目が合いジークは頭を下げる。

なのはは女の勘が働いてか……。

「ほらほら映司君 邪魔したら悪いから もう買うものはないから早く会計済ましてあっちのお店で休憩しよ」

「えっ？ ちょ、ちょっとお……。」

映司の手を引っ張りながらカートを押していった。

「・・・・・・・・あいつは相変わらず・・・・・・・・。将来あんな風に女の尻に敷かれるのは勘弁したいな・・・・・・・・。」

冷やかな目で去っていく克己は引き続き買い物続ける。

ちなみに・・・・・・・・。

(・・・・・・・・あ、ありがとございます)

ジークは去り行くのは綺麗に頭を下げた。

その後二人は無難に会計を済ましスーパーを後にした。

ちなみにその日、スーパー内の喫茶店の売り上げは、とあるバカツプルの甘すぎた雰囲気のでいでブラックコーヒーがよく売れたとか。

ジークの部屋。

「・・・・・・・・。」

無言のまま下ししらせをする克己。

「・・・・・・・・。」

その克己をジークはぼくくつと見つめる。

「なんだよ……。」

「いえいえ。なんにも……。」

しかしジークは再びぼくっとし始める。

(……旦那さんが料理できるなんて素敵やるな……。休みに入ったら二人並んで……)

「ジiiiiiiiiiiiiクうううう……。」

「なんでにやけてるのよ……。」「

ドアの隙間から覗くハリーとシャンテはにやけ顔のジークにどす黒いオーラを発する。

「どうせはしたくない妄想でもしてるのではなくて?」「

「例えば?」「

「た……たとえば……。」

ヴィクトーリアは頬を赤くしながら、ハリーとシャンテに耳打ちをする。

「……。」

すると二人はまるでカメレオンのように顔面が急激に赤くなってゆき……。

「お前……。」

「意外と……。」

「な、なんですその目は~~~~~!!」

ジト目で睨むハリーとシャンテにヴィクトーリアは急に立ち上がる。

その声のポリュームは既に盗み見のレベルではなく……。

「……盗み見とはまたずいぶんいい趣味をもったなお前ら……」

「「「!」」」

『ルナ!』

いつの間にか開いていたドアには既にエターナルがルナメモリを手に三人を見下していた。

そして数秒後エスケープしようとした三人をエターナルのイメージングアームがあっけなく捕まえた。

「「「すいませんでした……。」」」

「そんなに謙遜せんでよ皆あ……。」



ジークは正座をする三人にあたふたする。

「こいつらずっとつけてたらしい……。まったく暇なやつらだな……」

「暇ってわけじゃなくて……。」

「だったらなんなんだ？」

立ち上がるも足がしびれ立てないハリーを克己は手を貸し柔らかく座らせる。

「……………だつてえ……、ジークつたらよお……、オレらと違って小さくて可愛いから心配になって……。」

「……………あいにく俺はそこまで欲求不満じゃない……。」

「ジークがじゃなくて……………克己が……。」

目を麗すハリーに同意するように正座する二人も頷く。

克己は三人を睨む。

そして……。

「……………はあ……。とりあえず……。」

克己は止めていた料理を続けた。

「」「」「……………。」

四人とも唾然とするが……。

~~~~~数分後~~~~~

テーブルに並ぶキスの天ぷらを始めとした料理の数々。

「克己？」

ハリーを初め頭を傾げる四人を前に克己はエプロンを外す。

「……………黙って食べ……………とりあえずは……………」

「「「？」「「「」

「……………お前らバカ三人は……………まあ……………、俺は……………許そう……………」

「「「ホント（か）ですの（？）「「「」

「ジークはどうする？」

「う、うちも特には……………」

「ならこのことはもう終いだ……………さっさと食べ……………冷めるぞ……………」

「「「は……………」

「お、おう……………」

「では……。」

ジーク、シャンテ、ハリーは箸、ヴィクトーリアはフォークを手にする。

「……いただきま〜す。」「」「」

「……ああ……。」

克己は微笑みながら背中を向け洗い物をするため、テーブルを離れキッチンに戻った。

数日後、克己の部屋は復活し無事克己はマイルームへと戻っていったが、ジークは何故か残念そうな表情を浮かべていた。

そして遊びにくる女子が新たに一人増えたとか。

「セ・イ・ン〜〜〜〜〜〜?」

「し、シスターシャツハ? それはちよつと……、そうそう!
! シスターの萌え要素として後々目当ての人を落とすために……」

「逆巻け……。ヴィンデルシャフト……。」

「ひい〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!」

「じつは楽しみ」の連鎖は繰り返されるのであった？

キスとトリオとテーブル（後書き）

ミハルを出す際悩んでることが。

ハーレムか一人か・・・。

ヒロインを誰にするか・・・。

ちなみにヒロイン（または達）はナカジマ家のスバルを除く五人の誰かにしようと考えてます。

没収と白い犬と拉致（前書き）

竜編後半。

かなり難産でした。

その気の乱れか今回は喋る犬科ということですがちょっとだけ変な方が
。。。

リオとコロナも恋愛させたいんですが相手の仮面ライダーが浮かば
ない。。。

今日MOVIE大戦見に行きました。

特に自分のような翔太郎大好き人間にはたまらないことが。

ヤッバイ！

なでしこは変身前後とも可愛いし、スーパータトバはななやらチー

トくさいし、相変わらずのバースチームだったり。。。

ポセイドンのフィギュア欲しい。。。

やっぱ坂本監督すげえ！

没収と白い犬と拉致

街中を歩くはやてと竜。

「~~~~~」

「楽しそうだな……。」

「そりゃそうや~~~~。なんせ初めての竜さんのデートやもん」
「はやては竜の腕に抱きつく。」

「少し歩きにくいんだが……。」

「なんやあ……。こんな美人と一緒に歩いてるうちゆ　のになん
てわがまま言うんや。」

「俺はあまりこういった経験がないからな……。はやては慣れて
いるようだか……。」

「そ、そうやあ。恋愛じゃあうちの方が先輩やなんかから主導権はう
ちにあるんやで?。」

「……まあ色気のない青春やったから、恋愛なんてまるでや
ってなかったけどなあ……。」

はやてはそっぽを向き、なにやら自分の黒歴史に嘆く。

「しかしこんなときにドーパントなんて……。まあ出たら相当キヤやるな〜」。

その後、はやての言葉を裏切るかのように近くで爆発が起こる。

「……………」

思わず笑顔のままフリーズしていたはやてだったが徐々に笑顔がひきつっていく。

「！はやて！隠れてろ！」

そう言い残し駆け出す竜をよそに……。

「ど…………ど…………ど…………」

わなわなとはやては拳を震わせる。

「ど」のKYや……………」

そしてプツンとキレたはやての悲痛な叫びが空に響き渡った。

「変…………身！」

『アクセル！』

パワースロットルを捻り竜は一瞬で仮面ライダーアクセルに変身すると……。

「はあああああ！」

エンジンブレードを手に不良に蹴りかかるバッテリーに斬りかかる。

「今のうちに行けえ！」

「は、はい！」

アクセルは不良達に促し不良達は逃げ出す。

「さあ！ 振り切るぜ！」

アクセルはエンジンブレードを手にバッテリーに斬りかかる。

「とっ！」

バッテリーも回し蹴りで対する。

互いの攻撃は空を斬り、なかなか当たらない。

しかしアクセルはバッテリーの蹴りを受け止め、叩き落とす。

「はあああああ！」

そして反応が遅れたバッテリーに目掛けエンジンブレードを叩きつけ吹き飛ばす。

すると……。

「とう！」

バッタヤミーはバッタの跳躍力によりアクセルの周囲を跳び跳ねる。

「何！」

アクセルはバッタヤミーに斬りかかるうとするも、寸前で避けられる。

そして……。

「とう！」

背中を蹴られ吹き飛ばされる。

「すばしっこいやつ……。それなら……。」「

『トリアルル！』

アクセルがトリアルルメモリをかざした時。

「竜さああああああん！」

はやてがアクセルとバッタヤミー目掛け物凄い形相で駆け寄ってきた。

「！？ 何！？」

「はあ！」

バッテリーは口からメダル型の光弾をはやての足元に放つもはやては動じずにバッテリーを通りすぎ・・・。

「こおんのバカ！」

いつの間にか出していた夜天の書の角でアクセルに殴りかかった。

無論アクセルに効くはずもなくはやてはしびれる手を抑えしゃがみこむ。

「は・・・はやて！ 今は戦って・・・。」

アクセルがバッテリーの方を向くとすでにその場にはバッテリーはいなかった。

「逃がしたか・・・。」

アクセルはメモリをドライバーから抜き、変身を解除する。

その瞬間。

「てりあぁー！」

慣れないせいか裏返った掛け声をあげはやてが竜からドライバーとメモリを奪いとった。

「何！ はや」「うるさあい！」

口論する隙も与えられず竜は夜天の書・角による打撃を股間にもろにうけ・・・。

「な……んて……マキシマムだ……。」

その場に倒れこんだ。

「もう知らへん！」

対してはやては竜から奪ったアクセルドライバーとアクセルメモリを手に、怒り心頭で帰っていった。

夜・とある屋台。

「まあ元気だせ若いの！ 狼も犬も似たようなものだ！ 人生山あり谷ありだからこそ楽しいんだ。俺なんて人間だったのが途中で犬になったぞ！」

「それはそれですごいが……。そう考えた方が気楽だろうか……。」

「そうだ！ 人生は挫折だらけだ！ そしてそんなお前に一言！」

「？」

「ボーイズビーアンビシャス！」

「……………」

「なんだその目は……………」

とある白い犬とザフィーラが地面で喋る犬同士しゃべっているはた
では……。

「はぁ……。」

「元気だしてくださいよ竜さん。」

屋台のカウンターでは芋焼酎を傾ける竜を映司は懸命に励ましてい
た。

あの後竜は頑張った。

恋愛知識も経験も皆無ながらも、皆無なりに頑張った。

はやてをとことん誉めたり、好きそうな服をプレゼントしたり、夕
食を代わりに作ったりとにかく自身に思い付くことを全てやった。

しかし帰ってくるのはドライバーとメモリではなく、全く愛想のこ
もっていない感謝の言葉と下げずむような目だけである。

「……俺は一体どうすれば……。」

ある意味ドーパントやヤミー、グリードよりも未知数な強大かつ不
可解な『女』という生き物に竜は思わず弱音をはく。

「~~~~ん……。やっぱり奪い返す……。は……。」

「良心が痛む……。」

映司の意見もやはり仮面ライダーだけに奪うことには抵抗を覚える竜。

「ですよ。だとしたら……。」

「なんだ！？ 教えてくれ映司！」

竜は映司の肩を掴み脳震盪でも起きるのではないかと思うくらいに揺する。

落ち着いた竜から解放されふらつく映司は自身も知識がないなりに言ってみた。

「確かはやてちゃんからデートを誘ってきたんですよ？」

「あ、ああ……。」

「やっぱりデートで気分を害しちゃったから改めてデートをしないおす……とか？」

「今の不機嫌なはやてが誘ってくるとは到底……。」

「自分から誘ってみる……とか？」

「反論されたらどうする……。」

「俺の場合はされる側ですけど……、無理矢理連れ出すとか……。」

「へっくちん！ 風邪かなあ……。映司君に暖めてもらえたら治りそうなんだけどな〜」

「へっくしょん！」

「風邪か？」

「ああ、いえ大丈夫です。それでどうですか？」

「自分から……。無理矢理……。」

「……。あれ？ やっぱり駄目でしたかね？ そもそも俺に聞くこともちよつと……。俺もあんまり経験ないですし……。こいうのはやっぱり来人君とか克己君、翔太郎さんとか……。そいういや今いないんだつた……。なら他に男の……。あ。一人いた。」

「いや……。その手があつた！ すまなかつたな映司。安心しろ……。左がない今、仮面ライダーが減ることは死活問題だ。一刻も早くアクセルを取り戻す！」

「は、はあ……。頑張ってください……。」

竜はザフィーラの鎖をつかみ引きづって帰っていった。

「……………」

映司が啞然とする横では……。

「親父！ がんも！」

白い犬が喋って店主にがんもを注文、店主も何の疑いもなくがんもを差し出すというなんとも力オスな環境が完成しており……。

「……………ザフィーラさんといいこの子？ ……といいやつぱりミッドは凄いな……………」

映司もミッドということになにやら納得してしまっていた。

その後酔って帰ってきた映司はもれなくなのはの部屋に強制連行されかけ、寸前で酔いがさめるといふ、ある意味凄い経験をした。

今後活用できるかは別として。

翌日。

「……………」

「……………」

「……………」

仏頂面でご飯を箸でつまんで口に放り込んでいくはやてとなにやら考えるような表情の竜。

ザフィーラを除く他の面々もそんな二人の空気からか、会話を切り出せない。

ちなみにザフィーラは二日酔いである。

なあ……。頼むからなんか切り出せよ……

無理言う……

はやてちゃんなんか不機嫌だし……。ちよつと私にも話を切り出す度胸は……

んだよ。お前らそんだけデカイ乳してるわりには度胸ねえなあ……

() ……あまり関係ないような……()

シグナムとシャマルがヴィータの言葉に内心で突っ込む。

その時。

「じちそうさま……。。」

「お粗末さまっ！」

食べ終えた竜にはやてが強く返事をする。

見るからに不機嫌が目立つ。

その時竜がはやての手を掴む。

「えっ？ ちょっと、竜さん!？」

「はやて……。今からデートに行くぞ……。」

「はへ？」

「埋め合わせだ……。」

「ちよつと……。まだ心の準備が……。勝負下着だって……。服もあまりいいのじゃ……。」

「安心しろ……。お前は何を着ても似合う……。」

「えっ？ ホンマ？」

嬉しくなり若干反発を弱めるが……。

「……。いやいやいや！ その手には乗らへんよ。そもそもな
んで急に……。」

「俺に質問を……。」

そんな二人はいつの間にか野外に。

そして竜ははやてをお姫様抱っこし、ディアブロッサの後部に乗せるとはやての反論も聞かずに、ヘルメットを被せ、自身もヘルメットを被り……。

「するなああああああ！」

タイヤと地面の摩擦熱によりタイヤ痕と煙を残し、はやてを拉致に近い形で後部に寄せたまま走り去っていった。

対し……。

「竜も振り切ったか……。」

「明日は赤飯かもな……。」

「ヴィータちゃん、まだ朝ごはん食べてるのに気が早すぎですう……。」

「近いうち、あたしらの妹……または弟みてえなやつができるな……。」

シグナム、ヴィータ、ライン、アギトは何やらAやBを通り越してまで行きそうと勘違いしつつ静かにお茶を飲む。

「それじゃあはやてちゃん、明日の朝には帰ってこれないからお赤飯は私が……それはやめといてくれ（ろ・ください）……。」

「ひびお……い。」

四人に早々に拒絶された涙目のシャマルを含めたシグナム達や融合騎達はゆっくりと茶を飲む。

「…………頭が…………。」

ザフィーラに関してはいまだに二日酔いでノックダウンしていた。

デートと連続と青い犬（前書き）

竜編後半です。

振り切れましたかね。

次は映司編！

個人編ももう少し！

個人編が終わったら本格的に物語を。

そういえばメテオ！

なかなか好きです。

特に戦い方と掛け声。

ネタバレになるので前書きではあまりいいませんが。

フォーゼを出すんだったらかれも出したいと思います。

デートと連続と青い犬

クラナガン・都内。

バイクの性か体感速度を速く感じながら竜とはやてはディアブロッサで疾走していた。

「・・・・・・・・。」

半キヤップを被ったはやてはぼ　と竜の顔を後ろから不機嫌そうに眺める。

(　なんや竜さん……。速くベルト返して欲しいからってこんなこととして……。あにくうちはこんなことじゃ騙されへんからな！
・・・・・・・・せやけど竜さんから誘ってくれるなんて初m……、
まあデート自体前のが初めてやけど……。それに勝負下着だつてつけてへんし……。いやいや！　迫ってきても絶対に許さへん！　許さへんし！　・・・・・・・・そこまではないけど……)

すると竜がとある店の前に止まる。

「はやて……。」

「な、なんや？　言っとくけどモノで釣ろうなんも「ちょっと服で悩んでいるものがあったな……。君に選んでもらいたい……。」

「えっ？　そつち？」

「君にはプレゼントしただろう……。」

「せ、せやけど……。竜さんは……。うちに服を選んでもらいた
いん？」

「ああ……。」

「うち、男の人の服なんか選んだことないんよ？」

「なら俺が初めてだな……。」

「……。竜さんがうちに……。」

「嫌か……。」

「……。」

はやてはそっぽを向き少し考えた後……。

「……。しゃーないなあ……。」

目を合わせようとせずに竜の手を握った。

服屋。

「竜さん、こんなんどつ？」

はやては自分の感性に従い服を抜粋していく。

やはり自分への普段のファッションもいいだけあり、男へのファッションに関してもしっかりと。

「……………すごいな……………」

竜は下を巻いていた。

するとはやては竜の視線に気づくと……………。

「……………あ……………。いや……………。これはな……………。……………うち凝り性やから！　せやからこんな廃人みたいに……………」

手をいっぱい振り回す。

「いや……………、俺は好きだぞ……………」

「ホンマ？」

「ああ……………」

「……………ならもう少し頑張ろうかな……………」

はやては頬を赤くしながら抜粋を続ける。

竜もまた服づれが起きてもはやての選んだ服を試着していった。

そして……………。

「これがいいな……………」

「これ？」

「ああ……。」

竜ははやてが自身に似合うとコーディネートした洋服一式をまるごと拳げる。

「そんなに買っくん？」

「ああ……。気に入ったからな……。」

「ま、まあそれならそれでええんちゃう？」

「じゃあ会計と配送の手続きをしてから少し外す……。」

「う、うん……。」

竜ははやてと一時離れる。

「……竜さん、うちの選んだの全部着たんやな……。」

はやては試着した服を片付けていく。

（……まあ、いいのがあってよかったわ。それになんだか彼女みたいや……。仮面ライダーの彼女……）

はやては現在デバイス内に原子分解し隠しもったままのアクセルドライバーとアクセルメモリを思い出す。

「はやて……。」

すると竜が戻ってきた。

「……どないした？ デートは終いか？」

「まさかな……。」

うつむくはやてに竜は笑いかける。

するとはやては竜の手を握る。

「……。」

「……女の子を退屈させんようにすんのが男の人の条件や……。」

「……ならがんばらないとな……。」

竜もはやての手を握り、二人は店を後にした。

「はいダーリン あ……ん。」

「あ……ん。」

食べ合いつこをするバカップルを遠くから眺めるはやて。

「……どうかしたか？」

竜ははやてを不思議がる。

「いえ……。うちもあんな風に誰かと食べ合いつこできるのかなあ〜〜って……。」

「……………」

「竜さんはどう？ ああ言うことされるの……。」

「……わからん。しかし……好きな人や大切な人と一緒にいられたら、それだけで俺は幸せと思えるな……。」

「好きな人……。」

「ああ……。」

「竜さんって……、前の世界で好きな人っていたんですか？」

「……………」

「あ、すみません！ うちったら……。」

「いなかった……。だからこそ今の俺は幸せだ。心から守りたい人がいるからな。」

「それって……。」

「……………君だ……。」

「ほ、ほほホンマ!?!」

「ヴィータやシグナム、シャマル、ザフィーラにリインにアギト・」

竜が言い切る前にはやては夜天の書を出し、角で竜の頭をぶつ叩く。

「……………」

頭から煙を出しテーブルに倒れる竜に……。

「竜さんのど阿呆お!」

はやてが引き続き夜天の書を叩き込みながら罵声を浴びせた。

ちなみに若干緩和され角ではない。

その後竜は頭を抱えながら、はやては仏頂面で食事を続けた。

ディアブロッサを止め、二人は街中を歩く。

しかし先ほどの雰囲気は微塵もなく、二人は数メートル離れて歩いている。

「はやて……………」

「……………」

「気分を害したなら謝る……。」

「うっさい……。」

「はや」「うっさい」「うっさい」「うっさい」「うっさい」「うっさい」！

大声を出すはやてに周囲は驚く。

「……。」

「そんなんだから竜さんは女心がわからないんや！ そんなんだからうちはベルトを返したくないんや！　うちは竜さんの特別であつてほしい……。」

「……。」

周囲の視線も外れるが二人は硬直したまま。

するとはやては駆け出し竜に抱きつく。

「たしか翔太郎さん、怪我してミッドを離れとるんやろ……。うち……。竜さんにはそんな目におうて欲しくない……。仮面ライダーなんてやめてもらいたい……。うちはスバルみたいに心も身体もタフやない……。だから……。」

その時。

「……！　はやて！」

突如竜がはやてをかばうとその場に弾丸が放たれる。

竜が身体を起こすと……。

「はぁ……。てめえ……。うざい！」

アームズドーパントが銃と剣を向けていた。

周囲は皆、悲鳴をあげ避難ずみでアームズは竜達に歩み寄ってくる。

「……………はやて……。ドライバーを返してくれ……。」

「……………せやけど……。」

「君がなんて言おうが俺は仮面ライダーをやめる気はない……。俺は君のおかげで仮面ライダーになれた。君のために仮面ライダーになった……。」

竜はエンジンブレードを手にアームズに駆け出し斬りかかる。

しかしドーパント相手でそこまで戦えるはずがなくエンジンブレードを盾にし、なんとか持ちこたえている状態である。

「俺は正直この世界に来て君たちと会うまでは仮面ライダーをただ名乗っているだけの男だった！　しかし君が俺を変えてくれた！　大切なモノを！　大切な人を守る本当の仮面ライダーにしてくれた！　だから俺は！」

その直後、竜は腹部に強烈な一撃を受ける。

「ぐっ！」

そしてそのままはやての方に投げ飛ばされる。

「があああああ！」

「竜さん！」

はやては直ぐ様駆け寄るが竜はそんなはやての腕をつかむ。

「俺にはあれが必要だ……。そして……。君も……。」

「うちも？」

「ワガママかもしれない……。それでも俺は君を一生守りたい……。君が仮面ライダーとしての俺を嫌おうが俺はやめない。仮面ライダーとして……。一人のただのちっぽけな人間として……。男として！ 君のそばで……。一生……。君を守りたい……。」

「……………それって……。ぷぷぷプロポーズですか？」

顔面が真っ赤になりテンパるはやてに竜は一瞬啞然とするが、少し笑うと……。

「……………そう聞こえたなら好都合だ……。」

「それって……。」

「ただし……。指輪も籍もしばらくは入れられないがな。」

はやては頬を赤らめデバイスからアクセルドライバーとアクセルメモリを実体化し竜に渡す。

「そんなら・・・、少なくともそんなときまでは守ってもらいな」

「・・・引き受けた・・・。」

竜はドライバーとメモリを受け取り立ち上がる。

腰にドライバーを装着しアクセルメモリを手にする。

『アクセル!』

そのままアクセルメモリをスロットしパワースロットルを捻る。

『アクセル!』

バイク音が響き渡り、竜の身体の前に円形と槍型のエフェクトが発せられ、一瞬で赤き戦士、仮面ライダーアクセルへと変身を遂げた。

「さあ・・・、」

「振り切るぜ」

言いたいことを言われたアクセルは後ろのはやてを睨む。

「一回言ってみたくて」

その直後後ろからアームズが襲いかかるがアクセルはなんのためら

いもなく蹴り飛ばす。

そして……。

「さあ！ 改めて……振り切るぜ！」

アクセルはエンジンブレードを手に駆け出し……。

「はあああああ！」

アームズと切り結ぶ。

アームズの大剣をアクセルはエンジンブレードの刃部分で受け止める。

アームズの乱れに乱れた斬撃を全て受け止めていくと、徐々にアームズの大剣部分にエンジンブレードが食い込んでいく。

そして……。

「はあああああああ！」

アクセルが跳躍し上段斬りを放ち、アームズは大剣で受け止める。

その途端、アームズの大剣は粉々に砕け散り、エンジンブレードはアームズを真っ向から切り裂く。

そしてそのまま蹴り飛ばす。

「ぎがああああああ！」

地面を転がるアームズ。

「さあ！ 今日はどこん……振り切るぜ！」

『トリアル！』

アクセルはトリアルメモリがすでにスロットされている状態で駆け出し、途中で黄色く、最終的に外装が剥がれるようにアクセルトリアルへと変身を遂げる。

そのままトリアルメモリを外しマキシマムモードに変形させスイッチを押し、宙に投げる。

「はあああああああああああああああああ！」

そして前蹴りでアームズを蹴りあげるとそのままT字にトリアルマキシマム、マシンガンスパイクを叩き込んでゆく。

そして最後に回し蹴りを放ちアームズを蹴り飛ばすとトリアルメモリをキャッチ、スイッチを再度押す。

『トリアル・マキシマムドライブ！』

「9.5秒……。それがお前の絶望までのタイムだ。」

「あああああああああ！」

アームズは宙で爆発、男が衰弱して横たわる。

「ため……みてえなりア充なんか……消えちまえ……」

ば……………」

男はそのまま気絶。

「局に任せるか……………」

変身を解除し竜ははやての元に歩み寄る。

「待たせたか？」

「……………レディを待たせるなんて失格やで……………」

「すまん……………」

「……………謝らんといて……………」

そのままはやては背伸びし……………」

「……………」

「……………はやて……………」

「……………「うちからはやったで……………次は……………」

「……………ああ……………」

竜もはやての顎を優しく上に向けると少し頭を下げるように自身の唇とはやての唇を合わせた。

そのままゆつくりと唇を離すが、はやてはまだ頬が赤い。

しかしそんなはやてが今の竜には何よりも愛おしく感じた。

「……………まだ次は許さへんよ？ ていつのは冗談で……………
どうする？ ホテルいきたいなら……………」

「よくはわからないが……………今は……………この時を楽しみたい……………」

「……………うちも……………」

そして夕日をバックに二人は互いに唇を近づけ、この数分で今日三度目のキスをした。

そんな二人を青くデカイ犬が建物の影から、肉球の手で器用に写真を撮っているのも知らずに。

その後無事にドライバーとメモリは竜の手に戻った。

そして二人の仲はより強く深く……………。

「…………………………」

無事に八神家に入った二人が見たのは……………。

「……………どんな地獄絵図や……………」

リビングのテーブルにぶっ倒れている八神家の面々であった。

「なるほどな……。」

竜は直ぐ様察した。

皆のお椀には赤飯……、らしき暗黒物質、通称ダークマターが入っており、床には箸が転がっている。

キッチンにはそのダークマターを抱えながらキッチンに寄りかかり魂がエクトプラズマ……、もとい気絶しているシャマルが。

「とりあえずはやて……。」

「まさか皆を復活させることが夫婦の初の共同作業になるなんてな

あ

「嫌か？」

「ううん　竜さんと一緒なら何でも」

「……俺もだ。」

頬を赤らめるはやての頭を優しく撫でながら竜とはやては、はシャマルの作り出したダークマターの影響で魂がエクトプラズマしかけているザフィーラを除く八神家の復活を開始した。

そして二人の努力でなんとか皆は復活。

ただし赤飯へのトラウマつきで。

とあるバー。

「主も竜も一皮向けたな……。」

カウンターに座るのはシャマルの赤飯という生物兵器からなんとか逃れた人間態のザフィーラ。

「なんの写真だ？」

隣にはなにやら白と青の毛並みの犬人間が……。

「ああ……。我が主の記念すべき日の写真だ……。」

「ほう……。俺の友の主の良いことなら俺にもよいことだな……。乾杯しようザフィーラ……。」

「ああドギー……。我が主の記念すべき日に……。」

「我が友の喜ばしき日に……。」

「乾杯……。」

犬耳を生やした褐色の肌の男性と、通称地獄の番犬の犬署長はグラスを優しくぶつけあった。

マスターも優しく二人を見守るなど、このバーも先日の屋台同様固
有結界化していた。

「ところでドギー……、変身したとき、お前の鼻」それは聞か
ないでくれ……。」

デートと連続と青い犬（後書き）

今回のゲストは！

特捜戦隊デカレンジャーからドギー・クルーガーでした。ラストのあれは変身したときのマスクに関したネタです。前回は白戸家のお父さんでした。

ちなみに前々回の克己編ではちょっとネタが入っていました。

克己が魚の口に指を突っ込み鮮度を計る技。

これは仮面ライダーアギトの津上翔一から。

我ながらなんてわかりづらい・・・。

二大コンボとすれ違いとコンボ不可（前書き）

映司編です。

ちょっと変な感じがどうも抜けません・・・。

そしてサゴーズ、シャウタが好きな皆さんスイマセン・・・。

二大コンボとすれ違いとコンボ不可

『サイ・ゴリラ・ゾウ！ サゴーズ・・・サゴーズ』

街でパンダヤミー、アゲハヤミーと戦うオースはサゴーズコンボになるとゆっくりと歩み寄る。

そして・・・。

「はあ！」

パンダヤミーやアゲハヤミーの攻撃をゴリバゴーンで受け止めては逆の腕で殴る。

二体のヤミーも負けじと爪を立てて襲いかかるが相手はパワーのサゴーズコンボ・・・。

「はあ！」

強力な打撃に火花を散らし殴り飛ばされる。

『スキヤニングチャージ！』

オースはオースキャナーでドライバーをスキャンする。

「はあ・・・、はっ！」

オースは宙に浮き、着陸するとその場から衝撃波が放たれ、パンダヤミーは地面にめり込み無理矢理吸い寄せられていく。

「はああああああ．．．．、せいやあああああああ！」

そしてサゴーズの必殺技頭突きとパンチ、サゴーズインパクトがパ
ンダヤミーに放たれ、パンダヤミーは爆発。

その場の地面は何もなかったかのように修復される。

すると。

「！」

次にはアゲハヤミーが体当たりする。

「がああああああ！」

オーズは壁を突き破り消える。

アゲハヤミーは更に仕掛けるため壁に歩み寄ったとき．．．。

『シャチ・ウナギ・タコ！ シャシャシャウタ！ シャシャシャウ
タ』

「はあ！」

オーズ・シャウタコンボが液状化状態から実体化し掌底を放つ。

「はあ！」

そしてそのまま、アゲハヤミーの打撃を避け、隙に掌底を叩き込ん

でいく。

アゲハヤミーは飛翔し逃げようとした途端……。

「そらっ！」

オーズはウナギウィップを放ちアゲハヤミーを捕らえる。

するとアゲハヤミーは逃げることを止め突っ込むが……。

「ふっ！」

オーズは瞬時に液状化し受け流すと、アゲハヤミーの背中で実体化し……。

「あばばばばばばばば！」

タコレッグで連続蹴りを放ちアゲハヤミーを地面に叩きつける。

『スキヤニングチャージ！』

オーズも着陸すると休む暇も与えずオースキヤナーでドライバーをスキヤンする。

「はっ！ よつと！」

オーズはウナギウィップでアゲハヤミーを捕まえると自身に吸い寄せる。

そして……。

「せいやあああああああ！」

タコレッグをドリル状にしたキック、オクトバニッシュを放ちアゲ
ハヤミーは爆発千散、セルメダルの雨が降る。

「はあ．．．、はあ．．．、はあ．．．、はあ．．．、はあ．．．。」

変身が溶けた映司は大の字になってその場に寝そべる。

「あ〜〜。疲れた。でも少しはコンボにも慣れてきたかな。残る
は．．．。」

映司の手には三枚の赤いメダルが。

「この赤いメダルのコンボだけだなあ．．．。どんな能力なんだろ
う．．．。」

その夜・高町家。

「映司君、今日またコンボ使ったでしょ．．．。」

「え？」

食卓で高町親子とテーブルを囲み夕食を食べている映司はジト目の
なのはににらまれそっぽを向く。

「．．．．．凶星だね．．．。」

「……………なんでそう思うの？」

「女の勘……………」

(……………まさかなのはちゃん、タカちゃんを改造したりしてないよね……………)

「映司君、コンボは控えるって言ってたよね……………」

「……………ナ、ナンノコトダカナニガナンヤラ……………ワタシハキョウコンボナント、イツカイモ……………」

「……………映司君」

笑顔のなのは。

しかし手にはレイジングハートが握られている。

「……………はい……………」

映司はあっけなく折れた。

(…なのはママ、浮気なんてされたらこの家どうなっちゃうんだろう……………)

なのは隣のヴィヴィオに至っては二人に目も合わせず食事を見守り続けずにわかりきった創造を浮かべた。

~~~~~数分後~~~~~

「……………」

「……………ふうふうん……………重力に水のコンボがあ……………」

なのは冷めた目で映司を見る。

ちなみにヴィヴィオはこの重苦しさにリタイアし、自分の部屋である。

「そ、そうなんだよ！ サゴーズはなんだかすごく力が強くなるし、シャウタなんか身体が液体になっちゃうしね……………あれ？」

見るからにテンションが低いなのはに映司は顔をひきつらせる。

「……………映司君……………私はね……………オーズのことなんて知りたくない……………」

「へっ？」

「コンボは強いけど危険だってことは黄色いコンボ見た私だってわかってるの！ 私が心配してるのは映司君の身体のこと！」

「俺の……………身体？」

急に大声を出され驚く映司に追い討ちをかけるように、なのはは涙目になる。

「そうだよ！ 現に前だって倒れてたじゃない……………」

「うん……。でも俺はまだ仮面ライダーとして半人前だからその分、力で頑張らなきゃ……。」

「私は許さないもん……。コンボは危険なんだからもう使わないで……。」

「……………」

「なんで答えてくれないの？」

「……………使わないなんて根拠はないし、いざとなったら使うよ俺は……。いざってときに使えなきゃ意味がないし……。」

「それじゃ……………」

「そ、それじゃ俺ちよつとやることあるから先にお風呂入っちゃってね。」

なのはが言いかけた途端、映司は逃げるようにそそくさと自分の部屋に戻っていった。

「……………異常なしかあ……………」

映司は自分の部屋でタカカンを分解していた。

無論極端に機械には強くはないため以前慎太郎にベンダーらと同時にもらったカタログを見ながらのチェックである。



「…………でもコンボは控えるべきかなあ…………。」

映司は机にメダルを並べていく。

そして三枚の赤いメダルを持つ。

「でも知っとくべきとは思うんだよね…………。」

すると映司はうつろうつろなっていく。

「お風呂は後でいいかも…………。」

そのまま映司はベッドに仰向けになると寝息をたてて眠りについた。

~~~~~数分後~~~~~

眠り続ける映司の部屋にはいつてきたのは…………。

「もう…………、映司君ったら…………。」

いつまでも映司の部屋の明かりがついていることを不思議に思ったのはでる。

「あれ、寝ちやってるよ。全く…………。寝るときはちゃん…………と…………。」

映司の寝顔をじっと眺めるのは。

そしてその場を見渡し、部屋の扉を閉めると、反応がないかつつい

たり押ししてみたりするが映司は眠り続ける。

「……………」

するとなのはは映司の対極に寝そべる。

(なんでこんなに無邪気な顔で寝てるのかなあ……………「っちは心配してるっていうのに……………」)

むすつとしながらなのはは映司の頬をつつく。

「……………映司君……………」
「これじゃそのうち……………」

なのはは自身のことと今の映司を重ね合わせる。

「映司君の気持ちもわからなくはない……………。だけどやっぱりコンボは……………」

すると。

「…」

なのはは机の上に並べたコアメダルを見つめる。

「たしかコンボって三枚がおなじ色で発動するんだよね……………」

なのはは指でメダルを弾きながら、考え込む。

(どうすれば映司君、コンボを遠慮してくれるんだろう……………)

するとなのははある案を思い付く。

だがこの案は下手すれば、映司の身体すら危険にさらすことであった。

しかし……。

（とりあえずおなじ色さえ揃ってなきや……）

なのはは自分に従い、机に並べれたコアメダルを各色一枚ずつ手に取りポケットにしまった。

「とりあえずこれでコンボ……は……。」

なのはは妙な罪悪感を感じつつ映司の頬にキスをして消灯し、退室した。

翌日。

「あれ……。どこ行ったんだろう……。」

映司は部屋を掃除してまでなくなったコアメダルを捜していた。

「変身はできるけどこれじゃコンボできないよ……。」

肩を落とす映司。

「でもちゃんと置いたし・・・、よりによって5色の中でもそれぞ
れが一枚ずつなくなるのも不自然だよな〜」。

映司は頭を傾げながらリビングに向かった。

リビング。

「おはようなのはちゃん、ヴィヴィオ。」

「おはよう映司君。」

「おはようございま〜す」

笑顔で返すのはとヴィヴィオ。

しかしなのはの笑顔は若干ながらひきつっている。

「ねえ二人とも・・・、俺のメダル知らない？」

「！」

「うっん。知らないよ？　なんで？」

「わ、わたしも知らないかなあ〜」。

素直に答えるヴィヴィオに対しなのはは目を会わせない。

「そっかあ〜」。どこいったんだろう・・・。

「……………それよりも映司君、朝御飯食べてからの方がいいんじゃないかな……………」

「そつだ……………ね。」ご飯食べないと力でないだろうし。」

「……………」

複雑な表情を浮かべるのはは顔を見られないように、調理を続けた。

その後朝食を食べ終えたヴィヴィオは学校、なのはは映司に留守をまかせ、仕事に出掛けた。

映司も午前中部屋を探しまくったが、見つかったのはなのはが以前なくした真っ赤なパンツだけであった。

ちなみに映司は初見の時、女性のパンツを新鮮に感じしばらく遊んでいたが、自分のやっていることの異常さに気付き、冷や汗をかきながらなのはの部屋の机の上に静かに置いた。

「どこにいつちゃったんだろう……………」

昼食に自作の炒飯を食べる映司。

「そついえばなのはちゃん、俺がコンボをするの反対してたよね……………」

「……………」

映司は昨晚、なのはとの話し合いを思い出す。

気づけばなくなったのではなく、誰かがもっていったのではないか・
・。。

だとしたら自身がコンボを使うことを嫌うなのはがメダルを奪いコンボをさせなくすると考えればつじつまがあった。

しかし。。。

(そんなわけないよね。。。なのはちゃんいい娘だし。。。)

映司はなのはを疑おうとはしなかった。

その時。

「！」

なにかがガラスを叩いていた。

見るとそこにはタカカンドロイドが嘴でガラスをつついていた。

「まさか。。。、ヤミー。。。」

映司は炒飯を掻き込み水を一気に飲むと、エプロンを投げ捨て家に鍵をかけて外のライドベンダーに股がった。

現在のオーズの使用可能メダルは。。。

タカ
クジャク
トラ
チーター
カマキリ
バツタ
サイ
ゴリラ
シャチ
ウナギ

墜落と繋ぐ手と炎のコンボ（前書き）

映司編後半です。

タイトル通りあのコンボが！

墜落と繋ぐ手と炎のコンボ

高層ビル・屋上。

「くらええ……、くらええ……、くらええ……。」

そこから街に向け針を発射し攻撃するアルマジロヤミー。

すると。

「見つけた!」

映司が階段を昇りきりアルマジロヤミーを見つけた。

「貴様は……オーズ!」

「知っていただけで光栄だね。」

映司は憎まれ口を叩きながらタカ、トラ、バッタのコアをドライブ
ーにスロットし、スキヤナーを滑らせる。

「変身。」

『タカ・トラ・バッタ! タトバ! タトバタ・ト・バ』

映司は仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身を遂げる。

すると。

「俺も混ぜてもらおうかあ！」

デスハがアルマジロヤミーの横に突如として現れた。

「お前は・・・、たしかグリードの・・・デスクトップ！」

「デスハだデスハ！ 最初の二文字しかあってないし文字数すら違うだろうが！ 人の名前を間違えるなんて貴様それでもオーズか！」

「い、ごめん・・・。」

(・・・人じゃないよね・・・)

オーズは思わずデスハに平謝りする。

「ま、まあいい。こないだの続きをしようかオーズ！」

デスハとアルマジロヤミーは同時にオーズに向け駆け出す。

「まあ・・・、俺も簡単にやられる気はないけど！」

オーズもまたメダジャリバーを手にデスハとアルマジロヤミーとに向け駆け出した。

時空管理局・首都航空基地。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・。」

手赤いコンドルメダルを握りながらなのはため息をはく。

「……………あの……………」

「……………はあ……………」

「……………きよ、教導官？」

「……………はあ……………」

「……………高町教導官？」

「は、はへ！？ な、なにか？」

教え子の一人に呼ばれテンパるなのは。

「なにか考えごとですか？」

「ああ、ううん。なんでもないよ？ なんでもないから……………」

手を振りながら異常を悟られないようにするのは。

はたから見る男性らには「萌える」「やらなんやら言われているが」「本人はなにも知らない。」

すると遠くの高層ビルの屋上で爆発が起きる。

「爆発？」

「なんだ一体？」

訓練生達が高層ビルの屋上を眺める中……。

「なんだありや……。」

ヴィータがなのはの横で頭をかしげる。

「多分仮面ライダーが怪人と戦ってるんじゃない……。」

「あ〜〜。まああいつらなら心配はいらねえか……。映司はともかくな。」

「えっ？　なんで映司君だけ……。」

「竜が言ってたんだよ……。ヤミーはドーパントよりも手強いってな……。それにヤミーを作り出すグリードはもつとヤバイってな……。竜や来人らはそれなりに経験があるが映司はまだ力を把握しきってねえんだと。」

「……。」

「確かに映司は翔太郎や竜と違ってメダルだからなあ……。」

「じゃあ映司君、そのグリードっていうのとヤミー、二つと戦うんだったら……。」

「ま、まあ竜曰くコンボが出来りや、経験のない映司でもそれなりに戦えるとか……。」

「……コンボが……。」

なのはは掌のコンドルメダルを見つめる。

そんななのはの様子がおかしいと判断し、ヴィータはなのはの掌を見ると顔色を変える。

「お前……、なんでメダルを……。」

しかし啞然とするヴィータが見たのは……。

「……ヴィータちゃん……。ちよつと任せた！」

「えっ？ ちょ、こら、なのは！」

なにやら決心を固めたなのはであり、そのなのはは瞬時にバリアジヤケットを纏い飛翔していった。

高層ビル・屋上。

「がああああああー！」

アルマジロヤミーの針とデスハの光弾で身体から火花を散らすオース。

「ぐっ……。」

思わず膝をつく。

「っ、強い……。」

「オーズ……、どうした……。お前の力を見せてみる……。」

「俺の……力？」

「コンボ……を使っただろうだ？」

「……。」

オーズは左腰のオーメダルケースを触る。

（なんでかわからないけど今なれるのは亜種だけ……。でもまあ……やらなきゃやられるなら……。やるしかない！）

オーズはドライバーにチーターのメダルをスロットしスキャンする。

『タカ・トラ・チーター！』

オーズ・タカトラーターは高速で駆け出し拳をアルマジロヤミーに放つが……。

「か……かつたあああああい！」

手を痛め手に息を吹く……。といっても仮面のせいで息も届かず手すら変化しているため、風すらも当たらないが。

その直後デスハの剣がオーズを切り裂き突き飛ばす。

「うわあああああ！」

転がっていくオーズだが、直ぐ様立ち上がる。

「な、なんて硬い……。前のカブトムシみたいだ……。なら力だ！」

『シャチ・ゴリラ・バツタ！』

「はぁ！」

オーズ・シャゴリバは頭部から高圧水流を放ちながら2体に殴りかかる。

火花を散らし吹き飛ばされるアルマジロヤミー。

しかしデスハはゴリラアームの打撃を剣で防ぎ、オーズの首筋に剣を突き立てる。

「！」

「まだまだ踏み込みが甘い！」

オーズは斬られかけるが素早く後方に飛ぶ。

しかしデスハは……。

「逃がさん！」

アルマジロヤミーの針と同時に光弾を放ち、オーズの身体から火花が散る。

「があああああああ！」

そしてとうとう変身が溶け、映司は壁にころがりながら叩きつけられる。

「どうしたオーズ……。コンボはどうしたんだ……。」

デスハは剣を叩きながら映司に歩み寄る。

「俺も使いたいんだけどね……。なんだかメダルが無くなって……。……。」

「……。呆れたな……。そしてそんな貴様との戦いに心踊った俺自信にも……。だから貴様はここで俺が……。」

デスハは剣を向け映司に歩み寄る。

その時。

「デイバイ　　ンバスター！」

デスハとアルマジロヤミーに魔力砲が放たれるが2体は効かないように身体の埃を払う。

「嘘……。効かない？」

その魔力砲を放った張本人、高町なのはは飛翔しつつもショックを受ける。

「！　なのはちゃん！」

映司は身体をなんとか起こす。

「映司君！ ごめんなさい！」

「えっ？」

「実は……メダル無くなったの……私のせいなの！」

「……………」

啞然とする映司。

その時。

「邪魔をするな蚊トンボお！」

デスハは掌に重量を込め弾にするとそれをなのはに投げつける。

重量弾はなのはを無理矢理吸い寄せせる。

「くっ！」

なのはは直撃寸前でバリアを張りふせこうとする。

しかし……。

「ぐっ……………」

歯を食い縛るなのはを裏切るかのようになのはが張ったバリアにヒ

ビが入っていく。

そして無情にもバリアは砕け……。

「くっ！」

なのははとっさにレイジングハートで防御するが……。

「きゃあああああああ！」

レイジングハートは砕けなのはは宙で爆発、バリアジャケットが破け大破したレイジングハートを手にしたまま落下していく。

「！なのはちゃん！」

すると映司は自分が飛べないことも気にせず屋上から飛び降りる。

「馬鹿が……。しかしまあ……見届けるのも一興か……。」

デスハとアルマジロヤミーは落下していく二人を見届けようと屋上へ身乗り出した。

高層ビルから落下中。

「なのはちゃ

ん！」

「……………」

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・落ちてる。」

「ふええ！？ レイジングハート！ 動ける？」

『ノープロブレム・・・・・・・・といたるところなのですが・・・・・・・・』

「そう・・・・・・・・短い人生だったなあ・・・・・・・・」

「ちよっ！」

「ねえ映司君・・・・・・・・最後にキス・・・・・・・・しない・・・・・・・・」

「は！？」

「だって・・・・・・・・私たちもう・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なのはちゃん・・・・・・・・メダルを返して・・・・・・・・」

「！ なんて・・・・・・・・」

「なのはちゃんは俺を心配してメダルを猫ババしちやっただんでしょ？ それでも俺はコンボを使うよ・・・・・・・・オーズは俺がずっと求めていた力だから・・・・・・・・」

「ずっと？」

「うん・・・・・・・・。手が届くのに手を伸ばさなかったら・・・・・・・・、死ぬほど後悔する・・・・・・・・。それがいやだから手を伸ばす・・・・・・・・。オーズはそんな俺の欲望を叶えられる力なんだ・・・・・・・・」

「……………」

映司は啞然とするなのは手を握る。

「ほら……………。今こうやって俺はなのはちゃんの手を握れてる……………。俺はこうやって他の誰かの手を掴みたいんだ……………」

「……………それが……………仮面ライダーとしての映司君なの？」

なのははコンドルメダルを握りしめる。

「うん……………。だから……………」

映司はそんななのはの握り拳を優しく包み込む。

「とりあえず今は……………この手を離したくない……………。だからお願い……………。俺に……………力を……………」

「……………」

「……………ねっ？」

なのはは考える。

そして考え抜き……………。

「……………映司君……………わかった……………」

なのははコンドルメダルを映司に差し出す。

「なのはちゃ「ただし……。」

「え？」

「今度……きあって……。」

「え？」

映司が頭を抱えると寸前に地面が迫る。

映司はなのはからコンドルメダルを受け取りドライバーの左スロットに、クジャクを真ん中に、タカを右にスロットし……。

「とりあえず今は……、君を……。」

スキヤナーを滑らせる。

「守り抜く！ 変身！」

『タカ・クジャク・コンドル！ タ~~~~ジャ~~~~ドル~~~~』

地面すれすれで炎が発生するとそこには……。

「はあ~~~~」

深紅の仮面・タカヘッドブレイブ、左手には万能武器タジャスピナイをもつクジャクアーム、足は真空刃を放つ能力をもったラプタードエッジを備えたコンドルレッグの赤いメダルのコンボ形態、仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボが、羽を広げなのはをお姫様だ

つこしたままゆっくりと地上に舞い降りた。

「映司君……。」

「待っててなのはちゃん……。」

「……絶対にもどってきてね……。」

「うん、わかってる……。必ず解決して戻ってくるからね……。」

「

そう言い残しオーズ・タジャドルコンボはなのはを下ろすと、羽を広げ飛翔していった。

「あれが赤いメダルのコンボか……。」

屋上から一部始終を見ていたデス八とアルマジロヤミー。

アルマジロヤミーは先制攻撃に迫り来るオーズに針を放つが……。

「はぁ……、はぁ！」

オーズはクジャクの羽のような手裏剣を大量生成し飛ばし、針を全て相殺する。

そのまま……。

「はぁ！」

炎を纏ったスピナーでアルマジロヤミーを殴り飛ばし、屋上に到着した。

「さあ……、第2ラウンドだ！」

「面白い！」

オーズはデスハ、アルマジロヤミーとぶつかりあう。

デスハの剣をオーズは足のラプタードエッジで受け止め、アルマジロヤミーには炎を纏わせたスピナーで殴る。

さつきとはうって変わり、2対1にも関わらずオーズは動じない。

「うあー！」

オーズは蹴りを放つもデスハは軽々手で受け止め壁に向け投げ飛ばす。

しかしオーズは壁に激突する前に体制を戻し、壁を踏み台にして2体に向け飛ぶ。

『スキヤニングチャージ！』

そのままオーズはスキヤニングを発動し、変形し巨大な爪状になった両足で2体に向け飛びかかる。

「！ まずい！」

デスハは寸前で跳躍し避けるがアルマジロヤミーは……。

「せいやあああああああああ！」

オーズ・タジャドルコンボの必殺キック、『プロミネンス・ドロップ』が直撃し、爆発とともにセルメダルへと換金された。

そんなオーズを……。

「……………やっぱり……………退屈させてくれないなあ彼……………」

「

「みたいだな……………」

遠くのビルから望遠鏡で少年と青年がオーズを眺めていた。

夕方。

映司はなのはの車の助手席に乗って、二人は高町家を目指す。

「そつえばさあ、なのはちゃん……………」

「なあに?」

「さっきなんて言ったの? よくきこえなかったんだけど……………」

「えっ? そ、それはね……………」

「？」

「え、映司君……、デートしたことないでしょ？」

そっぽを向きながら言うのは。

夕日の性もあり、頬の赤色がより赤みを帯びる。

「えっ？ ま、まあ……。恋愛自体したことないし……。」

「そ、そんな映司君のためにわ、わわわ私がデートの予行練習してあげる……って言ったの！」

「えっ？」

「だ、だって映司君いずれは誰かと一緒になるんだから、練習していたほうが……。」

「う〜くん……。でも今はそういうのは考えてないかな……。だって俺なのはちゃんのこと大好きだもん」

「！ えっ？ ちょ！ なっ！」

途端にテンパるなのは。

それは運転に現れ、危つく事故を起こしかける。

「そ、それ本当？」

「うん！」

「わ、私も映司君のことだい「ヴィヴィオも大好きだし」

「ふえ？」

フリーズするなのは。

「来人君や竜さんも大好きだし、克己君や翔太郎さんも大好きだよ」

徐々になのはの顔がひきつっていく。

「他にも・・・、ティアナちゃんもアインハルトちゃんもはやてさんもヴィータちゃんも後「映司君・・・。」

手をプルプルと震わせるのはは道端に車を停車する。

「なあに？」

そんななのはの怒りを知らない映司はいつものトーンでなのはに聞く。

そして・・・。

「ごおんの・・・おばかあ！」

長距離専門ながらも強烈な鉄拳を映司に叩き込んだ。

高町家・庭。

「いたたたた……。」

頬を擦る映司は車から出る。

「ふんだ！」

そして映司に強烈な鉄拳を叩き込んだ張本人、なのはは頬を膨らませそつぽを向きながらキーを操作して、車にカギをかける。

「えつと……なんだか知らないけどゴメン……。」

「……。」

頭をさすりながら謝る映司をなのはは見もしない。

「……えつと……許して。」

お願いポーズをする映司。

なのはは一瞬だけ見るが、直ぐ様そつぽを向き直す。

「……ごめんなさい！」

とうとう土下座までする映司。

そしてとうとう折れたのか……。

「……はい……。」

なのはは映司に手を伸ばす。

「……なのはちゃん……。」

「……ついでのいったらなんだけど……、家に入るまで手え繋いだままであげる……。」

「……うん」

映司は笑顔でなのはの手を掴む。

「ねえ、映司君……。」

「ん？」

「頑張つてね……。オーズとして……。」

「うん……。」

「それとさっきの予行練習なんてのは嘘……。私は普通に映司君とデートしたい……。私は映司君のことが……。」

「えっ？」

「……ううん　やっぱりなんでもないよ？　なんでもないから！　だから今度、デートして！」

「……お、俺あんまり経験ないからできるかわからないけど……、まあ俺でよければ……。」

「ホント!？」

「うん 約束」

「うん 楽しみにしてるね」

指切りをする二人。

(暖くて強くて優しい手……。いくら離してって言ってもはなしてあげないんだから)

頬が染まり笑顔になるのは。

そんなのを見て満面の笑みを浮かべる映司。

そのまま二人は一緒に玄関のドアを開けて、家の中へと帰っていった。

「せえ〜の……。ただいまあ」

現在のオーズの使用可能メダルは

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ

墜落と繋ぐ手と炎のコンボ（後書き）

次回は翔太郎編または新キャラ、ミハル編です。

ツンデレとナカジマ家と8人目（前書き）

新キャラいきます！

ちなみに性格は乗っ取られてた時みたいになっています。

次回のフォーゼにはとうとうメテオが！

ツンデレとナカジマ家と8人目

クラナガン。

「ん~~~~~。っつあ~~~~。」

背伸びをしながら街外れに歩いてくる青年が一人。

「やっとこさついたなあ~~~~。いや~~~~、しっかし今回の旅は長かった~~~~。」

茶髪に青いメッシュ、首にはゴーグル、上下が水色というなんともド派手な服装の青年は懐かしそうに街を眺めながら歩いていく。

その青年、海王ミハルはサメが刻まれた水色のメダルをコイントスしながら久々に帰ってきたこの街を歩いていく。

海王グループ本社。

ミハルの実家で販売からサービス、工学など様々な経営方式でミッド全土にその存在をもつ巨大企業である。

特に最近では地球で知られる古代魚や少数な貴重生物をクローン技術で再び甦らせるプロジェクトで頑張っている。

そして彼、海王ミハルは堂々と正面から入っていくと……。

「！　ご、これはミハル様！　お帰りなさい！」

「お帰りなさい！」

「「「「お帰りなさい！　ミハル様！」「」「」

受付嬢から始まり、その場の全ての社員に挨拶をされる。

「相変わらずかってえ　　つすね　　。親父いますか？」

「はい。会長であれば今は会長室に……。もしよければ「別にいいですよ。ちょっと挨拶しにきただけっすから。」

「えっ？　　ちよつとミハル様？」

受付嬢が止めるのも聞かずにミハルはグループ本社を去っていった。

「　　〰〰〰〰」

鼻歌を歌いながら街中を歩くミハル。

そしてついたのは自宅。

ミハルは家に入ると、ただ荷物を下ろし再び外出した。

しかし行き先は隣……。

ナカジマ家。

「……………なんていえやぁいいんだ？」

ミハルはお隣であるナカジマ家の玄関の前でうなだれる。

「ただいま……………。なんだかなぁ……………。今帰ったぜ！ 何様だつ
つうの……………」

するとうなだれるミハルを突如開いたドアが突き飛ばしミハルは顔
面から道にダイブする。

「あれ？ 帰ってたのかミハル……………」

ドアを開けたのはノーヴェ……………」

「あれ？ ミハっちじゃないっすか……………」

「ホント……………。帰ってたの？」

「久しいなミハル……………」

「お久しぶりミハル君」

その後ろにはウェンディ、デイエチ、チンク、ギンガが一部始終を
覗いていた。

「お久しぶりウェンディ、デイエチ、チンク、ギンガ姉さん……………
……………それと相変わらずのがさつ女！」

「んだとてめえ！」

立ち上がったミハルにノーヴェは食って掛かる。

「人がいるってわからなかったのか！？ 全くてめえはがさつだよなあ！」

「それはお前もだろうが！ いつつもいつつも喧嘩喧嘩って……。さぞ旅の最中もそんな下らねえことしかしてこなかったんだろつなあ！」

「あゝあゝ？」

「やんのかあ？」

額をぶつけにらみ会うミハルとノーヴェ。

そこに……。

「……………とりあえず上がったら？」

ギンガが冷静に二人を仲裁した。

ナカジマ宅・リビング。

「どうだったつスカ？ 旅は？」

「おう！ なかなかよかったぜ。特に途中行つたところなんか水場が綺麗だったなあ……。」

「へえ……。」

ソファで旅の話をするミハルとそれをワクワクしながら聞くウエンディとディエチ。

そんな三人、特にミハルを……。

「……はあ……。」

ノーヴェはテーブルからぼーとながめていた

「……なんだかたくましくなったんじゃないミハル君……。」

ノーヴェの後ろからギンガがエプロンで手を拭きながら歩み寄る。

「ど、どこがだよ……。」

「よくはわからないけど……、なんだか大人の顔になったかな……。」

「大人あ？ あの喧嘩馬鹿が？」

「喧嘩馬鹿……。」

「だってそうだろ？ ガンつけられたり妙な因縁つけられた途端着火だぞ？ んなあぶねえやつ見てらんねえよ……。」

「それは……。」

「な、なんだよ……。」

「ミハル君のこと心配……ってことだよな」

「な！ なななな！ そそそそんなことねえよ！」

顔を真っ赤にするノーヴェ。

ミハル達がこちらを向くが、ギンガが何とかフォローした結果、ミハルは引き続きウエンディとディエチに旅のことを話し続ける。

「……でもノーヴェはミハル君のこと、そんなに嫌いじゃないんでしょ？」

「ま、まあ……好きか嫌いかって……と嫌いじゃねえけど……。」

「それだけ……？」

「な、なんだよ……。」

「確かにミハル君は喧嘩っ早いけどいいところもあるじゃないの……。」

「どこがだよ……。がさつだし、大雑把だし、めんどくさがりだし、顔はそれなりにイケメンだし、金持ちだし、いろいろ情にはあつしい、なにかと気にかけてくれるし……。」

「…………ノーヴェ？」

「あ？」

「途中のろけになってたんだけど…………。」

「…………。」

苦笑いのギンガに合対し急激にノーヴェの顔が赤くなっていく。

そして顔面が真っ赤になった途端、ノーヴェは立ち上がり、ミハルに向けて歩き始める。

「ミハル！」

「あ？」

「おま…………、おまえ…………、お前は…………、はははははははは…………、お前はなんでお前なんだ！」

向けた指を震わせ、顔面を赤くしながらノーヴェはミハルに向け怒鳴る。

するとミハルは…………。

「だ、大丈夫かよノーヴェ…………。熱はあるか？ 寒気はあるか？ 頭クラクラしねえか？」

まるで過保護な母親のようにノーヴェに駆け寄り脈を図るなり、額

を触るなりしてノーヴェに触りまくる。

ノーヴェはぼーっとしてそれらに抵抗するそぶりをみせない。

悪のりが働いたミハルに胸を鷲掴みされノーヴェはようやく現実
に引き戻され、ついでにミハルをぶん殴る。

「って　　。なんだよ．．．。別に減るもんじゃねえだろ．．．。
」

「へ、へ、減る減らないの問題じゃねえ．．．。」
涙目ながらも血管を浮き出すノーヴェは肩を激しく揺らし息を切ら
す。

「ちよつとした冗談にきまつてんだろが．．．。ちよつとは考える
よなあ．．．。」

「じよ、冗談もなにもお前．．．、わ、私の胸鷲掴みにしやがつて
．．．。」

「そんな怒んなよ．．．。スキンシップだよスキンシップ」

「今のはスキンシップじゃなくてセクハラだつっつの．．．。わか
つてんのかど変態！」

「そこまで言うかよ．．．。」

「ああ言つね！ お前の学習能力は前にテレビでみたチンパンジー・
．．．っていう猿以下だからなあ！」

「やんのかツンデレ……。」

「上等だ不良……。」

ミハルとノーヴェはデコをぶつけにらみ合う。

「まったくよくお前とスバルが姉妹だよなあ？ 他のギンガ姉さんとかも！ 性格がまるでちげえだろ？ なんでスバルは素直で、姉さんは大人で、妹はこんなドリル並みにひねくれてんだ？ 俺はドリルは好きだが、それとは別にひねくれたのは好きじゃねえんだよ！」

「それはてめえもだろ……。なんで親父さんはあんなに大人なお前はそのなにガキなんだ？ そんなじゃトーマに抜かれるぞ？ ていうかもう抜かれてるか。」

「んだとこの野郎……。」

「あいにく私は女で……。」

「てめえみてえのはメスとは言わねえんだよ。」

「ああ!？」

「やるかコラ?」

ノーヴェとミハルはひたすら睨み合う。

いつ手がでてもおかしくない雰囲気である。

「なんスカ……二人とも……。夫婦漫才スカ?」

「「なんでこんなのと！」」

とことん性格が似るのか声まで被り再び睨み合う。

「第一、お前なんで連絡寄越さねんだよ……。」

「なんでんなことしなきゃなんねえんだよ？」

「お前が心配だからに決まってるだろ！ ……あ……。」

「……。」

勢いに任せて言ってしまった本音にミハルは意表をつかれ固まる。

ノーヴェに関してはさっきに勝るとも劣らないくらいに顔が赤くなつていく。

「……悪かったよ……。」

「べ、べつにお前のこと心配とかじゃねえよ！ 勘違いしてんじやねえよバーカ！」

「なっ！ てめ！ 誰がバカだ！」

「お前以外に誰がいんだよバーカ！」

「てめ……、しおらしくしてりゃ美人だったのに……。」

「……へ？」

「今だって心配って言ったの、ちょっと嬉しかったのに……」

啞然とするノーヴェを前に勢い任せに自白したことに遅くなりつつ気づいたミハルはまるでムンクの叫びのような表情を浮かべる。

「あ……、えっと……、いまのは……、口が滑った……じやなくて、なんつうか……。」

「……。」

しどろもどろになりパニックになるミハルをほんのり頬を赤くしたまま見つめるノーヴェ。

周囲はそんな二人をにやけながら傍観している。

そして数分後……。

「あああああああああああ！」

頭を抱え自己嫌悪しながらミハルは光の速さでナカジマ家を出て、隣の自宅へ戻っていった。

「……はあ……。」

先ほどのミハルの言葉を何度も頭の中で繰り返すノーヴェ。

「しおらしくしてりや美人・・・・・・・・。あいつにそんなこと言われるなんてな・・・・・・・・。」

ノーヴェは自分の額を触る。

そこはミハルの言葉で火照っているのか、ただ熱いだけなのかはわからないが若干熱い。

「・・・・・・・・それに・・・・・・・・好きなやつじゃなかったら一発じゃ済まねえつつうの・・・・・・・・。」

自分の胸を見て呟く。

するとノーヴェのデバイス、待機形態のジェットエッジが鳴り出す。

数分後、ノーヴェは救助隊の装備調整に家を後にした。

海王家。

「・・・・・・・・何が心配だからだよ・・・・・・・・。」

久々の自分の部屋で寝転びながら指先でサメのメダルをもてあそぶミハルはうなだれていた。

「でもノーヴェは美人だし、あいつにはもっといいやつがいるだろうしな・・・・・・・・。俺には不釣り合いだつうの・・・・・・・・。・・・・・・・・。しっかりと・・・・・・・・。」

起き上がるミハル。

「なんで俺はあいつと会った時に喧嘩しちまうんだ……。……
はぁ……。。」

そして深くため息を吐いた。

その時。

「！」

ミハルはポケットの中の振動に気づきそれを取り出す。

それは缶のようであったがプルタブを開けると一瞬でサメのようなメカに変形した。

そのメカ、サメカンドロイドは目からモニターを写し出す。

「……。クラナガンに来てお初の喧嘩か……。。」

モニターを見たミハルはすぐさまサメカンドロイドをカンに戻し家を飛び出す。

そして先ほど宅配便で自分自宅に送っていた紺色のライドベンダーにまたがった。

「はぁ……。はぁ……。はぁ……。はぁ……。。」

帰り際、ホッパードーパントに襲われ息を切らすノーヴェ。

バリアジャケットは至るところが破け、いかに不利かが伺える。

「やっぱし……、ドーパント相手じゃ流石に私でもきつついな……」

「……ならとつとくたばったらどうだ？ 貴様ら、機械は廃品回収に出されるのが妥当だあ！」

「ちっ！ なめんじゃねえぞお！」

ノーヴェは蹴りかかるホッパーと蹴りをぶつけ、そのまま互いに連続で蹴りを放つ。

しかしホッパーの運動能力は戦闘機人のノーヴェを超え、受け止めきれないホッパーの蹴りが次々とノーヴェに放たれていく。

「ぐっ……」

そして腹部にヒットし怯むノーヴェをホッパーは無情にも蹴り飛ばし、ノーヴェは電柱に叩きつけられ、電柱はぶつけられた部分がへこむ。

「がはっ……。ゴホゴホッ……」

（やべえ……。入っちゃった……。力が……。でねえ……）

「今日はさぞいい夢がみれそうだ！」

だらんと腕を下げるノーヴェにホッパーが迫る。

ノーヴェの脳裏には走馬灯のように知る顔が次々に浮かぶ。

(スバル……。翔太郎……。ギンガ……。デイエチ……。ウエンディ……。チンク……。ヴィヴィオ……。アインハルト……。お父さん……。ミ……。ハル……。)

「くたばれ人のまがいものお！」

ホッパーが蹴りを放つために足をあげる。

その時、どこからか投げられた槍がホッパーを切り裂く。

「ぐおっ！」

そのあまりの威力でホッパーは大きくのけぞり、槍はその場に突き刺さる。

「これは……。」

さらに駆けよったバイクがドリフトでホッパーにぶつかり、ホッパーを突き飛ばす。

バイクの乗り手はヘルメットを外しながらノーヴェに駆け寄る。

「ノーヴェ！」

「ミ……。ハル？」

「……よかつた……。まだくたばつちやいねえみてえだな・
」

「あいに……。く……。私は……。お前よりも……。早く
死ぬ気はねえよ……。」

「それでいい……。ちよつと休んでな……。」

「お……。まえ……。」

「あん？」

「ギンガの言つ……。てた通り……。少し……。大人……
。っぽく……。」

「……。お前もな……。しばらく見ねえ間に美人になりやが
つて……。」

「そんなマジな顔で冗談言つてんなよ……。」

「へっ。いいから休んでな……。」

「ああ……。」

ノーヴェは静かに気を失った。

ミハルは優しそうな表情から一変、鋭い目をホッパーに向ける。

「あいにく俺がマジな顔の時は冗談じゃねえんだよ……。」

「貴様……。そんな機械人形に情を抱いているとは……。笑えるな……。」

「機械だろうがなんだろうがしらねえなあ！ こいつはこいつだ、ノーヴェ・ナカジマだ。俺の愛す……。そこまではまだなつちやいねえが俺の大事な悪友だ。でもてめえは俺の大事なのを傷つけた。俺を心底ムカつかせてくれた！ だからぶっ飛ばす！ 俺は喧嘩しかしたことねえ……。ねえけどなあ……。わかることが一つ！ 今からやるのは……。喧嘩は喧嘩だかいつもの喧嘩じゃねえ！」

「くだらん！」

「今の俺にはちゃんと目的がある！ こんな可愛いげのねえ悪友守るつつ目的が……。だからてめえは俺が……。」

ミハルは腰に丸いノコギリのような機械を腰につけると、ベルトが巻かれ装着する。

「ぶっ潰す……。」

そのベルト、ポセイドンドライバーに三枚のコアメダルをはめこんでゆく。

「変つ……身。」

そして円状のノコギリ部分に親指を引っかけ、時計回りに思い切り回す。

『サメ・クジラ・オオカミウオ！』

その途端、空中にサメ・クジラ・オオカミウオの紋章が逆三角形に合わさり、その紋章がミハルの胴体に合体、肉体を一瞬で変化させた。

「貴様！ 仮面ライダーだったのか！？」

「おうよ……。勝手に名乗らせてもらうが……。俺は……。仮面ライダー……。ポセイドン！」

ポセイドンは地面に刺さったままのオオカミウオを模した槍、ウルフィッシャーをホッパーに向ける。

「おいお前！ 俺と戦うなら一つ覚えときな。命乞いはするな……。時間の無駄だ。」

仮面ライダーポセイドンは肩にウルフィッシャーをかけ、ホッパーに歩み始めた。

ツンデレとナカジマ家と8人目（後書き）

今回はバトルとポセイドンになった経歴、そしてノーヴェとの絡みを考えます。

過去ともう一人と照れ隠し（前書き）

新キャラ基ミハル編後半です。

個人編も次の翔太郎編二回で最後に。

クリスマス特別編を書きたいんですが、個人個人を書くかそれぞれを少しずつ書くかで悩んでいます。

過去ともう一人と照れ隠し

「……………」

ホッパーのパントは徐々に歩み寄る仮面ライダーポセイドンに構える。

「どうした？ かつてこいよイナゴ野郎……………」

「……………」

「命乞いでもするか？ まあしてもたすけねえが……………」

「なめるな貴様あ！」

ポセイドンの挑発に乗ったのか、ホッパーは蹴りかかり、そのまま連続で蹴りを放つが……………」

「ほっ。はっ。よつとお。」

ポセイドンはサメヘッドにより並みの高い能力をより強化した動体視力により蹴りを寸前で避けていく。

そしてホッパーの蹴りを受け流し後ろを取ると……………」

「後ろもらった！」

回転しながらオオカミウオ型の武器、ウルフィッシュャーでホッパー

を切り裂く。

「ぐぬっ！」

ホッパーはすぐさま振り向き蹴りを放つが、ポセイドンはフィッシャーの棒部分で蹴りを放つ前に防ぐと……。

「ほらっ。ちよつと預かってな！」

フィッシャーを横にしたままホッパーに放り投げ、ホッパーは思わず手に取ってしまう。

そのままポセイドンはホッパーの腹部にパンチを二発打った後、フィッシャーを蹴りあげ受けとると……。

「お~~~~~らよつと！」

回転しながら横に切り裂きホッパーを吹き飛ばす。

「ぐおおおお！」

地面を転がるホッパーだが跳躍し蹴りかかる。

しかし……。

「そんなんで俺を蹴る？ 前世からやり直してきな！」

『スキヤニングチャージ！』

ポセイドンはドライバーを時計回りに回し、渦状の高圧水流を右足

に纏わせる。

そして……。

「くられ……。名前名前……、確かあいつは言ってたよな……。
ああ適当でいいや！ スパイラル……。エンドオ！」

ホッパーに右足でハイキックを放つ。

「が……、が……、がああああああ！」

ホッパーは体にプラズマを走らせた後爆発、若い女性が衰弱して横たわった。

「あれ？ 女かよ……。まったく目覚めわりい……。」

ポセイドンはドライバーを逆時計回りに回し変身を解いた。

そして自身の携帯端末で管理局に連絡した後、ノーヴェに歩みより……。

「……………遅れて……………わりい……………」

気絶したままのノーヴェの額を優しく叩きながら謝った。

……………とりあえずは守りてえもんは守れた……………。礼ぐらいは言
つといてやるよ……………ミハル……………)

~~~~~



数週間前。

「~~~~~」

口笛を吹きながら森の中をあるくミハル。

「なんもねえのが一番だがまあ……、なんもねえのも退屈だよなあ……。」

ミハルの手の携帯端末にはクラナガンで活躍する『仮面ライダー』の写真が映っている。

「仮面ライダー……ねえ……。まあ凡人の俺には無縁かもなあ……。でもまあ……。あつたらあつたらであいつ……。俺にほれるかもなあ……。」

ミハルは後ろ歩きになる。

その途端、ちょうどミハルの進む先の地面に次元の裂け目が発生する。

しかし後ろ向きに歩くミハルは気づかない。

「ミハル……。かつこよすぎだせ！ どうか私を彼女に！ いやメス豚に！……。メス豚はさすがにねえか……。まあ彼女について言われたら……。断……。らねえかな……。」

ミハルの足が次元の裂け目に入る。

そして……。

「は？ へ？」

ミハルは次元の裂け目へとまっ逆さまに落ちていった。

「親父~~~~~！ 言われた通りにちゃんと前見て歩きゃよかった~~~~~！」

ミハルが落ちていった後、裂け目は何事もなかったかのように、跡形もなく消えた。

「……………うお！」

道端で目覚めたミハル！

「んだここ？」

しかし周りの景色などは先ほどの森となら変わりは見られなかった。

「……………多分足引っ搔けて頭打ったんだよな。うん。そうしよう。」

ミハルは事故解釈をした後再び歩き始める。

今度はちゃんと前を向いて。

とある街。

「ま〜〜〜た押し付けられちゃったよ・・・、ポセイダンのベルト・  
・・・」

先ほどハッピーバースデーを連呼する老人から手渡されたポセイダンドライバーを嫌そうに持ちながらあるく青年。

顔はミハルと似た・・・。

というよりは同一人物の青年である。

「映司さんや比奈さんのおかげでやっとアクアとして戦えるようになったってのに・・・。こいつ見るとあん時の俺をおもいだしちゃうなあ。どうしようこれ・・・。」

青年はポセイダンドライバー片手に途方にくれる。

すると青年のiPhoneのような携帯端末が鳴り出し、ミハルは素早く端末を取り出すと・・・。

「できたか・・・。」

モニターを見るやいなや、端末を操作し近くにミハルのジェットスキー型マシン、アクアミライダーが停まる。

「変〜〜〜身！」

そしてミハルは腰のアクアドライバーを起動させながらアクアミラ

ライダーに駆け出す。

そして途中で青年、湊ミハルは仮面ライダーアクアとなりアクアミライダーに乗り、その場を駆け抜けていった。

「うお~~~~~」。

とある湖にやってきたミハル。

「きれいな湖だ~~~~。やっぱ旅の醍醐味は名産とか人との出会いもあるけどこっぴつた絶景だよ~~~~」。

ミハルは腰掛けて一休みに入る。

その途端、湖に巨大な水柱が立つ。

「はあ！？　なんだ？」

ミハルは懐から双眼鏡を取りだし水柱の方向を見る。

そこには……。

「なんだありや……。」

ジェットスキーを駆る水色の戦士と怪物が水上で戦っていた。

「あれが……、仮面ライダーか？　でも写真のは黒い……。まあどっちでもいい！　スイッチがありや押したくなるのが人の性な

ら……、見てえもんがあるならそれを見に行くのも人の性だよな！……そうだよな俺！」  
独り言をいいながらミハルはウズウズしながら戦士と怪物が戦う場所に向かった。

「すつげえ……。」

気に隠れたミルヒの目の前では……。

「でえいー！」

水色の戦士が怪物と戦っていた。

怪物の爪を戦士は合気道のように避け、隙に容赦なく掌底を叩き込んで行く。

そして飛び後ろ回し蹴りで怪物を蹴り飛ばす。

「やるな~~~~あいつ……。」

ミハルは思わず笑いながら目の前の戦士、アクアの戦いようを眺めていた。

すると。

「G A A A A A A A !」

怪物がアクアに放った弾丸がよけたアクアをすり抜けミハルに向け

て飛んできた。

「ちょよ！ ちょよちょよ！」

ミハルは勢いよくその場を跳躍すると、その場は爆発で覆われる。

そしてアクアと怪物の戦いの場に偶然入ってしまう。

「えっ？ ええっ？ えええっ？ なんで俺がいるんだ？」

「この声……俺え！？」

アクアとミハルは互いに自分と相手を指差しパニックになっている。

怪物が殴りかかるも……。

「ちょっと邪魔しないでよ！」

アクアの蹴りが怪物にクリーンヒットし、怪物は湖へと蹴り飛ばされ、水しぶきを上げて湖の中へ。

「どういうことだ！？ なんだって俺が……。まさかドッペルゲンガー！？」

「おめえもなんなんだよ！ 俺の声まねしやがってよ……。。」

「いや、だってこれ素「なんなんだてめえ！ 名あ名乗れ！」

アクアがしゃべっているにも関わらずミハルはガンをつけながら名前を聞く。

「俺は湊ミハル……。仮面ライダーアクア……。」

「仮面ライダー!? ツーかミハルって……。」

「多分君は多次元宇宙……。パラレルワールドみたいなのこの俺なんだよ……。」

「な、なんとなく分かるような気が……。そんじゃ話題を変えるけどお前が俺なら俺も仮面ライダーになれんのか?」

「えっ?」

「仮面ライダーならいろいろ姿を変えるって聞いたぞ? お前もなんか他のになれんじゃねえのか? だったらその姿俺に寄越せ!」

ミハルは途端にアクアの体を触り何かないかと探し始める。

「えっ? ちょっと! おれ? あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!」

「おっ!」

くすぐられて奇声を放つアクアの懐にミハルは何かを見つけた。

それは……。

「えっ? それはちよっ」細かいことは気にすんなよ。どうせそれがあんだからひとつぐれえいいだろ?」

ミハルはアクアからほぼ奪ったに近いポセイドンドライバーを腰に

つけベタベタと触り始める。

そしてたまたまドライバーのノコギリ状の部分を回す。

『サメ・クジラ・オオカミウオ!』

「えっ? サメ? クジラ? オオカミウオ? おっと・・・変身  
!」

3つの紋章は逆三角形になりミハルに合わさると、ミハルの肉体は一瞬でアクアとはまた違った重武装なライダーへと変わった。

「おっ! かつこいいじゃん!」

「あ~~~~。使っちゃった・・・、ポセイドンのベルト・・・。」

「へえ~~~~。ポセイドンってえんだこれ・・・。」

ポセイドンは手に持つウルフィッシャーや全身を見渡しながら感動する。

すると怪物が湖から上がってきた。

「まあいいじゃんか俺 この際一緒にやるっぜ」

「やるしかないかあ・・・。」

ポセイドンとアクアは並び立ち・・・。

「っおらあ」



「でえええい！」

怪物に向けて駆け出しぶつかりあった。

怪物は爪で斬りかかるがポセイドンのフィッシャーで受け止められ、アクアの掌底が怪物を捕らえる。

そのままポセイドンはフィッシャーの棒部分を地面につけそのまま怪物を蹴り飛ばす。

「よっし！ 決めっか！」

ポセイドンがドライバーに指をかけた途端に……。

「オーシャニックブレイク！」

アクアが必殺の飛び蹴り、オーシャニックブレイクを怪物に放ち、怪物は爆発する。

「ふう……。」「

「おいお前！ なにとどめ刺してんだよ！」

「えっ？ だつて……。」「

「せっかく変身したんだから新人に花持たすもんだる普通は！」

無茶苦茶な理論を押し付けるポセイドン。

「えっと……、ごめんなさい……。」

「誤って済むなら管理局はいらねえつつうの!」

「管理局?」

「てなわけだからポセイドン……、俺に寄越せ!」

「えっ? でもそれは……。」

「俺の世界にも仮面ライダーはいる……。だとしてもてめえの守りてえもんは、てめえの手で守りぬきてえと思うのは男として当然だろ?」

「……。」

「それになんだかこいつ、だいぶしっくりくるんだ……。なんでだ?」

「……実は俺、以前乗っ取られてた時があつてそんな時に変身してたのがポセイドンなんだ。」

「マジ!?」

「ちなみに性格も君に似てたかな……。」

(……言えない……。バトルマニアになつてたなんて)

「おお……。なんだか不思議な縁だな。乗っ取られてたお前が俺で、そんなときにお前がなつてたもんに俺がなるなんてなあ……。」

「ま、まあね……。」

「んまあ……、どうだ？ 俺にこいつを渡してくれっか？」

「……どうせ断つても持つてくんでしょ？」

「さすがは俺 よくぞ存知で」

「……。」

アクアは無言のまま携帯端末を操作する。

すると上空からヘリが現れ、そこらなにかが地面に投下される。

土煙が消えたそこには……。

「おお……。」

紺色のバイク、ライドベンダーがあった。

「すっげえ……。」

「ライドベンダーMARK?……。40年前にあった仮面ライダーのバイクを現代の技術で改良した新型なんだ。ホントは俺が使うはずだったんだけど俺にはミライダーがあるし。ついでにこれも……。」

アクアの手にはサメのマークが描かれた缶が。

「それって？」

「詳しくはこれでよろしく。」

アクアはポセイドンにマニュアルのような本を渡す。

”ライドベンダー及び、サメカンドロイド取り扱い説明書”

「うえ〜〜。マニュアル苦手なただけな〜〜。」

「こんぐらいいいでしょ？ みんなあげるんだし・・・。」

「マジ!？」

「新人だから根拠はないけど君は俺だもん。俺は俺を信じてる。無論君もね。」

「わかってんじゃ俺!」

「えへへへ」

ポセイドンに肩を寄りかかられるアクアは何か嬉しそうにマスクの頬あたりを掻く。

すると。

「! あれって・・・。」

突如次元の裂け目が現れた。

「どっちら帰れるみたいだね。」

「・・・短かったけどなかなかできない経験できてよかったぜミハル」

「俺もだよ・・・ミハル・・・。」

ポセイドンとアクアは暫く見つめ合う。

そしてポセイドンはベンダーに、アクアはミライダーに乗り・・・。

「またいずれな・・・、俺!」「」

ポセイドンは裂け目に、アクアは街に向けマシンのアクセルを捻った。

~~~~~

クラナガン。

「・・・!!ん?」

ベンダーに寄りかかる形でノーヴェは目を覚ました。

「ここは・・・。」

「よお。起きたか。」

ノーヴェが声の聞こえた方を向くとそこには軽くベンダーに座るミハルがいた。

「……………なんでお前、私を助けたんだよ……………」

「べ、別に勘違いしてんじゃねえぞ！ 仮面ライダーとして戦っただけだ！ 別にお前のためなんか……………」

「そ、それでも礼はいつとく……………あ、ありがと……………」

「お、おう……………」

照れ隠しでそっぽをむくノーヴェとミハル。

「と、とりあえず家まで送ってやるよ。ほら。」

「お、おう……………」

ノーヴェはミハルに投げられたヘルメットを受け取った。

街を疾走する紺色のライドベンダー。

運転に集中するミハルはともかく……………

「……………」

ノーヴェは赤面したふくめっ面でミハルの腰に手をやり、後部座席に身を任せていた。

(……………助けられたなあ私……………ミハルのやついつの間にあ

んなに……。でもこいつにとって私ってなんなんだ……。(

「なあミハル……。お前にとって私って……。」

「あ？ 聞こえねえよ？」

風の音でただでさえ小さいノーヴェの声を聞き取れないミハル。

「な、なんでもねえよ！」

「なあノーヴェ！」

「あ？ なんだよ？」

「とりあえずはまあ……。無事でよかった……。そんだけだ！」

「……。ああ……。」

(……。とりあえずは……。礼ぐらいは……。な)

ノーヴェはより強くミハルに身を寄せる。

それによりあまり近づいていなかったため背中に触れなかったノーヴェの豊満な胸が、ミハルの背中により形を変える。

「ちよっ！ おいノーヴェ！」

「か、勘違いすんなよな！ スピードが上がったらあぶねえと思っただけだ！」

「・・・なら一気にとばすからな。ちゃんと捕まってるよ?」

「おう」

嬉しそうに後ろのノーヴェに振り向くミハルに、ノーヴェは頬を赤らめ満面の笑顔で返した。

過去ともう一人と照れ隠し（後書き）

ちなみにポセイドンの槍は正式名称がないので勝手に名付けました。

ポセイドン(前書き)

ミハルとポセイドンの紹介です。

ポセイドン

海王ミハル

決めゼリフ：命乞いはするな、時間の無駄だ。

年齢：20

身長・体重：荒井敦士と同じ

髪型：金髪に青のメッシュ

性格：ツンデレ（オリジナルのミハルというよりは乗っ取られた時に近め）

仮面ライダーポセイドンに変身する青年。ワイルドな性格で不良じみた口調だが義理堅い。

喧嘩の類いが大好き。

実家はナカジマ家の近所。ミッドで有名な大企業、海王財閥旅の御曹司で旅が好き。

『仮面ライダーアクアの世界』の世界で湊ミハルが否定したポセイダンの使用アイテム一式をほぼ強引に奪い取り、仮面ライダーポセイドンへと変身した。

ちなみに少々スケベ。

ナカジマ家の面々とは親睦が深いがノーヴェとはよく口喧嘩をする。しかし互いに惹きあっているがツンデレ同士であるせいか、互いに素直になれない。

仮面ライダーポセイドン：

ミハルがサメ、クジラ、オオカミウオのコアメダルで変身した仮面ライダー。水や氷を自在に操るだけでなく、水上・水中内を自在に動き回る他、空気中の水分を踏み台にすることで空中でも地上のように立ち回ることが可能。

必殺技：

・スパイラルエンド：

渦状の高圧水流を足に纏わせて放つ蹴り。形はハイキックや飛び蹴り等不規則。破壊力は95t。

・ハイドロパニッシャー：

オーシャンランサーに高圧水流による刃を纏わせての突き。又はその水流を相手に放つ。破壊力は80t。

ツール（アクアドライバーと同時期に作られた）：

ポセイドンドライバー：

変身ベルト。例の暴走事件後、改良され新造される。サメ・クジラ・オオカミウオのメダルにのみしか起動しない。三枚をスロットし時計回りに回すことにより変身する。スキヤニングは更に時計回りに回して発動。

サメメダル・クジラメダル・オオカミウオメダル：

『アクアの世界』で作られたコアメダル。例の暴走事件後、再びある老人がより強化し作り直した。

ウルフィッシャー（オリジナル）：

ミハルが生身でも使用できるオオカミウオを模した槍。高圧水流や

氷柱を打ち出すなど遠距離にも対応可。

ネーミングはウルフフィッシュ（オオカミウオ）から。

サメカンドロイド：

ミハルがドライバールと共に渡された戦闘用カンドロイド。探索機能も搭載。起動後は刃を用いた体当たりで戦う。

一個しか存在しないため作りが固く強度が高い。トラカンドロイド同様巨大化してライドベンダーと合体することでソーシャークベンダーになる。

ビークル：

ライドベンダーMARK？：

ボディーカラーが紺色以外ライドベンダーと変化なし。

アクアの世界では40年前に戦っていた仮面ライダーオーズ、仮面ライダーバースのバイクの復活型として1台作られた。なお1台しかないため強度が高い。

ソーシャークベンダー：

ライドベンダーにサメカンドロイドが合体したビークル。空・地・海を動き回れる他、ノコギリザメのような先端の刃で攻撃も可能。また刃からはノコギリ型の光弾を放てる。

その他：

湊ミハル：

『仮面ライダーアクアの世界』で仮面ライダーアクアに変身する青年。

気の弱い性格だがとある出来事以来、勇気を得て仮面ライダーとして今日を守り抜くために戦うようになる。アクアとして戦っていた

が、力を求める海王ミハルを信じより強化、改良され作られたポセイドンドライバーを託す。

アクアの世界：地球暦でいう2051年の世界で人々を襲う怪物と仮面ライダーアクアが戦う世界。

80年前から幾人も仮面ライダーが存在し、湊ミハル自身も一時的に過去に飛んでいた。

特別編・聖夜とライダーとそれぞれの時間（前書き）

クリスマスなのでわかりやすく特別編を。

なのはGODをようやく購入できました。

自分はアミティエが使いやすいです。

はやくヴィヴィオとインハルトを使いたい・・・。

特別編・聖夜とライダーとそれぞれの時間

「きよっ、うはたのしいクリスマスう〜〜」

「ったく子供かよお前は……」

ウキウキ気分で買い物袋を手にはしゃぐスバルに翔太郎はにやけながらも後に続く。

「ちっちっちっ。わかってないですね翔太郎さん。」

「あ？」

「クリスマスは恋人同士が互いにいつもより思いやれるとって面白い日なんですよ？ 翔太郎はクリスマス嫌いなんですか？」

「まあ好きか嫌いかって と嫌いじゃねえけど……」

「雪が降ったらよりいいんですけどねえ……」

「雪……か……」

「今日は翔太郎独占しますからね」

「じゃ、じゃーねー。」

腕を組んだ二人はそのまま街を歩いていく。

同時刻・高町家。

「ねえなのはちゃん……。ここでいいの？」

「うん　映司君背が高いからこういうとき大活躍だね」

「喜んでくれて俺も嬉しいよ」

なにやま桃色の雰囲気です飾り付けを続ける映なの。

「クリスマスってやっぱりテンション上がるよね……。今年は今までよりもすごく楽しくなりそう」

「なんで？」

「内緒」

「？」

唇に指をつけウインクするのには映司は頭をかしげた。

一方……。

「し、慎太郎さんとキッチンに並んで立つなんて……。ゆ、ゆ、ゆ、夢みたいです！　ちよっとほっぺつねってみてください！」

「わ、わかった……。」

「いたたたた……。」

「ああ、すまん……。やり過ぎた……。」

「もう……。私は繊細なんだからもう少し優しくしてください……。ベッドなら激しくて構いませんけど……。」

「なんか言ったか？」

「……。あ！　いいえ、なんにも！　それよりもケーキの飾り付けをお願いします……。」

「ああ……。」

慎太郎とフェイト、あわせて慎フェイもなにやら甘い雰囲気……。

「フェイトさん嬉しそうだねキャラ……。」

「うん　いつかは慎太郎さん、フェイトさんと並んでキッチンに立つかもね　そのあとは私たちに弟か妹が出来るかもね」

「……。随分と話が飛躍s「気のせい気のせい」

そんなキッチンの二人をエリキャラは微笑ましく眺めていた。

「ねえ来人さんは予定っ！　ありますっ！　かつ！？」

「な！　んで！？」

公園でスパリングをするアインハルトは来人に予定を聞いていた。そのすぐ後、スパリングにもかかわらず来人は背負い投げをアインハルトに放つ。

「実は家の皆、予定があつて……。ミックは友達のパティーに泊まり掛けだし、お父さんは仕事、お母さんも大学時代の友達と旅行なんだ。つまり僕一人だけ……。」

「……………」

「だから予定は未定かな……。」

「だ、だったら……。」

アインハルトが口を開きかけた途端、来人のスピリッツが鳴り出す。思わず肩が外れるアインハルトをよそに来人がモニターを開くとヴィデオが映る。

「ら、来人さんですか？」

「うん？ アインハルトも一緒だよ？」

「ちょうどよかったあ……。アインハルトさんも誘おうとしてたんですけど……。お二人とも今晚は予定ありますか？」

「？」

「特にはありませんが……。」

『実は今晚、家でクリスマスパーティーがあるんですけど……
どうですかねえ……』

「私は「行きたい！ すっごく行きたい！」

口を開きかけたアインハルトよりも先に来人は目を光らせて答える。

八神家。

「……………」

「似合うとるよ竜さん」

「なあはやて……………」

「うちに質問せえへんこと」

「なぜお前らがサンタで……、俺がトナカイなんだ……………」

はやてを含む八神家の面々にトナカイの着ぐるみの竜が突っ込む。

「……………」余ってたから。「……………」

そしてザフィーラを除く面々が一蹴する。

そんな中ザフィーラだけは竜の肩を優しくたたく。

「クリスマスが終わったら二人で飲むか……。」

「すまん……。」

哀愁漂う一人と一匹をよそに……。

「今日はクリスマスや……！」

はやてはなにかとテンションが高かった。

「クリスマスっス……！」

「……クリスマスねえ……。」

ウエンディらナカジマ家の面々がクリスマスパーティーの準備をする中で唯一憂鬱になるミハル。

「……やな季節だよな毎年毎年……。街はやたらと浮かれてるし、どいつもこいつもカップルばっかだし……。」

手元のサメカンドロイドを拭く手が速まる。

「だいたいなんでミッドで地球のイベントなんだよ！ 訳わかんねえよー！」

「お前、カンドロイドに八つ当たりすんなよ……。」

カンドロイドを激しく拭くミハルをノーヴェェが止める。

「だってよ～～。小さいときとかは楽しかったけどよ～～、この歳になつたらもう彼女でもいねえ限り憂鬱なだけだっつーの・・・。翔兄さんやスバルはいいよな～～。」

「私は別に好きだぞクリスマス・・・。人らしくはしゃげんだしな・・・。」

「お前はお気楽だな・・・。」

「べ、べつにいいだろ！ それよりミハル、手伝えよ！ 飯食わせねえぞ！」

「え？ どうゆうことだ？」

「お前もパーティー出んだから手伝えってことだよ！ いいからほら！」

「えっ？ ちょっ！ おい！」

ミハルはノーヴェに捕まり、ツリーの片付けへ強制連行されていた。

葵炎家。

「克己～～～！」

家のなかで克己を探すマリア。

「克己くうくうん！」

「どうですのうううん！」

「克己くうくうん？」

他にもハリーやヴィクトーリア、シャンテが部屋や風呂、鍋の中まで至るところを探し回る。

毎年恒例、クリスマスの飾り付けやらなんやらを面倒に思う克己の
だいかくれんぼである。

ちなみに去年は出掛けていたところを発信器により場所を知られハ
リー達に捕まった。

今年は……。

「……。」

家の出口という出口全てに鎖を巻かれ袋のネズミと化した克己の行
く先は天井だった。

疲れないように天井に強力な吸盤を取り付けそれをベストにつけて
さつきから数時間こうしている。

(……とりあえずこうしてれば……)

しかし……。

「あ……。」

あっけなくジークに見つかりる。

「……………」

「……………頼む……、ジーク……………」

慣れない笑顔を浮かべる克己の願いも空しくその後、ジークによる克己発見の声が葵炎家に響き渡る。

個々でのクリスマスまでの過程を経て……………。

高町家。

「メリー……、」

「……………クリスマス　　ス！」「」「」「」「」

映司となのはに続き、リオとコロナ、ミウラも集まったのクリスマスパーティーが始まる。

「ん……。おいしい……。」

「やっぱりなのはさんの料理はおいしいね」

リオとコロナがなのはの料理に舌鼓を打つ中……………。

「ど、どうですか慎太郎さん……。その……。グラタン……。」

「……。！　なかなか美味しいな……。フェイトが作ったのか？」

「はい　お口にあってよかったです……。」

「フェイトの夫になるやつはしあわせだな……。美人な上に料理も美味しいなんてな……。」

「……。……。」

引き続きグラタンをおいしそうに食べる慎太郎の横ではフェイトが顔を赤くし湯気を発しながら顔を反らす。

（奥さん……。奥さん……。慎太郎さんの……。奥さん……）

そんなフェイトを……。

「フェイトさん嬉しそうだね」

「うん！」

キャラとエリオは微笑ましく眺めていた。

ナカジマ家。

「てめっ！ ミハル！ それあたしの肉！」

「へっへっ。早いもん勝ちだっつうの！」

平和……とは言えないものの温厚に食事をする横ではフライドチキンを手に追いかけあうノーヴェとミハルがいた。

「ミハルのやつ、帰ってきたと思ったたらすっかりたくましくなりやがって……。これは近いうちにまた一人肩の荷が降りるかもなあ……。」

「年寄り臭いこと言わないでくださいよお父さん……。」

ギンガは苦笑いを浮かべる。

「ねえデイエチ、ミハルお兄さんとノーヴェって仲いいよね」

「仲っていつか……。もう……。ねえ？」

「？」

「とりあえずトーマ、将来一緒に住むかもよ？」

「ミハルお兄さんが？ 楽しみだな……。」

隣ではトーマとデイエチがフライドチキンを奪い、鬼が逆転したノーヴェとミハルをながめていた。

「てめっ！ ノーヴェ！ そこ俺が食った部分……。、！」

「ミ、ミハルが食った……。」

(か、間接……)

「……な、なにやってくれてんだよこのド変態！」

「食ったのおめえだが！」

さらに逆転し今度は追われる側となったミハル。

しかし何だかんだで二人を含むナカジマ家のクリスマスイブはとても愉快であった。

八神家。

「だ……いたいなのはやつ、会話が成り立たね……つ……のなんのってな……。」

「……飲み過ぎだヴィータ……。」

さつきまでは普通にクリスマスの食事を楽しんでいたヴィータは頬を真っ赤にしてワインを飲みながら、その小さい腕を竜の首に回し絡んでいる。

「なあ……りゅはどう思う？ あいつつたらなんも言ってもマイペースだよ……。なんとか言ってるやんね……かな……。」

「しかしそんな高町に君はもう十何年つきあっているんだろっ?」

「ま、まあな……。」

「だったら急に変わったたりなんてしたらぎこちなくて、逆に調子が狂うんじゃないのか?」

「……言われてみりゃあ……。」

「だとしたらただのろけ話だな……。」

「う、うっせ……。」

ゆっくりと倒れるヴィータ。

その後は寝息を立て静かになった。

「……こいつらは……。」

竜は周りをみると……。

「うふふ……うふふふふふふふふ……。」

「はっはっはっはっは……。」

何やら夢の中でパラダイスを満喫しているシャマルとシグナムが焼酎の瓶を抱き締めながら寝ていた。

近くにはザフィーラ、元のサイズのラインとアギトも酒に飲まれぶっ倒れている。

そして残りの一人……。

「ど　　ん！」

「！　は、はやて！」

はやてがビキニのようなサンタ衣装で竜に抱きついてきた。

酒が回り顔は赤いが、竜に問題があつたのは別のことである。

「は、はやて……。なにやら……。」

竜ははやてが抱きついているところに何か柔らかいものがふたつぶつかっていることに気づく。

今のはやての衣装は肩の紐がない。

つまりは今、はやては下着をパンツしかはいておらず感触がほぼストリートに竜に当たっていた。

「りゅーさ～～ん　　うちがりゅーさんのプレゼントになります
～～。どじかじゅ～～に～～。」

「そんなことを言われても……。」

「りゅーさんはうちのこと嫌い？」

「……………」

涙目になるはやてに絶句する竜。

「嫌いであつたらプロポーズなどしないだろう……。」

「だったら結婚は後でいいから一緒の布団で一緒に寝よ」

「!?!」

「りゅーさんからうち、クリスマスプレゼントもらってへんよ……」
「せやからうちにりゅーさんの貞操を……。」

「あげるものではない気が……。」

「ならキスでええよ？　ただしここだな。」

はやては自分の唇を指差す。

「……………」

竜は考える。

そしてまだ結婚すらしていない男女の関係で貞操を奪われるよりは
マシかと判断し……。

「……………」

「ん」

「ご要望に答えはやての唇に自身の唇をそっと押し付けた。

「とりあえずは……、今はこれで勘弁したげるわ……、純情さん」

「……………恩に着る……………」

そのまま眠りについたらはやて。

竜は起こさないように、静かに毛布を引っ張りだし泥酔し眠った面々に被らせてゆき……………。

「……………眠れ……………。俺の……………宝物……………」

はやての額にそつと唇を押し付け、はやての隣に座ると自身も毛布をかぶり眠りについた。

葵炎家。

「上がり」

「なつ……………」

大富豪でシャンテに上げられビリになった克己。

「なあんだ克己君、腕っぷしは強いのにトランプは弱いんだね……」

「べつに弱くても困りはしない……………とは言えないか今は……………」

幾度となくビリになった結果罰ゲームとしてトナカイの格好をする
克己はシャンテをにらむが、迫力のはの字もない。

「あいくるしいですわ克己さん……。もしよろしければ写真を一
枚……。」

「あ、てめっ！　ヘンテコお嬢！　ならオレも！」

「う、うちも……。」

「なら一番早く抜けた人が写真をとるってことで」

「」「よし……」

「そんなことやるわけ」罰ゲーム」

シャンテの一言により何も言えなくなり、カードをより念入りにシ
ヤッフルする克己。

「もてるわね……。克己」

「どこがだ……。」

そんな克己をビール片手に微笑ましくみるマリアに克己は弱々しく
突っ込んだ。

高町家。

「はい来君 あ ん」

「……………」

「えつと……、ミウ……。さすがにこれは……………」

ミウラに料理を勧められる来人は、その光景をジト目でにらむヴィオ、目が笑っていないアインハルトに見られ縮こまっていた。

「来君……。去年までは恥ずかしくつてもちゃんと食べてくれたのに……………」

「えつと……………」

シユンとなるミウラに慌てる来人。

「へえ……………」。来人さん去年までそんな風に……………」

「……………」

(ミウラさん……………うらやましいです……………)

黒いスタンドを従えるヴィヴィオに自身を置き換え妄想するアインハルト。

「……………わ、わかったよ……………あ、あ ん……………」

「あ ん」

しかしこのままではキリがないと判断した来人は他二名からの非難を覚悟しつつミウラのフォークの料理を……。

ミウラが使っていたフォークの料理を……。

「あ~~~~~！ ず、ずるいですミウラさん！ 私も~~~~~！」

「わ、私も……。」

するとスイッチが入ったヴィヴィオとインハルトも自分が使っていたフォークで料理を刺し来人につき出す。

その手際の上さはまるで必殺○事人……。

「えええっ？」

自分の判断を謝ったと実感した来人。

「嫌……ですか？ ミウラさんのは食べたのに……。」

「……。」

落ち込むヴィヴィオにインハルトは後ろ向きになる。

そして目に目薬をし振り向くと……。

「うつ……。」

来人の目に入ったのは目薬の効果で涙目になった二人だった。

「そ、それじゃあ……頂きます……。」

折れた来人はヴィヴィオ、アインハルトの料理を食べる。

しかし……。

「来君　今度はこっち」

次はミウラが先ほどとは違う料理をつき出す。

無論自分のフォークで。

さすがに断ろうと口を開きかけた来人だが……。

小さい時の話しちゃうよ

念話により恐喝という名のお願いをされ迷わず食らいつく来人。

「来人さん……。」

「こちらも……。」

そんな来人を見て二人にもエンジンがついたのか、涙目のヴィヴィオ、上向きのアインハルトも料理を差し出す。

結局、来人はそんなサイクルをなん十回繰り返され、パーティーにも関わらず徐々に精気が抜けていった。

一方……。

「べつに大丈夫だけど……。」

映司はなのはの隣に寄りかかる。

「こんな風に仲良くみんなでいつまでもいれたらいいな……って思ってたね……。」

「うん……。俺もこんな風に明るいくリスマスは初めてかな……。でも今年だけじゃなく来年も……。再来年も……。出来るなら毎年……。」

「そのために頑張らないと……。」

「俺も……。オーズとして頑張れるよ……。」

「でもね映司君……。映司君一人かけただけでもこんな楽しいクリスマスはすぐせなくなるんだよ？ わかってる？」

「えっ？」

「だ・か・ら……。」

なのはは映司の唇に人差し指をつける。

「映司君も無理しちゃ駄目ってこと」

「……気を付けるよ……。」

「気を付けるんじゃないって絶対なの！」

「……………うん……………」

「ホント?」

「多分……………」

「……………まあ絶対なんてないからしょうがないかな……………」
「ま
あ……………許してあげよう」

「は……………」

ふざけて返事をする映司。

するとなのはは映司に体を寄せる。

「なのはちゃん?」

「寒いから暖めて……………」

「……………うん……………」

映司はなのはの肩を掴み、自分に寄せる。

「綺麗な月だね……………」

「普通ここは『君の方がきれいだよ……………って言うもんだよ?』」

「そっなの?」

「でも映司君がそんなこと言ったら私笑っちゃうかな……………」

「えええ〜。俺、そんなにカッコいい台詞似合わない？」

「そうじゃないの。そんなこと言わなくたって、オーズにならないくたって映司君はカッコいいもん」

「ホント？ 嬉しいな〜。」

「だからこれからも末永く宜しくね。カッコいい仮面ライダーさん」

「末永く？」

「おっしえてあ〜〜げないっ」

「えええ〜。ちょっとなのはちゃ〜〜ん！」

いたずらに笑うのはを映司も追いかけて家に戻っていった。

スバル宅。

「す、スバル……。ほら……。」

「はい？」

食事を済まし後片付けをするスバルに翔太郎はそっぽを向きながら小包を手渡す。

「翔太郎さん……。これって……。」

「ま、まあ建前はクリスマスプレゼント……。ってやつだ……。」

「開けてみていいですか？」

「おう……。」

小包をあけるスバル。

小包のなかにはサファイアが埋め込まれたブレスレットが入っていた

「翔太郎さん……。」

「お前は青がよく似合うと思うからよ……。まあ安物だけどな……。」

「翔太郎さん……。嬉しいです私！」

途端に翔太郎に抱きつくスバル。

「どわっ！」

いきなりのものでソファーに押し倒される翔太郎。

「……。」

「……。」

そのまま互いに見つめ合う。

「翔太郎さん……。」

「…………お前の言いたいことがわかってきたぞ…………。」

「えへへ…………。なら…………、翔太郎さんが…………。」

「…………まあ今日はクリスマスだからな…………。」

スバルの服を脱いでいく翔太郎。

そしてそのまま唇を押し付ける。

「メリークリスマスです…………。翔太郎さん…………。」

「…………おう！」

そのまま二人は聖夜の中、雪も溶かすぐらいの熱い夜をあかした。

そして空からは…………。

高町家。

雪が降る外を窓から眺める映司となのは。

「雪だ…………。」

「ホントだね…………。ホワイトクリスマスだ…………。」

「なんだかロマンチックだね……。」

「映司君の口からロマンチックなんて言葉が出るなんてね……。」

「えええ……。それどういこと……。」

「ないしょ……。」

「え……。。」

そのまま、バカップルはプチ鬼ごっこを始める。

一方……。

「はい来君」

「来人さん」

「来人さん……。」

「「「あ……ん」「」」

「もう勘弁して……！」

三人の少女のせいか、一人少年は悲痛な叫びをあげていた。

仮面ライダーと彼らを愛する女の子達、彼らの家族のクリスマスはこうして過ぎていった。

景色と屋上と伝説の仮面（前書き）

翔太郎編前半です。

短いです。

そして自信がありません。

景色と屋上と伝説の仮面

ミッドとは違う別の世界の病院・屋上。

「……………」

そこから柵に寄りかかり遠くを見るのは仮面ライダージョーカー・左翔太郎である。

足にはギプスが巻かれ、近くには松葉杖が置かれている。

（なんだかここでこんなふうに見ると過去に行ってたときを思いだすな……）

以前六課が敗北し、自分や竜も負傷したときの景色を思い出す翔太郎。

（あんときは皆ぼろぼろだったよなあ……。少なくとも俺は今もそんなときもだっただけどなあ）

悠久にしたる翔太郎。

すると。

「見いつけた」

何者かが翔太郎の両目を隠す。

「ちよ！　なんだよスバル！　脅かすなよ！」

翔太郎はその手を掴み目から離す。

「なにやってたんですか？ もうリハビリの時間ですよ？」

「あつ！ いけねえ！」

「ほおら！ 行きましょ」

スバルは松葉杖を掴む翔太郎を支え、二人は屋上を後にした。

「……………つあ……………」

「翔太郎さん！ いちについちにつ！」

リハビリ室でリハビリをする翔太郎とそれを応援するスバル。

そんな二人を……………。

「……………彼が……………ジョーカーか……………」

とある男性が壁によりかかり眺めていた。

すると……………。

「ここにいたんですか……………」

「結城か……………」

別の男性が歩み寄る。

「彼はどうだった……手術はうまくいったのか？」

「神経は繋がりました。でも元通りに動かせるようになるか否かは……。」

「彼の努力しだいか……。」

「出来れば全快に治してあげたかったです……。」

「……いや……。この程度を乗り越えられなければ仮面ライダーは到底勤まりはしない……。」

「確かに……。一文字さんや風見、神達もかなわない敵にぶつかるときがありましたね……。」

「……とりあえず……後に一対一で話してみようと思っ
ている……。」

男性はゆっくりとりハビリ室を退室する。

その男性の後ろ姿を翔太郎を手術した執刀医、結城丈二はただ見つめていた。

翔太郎の病室。

「~~~~あ~~~~。疲れた~~~~。」

夕方までリハビリをしていた翔太郎は、自身のベッドに横たわる。

「お疲れ様です翔太郎さん　　どうですか足の具合は……。」

スバルも近くの椅子に座る。

「ま〜だなんだかぎこちねえなあ……でも一刻も早く復帰してミッドにもどんねえとなあ……。」

「でも無理はしないでくださいね……。翔太郎の体はもう翔太郎さんのものだけじゃないんですから……。」

「わ　　ってるよ……。そんな心配すんな。」

「ならいいんですけど……。それじゃあ、また明日来ますから。決して看護婦さんを襲わないように!」

「って誰がだ!」

「冗談冗談　　ナースブレイなら元気になったらいくらでも付き合いますから」

とんでもない発言を残し、スバルは退室していった。

「……俺にはそんな趣味ねえつつうのに……。」

笑いながら横たわる翔太郎。

手にはジョーカーメモリが握られている。

「確かに感覚はあるんだ……。ただ……。思考に動きがついていけねえ……。でも諦めつかよ……。俺は諦めがわりいんだ……。」

そのままジョーカーメモリを握り締める。

すると翔太郎はスリッパを履き、部屋を後にした。

「……………ここもいい風が吹くなあ……。」

翔太郎の行き先は屋上……。

風都でよく浴びていた風に当たりたくなり、風通りのいい屋上にきた。

(でも風都みてえに風に当たりたいとは言え……。所詮は現実逃避かもな……)

遠くを見る翔太郎の眼はどこか哀愁を感じさせる。

その時。

「確かにこの風の心地よさは保証出来る。」

「！」

気配もなく聞こえた声に翔太郎は懐のジョーカーマグナムに手をかけ振り向くと……。

「あなたは一体……。」

そこには先ほど結城丈二と会話していた男性が立っていた。

「名乗るほどの者でもない……。」

「いや……、名乗るほどのもんはずだ……。まるで気配を感じなかったぜ？」

「……。」

しかし男性は答えずに翔太郎の隣に寄りかかる。

翔太郎は懐から手を出し、腰の後ろにやる。

その手には用心にジョーカーマグナムが握られている。

「人っていうのは誰かと必ず繋がっているものだ……。しかしそれもちよつとしたことで壊れ、孤独になる。」

「何が言いてえんだ……。」

「例え孤独でも命ある限り戦う……。それが……。仮面ライダーということだ……。」

「！」

翔太郎は素早くジョーカーマガナムを男性に向けるが男性はジョーカーマガナムを払いのけ、翔太郎に横蹴りを叩き込み蹴り飛ばす。

「がつ……。」

地面を転がる翔太郎。

しかし痛みよりも翔太郎が驚いたのは打撃の威力と運動能力の高さだった。

（なんだこいつ……。この威力に加えあの反射神経……）

「俺は……。」

「！」

「こう見えても空手と柔道の有段者で……。代々の型はそれだ……。そしてこの力は……。」

男性は開いた左手を右に向けるとその手を逆時計回りに左上に向ける。

「ライダー……。」

そして素早く左拳をを左腰に、開いた右手を左上に向ける。

「変身ッ！」

すると一瞬で男性の腰に白い風車が内蔵されたベルトが現れ、風車が高速回転する。

「！それは……。」

「とっつ！」

男性は跳躍。

そして一瞬で姿を変え、着地した時には……。

「あんたは……。」

男性はバッタのようなマスクに銀色の手袋とブーツ、真っ赤なマフラーを纏った戦士へと変わっていた。

「俺は……仮面ライダー……1号！」

「仮面ライダー……。」

「何も知らないなら教えてやろう……。この世界は多次元世界の中でも俺から城までの伝説の7人ライダーと呼ばれる俺達の世界だ！」

「7人ライダー……。」

「仮面ライダージョーカー……。君の足はもうすでに治っている……。だが思った通りに動かないのは君の覚悟が足りないからじゃないのか……。」

「なんでそれを……。」

「笑えるな……。まさか今の仮面ライダーがここまで腰抜けとは・
。。。」

「てんめえ。。。」

「なら戦ってみるか俺と？ 君が本当に仮面ライダーにふさわしい
かどうか俺が試してやる！」

「上等だ。。。」

『ジョーカー！』

翔太郎は上着を脱ぎ捨てるとジョーカーメモリを手にし、ロストド
ライバーを腰に装着する。

「変身！」

『ジョーカー！』

黒い装甲を纏いながら翔太郎は仮面ライダージョーカーに変身する。

「行くぜ？」

「望むところだ。」

ジョーカーは手首をスナップさせながら仮面ライダー1号へと駆け
出した。

1号も変身ポーズを構え、ジョーカーと合間見えた。

そしてそんな二組の仮面ライダーの戦いを六人の異形達は眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5399t/>

魔法少女リリカルなのは 切札の男

2011年12月25日23時50分発行